仙臺叢書

伊達秘鑑　上

伊達秘鑑

上

伊達秘鑑上卷目次

卷之八　自一四七──至一七四頁

卷之九　自一七四──至一九三頁

卷之十　自一九三──至二一六頁

卷之十一　自二一七──至二三四頁

卷之十二　自二三四──至二五四頁

卷之十三　自二五四──至二七二頁

卷之十四　自二七二──至二九三頁

卷之二十三　自四三六――至四五一頁

卷之二十四　自四五二――至四六三頁

卷之二十五　自四七二――至四八六頁

卷之二十六　自四八六――至五〇七頁

伊達秘鑑上卷目次終

仙道人取橋戰場之圖

本宮城

西

仙道人取橋戦場之圖

東
西
本宮川
阿武隈川
本宮城
政宗ノ本陣
亘理元安斎
屋代勘解由
中島左衛門
新田式部
国分盛重
片倉小十郎
亘理美濃
今観音堂
江戸海道
伊達實成ノ備
前杖澤
人取川
茂庭佐月討死ノ場
大田原
高倉城
高倉近江
伊東肥前
富塚近江
山岡志摩
瀬上中務
泉田安藝
桑折治部
高倉観音山
中荒井口
田村領

伊達秘鑑解題

本書は。仙臺藩士燕々軒半田吉十郎道時の著述にして。三十五卷より成りしものなるが。其原本は。一家の中に全部完備しあるにあらざりし。即ち一卷より六卷迄は。本會理事として將又本會創立功勞者たる。佐藤與二郎氏。七卷より九卷までは。同理事菊田定鄕氏。十卷より三十四卷までは。岡濯氏。三十五卷は。宮城縣立圖書館藏本。(佐澤香雪氏の寄贈に係るもの)等を借集めて。繕寫したるものなりし。左あれば固より謄寫本の事とて。讀め難き所解し難き所も少からす。又行文の間に。俗語俚語なとありて。之を讀めても之を解す可らさる所往々にしてあれは。是等はしばらく原文原字の儘に傳寫して。妄りに意を加へて改訂せさるなり。其記する所の内容を一言して。之を蔽へは。彼の奥羽永慶軍記に同しくして。只其仙臺藩祖政宗公を。中心として記述するを異なりとするのみ。又殊に稱揚すへきは。他の類書には見るも稀れなる。奥羽の諸侯伯の家系。及ひ主要なる出帥に關する自他從軍兵士の姓名。殊に關白秀次の婢妾等が素性姓名を記載しある是なり或は主要なる事項を記載すれは。特に(私に曰く)と一字下けにして自家の意見を忌憚なく赤裸々に附記したる所往々にしてあり。其本件の批判に於て。最も力を盡したるを見る。然るに此の如く。三百年前の奥羽の軍事。其他に通曉したるが上に。三十五卷の書を著はしたる。燕々軒といへる。其傳記を明かになし得さるは。編者の最も遺憾とする所なれは。せめては其墓所ばかりもと。百方苦慮したるの餘り。之を仙臺市土樋大藏山松源寺に得たり。因てこゝに墓碑の表裏二面に。記したる所を寫して。傳記に代ふといふ。

天明四辰年四月廿七日

芦立時宜

富田盈知

半澤定成

無々軒風術良傳信士

半田吉十郎道時壽六拾六歲而歿

廣川○○

伊藤直道

關　時義

門弟中

遠藤○○

小林時○

渡部○○

因みに曰く、碑面記する所を見て之か判斷を下すに或は風傳流槍術の師範家たるもの丶如し、左あれは下に記す所の九名の人々は其主なる門人なることも亦明かなりとす、執て考るに、此半田氏は武人にして、講武の餘暇に此書を編成したるものにして、其高志尚に感謝するに餘りあり、然れは其行文の際生硬にして明瞭し難き所あるは、實に已むを得さるへし、會員讀者諸君子、操觚者を以て之を責むるなくんは幸甚。

伊達秘鑑序

夫不讀萬卷而評史旨。其可歟。不識今古而爲史編可歟。嗚呼非識之者。則焉能得爲之耶。雖然其曰不讀萬卷則不可評史乃非也。又曰不識今古而不可爲史。亦不可也。蓋我朝天文天正之間四海分崩天下離析老羸轉於溝壑。壯者散而之四方。諸侯各據國。縱横連衡爲犄角勢。維竜維虎匪雲廼風。當是時也。我

侯震起東州。追於相馬。降於鹽松。右於田村。破於會津。拔於白石。擊於福島。救於山形。攻於南部。敵平四方。戰乎八紘。近敗七將於安積。遠著英名於異域。自蚤歳至皓首。親有汗馬之勞。其如此矣非啻武威使然積德累世。文以精武以嚴。噫誰其當焉。然紛々諸史。喋々俗記褒貶寵辱。悖於國史。逆於春秋。所以不識今古而爲史編也。故曰不可也。其俗史也者。敗散凶命之徒爲其主之黜陟名家以文其過而空談乎家之書也耶。猶當家之兵勢。而至非謗之甚。則爲東夷華衰之贈市朝之撻。雖不足以爲榮辱。及余讀之未嘗不嘆息也。吾聞豺祭獸。獺祭魚。報其本也。不則如夫豺獺何是。故姑容其志。以不瑕殄。余家仕當家。苟世祿之厚。以養妻子以蓄婢僕。其沐君恩也。亦已多矣且於事實。似略有所得也。所以雖未通萬卷之藉。評諸史也。官暇參考我家所謄寫之舊記。名曰伊達秘鑑。始于歷代。終于寛永。編年都若干歳也。凡四十卷爲之正編。又續編二十卷。乃輯後三代事。然爲藩諱之而匱以禁乎他閲。併六十卷。伊達鑑之正誤也。唯便考古之童蒙。存十一于百也耳。嗚呼非識今古者則焉能得有此編乎哉。自知借踰之罪無所逃也。後君子削謬補闕。

乃庶幾乎攷
當家遺風之楷梯云爾
明和庚寅秋八月中旬
仙臺飯田藤通時手書於翠羽城府之燕々軒

伊達秘鑑巻之一

東奥仙府　燕々軒　編集

出羽奥州之地理

東國通鑑云。倭國更號日本。自言近日所出以爲名。大日本五畿七道。總六十八箇國六百二十二郡。陸奥出羽兩國東山道。當第七八。陸奥五十四郡。出羽十一郡。後加由利一郡。爲十二郡。出羽國其始奥越之地也。元明天皇。和銅五年。割陸奥越後二國爲出羽。

續日本紀　人皇十三代成務天皇。令諸國國郡立造長。縣邑置稻置。賜楯矛爲其表。隔山河分國郡境畔。爲百四十四。隨阡陌定縣邑里。東西爲日縱。南北爲日横。又至崇峻天皇二年。改諸國郡境。聖武天皇天平十年。令天下諸國造國郡圖進。

和漢三才圖會　地部云。陸奥爲日本東北之限。故從是始分圖記之也。

○陸奥。　東山道八箇國之首。日本東北隅　往昔三十有

六郡。後爲五十四郡。地形南北長東西短。高百八十二萬九千石。

白河　磐瀬　會津　耶麻　安積　信夫　安達
刈田　柴田　名取　菊田　磐城　標葉　行方
宇多　伊具　亘理　宮城　黑川　加美　色麻
玉造　志田　栗原　磐井　江刺　膽澤　長岡
新田　小田　遠田　氣仙　牡鹿　登米　桃生
大沼　和賀　河內　稗縫　高野　志太　阿曾沼
郡載　鹿角　階上　津輕　宇多　本吉　大名門
稻我　石川　金原　閉伊　星河

○出羽。東山道始十一郡。後加增由利郡。爲十二郡。地形相似陸奥。高八十七萬石餘。

最上　村山　置賜　雄勝　平鹿　山本　飽海
川邊　田川　出羽　秋田　由利

右諸郡之名目。後世略有改替少違。猶當世宜見察。右古法之儘記之。

○地理。山川海陸神釋木石等。各混雜。其大名而巳。略記之。

奥州。東南北ハ大海西北ハ高山。坤一方平陸ト雖モ其間ニ有山坂。東山道通之。則下野國芦野口ヨリ白河ニ至リ。伊達ノ大木戸ヲ越。仙臺ヲ經テ至南部。是ヲ仙道或ハ中仙道又中奥道トモ云習ハセリ。又世人吾妻街道ト呼習ハスモノハ。名取ノ地ヨリ西ノ方國分山ニ沿テ。北ニ向テ黑川・加美・玉造・岩手澤・磐井郡ノ西一ノ關ニ至リ。高館ニ通ス。是ヲ西道トモ云。又東海道ノ餘リハ。常陸國水戸ヲ經テ。名古曾關ヲ越。岩城・相馬ノ地ヲ蹈岩沼ヨリ松島石卷ヲ經氣仙ノ小白濱ニ至リ。南部閉伊ノ地ニ越ル。是ヲ片濱通リト云。當國都テ米穀・鹽・薪・魚・鳥・産物甚多シ。

○仙臺城ハ青葉ケ崎　○福島信夫郡
○會津城ハ若松　○相馬城ハ中村
○簗川伊達　○二本松安達郡
○三春　○白河

○棚倉　○白石仙臺領
○岩沼仙臺領要害鵜ヵ崎　○亘理同領
○岩城城ハ平　○柴田仙臺領城ハ信夫館
○一之關仙臺領　○磐手山同領
○佐沼同領　○登米同領
○涌谷同領　○南部城ハ森岡
○八戸南部領　○三戸同領
○七戸同領　○津輕城ハ弘前

右ハ世ニ知ル處。當時ノ居城ナリ、右ノ外館要害ノ地當時居住ノ處々多シト雖トモ。城地ニ屬セヌ所ハ除之尤戰國ノ古館等悉ク棄多ナレハ猶是ヲ除ク者也。

金華山　仙臺領牡鹿郡遠島ノ地　海島之靈山也　黃金始出此地事ハ諸書ニ詳ナリ　略之。鎭守辯才天有水晶石。都テ山澤海岸金砂玉光可驚目之地ナリ、北狄蝦夷ノ地ヨリ渡ル諸鷹毎年向秋風而集ル于此。最烈波濤。

金頭山　同刈田郡之地。不忘山トモ云。尤高山ナリ。絶巓四時雪不絶。祭權現。山半分ハ屬出羽。
駒ケ嶽　仙臺領膽澤郡ノ地。當國第一ノ高山ナリ、半嶺ハ出羽之地。
須川嶽　同岩井郡
禿ケ嶽　同栗原郡迫之地。
泉ケ嶽　同宮城郡國分之地。
舟形峠　同加美黑川兩郡ニ蟠ル。
檜山　同氣仙郡之地。御用山トモ呼。檜多ク自此山出。尤高山。後ハ南部領也。
七森　同黑川郡
大尖森　同名取郡
末松山　同宮城郡在八幡宮。
松島　同宮城郡。諸景記スニ不及。諸書ニ詳也。瑞巖寺。陽德院　天麟院等。皆仙臺之菩提處

也。
鹽釜　同宮城郡千賀ノ浦一宮大明神。
石之卷　同牡鹿郡。當國一ノ湊。
氣仙沼　同本吉郡。海津ナリ。
尾崎　同同郡。唐桑濱之地。有大明神。
名取川　同名取郡。
廣瀨川　同宮城國分。仙城ノ下流。
阿武隈川。伊達領ヨリ仙臺領ニ至ル大河。水上ハ會津盤梯山ヨリ下ル。末ハ亘理郡荒濱ノ湊ニ下ル。
玉造川　仙臺領則玉造郡。水上ハ栗原鬼切部ヨリ至。鬼切部ハ今云鬼首。甚山谷之地也
戀路山　名取郡ノ地。仙城下。千本杉在此山。（一説越路トモアリ）
佐保山　同郡番山トモ云。國分之地。雲居和尚ノ舊跡アリ。
武隈松　名取郡岩沼ノ地。二木松是ナリ。有竹駒大明神。
緒絶橋　宮城郡ニアリ。實ハ志田郡古川驛中ニ有ルヲ爲本。
躑躅岡　同國分ノ地。古ヘノ鞭楯。百櫻百花。春興不斜。天滿宮・釋迦堂・神明社等アリ。
宮城野　仙城ノ艮（ウシトラ）國分ノ地。
木ノ下　同所。白山權現社・藥師堂其外神社佛閣アリ。國分寺並坊中衆徒居此地。
壺石碑　宮城郡多賀ノ舊府ニアリ。事歷詳諸書略之。
笹谷峠　牟夜牟夜之關。柴田郡奥羽之堺。
鐙越　刈田ノ地。東山道山徑ナリ。
衣川　磐井郡。衣ノ關同所。
平泉　高舘・達谷窟・泉ケ城。各岩井郡。事歷世ノ所知。不及記。
刈田宮　刈田郡宮ノ地。白鳥大明神・大高宮共柴田郡。韮髮山ノ麓ニ近シ。右何レモ仙臺領。

東照大權現　會津・仙臺・津輕有三所。仙臺ハ國分小田原邑ノ地。雖非舊地、大名之地ナレハ記之。

大木戸　伊達ノ地。貝田・藤田ノ間。山坂ナリ。厚賀志ハ此所ノ東。丸山街道ノ上。北國見共云。

安達原　仙道在安達郡。古ニ云黒塚此地。

人取橋　仙道古戰場。本宮・高倉ノ間ニアリ。

安積山　安積沼、同在安積郡。

無古曾關　岩城領。常陸・奥州之境切通シ。

境明神　奥州・下野之堺。芦野・白坂ノ間。

白河關　在白河郡。當今往來之東南山深ノ地孝德天皇之朝ニ所立。是諸國關ノ最初也。今ハ名而已殘。

岩鷲山　在南部森岡之西。有權現。甚高山。

岩城山　在津輕弘前之南。山上ニ權現ノ宮アリ。岩城・岩鷲兩山。共ニ其形似不二。共ニ稱奥之不二。

燒山　在南部領高山。

素規濱（ソトノ）　津輕海邊ノ總名。

青森　津輕領。當國一ノ大湊。長一里ノ町四通。安潟（ウタ）町八百軒。皆漁師ナリ。善知鳥（ウトウ）ノ宮。ウトウ多シ。鷗ノ類トソ。凡千軒餘。松前ノ渡海、此所中ニモ宜シ。

錦塚　南部領内。錦木ノ故事、諸書ニアリ。略ス。

狹布里　同細布。

十符里　同菅薦。

湖　會津領。猪苗代ノ地。若松ノ城東ニアリ。大湖也。

磐梯山　同猪苗代在湖東大山。嶮峻又無類。

六十里越　若松與米澤ノ中間大山也。鹽泉此山頂ヨリ出ル。

摺上原　會津領。湖之近邊。

摺上川　福島之城下西南。則會津ヨリ至ル

津　川　會津領越後境。
河古原　白河ノ城外。西南ノ廣原。
信夫山　信夫郡。一説ニ此山信夫郡ニアル故ノ名也。歌人所愛ノ信夫山ハ。柴田郡シノフ嶽ト云々。可考。
文字摺石　同郡桑折ヨリ半里東南。
羽州　東南北方共ニ大山ヲ帶フ。西ハ海ニ向フ。一國統テ地形高シ。北陸道ニ通ス。鼠カ關ヲ以テ越後ノ境トシ。岩立ヲ以テ津輕ニ隣ル。白澤・大館ヲ以テ南部ニ境シ。檜原峠ヲ懐テ會津ニ限ル。其餘ハ皆仙臺領ニ後ヲ合ス　米穀産物餘國ヨリ多シ。
○米　澤　○上野山
○最　上城ハ山形　○野邊澤
○新　庄　○庄　内城ハ鶴ケ岡
○酒　田　○龜　崎龜田共
○横　手　○本　庄
○秋　田城ハ窪田　○角　館
○大　館　○松　山
右ハ世ニ知ル所當時居城ノ地。其餘ノ舊地。奥州之部ニ斷ル如ク略之。
羽黒山　月山　湯殿山　三山爲一。在最上領共ニ祭權現。尤高山也。四時雪不消。
鳥海山　新庄ノ南。酒田ノ北ニ當ル。有權現最高山ナリ。
鹽　越　鳥海之麓。
象　潟　同所在鳥海山之西北景曲普ク所知世人。略之。
最上川　在寒河江。山形ニ近シ。關東第一ノ早川。末ハ酒田ノ湊ヘ下ル。
大　沼　在最上郡左澤世ニ云浮島在此所。
戀ノ山　袖ノ浦　戀ノ山在酒田之地。其西ノ海邊ニ有袖ノ浦。
板敷山　千年山　羽束師川　安古屋ノ松　共ニ在山形近所。

野代川　窪田ノ北ニ當ル。

横手ヨリ北。都テ仙北ト云。

右之外、山川海陸ノ名跡神社佛閣等ノ高名。玉石。名木ノ類。其數不レ可二勝計一。各國史名譜ニ任セテ。擧レ之ニ不レ及。只此書ニ見ル處、兩國戰爭ノ事跡ニ於テ。暫ク其地名ニ預リ。或ハ其行程、方角等ヲ推量シテ自ラ其地理ヲ思ヒ慮ルヘキカ。爲ニ百カ一ヲ拾擧シテ記レ之、備二見察一而已。

所謂

會津四郡トハ　白河　岩瀬　會津　耶麻

仙道六郡トハ　伊達　信夫　安積　安達　岩城
相馬

大崎五郡トハ　賀美　玉造　栗原　志田　遠田

葛西七郡トハ　桃生　登米　牡鹿　本吉　氣仙
江刺　岩井

右ヲ奥州戰場之四道ト云。

（原書此間奥、羽兩國ノ地圖アリ略レ之）

○行程

一、下野國芦野口ヨリ津輕三馬屋マテ東仙道。

芦野 三里十丁 下野陸奥堺　白坂 一里卅三丁　白河 一里
根田 廿六丁　小田川 十三丁　大田川 廿丁
踏瀬 廿三丁　大和久 十一丁　新田 十一丁
矢吹 廿一丁　久來石 十三丁　笠石 一里半
須賀川 一里半十丁　佐々川 十八丁　日出山 八丁
小原田 十五丁　郡山 二十丁　福原 廿五丁
日和田 一里　高倉 一里十一丁　本宮 一里半
温石町 四丁　杉田 一里十丁　二本松 一里
二本柳 三十一丁　八丁目 一里二丁　若宮 十一丁
根子町 一里廿五丁　福島 二里八丁　瀬ノ上 一里十二丁
桑折 一里七丁　藤田 一里七丁　貝田 十六丁
仙臺領 越河 一里十九丁　齋川 一里十六丁　白石 一里廿三丁
宮 一里十二丁　金ケ瀬 三十丁　大河原 一里十一丁
舟迫 一里十二丁　槻木 一里廿六丁　岩沼 一里廿九丁
增田 一里　中田 三十二丁　長町 一里

北目町二里十丁 七北田二里十九丁 新町一里廿二丁
吉岡三里十丁 三本木一里二十丁 古川一里十三丁
荒谷一里廿丁 高清水二里十九丁 築館廿三丁
下宮野一里三十四丁 澤部十八丁 金成二里七丁
有壁二里三丁 一ノ關十七丁 山ノ目三里六丁
前澤二里十一丁 水澤一里卅四丁 金ケ崎二里五丁
南部領鬼柳一里 岩崎二里 花巻四里五丁
石トヤ二里 郡山四里五丁 森岡四里
枯杉四里 沼宮内七里 一戸三里
福岡一里 金田市二里六丁 三戸三里半
麻水二里半 五戸一里 傳方寺十八丁
藤島四里 七戸二里 野邊地一里
長門五丁 津輕領刈和澤三里 小湊二里
安佐虫三里 野内一里半 青森一里
大濱三里半 蓬田二里 蟹田二里半
平館六里 今別一里 三馬屋

右白坂ヨリ三馬屋マテ。行程都合百二十六里。九百四十七丁。里ニ直シ百五十二里十一丁餘（但白坂ト境ノ明神ノ間里程除レ之。尤丁餘ハ除レ之。）三馬屋ヨリ同領小泊ヘ八里。小泊ヨリ同領十三湊ヘ三里。（舟路）青森ヨリ松前ヘ海上二十五里。渡海此ノ舟路ヲ最上トス。

小泊ヨリ松前ヘ海上十里。上ノ汐。
同所ヨリ同所ヘ海上十里。中ノ汐。
三馬屋ヨリ同所ヘ海上三里餘。下ノ汐。
タツヒ崎ヨリ同所ヘ十里。以上松前渡海ト爲ス五道。

一、常陸國上岡口ヨリ。南部閉伊田マテ。東海道ノ餘リ片濱通

上岡一里半（常奥境ナコソノセキ） 關田一里 上田一里半
渡部一里半 舟尾一里 湯本一里
平二里半 與倉一里半 久濱二里半
廣野一里 木戸三里半 富岡一里半
熊川一里 中津二里 高野宿二里
相馬小高一里半 原町二里半 仙臺領鹿島二里半
中村一里 黒木二里 駒ケ嶺一里半

新地二里　坂本一里半　山下一里
亘理一里　岩沼一里廿九丁　增田一里
中田三十二丁　長町一里　北目町一里
原町二里廿一丁　利府三里　高城二里廿二丁
小野二里十九丁　廣淵二里九丁　和淵十六丁
神取一里六丁　寺崎一里廿丁　柳津一里廿五丁
横山北澤一里十五丁　折立一里廿九丁　清水川一里廿四丁
小泉一里十四丁　大谷二里卅三丁　氣仙沼四里十丁
今泉十二丁　高田二里卅一丁　田母山四里三丁
吉濱一里十四丁　唐丹一里十八丁　小白濱丁　南部領閉伊田

右關田ヨリ閉伊田マテ。行程都合八十四里三百九十六丁、里ニ直シ九十五里。但關田ト名古曾ト切通トノ間里程除レ之ノ丁餘ハ除レ之
閉伊田ヨリ九艘泊マテ、驛里行程不ニ分明 其間々至極ノ邊部アリ。領主國用八戸ヨリ出ニ中驛ニ而通路ス。其里名有增ヲ以テ左ニ記ス。尤道法不レ知。略レ之。

南部領濱通リ

閉伊田　大公　飯岡　富田　松代　久慈
福岡　八戸　銀齒　平浪　大畑　小佛
尻矢崎矢尻共　蛇浦　佐井　河内　九艘泊

八戸ヨリ中道ヘ出ル行程。八戸十里　平沼八里　中驛野邊地
九艘泊ヨリ中道ヘ出ル行程。九艘泊不レ知　霜風呂七里　大畑七里　田名部八里　横濱十里　有戸不レ知　中驛野邊地　野邊地迄ノ道路。皆海濱浦廻リ。

一、越後國ヲナベ口ヨリ。羽州尾國通リ津輕十三ノ湊マテ。北陸道ノ餘リ。

ヲナベ一里十丁越後出羽堺　尾國一里半　木ノ股一里十丁
温海川一里　管ノ代一里　坂ノ下一里八丁
田川一里　大山二里廿五丁　濱中三里
酒田六里　吹浦一里　女鹿一里十五丁
小砂川二里　汐越一里十八丁　金ノ浦一里五丁
芹田一里　平澤二里　本庄二里
松崎二里　道川二里　長濱二里
百三端一里　秋田領久保田二里　湊四里

大　窪十丁　蛇　川四里　大　川二里
鹿　渡一里半　森　岡三里　檜　山三里
鶴　形三里　野　代三里　八　森二里
岩　舘三里奥羽境　津輕領大間越五里　岩　崎三里
深ト浦二里　廣　戸二里　小浦瀬二里
斗々呂木二里　西ノ關一里半　鯵　澤八里
十三湊津輕中十三川ノ落口ナリ

右尾國ヨリ十三湊マテ。行程都合九十三里半九十一丁。里ニ直シ九十六里一丁。但尾國ヨリ境マテノ里程除之。

一、下野國藤原口ヨリ會津五十里通。津輕弘前マテ東山道北道。

藤　原五里　五十里二里　見　寄二里
横　川二里　糸　澤一里　田　島一里
檜　原半里　會津串　谷一里　大　地一里
關　山三里　若　松二里　鹽　川一里半
熊　倉一里　大　鹽一里奥羽境會津米澤　檜　原二里
綱　木二里　關　二里　米　澤二里

粕　自一里　筑　茂一里三丁　赤　湯一里
川　樋四丁　小岩澤二里　中　山一里
川　口一里十丁　上ノ山一里廿丁　松　原一里廿二丁
山　形三里半　天　童二里　六　田一里半
楯　岡一里三丁　飯　田一里　林　田一里廿丁
尾花澤二里　柳　澤一里九丁　舟　方三里
清　水二里　相　貝一里　古　口六里
清　川六里半　新　庄四里　金　山三里
及　位三里　院　内一里　横　堀三里
湯　澤四里廿二丁　横　手二里　金　澤一里半
六　郷一里　大　曲一里　花　立十五丁
神宮寺一里半　刈和野二里十八丁　堺　四里
戸　島三里　久保田二里　湊　四里
大　窪十丁　蛇　川四里　大　川二里
鹿　渡一里半　森　岡三里　檜　山三里
鶴　形一里半　飛　根一里半　荷上場一里川舟
小　繋一里　前　山一里　今　泉二十丁

房　澤（一里二丁）　綴　子（五里）　大　舘（一里）

釋迦内（九里　秋田津輕境）碇ノ關（五里）　弘　前

右五十里ヨリ弘前マテ。行程都合百四十九里百八十五丁。里ニ直シ百五十四里五丁。（但五十里ヨリ藤原マテノ里程除之。）

弘前ヨリ青森マテノ道　弘　前（一里半）　津輕野（四里）

浪　岡（四里）　新　城（一里半）

大　濱（一里）　青　森

同所ヨリ十三湊ヘノ道。弘　前（二里）　高　杉（三里）

十腰内（二里）　浮　田（一里）

鯵　澤（八里）　十三湊

一、羽越之境鼠ケ關ヨリ。北海上津輕十三湊マテ船路。

出羽國鼠ケ關（七里）　カ　モ（五里）　酒　田（十五里）

本　庄（十一里）　秋田湊（五里）　舟　川（五里）

小鹿島（十八里）　野　代（十八里）　深　浦（十一里）

鯵　澤（八里）　十三湊

右鼠ケ關ヨリ十三湊マテ。海上都合百三里。

右海陸往來之本筋。常陸口一筋。下野口二筋。後口二筋。是ヲ奥羽ノ五道トス。其餘ハ横腸通路之往還ト定ムル也。

○奥羽横往來之里程

一、仙臺領吉岡ヨリ出羽ノ尾花澤マテ里程

吉　岡（四里十五丁）　小野田（三十一丁）　原　町（一里廿丁）

出羽 門　澤（一里九丁）　漆　澤（二里十三丁）　輕井澤（一里五丁）

上ノ畑（一里）　寺　町（一里）　延　澤（二里半）

尾花澤（是ヨリ本道。新庄・庄内・亀田・秋田・山形ヘノ行程。出羽之三道ニテ可ニ見分ク。）

右里ニ直シ以上十六里三丁餘。

一、同領刈田宮ヨリ羽州山形ヘノ行程。

宮（一里廿三丁）　永　野（三十一丁）　猿　鼻（二里六丁）

川　崎（一里八丁）　今　宿（二里十丁　野上共）　笹　谷（三里）

出羽 關　根（二里半）　山　形

右里ニ直シ以上十三里二十四丁餘。

一、伊達桑折ヨリ羽州上ノ山ヘ行程。

桑　折（一里半）　小　坂（一里十二丁）　仙臺領 上戸澤（三十四丁）

下戸澤一里　渡　瀨一里卅五丁　下　關一里八丁
滑　津一里十一丁　峠　田一里七丁　湯　原三里六丁
出羽 檜　下二里　上ノ山
右里ニ直シ。十五里五丁餘。
仙臺領 白石ヨリ上戸澤ヘ三里二十八丁餘
同 湯原ヨリ米澤領新宿迄二里餘是ヲ刈田山中通ト云。

一、米澤ヨリ福島ヘ出ル行程。
米　澤三里三丁　大　澤三里　板　谷二里八丁
李　平二里八丁　庭　坂一里　佐々木野一里九丁
福　島
右都合十二里二十八丁。

一、會津若松ヨリ白河ヘ出ル行程。
若　松二里　赤　井一里半　原　一里半
赤　澤一里半　福　良一里半　見　世二里
勢至堂二里　永　沼二里半　牧　內二里
小　屋一里　井　出二里半　白　河
右都合二十里。

一、三春ヨリ岩城平ヘ出ル行程。
三　春二里　根　本一里半　糠　袋一里
田母神一里半　蓬　田一里　三　坂十八丁
江　戶二里　中　寺十八丁　ワタ戶二里
平
右都合里ニ直シ十二里。
東仙道 本宮ヨリ三春ヘ二里半。同 郡山ヨリ同所ヘ五里。

一、東仙道矢吹ヨリ棚倉ヘ出ル行程。
矢　吹二里　中　畠二里　川原田二里
カマノコ一里半　堤　一里半　棚　倉
右都合九里。

一、會津若松ヨリ越後境津川迄ノ行程。
若　松一里　高　久二里半　板　下一里半
片ウト三里半　野　澤一里半　野　尻一里半
白　坂一里半　谷地田一里半　竹　山一里半
天　滿一里　津　川
右都合十八里。

一、仙臺領吉岡ヨリ同西道通一ノ關マテ行程（世俗云。吾妻街道千代ノ古道。）
吉　岡（二里卅二丁）　中新田（二里廿三丁）　岩手山（三里卅四丁）
眞　坂（三里一丁）　岩ヶ崎（四里卅二丁）　一ノ關
右都合里ニ直シ十八里十四丁。
一、同北目町ヨリ鹽釜ヘ四里廿二丁餘。鹽釜ヨリ
松島ヘ（陸ハ一里十九丁餘　海ハ一里。）
一、同濱街道小野ヨリ石之巻ヘ四里七丁餘、仙臺
ヨリ十二里餘、
右之外所々往來ノ脇道並國境ノ口々多シト雖ト
モ、大道ノ外ハ除之、凡ソ三軍ノ通路スヘキ道路而
巳記之、其餘ハ繁キヲ恐レテ悉ク略之、且仙臺領
諸方通路ノ行程、其微細ヲ知スルモノアリ。續編之
部ニ出之。

伊達秘鑑巻之一終

伊達秘鑑巻之二

東奥仙府　燕々軒　編集

歴代東夷藩鎮

夫陸奥ハ豊葦原ノ東奥ニシテ、東仙道ニ屬シ、西ハ出羽、下野、南ハ常陸ノ封境ニ連リ、東北海ハ蝦夷ニ隣レリ、往古出羽ノ國ヲ分ツト雖トモ、猶五十四郡ニシテ。其廣大ナルコト諸國ニ冠タリ。多賀ノ國府壺ノ碑ニ京師ヲ去ルコト一千五百里、蝦夷ノ國境ヲ去ルコト一百二十里ト云々、此國邊要ノ中ノ最タルカ故ニ、夷賊動モスレハ王化ニ叛キテ。宸襟ヲ惱シ奉レリトカヤ。人皇第十二主景行天皇四十年庚戌ノ歳、蝦夷蜂起シケレハ、皇子日本武尊ヲ征夷大將軍トシ、吉備武彦命、大伴武日命ヲ左右ノ將軍トシ、駿河國ヨリ初メテ賊徒ヲ追討有テ。陸奥國ニ攻入、悉ク夷賊ヲ誅戮シ玉フ。此後蝦夷ハ王化ニ隨フコトモアリ、又叛クコトモ有シトナン。三十八代齊明天皇四年戊午ノ歳、蝦夷蜂

起ス。阿倍比羅夫將軍ノ勅ヲ蒙リ。船軍ヲ率ヒテ是ヲ平ラケ。大ニ勝利ヲ得テ。政所ヲ置テ歸京ス。四十三代元明天皇和銅五年壬子九月。西北ノ方ヲ分テ。出羽ノ國ヲ置玉フ。四十四代元正天皇養老二年戊午七月。初メテ按察使ヲ置テ。陸奥・出羽兩國ノ事ヲ監察セシメ玉フ。四十五代聖武天皇神龜元年甲子。國府ノ外ニ始テ鎭守府ヲ置。大野東人ヲシテ東海東山ノ節度使兼鎭守府將軍トシ。東國ニ下シ玉フ。凡鎭守府將軍ニハ。副將軍・軍監・軍曹・傔仗等ヲ添ラル。（鎭守府將軍ハ。神功皇后三韓征伐ノ時。彼地ニ置玉フノ以テ始メトス。是日本ニ於テ府ノ號。將軍ヲ任スルノ始。此時ヲ以ス）是國廣ク。且皇都ニ遠クシテ。夷賊ノ變度々ナリケレハ也。國府ハ宮城郡ニアリ。多賀國府ト云。吏幹ノ才アルノ人。國司ノ任ヲ蒙リ、此ニ在テ信夫郡ヨリ南方ノ諸郡ノ租稅ヲ以テ國府ノ公廨（カイ）ニアツ。鎭守府ハ膽澤郡ニアリ。（按ニ。壺碑ノ文並陸奥宮城郡風土記等ヲ考ルニ、神龜元年始テ置玉ヘル鎭守府ハ。多賀城ナル事分明ナリ。）武略ノ器ヲ備ルノ人。將軍ノ勅ヲ蒙リ。此ニ居テ五千人ノ兵ヲ置キ。不虞ヲ防ノ備トシ。葛田郡ヨリ北方ノ諸郡ノ稻穀ヲ以テ。鎭守府ノ兵粮ニ宛（アツ）。國府・鎭守府相並ンテ一國ノ事ヲ分チ行ヒケル。然ルニ中古以來ハ陸奥ノ國司タル者。多クハ鎭守府將軍ヲ兼。一人ニテ一國ノ事務ヲ兼行ヒ。四ケ年ヲ以テ任限トセシトイヘリ　人皇五十代桓武天皇延暦七年八年ノ比。奥州ノ夷賊蜂起シケルニ依テ。紀小佐美・安倍黑繩等ヲ差向ラレ。征伐スト雖トモ利ヲ失ヒ。官軍敗北セシカハ。蝦夷ノ勢ヒイヨ／＼强大ニシテ官府ヲサマタク。同十年正月。追討ノ爲ニ百濟王俊哲・藤原眞鷲ヲ東山道ニ遣ハサレ。軍士ヲ催シ。兵具ヲ檢セシメ。同七月。夷賊誅伐トシテ。征夷大使ニハ大伴弟麻呂。副使ニハ俊哲・田村麻呂。數萬ノ軍兵ヲ引卒シ。都ヲ立テ陸奥ノ國多賀ノ國府ニ着陣有テ後五六ケ年ノ間。度々ノ合戰ニ及ヒ。遂ニ賊徒ヲタイラケ。同十六年ノ冬。三將皈洛有テ各勸賞ヲ行ハル。就中田村麻呂武功拔群ナリケレハ　征夷大將軍ニ任セラル。同二十年ノ春。夷賊高丸及ヒ惡路王ト云者。奥州達谷窟ヨリ起テ。三千餘人ノ賊徒ヲ引卒シ。駿河國清見

ケ闘マテ貢上ル、國々ヨリ此旨ヲ都ニ注進ス、即チ田村麻呂ニ節刀ヲ給ハリテ進發セラル。高丸ハ田村麻呂ノ武威ヲ恐レ、一戰ニモ不及シテ奥州ニ引退ク。田村麻呂夷賊等ニ推續キテ奥州ニ攻入、神樂岡ニテ合戰シ遂ニ高丸ヲ射殺シ。惡路王ヲ生捕テ誅戮シ。奥州悉ク平均ス、田村將軍ハ岩井郡達谷窟ノ前ニ鞍馬寺ヲウツシテ、精舍ヲ建立シ多門天ヲ安置シ水田ヲ寄附シ、膽澤郡ニモ八幡宮ヲ建立シ、鎮國ノ寺社トシ、凱陣皈京アリケレバ。勸賞トシテ從三位ニ叙セラレケル。同廿一年ノ春。田村麿ヲ奥州ニ下シ玉ヒ。膽澤郡ニ城ヲ築カシム。此時夷賊ノ張本大墓公•盤具公、其黨類六百人ヲ引具シテ降參シタリケレハ。田村麿ハ彼等ヲトモナヒ。上洛有テ此趣ヲ奏聞セラル。公卿僉議アツテ遂ニ河内國杉山ニ於テ斬セラル。六十代醍醐天皇ノ御宇、赤頭四郎將軍高丸ト云惡黨達谷窟ニタテコモル、武藏守鎮守府將軍藤原利仁ニ是ヲ討テ其窟ヲ攻ヤフル。其勇猛智謀群ニ勝ル利仁ノ子孫。北國ニハヒコル、齋藤•富樫•坂戶•後藤ナト。皆此人ノ後胤ナリ。

七十代後冷泉院ノ御宇。永承六年ノ比、奥州ノ夷賊安倍賴良。其子厨川次郎貞任•鳥海三郎宗任等ト共ニ、朝威ヲ輕ンシ、郡鄕ヲ押領シ、賦稅•貢物ヲ掠取シ、其勢ヒ漸ク强大ニシテ、河堰ノ城•衣川ノ柵。其外所々ニ柵ヲ構ヘ。其黨類ヲ分チ居シムルニ依テ、當國ノ大守藤原登任•出羽國秋田城之介平繁成ト共ニ力ヲ合セ。奥羽兩國ノ士卒ヲ率ヒ賴良ヲ誅伐セントス、鬼切部栗原ニ於テ、攻戰フト雖トモ。遂ニ貞任等ニ討負テ。登任ハヒソカニ都ニ上リ、繁成ハ本國ニ皈リケル。都ニハ公卿僉議アツテ、源賴義朝臣ヲ陸奥守トシ、鎮守府將軍ヲ兼シメ軍勢ヲ相添ヘ。彼等ヲ追討セシム。同年六月都ヲ立テ大軍ヲ引卒シ。奥州ヘ打入玉ヘハ。賴良ハ其武威ニ恐レ。自ラ賴時ト名ヲ改メ國府ニ來リ、賴義將軍ニ降參ス。依之國中早ク靜リ、永承六年ヨリ天喜二年マテ、一任四ケ年ノ間、國中オタヤカナリケル處ニ、當國ノ住人藤原說貞カ娘ヲ貞任カ後妻ニ望ム。說貞

是ヲ免サス。依テ恨ヲ含ミ、説貞カ息男權太郎光貞・同次郎元貞ニ狼耤ノ所行ヲナス依テ頼義將軍。貞任ヲ罪ニ行ントス。頼時怒テ貞任ト共ニ衣川ノ柵ニ引籠テ。頼義ニ敵對ス。去程ニ頼義、軍勢一萬ヲ集テ衣川ノ柵ニ發向セラル。頼時カ婿亘理權太夫經清。並ニ伊具十郎永衡ハ、頼義ノ勢ニ馳加ル。斯テ衣川栗坂ニ於テ。合戰止事ナシ、天喜五年九月栗坂ノ戰ニ、頼時流矢ニ當リテ死ス貞任等ハ殘黨ヲ集テ。河崎（或ハ河堅ノ城トモ）ノ柵ニ栖籠ル十一月頼義千百餘人ヲ引テ攻戰。折節風雪ハケシク。官軍兵粮盡テ大ニ敗レ。死スル者數百人頼義・義家郎從加藤景通・大宅光任・清原貞廣・首藤範季・坂戸則明ト。僅ニ七騎ニ打ナサル。貞任大勢ヲ以テ取圍ム、義家時ニ廿歳ハカリ。强弓精兵ニテ敵ヲ射殺ス事甚多シ光任等一命ヲ輕ンシテ防キ戰フ。賊兵勞レテ引退ク。頼義父子マヌカレテ國府ニ皈ル。十二月頼義、出羽國司源齊頼等其外諸國ニ觸レテ。軍勢ヲ招クト雖トモ兵粮乏シキニ依テ來ル者ナシ。此故ニ貞任イヨ〳〵逆威ヲフルヒ。官物ヲ押領ス、康平五年ノ春、頼義陸奥國司ノ任終ルニ依テ。高階經重ヲ國司ニ任セラレ。二月下旬、奥州ニ下向スト云トモ、貞任カ勢ニ恐レ、其上國中ノ兵。皆頼義ニ從フニ依テ。經重ハイクホトナク都ニ皈ル。七月羽州仙北ノ住人清原眞人・武則、一萬人ノ兵ヲ引卒シテ。栗原郡營岡ニ於テ、頼義ニ對面シテ加勢ヲナス、頼義ノ勢モ郎從並ニ國中ノ味方馳集リテ三千騎ニ及ヘリ。彼是一萬三千騎ノ軍勢ヲ以テ。八月出陣シ。貞任カ叔父僧ノ良照カコモリシ小松ノ柵ヲ責敗ル。貞任カ弟宗任來テ合戰ス、頼義ノ郎從ヨク戰ヒシカハ。宗任破レテ引退ク。九月五日。貞任自ラ八千餘人ヲ引テ來ル。頼義・武則相共ニ諸軍ヲ勵シ合戰ス。貞任戰ヒ負テ。磐井川マテ引退ク。官軍續テ責ケレハ。貞任衣川ノ柵ヘ逃入ル。同六日。頼義衣川ノ關ヲ打破ル。貞任鳥海ノ柵ヘ皈ル、同十一日。官軍鳥海柵ヲ責ム貞任カ兵所々ニ於テ多ク討レテ。厨川柵ニ引籠ル。同十四日旦、厨川ヘ押寄セ、同十六日マテ終日

終夜相戰テ、寄手モ城中モ討ル、者多シ。亘理經清ハ平太夫國妙ニ生捕レ、頼義逢ニ其首ヲ斬セラル、同十七日貞任城ヲ出テ自ラ防キ戰フ、官兵鉾ヲ以テ是ヲ突倒シ楯ニ乘セテ頼義ノ前ニ到ル、頼義其罪ヲ責給フニ蒲手數多彼リケレハ物言コト不能。一面シテ死ス年四十歲（或ハ三十四歲）其子千世童子十三歲。城ヲ出テ合戰ス頼義其勇ヲ感シ免サントス。武則ス、メテ殺サシム。宗任ハ生捕トナル、其外親族黨類或ハ斬ラレ或ハ降參シタリケル。斯テ國中悉ク平均シ。同六年正月頼義ノ使者奥州ヲ打立都ニ上テ、貞任・重任・經清カ首ヲ獻ス、頼義ハ同月奥州發足アッテ、二月都ニ入玉フ。則除目ヲ行ハレ武則ハ一族ヲ催シ、大軍ヲ起シテ官軍ニ加勢スル旨。頼義上奏アルニ依テ。從五位下ニ敍シ鎭守府將軍ニ任セラレ、貞任カ所帶ヲ賜ハリ、奥六郡ノ押領使トナサレケル、其後出羽國ノ住人鎭守府將軍從五位下清原眞人武則ハ。貞任カ所帶ヲ領シ、奥六郡ノ主トナリ其子七人アリ、嫡男荒川太郎武貞其

次ハ女子ニテ吉彦（キヒコ）秀武ニ嫁ス。次男斑目四郎武忠・三男貝澤三郎武道・四男權太郎清衡・五男將軍三郎武衡・六男四郎家衡ナリ、此武衡家衡ト清衡トハ異種同母ノ兄弟ナリ。清衡カ父ハ實ハ亘理權太夫藤原經清ナリ。母ハ安倍頼時カ娘ナリケルカ。前九年ノ戰ニ貞任ニ與シ討レケル時、清衡ハ二歲ニシテ母カ懷中ニ居タリシヲ、武則彼母ヲ迎テ妻トシ、清衡ヲモ我子トシテ養育ス、其後彼母モ腹ニ二人ノ子ヲ生メリ、武衡・家衡是ナリ、扨又荒川太郎武貞ハ父武則カ遺跡ヲ繼キ、其子眞衡カ代ニ至テ威勢又父祖ニ超タリケレハ、兩國ノ一族等モ各被官ノ列ニ着ク、眞衡ハ國政正シク務メケレハ、境内モ穩カナリ。然ルニ眞衡嗣子ナキニ依テ海道小太郎成衡ト云者ヲ養ツテ子トシ。多氣宗基カ孫女ヲ娶テ彼ニ妻ス、爰ニ出羽國ノ住人吉彦秀武ハ武則カ爲ニ甥ナカラ婿ナリケレハ。此度モ家人ノ中ニ催サレ、婚禮ノコトヲ營ミケルニ。眞衡彼ニ對シテ無禮ノ事アルニ依テ。秀武ハ軍ヲ起シテ、此恨ヲ

報セント志シ。本國ニ皈リケルカ使者ヲ以テ清衡・家衡ヲモ頼ミケレハ兩人頓テ同心ス　此兩人モ父カ遺跡ヲ分テ奥州ニ住ケレトモ、眞衡カ從者ノ如クナレハ。兼々是ヲ恨ムカ故ナリ。去ハ眞衡ハ秀武カ企ヲ聞テ大軍ヲ催シテ彼ヲ亡サントス。出羽ヲサシテ發向ス。清衡・家衡ハ秀武ニ頼レケレハ眞衡カ留守ヲ窺ヒ、彼舘ニ押寄ル。成衡ハ其比病ニ因テ出合ハス。眞衡ハ清衡・家衡ヲ防カントス。途中ヨリ取テ返ス。此事清衡方ヘ聞ヘケレハ、一戰ニモ不及、軍兵ヲ引退ク　扨又眞衡ハ清衡等モ退キケレハ、重テ出羽ニ發向セントス軍立ス。于時永保三年六月源義家朝臣ハ陸奥守兼鎭守府將軍ニ任セラレ都ヲ發シ、同八月陸奥ノ國府ニ入玉フ。依之眞衡先ツ國司ノ下向ヲ饗應シテ後、軍勢ヲ引卒シ。出羽國ヘ打越ケル　清衡・家衡ハ再ヒ眞衡カ留守ヲ伺ヒ、彼舘ヘ責寄ル。其比義家ノ家人兵藤太正經・伴次郎助兼ハ　當郡ノ撿問ヲ務メ居タリケルヲ、眞衡カ妻女使者ヲ以テ、加勢ヲ頼ミケレハ。兩人ハ領掌シ。

彼舘ニ入要害ヲカタメ、敵ノ寄スルヲ待懸タリ。清衡・家衡ハ舘ヲ圍ンテ攻戰ヒケルニ、城兵勢强クシテ寄手打負、進退ヲ思慮スル折節、正經・助兼使ヲ以テ兩人ニ異見ヲ加ヘケレハ、清衡ハ是ニ同意シテ、即チ兵ヲ引退ク。家衡ハ肯セスシテ城兵ト合戰シ。討負テ後退散ス　其後正經・助兼ハ國府ニ皈リ、シカ〳〵ノ事ヲ義家ニ告ケレハ、義家是ヲ聞テ、出羽國ニ使ヲ立テ。眞衡ト秀武トヲ召シケレハ。兩人軍ヲ止メテ國府ニ來ル、義家ノ命ニ隨ヒ。和睦ヲナス。又清衡・武衡　家衡ヲモ召レケルニ、家衡ハ逆テ來ラス　武衡ハ所勞ニヨッテ此度ノ戰ニ出合サレハ、清衡ト共ニ國府ニ來リテ　各々和睦シタリケル、家衡ハ同心セスシテ　遂ニ出羽ニ打越ヘ。沼ノ柵ニ引籠ル　義家ハ寛治元年國司ノ任オハルトイヘトモ。國民ノ望ニ依テ再任ニツヽキ。同三年ノ春　出羽國ノ名所古跡ヲ尋ントシ彼國ニ赴キ給フ。家衡軍兵ヲ備ヘ、國境ニ待カケタルヨシ聞ヘケレハ、即チ國府ニ皈リ玉フ。武衡ハ其比奥州ニ居タリシカ、

此事ヲ聞ヨリモ、沼ノ柵ニ打コヘ。家衡ニ同心シ、此處ハ要害ノ地ニ非ストテ、仙北金澤ノ柵ニ移リテ楯コモル。義家ハ國府ニ在テ、彼等ヲ誅伐セントテ軍勢ヲ催サル。秀武・清衡ヲ始トシテ、國中近國ノ軍兵ヲ引率シ、同年六月、國府ヲ出陣シ、七月金澤ニ到着アリテヨリ九月下旬ニ至ルマテ、合戰止時ナク。寄手兵粮乏シクシテ。十月義家ハ諸軍勢ト同ト國府ニ皈リ玉フ、武衡・家衡ハ同四年四月。金澤ノ柵ヲ出テ。國府ニ責寄。合戰シケルカ遂ニ打負、出羽ヲ指テ逃皈ル、義家ハ此時所勞ニ依テ。舍弟新羅三郎義光並ニ子息河内判官義忠ニ、軍兵ヲ相添同月刈田宮ヲ打立シム、五月金澤ノ柵ニ着テ、晝夜ヲ分タス攻戰フ。爰ニ清原眞衡ハ去ル寛治元年ニ病死シ其子海道小太郎成衡ハ此陣ニアリケルカ武衡、家衡ニ僞テ和睦ヲナシ、彼等ヲ打取ント謀リ、城中ニ入ケルカ事露顯シテ合戰ニ及ヒ。主從七十餘人終ニ討死シタリケル其後度々合戰アリ。十月寄手ノ陣中失火ニ依テ義光義忠諸軍ヲ引テ國府ニ皈ル。同五年九月義家數萬騎ヲ引率シテ國府ヲ打立。金澤ニ着陣有テ、其日ヨリ戰初リ、十月ニ至テ城中兵粮乏シクシテ、武衡ハ義光ニタヨリ降ヲ乞コト度々ナリト雖トモ。義家是ヲ許サス、城中ハ兵粮盡テ十一月十四日ノ夜。城ニ火ヲカケ。其紛レニ落行ケル寄手城中ニ亂入リ、城兵ヲ悉ク討殺ス、家衡ハ縣小次郎次任ニ討取ラル武衡ハ搦ラレ、大宅光房ニ命シテ首ヲ斬セラル。其餘黨宗徒タル者四十八人悉ク誅セラレ、奥羽平均シタリケル同六年ノ春。義家ハ都ニ上リ。奥州ノ目代ニハ藤原清衡ヲ殘シ置ル。眞衡ハ既ニ病死シ成衡ハ討死シタリケレハ。清衡ハ奥六郡ノ押領使トナリ國政ヲ執行ヒ、家族繁昌シテ、子孫榮華ヲ極メケル。

義經秀衡事跡

義家將軍ハ。寛治六年壬申皈洛ノ時奏聞ヲ經テ。清衡ヲ出羽・陸奥ノ押領使トシテ鎭守府將軍ヲ兼シメ膽澤・和賀・江刺・稗枝志和・岩手ノ六郡ヲ管領セシム江

刺郡豊田ト云所ニ（今江刺郡餅田村ニ其跡アリ）居館ヲ構ヘ、陸奥、出羽兩國ノ政務ヲ司リ、奥ノ御館ト稱ス。七十三代堀河院嘉保年中豊田ノ館ヲ岩井郡平泉ニ移シテ 三十餘年ノ間國務怠タルコトナク。且多クノ堂社伽藍等ヲ建立シ、佛餉燈油ヲ寄附ス。淸衡大治元年丙午七月十七日卒去、其子御館基衡父ノ讓リヲ受テ、奥羽兩國ニ一萬餘村ノ押領使トシテ、鎭守府將軍ヲ兼シム。國務ヲ司トルコト三十餘年。保元二年丁子三月十九日卒ス。其子御館秀衡 父沒シテ後 兩國ヲ管領シ。十七萬騎ノ貫首トナリ公田ノ貢、並ニ納官封家ノ 諸濟物怠ルコトナク。又父祖ノ跡ヲ繼、多クノ佛像伽藍ヲ建立ス。八十代高倉院 嘉應二年己丑五月廿五日 鎭守府將軍ニ任シ、從五位下ニ叙ス。八十一代安德天皇養和元年辛丑八月十三日、賴朝卿ヲ追討スヘキ由ノ宣旨ヲ下サレ、同月廿五日 陸奥守ニ任シ 從五位上ニ叙セラル。是平家ノ執奏ニ依テナリ。然ルニ秀衡表ニハ是ヲ領掌スルト雖トモ。祖父以來源家ノ荷恩。忘ルヘキニ非レハ、更ニ心底ニハ肯カハサルカ故ニ。遂ニ追討ノ義ハナカリケル 秀衡ニ五子アリ、嫡男西城戸太郎國衡。二男泉冠者泰衡。（一說ニ伊達次郎トモ） 三男和泉三郎忠衡。四男本吉冠者隆衡。五男出羽冠者通衡（一說仙北五郎利衡）ナリ 次男泰衡ヲ家督ニ定メ、其外親族諸從ニ至ルマテ、過分ノ領地ヲ宛行ヒ。官祿父祖ニ超、榮耀身ニ餘リ。威ヲ東國ニフルヒケル。然ルニ將軍義家ヨリ 四代左馬頭義朝ノ六男伊豫守從五位下源朝臣義經ハ、平治元年ニ誕生。幼名牛若丸。母ハ常盤ナリ。初メ九條院ノ雜仕ニテ。後義朝ノ妻トナル 永暦元年、義朝長田ノ爲ニ弑セラレテ後。義經二歲ニシテ孤トナル。常盤ハ淸盛ノ妾トナリテ 子共ノ命ヲ助ク、其後淸盛ニスサメラレ。一條大藏卿長成ノ室トナル 義經モ長成ノ扶持ニヨル。七歲ノ秋、出家ニナサント鞍馬山ニ登ス 遮那王丸ト改ム、成人スルニ從ヒ、出家ノ志ハナク。父ノ讐ヲ復シ 先祖ノ恥ヲ雪カン事ヲ思ヒ。十六歲ノ三月。ヒソカニ三條ノ吉次季春ト共ニ 都ヲ出テ。路次ニテ自ラ元服シテ九

郎義經ト名乘、奥州ニ下向シ、秀衡ヲ憑ミ平泉ノ館ニ逗留ス十八歳ノ春、平泉ヨリ竊ニ都ニ上リ、鬼一法眼ニ從ヒ兵術ヲ學ヒ　其後奥州ニ下ル　治承四年　義經廿二歳ノ秋　舍兄兵衛佐頼朝卿義兵ヲ起シ伊豆相模ノ軍勢ヲ引卒シ　既ニ都ニ發向ノ聞ヘアリケレハ義經同十月ニ平泉ヲ進發シ　相州ニ赴ク、秀衡ハ佐藤次信・同忠信ヲ從ハシム　駿河國黄瀬川ノ宿ニテ頼朝ニ對面ス　元暦元年正月　木曾義仲カ惡逆ヲ鎭メンカ爲ニ　頼朝ノ名代トシテ蒲冠者範頼・九郎義經ニ數萬騎ヲ相添上洛セシム、宇治・勢田ノ合戰ニ　義仲打負テ遂ニ亡フ　同年正月　範頼・義經ニ軍勢ヲ從ヘ　平家ノ討手ニ向ハシム、義經先ツ三草山ニテ敵ヲ破リ　夫ヨリ一ノ谷ヘ發向シ　範頼ハ大手ヨリ攻メ、義經ハ搦手ヨリ攻ルトイヘトモ敗レザレハ　義經城ノ後ノ山鵯越ヨリ責カヽリ火ヲ放テケレハ　平家ノ一族郎從悉ク討レテ殘リ少ニナリ　讃岐ノ屋島ニ赴ク。範頼・義經ハ皈洛シ　暫ク在京ス　八月義經左衛門少尉ニ任シ　九月從五位下ニ叙シ、檢非違使判官ト號ス　都ヲ守護ス、文治元年二月。攝州渡邊ニテ兵船ヲソロヘ　船五艘ニテ風波ヲ凌キ　屋島ニ押渡リテ平家ヲ攻破リ　屋島ノ内裏ヲ燒拂ノ　平家遂ニ打負テ。長門ヲサシテ引退ク三月義經赤間關ニ到テ平家ト合戰ス　平家敗軍シテ。二位禪尼寶劍ヲ持、按察局先帝安德ヲ抱キ奉リ　海ニ入テ沒ス、建禮門院ヲ生捕奉ル、宗盛・清宗等生捕トナル　其外一族殘ラス海ニ入テ死ス。神璽ハ浮ヒケルニ依テ、内侍所ト共ニ四月都ニ還幸ナシ奉ル、義經供奉シテ京ニ皈ル、于時頼朝義經ヲ勘氣セラル。是義經武勇スクレ、其心剛ニシテ謀略モヨク、勝利ノミ多シ、平家ノ滅亡ハ　皆義經ノ軍功ナルニ因テ、自負ノ意キサシ、諸士ノ意ニモ違ヒ、頼朝ノ旨ニ叶ハサルコト共多キカ故ナリ　五月義經京都ヨリ　龜井六郎重清ヲ使者トシテ起請文ヲ調ヘ　鎌倉ニ奉ルトイヘトモ　頼朝許容ナシ　同月義經、宗盛・清宗ヲ召具シ　鎌倉ニ下向スルト雖トモ　義經ヲシテ鎌倉ニ入ル事ヲ不許　酒匂腰

越ノ邊ニ數日ヲ送リ。異心ナキノ旨申通スト雖トモ、頼朝敢テ許シナク。六月京ニ皈リ上ル。都ニ皈テ後八月禁裏ヨリ伊豫守ニ任シ 京都ヲ守護セシム。十月頼朝ハ義經ヲ討ンカ爲ニ、土佐坊昌俊ヲ 上洛セシムルト雖トモ 却テ義經ニ殺サル。十一月義經其叔父備前守行家ト共ニ。頼朝追討ノ院宣ヲ强テ申受。前中將時實・侍從良成・伊豆右衛門尉有綱・堀彌太郎景光・佐藤四郎兵衛尉忠信・伊勢三郎義盛・片岡八郎弘經・辨慶法師以下 彼是ノ勢二百騎ハカリヲ引卒シ。都ヲ出テ四國ニ赴カント。攝津國大物浦ヨリ船ヲ出ス。時ニ大風シキリニ波烈シク。散々ニ漂泊シテ陸ニ上ル。義經ニ相從フ者僅ニ四人。有綱・景光・辨慶・妾女靜ナリ。夫ヨリ奈良・吉野・多武峯・方々ニ隱レ居ル。同月頼朝奏シテ義經・行家追討ノ院宣ヲ賜ハリ。尋ネ求メシムレトモ不見出 頼朝自ラ誅戮セント出馬ス 既ニ都ヲ落ルト聞テ 黄瀨川ヨリ皈ラル 國々ニ宣旨ヲ下サレ。且鎌倉ヨリキヒシク捜シ求メラレ 同三年ノ二月、妻室男女並ニ郎從等ヲ相具シ 山伏兒童ノ姿トナリテ、伊勢・美濃等ノ國ヲ歷テ 北陸道ヨリ奥州ニ赴キ 平泉ニ至リテ 秀衡ヲ頼ミ玉フ 秀衡ハ民部少輔基成朝臣ヲ居住セシメシ。衣川ノ舘ノ別殿ニ入レテ モテナシケレハ、義經モ暫ク安堵ノ思ヲナス。然ルニ義經奥州下向ノコト。鎌倉ニ 風聞アルニ依テ。則頼朝ヨリ京都ニ奏セラレケルハ。秀衡入道義經ヲ扶持シ、叛逆ヲ企ルノ聞ヘ有ノ間、嚴密ニ尋玉フヘキノ旨。文治三年ノ春ノ比。申上サレケルニ依テ。其後京都ヨリモ義經ヲカラメ進スヘキノヨシ 廳ノ御下文ヲ秀衡ニ下サル。頼朝モ雜色ヲ 添ラル。秀衡ハ此時義經並ニ郎等共ニ介抱スルト雖トモ 京都・鎌倉ヘハ是ヲ隱シ、異心ナキノ旨ヲ返答申遣ス。彼使者並ニ雜色ハ。平泉ヲ發足シ。九月四日ニ鎌倉ニ參着ス。頼朝平泉ノ 形勢ヲ雜色ニ尋玉フニ。既ニ叛逆ノ用意有カノ由申上ルニ依テ、此趣ヲ言上セシメンカ爲ニ。彼雜色ヲ則京都ニ上セラル、然ルニ秀衡ハ。日來重病ニ犯サレ。既ニ頼ミ少ク覺ヘケ

レハ、子息泰衡以下ヲ召集メテ遺言シケルハ、我死シテ後ハ義經君ヲ大將軍ト仰キ陸奥・出羽ノ國務ヲマカセ奉リ、何事モ御下知ヲ背クヘカラストテ、文治三年丁未十月廿九日遂ニ卒去ス、斯テ泰衡ハ父カ遺跡ヲ受繼キ、陸奥・出羽ノ押領使トナリ、六郡ヲ管領シ十七萬騎ノ貫首トソナリニケリ、同四年戊申二月廿二日義經ヲ召捕可進ノ由宣旨並ニ院ノ廳ノ御下文ヲ泰衡ニ下サル。官史生國光院廳官景弘。是ヲ持テ同四月奥州ニ下向ス。泰衡此旨ヲ領掌シ、尋ネ進スヘキノ由請文ヲ捧ルトイヘトモ、事延引ニ及ヒケレハ、同十一月重テ宣旨並ニ院廳ノ御下文ヲ相添ラレ、官史生守康是ヲ帶シテ下向ス、其上鎌倉ヨリモ義經ヲ誅戮スヘキ由。使者ヲ下サレケル。同五年二月廿五日鎌倉ヨリ泰衡カ形勢ヲ伺ハシメン爲ニ、雜色里長ヲ平泉ニ差下サル、同廿六日、去年下サル、處ノ守康、奥州ヨリ皈テ鎌倉ニ逗留シ、頼朝ヘ申ケルハ、泰衡ハ義經ノ有所露顯スルノ間早ク誅戮スヘキノヨシ、請文ノ辭ニノスルノ旨ヲ演ニケル、頼朝ノ曰、泰衡カ心中猶ハカリ難シ、堅ク義經ニ同意スルカ故ニ、先ニ勅定ニ背キテ是ヲ召進セス、然ルニ今一旦ノ害ヲ遁レンカ爲ニ、其趣ヲ請文ニ載スルトイヘトモ、大略謀言ナルヘシトソ。斯テ泰衡ハ頼朝ノ威ヲ恐レ、勅命ニ隨テ父カ遺言ヲ用ヒス。同五年己酉閏四月晦日、從兵數百騎ト共ニ衣川ノ館ニ押寄ル（義經ノ臣ニ長崎太郎・同次郎・熊井太郎高春等三萬騎ニシテ押寄ルト云）リ。義經モ家人伊勢三郎義盛・片岡八郎弘經・鈴木三郎重家・同弟龜井六郎重清・小山權頭兼房・鷲尾三郎義久・備前平四郎成春・武藏坊辨慶・雜色喜三太等ヲ以テ防カシム。何モ最期ノ軍ナレハ、身命ヲ惜マス相戰ヒ、或ハ討死シ、又ハ自殺シタリ、義經ハ持佛堂ニ引籠リ御臺所ハ廿二歳、女子ノ四歳ナリケルヲ害シテ後。其身モ自害シ玉フ、行年三十一歳ナリ（或書曰、義經[illegible]ニ常陸坊ノ館トシ[illegible]殘ル十一人ノ者共、今朝ヨリ近キアタリノ山寺ヲ拜ミニ出ケルカ、其儘カヘラスシテ失ニケリト云々、又曰、義經平泉高館ニ於テ自害ノ時、東[illegible]・[illegible]良[illegible]・[illegible]等ノ分ナリ、近代出ル所ノ諸書ニ或ハ平泉ヲ遁レテ蝦夷ヘ落行。彼地ニテ終ト云。或ハ蝦夷ヨリ金國ヘ渡ルトモイヘリ。是皆怪異[illegible]強ノ妄ナリ。信スルニ不足ト云々）、泰衡ハ則飛脚ヲ以テ。此趣キヲ鎌倉ニ

達ス。其脚力五月廿二日ニ鎌倉ニ到着ス、首ハ追テ進スヘシトナリ鎌倉ニハ其比鶴ヶ岡ノ建立有テ。六月九日其供養ナリケレハ、義經ノ首左右ナク鎌倉ニ持參スヘカラス、途中ニ逗留スヘシトテ。六月七日鎌倉ヨリモ、飛脚ヲ奥州ニ下サル、泰衡ハ新田冠者高衡ヲ使者トシテ、義經ノ首ヲ送ル。黑漆ノ櫃ニ入美酒ヲ以テ浸、之、從者二人ニ荷擔セシム是ヲ見ル者双淚袂ヲウルホサスト云コトナシ。鎌倉ヨリノ下知ナレハ。ワサト延引シテ六月十三日腰越ノ浦ニ到テ、此旨ヲ鎌倉ニ言上シケレハ、則和田太郎義盛•梶原平三景時•各甲直垂ヲ着シ、甲冑ノ郎從二十騎ヲ相具シ腰越ニ來テ首實檢ヲ遂ニケル。或説ニ首ハ相州白旗ノ里ニ埋メテ。白旗大明神ト崇ムト云々。又泰衡ハ同腹ノ弟和泉三郎忠衡、義經ニ同意仕ケルニ依テ。同六月廿六日。彼カ館ニ押寄テ忠衡ヲモ誅シケリ。是宣下ノ旨アルニ依テ也、

泰衡追討始終　附伊達氏濫觴

去程ニ頼朝卿ハ、泰衡ニ仰テ義經ヲ誅セシムルトイヘトモ鬱憤猶止コトナク。泰衡日比義經ヲ隱シ置ノミナラス。度々ノ院宣並ニ鎌倉ヨリモ數度ノ使節ヲ下サレシヲモ背ハスシテ、事延引ニ及ノ條叛逆ニモ過タリ。誅伐セスンハアルヘカラストテ、文治五年己酉ノ春。義經存命ノ中ヨリ。滅亡ノ今ニ至ルマテ、泰衡追討ノ宣旨ヲ給ハルヘシト。度々京都ニ奏問セラレケル。都ヨリハ泰衡追討ノ事、連々御沙汰ヲ歷ラル、ノ所ニ。關東ノ鬱憤默止難シト雖モ。此義ニ於テハ朝ノ御大事ナリ、殊ニ今年ハ造大神ノ棟上ト云。南都東大寺ノ造營ト云既ニ義經ヲ誅スルノ上ハ。當年ハ猶豫スヘキ旨朝廷ノ御沙汰ノ由京都ノ守護一條右兵衛督能保卿ヨリノ消息。同六月廿四日鎌倉ニ到來ストイヘトモ。同廿五日又以泰衡追討ノ宣旨ヲ賜ハルヘキノ由押返シ奏セラル、其後諸國ニ觸ラレ、軍勢ヲ催サレケレハ、國々ノ軍士等。手勢ヲ引具シ、我モ々トト日々ニ鎌倉ニ馳集リ。既ニ一千人ニ及フ。和田義盛ハ侍所ノ別當。梶原景時ハ侍所ノ所司ナレハ、彼兩人ハ

前圖書允ヲ執筆トシテ一々士卒ノ交名ヲ注シケル扨亦宣旨延引ニ及ヒタル其中ニ國々ノ軍勢雲霞ノ如ク集リ鎌倉ニ充滿シケレハ賴朝ハ大庭平太景能ヲ召ル景能ハ武家ノ古老ニシテ、兵法ノ故實ニ通達シケル故此度宣旨ナクシテ征伐セラレンコト、一決シカタク其理非ヲ問尋ラレンカ爲ナリ。賴朝景能ニ問玉フハ今度泰衡追討ノコト奏問ヲ遂ルノ所ニ今ニ於テ勅許ナシ既ニ諸國ニ相觸御家人等ヲ召集ム。此事如何計ラハキヤト、景能對ヘ申ケルハ軍中聞將軍之令不聞天子之詔ト云ヘリ既ニ奏問ヲ遂ラル丶ノ間アナカチニ勅許ヲ待ルヘカラス隨テ泰衡ハ累代御家人ノ遺跡ヲ受繼者也、綸旨ヲ下サレストモ誅伐シ玉ハンコト何ノ御遠慮カ候ヘキ就中群參ノ軍士等數日ヲ費ス所却テ人ノ煩ヒナリ早ク發向シ玉フヘシト言上ス賴朝之ヲ聞忽チ疑心ヲ開キ玉ヒ、景能カ其道ニ明カナル事ヲ感シ玉ヒ則御厩ノ馬ニ鞍置テソ給ハリケル。同七月十二日重テ飛札ヲ以テ京都ニ上セラル其趣ニ曰、奧州泰衡ヲ追討スヘキノ由先達テ言上セシムルノ處定メテ宣旨ヲ下サレント存ル間軍士ヲ催促シ既ニ數日ヲ送リ候又官使ヲ以テ宣旨ヲ下サレハ延引ニ及ヘクノ間右兵衛督能保ニ仰セテ彼飛脚ヲ以テ下シ給ハルヘキノ由言上セラル然ルニ去月下旬上セラレタル飛脚。並ニ一條能保ヨリモ後藤新兵衛尉基淸ヲ使者トシテ。一同ニ七月十六日ニ。鎌倉ヘ下着シテ申ケルハ。泰衡追討ノ宣旨ノ事攝政以下度々ノ沙汰ヲ歷ラル。然ルニ義經先達テ滅亡スルノ上又以泰衡追討ノ義ニ及ヒナハ。天下ノ大事タルヘキノ間今年ハ其義ヲト丶マリ明年征伐有ヘキノ由。去ル七日宣旨ヲ下サル丶ノ旨ヲ述。賴朝聞之玉ヒ、頗ル氣色ヲ損シ玉ヒケルカ此上ハ譬宣旨ヲ下サレストモ既ニ一決ヲ遂ルノ上、殊ニ多クノ軍士等ヲ召集ムルノ後、此義ヲ止ルニ於テハ。許多ノ費士民ヲ惱スノ條明年ヲ待ヘカラス面々其用意仕ルヘシトテ頓テ出馬ニ極リケリ同十七日終

日奧州發向ノ評議有テ軍勢ノ手分ヲ定メラル。先ツ軍兵ヲ三手ニ分クヘシ。東海道ノ大將軍ハ千葉介常胤、八田右衛門尉知家各一族並ニ常陸・下總兩國ノ勢ヲ引卒シテ、宇多行方ヲ經テ岩崎岩城ヲ廻リ。逢隈川ノ湊ヲ渡リテ。敵陣ニ攻寄スヘシ。又一手ハ北陸道也。大將ニハ比企藤四郎能員、宇佐美平次實政　上野國高山小林大胡左貫等ノ軍勢ヲ相具シ、越後國ニ差懸リ。出羽國念種カ關（今云鼠カ關歟）ニ出テ合戰スヘシ。一手ハ賴朝卿ナリ、敵ノ大手ニ向ハン爲ニ。中道ヨリ下向有ヘシ。先陣ハ畠山次郎重忠タルヘシ。次ニ合戰謀計其ホマレアル輩ハ無勢ノ間定テ勳功ヲ顯シ難カランカ。勢ヲ付ラルヘキノ由。定メラルニ依テ。武藏・上野兩國ノ中ノ黨々等ハ、加藤次景廉・葛西三郎清重等ニ隨テ合戰ヲナスヘキナリ、其外東國ノ軍勢ハ。御下向ノ路次ニ待受。御供ニ候スヘキノ由、義盛景時ヲ以テ面々ニ相觸ラル。次ニ鎌倉御留守ノ事ハ。中宮太夫入道三善康信ニ仰付ラル、前隼人佐三善康清　藤判官代邦道。

佐々木次郎經高・大庭平太景能以下ノ輩、御所ニ候スヘシトソ定メラル、斯テ賴朝卿ハ、七月十九日ノ巳ノ刻ニ。鎌倉ヲ出陣シ玉フ。先陣ハ畠山次郎重忠、從軍ニハ長野三郎重清・大串小次郎重親・本田次郎近常　榛澤六郎成清・柏原太郎等ナリ。賴朝御供ノ人々ニハ。武藏守義信・遠江守義定・參河守範賴・信濃守遠光・相模守惟義・駿河守廣綱・上總介義兼、伊豆守義範・越後守義資、豐後守季光・北條四郎時政・江間小四郎義時・北條五郎時連・式部大輔親能、新田藏人義兼・淺利冠者義遠・武田兵衛尉有義　伊澤五郎信光・加々美次郎長清・同太郎長綱、三浦介義澄・三浦平六義村・佐原十郎義連・和田太郎義盛・和田三郎宗實、岡崎四郎義實・同先次郎惟平・土屋次郎義清・小山兵衛尉朝政・長沼五郎宗政・結城七郎朝光・下河邊庄司行平。吉見次郎賴綱・南部次郎光行・平賀三郎朝信・稻毛三郎重成・榛谷四郎重朝・藤九郎盛長、足立右馬允遠光。土井次郎實平・同彌太郎遠平・梶原平三景時・同源太左衛門尉景季。同平次兵衛尉景

高同三郎兵衛景茂・同刑部尉朝景・同兵衛尉定景・波多五郎義景・同餘三實方・阿曾沼次郎廣綱 小野寺太郎道綱・中山四郎重政・同五郎爲重 澁谷次郎高重・同四郎時國・大友左近將監能直・河野四郎通信・豐島權守淸光・同十郎重允。江戸太郎重長・同次郎親重・同四郎重通・同七郎重宗・葛西三郎淸重・山内三郎經俊・大井次郎實春・宇都宮左衛門尉朝綱・同次郎業綱・八田右衛門尉知家・同太郎朝重・主計允行政 民部丞盛時・豐田兵衛尉美晴・大河戸太郎廣行・佐貫四郎廣綱・同五郎 同六郎廣義・佐野太郎基綱・工藤庄司景光・同次郎行光・同三郎祐光・狩野五郎親光・加藤太光員・同藤次景廉・佐々木三郎盛綱・同五郎義淸・曾我太郎祐信・橘次公業・宇佐美三郎祐義・二宮太郎朝忠・天野右馬允保高・同六郎則景 伊東三郎、同四郎成親・工藤左衛門尉祐經・仁田四郎忠常 同六郎忠時・熊谷小次郎直家・堀藤太・堀藤次親家・伊澤左近將監家景・江右近次郎・岡部小次郎忠綱・吉香小次郎・中野小太郎助光・同五郎能成・澁川五郎兼保・春日小次郎貞親・藤澤次郎淸近・飯富源太宗季・大見平次家秀、沼田太郎・糟谷藤太有季・本馬右馬允義忠・海老名四郎義季・所六郎朝光・橫山權守時廣・三尾谷十郎 平山左衛門尉季重・師岳兵衛尉重經・野三刑部丞成綱・中條藤次家長。丘邊六野太忠澄・山越右馬允有弘・庄ノ三郎忠家・四方田三郎弘長。淺見太郎實高淺羽五郎行長・小代八郎行平・勅使河原三郎有直・成田七郎助綱・高鼻和ノ太郎・鹽屋太郎義光・阿保次郎實光・宮土兼仗國平・酒勾三郎政成・國七郎政賴・中ノ四郎是重一品房昌寛・常陸房昌明・尾藤太知平・金子小太郎高範・常陸次郎爲重伊達元祖中村常陸介宗村入道念西ノ二男。此時鎌倉ニ勤仕同三郎資綱念西三男爲重ノ弟、共ニ鎌倉ニ勤仕供奉ス爲重資綱ノ舍兄中村常陸冠者爲宗宗村入道念西ノ嫡男ナリ。是ハ常州ヨリ中途ヘ出向フテ共ニ供奉ス、此等ヲ始トシテ鎌倉出勢都合一萬餘騎ナリ、一扱亦奥州ニハ此事先達テ聞ヘケレハ、泰衡ハ鎌倉勢ヲ防カン爲、伊達郡阿津賀志山厚賀志館ハ今伊達郡大條村ニアリ、阿武隈川ニ近シ。ニ城壁ヲ築キ、要害ヲ固メ國見宿ト厚賀志山ノ中間ニ。俄ニ

口五丈ニ埠ヲ掘リキリ國見峠ノ今藤田。貝田ノ間街道ヨリ北ニアタル。山ノ八分ヨリ、重ノカラ堀アリ。阿武隈川ヲ越テ南方ノ高山靈山マテホレリ。厚樫ハ此堀ノ東ニ有。逢隈川ノ流ヲ堰入柵ヲナシケレハ、究竟ノ要害ナリ。此所ヘハ異母兄西城戸太郎國衡或ハ錦戸トモヲ大將トシ。金剛別當秀綱・同嫡子下須房太郎秀方以下逞兵二萬餘騎ヲ相添、之ヲ守ラシム。凡ソ山ノ内三里カ間ハ。軍勢波ノ押寄セタル如ク充滿シテ、色々ノ旌旗アタカモ龍蛇ノ如クヒルカヘラセ。精兵ノ射手ヲ揃ヘ、或ハ石那坂ノ上ニ出張リシテ。石弓ヲ張テ討手ヲ待ツ。又刈田郡ニモ。一城ヲ構ヘタリ。名取川廣瀬川ニハ。大綱ヲシカラミニ引タルニ。折シモ秋雨降續キ、水カサ常ニ勝ツテ。白浪岸ヲ洗フ。惣大將泰衡ハ。平泉ヲ出張シ宮城郡國分原鞭館ニ陣ヲ据。嚴重ニ備タリ。鞭館又鞭楯共アリ今ノ躑躅岡ノ邊歟又栗原郡三迫。今ノ一、二三迫。黒岩口一野邊ニハ一野邊ハ。今岩井、伊澤ノ山間ヲロシロ。是一野邊ノ關也。若ノ九郎太夫余平六以下ノ郎從等ヲ大將トシテ數千騎ヲ相添、警衛ニ据ヘ置キ、又出羽國ヲハ。同郎從田河太郎行文・異本ニ竹文秋田三郎致文ヲ大將トシテ。軍兵ヲ相添防

カシム。去程ニ頼朝卿ハ。鎌倉ヲ進發有テ。今日七日ヲ經テ。同月廿五日下野國古多橋ノ驛ニ着陣。先ツ宇津宮ニ奉幣有テ立願シ玉フ此度泰衡ヲ平ラケ、本望遂スルニ於テハ生捕一人神職ニ奉ルヘシトテ。上箭ヲ拔テ神殿ニ奉納シ玉ヒ。則旅館ニ入玉フ。小山下野大椽政光入道駄餉ヲ献ス。時ニ紺ノ直垂ヲ着シタル武士御前ニアリ政光其姓名ヲ問奉ル頼朝ノ曰。本朝無双ノ勇士熊谷小次郎直家ナリト。政光重テ何事ニテ直家ハ本朝無双ノ號候ヤ。頼朝ノ曰。平氏追討ノ間。一ノ谷ヲ始メトシテ。其外ノ戰場ニ於テ。父子相共ニ一命ヲ輕ンシ。忠義ヲ盡ス事。度々ニ及カ故ナリト政光頗ル笑テ曰君ノ爲ニ一命ヲ輕ンスルハ勇士ノ常ナリ。爭テカ直家父子ニ限ランヤ。但シ直家カ如キ輩ハ。附從フ郎從ナキニ依テ直ニ軍功ヲ勵シ其名ヲ揚ル哉。政光カ如キハ。唯郎從等ヲ遣シテ忠ヲ抽スル所ナリ。所詮是ヨリ以後ハ自ラ合戰ヲ遂。本朝無双ノ仰ヲ蒙ルヘキナリト。子息小山兵衛尉朝政・同五郎宗政・同

七郎朝光、猶子宇都宮彌三郎頼綱等ニ下知シケレハ。頼朝聞玉ヒテ頗ル興ニ入玉フ、同廿六日宇都宮ヲ立玉フ、佐竹四郎隆義・常陸國ヨリ參着ス、佐竹カ旗無紋ノ白旗ナリ、頼朝之ヲ咎メ玉ヒテ、御旗ト同キノ間是ヲ上ニ附ヘシトテ、月ヲ出ス御扇ヲ賜ハル。佐竹之ヲ拜領シテ則旗ノ紋ニ付ケニケル（今ニ於テ[illegible]家ノ紋トス）廿八日新渡戸ノ驛、廿九日ニハ白河ノ關ヲ越玉フ、關ノ明神ニ奉幣シ玉ヒテ後。梶原源太左衛門尉景季ヲ召シ。當時ハ初秋ナリ。能因法師カ古風思ヒ出サヽルヤト宣ヒケレハ、景季馬ヲ控ヘテ一首ヲ詠ス、秋風ニ草木ノ露ヲ拂ハセテ君カ越レハ關守モナシ　頼朝頗ル興ニ入玉ヒ、斯テ八月七日ニハ、陸奥國伊達郡厚賀志山ノ邊。國見澤ニ著玉フ、其夜内々老軍等ト評議有テ、明曉敵ノ先陣厚賀志ノ城郭ヲ攻試ムヘシト仰アル。夜半ニ及ヒテ雷雨、霹靂頻リニシテ陣中ニ落チタリケレハ上下恐怖ノ思ヒヲナス、夜中ニ重忠相具ス所ノ用意ノ鍬钁ヲ持セタル八十人ノ匹夫等ヲシテ、ヒソカニ土石ヲ運ハセ、敵ノ俄ニ埋切タル大堀ヲ塞カシム、明日ノ合戰ニ人馬ノ駈引自由ナラシメンカ爲ナリ、扨又小山七郎朝光近習タルニ依テ。其夜頼朝卿ノ寢所ノ邊ニ臥タリケルカ。父政光入道カ先日宇都宮ニテ教訓セシヲ意ニカケ。ヒソカニ忍ヒ出テ、兄朝政カ郎等ヲ相具シ。先登ヲ志シ、厚賀志山ノ邊ニ詰カケタリ。又畠山次郎重忠・加藤次景廉・工藤小次郎行光・同三郎祐光等モ・頼朝ノ仰ヲ蒙リ、敵ヲ攻試ンカ爲ニ八日ノ卯ノ刻ニ、敵陣間近ク推寄、箭合ヲハシム、敵方ニモ金剛別當秀綱、數千騎ヲ下知シテ、先達テ厚樫山ノ前ニ陣シテ持懸ケル。小山・畠山ヲ始メ諸軍一同ニ攻寄ケレハ、秀綱モ諸卒ニ下知シ、防キ戰フト雖トモ、要害ト頼ミタル大堀ハ。夜ノ間ニ塞カレ、其軍雲霞ノ如ク襲ヒ重ナリタルコトナレハ。秀綱カ軍兵等是ヲ防クニ術ナク巳ノ刻ニ及ンテ悉ク攻破ラレ、右往左往ニ逃走リ、國衡カ固メタル大木戸ニ馳加ル、又泰衡カ郎從信夫ノ佐藤庄司基治（異本ニ、湯ノ生田。或ハ信夫ノ小太夫共アリ。佐藤次信同忠信カ父。）

ハ叔父河邊太郎高經。伊賀良同七郎高重等ヲ相具シ、石那坂ノ上ニ陣シテ湟ヲホリ、逢隈川ノ水ヲ堰入レ。柵ヲ引キ弩ヲ張リ、寄來ル敵ヲ待懸タリ、爰ニ中村常陸入道念西ノ子息常陸冠者爲宗（伊達家名之祖）同次郎爲重（鎌倉ヨリ供奉シテ下向）同三郎資綱（上ニ同シ）同四郎爲家兄弟四人、此表ニ陣シケルカ、爲宗三人ヲ招キテ曰、汝等如何思フ、此度ノ合戰ニ諸軍ニ目立高名シテ。鎌倉殿ノ感賞ニ預リ。譽ヲ子孫ニ殘サント欲ス、サレハ我々他ノ勢ヲ交ヘス。佐藤庄司カ石那坂ノ要害ヲ攻敗リ。勳功ヲ顯ハサント爲重以下皆尤ト同シテ。兄弟四人竊ニ手勢ヲ卒シ。忍ヒヤカニ株（クイゼ）ノ中ヨリ伊達郡澤原ノ邊ニ進ミ。不意ニ押寄。先登シテ矢石ヲ放ツ、信夫庄司元治ハ老功ノ勇士ナレハ。少シモ驚ク氣色ナク、士卒ヲ下知シテ柵ノ外ニ突出シ、石弓ヲ飛シ、鬨ヲ合セ。命ヲ輕シテ爰ヲ破ラレスト防戰フ。依之爲宗ノ手勢許多討レ、剩ヘ爲重資綱疵ヲ蒙リ、合戰危ク見ヘケルニ、爲宗諸卒ヲ勵シ、自ラ眞先ニ勇氣ヲ震フ。是ニ依テ軍兵爲宗ニ後レスト、皆々鏃ヲ傾ケ。矢石ヲ恐レス。喚キ叫ンテ散々ニ戰ヒシカハ。賊徒大ニ利ヲ失ヒ、柵内ニ奔走ス。官軍是ニ力ヲ得、追討ニ討テ陣中ニ亂入シ、終ニ敵ヲ追崩シ、難ナク要害ヲ乘破レハ。敵兵等途ヲ失ヒ。我先ニト敗北ス、爲宗兄弟勝ニ乘テ追討事急ナリ、賊兵力盡テ。佐藤庄司ヲ始メ。其外名ヲ得タル宗徒ノ者十八人雜兵彼是首數級ヲ得タリ。則阿津賀志ノ山上經ケ岡ト云所ニソ梟並ヘケル、（或ハ云。庄司ハ生捕レ。囚人トナリテ五月五日ニ名取ノ郡司熊野別當等ト共ニ恩免ヲ蒙ル共云リ。）賴朝大ニ感賞有テ寡以テ衆兵ノ柵ヲ破リ。猛威ノ振舞。奇代ノ忠戰ナリトテ、其賞ニ伊達郡ヲ爲宗ヘ下シ賜ル。（異本ニ信夫郡ヲモ賜ルト云々。）

此時爲宗ノ父入道宗村 同祖父朝宗共ニ存命タリ。今度ノ忠賞伊達信夫兩郡ヲ賜リ、奥州信夫口ノ可爲押旨命セラル。依之文治五年十一月、常陸國中村ヲ立テ、父宗村 祖父朝宗並子弟諸共ニ奥州ヘ下向、則信夫郡大森ニ居城。依テ朝宗ヲ以テ。伊達氏全クノ元祖トス、（眞秘錄ニ曰。此時ノ領地二萬二千五百丁ト云々、當時ニ比シテ二十二萬五千石歟）

又曰武藏守朝宗朝臣始テ常陸介ニ任セラレ常州ヘ下向ノ時。供奉ノ臣ニハ原田伊豫守・（後代原田甲斐カ先祖ナリ）堀越孫次郎・伊場野善三郎・菅野文六等始メ數輩ナリ。則同國中村ニ居城シテ。是ヨリ中村ヲ以テ家名トス。爲宗ニ至テ。文治ノ軍功ニ伊達信夫ヲ賜リ奥州ヘ下向。以後中村ヲ伊達ニ改ム。朝宗ノ母公ハ六條判官爲義ノ息女ナリ。故ニ左馬頭源義朝ノ字ヲ授ケ。朝宗ト名乘ラル。右大將頼朝卿ニハ御從弟ト云々。

諸家眞秘錄ニ云　頼朝卿ヨリ。源家正統ノ御紋三ツ引兩ヲ朝宗エ賜ル。是ハ往古清和天皇御宇。六孫王經基公始テ源氏ヲ賜リ。武家棟梁トナリ玉フノ時。日月ノ御紋ヲ拜受アル。直ニハ恐アリトテ。文字ニ付テ略シ用ヒ玉フ。日ハ則横ノ二ツ引兩　月ハ則竪ノ三ツ引兩ト云々。

源氏一統志ニ曰。朝宗ノ子息中村常陸介宗村入道念西ノ御娘大進局ハ。右大將頼朝卿寵愛他ニ異ニシテ若君誕生アリ。サレトモ御臺所ノ嫉妬ニヨリ。本多何某・猿亘平太忠義ヲ屬シ。攝津國安倍野ニ忍ヒテ成長シ玉ヒ。文治六年右大將家上洛ノ時。始テ御對面アリ　伊勢伊賀ノ兩國ヲ賜ル。夫ヨリ十三年ヲ經テ。建仁二年大隅薩摩ノ兩國ヲ賜リ。島津三郎忠久ト號ス。是島津氏ノ先祖也。（島津忠久ハ。伊達爲宗ニハ甥也。）

同九日ノ夜。軍評定アツテ。明日ハ未明ニ厚賀志山ヲ越ヘ。合戰スヘキニ極マレリ、然ルニ其夜三浦平六義村・葛西三郎清重・工藤小次郎行光・同三郎祐光・狩野五郎親光・藤澤次郎清近・河村千鶴丸・（生年十三歳）以上七騎厚賀志山ヲ越ヘ。先登ニ進ント、竊ニ畠山重忠カ陣ノ前ヲ忍ヒヤカニ通リケル。是天曙テ後。大軍ト一同ニ嶮岨ヲシノカンコト然ルヘカラスト。各密談ヲナシテ夜中ニハ出ケルナリ。時ニ重忠カ家ノ子榛澤六郎成清此事ヲ聞知リ。重忠ニ告テコレヲ防カントス。重忠ノ曰。然ルヘカラス　譬他人ノ力ヲ以テ敵ヲ退ルト云トモ。我既ニ先陣ノ仰ヲ蒙ル上ハ。我向ハサル先ニ

合戰スル者モ。皆重忠カ一身ノ勳功タルヘシ。且先登ヲ志ス輩ヲ妨ンコト。本意ヲ失ハシメテ。我獨リ忠賞ヲ願フニ似タリ。唯不、知躰ニシテ。彼輩カ望ミヲ達セシムヘシトテ。敢テ成淸カ言ニ隨ハス。去程ニ彼七騎ノ輩ハ。終夜峯嶺ヲ越 遂ニ敵陣ニ打上リ、城戶口近ク攻付、面々ノ姓名ヲ名乘ル。城兵待モウケタルコトナレハ。國衡カ郎從下部ニ伴ノ藤八ト云ヘル。奥六郡第一ノ强力者一陣ニ進ミ。其外究竟ノ强賊等。我劣ラシト相戰フ。其隙ヲ伺ヒ 工藤小次郎行光ハ先登ス。狩野五郎親光ハ討死ス、伴ノ藤八ハ行光ヲ目カケ。馬ヲカケ寄セ。轡ヲ並ヘ相戰シハラク勝負決セサリシカ。藤八運盡テ行光ニ打負、終ニ首ヲ取レタリ。行光件ノ首ヲ鞍ニ付ケ。木戶ヲ指テ登ル處ニ 勇士ニ騎馬ヲ放レテ取合タリ 行光馬ヲ返シテ 何者ソト尋ヌレハ 藤澤淸近敵ヲ討ントスルナリト答フ、行光馬ヨリ飛下リ。淸近ニ力ヲ合セ。彼敵ヲ誅シテ後、兩人シハラク息ヲ休ム。其外淸重・千鶴丸モ敵數人討取ヌ。先陣木戶口ニ攻近付ハ 後陣モ同シク押寄タリ。賴朝卿ハ十日ノ卯ノ刻ニ、厚賀志山ヲ越ヘ玉フ 斯テ兩陣入亂レ。干戈ヲ交ヘ、矢石ヲ放テ相戰フ、就中畠山次郎重忠、小山兵衛尉朝政・同七郎朝光・和田太郎義盛・下河邊庄司行平・三浦介義澄・佐原十郎義連 加藤次景廉・藤澤次郎淸近等勇氣ヲフルヒ。身命ヲ不、顧 攻戰フ、呼號ノ聲天ニ響キ。戰爭ノ音地ヲ動カス、サレトモ國衡二萬ノ軍勢ヲ下知シ。入替々々 防戰甚キヒシケレハ、暫ク破ルヘシトモ見ヘサル所ニ。去ル夜小山七郎朝光、並ニ宇都宮左衛門尉朝經カ郎等ニ紀權守波賀次郎大友等以下七人安藤次ト云者ヲ。遠山ノ案內者トシテ面々ノ甲冑ヲ匹馬ニ負セ、密ニ御陣所ヲ忍ヒ出、伊達郡藤田ノ宿ヨリ 會津ノ方土湯ノ嵩鳥取越等ヲ越テ。國衡カ後陣ノ山ナル大木戶ノ上ニヨチノホリ。鯨波ヲアケ。矢ヲ放チケレハ。スハヤ搦手ヨリモ敵襲ヒ來ルソト云程コソアレ。陣中一同ニ騷キ立、隊伍亂レテ我先ニト逃走ル、國衡ヲ始メ。宗徒ノ者其謀ヲ廻スニ便リヲ失

ヒ防ヤ戰フニ力ナク、我モ〳〵ト落行ケル、折シモ秋ノコトナレハ、朝霧深ク立コメ、蒼苔露ナメラカニ、常磐木ノ陰闇クシテ敵味方ヲ分チ兼。互ニアヤフミテ打モラスモ亦多カリケリ。落行中ニ若武者一騎蹈止リ、其威風アタリヲ拂テ見ヘタリ。工藤小次郎行光是ヲ討取ント馳寄ル所ニ、行光カ郎等主人ヲ遮リ、押隔テ彼武者ト戰フ、敵ノ顏ヲ見ルニ甚タ少年ナリ。サレトモ心剛ニシテ力量拔群ナルコト。弱少ノ者ニ似ス。相戰フ良久シ其姓名ヲ問ヘトモ答ヘス、大勢落行中ニ蹈止ルコト、仔細アルヘキ者ナリト、遂ニコレヲ誅シケル。是則金剛別當カ一子下須房太郎秀方ニテソアリケル行年十三歳トソ聞ヘシ。又金剛別當秀綱モ、小山七郎朝光ト相戰ヒ、終ニ朝光ニ討レケル西城戶カ近親ノ郎等ニ、佐藤三郎秀員父子ハ大友左近將監能直・宮六傔仗國平ニ討ル、斯テ大木戶ヨリ落行タル歩武者共國分原鞭館ニ走リ來テ厚賀志大木戶敗軍ノ次第、一々ニ告ケレハ。泰衡大ニ驚キ周章玉造ノ郡高波々ノ城ヲサシテ引退キ。彼城ニ楯籠ル。鎌倉勢ハ八月八日ニ厚賀志ヲ攻破リ。同十日ニ大木戶ヲモ攻落ス、與軍後ニハ援兵ナク、前ニハ大軍襲ヒ來ル大將國衡モ進退ノ術ニ盡キ、東ノ方ヲ指テ落ケルカ、又出羽ノ方ヘト橫切レテ。出羽道ニカヽリ。大關山（是奧羽ノ境有耶無耶ノ關ナリ。無耶ノ觀音アリ。不手寺ト云。今笹谷峠トテ柴田郡金森村ノ中ナリ。一說ニ有耶ノ關ハ此所ニ非ス。）ヲ越ント走リ行。賴朝ハ諸軍ニ下知シテ逃ル敵ヲ競ヒ追フ。爰ニ和田小太郎義盛ハ。扈從ノ軍士ノ中ニアリケルカ、先陣ニ馳ヌケヌ重忠カ陣中ヲモ駈通リ。暮ニ及テ芝田郡大高宮（今ハ刈田郡金ケ瀨ニアリ、白鳥明神ナリ。日本武尊ヲ祭ル。）ノ邊ニ至リケレハ緋威ノ甲冑黑馬ニ乘リタル武者一騎、彼ノ宮ノ前路右手ノ田ノ畔ヲ走通ル。義盛ハヨキ大將ト見テ追カケナカラ聲ヲカケ。和田小太郎義盛ナルソ。返シ合セヨヤト呼リケル彼武者是ヲ聞轡ヲ引返シ西城戶太郎國衡ト名乘テ互ニ弓手ニ相逢タリ。國衡ハ十四束ノ矢ヲサシハサミ未タ弓ヲ引サルニ義盛十三束ノ矢ヲ放ツ。アヤマタス國衡カ甲ノ射向ノ袖ヲ

射通シテ腕(カイナ)ニアタリケレハ。國衡ハ疵ヲ痛ンテ開キ退ク。義盛ハ異ナル大將軍ヲ射タリト思慮ヲメクラシ。二ノ矢ヲ構ヘ相ヒラク。時ニ重忠大軍ヲ率ヒ來リ。門客大串次郎重親。國衡ヲ目カケテ馳向フ。國衡ハ義盛カ二ノ矢ヲ恐レ。重忠カ大軍ニ遮ラレ。道路ヲ差置テ田ノ中ヲ馳拔ントス。國衡カ乘リタル馬ハ高舘黑ト名付。其長九寸ニシテ。奥州第一ノ駿馬ナリ。大肥滿ノ國衡。常ニ是ニ乘テ毎日三度ツヽ平泉ノ高山ニ馳上ルト雖トモ汗ヲモ出サヽル程ノ名馬ナリケレトモ。今朝ヨリノ勞レト云ヒ。其上深田ニ打入タルコトナレハ。頻リニ鞭打ト雖トモ。陸ニ上ルコト不能進退途ヲ失ヒ居タル處ヲ。大串等是ニ利ヲ得テ。遂ニ首ヲ取タリケル。扨又刈田郡根無藤ニ城郭ヲ構ヘ。泰衡カ郎等金ノ十郎勾當八。赤田次郎等ヲ大將トシテ軍勢ヲ相添。堅メタル所ニ三澤安藤四郎。飯富源内以下ノ諸卒馳向テ攻戰フ。城兵モ勢強ク更ニ雌伏ノ氣色ナク。輙ク破ルヘシトモ見ヘサリケル。根無藤ト四方坂ノ中間ヲ追ツ追ハレツ。進退七ケ度ニ及ヒ。相戰ヒ。遂ニ金ノ十郎討レケレハ。殘兵悉ク敗北シ。勾當八・赤田次郎並ニ士卒卅人生捕レ。終ニ落城シタリケル。此所ノ合戰ニ勝利ヲ得タルハ。三澤安藤四郎カ兵略ナリ。同十一日ニハ頼朝卿船迫ノ宿ニ逗留シ玉フ。同十二日船迫ノ驛ヲ打出玉ヒ。晩景ニ宮城郡多賀ノ國府ニ著陣。又東海道ノ大將軍千葉介常胤・八田右衛門尉知家ハ。千葉太郎胤正・同次郎師常・同三郎胤盛・同四郎胤信・同五郎胤通・同六郎太夫胤頼・同小太郎成胤・同平次常秀・八田太郎朝重・多氣太郎・鹿島六郎・眞壁六郎等ヲ相具シ逢隈川ノ湊(今ノ荒濱ノ湊)ヲ渡リ。多賀ノ國府ニ於テ頼朝ノ御陣ニ參會ス。同十三日ニハ國府ニ逗留有テ。諸軍ヲシテ休息セシム。同十四日國府ヲ進發シ玉フ。泰衡ハ玉造郡ニ陣ストモ云。又國府中山ノ上物見カ岡ニ陣ストモ云。其說區々ナリト雖トモ。玉造ニ栖籠ルノ說可然トテ。頼朝卿ヲ始。諸軍勢多賀ノ國府ヨリ黑川郡ニ懸リ。玉造ヘ向ハレケル。又物見岡

ヲモ尋ンカ為ニ。小山兵衛尉朝政・同五郎宗政・同七郎朝光・下河邊庄司行平等ニ命セラレ、彼所ニ向ハシム。各彼閣ニ青寄取圍ム所ニ、大將軍ハ既ニ逐電シテ其所ニハ幕ハカリヲ殘シ、郎從等四五十人其内ニ殘リ留リテ防キ戰フトイヘトモ、墓々シキ事モナク、悉ク亡ヒタリ。時ニ朝政ハ大道ヨリ行テ、路次ニ於テ頼朝ノ御勢ニ參會スヘシト云。行平ハ玉造郡ノ合戰ハ次ノ事ナルヘシ、早ク此所ニ追參ルヘシトテ打立ケレハ、朝政モ玉造ヲサシテ急キケル。同二十日ノ卯ノ刻ニ、頼朝ハ玉造ニ到リ。泰衡カ籠リタル高波々ノ城ヲ攻圍ミ玉フ處ニ、泰衡ハ大軍襲ヒ來ル由ヲ聞テ、此所ニモタマリカネ、先達テ城ヲ出テ奥ノ方ヘ逃行キ殘リ留ル郎從等ハ、一戰ニモ及ハス。手ヲ束ネテ降參ス。此上ハ葛西郡ニ出テ、平泉ニ赴クヘシトテ、先陣ノ軍士三浦十郎義連・和田太郎義盛・小山四郎朝政・畠山次郎重忠・和田三郎宗實・其外武藏國ノ黨々ナリ。同廿一日暴風大雨ナリト雖トモ。頼朝ハ泰衡カ逃ルヲ追ヒ岩井郡平泉ヘ馳向ハル。其道路栗原三迫其外所々ニ於テ、泰衡カ郎從等要害ヲ構ヘ、鏃ヲ磨キ防戰スト雖トモ、大軍ニ攻圍マレ一々殘ラス落城ス、宗徒ノ者ニハ、若ノ次郎ハ三浦介義澄ニ誅セラレ、若ノ九郎太夫ハ所六郎朝光ニ誅セラル、此外首數級生捕三十餘人ナリ。頼朝ハ松山路ヲ經テ津久毛橋ニ到リ玉フ、梶原平次景高一首ヲ奉ル

「陸奥ノ勢ハ味方ニ津久毛橋。渡シテカケン泰衡カ首」。

頼朝其祝言ナルノ由感シ玉フ、泰衡ハ先達テ高波々ノ城ヲモ落行テ、蝦夷島ヲ心懸。猶奥ノ方ヘ走ル。八月廿一日ニハ平泉ノ門前ヲ通リケルカ、後ヘノ大軍事急ナレハ。暫クモ止リ得ス。從軍ヲ遣ハシ、火ヲ放タシメケレハ。東西一時ニ燃上リ黒煙天ニ冲リ、清衡以來甍ヲ並ヘシ、峻宇樓閣杏梁桂柱ノ構ヘ、累世貯ヘ置タル麗金寶玉其外府庫門牆ニ至ルマテ。一片ノ烟トナリ、忽チ灰燼ト失ニケル。廿二日大雨猶頻リナリト雖

トモ。賴朝ハ逃ル敵ヲ追テ。其日ノ申ノ刻ニ平泉ニ著陣。降續キタル大雨ニ。昨日ノ餘煙モ打シメリ。秋風蕭颯トシテ數町ノ燒土茫々タリ。爰ニ坤ノ隅ニアタリテ。一宇ノ府庫。餘煙ヲ遁レテ殘レルアリ。葛西三郎清重。小栗十郎重成等ヲ遣ハシ。是ヲ見セシメ玉フニ。藏ノ中ニハ沉木紫檀以下ノ唐木ノ厨子數脚アリ。其內ニ納ムル所ノ物。牛ノ玉・犀角・象牙ノ笛・金ノ沓・瑠璃ノ笏・蜀紅ノ錦・不縫ノ帷・玉幡・金鶴・銀瑠璃ノ燈爐等其外錦繡綾羅。其數アケテ記シ難シ。同廿五日評定有テ。泰衡ヲ捜シ求ンカ爲ニ。軍兵ヲ方々ヘ別チ遣ス。泰衡カ軍兵ノ存亡未タ分明ナラサレハ。猶奥ノ方ヘ追カケヘキノ由ナリ。同廿六日。賴朝卿ハ平泉ニ逗留シ玉フ所ニ。旅館ノ邊ヘ早明ニ匹夫一人來テ。一封ノ狀ヲ投込ミ。逐電シテ其行方ヲシラス　諸卒是ヲ怪シミテ其狀ヲ本陣ヘ捧ク。　則齊院次官中原親能ニ讀セラル。其表ニ曰。

進上鎌倉殿侍所。泰衡敬白。

伊豫國司事者　父入道奉扶持訖。泰衡全不知濫觴。亡父之後。請貴命奉誅訖。是可謂勳功歟。而無罪而忽有征伐。何故哉。依之去累代在所。交山林。最不便也。兩國已可為御沙汰之上者。於泰衡蒙免除。欲列御家人。不然者被減死罪。可被處遠流。若垂慈惠。有御返報者可被落置于比內郡邊。就其是非歸降。可走參。

右ノ趣ヲ載ニケル。是ニ因テ重々ノ沙汰アリ。土肥次郎實平カ曰。試ニ御返報ヲ比內郡（今出羽國比內郡是ナリ。ヒナイト訓ス。東鑑ニハヒウチ。）ニ捨置。竊ニ勇士一兩人ヲ隱シ置キ。其書ヲ取ニ來ル者ヲ搦メトリ。　泰衡カ有家ヲ尋ネ問レハ然ルヘシト云々。賴朝ノ曰。其儀ニ及フヘカラス。返書ヲ比內郡ニ置ヘキノ由申ス上ハ。軍士等ヲシテ彼軍中ヲサカシ求ムヘシト有ケレハ。面々是ヲ領掌ス。斯テ九月二日賴朝卿ハ泰衡カ隱レ居タル所ヲ尋ラレンカ爲ニ。平泉ヲ打立。岩手郡厨川ノ邊ニ赴キ玉フ。是先祖賴義將軍。貞任等追討ノ佳例ニ因テ彼所ニ至リナハ。必

定泰衡カ首ヲ得ヘシトノ思慮ナリ　扨亦泰衡ハ蝦夷島ヘ逃行ントぶシ。糟部郡（或人ノ曰。糟部ハ津部ノ誤ナリ。今ノ一戸・三戸・九戸迄ヲ古ヘヌカノブト云。）ニ赴ク　爰ニ比内郡贄ノ柵（今羽州比内ノ大舘是ナリ）ニ累代ノ家人河田次郎ト云者アリ。泰衡是ヲ頼ミテ隱レ居タル處ニ。河田忽チ君臣ノ義ヲ忘レ。數代ノ荷恩ヲ不顧。泰衡ヲ弑シ首ヲ取リ。頼朝ニ捧ケ恩賞ニ預ラント企テ。郎從等ヲシテ泰衡ヲ相圍マシメ。遂ニ是ヲ弑シケル時ニ文治五年己酉九月三日ナリ。歲三十五　同四日。頼朝志和郡ニ著陣　爰ニ當郡樋爪舘（舘跡今志和郡五郎沼ト云沼ノ東北ニアリ）ハ樋爪太郎俊衡入道カ居館ナリ。此俊衡ハ清衡カ四男和泉十郎清綱カ嫡男ナリ。然ルニ此度頼朝發向ニ因テ。所々落城スルノ由ヲ聞テ。去ル比舘ニ火ヲカケ一族ヲ引具シテ奥ヲサシテ落行。頼朝此由ヲ聞玉ヒ三浦介義澄・同十郎義連・同平六義村等ニ命シテ俊衡ヲ追討セシム　今日頼朝ハ陣カ岡峯ノ社ニ陣セラル。然ルニ北陸道ノ追討使比企藤四郎能員・宇佐美平次實政ハ。去ル八月十三日ニ出羽國ニ於テ　田川太郎行文・秋田三郎致文等ヲ討亡シ。悉ク出羽國ヲ打靡ケ。此所ニ來テ本陣ニ相加ル　今日諸軍勢ノ人數ヲ改メラルルノ所ニ。諸手ノ郎從等ヲ指加テ　軍士都合二十八萬四千人也　其勢野ニ塞リ山ニ滿。思ヒ〳〵ニ陣取テ。颯々タル秋風ニ吹靡ケタル白旗ハ。滿天ノ雲ニコトナラス。同六日河田次郎ハ抽賞ヲ蒙ラントノ主人泰衡カ首ヲ陣カ岡ニ持來リ。梶原景時ヲ以テ之ヲ捧ク。此旨言上シケレハ。義盛・重忠兩人ニ仰テ。彼首ヲ實檢セシムルノ上。囚人赤田次郎ニ是ヲ見セシムルニ　疑フヘクモナク泰衡カ首ナリ。則義盛ニ預置ル。又景時ヲ以テ河田ニ仰含ラレケルハ　汝カ仕業一旦功アルニ似タリト雖トモ。本ヨリ泰衡ハ我掌ノ中ノ者ナリ。何ソ他ノ武略ヲ借シヤ。汝忽チニ譜代ノ重恩ヲ忘レ　主君ヲ弑スルノ科八虐ヲ招クノ間　抽賞ヲ加フヘキニ非ス。且後輩ヲ懲シメンカ爲ナレハ。身ノ暇ヲ給ハル所ナリトテ。則小山七郎朝光ニ命シテ斬罪ニ行ハル。其後泰衡カ首ヲ梟セラル。其法皆康平五年九

月。頼義將軍貞任カ首ヲ梟セラレシ時ノ吉例也。同八日主計允藤原行政ニ命シテ、此度奥州合戰ノ次第ヲ記サシメ、吉田中納言藤原經房卿ヲ以テ。禁裏ヘ奏聞セラレケル。同十一日マテ七日ノ間。陣カ岡ニ逗留。殘黨樋爪俊衡入道息男太田冠者師衡・次郎兼衡・河北冠者忠衡。秀衡四男本吉冠者高衡。俊衡カ舍弟樋爪五郎季衡一男新田冠者經衡等。其外ノ殘黨。悉ク降ヲ乞テ皆陣カ岡ニ來リ低頭ス。同廿日此度軍功ノ輩ニ面々勸賞ヲ宛行ハル。同廿一日膽澤郡鎮守府ニ著御。當所八幡宮ノ瑞籬ニ奉幣シ玉フ。同廿三日平泉ニ於テ。中尊寺・毛越寺・無量光院其外堂社伽藍ヲ順禮シ玉フ。同廿七日ニハ安倍頼時カ衣川ノ遺跡ヲ歴覽シ。同廿八日平泉ヲ進發シ玉フ。路次ノ間ニ青山アリ。其名ヲ尋ネ玉フニ。卽チ田谷窟是ナリ。利仁將軍夷賊退治ノ岩室ナリ。斯テ十月朔日。再ヒ多賀ノ國府ニ著御有テ。此所ニ於テ陸奥國ノ郡郷庄園所務ノ事地頭等ニ其條目ヲ仰含メラレ。同月十九日ニハ下野國宇都宮ニ皈驛。御家人ノ面々酒肴ヲ御所ニ儲ケ置テ御皈館相待。同廿四日頼朝卿ハ鎌倉ニ皈城シ玉ヒ。營中ニ入テ則因幡前司廣元ヲ召シ。御消息ヲ吉田中納言經房卿。並ニ一條右衛門督能保卿ノ方ヘツカハサレ。奥州泰衡速ニ追討。奥羽平均セシメ。鎌倉凱陣ノ趣ヲ奏セラレ。四海一統ノ風トナリニケリ。

私ニ曰。頼朝卿奥州下向ニ付テハ。總家ノ故實其賞スルモノ多シ。或ハ又軍爭ニ臨ンテハ。義盛・重忠・國衡カ首ヲ爭フノ類。或ハ宇佐美實政・天野則景兩人生捕。由利八郎ヲ爭フノ類ヒ。頼朝是ヲ裁判アリシ趣キ。其外諸家高名勸賞ノ品々數件ナリト雖トモ。事繁キヲ恐レテ除之各東鑑・盛衰記・義經記・並近來平泉實記等ニテ細見スヘシ。唯右追討ノ卷中ニ、伊達ノ元祖常陸冠者爲宗ノ戰功アルニ依テ。泰衡滅亡ノ始終ヲ粗記スル者ナリ。又往古夷賊ノ履歴ハ。出羽奥州ノ山水陸驛目前ノ事跡ナレハ。其使ヲ求ルノ一助。且ハ伊達秘鑑全體ノ地理ニ預ル處

ナレハ、件ノ實記等ニ大略抜粹シテ其起原ヲ備フル者也、

伊達秘鑑巻之二終

伊達秘鑑巻之三

東奥仙府　燕々軒編集

伊達系圖

天津兒屋根命第二十一代

大職冠鎌足（正二位　内大臣）―淡海公（不比等）―房前―

魚名―鷲取―藤嗣―高房―

藤原政朝（花山院山陰従三位中納言　當家元祖）

仲正（攝津守）―安親（参議　従四位上）―爲盛（越前守）

定任（従四位上　大和守）―實宗（常陸守）―季孝（皇后宮少進）

家周（大舍人）―光隆（待賢門院　非藏人）

朝宗（高松院　非藏人　常陸介　始常陸中村居住　文治五己酉年始下ニ奥州ニ住ニ伊達信夫ニ伊達之始祖）

○宗村　中村常陸介　入道念西　後室願善禪尼建立光明寺號滿勝寺　康元元年丙辰十月二日逝去

為宗　常陸冠者　異本粟野次郎藏人大輔義廣卜有
文治五年泰衡追討依有軍功賜奥州伊達郡依之自常州中村移伊達此時朝宗倚存命故。以朝宗為伊達始祖觀音建立安置三十三体等身佛像出家後父之寺門前隱居建長三辛亥九月二日卒去法名覺佛
兄弟四人共仕右大將源賴朝卿

為重　次郎　文治追討有戰功

資綱　三郎　同

為家　四郎　同

○正依　伊達藏人大夫法名號願西護法庵始五ヶ寺建立
正安三辛丑七月九日卒去建立東昌寺

○宗綱　小太郎

○基宗　孫太郎

○行朝　四郎太夫　宮内大輔
法名　圓如是田村之緣也貞和四年卒

○宗遠　彈正少弼
法名定叟號喜見寺殿至徳二乙丑六月十二日逝年六十二

○政宗　大膳大夫　法名儀山圓孝號東光寺殿此代羽州長井庄手入應永二乙亥九月十四日逝　伊達中興嗜和歌達文武

○氏宗　兵部少輔　法名東孝
應永十九壬辰十月十七日逝

○持宗　大膳大夫　法名天海圓崇號眞常院殿
將軍勝定院殿義滿公之時上洛文明元己丑正月八日卒

○成宗　兵部少輔　法名㒒岩圓玖號西竜院殿
文明五癸卯十月十日上洛謁將軍常德院殿義尚公長享元丁未九月二十五日卒

邦宗　長谷五郎
留守殿美作守家持為嗣子改留守殿出羽守

景宗　伊達右京大夫
實大膳大夫尚宗次男

顯宗　藤五郎

政景　上野介
實左京大夫晴宗三男

宗利　武藏守
又宗俊

宗直　和泉守
又宗近

宗景　上野介

村任　上野介
實大守綱宗三男元祿八年八月自大守綱村二三萬石分地為直參任從五位下美作守後有故被沒收再當家之門下為別家

伊達織部

村景　伊達六郎上野介
村任依成直參宗景為養子相續留守殿家　實遠田涌谷城主伊達安藝

村七三男母故大守胤宗息女
伊澤郡大澤領ニ一萬餘石

○尙宗 大膳大夫　法名香山圓桂號護國院殿
從公方義尙公賜尙之一字
永正十一甲戌五月五日逝

○稙宗 左京大夫　法名知松院殿直山圓入母上杉貞實女
永祿八乙丑六月十九日七十八歳於伊具郡圓森逝　此
時丸西十餘郡任奥州探題

景宗 伊達右京大夫
備守殿出羽守邦宗爲嗣子

○晴宗 左京大夫　法名號乾德院殿保山道陌母會津盛隆之女
後號保安天正五丁丑十二月五日於杉目城逝

女子 相馬顯胤妻盛胤母盛胤妹田村清顯之室也
盛胤妹陽德院殿之母也

女子 會津盛氏母

女子 此子於八丁目卒年十七

義宣 大崎高兼聟於桃生郡辻堂死

早世 芝番

實元 伊達兵部大輔　十六歳時越後國主上杉定實依無
嗣子結養子盟約依之相傳實一字蒔絵竹雀太刀一腰
宇佐美長光雖然有横逆之者一揆蜂起依之不行越
後由伊達一門爲上後幕紋竹雀晴宗依所望遣
之

女子 須賀川輝行妻

女子 田村隆顯室

碩齋 伊達相換

女子 掛田俊宗妻

某 桑折四郎

鐵齋 伊達氏

廣好 村田氏

宗朝 村田市郎
民部鐵齋子

宗國 志摩

某 右近

某 善兵衛

東昌寺一風

早世 七郎丸

女子 相馬長門守義胤室

綱宗

元宗 亘理兵庫　法名元安
亘理兵庫通元爲嗣子相續亘理家

重宗 亘理美濃

定宗 伊達安藝
母相馬盛胤女

宗實 左衛門早世

宗重 信濃介　後安藝
寛文年中仙臺内亂之時爲幼君忠死

宗元 兵庫　安藝

勝定　黑木　上野

女　伊達和泉守宗直妻

女　伊達土佐守宗成妻

村元　安藝　始號兵庫基重

宗紹　亘理石見　本名亘理家相續

某　砂金又次郎

村泰　伊達彈正　伊達內藏宗親爲養子

女　柴田外記宗理妻

村定　兵庫　遠田郡涌谷領二萬餘石

女　石川宮內村弘妻

村景　伊達六郞繼水澤留守殿家

成實　伊達藤五郎　號安房守　仙道所々有戰功六十四而死

宗實　左京大夫　治部　又安房　實黃門政宗卿十一男

宗成　上佐　後安房　或宗氏

基實　安房　嗣繼基之基

宗常　安房　亘理郡領二萬餘石

輝宗　左京大夫　法名性山受心號歷範寺殿　天正十三乙酉十月八日於二本松高田卒歲四十二

親隆　岩城左京大夫重隆爲養子繼岩城家娶佐竹義重妹　常隆此腹也

常隆　左兵衛督　娶須賀川盛行女

女子　須賀川盛行室會津盛隆母

女子　伊達實元妻成實母

女子　會津盛興室盛興死後嫁盛隆

女子　佐竹義重室義宣母

女子　小梁川泥蟠妻

盛重　國分彥九郞　伊達宮內

玄性　法印住持竜寶寺　後住覺性院

政景　伊達上野介　高森雪齋　伊達顯宗爲嗣子慶長十三年二月三日卒歲五十九　號天祥寺殿桂岩宗昌

昭光　石川大和守　奥州石川城主石川修理大夫依無子爲聟世嗣

義宗　中務遠江守　又義光共

宗昭　民部　駿河　又宗敬共

女　伊達彈正宗敬妻

宗信　白石若狹　卯兵衛　白石若狹守宗玄爲聟養子相續白石家

宗弘　五郎助兒白石卯兵衛ニ爲嗣子ト

宗弘　白石五郎助兒宗信爲ニ嗣子ト早世無レ子

女　伊達五郎吉妻實大守忠宗末男宗弘早世無レ子ニ依テ若狹宗信爲ニ智養子ト同早世無レ子

基宗　實大守綱宗男　伊達式部　白石五郎助伊達五郎吉早世ス依テ其子伯父五郎吉爲ニ嗣子ト白石家苗跡相續後改ニ若狹村直ト

宗永　五郎助後若狹又近江實柴川備中男　登米郡寺池領ニ二萬石ト

宗弘　石川大和　母黃門政宗卿女

宗恒　中務　又宗信共　實伊達彈正宗徹男

定弘　宮内　後大和　伊具郡角田領ニ一萬餘石ト

政宗　從三位權中納言　陸奥守　小字梵天丸
母羽州山形城主最上修理大夫源義守息女
永祿十年丁卯八月三日生　天正五年丁丑十一歲元服號ニ伊達藤次郎政宗ト　同十一年癸未十五歲相ニ續家督ト
同十九年關白豐臣秀吉ニ任ニ從四位侍從ト號ニ羽柴越前守ト　慶長年中將軍家　同十三戊申冬改ニ羽柴ト賜ニ松平姓ト號ニ陸奥守仙臺少將ト　元和元乙卯年閏六月十九日任ニ參議ト宰相　寬永三丙寅年秋任ニ從三位權中納言ト　同十三丙子年五月廿四日卯上刻逝去　壽七十歲　法名號ニ瑞巖寺殿前黃門貞山利公ト　伊達中興ノ英將　好ニ和歌ヲ　達ニ

武事ニ晴ニ文事ニ　始羽州米澤城主　後奥州會津居ニ城ト　其後同國大崎岩手山城主　慶長六年冬自ニ岩手山ト移ニ同宮城仙臺城ニ　其後代々居ニ城之ト

秀宗　伊達遠江守　從四位侍從
豫州宇和島城主領ニ十萬石ト　萬治元年戊戌六月八日七十二歲卒　號ニ等學寺殿前遠州太守拾遺項山紹芸ト

宗時　左京亮　早世　母伊井兵部大輔直政女
承應二年癸巳二月五日卒　號ニ瑞雲院殿前左京兆浴山ト

宗利　遠江守　從四位侍從
後號ニ大膳大夫ト　寶永五年戊子十二月廿一日卒　號ニ大梁院殿前遠州太守拾遺貫山紹德ト

宗純　伊達宮内少輔
豫州吉田城主領ニ三萬石ト

宗保　能登守

女子　池田織部室

村豐　宮内

宗贇　遠江守　從四位侍從
實大守綱宗三男　寶永八年庚卯二月十八日卒
號ニ大玄院殿前遠州拾遺大山紹光ト

女子　眞田伊豆守信房室

女子　大相國家康公九男
德川上總介越後宰相源忠輝卿後中忠輝改易以後住ニ仙臺ニ居ニ西館ト

女子　早世

忠宗　從四位上右近衛少將　美陸奥守　童名虎菊丸
母征夷將軍坂上田村麿後胤奥州三春城主田村大膳大夫

清顯女慶長四己亥出生同十三戊申冬元服將軍秀忠公賜ニ諱字ヲ號ニ忠宗ト寬永三丙寅秋任ニ從四位上右近衛少將ニ同十三丙子七月相ニ續家督ヲ萬治元年戊戌七月十二日逝去壽六十歳法名號ニ大慈院殿四位羽林義山仁公ト武威追ニ父之跡ヲ母堂明暦二丙申年四月廿四日卒去號ニ陽德院殿榮庵壽昌ト

宗綱　伊達攝津守十六而卒忠宗同腹奥州三迫領主

早世　竹松丸忠宗同腹

宗清　伊達河内守奥州黒川領主寬永十一甲戌七月卒號ニ空岩長卯ト與ニ秀宗ニ一腹

宗泰　伊達參河守　從五位下
奥州岩手山城主領ニ一萬四千餘石ヲ寬永十五戊寅十二月廿三日卒號ニ實相寺殿若岩青公ト

宗信　伊達筑前守奥州岩ケ崎領主早世

宗高　伊達右衛門大輔　從五位下　奥州村田領主寬永三丙寅八月十七日卒法名凉山母柴田但馬女

女子　石川民部大輔宗光妻　宗昭共

宗實　伊達左京大夫伊達安房成實爲ニ嗣子ト正保元甲申七月十四日卒號ニ靈照院殿月山宗珠ト

女子　伊達左衛門大夫宗直妻

宗勝　伊達兵部大輔　從五位下諸大夫奥州一ノ關城主寬文十一年四月有レ故而流罪子孫斷絶

女子　丹州宮津城主京極丹後守源高國室

宗敏　伊達彈正

宗親　彈正
初大膳後號ニ內藏ト

宗氏　伊達安房　伊達宗實爲ニ嗣子ト

宗恒　石川中務　石川宗弘爲ニ嗣子ト

女　伊達安藝宗光妻

女　津田玄蕃景康妻

女　後藤大隅節康妻

村泰　主馬　彈正
實伊達安藝宗光男

早世　虎千代

女子　筑州柳川城主從四位侍從立花飛驒守源忠茂室

光宗　從四位侍從兼越前守寬永十六己卯春十三歳元服公方家光公賜ニ諱字ヲ正保二年乙酉長月八日於ニ武州江戸ニ卒歳十九法名圓通院殿要山闕公與ニ綱宗ニ一腹

綱宗　從四位下右近衛少將　兼陸奥守　小字巳之助丸
寬永廿年癸未誕生承應三年甲午十二月廿二日十二歳元服公方家綱公賜ニ諱字ヲ號ニ美作守ト萬治元戊戌年九月相ニ續家督ヲ正德元年六月四日逝去壽七十歳號ニ見性院殿雄山全威ト母堂台德院殿御養女實池田宰相源輝政息女萬治二己亥四月五日卒去號ニ孝勝寺殿日訊ト

宗良　從五位下田村右京大夫　後改ニ隱岐守ト
田村大膳大夫清顯　名跡三萬石分地綱基ノ幼而知レ國故爲ニ後見ト暫住ニ名取岩沼館ニ

宗倫　伊達式部寬文十庚戌二月十日卒歳二十一

宗規　伊達左兵衛嗣ニ岩城家伊達薩摩名跡ヲ

早世　五郎吉

宗房 伊達肥前 田手肥前跡式相續於黒川郡宮床領八千石

宗景 飯坂内匠早世

某 [illegible]之助後大守綱村爲嗣子知國

村房 肥前

建顯 田村右京大夫 因幡守

顯普 田村主馬

女子 攝津高槻城主永井日向守直只室

誠顯 下總守 實田村助太夫長子

女子 參州小島城主松平下野守信治室

綱村 從四位上左近衞中將 實陸奥守 小字龜千代丸 始號綱基綱之一字父同萬治二己亥二月五日誕生同二庚午二歳而受家督幼而知國牧伊達宗勝田村宗良爲後見享保四己亥六月二十日逝去壽六十二號大年寺殿肯山全提

女 内室相州小田原城主從四位侍從稻葉美濃守越智正則息女

宗贇 從四位下侍從伊達遠江守 同姓宗利爲養子

村任 從五位下伊達美作守

女子 立花彈正貞晟室

某宗 伊達若狹後改村直自石若狹爲嗣子

女子 伊達安藝村元妻

女子 中村日向妻

女子 三人

——以下略ス

田村家系

田村麿苗裔三十代

坂上義顯 田村大膳大夫

隆顯 安藝守 伊達晴宗妹聟

清顯 大膳大夫 四品 奥州三春城主清顯無嗣子病卒女子有一人嫁伊達政宗清顯死後以其甥爲家督稱田村孫七郎宗顯

氏顯 田村善九郎 兄清顯於軍中戰死

宗顯 孫七郎 叔父清顯爲家督

女子 伊達政宗室 田村御前ト稱ス政宗逝去ノ後落飾シ號陽德院奥州松島菩提所陽德院是也則雲居和尚供養

宗顯 孫七郎 善九郎氏顯長子清顯卒去之後日來伊達ノ撫育ニ因テ附屬セシム相州小田原陣政宗遲參ニ依テ太閤秀吉減其領地伊達信夫米澤等舊地而已於是宗顯今度田村ノ舊領ニ離政宗ノ於幕下終病死此故ニ田村家斷絶然後陽德院其血脈絶事ヲ傾ニ大守忠宗ニ告テ忠宗三男

陽德院正孫 宗良ヲ以テ相ニ續田村ニ在ニ巴車前花ヲ以テ爲紋

宗良 隱岐守 從五位下 右京亮
實大守忠宗三男始宗良伊達家臣鈴木修理繼ニ家督領ニ一萬石奥州栗原岩ケ崎ニ居住宗顯爲ニ嗣子之後萬治三年庚子六月將軍家ヨリ被召同九月武州ニ來同十一月廿五日初テ拜謁巖有院殿此時仙臺領之内三萬石於ニ名取岩沼配分從五位下ニ叙シ右京亮ニ任後改ニ隱岐守

宗永 右京大夫 後改ニ因幡守建顯
自是以下略皆伊達系圖之內ニ記ス

私ニ曰、或書ニ田村右京大夫宗永、母ハ伊達家臣山口内記重如娘號ニ於糸。去ハ於糸ハ先年政宗之息女西館上總介忠輝卿簾中也へ宮仕ス。其後天麟院同上之養子トシ。隱岐守宗良へ嫁セシム。是無類ノ美女ト云々。

葦名系圖

桓武天皇後胤三浦大介義明七男

平義連 佐原十郎 會津元祖
文治五年賴朝奉衛征伐之後賜ニ會津四郡代々領之

盛連 遠江守

經連 猪苗代大炊介 領ニ耶麻半郡

廣盛 北田次郎 領ニ河沼半郡

盛義 會津次郎左衛門 領ニ會津大沼一郡

盛時 佐原五郎左衛門 領ニ加納庄

時連 葦名六郎左衛門 葦名氏祖
耶麻半郡新宮ヲ領ス

泰盛 葦名三郎左衛門

盛宗 遠江守

盛員 遠江守
建武二年八月十七日中先代蜂起ノ時於ニ鎌倉片瀨嫡子與ニ高盛共戰死故次男以ニ若狹守直盛相ニ續家督

高盛 父盛員共於ニ片瀨戰死

直盛 若狹守
康曆元年自ニ鎌倉會津下向幕內ニ三年小舘ニ二年住居後移ニ小田山

詮アキ盛 彈正

盛政 修理大夫

盛久 三郎左衛門

盛信 左近將監
修理大夫盛政一男
兄盛久爲ニ家督

盛信　兄盛久爲ニ嗣子ー

盛詮　下總守
　盛高　修理大夫

盛滋　出羽判官
　盛舜　遠江守　盛高ニ男兄爲ノ盛滋家督

盛舜　兄盛滋繼ニ家督ー

盛氏　修理大夫　會津仕領ニ仙道長沼ー震ニ武威於近國ー東山道之勇將

女子　白河結城七郎義親室

盛興　左大夫　早世無ノ子岩瀨家嗣ノ之

盛隆　修理大夫　仙道岩瀨領主ニ階堂遠江守藤原盛義ノ子天正十二年十月十日爲ニ家臣大庭ニ被ノ弑

女子　義胤室實養子

早世　幼名亀王丸

義廣　左京大夫　三浦介　實佐竹義重次男號　同下四郎ニ因盛隆爲ニ聟養子ー天正十二年爲ニ伊達政宗ニ後ニ落會津領ー族ノ此斷絶

佐竹系圖

清和天皇第六皇子貞純親王六代後胤

源義業　新羅三郎源義光六男　常陸大掾清幹聟

昌義　昌義父舅氏ニ豫テ手ニ常陸國ー久慈郡佐竹郷今ノ天ノ領ス　神林也　始テ稱ニ佐竹氏ー昌義ニ有ニ六子ー嫡子以下略ノ之

義清

忠義　佐竹太郎　常陸之内領ニ七郡ー　忠義無ノ子弟四郎隆義ノ家督トス

隆義　四郎
　義政　太郎　有ニ仔細ー源賴朝ノ爲ニ害セラル此故ニ祖父忠義並弟秀義等金沙山ノ城ニ楯籠與ニ鎌倉ー合戰城兵堅守強防シテ不ノ陥然トモ秀義叔父義季反忠ニ因テ城遂ニ陥テ忠義戰死秀義ハ落去奥州花園城ニ退

秀義　四郎　後佐竹別當　兄義政滅亡之後奥州花園ニ退且後賴朝秀義ヲ害カ無理ノ知ヲ被ニ免許ー文治五年秋泰衡追伐之時秀義屬ニ賴朝ー有ニ軍功ー歸陣之後美濃國山田郷ヲ賜秀義美濃源氏山縣先生國政カ女ヲ娶テ妻トス

義繁　佐竹別當　後任ニ常陸介ー　承久之役隨ニ東兵ー先登有ニ首級之功ー

長義 二郎 任ニ常陸介ニ

義胤 彌次郎

行義 彦次郎 號ニ別當ニ任ニ左衛門尉ニ 二階堂下總守賴綱女ノ聟嘉元三年冬卒去

貞義 佐竹二郎 號ニ別當ニ 任ニ常陸介ニ 轉ニ遠江守ニ 兼ニ上總介ニ後剃髮シテ稱ニ上總入道ニ海上胤泰カ女ヲ娶 文和元年九月卒去

義敦 小次郎 任ニ左兵衛尉ニ 轉ニ刑部大輔 兼左馬頭ニ 文和四年足利直冬其父尊氏ト戰義敦屬ニ尊氏ニ有ニ戰功 延文三年足利義詮與ニ楠正儀ニ合戰義敦又屬ニ軍功ニ康安二年正月卒去

義信 大炊介 轉 伊豫守兼左馬介ニ 康應元年七月卒去

義盛 右馬頭 義盛有ニ一女ニ無ニ嗣因テ上杉憲定第二子ヲ以テ養テ女ニ娶テ爲ニ嗣子ニ應永十四年九月卒去

義有

義仁 上杉安房守憲定二男 右京大夫 屬ニ鎌倉持氏ニ有ニ軍功ニ關東合ニ列ニ八將ニ 寛正三年二月卒去

義俊 五郎 任ニ伊豫守ニ 文明九年十一月卒去

義治 某 延德二年四月卒去

義舜 キヨ 從四位上少將 兼右京大夫 永正十四年三月卒去

義篤 任ニ從四位下右馬權頭ニ兼ニ大膳大夫ニ 天文十四年四月卒去

義昭 某 永祿八年十月卒去

義昌

義重 任ニ常陸介ニ 於ニ仙道ニ與ニ伊達政宗ニ度々合戰天正年中江戸重道ヲ討テ常州水戸城ヲ陷振ニ武威ニ天下ノ六大將ト稱ス

義宣 任ニ從四位下少將ニ 後進ンテ轉ニ任左近衛中將ニ 兼ニ右京大夫ニ

盛重 會津城主葦名盛隆嗣子ト爲リ稱ニ葦名義廣ニ

義堅 爲ニ東政義嗣ニ

貞隆 爲ニ岩城常隆嗣ニ

宣家 爲ニ多賀谷嗣ニ

義繼 彦次郎

義隆 修理大夫 從四位上秋田少將 實岩城貞隆長子

満直 從五位下修理大夫 應永三十年八月三日卒。號ニ法祥院殿念叟觀公。

頼直 左京大夫。出羽國村山郡天童ェ移リ住ス。依之號ニ天童保國寺桃林源公。

頼勝 天童肥後守早世

頼泰 從五位上 天童治部大夫

頼基 從五位下式部少輔 駿河守

頼氏 從五位下式部少輔

頼繁 從五位下 治部少輔

頼尚 治部少輔

頼尭 和泉守

頼國 甲斐守

頼貞 兵庫守

頼久 甲斐守 又伊豫守 與ニ最上義光相戰。而於ニ天童城討死。

重頼 兵部 父頼久討死之時八歳。天童落而來ニ伊達政宗幕下。

頼長 信濃 為ニ仙臺家臣。

定義 修理

頼直 淡路 童名久藏 寛永四年丁亥十一月死。

成頼 彦三郎 右近 母福原將監女

頼清 平太夫

満長 上ノ山殿

頼高 東根右衛門佐 後河内守 出羽國村山郡領ニ東根。

頼種 鷹巣殿

頼治 東根右衛門尉

頼遠 右京亮 後河内守 村山郡山家ヲ領ス 移ニ山家成祖

女子 寒河江小四郎室

女子 楯岡伊豫守室

満家 長瀞殿ト云。號ニ禪念寺殿虎山威公。

満基 中野民部少輔村山郡中野ニ居住。

満頼 大窪右馬頭

満國 楯岡伊豫守 出羽國村山郡楯岡城主

○義春 右京大夫 此時始而從ニ足利將軍家。賜ニ諱字。後代ニ用之。文明六甲午年十二月廿八日卒去 號ニ龍門寺殿天眞元公。

頼家 式部大輔 全龍院

- 義秋 修理大夫 實義春弟 文明十二年十二月廿六日卒。號ニ瑞江院殿松岩榮閑一
- 滿氏 治部大輔 領ニ中野一 號ニ國成寺殿一
  - 義淳 右衛門佐 領ニ中野一 號ニ龍壯寺殿文饒春公一
- 義定 號ニ六勝寺殿雄山勝公一
- 義建 中野殿
- ○義守 修理大夫 實中野義淳男 天正八年庚寅五月十七日卒去、號ニ龍門寺殿月天林公一。
- 義光 出羽守 從四位少將 慶長十九年甲寅正月十八日卒去。號ニ光禪寺殿玉山道白公一。
- 女子 伊達左京大夫輝宗室政宗此腹也
- 義康 修理大夫 早世
- 家親 駿河守 從四位侍從 此時將軍家康公賜ニ御諱家之字一 元和三丁巳年三月六日卒去 三十六歲號ニ成光院殿安叟長久受改ニ傑山宗榮一
- 義俊 源五郎 本名家信後改ニ義俊一。元和八壬戌年有レ故ニ被レ沒ニ收出羽國一。於ニ近江國一賜ニ五千石一。寛永八辛未年十一月廿二日卒去。號ニ月照院殿單撤宗心一。
- 義智 最上刑部
  - 義長

岩城系圖

桓武天皇五代孫。常陸大掾國香次男。陸奥守繁盛嫡子。

- 平安忠 權守
  - 則道 岩城次郎大夫 御舘權太郎秀衡妹聟 始領ニ士奥州岩城一。
    - 忠清 次郎 ― 清隆 次郎 ― 師隆 太郎
    - 隆行 次郎 ― 隆守 次郎 ― 隆平 次郎
    - 義衡 次郎 ― 照衡 次郎 ― 照義 次郎
    - 朝義 次郎 ― 常朝 ― 清胤 次郎
    - 隆忠 下總守 ― 親隆 下總守 ― 常隆 下總守
    - 由隆 民部大輔 ― 重隆 左京大夫

親隆 左京大夫 實伊達晴宗二男

常隆 左京大夫 仙道爭戰之一將 天正十八年七月廿二日卒去

興隆 忠次郎 實佐竹義重四男

大崎家系

清和天皇十一代。鎭守府將軍陸奧守源義家次男。式部大輔義國男。

源義康 足利判官

義兼 上總介 ― 義氏 左馬頭

泰氏 平岩宮内少輔

家氏 斯波尾張守 下總國領ニ大崎郡ニ故家ノ名稱ニ大崎ト。

家宗 武衛尾張守 ― 家眞 次郎

高經 足利修理大夫

家兼 伊豫守 北國ニ下向シ官軍總大將新田義貞ヲ討テ、軍功他ニ異也。將軍尊氏賞之。出羽陸奧之被ル補ニ採題ト。光明帝綸旨並ニ金淵太刀ヲ帶シテ。延文元年奧州ニ下向。奧羽兩州ヲ令ニ平治ト。自ル是住居之地ヲモ家名ニ倚テ號ニ大崎ト。

直持 刑部大輔 ― 詮持 左京大夫 田村大越軍討死

滿持 左衛門督 ― 持詮 左京大夫

教兼 左衛門佐 ― 政兼 彦三郎 或高兼

義兼 左京大夫 或義宣 實伊達左京大夫稙宗二男。上洛シテ將軍義尙朝臣ニ拜謁。義之一字並包平大刀拜領

義直 左京大夫 ― 義隆 左衛門督 領ニ奧州大崎ト。

某 正三郎

南部家系

清和天皇十一代。新羅三郎義光五男。加々美次郎遠光三男。

∴源光行 南部三郎
文治五年秋八月。鎌倉右大將賴朝。奥州征伐之時。先陣軍功アリ。爲ニ其忠賞ニ。同國糠夫郡其外所々領ス。自ニ甲州ニ移ニ此地ニ氏號ニ南部ニ。

實光 南部彥次郎 ― 時實 但次郎 ― 政光 孫次郎

宗經 彥三郎 ― 宗行 彥五郎 ― 祐行 彥次郎

政連 彌三郎 ― 祐政 彥六郎 ― 茂時 右馬頭

信長 伊豫守 ― 政行 遠江守 ― 守行 大膳大夫

義政 庄司 ― 政盛 大膳大夫 ― 助政 與次郎

光政 彥三郎 ― 時政 彥次郎 ― 通經 彥次郎

信時 左衛門佐 ― 信義 修理大夫早世

政康 右馬頭 ― 安信 右馬允 ― 晴政 彥三郎

晴繼 彥三郎 ― 信直 大膳大夫 信濃守

利直 大膳大夫
南部森岡城代々住レ之。

二本松家系

鎮守府將軍、八幡太郎源義家九代。

∴源義純 畠山遠江守

泰國 畠山三郎 改ニ上總介ニ ― 高國 泰國孫 小太郎 上總介
奥州探題。居ニ住岩ケ崎ニ。

滿泰 上總介高國ヨリ四代 七郎 修理大夫
同國安積郡移ニ二本松ニ住レ此、後號ニ二本松氏ニ。

義國 七郎滿泰ヨリ六代 二本松修理大夫
滿泰以來二本松氏ヲ以テ稱號トシ。代々相ニ續之ニ。

義繼 右京大夫

伊達政宗ト挑戰。終ニ爲ニ伊達ニ滅亡。

義綱 右京　國王丸

二本松沒落以後蒲生家ニ仕、後加藤式部大輔明成ニ仕テ。後水野家之扶助ニヨル。

滿重 右京 ―― **義益** 七郎後右京

于今水野家ニ仕。

上杉家系

關東管領上杉安房守。從三位憲顯十代孫。

藤原憲政 上杉民部大輔　又修理大夫

關東管領　菊桐之紋家ニ勅許。

輝虎 上杉彈正大弼　本名長尾平藏景虎號ニ入道謙信。

實長尾信濃守平爲景次男。關東管領屋形號免許准ニ淸花ニ領ニ越後佐渡兩國ニ。

天文二十年ノ頃。鎌倉管領上杉修理大夫憲政。關東北條氏康ニ掠メラレ、合戰不能シテ上州ヲ發シ。越後國ニ來リ賴ニ長尾景虎ニ。景虎應之。憲政則上杉之嗣家ヲ讓ニ景虎ニ。依之自此時景虎長尾氏ヲ改メ稱ニ上杉氏ニ故ニ景虎上洛セント欲シ。既ニ於ニ鎌倉八幡宮ニ任ニ管領ニ祝之シテ號ニ謙信ニ。其ヨリ入洛將軍義輝公ニ謁見。賜ニ輝之一字ニ號ニ輝虎ニ。任ニ阿闍梨ニ。後元龜元年。甲斐國武田信玄兵ヲ發シ赴ニ駿州ニ。春三月ノ間滯留シ。隣國ヲ襲フ。依之相州ノ北條氏康、信玄カ猛威ニ恐レ、輝虎ヘ洞僧ヲ使シテ。附庸ニ屬センコトヲ達ス、輝虎兼日怨ミタルニ依リ。富田ノ於ニ大中寺ニ。氏康ニ對面、時ニ氏康七男北條三郎ヲ以テ。輝虎ヘ遣シ人質トス。輝虎悅ヒ育之シテ一子ニ定メ。己カ元名景虎ヲ讓リ。

景虎 上杉三郎　實北條氏康七男。

上杉三郎景虎ト號ス。其後謙信被任ニ權大僧都ニ。日本武勇之一將。與ニ武田信玄ニ爭ニ雌雄ヲ度々也。天正六年戊寅三月十三日。四十九歲ニシテ逝去。諡ニ不識院殿ニ。輝虎遺言シテ曰吾死シテ後必ニ三郎景虎ト、長尾喜平次景勝ト（長尾武藏守政景長子政景輝虎姉聟也。景勝ハ謙信甥也）兄弟ヘ。兩國ヲ可ニ割與ニト云々。

景勝 從三位中納言　彈正大弼　又越後守　始長尾喜平次　實長尾武藏守政景長子

謙信沒後。養子上杉三郎景虎ト。互ニ領國ヲ爭ヒ雌雄ヲ決ント欲シ、兩家割レテ及ニ合戰ニ。遂ニ景勝三郎景虎ヲ殺シ、伯父輝虎ノ跡ヲ相續シテ、越後佐渡二ケ國ノ爲ニ大守ニ。稱ニ上杉越後守ニ。其後關白秀吉公天下統治ニ至テ。天正十三年秀吉ヘ附屬シ。同十六年戊子五月廿三日。正四位下ニ敍シ參議ニ任ス。（元從四位下彈正大弼）號ニ越後宰相ニ。文祿三年甲午正月五日。敍ニ從三位ニ。同十月廿八日任ニ權中納言ニ。同四年右兩國ヲ替テ。奥州會津郡移ニ若松ニ。於ニ此地ニ領ニ百二十萬石ニ。石田逆亂以後。慶長六辛丑年八月。會津先領被減。於ニ羽州米澤ニ賜ニ三十萬石ニ。號ニ米澤中納言ニ。元和九癸亥年三月廿日六十九歲而逝去。

定勝 從四位少將　彈正大弼　始喜平次

正保二乙酉九月十日卒去。

綱勝 從四位侍從　播磨守

將軍家ヨリ賜ニ綱一字ニ。寛文三年甲辰閏五月七日卒去。二十七歲無ニ嗣子ニ。高家吉良上野介源義央長子。吉良三郎ヲ以テ爲ニ養子ニ。此時福島領十五萬石ヲ減セラレ。米澤十五萬石ヲ領ス。

女子 松平丹後守光茂室

女子 松平飛騨守利治室

綱憲 從四位下 彈正少弼 實吉良義央長子。

蒲生家並仙道軍將略傳

（）蒲生飛騨守氏郷ハ。藤原房前大臣六代ノ的孫、鎮守府將軍俵藤太秀郷ノ後胤ナリ。永祿十一年、織田信長江州佐々木ヲ攻ムルノ時、氏郷父兵衛大夫信郷、信長ノ味方ニ參リ。一子鶴千代（氏郷幼名）十三歳ナルヲ證人トシテ進ム。信長近習ニセシメ、奉公他ニ異ニシテ。天性發明ナリ。信長意ニ叶ヒ元龜元年信長越前發向ノ時。氏郷十五歳ニシテ筓ヲ合テ名ヲ勵ス、是初陣ナリ。其後濃州岐阜ノ城ニテ元服、其比信長彈正忠也。依テ忠ノ字ヲ授テ。蒲生忠三郎賦秀ト名付ノル。秀吉公ノ代ニ至リ。秀ノ字ヲ憚リテ氏郷ト改ム。元龜元年初陣ヨリ文祿四年マテ。氏郷自身ノ高名三十六ケ度ナリ。大閤ノ時氏郷ヲ羽柴飛騨守參議宰相ニ叙任セシメラル。始テ南伊勢五郡十二萬石ヲ領ス、其後數度ノ戰功アリ。大閤感賞ノ餘リ、奥州會津七十萬石ヲ賜。又奥州ノ軍功ニ依テ三十萬石。加恩ノ地合セテ百二十萬石也 文祿四年二月七日。有故而急死。（事ハ在ニ末卷）其子蒲生飛騨守秀行嫡子下野守忠郷早世。無嗣子ニ依テ會津領被滅、舍弟中務大輔忠知ニ松平氏ヲ賜リ。豫州於ニ松山城二十萬石 新ニ賜之。忠知亦無子。依テ終ニ斷絶シテ蒲生家之無遺跡。

（）相馬讃岐守顯胤ハ、桓武天皇之後胤代々平氏也 奥州小高之城ニ居住。顯胤ハ伊達稙宗ノ聟也。其子相馬彈正少弼盛胤、同嫡子長門守義胤、義胤ハ伊達輝宗ト從弟也。仙道戰爭之一將ニテ子孫代々領ス奥州小高中村等之地。

（）二階堂遠江守藤原盛義（先祖連綿共考之）奥州岩瀬須賀川之一城主 仙道爭戰ノ一將。天正九年七月廿三日卒去。會津盛興無嗣子ニ依テ、盛義ノ一子ヲ以テ盛興ノ爲養子、會津盛隆是也。會津ト伊達數々タルニ依

テ二階堂モ順之終ニ爲政宗ニ滅亡而岩瀬家斷絕。

○結城七郎藤原義親ハ奥州白河ノ城ニ居住依テ稱白河義親會津盛氏聟也。先祖ハ曆應年中南帝ノ勅ニ依テ國司北畠權中納言顯家卿ニ隨テ。奥州ヨリ攻上リ。伊勢國ニ戰死シタル結城上野入道道忠二十餘代ノ末孫ナリ。仙道一將ノ內也。太閤小田原之役。遲參ニ依テ白河領沒收セラレ。終ニ便政宗子孫仙臺ノ家臣トナル。

○九戶左近將監政實。津輕右京亮爲信共ニ南部家族之臣ナリ。政實爲信共逆心シテ。津輕右京亮ハ太閤小田原陣ヘ參向爲直參。南部ノ家族ヲ離レ。政實ハ南部信直ト戰フ。太閤東征ノ軍士九戶マテ押下政實軍破レテ終ニ亡フ無子孫。

右之外奥羽諸將繁多ナリト雖トモ。悉ク之ヲ求ルニイトマアラス。且ハ伊達家ニ對シテ無異亂ハ。除クモノ亦多シ。家譜家系モ亦其大略ナレハ。次第異同間々アルヘシ、見ル人宜シク考フヘシ。右ニ顯ス所ノ諸家ハ皆兩國戰爭ノ一將ニシテ。此書ノ數目ニ載スル所ナレハ。シハラク其系傳ヲ引テ記之者也

伊達秘鑑卷之三終

伊達秘鑑巻之四

東奥仙府　無々軒　編集

藤姓始書伊達累代武名並政宗和歌之事

夫治亂ハ猶相行陰陽極治則亂 極亂則治 故ニ伏羲易ヲ闡ヒテハ則盛衰ノ理ヲ示シ 聖人春秋ヲ作テハ則勸善懲惡ノ禁メトス 雖然人君其德薄ク 人臣其器微ニシテ 皆功利權謀ノ間ニ挾リテ 奸佞邪欲其國ヲ亡シ 其社稷ヲ傾ケ 患其禁メヲ犯スコト久シ 吾本朝人世既ニ經二千有餘歲而應仁天正ノ間 及一百有餘年天劍亂ヲ降シテ海內大ニ亂英雄如蜂ニ群リ豪傑如雲ニ發ル 五畿七道割分レテ諸將其境ヲ爭ヒ 一日モ兵革ノ響ヲ不聞ト云コトナシ 于爰仙臺中納言藤原政宗卿ハ 伊達家再興ノ雄將ニシテ 內ニハ文ニ賢ク 外兵略ニ精シ 故ニ能盛衰ノ理ヲ察シ 時ノ勢ヒニ隨テ 終ニ百萬石ノ國ヲ子孫ニ傳フ 抑先宗ノ連綿タル 正統ヲ得ルニ 人皇ノ當時天津兒屋根命ト申スハ 則春日大明神ノ御事也 昔不合尊第四ノ御子神武天皇 日向國ニ軍シ 東ニ發シテ夷賊ヲ征シ 大和國ニ始テ築王城有御即位テ號人皇 此時神孫天種子命執政ノ位ニ備リ 天下ノ政務ヲ司ラル 其後第三十六代皇極天皇ノ御宇 天種子ノ兒孫中臣鎌足ニ始テ神祇官ヲ授玉フ 舒明天皇ノ御子大兄皇子ニ親ミ 時ノ大臣蘇我蝦夷其子入鹿父子擅ニ驕奢シテ朝威ヲ輕ンシ 王法ヲ傾ケントスルヲ惡ミ 鎌足謀ヲ廻シ 大兄ヲ勸メテ入鹿ヲ討 蝦夷ヲ亡シ 逆賊ヲ退ケテ寶位ヲ穩カニセショリ 鎌足第一ノ臣トシテ 錦紫ノ冠ヲ賜リ 內大臣ニ任シ 朝威ヲ補佐シ 國政直ナリシカハ 四民豊ニシテ 萬々ノ和四海ニ滿ツ 然後天智天皇ノ御宇 鎌足ニ大職冠ノ官ヲ賜リ 中臣ヲ改メ 初テ藤原ノ姓ヲ授ケ玉フ（藤原ハ鎌足ノ生國大和ノ在名也） 鎌足ノ次男房前ノ大臣ヨリ六代花山院山蔭中納言政朝ト

申スハ、人皇五十三代淳和天皇ノ御宇、天長年中ニ出生数代ノ朝ニ仕ヘテ、五十八代光孝天皇ノ御宇。仁和ノ頃薨去シ玉フ。山蔭卿ヲ以テ當家ノ元祖トス。其十世非藏人朝宗ハ、武藏守ニ任シ。常陸國中村ニ居住有テ武將源頼朝卿ニ仕フ。其子中村常陸介宗村（後號ニ常陸入道念西）宗村ニ四男アリ。嫡子常陸冠者爲宗。二男爲重・三男祐總・四男爲家共ニ鎌倉ニ勤仕ス。文治五年ノ秋、頼朝奥州泰衡追討ノ時、爲宗兄弟相共ニ武將ニ供奉シテ陸奥ニ下向セシム。賊將西木戸太郎國衡・金剛別當秀綱等カ固メタル、大木戸・厚賀志等ノ柵ニ於テ及ニ合戰ニノ時、爲宗兄弟石那坂ノ砦ニ押寄。終ニ厚賀志ノ柵ヲ攻破リ。金剛別當ヲ追落ス（事ハ泰衡追討始終之部卷二ニ之卷）其勳功ニ依テ伊達・信夫ヲ爲宗ヘ下シ賜ル。然シテ頼朝奥羽征伐事終テ鎌倉ヘ還御ノ後、爲宗父子常州中村ヨリ、陸奥國伊達郡ヘ移リ。信夫ノ大森ニ居住。此時武藏守朝宗未タ存命タルニ依テ。是ヲ伊達氏ノ元祖トシテ。藤原ノ姓代々武功相續タリ、其後時移リ世變リテ、人皇九十五代後醍醐天皇御宇。元弘年中鎌倉九代ノ執權北條相摸守高時入道宗鑑ヲ滅シ玉ヒテ後、足利尊氏・新田義貞兩將軍威ヲ爭ヒ、天下盡亂レ。五畿七道合戰ノ街トナリ、人民ハ山野ニ迷ヒ。耕植時ヲ失ヒシカハ、餓死スル者道路ニ滿々タリ、其時奥州ノ國司北畠源中納言顯家卿。官軍ノ味方トシテ白河結城下野入道道忠ヲ以テ大軍ヲ催シ。都ヘ責上リ玉フ時伊達第七代宮内大輔行朝ノ嫡子彈正少弼宗遠モ。後醍醐帝ノ勅命ニ依リ、顯家ノ催促ニ隨ヒ都ヘ發向。園城寺ノ合戰ニ細川卿律師ヲ追落シ、智謀ノ譽レアリ。斯テ曆數ヲ經テ、百一代後小松院ノ御宇ニ至テ、畿内近國ハ兵革僅ニ靜カナレトモ邊土遠境更ニ穩カナラス。奸人國々ニ溢レテ邪欲ヲ擅ニシ、己カ國々郡縣ヲ諍フテ、搖動止時ナシ。此時伊達第九代目大膳大夫政宗ハ良將ノ器ニ叶ヒ。文以テ衆ヲ愛シ、武以テ無道ヲ威ス、好ンテ敷島ノ道ヲ嗜ミ風俗ヲ和ケ好惡患樂民ト共ニシテ、賞罰天理ノ儘ナリシカハ、家齊ヒ國治リ。士卒隨

ヒ寄キ。伊達・信夫本領ノ外、刈田・柴田・宇田・亘理・名取・宮城・深谷・松山・黒川郡マテ旗下ニ従ヒ、其上羽州長井ノ庄モ手ニ入、下長井ノ内西山ニ城塁ヲ築キ、暫ク此地ニ居城、是ヨリ威風盛ンニシテ其徳ヲ稱シ、隣國ノ諸將膚キ順フコト風ノ草ヲ偃スルカ如シ。一ト年羽州ノ境屋代縣在陣ノ節、折シモ秋ノ半ニシテ蕭々タル秋霧渓谷ヲ埋メタル氣色ニ題シテ。

山家霧　山アヒノ霧ハサナカラ海ニ似テ、
　　浪カト聞ケハ松風ノ音。

又其冬モ在陣アリテ。綿々タル素雪山澤ニ積レル氣色ニ題シテ。

山家雪　中々ニ九曲折（ツヾラ）ナル道タヘテ雪ニ
　　トナリノチカキ山里。

政宗生得好ニ和歌ニ世ニ達人ノ聞ヘアリ、中ニモ此二首感情淺カラサレハ、之ヲ都ニ上サレシニ。田舎ニハ如何カ斯ル風雅アラン。古歌ノ中ナント云ヘリ。或ハ又康平年中安倍宗任義家ニ生捕レ上洛ノ時、我國ノ梅ノ花トハ見ツレトモ。大宮人ハナニト云フラン」。斯ル無道ノ荒夷サヘ斯ク讀メリ。サモアラン哉ト。然ヽ取上ル人モナシ、政宗此事ヲ聞テ無本意コトニ思ハレ。重ネテ添歌ヲ送ラル。

書捨ツル藻鹽ナリトモ此度ハ　カヘサテトメヨ
　　和歌ノ浦人。

時ノ將軍勝定院義持公此歌ヲ褒美アツテ。奏聞ヲ經給ヒシ後、新續古今集ヲ撰レシニ、此二首ヲモ入ラレシト也。政宗衰年ニ及ヒ、應永二年乙亥九月廿四日卒去、或ハ十九年共 時ニ將軍義持公ヨリ。紺紙金泥ノ法華經ヲ送リ給フトテ。

武士ノアトコソアラメ敷島ノ、道サヘタヘシコ
　　トソ悲シキ。

朽ハテヌカサシトモナレ言ノ葉ノ、添テ書ヤル
　　法ノ花フサ。

ト詠シテ送リ玉フ、誠ニ黄泉ノ幽靈モ、如何カ其情ニ感セサランヤ。政宗ヨリ四代兵部少輔成宗、相續ヒテ

武威ヲ備ヘ是又和歌ヲ好ミ文明五年ノ冬（或ハ十五年共）上洛シテ將軍常德院義尙公ヘ謁ス。京都發足ノ節今道峠ヨリ洛中ヲ顧テ。

都出ル名殘ハ誰トシラネトモ。ヒカル丶モノトオモフ袖カナ。

此外風雅ノ聞ヘアリ是ヨリ嚮（サキ）應永二年。鎌倉ノ管領上杉金吾謀叛ヲ企。公方持氏ヲ襲ヒ鎌倉ニ猛威ヲ震ヒ八州ヲ併呑セントス。其時京都將軍義持公。王命ヲ假テ上杉一類ヲ追討シ。持氏鎌倉ニ歸館。其後永享年中ニ持氏奢ヲ擅ニシテ上杉憲實ヲ退ケシカハ。鎌倉ニ兵革起リ再ヒ爭戰ノ巷トナリ。京都將軍義敎公ト威ヲ爭ヒ終ニ義敎ノ爲ニ亡サル如是一族矛盾ヲサシハサミ。君臣禮義ヲ失ヒシカハ次第ニ將軍ノ威ヲ輕ンシ。結句義敎公モ都ニテ翼臣赤松滿祐カ爲ニ弑セラル。然シヨリ以來（コノカタ）天下瓦崩ノ如ク。恰モ戰國七雄ニ等シク動亂年ヲ追テ甚シ。故ニ諸國道塞リテ貢ヲ備フルコト不能。政傾キシカハ將軍家威勢日々ニ衰ヘ。名而巳ハカリト成ニケリ。百五代ノ皇孫後柏原院ノ御宇。將軍義植公ノ治世ニ當テ。伊達十四代左京大夫稙宗ハ智仁勇兼備リ。廉直ニシテ四民ヲ安撫シ賞罰正シカリシカハ。將卒其德ヲ慕ヒ。近鄉遠境幷（アハセ）テ四十餘郡ヲ領シ。武威ヲ東國ニ逞シフス。是ニ依テ近キハ首ヲ低シテ隨ヒ。遠キハ幣使ヲ馳テ交リヲ結フ。誠ニ伊達ノ中興ナリ。永正八年。武命有テ奥州ノ探題ニ補セラレ將軍家ノ覺ヘ他ニ異ナリ。同年六月。伊具ノ郡於丸森卒去。同十五代左京大夫晴宗。相替ラス家督相續シテ武名ヲ繼ク。此時ニ至テ天下イヨ〳〵擾亂シテ。矛ヲ振リ粮ヲ荷ヒ。朝暮旦夕死生ヲ不爭ト云コトナシ。永祿八年。時ノ將軍義輝公モ逆臣三好長慶カ爲ニ弑セラレ。御舍弟義昭將軍モ。花洛ヲ遁レ。漂泊シテ尾州ニ至リ。織田上總介信長ヲ頼ミ。三好ヲ亡シ、將軍ニ備リ玉フト雖トモ。國々ハ守護ニ順ヒ。公方ノ御領僅ナレハ。御心ニ叶フコトモナク。幽ナル體ニテ將軍ハ名而巳ハカリト見ヘニケル。伊達晴宗モ父稙

宗ノ如ク國政全カランコトヲ計ルト雖トモ。世ノ盛衰目前ニシテ父稙宗ノ器ニハ及ハサレハ。佞臣國中ニ蔓リ。君臣朋友ノ間ヲ斷ツ。古ノ賢主スラ言ヲ巧ニシテ欺ク況ヤ末世濁亂ニ於テヲヤ。是ニ依テ彼ヲ恨ミ此ヲ惡ンテ。黨ヲ結ヒ頭ヲ集メテ國中忽チ内亂シテ。一昨日マテ寢席ノ塵ヲ拂ヒシ近臣モ、少シノ恨ヲ懷キ忽チニ心ヲ變シ、昨日マテ味方ニ有テ忠ヲ盡セシ功臣モ僅ノ欲ニフケリ俄ニ旗ヲ飜ヘシテ背ク。隣國ノ諸將其虛ニ乘シテ境ヲ奪フ、晴宗嫡子輝宗ト心ヲ合サレ。彼賊臣等ヲ拂ント心肝ヲ碎キ、智謀ヲ廻ラスト雖トモ、敢テ恐伏セス剩ヘ邪臣ノ爲ニ迷ハサレテ。晴宗・輝宗父子ノ間隔リケレハ、一國忽チ二ツニ分レ。親族朋友死ヲ諍ヒ何レヲ敵。何レヲ味方ト定メ難ク、爰ニ亡ヒ彼所ニ討レテ。挑戰更ニ止時ナシ。誠ニ世ニ例シナキ汚名ヲ天下ニ殘シ、先祖ノ武名ニ瑾センコトヲ智アル老臣等ハ痛ミ歎キ君ニ諫メテ仁ヲ說キ、友ニ悟シテ義ヲ勸メ、心漸ク和シケレハ、親ハ子ヲ禁シメ兄ハ弟ヲ制シ年ヲ越ヘ日ヲ重テ、君臣ノ心一致シケレハ晴宗・輝宗父子ノ間モ和睦シテ賊臣ノ張本中野常陸助宗（或書ニ中村常陸又永野常陸共）誅戮ニ極リケレハ、助宗之ヲ聞テ忽チニ逐電ス其一族從類悉ク根ヲ斷テ、刑罰ニ行ハンケレハ國家自ラ治リ上下安堵ノ思ヲナス然レトモ頃年内亂打續四境騷動不斜此弊ニ乘テ領地ノ端々ハ隣國ノ諸將ニ掠メラレ、或ハ當家ノ幕下ヲ離レ。屬セシ所多カリケル其比爭地ノ隣將ニハ出羽ニ最上義光常陸ニ佐竹義重當國ニ會津義廣・大崎義隆・相馬義胤・二本松義繼・南部信直・九戸政實・岩城常隆・白河義親ヲ始メトシテ、其外田村・石川・鹽松・岩瀨・須賀川等ノ面々仙道ノ諸大將ハ皆伊達ノ親族タリト云トモ互ニ敵對怨讐ノ思ヒ絕サリケリ。

私ニ曰或書ニ伊達四代目藏人大夫政依ハ。甚タ佛法ニ皈依セラレ、一世ノ内ニ。東昌寺・光明寺・觀音寺・資福寺・滿勝寺以上五ケ寺建立ト云々、

田村氏先祖ハ奧州三春城主忠之輔庖丁

往昔後漢ノ靈帝三代ノ後阿智王ト號セシ人。人皇十六代應仁天皇廿年己酉數萬ノ兵ヲ卒シ。晋朝ヲ去テ初テ日本ヘ來ル、時ニ勅有テ大和國檜前ノ地ヲ賜フ、其子高貴王トテ晋朝ニ止リアルト云トモ、後年父阿智王ノ跡ヲ慕ヒテ本朝ニ來リ、則阿智王ノ家ヲ繼キ阿多部ト稱ス、其ヨリ末代ニ當テ田村麿ト云人アリ。武威我朝ハ云ニ不レ及、天竺震旦ニ其名ヲ震フ、其嫡子ヲ淨野ト號ス。按スルニ延暦年中奥州安倍高麿數萬ノ賊兵ヲ率ヒテ。都ヘ攻上ントシ奥州ヲ發シ。駿河國清見關ニ到リ。既ニ天聽ヲ驚カシム。故ニ田村麿征罰ノ宣旨ヲ蒙リ。東ニ向テ一戰ヲ遂。賊兵戰負テ高麿奥州ニ退ク、田村麿其後ヲ追テ、直ニ奥州ヘ馳下テ、仙道寺山鴻野原ニ陣シテ戰コト久シ、終ニ官兵勝利ヲ得テ、悉ク夷賊ヲ退治ス、去レハ田村麿奥州在陣ノ內、一人ノ妾アリ、皈京ノ後一子ヲ産メリ、其母類ヒナキ悪女タリ、終ニ是ヲ郷民ニ嫁ス。然ルニ其夫彼女ニ孤兒アルヲ以テ不審ニ思ヒ。彼赤子ヲシテ室田穗ニ捨ル、時ニ兩鶴飛來テ彼赤子ヲ取テ、則泉ノ峯ニ行、兩鶴是ヲ育ス。其邊リノ狩人泉ノ峯ニ到ルニ、幽然トシテ赤子ノ泣聲ヲ聞。狩人怪シキ事ニ思ヒテ、谷ヲ渉リ嶺ヲ分テ其聲ヲ慕ヒ、捜シ求ムルニ、古松ノカタハラニ兩鶴彼赤子ヲ愛ス、鶴ハ人ヲ見テ飛去ヌ、狩人ハ赤子ヲ得テ麓ニ皈ル。於レ此世人田村麿ノ實子タルコトヲ知テ郷民之ヲ養育ス。後彼赤子成長シテ鶴子丸ト名付。神武天皇五十一代平城天皇ノ御宇初テ上洛シ。父田村麿ニ對顏シ。即チ參內アリ、淨野ト號シ、此時奥州ノ探題職ヲ蒙リ、下向ノ後、仙道郡ノ內ニ城ヲ築キ。三春ト號ス、淨野卒去ノ後、鎭守山泰平寺ニ葬ル。天鶴聖子大禪門ト謚ス、此故ニ淨野ヨリ以來三春ヘ移リ。居住ノ面々誰ニテモ鶴ノ庖丁ナスコト不レ能トナリ。若不レ恐シテ庖丁スル時ハ。必ス其祟アリト云ヘリ。淨野ヲ以テ三春田村氏ノ始祖トシテ。三巴ト車前艸花ヲ以テ代々家ノ紋トス、

伊達實元上杉定實爲二養子一附竹雀紋之事

伊達左京大夫稙宗ノ後室ハ、上杉播磨守定實ノ女ニテ、其腹ニ男女ノ息アマタアリ、嫡男伊達左京大夫晴宗是ハ別腹。會津盛隆女ノ腹也。二男大崎左衛門督義宣。三男兵部少輔實元。四男桑折松鶴丸早世。其外ハ女子也。然ルニ實元（政宗ノ大伯父）祖父母方上杉定實嗣子ナキニ依テ養子ノ約アリ。依ニ實ノ字ヲ授ラレテ實元ト號ス。其上ニ宇佐美長光ノ太刀ト竹ニ雀ノ紋幕ヲ讓ラレケリ。斯テ實元越後ヘ行ント。其用意有之處ニ、伊達一族ノ内横逆ノ者アッテ。晴宗ト嫡子輝宗ト父子ノ間ヲ押隔テ、様々騒亂ノ事有テ、終ニ其本人ヲ誅スルノ間、シハラク父子ノ間不和ナルニ依テ、實元モ兄晴宗輝宗トノコトニ紛レ、終ニ養父上杉ノ許ヘ不行シテ伊達ノ内信夫ノ郡大森ニ居住ス。然リト雖トモ實元舊約ノ變セス、祖父定實ヨリ讓リ受シ實ノ字ヲ名乘、最モ竹ニ雀ノ紋幕ヲ以テ子々孫々ニ傳ヘリ。其後舍兄晴宗件ノ紋ヲ乞ヒ請實元ニテ、終ニ當家ノ紋トナス。故ニ伊達家此時ヨリ今ニ到リ、竹ニ雀ノ紋ヲ付來レリ。其竹ノ根ノ方ヲハ伊達家ニ用ヒ、又其竹ノ末ノ方ヲハ上杉家ニ用ユ。伊達上杉兩家ニテ竹ニ雀ノ紋付ル様ノ違ヒアリヤ。同シカラスト云々。

或云竹雀之事、伊達・上杉兩家ニ用ル事、上杉ハ勸修寺家ノ流ニテ竹ニ雀ヲ以テ爲紋、伊達モ又山蔭ノ後胤ニシテ同竹ニ雀ヲ以テ紋トス。然レハ兩家共ニ竹雀ナリ。然ルヲ伊達家ニテ此紋ヲ用ルコト、晴宗ヨリ以前ハ中絶セラレタル故ニヤト云々。

葦名盛氏武名

奥州會津ノ領主葦名修理大夫三浦盛氏ハ、先祖三浦大介義明七男佐原十郎義連カ末葉。遠江守葦名盛舜ノ嫡子ナリ。代々會津ヲ領シテ武威ヲ逞フス、仙道長沼迄押領シ、佐竹・岩城ト合戰スルコト多年ニ及ヘリ。此時ニ當テ白河ノ結城義親・二本松義継・二階堂盛義・郡山・四本松・片平・阿子島邊マテ、皆盛氏ノ旗下ニ屬ス。此故ニ北條氏康・武田信玄モ使ヲ遣シ、親交ヲ結フニ至ル。其頃武田家ノ評判ニモ。丹波ノ赤井惡右衛門、

江北ノ淺井備前。會津ノ葦名盛氏ヲハ武將ノ器アリトヨク〱稱美アリシトソ。盛氏ニ一女一男アリ。一女ハ白河ノ結城七郎義親ニ嫁セシム。一男盛興ハ既ニ政務ヲ沙汰スヘキ程ナリケレハ、迺家督ヲ讓リ。其身ハ岩崎ノ巓ニ城ヲ築キ隱居所トシ、剃髮シテ止々齋ト號ス。マコトニ浮世ノ外ノ山住ナレトモ。折柄戰國ノ砌ナレハ。要害ノ地ヲ占タリ。此城東北ハ、萬仭ノ石壁苔滑カニシテ下、碧潭ノ深キニ臨ミ、千尺ノ巖松枝簦ヘテ上・白雲ノ中ニ入 走獸モ蹤絶ヘ飛鳥モ翔リ難シ。西ノ麓ニ九折ナル徑道アレトモ、葛楓生茂リテ登ルニ行歩輙カラス。山下ヨリ西ノ方ハ小田ノ畔々打續キ。分内イト廣々タレトモ。底モハカラヌ深田ナレハ、馬蹄ノ立ヘキ所ナシ。南方ハ山ノ尾先續ケトモ。峯ヨリハ遙ニ下テ岨高ク路嶮シ如斯要地ナレハ輙ク可攻上術ナシ。盛氏此處ニ居住ヲシメ。靜カニ歳月ヲ送ラレケレハ。是ヲ見聞人毎ニ羨サルハナカリケル。然ルニ人界ノ八境。樂極リテ悲生スルノ習ナレハ、盛氏ノ嫡子左京大夫盛興。多年酒毒虛損ノ病ヲ患フルノ處。百藥ノ術既ニ盡テ。天正三年六月五日行年二十九歳ニシテ卒去セラレケレハ、盛氏老後ノ悲歎ヤルカタナシ 實ニ若木ハ枯レテ。老木ハ殘ル跡ノツレナサ 今更世ノ中恨シク思レケレトモ。斯テアルヘキコトナラネハ。境内ノ成敗沙汰スヘキ者ナケレハ。世ハ逆サマノコトナカラ。盛氏入道又黑川（今ノ若松）ニ立皈リ。浮世ノ勤ニ携ハリ 彼ヲ見是ヲ聞クニツケテ。涙ヲ添ル媒ト而巳ソナリニケル。セメテ寡ナキ頼ニトテ。盛興ノ後室ヲ養子トシ。岩瀨・須賀川ノ城主二階堂遠江守藤原盛義ノ一子ヲ聟トシテ家督ヲ相續セシメ。葦名修理大夫盛隆ト號ス。彼二階堂盛義ハ代々仙道岩瀨ノ領主ナリトイヘトモ。度々ノ戰爭ニ利ヲ失ヒ。兵滅シ勢竭テ。諸方ノ手當心ニマカセサルニ依テ。コレヨリ嚮永祿三年ノ春。一子僅ニ七歳ナリシヲ。盛氏ノ方ヘ人質トシテ之ヲ出シ。向後旗下ニ屬スヘキノ間。若シ他邦ヨリ敵兵向ンニ於テハ。即援兵ヲ頼候

トアリケレハ、盛氏ノ返答ニ、會津須賀川ハ多年ノ入魂ナレハ、御曹子ヲ遣シ置ル、ニ不及トイヘトモ、併一城ニ主タル人無英ナルハ、惡シケレハ二三ケ年モ預リ置指南致スヘシト返答シテ、子息盛興ト共ニ養育シ、其心ヲ様シ見ラレケルニ、聰敏ニシテ勇智アリシカハ。今此時ニ及ンテ養子ニセラレシトソ聞ヘケル

盛氏夢中之一句並卒去

斯リケル後盛氏五十九歳ノ秋、不思議ノ夢ヲ見ラレケル、何國ヨリ來レルトモ覺ヘス、其威風儼然タル老翁、盛氏ノ枕本ニ立ヨリテ曰。ソスレテヨ六十ニカケテ契シヲ、ト云上ノ句ヲ口號(スサミ)ケレハ。盛氏夢中ニトリアヘス、其行末ヲ頼ムコトノハ。ト附ルト見テ夢覺タリ、盛氏奇異ノ思ヒヲナシ、來年ハ命終ルヘキ夢想ナラント云レシカ、果シテ翌年天正八年六月十七日 六十歳ニシテ卒去セラル。一家中ノ諸臣薤露ノ歎ニ袂ヲ絞リテ、郊原一片ノ煙トナシ。瑞雲院殿竹巖大居士ト諡ス、然レトモ盛隆仔細ナク家督ヲ嗣テ、封内ノ臣民暫(シハラク)ノ歎キヲ忘レ、泰山ノ思ヒヲソ成ニケル。

佐竹義重武名

佐竹常陸介義重ハ、清和源氏新羅三郎義光ノ後胤ナリ、先年義重北條氏政ト不和ニナリ。下野國佐野ニ於テ合戰シハ〱アリ。互ニ勝敗午角ニシテ。氏政其志ヲ不得シテ。本國相州ヘ皈陣ス、自是義重武威ヲ東國ニ震ヒ、常陸下野ノ諸士各旗下ニ屬ス爰ニ常州水戸ノ城主江戸重道ト云者有テ。義重ニ不從。義重東ノ致義ノ勸メニ依テ 偽テ江戸ト和睦シ 兵ヲ練リ戰ヲ習ハシ、天正十八年、義重不意ニ兵ヲ出シ、久慈川ヲ渡テ進マル 重道驚テ勢ヲ出シ 防キ戰フトイヘトモ。不叶シテ敗走ス、佐竹勢逃ルヲ逐ヒ 渡那珂河、水戸ノ城ヲ圍ム。重道力竭テ自殺ス、義重其地ヲ、并(アハセ)領ス。勢イヨ〱大ナリ。水戸ノ城ニハ嫡子右京大夫義宣ヲ差置、其身ハ太田ノ城ニ住セラル。其後義重領内ノ國侍三十三人、仔細有テ義重ニ拔キシカハ。義重乃チ

太閤秀吉ノ命ヲ受テ、彼國侍ヲ誅戮シ、其領地ヲモアハセ領ス。此時義重領セシ所。南ハ下總ノ國境。西ハ下野ノ國境。北ハ陸奥國ノ内ニ及テ掌握ナリ、世ニ天下ノ六大將トゾ稱シケル。

最上義光武勇

羽州山形ノ城主最上出羽守義光先祖ハ。清和源氏多田滿仲ヨリ十四代斯波修理大夫兼頼。延文元年八月六日。奥州大崎玉造郡ヨリ奥州山形へ入部アリシヨリ以來。此所ニ四郭ヲ築キ。則居城トス。今山形ノ城是ナリ。其比ハ出羽按察使修理大夫ト號シ。最上ハ不殘兼頼ニ從ヒケル。然ルニ兼頼ヨリ九代修理大夫義守ノ嫡子出羽守義光ハ、武略ニ賢キ一將也。義光ニ六男アリ。嫡子修理大夫義康・二男駿河守家親・三男大藏大輔光氏・四男山野邊右衛門大夫光義。五男兵部大輔、六男内膳正ナリ。又古老ノ臣ニ。氏家尾張守光棟トテ智謀第一ノ者アリ。然リト雖トモ當時亂世ノ最中ナレハ。一家一族皆心ヲ變シ。功臣忠士モ代替リテ。面々己カ領々ニ引籠リ。君臣ノ間疎遠ニシテ。今更義光ニ從フ者ナカリケル。依之義光常々思ハレケルハ。我先祖ヨリ久シク當國ノ冠首トシテ。數代英名ヲ傳フ處、今ニ至テ勢折ケ武威衰ンハ口惜キコトナリ。何卒シテ最上ヲ無殘手ニ入。先代ノ武名ヲ受繼ント、若年ノ頃ヨリ朝夕是ヲ思ハレケル、義光生得勇氣烈シク。幼キヨリ軍旅ニ赴ク毎ニ其譽アリ。殊ニ力量人ニ超タリ。去ヌル永祿四年ノ秋。義光十六歳父義守ト同道シテ高湯温泉へ湯治セラレ。其序鷹狩シテ數日彼地ニ逗留アリ。然ル處ニ其近邊ノ盜賊共數十人。義守父子ノ旅宿へ忍入。財物ヲ掠メントシケルヲ。近習ノ者共知之テ出合テ支へ戰フ。義光眞先ニ進ンテ賊徒二人切伏。一人ニ引組テ何ノ仔細モナク刺殺ス、義守眼前ニ其驍勇ヲ見玉ヒ。大ニ喜ヒ。翌日飯館有テ。代々家ニ傳フル處ノ貞宗ノ刀ヲ取出シ。抑此太刀ハ我十六歳ノ時。楢下口ニテ大敵ヲ討取リ其場ニテ父義定ヨリ讓リ得タル太刀ナリ。然ルニ此度汝不慮ノ働キ。ソノ

リミ父カ同年ニ相當レリ。是ニ依テ其以前父カ例ニ順ツテ薫リ與フルトアリケレハ、義光之ヲ授リテ喜悦限リナシ。此ヨリシテ勇氣拔群ナルコト、近國ニ沙汰シケレハ、往々ハ遠近ノ諸郡ヲモ切隨ヒ、古ヘノ威勢ニ可立歸人ナリト、諸人閉美シケルカ。果シテ此代ニ由利・庄内マテ手ニ入ケリ。件ノ太刀ハ帶刀ト號シテ、後年最上家ノ重寶トス。義守ハ天正八年五月十七日七十歳ニテ卒去セリ。

義光討城取十郎

其頃最上谷地ノ城ニハ城取（白鳥）十郎長久ト云者、城主トシテ近郡ヲ切取。川西ハ（最上川迄）不殘手ニ入。義光ト歳ヲ等ノ輩ノ者ナリ。十郎常ニ思アルハ、如何ニモシテ義光ヲ亡シ、山形ヲ押領セント計リ。織田信長へ使者ノ上セテ青鷹一聯・駿馬一匹ヲ獻シテ曰、某ハ出羽ノ按察使斯波兼頼以來代々當國最上ノ守護ニテ候處、當時勢微ニシテ近將ニ掠メラル。久シク將軍ノ威名ヲ承ルト雖トモ、軍務ニ暇ナク、近頃本意ヲ背クノ由、偽テ達之。信長モ東北ハ未タ幕下ニ不屬事ナレハ、降ル者ハ附屬セシメ、兵ヲ集ルノ折柄ナレハ、再應ノ議談ニモ不及、殊ニ出羽ハ至テノ遠境ナレハ。聊カ其眞偽ヲ辨ヘ知ルコト不能、左モアラント思ハレケルニヤ、懇ニ返書ヲ賜リケル。義光此事ヲ傳ヘ聞、易カラス思ハレケレハ、家人志村九郎兵衛（後ニ伊豆守）ヲ使者トシテ、是モ青鷹一聯・駿馬一足、月山鍛ノ鎗百筋ヲ信長ニ獻シ、彼城取カ虚妄ヲ顯ンカ爲、最上累代相續ノ系圖ヲ高覽ノ爲ニ指登サル、折柄軍戰ノ砌ナレハ、諸國ノ通路自由ナラスシテ、越後路ヲ廻リ上着シ。先ツ山本彦三郎カ宅ヘ著テ、之ヲ旅宿トシテ機嫌ヲ窺ヒ。其趣ヲ達シケレハ、遠國ヨリノ使者、其上懇志ノ獻物種々、神妙ノ至リナリトテ、則九郎兵衛ヲ被召出、代々ノ系圖歴覽ノ上、仔細委シク聞玉ヒ、系圖ハ使者ニ返サレ、其回簡ニ最上出羽守殿ヘトゾ書レケル。其上使者ニモ引出物賜之。九郎兵衛面目ヲ施シ。恩ヲ謝シテ山形ヘ下着シ、右ノ趣キ具ニ演説シケレハ、義光限

リナク喜ヒ。此上ハ如何ニモシテ十郎ヲ討ントテ。家臣氏家尾張守ト評議セラレ、廼チ尾張守方ヨリ使者ヲ以テ、十郎カ許ヘ申遣シケルハ、累年近隣不和ニシテ國ノ通路自由ナラス、諸民困窮ニ及ヒ、難義實ニ此事ニ候。就夫自今以後ハ和睦セシメ、願クハ十郎殿ノ御息女ヲ義光カ嫡子修理大夫義康カ妻ニ申請度候トイト丁寧ニ云送ル。十郎ツク〲思案シケルハ。近年義光カ武勇ノ程傳ヘ聞クニ中々敵對難成。今度尾張守カ扱ヲ幸ニ、先ツ渠ト和睦セシメ。加勢ヲ受テ近隣ヲ打從ヘ。多勢ト成テ後。義光ヲ可滅ト思惟シテ、和談ノ儀尤願フ所ニ候、自今結ニ交緣ニ疎意アルヘカラスト返辭シテ。夫ヨリ互ニ使者ノ往來アリトイヘトモ。十郎未タ山形ヘ來リ見ヘス。依テ義光又尾張守ト策ヲ回ラシ、遽ニ病氣ト稱シ使ヲ谷地ヘ馳テ告テ曰、某病床ニ臥シ、醫療其驗ナク、日々ニ衰ヘユキ、斯ル風情ニテハ、中々十島ヲ不期ト覺候。アハレ願クハ存命ノ内長久ヘ對面トケ、國ノ仕置ヲモ頼ミ、愚息義康幼少ノ間ハ、家ノ系圖ヲモ預ケ置申度シ。其外直々申殘シ度仔細モ多ク候間神心不亂內、一刻モ早ク入來待入ルノ由、シカ〲ト云送ラル。十郎此由ヲ聞テ竊ニ悅ヒ、是天ヨリ我ニ最上ヲ與フルモノナリトテ、使ノ者ニ向テ應對シ。追付夫ヘ參向トケ。對面可致トノ返事ナリ、義光謀既ニ事遂タリト喜ヒ。潛ニ方便ヲ構ヘ各用意調テ今ヤ〲ト待居タリ。角シテ十郎長久ハ天正十一年六月七日。谷地ノ城ヲ出テ、何ノ用心モナク。上下七八十人ノ扈從ニテ。同日午ノ刻ニ山形ヘ參著ス、則門ニ入テ見回スニ、誠ニ義光ノ氣分以ノ外重シト相見ヘ、廣間ニハ譜代ノ諸臣列々ト並居タリ、大書院ニハ祈願所ノ成就院ニ護摩ノ壇ヲカサリ置セ。寢所ノ次ニハ一門不殘相詰、醫師陰陽師出入セリ、誠ニ氣色時ヲ待ツト見ヘタリ。十郎モ日頃ハ心武ク用心モ深カリケレトモ。此體ヲ見テ哀レニ心細クヤ思ヒケン。イト打シメリテ控ヘタリ、義光近習ノ者共出向疾々寢所ニ通リ。對面候ヘト云ケレハ、十郎モ事ノ

體僞リナラスト思ケレハ頓テ與ヘ通リツヽ義光ノ枕本ニ居寄聞ハケリノ樣體トハ存セス運拳ニ及ヒ、本意ヲ背キ候此上ハ何ニコラス思ヒ殘シ置ルヽコトヽモ具ニ含メラルヘシト。睦シ氣ニ云ケレハ。其時義光ヤヲノヽニ枕ヲ上背氣ナル風情ニモテナシ先以テ最期ノ對面コス事悦ヒノ餘ナリ某此程カリソメニ勞ハル心地候ヘシカ、定業必死ノ時至レルニヤ醫術ハヤ其甲斐ナク。斯弱リユキ侍レハ。今宵ノ程モ賴ミ難シ某死シタリト風聞セハ必ス他國ヨリ侵シ掠メン其時ハ我ニカハリテ軍卒ヲ指揮セソレ。防カセテ給ハルヘシ又修理大夫幼稚ノ間ハ最上累代ノ系圖ヲモ客ニ預ケ置候ハン義康成長シテ後ニ渡シ給ハリ候ヘトテ。何カハシラス一卷ヲ十郎カ前ニ出サレケル十郎ハ嬉シ氣ニ件ノ一卷ヲ請取。最早今ヨリ後ハ最上ノ主我ナリト。云ハヌ色ニアラハレケリ其時義光少シ居直ル體ニモテナシ床ノ下ニ隱置タル拔刀ヲ取ルヨリ早ク切付ケレハ十郎カ肩先ヨリ乳ノ下カケテ打コマレサシモ剛ナル十郎モ一急所ノ深手。一刀ノ敵對ニモ不及。二ツニ分レテ臥タリケル。時ニ定メ置タル合圖ノ大鼓二ツ三ツ拍ツト等シク廣間ニ居タル十郎カ家人等ヲ大勢ノ中ニ取籠メ一人モ不殘討留ケル、又螺貝ヲ吹立ケレハ十挺組ノ足輕大將熊澤主馬助・志村茂左衛門ヲ始メトシテ備ヲ段々ニ押出ス義光モ鎧取テ投掛馬引寄打乘。細谷内匠同權右衛門大沼八郎兵衛・高橋瀨左衛門以下ノ兵共ヲ左右ニ相具シ。三百挺ノ長柄ノ者ノ内ニテ三十人者ト號シ各獸ノ名ヲ付タル强力ノ者共ニ月山鍛ノ長身ノ鎗ヲ持セ都合其勢千五百餘人ニテ即時ニ谷地ノ鄕ニ打入テ成敗ヲソ下知セラル

寒河江廣基滅亡付葉柴勘十郎亡伏砲

斯テ義光諸勢ヲ率テ谷地ノ近邊寒河江ト云處マテ打入ケルニ寒河江ノ城ニハ、寒河江大膳大夫廣基ト云者居城シテ近邊ヲ押領ス其上某カ旗下ニ葉柴勘十郎トテ無双ノ者アリ。其比葉柴ト云所ニ居住シケ

ルカ義光十郎ヲ討テ谷地ノ城ヘ押寄ルト聞。城取十郎カ家人等ノ散亂セルヲ集メ、我手勢ニ指加ヘテ遮テ路次ニ出張シテ、義光ノ先手ヲ待受相戰フ。勘十郎無双ノ剛力驍勇ノ兵ニテ。自ラ眞先ニ馬ヲ進メ。山形勢ノ一陣二陣ヲ押破リ、山形領分中野ト云處マテ、攻來ルノ由注進シケレハ、義光案ニ相違シテ、俄ノ出勢ニテ加勢ノ莱柴ニ對戰シ。且谷地ヲ攻ルトモ。利アルヘカラストテ、一先ツ山形ヘ兵ヲ引入ケル。其後又勘十郎近邊ノ勢ヲ催シ、中野ノ邊ニ砦ヲ構ヘ。栖龍ルノ由告來ル、義光則氏家尾張守ニ評議有テ。先日中野ニ於テ勘十郎ヲ討取ンコトハ安ケレトモ。無双ノ兵ナレハ。何卒味方ニ靡ケテ。一方ノ大將ニモセハヤト思ヒ、態ト軍ヲ班シタリ。汝書簡ヲ以テ其心ヲ引テ招キ可見ト云々。氏家諾シテ則書ヲ馳テ其趣ヲ云送ルト云トモ、莱柴敢テ承引セス義光口惜キコトニ思ヒ此上ハ免スヘキニ非ス時日ヲ移サス討トメントテ。則山形領ニ觸渡シ。多勢ヲ卒シテ發向アル勘十郎モ小勢ニテハ對シ難シトヤ思ヒケン、己カ領分ヘ引退ク。諸勢ハ殘ラス山際ニ傳フテ引ケルニ、勘十郎ト家人須佐美舍人ト云十六歲ニナレル扈從ト共ニ引取ル。道筋ニ溝アツテ舍人ハ超兼タリ。勘十郎是ヲ見テカホトノ小溝越ヘ兼シコソ淺マシケレ。イテ越サセテ得サセントテ馬手ニ薙刀持ナカラ。弓手ノ脇ニ舍人ヲ挾ンテ、兩岸二間ニアマル溝ヲ安々ト飛コヱ。總勢ト一ニナリ須川ノ渡リニ著ケル。折節霖雨降續キ、河水常ヨリ高ケレハ。渡シ舟ヲ流サシト岸ニ引上置タルヲ、勘十郎一人ニテ安々ト押オロシ。身方ノ勢一人モ殘サス打乘セ、サシモニ鋭トキ河流ヲ押切テ向ノ岸ニ漕ツケ、川端ニ陣ヲ張テ。大音揚テ義光合戰ヲ望ムナラハ是ヘ來ルヘシト呼ハリケル、山形勢モ欺カレテ安カラス思ケレトモ流早ク底深ケレハ。舟ナラテハ渡シ難シ、兎角シテ日モ斜ニナリケレハ力及ハス義光山形ヘ皈陣アッテ氏家尾張守ヲ近付ケ。勘十郎ハ世ニ稀ナル剛兵ナレハ力戰ノ勝利叶フヘカラ

ス重ネテハ智略ヲ以テ討トルヘシ。其計ハ先ツ未明ニ河ヲ打コヘ備ヲ立。先陣左右ノ芝原ニ究竟ノ鐵砲二十挺伏セ置、此方ヨリ戰ヲ始メハ、勘十郎例ノ如ク諸卒ニ先立テ出向ン、其時アシラヘ、僞テ引退カハ。進ミ來ルハ必定ナリ。其時伏砲ノ場ヘオヒキ寄、眞中ニ取籠メ二十挺ノ鐵砲ヲ放ンニ、ナトカ中ラテ有ヘキ、尾張守可ㇾ然ト同シ。足輕ノ中ヨリ日比覺アル上手野浦源左衛門以下ノ利兵二十人ヲ撰出シ。右ノ趣キシカ〱ト云含メ。若アヤマツテ早討スル時ハ討洩スコト有ヘシ相圖ヲ定メ可ㇾ討トテ一々ニ手筈ヲ堅メ、其夜諸勢山形ヲ打立夜半過ニ中野ヘ著、窃ニ河舟數艘ヲ廻シテ卯ノ刻前ニ河ヲ渉リ、川向ニ備ヲ立、天既ニ明ントスル頃、諸軍楯ヲ捺イテ鬨ヲ咄ツトアケケレハ、葉哄カ陣ニハ昨暮引取タル山形勢ナレハ、今朝來ルヘシトモ不ㇾ測、其上俄ニ舟ノ催促モ事切レタレハ再陣ニ及ノトモ、四五日ハ間モアラント、諸勢怠リノ折柄ナレハ陣中俄ニ騒立テ取モノモ取アヘス

サレトモ勘十郎此度ハ是非義光ト手ヲ組ム程ノ合戰スヘシト思ケレハ、黒糸ノ鎧ニ星冑ニ半月ノ立物シタルヲ猪首ニ著ナシ、三尺餘リノ太刀ヲ横ヘ。黒馬ノ太ク逞シキニ黒塗ノ鞍置テ打跨リ。太刀打ヨリ手元マテ鐵ノ筋ヲ延付タル大薙刀ヲ提ケ、丸ニ一文字。其下ニ翔虎ヲ染タル旗眞先ニ持セ諸卒ニ先立テ進ミ來ル、山形勢ハ兼テ謀リシコトナレハ半軍ハ河ヲ渡シ、半軍ハ河ノ此方ニ備ヘ。其間ニ件ノ鐵砲ヲ伏セ置。既ニ先手取結ンテ合戰初ル程コソアレ、支ヘ兼タル風情ニテ二三町引退ク、勘十郎勝ニ乘テ。キタナシ山形勢。命ヨリ名コソ惜ケレ。返セ戻セト呼リナカラ。柄マテ鐵ニテ打延タル大長刀ヲ打フリ、一文字ニ追駈來ル待モウケタル伏卒廿餘人。相圖ニ順テ一度ニ鐵砲ヲ討掛ケルニ中リタリト見ヘテ勘十郎カ乘タル馬頻リニ躍上リ鞍壺ニ居リカネ、乘直シ〱テ引返ス義光遙ニ望見テ必定討モラシタリト思ハレケレハ一騎ニ馬ヲ馳テ件ノ場所ヘ駈來リ輕卒ニ向テ

汝等數挺ヲ揃ヘ置ナカラ、斯ハカリ目近キ敵ヲ何トテ討ハツシケルト大ニ怒リ罵ラル。野浦源左衛門ト云足輕進出。某星ヲ定メテ討候間。必ス中リ候ハントト云ケルカ、果シテ鞍ノ前輪ヨリ討抜レ其日ノ申ノ刻ニ死タリケル。義光聞之 天晴惜キ若者哉 寒河江ヲ根城トシ。最上川ヲ前ニ當テ防キ戰フナラハ。輙クハ討ルマシキヲ。己カ强勇ヲ憑ミ。ヒタスラ血氣ニ任セテ。與意ノ勝利ヲ不辨シテ我方便ニ乘リケルコトヲトテ惜マレケル、大將亡ヒケレハ。葉柴カ兵卒一戰ノ沙汰ニモ不及。或ハ降リ。又ハ散々ニ落失ケル。斯テ寒河江廣基ハ勘十郎討レタリト聞ヘケレハ、籠城叶ヒ難クヤ思ヒケン。其夜ノ内ニ城ヲ出、寒河江ヨリ五里西ニアタル貫見ト云所ヘ落行。松田彥次郎ト云者ノ處ニ忍ヒ居タリ。時ニ義光寒河江ヲモ攻落シ。貫見ヘモ諸勢ヲ差向。四方ヲ圍テ探シ求メケレハ 廣基今ハ遁レヌ運命ナリトテ、頓テ腹切テ果ケレハ。松田則介錯シテ密カニ其跡ヲ弔ヒケル。

伊達秘鑑卷之四終

伊達秘鑑卷之五

東奥仙府　蕪々軒　編集

於相馬正月十日鹿獵恒例之事

奥州相馬ノ領主相馬左衛門尉胤村ヨリ七代孫次郎胤弘ノ嫡子兵部大夫重胤久々病床ニ現サレ在城無心モ思ハレケレトモ未タ相續ノ家督ナケレハ亂世ト云大將ナクテハ一日モ郡中保チ難キ折柄ナレハ兎ヤ角ト心ヲ苦シメラルトコロニ、内室懷妊有テ無程男子誕生ナリ是ヲ孫次郎高胤ト號ス、高胤五六歳ノ時重胤ハ矢川原ノ奥五臺山ト云山中ニ入リ。山舎ヲ營テ籠居セラル。コレ病身ニシテ政兵ノ勤ヲ厭ヒ遁ナフルヽノ故也斯テ高胤成人ノ後、父重胤ヘ對面アランコトヲ思ハレケレトモ。重胤カタク禁止アリケレハ山中ヘ入ルコト不叶。空シク年月ヲ經ラレタリ、毎年正月四日ノ鹿狩ハ前ノ孫五郎重胤ノ代ヨリノ吉例ニテ是ハ定リテ小高ノ釘野山ニテ獵ヲ始テ執行アル例ナレハ。山ヲ改メテ狩スルコトモ成難ケレハ狩ノ序ヲ以テ推テ對面アルヘキヤウモナシ。此ユヘニ高胤思惟有テ。新タニ正月十日ノ鹿狩ヲ始メテ矢川原山ニテ執行アル、此遊獵ノ序テニ。高胤一人不圖忍ヒテ五臺山ノ山舎ニ入リ。對面アリシトナリ。此ヨリ已來一年ニ一度ノ對面ナリ　此獵高胤至孝ノ深志ヨリ出タレハ於今ニ斷絶スルコトナク恒例トハナリシナリ　重胤卒去ノ刻ミ　太田岩屋寺其頃ハ路頭ノ荒原ナリシカ　此所ニテ葬送ノ營ミアリ、則傍ラナル岡山ノ岩石ヲ切リ開キテ死骸ヲ納メラル。其墓寺ニ始テ坊舎ヲ營ミ、後ニ梵宇ト成テ岩屋寺ト號スト云々　又同隣村ニ非内ト云處ニ甥太郎、矢川原村ニ叔父太郎迚骸骨ヲ籠メタル岩窟アリ。是ハ文間苗字ノ者ナルカ。重胤山中ニ入リ玉フ時　二人共ニ所持ヲ捨テ遁世シ。重胤ノ跡ヲ慕ヒ　此所ニ安居ス、高胤皈參スヘキ旨、サマ〳〵命ヲ下サレケレトモ。固辭シテ終ニ不出山。然レトモ自愛ノ志深ク。助命ノ恩知ヲ施

サレ此所ニ住シテ臨終ヲ遂ケルトカヤ。其遺言ニ依リ死骸ニ武具ヲヨロヒ岩窟ニ納メタリ、然ルニ無道ノ者有テ井内ノ岩窟ヲホリ崩シ。件ノ武具ヲ盜ミ取テ他所ヘ持行賣リ渡シケルカ。俄ニ心狂亂シ。口ハシリ苦ミケレハ、其餘類オトロキテ新タニ武具ヲ求メテ入レ置タリ。骸骨少々今ニアリテ。蒔繪シタル太刀ノ鞘・花瓶香爐等・古物ニテノコリテ有リケルトソ聞ヘタリ。

北郷石之起請之事

北郷昔ハ千倉ノ庄眞野ト云或人ノ云、眞野ノ萱原トヨメルハ此所ナリトソ。行方(ナメカタ)郡ノ内ナリ。何レノ比ニヤ有ケン、岩松殿廸呂山源義純ノ後孫二本松ノ城主ト同族ナリシカ。此所ニ下向有テ居住セラレシ處ヲ今御所内ト云リ。此邊ニハ洛中近キ名跡名山ノ名多ク有之ナリ、此時名付置タルトナリ、又近所ニ田中ノ城トテ四方大池ニテ一方口ノ城アリ、コレハ昔眞野五郎ト云者。伊達ノ桑折ヨリ來テ居舘ス。足ハ國司北畠顯家卿ノ門族ナリト云々。然ルニ岩松殿臨終ノ砌。幼稚ノ息男一人アリ。又家臣ニ四殿ノ侍廸。新里・島蒔田中・中里トテ四人アリ。其外ノ諸氏五十餘人アリ、岩松殿及末期、四殿並ニ五十餘人ノ侍ニ遺言セラル、ハ我歿後ニ此幼稚ノ男子ヲ養育シ。千倉ノ大將トシテ。子孫相續ノ繁昌ヲ勤ムヘシ。各之ヲ賴ミ思フ所也。何レモ故鄕ヨリコレ迄隨附シ來ル其ヨシミヲ不忘。渠ヲ養育スヘシトナリ。四殿ヲ始メ各一同ニ答テ。君臣ノ因全ク異儀不可有ト、岩松殿喜悅不斜然ラハ誓約ヲナスヘシ、紙面ノ證ハ落失ノコトモアレハトテ石ニ誓詞ヲ書セラレタリ。此ヲ石ノ起請ト云フナリ又石ノ宮ト崇建セシモ此石ナリ岩松殿卒去ノ後。或時此少人ヲ逍遥ノ爲ニ立切浦ノ鞍掛山ト云フ處ヘ誘引セリ。四殿其外五十餘人ノ侍打圍ンテ彼處ヘ行キ。湊ニ下リ水ニ入リ、陸ニ上リ、思々ノ興ヲナシケルカ。此少人ヲ水ニ押入レ溺ラシテコロシケリ。斯テ眞野ノ里ヲ相馬ヘ附屬セシメ、各其本知ヲ其儘ニ安

堵シテ居住シタリ、澗世トイヘトモ斯ル不義不忠、淺マシキ次第ナリ 是ヨリシテ眞野ヲ改メテ北郷ト呼來レリ、元來相馬ノ領地ナリシカ元弘ノ亂ヨリ以來彼方此方ト紛亂セシカ、今又相馬領ト成タルナリ コレヨリシテ漸々ニ相馬譜代ノ侍モ入交リテ居住セリ 玄折何某（眞野在熊リ木舘）モ田中ノ城ニ有テ、岩松一族ノ者ナリシカ コレモ相馬ヘ附屬シケル。其後相馬兵部大輔顯胤ハ伊達ニ宗ノ婿（事ハイニアリ）ナリシカ 顯胤稙宗ヘ孝心ノアマリ 伊達七代マテ相馬ヘ違亂アルヘカラスト誓約アルヘシト望マル、ニ依テ、稙宗其望ニ應セラル、幸ニ件ノ石ノ宮アレハ、此石ニ誓詞ヲ書セラルヘシトテ。則所望ニ任セテ石ノ起請ヲ殘サレタリ。コレヲ後々マテ伊達ノ誓詞ト云傳ヘリ。其時岩松氏眞野ニ下向ヨリ幼息ノ代マテ僅ニ廿二三年在舘アツテ滅却セラレシトナリ。

標葉郡入ニ相馬於手裡ニ事

標葉郡ノ主ハ、藤原秀衡妹（號徳尼）智成衡四男標葉四郎隆義後孫ナリ 此成衡ノ元祖ハ、鎮守府將軍平繁盛息男出羽權守安忠ナリ、是ヲ海東平氏ノ祖ト云ケルトカヤ、其比標葉ノ大將ヲハ四郎清隆ト號ス、相馬ノ先主標葉ヲ取ント心ニ掛、度々合戰アリケレトモ不叶 泉田ハ標葉ノ稱族、殊ニ大身ノ者ナレハ、先ツ渠ヲ味方ニ引入アルヘシト集議有テ。稱々ノ謀略ヲメクラシ 終ニ内通ヲ求メ 其外標葉ノ六黨迄、威勇ノ士井士川・山田・小丸ト 浦熊、埴野等モ。皆相馬ヘ志アリケニ聞ハシカハ 高胤此時ヲ伺フテ兵ヲ催シ 標葉ヲ責ルコト度々ナリ、標葉ノ先主昔ハ泰平寺ノ向請戸濱ノ近所ニ居舘スト、其後權現堂町（今ノ高野町ナリ）此西ニ本條下條トテ舘アリ 此所ニ在舘ス 高胤是ヲ責ント出張有テ 藤橋ニ對陣アリ。此間度々迫合 鬪戰不可ニ勝計然ル處ニ高胤於ニ陣營俄ニ病死セラル、此故ニ一族家臣コレヲ隱密シ、先ツ此度ハ皈陣、重ネテ攻ラルヘシト 諸軍ニ觸流シ 遺骸ヲ携ヘテ小高ヘ皈陣ス。斯テ卒去ノコトヲ披露ス。追福ノ法事行レテ後 嫡男盛胤一

族諸臣ニ議セラレケルハ。標葉ノ事先主代々手ヲカケラルトイヘトモ。今ニ本望ヲ遂セス。就中亡父高胤此年頃武威ヲフルヒ。合戰及數度トイヘトモ。不幸ニシテ於軍營卒去セラル。吾若年ナレハ迚。其跡ヲ蹈ナカラナンソ亡父ノ志ヲ繼サランヤ。急キ兵ヲ發シテ標葉ヲ手裡ニ入ントナリ。又標葉方ニ相馬ヘ志ヲ通セシ者モアリト聞ケハ。若シ事延引ニ及ヒナハ。渠等カ心變センモ計リ難シ。急速出陣ノ用意スヘシトナリ。此時盛胤十七八歳ナリ。各評議申シケルハ。敵方小身ノ面々ハ大方相馬ヘ心ヲ通ストイヘトモ。大身ノ輩未タ難属。泉田ヘ内通申ト雖トモ。其色シカト見定メス。先ツコレヲ味方ニ引入 其上ニ調儀有テ然ルヘシ。泉田當手ニ属シナハ。標葉御手ニ入ンコト年月ヲ經ヘカラスト。衆議一同シテ先ツ泉田ヲ語フ計策ヲ廻ラサル。元來内通アリシ上ナレハ。味方ニ属シ可抽軍忠ト堅ク盟約シタリ。依之早速ニ陣フレ有テ軍兵ヲ催シ。泉田ヲ先驅トシテ不日ニ標葉ヲ攻ントス 標葉清隆ハ泉田相馬ヘ属スル上ハ。危難近キニアリトテ。則チ權現堂ヘ陣城ヲ構ヘテ柵ヲ廻ラシ。壘ヲ高フシテ諸士ヲ集メ。防戰守禦ノ備專ナリ。斯テ盛胤ハ先ツ行方郡ノ内山澤ノ城ニ首途アリ。是ハ先祖千葉ヨリノ隨臣青田氏代々居之。武勇ノ士ナルユヘ。何方ヘノ出陣ニモマツ此城ヘノ首途吉例ナリ。仍テ標葉行方ノ境山澤ノ城代ニ。カネテ青田ヲ居ヘ置ル、此時ノ城代ハ青田右衞門ト云 法名常澤。此常之字ハ千葉ヨリ讓受ル一字ニシテ。法名常ノ字。是非此字ヲ付來ルト云々 扨山澤ノ城ニ三日滯留有テ、 宇田郡北鄕中鄕小高ノ諸士馳集リ。諸勢都合調フテ泉田城ノ西川端ニ澁井ト云處ニ營備ヲカマヘ。 權現堂ニ向テ陣セラル 此間晝夜ノ野伏迫合隙ナシト雖トモ。折節雪大ニ降積リテ。道路一筋ノ外。人馬ノ通用不叶。互ノ陣間近シト雖トモ。責ヨスルコト不能。空シク日ヲ送ルバカリナリ。 然ルニ泉田カ甥何某小身ニテ標葉ニ属シ 此城ニコモリケルカ。是モ相馬ヘ通セシカ折節門番ノ足輕城門ノ鑰ヲ雪ノ上ニ取落シケルヲ 右

ノ何某其落タル鑰ノ跡ノ寸尺ヲトリテ。相馬方へ送リシカハ則其寸尺ニ鑰ヲ拵ヘテ、彼何某カ方へ密ニ之ヲ遣ス然シテ日限ヲ定メ、相圖ヲ堅フシテ。此甥ノ何某當番ノ時ヒソカニ件ノ合鑰ヲ以テ門戸開キ、夜中ニ相馬勢ヲ引入タリ城内思ヨラサルコトナレハ周章騷キフタメキソタル。館ニハ此間ヨリ祈禱ノ師ヲ入レテ毎夜祈禱ヲナシケルニ、此祈禱師モ兼テ相馬内通ノ者ニヤ有ケン。其夜館ニ有テ修法シケルカ、此動搖ヲ聞クト等シク處々へ火ヲ放チタリ折シモ風烈シカリシカハ、忽チ館中餘煙覆フテ前後ノ途ヲ失ヘリ、相馬ノ軍兵ハ詰リ〳〵ニ支テ圍ヲ作レハ、城内ノ兵士只十方ヲ失フハカリナリ、大將淸隆進退極リヌト思ケン自害シテ伏シケレハ隨臣共ニ自殺スルモアリ。又火ニ紛レテ落行者モ多カリケル於是標葉ノ諸士皆相馬ノ旗下ニ降ツテ忽チ盛胤ノ手ニ入タリ是ヒトヘニ泉田カ附屬セシ故ナリ。泉田カ甥ハ右ノ忠賞トシテ、藤橋村ヲ宛テ行ハル其子孫無斷絶今ニ至テ相續ス泉田ハ標葉郡ノ旗頭トナリ。相馬一族ニ准シテ、繋キ馬ノ幕紋ヲユルサレタリ。其外佐藤伊勢・郡山織部・富岡右京進・同美濃。是等ノ四人ヲ始標葉ニ於テ名アル者共、追々ニ附屬シテ。標葉郡一統ニ相馬領地ト成ニケリ。

相馬顯胤娶伊達稙宗息女ニ爲盛胤母去

盛胤ハ會津盛舜ノ甥ナリ然ルニ本妻ニ一子出生ナシ、妾腹ニ顯胤ヲ儲ケラル其頃諸方亂世ニア、一日モ大將ナクテハ知領保チ難シ誕生ヲ幸ニ顯胤ヲ惣領ニ立ラレタリ其ユヘハ盛胤病勞タルニ依テ、如此沙汰有アルトナリ顯胤生得長大ニシテ力量人ニコヘタリ家ノ重代シタミト云太刀ヲ帶シテ、只尋常ノ指添ヲ帶セルカ如シトカヤ尤モ大將ノ機モ備ハリ、諸士ヲ惠ミ、諸民ヲ撫ス慈愛賢慮專ラニシテ邪ヘノ事ナカリシカハ、郡中ノ上下賴母シク思ヒテ皆々崇敬シケリ。父盛胤平日一族諸臣ニ向テ申サレケルハ顯胤成長セハ祖父高胤ノ心操ニ似ンスラン。各予ニカ

ハラス守立養育セヨ。予ハサセル功モナク。皆父高胤ノ積功ノ餘慶ヲ以テナス處ナレハ。必ス予ヲ以テ物毎ニ比セス。只高胤ノ行跡ヲ學ハシメ。各用捨ヲ加ヘテ家ヲ保タシメ預ルヘシト。折々諸臣ニ頼マレケルトナリ。扨又伊達左京太夫稙宗ノ息女ハ。越後ノ國管領上杉定實ノ息女ノ腹ヨリ出生ノ女子ナリ。盛胤此息女ヲ顯胤ノ室ニ迎ンコトヲ懇望有テ旣ニ緣約ヲ定ラル。斯テ盛胤常々病惱アリケル故。伊達ヨリモ折々問疾ノ使者アリケル時。飯淵尾張ト云侍ヲ使者ニ差越サル。此飯淵ハ伊達ニテ武勇ノ名有テ隣境其カクレ無者ナリ。盛胤ニハ折節病苦ユヘ、使者ニ對面ナクシテ顯胤對面有シトナリ。時シモ顯胤ハ鹽噌ヲ調スル下タ屋ニ見物シテ居ラレケルカ、則此處ニテ飯淵ニ對面アル。是相馬家臣ノ存慮ニハ、飯淵ハ伊達ニテ勇功ノ名ヲ得タルコト、隣郡無隱名譽ノ者ナレハ。相馬ノ大將ハ幼稚ナレトモ、早弓箭ノ心掛有テ。鹽噌等マテニ心ヲ付ラルト褒美スヘシ。米鹽ハ軍用第一ノ物ナレハトテ。幸ト此處ニテ對面アルヘシト申シケルユヘナリ。サテ時宜畢テ飯淵ハ伊達ヘ皈リ。稙宗ヘ申シケルハ。殿ハ御娘ヲ捨玉ヘリ、今度顯胤ヘ對面申スニ自身鹽噌ノ奉行シ玉フ。彼體ニテハ相馬ノ大將ニハ如何。無心元ト悉ク誹謗申シケレハ。稙宗此言ヲ聞レ。尤トヤ思ハレケン。違變ノ心出ケルニヤ、盛胤ヨリ我病惱故。存生ノ内娵ヘモ對面セラレマシク存スレハ。餘事ノ不足ハ跡ヨリ追々ニモ調ヘ玉ヘ。姫ノ駕輿ヲハ早速ニ入レ玉ハルヘシト。度々使者ヲ差越サレケレトモ、兎角トシテ延引ナリ。此時ハ稙宗米澤ニ在城ナリ。又此息女ハ稙宗ノ一女ナリ。嫡子晴宗ノ御母會津盛舜ノ女ナレハ。稙宗ニハ相馬盛胤トハ相聟ナリ。始メ上杉定實ノ息女初妻ニ後レ玉ヒ。其後會津ヨリ呼トラル。此腹ニ晴宗誕生アリシナリ。仍テ晴宗トハ別腹ナリ。或時盛胤一族諸臣ヲ集メテ申サレケルハ。稙宗我病惱難治ト聞テ顯胤幼稚ナレハ跡々如何ナラント疑心起リケルニヤ、娵入ノ事度々申

遣スト雖トモ無二其儀一延引ニ及ヘリ、我存命ノ内ニ此嫌ヲ見スンハ死後ノ遺恨ナルヘシ、所詮今一度闘届ケテ於二難叶一ハ押寄合戰シ。稙宗カ首ヲ見ルカ。我家ヲ滅却スルカ二ツニ一ツ軍ノ勝負ニ任スヘシ我ヲ馬ニ搔乘テ各モ一命ヲ捨テ予カ遺恨ヲ晴シ。妄念ヲ弔フヘシトナリ、各申シケルハ御病惱快驗モ有ヘクハ、我々存寄ノ御諫モ可レ申カ。日々ニ重ク見ヘ玉ヘハ。今ハハヤ御遺恨ヲ散スルヨリ外ノ沙汰ハ有レ之マシ早々米澤ヘ使者ヲ被レ遣若シ於二違亂一ハ、使者米澤ニ逗留ノ内。若殿ヲ先ニ立レ米澤ヘ押寄。運ヲ鋒先ノ雌雄ニ任セ申サン、三郡ノ諸士卒ハ不レ及申。民百姓ニ至ルマテモ。此儀遺恨ニ存セヌハ有マシク候。然ル上ハ我々壽命惜ミ申事無レ之ト皆一同ニ云ケレハ、盛胤喜ヒノ色アラハレケリ、斯テ集議一決シテ則兩使ヲ定ム一人ハ青田左衛門是ハ顯胤誕生ノ時ヨリノ附人ナリ。青田清七ト云シ少知ノ者ナルカ今家臣ニ列ス。後ニ信濃ト云シハコレナリ。今一人ハ木幡主水是ハ關東相馬ヨリノ重臣ナリ兩使命ヲ受テ。則米澤ヘ參向シテ申ケル稙宗公緣約ノ儀。トヤ角及ニ延引玉フ。依レ之有無ノ決答ヲ承リ度旨、盛胤申遣ス處ナリ。我等身不肖ニ候ヘトモ、斯參向候上ハ。駕輿御供セスンハ再ヒ相馬ヘ不レ可レ皈、是ニ詰居リテ幾度モ訴訟可レ申候盛胤モ堅ク申付タリト底意有ケニ申切リシカハ。稙宗ニモ如何思ハレケン。戰國ノ役ニ紛レ。是マテ延引ニ及ヘリ盛胤ノ催促尤ナリ。用意不足ナレトモ。早速ニ駕輿入ラルヘシトノ返答ニテ。則其用意有テ急キ相馬ヘ輿ヲ送ラル。米澤ヨリモ輿添ノ臣二人（姓名不レ知）並ニ件ノ兩使供奉シテ米澤ヲ出立シテ小高ノ城ヘ到着ス折シモ盛胤病惱サシ重リテ即日ニ卒去ナリ。時ニ顯胤十三歳永正十年ノコトナリ。米澤ノ姫ハ十五歳ニナリ玉ヘリ、然ルニ一族家臣盛胤ノ死骸ヲ隱密シ寢所ノ板敷ヲ切落シ。死骸ヲ物ニ入レテ納置、寢所ハ常ノ如クニ仕ツラヘ其傍ヲ闇クカマヘ。病床ノ爲體ニ見セ一族一人床ニ伏置テ、卒去ノコトヲ披

露セス。未タ病臥ノ體ニモテナシタリ、斯テ伊達ノ與添二人ノ士ヲ病床ニ招カル。先ツ一族ヲシテ盛胤ノ口上ヲ演テ曰 遠路ノ供奉大儀ノ至ニ存ルナリ。先以祝儀相調滿足無他事。何事カ之ニ如ンヤ。盛胤今大病ノ折柄ナレトモ、此悅各ニ對面セスンハ死後ノ殘念ナルヘシ。依之見苦シケレトモ寢間近ク招ク處ナリト。念頃ノ口上ナリ。米澤ノ兩士御病中ト申シ。寢所マテ伺候仕ランハ憚アリト。再三固辭シ申ケレトモ。强ヒテ請シ入タリ 其時一族盛胤ノ聲ヲ似セテ。閣カリシ病床ヨリホノカニ兩士ニ詞ヲカケラレ。盃ヲ玉ハリ、献成リシ內ニ肴ト有テ。兩士ヘ腰ノ物ヲ引キ出セラル。兩士厚ク禮シテ退出シ。表ニ出テ別坐ニ候ス。其時一族家士取持テ。美酒佳肴數ヲ盡シ。饗應勸盃。逆順ニ酌メクリテ祝儀ノ一曲、古今同法ナリ。事終テ兩士寄宿ヘ退キ。米澤ヘ皈ラントスルニ、盛胤只今死去ナリト披露シ。兩士ヘモ告聞セタリ。兩士モ驚キテ其悔ノ詞ヲ演、則米澤ヘ皈リケリ。遺骸ハ新祥禪寺ヘ葬送ナリ。諸士上下ツトヒ集リ、各剃髮シテ葬棺ノ式執行アリ。新祥禪寺ハ相馬代々ノ菩提所ナリ。サレハ此時ノ事共始終木幡盛清一人ノ覺悟ニテ。如此計ラヒケルトナリ。盛胤始ハ定胤ト申シケルカ、會津盛舜ノ壻ニナリテヨリ盛胤ト改メラル。當代義勇ノ一將ナリ。

岩城重隆不義。顯胤遺恨之事

伊達ト相馬ト緣組有テヨリ後ハ。兩家益々純熟ノ中トナレリ。或時伊達稙宗ヨリ御聟兵部大輔顯胤ヘ、使者ヲ以テ申サレシハ。伊達・相馬今ニ至マテ父子ノ盟約アリ。殊更隣境ナレハ何コトモ申合スヘシ。萬ツニ心ヤスク存スレハ改メテ申入ルヽナリ。嫡子晴宗未タ獨住タリ。仍テ遠近ニ娵ヲ求ムレトモ似合シキ緣方ナシ。然ルニ岩城重隆ニ息女アリト聞及フ處ナリ。此似合シキ緣ト存スレトモ。此方ハ行程遙カニシテ家風ノ處實モ知レ難シ。相馬ハ隣國、常ニ通用モ多ケレハ。息女ノ有無ヲ御聞屆有テ。其上ニ伊達ヘノ緣約

執計ヒ玉ハルヘシ。何篇ニモ御差圖アラハ悉ク喜ヒ入ル處ナリト申越サレケル　顯胤ノ返答ニ委細承リヌ某若輩ナレハ一族家臣等ニ相談致シ萬ツ承屆是ヨリ可相達トナリ依之顯胤諸臣ヲ集メ稙宗ヨリ云越ナレシ趣ヤ内談アルニ各申シケルハケ樣ノ事古今仕損スレハ殃ノ端トナルコトナリ其上殿モ御承引如何ト存レトモ伊達ノ御事ハ辭退モ成難カルヘシ。縁方ノ事ハ此方ヨリモ御勸メ有ヘキ御中ナルニ況ヤアナタヨリ頼カケ玉ヘハ先ツ一往岩城ノ方ヲウカヽヒ玉ヒ首尾好カルヘクハ御取組アルヘシト。評議一同セリ。依之木幡出羽ヲ岩城ヘ指越サル。其頃ハ他邦ヨリノ所用何事ニモ使者來ル時ハ何レノ家ニテモ其取次スル者定リテアリケリ岩城ヨリノ諸用相馬ニテノ取次ハ木幡出羽ナリ。又相馬ヨリノ取次岩城ニテハ志賀塞虫ナリ是ハ岩城ノ家老一族ノ重臣ナリ仍テ木幡出羽塞虫カ許ニ行テ案内ニ平日參會ノ中ナレハ。塞虫則チ出向テ羽州今何故ニ來レルヤ。出羽答ヘテ申スハ。先ツ重隆ニ息女マシマスヤト問フ塞虫カ云息女一人有テ自愛他ニ異ナリ。何ユヘニ問ハルヽヤ出羽其時詞ヲ改メテ。夫ニ付顯胤某ヲ貴方マテ差越サレタリ其ユヘハ重隆ノ息女ヲ伊達稙宗請執リ玉ヒ。嫡男晴宗ヘ娶サレ度願ヒナリ依之主人顯胤ヘ媒ノ頼餘儀ナシ顯胤ハ稙宗ノ聟ニテ若輩ナリトイヘトモ雖辭重隆ヘ申入ラレ首尾可然樣ニ萬事貴方ノ才覺ニ任スヘシト。折入テ談シケレハ塞虫聞之此ハ是家ノ吉事我々マテモ悅ヒ入ルコトナレハ急キ重隆ヘ申開セ埒ヲ明ケ申サン。暫ク我宅ニ待レヨトテ。塞虫則登城シケリ。則右ノ趣重隆ヘ演達ス重隆ノ曰娘ヲ伊達ヘ遣スコト相馬ノ媒ト云々入祝着ノ事ナリ併テ伊達ハ大身岩城ハ小身ニシテ不相應ノ縁ナレトモ。稙宗無異議ニ於テハ約諾アリタキコトナリト塞虫申ケルハ。伊達殿ハ遠方ニテ岩城ノ事不委トモ相馬隣郡ニテ日々ノ通用モ有之委細存ノ前ニテ顯胤ノ御心ニモ過待レハ。コ

ノ媒モアル事ナレハ。其儀ハ御會釋ニ及フマシト申シケレハ重隆左アランニ於テハ何カコレニ可勝急キ應諾スヘシ但シ我今ニ無嗣子此娘ノ腹ニ子出生セハ嫡子ヲ此方ヘ送リ。岩城ノ遺跡ヲ繼セ預リタシトナリ此時ハ重隆内室ニ後レテ獨住ナリ寒虫重隆ヘ縁約ノ事シカト申シ合セ退出シ皈宅シケリ斯テ出羽ニ向テ委細ヲ語リ重隆承引致サレ此方ニ於テハ少モ無餘儀伊達殿御事ハ相馬殿ヘ任セラル、ナリ出羽カ曰。夫レハ心易カルヘシ。委細顯胤ニ申シ聞セ事宜シク計ヒ申スヘシ重隆ノ前ヘハ彌々頼入ルトテ一禮シテ皈ラントスルヲ。寒虫トドメテ是程ノ目出度コトニ三獻ナクンハ迚不取敢饗應シケリ斯テ木幡相馬ヘ皈リ顯胤ヘ委細ヲ演ケレハ顯胤悦ヒ則米澤ヘ使者ヲ以テ重隆ノ存念殘ル處ナク。應諾ノ趣キ具ニ演達ス稙宗大ニ喜悦有テ晴宗縁約ノ事御執計ヲ以テ相調ヒ其上重隆存念ノ趣キ。大悦不過之但シ入輿ノ事ハ暫ク延引玉ハルヘシ。其故ハ息女ノ閨館局等營作致シ不日ニ成就ノ上吉辰可申入此等ノ趣共ニ猶頼入リ存ルトナリ顯胤又岩城ヘ右ノ條々通達有テ首尾尤モ相トトノヒ米澤ヨリノ左右ヲ待レケリ然ル所ニ木幡出羽カ目ヲカケシ者小高ノ町ニアリシカ。商賈ノ爲岩城白土ノ市ヘ行ケルニ町ノ說ニ重隆ノ御娘ハ白川殿ヘ嫁娶ノ約極ツテ早々用意アリト云々。彼ノ者町人ニ問ヒケルハ重隆ノ息女二人マシマスヤト問フ。町人答テ姫一人ナリト偖白川殿ヘノ御縁約慥ニテアリヤト押返シ問ケルニ。タシカナル間此巷說憚ル處ナシト云々彼者内心ニ思ヒケルハ。岩城ノ姫ハ相馬殿媒ニテ。然モ我々旦那羽州御使ニテ固ク伊達殿ヘ契約アリト聞ク。何レニシテモ不審ナリ片時モ早ク立歸テ出羽ヘ聞セ可申迚。賣物ヲハ宿ノ亭主ニ頼ミ置岩城ヨリ小高迄其日ノ暮ニ走戻リ直ニ木幡カ屋布ヘ來リ臺所ヘ入ルニ在合タル者共何事アリテ草鞋カケニテ參リタルソト云彼者旦那ヘ直キニ申知セ度コトアリト。

偖ハトテ斯ト告ケレハ、出羽表ノ座鋪ヘ出テ彼者ヲ呼出ス。搦手シテ連出申ケルハ。岩城殿御姫伊達ヘト云果々ニ、出羽汝等カ口舌ニ申スコトニ非ルソト叱リケレハ。彼者云子細アレハ叱リヲ止メ。申スコトヲ聞玉フヘシ。偖御姫ハ白川殿ヘ御縁組相濟テ、近日ノ御輿入トテ用意最中ナリ、貴所ノ御使ニテ伊達ヘ御縁組事濟タリト承ルニ不審ノ沙汰ニ存シ。賣物モ不聞。トルモノモ取敢ス。ハセ參タリト云。出羽驚ヒテ左樣ノコトトハ不知。大人ノコト輕々シク汝等カ評スルヤト。始終モ不聞シテ叱シタリ。能コソ知ラセタル者哉。長途ノ場早々ニ來ルコト神妙ナリ。此事ハ沙汰スヘカラストテ、彼者ハ臺所ニテ酒食ヲ饗シ。出羽思惟シケルハ、賤シキ者ノ申ス處誠シカラス、卒爾トハ思ナカラ何レニ顯胤ヘ不達ハトテ、急キ登城シテ當番ノ士ヲ以テ申入ケレハ、顯胤廣間ヘ出ラレ、出羽何事ニ夜中登城シタルソトアリケレハ、出羽式禮シテ顯胤ノ膝近ク指ヨリ。事卒爾トハ存スレトモ萬一實事ニモ候ハハ評談ノ爲ト存シ。先ツ密ニ申上ルナリトテ、件ノ子細詳ニ演ケレハ。顯胤具ニ聞トヽケラレ笑ヒナカラ。重隆ホトノ人如何左アラン。ソレハ世俗ニ云娘一人ニ聟八人ト云ニヒトシ。然レトモ商人タリトモ。片端モ聞ヌコトハ唱談セマシキナリ。一向ニハ聞ステ難カランカ。出羽申ケルハサレハ今時ノ世ノ形勢。我レ勝ノ浮世ニ候ヘハ、昨日ハ今日ニ變リ、飛鳥川ノ瀬ニモレス。如何ナル契約モ頼ミカタシ。先ツ諸老臣ニ評談有ヘシト云ケレハ、顯胤ノ曰、物ノ分チモ見ヘヌコトニ事ケ間鋪センモ如何ナレハ。諸老臣ニ評談マテモナシ。小人二人町人一人商賣體ニ作リ。白土ヘ遣ハシ。猶モ眞僞ヲ聞届サセヘシトアリケレハ、出羽尤トテ則臺所ニ有合フ鰹節少々麻少々モタセテ。右三人ニ云ヒ含メテ夜中密カニ岩城ヘ遣シケリ。三人ノ者共一兩日有テ走カヘリ、シカ〳〵ト申ケルハ、白川殿ヘノ御祝言近々決定ノ沙汰ナリト申ス。扨何事ヲ以テ左ハ譯リタルソト問ハレケレハ、巷説

ハ勿論染屋・鍛冶屋木細工等マテ其事品ニヨッテ急ニ用意云渡サレ。專ラ此事ニ而巳取カヽリ候ト申ス顕胤聞之玉ヒ、大ニ仰天アリ。是案ノ外ノ事ナリ迚、一族老臣ヲ召シアツメ内談アル。各申ケルハ兎角寒虫カ方ヘ使者ヲ遣シテ虚實ヲ明白ニ聞届ケラルヘシ迚、江井河内ヲシテ能々聞届ケ參ルヘシトテ、寒虫カ方ヘ使者ニ立ラレタリ。江井急キ岩城ヘ行テ寒虫カ宅ニ至リ對面ス。寒虫カ曰。江井今何事ニ來ラレシソ。河内カ云、サレハケ樣々々ノ浮說ヲ被及聞。顕胤ヨリ其方ヘ虚實ヲ相尋ヘキ由ニテ。某ヲ使者ニ指越サルヽ所ナリ。寒虫手ヲ打テ驚キ。某努々左樣ノコト承リ不及。又ケ程ノコトヲ重隆モ吾ニ聞セヌコトモアルマシキトハ存スレトモ。御使ノ上ハ兎角重隆ヘ參リ承リ候テ。返答ハ可申。暫ク宅ニ待レヨトテ登城ス。折節重隆表ノ間ニアリ。寒虫指ヨリテ相馬ヨリ江井ヲ使者ニ差越サル。子細如是ナリ、偖々殿ハ誠ニモ左樣ノ不義ヲ思召立ケルカ。カ樣ノ大事何迚某ニハ

聞セラレスヤト。痛々シク申シケレトモ。重隆扇ヲ額ヘ杖ニ突キ。ウツムキテ善惡ノ挨拶ナシ。寒虫ヒタモノ繰カヘシ問掛ケレハ。茫然トシテ無計方樣體ナリ。コレハ重隆甚大酒ニテ。晝夜酒ニ犯サレテハ蕩々ト醉ニ沈ムコト兼テノコトナリ。寒虫責問シテ江井ヲイツマテ留置ルヘキ。白河ヘ緣組アラハ。其由ヲ御返答アルヘシト責ケレハ。重隆其時顏ヲ擡ケテ、白土與七郎カ云、米澤ハ行程遙遠ナリ。又郡々ヲヘタテタレハ聟ニ約シタリ共、何ノ用ニ不可立。白河ハ隣郡ノ事ナレハ。何事ヲ申シ合サレンモ便宜アリ。又出生ノ子出來タラハ乞取テ家督ニ立ラレンモ易キコトナリ。內々白河ヨリ御望ミモ有テ度々某シ方ヘモ通達アリ。仍テ次手ヲ待ツ處ヘ。伊達ヘノ御志ト承ル。以ノ外ノ思慮違ヒナリト諫ムルユヘ。我ハヤ伊達ヘ相馬ノ媒ニテ先約シタル上ハ。白河ノ緣組成カタシト云ニ。與七郎ソレハ不苦。白川、岩城一和セハ何方ヨリモ手ヲ不出差。變ニ順テノ仕樣ハ如何程モアルコト

ナリ。是非白河ヘ縁約アルヘシト勸ムルニヨツテ其意ニ任セ斯ハ計ヒシトノ返答ナリ。此與十郎モ一族ニテ寒虫ト兩輪ノ重臣。コレハ白河ノ取次ナリ。寒虫與サヘ嘆息シテ申シケルハ。是ハ存ノ外ナル御思案御家ノ御運盡玉ヘリ。相馬ヨリ木幡ヲ使トシテ堅ク定メラレシヲ今又白川ヘノ取組ケ樣ノ沙汰ハ下々ニモ無之不義ノソルマヒナリ今ニ見玉ヘ相馬伊達ノ南勢ニテ岩城ヲ責ラルヘシ。一家中義ヲ存ル諸士某ヲ始メ不義ノ大將ニ忠戰申ス者不可有。岩城ノ滅亡此時ナリト申捨テ退出ス。惜江ノ非ニ委細申シ聞セ此上ハ力ラナシ某全ク不知トコロハ追付ケニ知レ申スヘシ迚江井河內ハ返シケリ。顯胤聞之。重隆ノ無分別不及言語。相馬ヲハ何ト成ント思テ斯クハ不義ヲ擧動ケルソトテ其後別ニ詞ナシ。寒虫ハ日ヲ經スシテ妻子ヲ引連レ岩城ヲ立除キ。小高ノ城下ヘマイリタリ。相馬ニ止マルヘシト。顯胤色々止メラレケレトモ固辭シテ。奥ノ大崎ヲ心カケテ一兩日小高ニ在テ出立シケリ其時寒虫小高ノ城下ニ。大光院ト云山伏ノ所ニ寄宿セシカ。男子ヲ一人此山伏ノ子ニトラセケル養育シテ聟ニシタリ。今ニ相馬ニ志賀名字アルハ寒虫カ子孫ナリトソ寒虫カ山伏ニ與ヘシ子ハ。山伏ニスヘカラストテ。顯胤之ヲ召出シテ扶助ヲ與ヘ。別ノ者ノ子ヲ一人大光院ニ養育セシメラル大光院ノ末今ニ標葉郡ニアリト云々。

岩城相馬合戰附伊達晴宗娶重隆息女事

岩城ト伊達ノ縁組ハ。大永四年顯胤十八歲ノトキナリ或時顯胤。江井河內・岡田攝津守兩人ヲヨンテ申サレケルハ。此間ハ徐リ徒然ニクラシツ。原野ヘ出テ鷹ヲ遣フヘシ騎馬兩人ノ外ハ無用タルヘシ。其外ハ不斷ノ者供スヘシ又原ノ鷹捎ニ小屋ヲカケヨ。終日慰獵アルヘシトナリ。兩人畏ルトテ則チ其事ヲフレテ青芦ヲカラセ。掛小屋ヲ掛邊リヲ圍ヘ。下ヘモ敷テ近邊ノ藥性寺ヨリ疊ヲ借テ居間ヲ設ケ。新シキ吳座ヲ一マイ其上ニ敷テ用意シタリ。翌朝顯胤夜深ニ

城中ヲ出馬アリ。大田ノ岩屋寺ノ後ニ掛上リテ、鷄二ツ翕セ。直ニ小鷹掛(ガケ)ヘ來ラレケレハ、皆々晝ノコト、油斷シテ居タルニ。不圖入來アレハ何ノ心カケモ無驚キ噪キケリ、顯胤ノ曰、早天ノ出立ナレハ今ニ至リ頗ル眠リヲ催セリ。少シ休息睡眠スヘシ。下々モ勝手次第休息スヘシ我前ニ人ハ入ラヌソ、江ノ井・岡田モ此間ニマトロミ休ムヘシ、尤用意ハ緩々トセヨトテ休息アルニ。枕ナケレハ著セラレシ木綿ノ羽織ヲ卷テ枕ニシ、暫ク睡眠有テ後江井・岡田ヲ呼レ。兩人ヲ近ク寄セラレテ申サレケルハ。重隆無分別不云ニ依テ。兩人ニ異見ヲ可問事アリ、今日ノ鷹野遊山モ僞ナリ。小高ニテ議セハ。トカクニ人モ知テ岩城ヘモ洩ンコトヲ思ヒ、此處ヘ出タルナリ、岩城ノ娘ヲ白河ヘ送ラセテハ我命生キテ相馬ノ主トハナルマシキソ。一戰シテ重隆カ首ヲ伊達ヘ送ルカ、相馬ノ家ヲ亡スカ此二ツノ外他事有マシク思フナリ。然レトモ顯胤此レマテ軍伍ヲ卒ヒテ、他國ニ向テ軍シタルコトナシ。又見タルコトモナシ、白土ノ道筋モ不知、路次ノ難易モ覺束ナシ、兩人先驅シテ武勇ヲハケマシ、諸士ノ勇健ヲ進メテ一戰ヲ遂サセヨ。亡父盛胤常々宣ヒシ。何時モ弓箭ノ事ハ其方兩人ニ內談シ。異見ヲ問フヘシト云々、ユヘニ各ニ密談スト、兩人席ヲ改メ。江ノ井申シケルハ岩城ヘノ御遺恨尤至極ノ事ナリ。去ナカラ今少シ御待有テ可然カト存スルナリ、其故ハ重隆今年四十五六年老ニコヘタリ朝暮飲酔止時ナク押付內損亡命アルヘシトノ風聞ナレハ。其時其弊ニ乘テ思立玉ハヽ岩城ヲ手裡ニ入ラレンコト。手マ入マシクト存スルナリ此義御工夫アルヘシト申シケレハ、顯胤忽チ氣色カハリ。重代ノ志田身ノ太刀一尺許リ拔カケ、鍔ヲナラシ。誓テ曰江ノ井河內其方ハ顯胤知行ノ望ミ有テ斯ク云フト思ヤ。全ク他ノ領知ヲ貪リ取ンカ爲ニナスコトニ非ス難去遺恨ナレハコソ斯ハ思ヒ立タルナリ。人ノ命ハ時ノ間モハカルヘカラス。尤老若病不病ニモ不可寄。後レ先立ツコト人命ノ是

レ常ナリ。而降内損ノ疾ヲ待ン内ニ。我命モ保ンコト難計伊達ヘ對シテ云譯ナク、左アラン時ニ至リ。來世マテ此恥ヲ負テ可行ヤ。亡父盛胤ノ眼力遺言セラレシ程モナキ江ノ井カ思慮ナリ迚。以ノ外ニ忿怒アリケレハ。岡田押宥メテ曰。江ノ井若キ殿ニ深ク異見而已申スヘカラス。此御遺恨ハ早速ニ晴ラサレスシテハ不叶コトナリ。此方一家ニ對セル事ニ非ス。空シク月日ヲ送リテハ、米澤ヘノ義立カタシ。若伊達ヨリ先ヲコサレテハ猶言譯立ヘカラス。此一事ハ御思慮ニ任サレ可然。兩人モ一命ヲ限リニ御供仕ラン。亦諸士モ此合戰ハ本望ニ存スヘケレハ。一入武威ヲフルヒ相ハタラキ可申。急カニ御出陣可有ト云ケレハ顯胤顏色直リテ此上ハ猶兩人ヲタノムナリ、急キ合戰可取結。岩城ヘ聞ヘヌ内可取計コトナリ。岡田又申ケルハ、仰畏リ入候、併他郡ヘノ合戰奄忽ニハ難成常々御聞アルヘクト三郡ヘ觸ワタシ。人數ヲアツメ其上ニ存分ノ合戰アルヘシ、タトヘ敵方ヘ知レヽリトモ、軍ノ勝負ハ其時ノ機運ニヨルコトナレハ。岩城大家ナリ迚。恐ルヘキニアラス。先ツ味方ヲヨク調ヘテ、本ヲ堅フシテ出陣アルヘシト云々。顯胤重ネテ諸軍ヲ集ルコト日數幾日ハカリ待ツヘキソ。江ノ井カ曰、先ツ五六日ハ待玉フヘシ。其内一族老臣ヘ評談シ、諸軍ヲ調ヘ申スヘシトテ。其日ハ終日遊獵有テ皈城セラル、偖一族老臣一議セラレケルニ。各評定シケルハ、少々卒爾ノ企トハ存スレトモ。若將ノ御心ニハ左コソ可有事ナリ。異議アルヘカラストテ、則三郡ヘ觸レタリケリ。新山ノ城ノ虎口、顯胤心ニ不入コトアル間、急ニ普請スヘシ、普請ノ道具何々ヲ持來ルヘシ。其上岩城ノ境近ケレハ。武具兵器第一ニ持テ。明日日出ニ虎口ヘ普請ノ諸卒可相詰トナリ。偖又日限五日ト定メケルカ四日ノ内ニ陣觸下管調ケレハ。五日目ノ早旦ニ出陣ナリ。顯胤ハ夜中ヨリ出馬セラル。宇田北郷、中郷ヨリ來ル者ハ、小高ヘ未明ニ到着ス。又吉名ホトリ其外路ノ所々ニ人ヲ置テ、馳來ル者トモヘ殿

ハ疾クニ出陣アリ、各寢ホレタルカ、急クヘシト耻シ
メケレハ、騎卒共ニ道ヲ急テ走行ケリ其時ノ海道ハ。
吉名ヨリ西ノ内ノ村ノ中ニアリ。標葉ノ諸士ハ餘リ
道ノ近ケレハ、時分ヲ計ツテ少シ遲參シタリ。顯胤顏
色變ツテ。遠鄕ノ諸士サヘフレ渡ス處ノ刻限ヲ不違
馳來ルニ、近鄕ニ在ナカラ遲參ノ條曲事ナリト咎メ
ラル、其外ノ諸士ハ各側近ク招キテ申サレケルハ。兼
テ聞及ツラン。岩城重隆ニ遺恨有テ白土ノ城ニ押ヨ
セ、攻討ント欲ス。各此度ノ儀ナレハ。忠勤ヲ勵シ。白土
ヲ責破テ、顯胤カ胸欝ヲ開ンニ於テハ。我願ル本望ナ
リ。各ノ事兼テ陰ナカラ聞之ニ此度岩城ノ不義。顯
胤カ遺恨ニ增リ面々ノ欝憤膌ヲ噛ト聞及ヘリ誠ニ
忝キ志ナリ。今日只今各ノ氣色眼色ニアラハル。賴母
敷シト甚タ賞美アリ。又標葉衆ハ供セント存ル者ハ
可參。否ト思フ者ハコレヨリ宿所ヘ皈ルヘシトナリ。
顯胤生得大音ニテ小高ニテ罵リ玉フ聲ハ。岡田ノ邊
マテサハヤカニ聞ヘタルトナリ。偖各支度スヘシト

テ。諸士ニ酒食ヲス、メラル。新山ノ城主顯胤ヘ獻膳
ス。此トキ城代相馬三郎幼少ナル故。樋渡攝津守指副
ナリ。岩城ヘモ疾ク風聞シケレハ、其用意ノ備アリ。先
早々ニ押掛、最初ニ富岡ヲ蹈オトサレ。敵ハ定メテ岩
澤カ平澤ニ出テ待ツラント。諸軍ヲス、メテ行處ニ。
富岡ノ下モ七里カ原（今里カ原ト云）ヨリ不計ニ人數一備相
馬勢ノ跡ヘ群々ト押來ル。彼ハ何ソトミル處ニ。岩城
ノ軍勢ナリ、相馬勢色立テ跡先ニ敵ヲサ、ヘ。前後敵
ニ圍マレナハ合戰危カルヘシ。先ツ目近ク見ユル敵
ナレハ跡ヘ返シテ戰フヘシトテ。人數ヲクリ戻シカ
ヘシ合セケレハ、岩城勢モ一備進ミカ、ル。相カ、リ
ニ掛テ、既ニ於彼所合戰始ル、岩城方一備、相馬ノ軍
中ヘ横合ニ打テカ、リシカハ。相馬方押亂サレ。旗色
惡シク見ヘタリ。此處ニテ標葉ノ一將井士川大隅討
死シタリ、其外歷々ノ兵士マテ討死シタリ。鈴木藤八
郎ハ北鄕五十四人ノ内ナルカ。岩城ノ兵士佐々小六
ヲ討トラントシケレトモ。馬瘦其上長途ニ倦レケレ

ハ馬進ミ得ス去レトモ乗ヲセ組ントスル處ニ敵方ヨリソレハ佐々小六ト云者ナリ。子細アレハ助ケラレヨト命ヲ請フニ依テ、馬ハ不叶幸ニシテ見遁シタリ。其後小六方ヨリ折々藤八郎ニ音信シケルトナリ。

相馬勢敗軍シテ其夜ニ相馬ヘ引取　小高ノ城ヘ皈陣アリ、山澤ノ城代靑田右衛門カ舘ニ旅舘ナリ、於米澤政宗此事ヲ聞玉ヒテ申サレケルハ、顯胤義ヲ守リ某カ爲ニ多クノ兵士ヲ損シ、岩城ニ對シ合戰ノ事嚴スルニ堪ヌリ、此上ハ我出張シテ相馬ト相共ニ岩城ニ向ヒ勝負ヲ決スヘシ若シ又其儀ニマテ及ハスンハ、伊達ノ人數ヲ指添シ間是ヲ先立テ合戰アルヘシ、此方人數通スヘキ路ヲ借シ玉フヘシト　早飛脚ヲ以テ云越レケレハ、顯胤返答ニ辱キ仰承リヌ、乍併ラ此度ノ存立ハ、岩城重隆我ヲシテ蔑如ス、此欝憤止事ナキ遺恨ナレハ、顯胤一分ノ事ナレハ政宗ノ御出張ハ勿論加勢ヲモ申受マシ、尤モ路次ヲモカシ申スマシク候、境目ハ番ヲ居置一騎モ他兵ハ不通、若シ強テ通ラント致ス者アラハ打捨ニ申付オキタリ、御厚志不淺存スレトモ、右之通ナレハ加勢申ウケマシキトナリ。故ニ伊達ヨリ一騎一卒ノ加勢ナシ　斯テ顯胤五六日山澤ニ在留有テ三郡ノ人數ヲ不殘集メ、軍評定アッテ兵粮三日ノ用意ニテ、三郡ノ軍士三百餘ニテ出陣ナリ岩澤マテハ何ノ故障モナク押行處ニ　岩澤ノ向ニ岩城勢二備待カケタリ　相馬勢是ヲ見テ濱ノ手ニ亦隱シ勢ヤ有ント不審シク右ノ山手ヘ登リ。河ヲ越テ掛ラント登リ行處ニ、岩城勢モ川上ヘ上リ。岸ニ臨テ相掛リニカヽル處ニ　岩城方色メキシカ　備亂レテ引立タリ　相馬方之ヲ見テキソヒ討、大將顯胤例ノ大音ニテ、諸士ノ名ヲ呼カケ々々下知アレハ。遂ニ敵ヲ追立々々討取首數級ヲ得タリ　カヽル處ニ岩城方武者一騎顯胤ノ馬ノ前左脇ヨリ一サンニ返シ來ル大將ノ側近ク馬上一騎モナク　小人十人計リニテ乘廻シ々々下知セラレシカ、顯胤此武者ヲ見テ敵ノ來ル方ヘ馬ノ頭ヲヒキ向　敵ノ馬ノ頭顯胤ノ上ハ手ニ成

テ通ル處ヲ。鐵ニテ鍛ヘタル軍配團ヲフリ上、右ノ鐙ヲフン張リ、立上テ冑ノ天邊ヲ打レケレハ。兜クタケテ腦ヘ打込レ首チヽマルヲ、小人ノ者引落シテ首ヲ剡タリ此時右ノ力革ヲ踏切タリ。岩城方敗北シテ散亂ス、跡ヲ慕フテ押ユク處ニ、廣野ノ葛見川（金剛川共今澤見川）此川面ヒロク水左モフカシ。此川向ニ鹽屋昔モ今モ一ツアリ、此處ハ渡子澤ト云、此山ノ上ニ岩城勢開花ノ爛漫タル如クニ二ケ所ニ連ナリ備ヘタリ。顯胤思惟有テ此川ヲコシ。山ノ敵ニカヽラントセハ、左リノ濱手ノ山陰ニ勢ヲフセテ、横合ニカケテ討ントカマヘタルヘシ、此方ハ右ノ上ハ手ヨリ廻リ。敵ノ左ヨリ掛ラハ、敵山ヨリ下リ立ヘシ、然ラハ濱手ノ隱シ勢。岩城勢ノ後ニ成ルヘシ。跡ヨリ之ヲ助ケントセハ、山ニ對シタル味方川ヲコヘテ此方ヨリ横合ニ責討ツヘシト下知ヲ傳ヘ。顯胤ハ山ノ敵ニ對シテ遠々ト備ヘタリ、其外ノ面々モ手寄々々備ヘタリ。故ニ相馬勢五十騎餘上下百ハカリ右ノ山カケニ上リ。川ヲ渡リ敵ノ左ヨリカヽラント押行、岩城勢モ川上ノ山キハニ上リ。廣野ノ方ヘ來ル、上下三百ハカリ。山崎ノ廻リメニテ兩方ハタト合タリ、相馬方一應ニモ不及。ソレ駈ヨト云程コソアレ三百餘アナタコナタヲ飛ビ越飜越。思ヒ々々ニ打テカヽル。岩城方押亂サレ追討ニ討レタリ。岩城方廣埜ヘ廻ラントウカ／＼ト來リシニ、相馬方不意ニ出合急ニ軍ヲ仕カケラレシユヘニ。大形ハ不戰シテ逃散タリ、岩城方ノ評定ハ。相馬勢勝軍シテ押來レハ、山上ノ敵川ヲコヘテ競ヒ來ルヘシ。其トキ山ヨリソロ／＼ト御シテ合戰スヘシ、時ニ廣野ノ敵跡ヘ廻ラン時味方押ツメヨ、左ラハ相馬勢跡先トアヤフム處ヲ濱手ノ山陰ヨリ貝ヲ吹立テ、横合ニ中軍ヘ切入ン其時山ヨリ諸備不殘崩レカヽリタランニ、相馬勢一人モ漏サス討トルヘシト議定シテ、如斯手合セシカ、案ノ外山上ノ左ヨリ敵來ルヲ見テ調義違ヒケレハ、山ヨリ下リテ戰ケルカ顯胤旗元打テカヽルユヘ川中ニテ合戰ナリ。爰ニテ兩方互ニ太刀打槍

ヲ合セ双方思ヒ思ヒノ働キアリ岩城ノ方濱ノ手ノ伏兵ハ味方ノ後ニ廻ケレハ一戰モセス逃ル味方ニ押亂サレテ散々ニ敗走シタリ顯胤存分ノ軍シテ其日ハ山上ニ宿陣有テ諸卒ヲ休足センメラル此戰ニ相馬方金澤右馬介同子兄弟父子共ニ討死シタリ、是ヨリシテ金澤氏相續絶ヘタルヲ。後ニ名跡ヲ立ラレタリト云々此時雨陣ノ討死アレトモ、其姓名不詳。翌日顯胤宿陣ヲ出張アツテ。先ツ四ツ倉濱ノ城ヲ攻落ス昨日ノ落人共爰彼所ノ城々ヘ二十三十落チ加リ籠リシカトモ。大軍サヘ敗走シタルナタレロナレハ端々ノ城々モ大形ニ落城シタリ、顯胤ナヲモ勢ヒ猛ニナツテ諸卒モ競ヒカヽツテ此儘白土ノ城ヘ攻カヽルヘシトテ直サマニ押行ニ。四倉ノ先ニ新田川トテ有リ、此河兩岸峙立テ柳芦生茂リ。道一筋ノ渡リ處アリ、然ルニ昨日今朝ノ合戰ニ。落集シ騎卒等此處ニ踏止ル、又新田ノ城トテ白土ノ本城ニ近キ城アリ。時ノ城代ハ新妻何某ト云者ナリ、城内百騎ハカリニテ守リケルカ城ヲ出テ此川ヲ前ニ當彼是都合五百騎ハカリニテ控ヘタリ。キソヒ立タル相馬勢葦柳ノ茂リタルヲモ物共セス。川ヲ渉リテ短兵急ニ責戰フ。新田ノ者トモ支ヘカネテ白土ヲサシテ逃ルモアリ。方々ヘ散亂シ城ヘモ少々逃入シナリ、此時相馬方青田孫四郎討死シタリ。是ハ山澤ノ城代青田右衛門カ嫡子ナリ。又標葉衆ニ門馬新左衛門岩城方幌掛タル武者ヲ討取タリ。分捕シテ其ホロヲ持來ルニ幌ノ内ニ守リアリ披テミルニ紙ニ經ヲ書タリ。其文ヲ五輪ノ形チニタヽミ上ケテ書之。其頭上ニ佛ヲ十體書タリト云々。近キ頃新左衛門子孫罪有テ知行沒收セラレ。零落シテ民間ニ有ケルカ。頃日マテ秘藏シテ所持セシカ。如何シテ聞ヘケン。後代忠胤ノ時之ヲ取上。所持ノ者ニハ褒美ヲ與ヘラレシトカヤ。斯テ新田ヲ責オトスヘシトテ押寄タリ。此時顯胤自ラ摩利支天ニアラスヤト。自慢セラレシトナリ。城ハ小勢ナリ淺間ナリ。喩難ハナシ今ノ間ニ攻落サント。諸勢イサミカカ

ル處ニ當郡藥王寺惠日寺馬ニ乘テ岩城ノ家臣二人召具シ顯胤ノ馬前ニ來リ訴訟申シケルハ。重隆不義ニ依テ。相馬ノ憤リ左ニ存スルナリ。仍テ先約ノ如ク息女ヲ伊達ヘ送ルヘキナレハ。此一戰堪忍有テ相馬ヘ皈陣アルヘシト重隆申サル所ナリト。兩僧再三ニ及ヒ申ニ依テ顯胤納得有テ。然ラハ息女ノ駕輿ヲ先ニ立テ皈陣致スヘキノ間早々ニ其用意アルヘシトノ返答ナリ。兩僧委細承リ居ケタリトテ。白土ヘ立皈ル。依之四ツ倉ヲ越ヘテ太夫坂ト云所ニ蕨平ト云處アリ。則此所ニ備ヲ引テ立ラレタリ。則岩城ヨリ息女ノ駕輿ヲ進メ來ル。供奉ノ諸士武具ヲ著シ各兜ハ脫テ高紐ニカケタリ。相馬方ノ武士モ同ク右ノ如クナリ則双方立向ヒ輿請取渡ノ式法有テ顯胤隊伍ヲマトメテ皈陣ナリ。依之小高ノ堀內ノ屋舍ヲ取リシツラヘ岩城ノ息女ヲ入レ置キ急キ米澤ヘ飛札ヲ以テ。稙宗ヘ達セラルヽハ。顯胤直キ々々岩城ヘ發向セシメ。重隆ノ息女請トリ申シタリ。此上ハ伊達ヘ引取玉フ共。岩城ヘ返シ玉フトモ。御心任セニ計ハルヘシトナリ。稙宗ノ返答ニ是程ニ粉骨ヲ盡サレタル姬ヲ。此方ヘ引取申サテ可有ヤ。顯胤ノ御深志謝禮演難シト。イト念頃ニ申送ラレ不日ニ迎ノ人數ヲ指越サレ無事故迎トラレケリ。顯胤ノ義心ニ依テ祝儀相調ヒ米澤モ一統ニ上下喜悅ノ色ヲ顯シケル。此時顯胤富岡ト木戶ニ城代ヲ居ヘ置キ廣野四倉等ハ則岩城ヘ返サレタリ富岡ニハ相馬三郎。木戶ニハ下浦常陸新山ニハ樋渡攝津守。西舘ハ酒井將監カ父彼等ヲ城代ニ置ケリ。偖又於岩城ハ白川ヘ變約ヲ勸メシ。彼白土與七郞ヲハ。一族家臣諸士一決シテ。重隆ヘ申ウケテ成敗シケリトナリ白川ヨリモ此遺恨ニ依テ。岩城ヲ責ル事度々ナリ。然レトモ差出タル合戰ハナカリシトナリ。

伊達秘鑑卷之五終

伊達秘鑑巻之六

奥陽仙府　燕々軒　編集

伊達晴宗父稙宗被押籠於桑折西山附
伊達相馬不和之事

顕胤重隆トノ義戦ヲ稙宗深ク感心有テ、其後ハ益々頼母敷思ハレケレハ、懇志ヲ運ハル、コト彌増アリ。稙宗兼テ諸士ニ申サレケルハ、顕胤予ニ對シテ孝心義行前代未聞ナリ、其上今若年ナレトモ、岩城ノ大家ヲ小勢ヲ以テ取ヒシキ、三日ノ内ニ白土ノ城下迄責詰ルコト近郡ニテ未聞大將ナリ、況ヤ積年ノ程ヲヤ。諸士モ重代ノ者共トハ云ナカラ、顕胤士民ニ仁愛アル故心ヲ一致ニスル故ナリ、是人和ヲ得ルノ德誠ニ大將ノ機ナリト、フカク褒美アリシナリ。偖後々ハ義戦ノ報謝ト云ヒ、孝心ノ習ト云ヒ、伊達領ノ内相馬近隣ノ郷村ヲハ少々モ分チテ顕胤ヘ可遣ト、其故ハ相馬ノ一族士卒等専ラ義ヲ正シ忠ヲ勵ス者共ナレハ。相馬少々大身ニ仕立ナハ、伊達・相馬・岩城此三家一味和融スルニ於テハ、奥州五十四郡ハ云ニ不及、出羽十二郡マテモ四五年ノ内ニ手裡ニ入ルヘシトテ。嫡男晴宗父一族老臣ニモ、時々右ノコトヲ談セラレケリ、晴宗ヲ始メ其外ノ一族各申シケルハ、夫レハ以ノ外ノ御思慮違ニ候ハン、相馬エノ馳走アラハ。馬鷹重代ノ太刀抔ハ幾度モ進セラルヘシ、御領ヲ分チ玉ハンコトハ。一郷一村タリトモ必ス々々思寄玉フヘカラス。其故ハ顕胤若年ニテ其上小身小勢ヲ以テ、大身大老ノ重隆。シカモ大勢ナルヲ兩三日ノ中ニ白土ノ城下マテ切付ラル、コト、凡夫ノ擧動ニ非ス、其後モ隣郡處々出張セラル、ニ利ナキコト非ス。又何方此方境目ヲ貪リ日々夜々ノ戦アレトモ。相馬ノ關領ヲ越ヘテ押入タル大將未タ聞ス、相馬ハ主從相應スルノ兵威ナリ、然ルニ當領ヲ片端成トモ遣ハサレハ、相馬ノ爲ニハ龍ニ翼ヲ與フルニヒトシ　然ル上ハ後々ハ却テ殃ヲ招クノ端アルヘシト　何レトモ度々諫言

シケル。稙宗ニモ此言理リト思レケレトモ。自愛ノ心ヤ深カリケン。書翰ヲ以テ密々ニ顕胤ヘ彼郷・彼村里ハ相馬近所ナレハ。下知アルヘシト云送ラレケリ。偖此時ノ伊達領ハ。伊達郡・信夫郡・柴田郡・伊具郡ノ内少々旗下ナリ。稙宗ハ隠居有テ伊達郡西山ノ城ニ居住。晴宗ニハ米澤ニ居城セラル。サレハ稙宗ノ思慮。晴宗同心ナシ。兎角相馬ヘノ通路アル故ニ稙宗ノ志モ起ルナリ。伊達大身ト雖トモ。伊達・信夫コソ譜代ナレ。柴田・伊具ノ二郡ハ近コロマテノ陣場ナリ。相馬強シト見ハ心ヲ變センコト必セリ。相馬少シモ大身ニナリナハ。伊達滅亡ノ基ヒナルヘシ。畢竟ハ實子ヲ棄テ。聟ヲ大家ニセントノ。父稙宗ノ計ラヒ。以ノ外ノ僻事ナリトテ。桑折西山ノ城ニ座敷籠ノ如クニシツラヒ。稙宗ヲ押籠申サレ。番等稠シク附セラレケリ。尤相馬境ノ道筋ニ番ヲ附置。往來ノ者ヲ改メラル。是ハ相馬ヘ密々ノ通用ヲ防ンカ爲トソ。

私ニ曰。伊達ノ説ハ右ノ説ハ世間ヘ云觸ル處ナリ。實ハ稙宗君不義ノ事有之故。御父子ノ中御不和ニナリ。籠舎シ玉ヘリト云々。何レニシテモ孝ハ能侫父ニ仕フルヲ至孝トスルノ聖教ナレハ。譬不義アリトモ對天下セル罪ナクハ。子トシテ父ヲ閉塞スルコト。晴宗君御本意ニハアルマシキコトナリ。是ハコレ時ノ不義ト評セラレテ。其行跡難遁アヤマリナルヘキ哉。

偖稙宗ヨリ顕胤ノ室稙宗息女ノ御方ヘ。賤夫ニ文ヲ持セテ密ニ送ラレケリ　伊達ノ境目ニ番有テ人ラシキ者ハ不通。故ニ賤夫ニ仕立テ如斯ナリ。其文ニハ晴宗不義ニシテ。父タル者ヲ閉座セシメテ苦シムルナリ。尤相馬ノ通用モ猜ミ止ラル。顕胤ヲ頼ミ。晴宗ニ異見有テ籠舎ヲ出シ。相馬ヘ引取玉ハレトナリ。息女則顕胤ヘ斯ト告ラル。顕胤此文ヲ披見アリ。返答ハ只口上ニテ委細心得侍ルトハカリニテ。彼賤夫ヲ皈サレケリ。偖相馬一族老臣ヲ召集メテ密々内談アリ。顕胤申サレケルハ。稙宗籠舎ノ起リハ。我等ニ少知ヲ分讓ラ

レントノ結構ヲリオコル處ナリ　晴宗ノ存慮ハ相馬ヲ馳走シテ心闇ク實子ヲ捨テ、後ニハ晴宗ヲハ無者ニスヘキ父ナリ迚、相馬ノ通用ヲ可斷爲ノ籠舎ナリト風聞ス、モシ左モアラハ我等カ異見ハ何ト云トモ承引アルヘカラス、若シ不叶ハ末々合戰ニ及ハント云トモ稙宗老父引トラスンハ不可叶ト云々、時ニ家老水谷伊豫申シケルハ、晴宗ノ鬱憤理ナキニモ非ス又此方ヨリ異見有テ不叶ハ合戰アラントノ仰モ。勿論ノ事ニテ候ヘトモ。一門中ニテ左樣ノ事出來ルハ。コレ他門ノ將ノ悅フ處ニシテ　此方ハ各自滅ノ瑞相ニテ候、ケ樣ノ事短氣ニ事ヲ計ヒテハ仕損スル事多シ、永ク能ク前後ヲ考合セ　當家ノ耻辱ニナラヌ樣御思慮アルヘキナリ。伊達ハ大身ナレハ隨分ト順フヤツニモテナシ　連々ト諫メヲ入ラレハ、父子ノ御中ナレハ終ニハ和睦アルヘキナリト申シケレハ。一座皆伊豫カ申ス所尤ナリト一同ス、其上今ハ農民耕作ノ最中ナレハ、諸民軍用ニ疲レナハ士卒ノ難義ニ候間、先々分別アルヘシトナリ、顯胤ノ曰、伊豫申處衆議一同至極セリ。サアレハ迚稙宗我ヲ賴ル、上ハ見ステ難シ、タトヘ賴ミノネカヒナクトモ、此事聞傳ヘテハ耳ナキカ如クシテ可有ヤ　サアルトキハ晴宗ト共ニ我モ亦不義ノ名ヲ呼レンナリト、各暫ラク口ヲ閉テ不及返答。詞ヲ出ス者ナシ。水谷亦申ケルハ仰尤ナリ。然ラハ謀ヲ以テ一旦籠舎ヲ出サル、樣ノ計アルヘシ、晴宗押コメ玉フトモ、老父ノコト、云、其上稙宗ノ息男兄弟近キ一族モ餘多ナレハ、サノミ稠シキ逼塞ニハアルマシ、又番ノ者共モ譜代ノ主君ノコトナレハ　萬事見遁シモ多カラン、爭カツラクハ當リ申スヘキ、所詮人ヲ撰ンテ盗ミ出シ申スニシクヘカラスト云ケレハ、顯胤承引アッテ其外ノ面々モ此事可然トナリ。偖誰レヲ此役ニ指スヘシトアリケルニ。伊豫カ曰、草野肥前武勇健剛ノ者ナレハ、ケ樣ノコト朝暮ノ所作トシ　隣郡ニ作黨多キ者ナリ。彼ノ者ヲ召テ直ニ賴ミ玉ハ、盗ミ出シ申スヘシト云々、依之則草

野ヘ使者ヲ立ラル。肥前急キ來ルヲ顯胤召出シテ直々ニ件ノ次第ヲ具ニ語リ頼レケル。何トゾ智謀ヲ廻ラシ。盗ミ出シ。掛田ノ城マテ供スヘシ。右ノ趣ハ掛田ノ城主ヘモ牒シ合セラルヘシト也。（此掛田ノ城主ハ稙宗ノ弟也ト聞ヘシ義宗ト云シナリ。其子俊宗ト云。）肥前承リ申ケルハ。番嚴シク而モ城内ニコモリ玉フヲ輙ク盗ミ出シ申スヘシト請合申難ク存スレトモ。直々ノ御頼ト申シ。辭退ハ憚アレハ先ツ々々思案ノ謀ヲ廻シ申スヘシト退出シタリ。其頃草埜ノ城代ハ草野式部ナリ肥前モ式部カ一類ナレハ。式部ニ附屬シテ此城ニアリ。偖又掛田ノ城代掛田義宗父子ヘモ委細ニ通達アリ。義宗父子一族ノ義難義ニ存スレハ。芳志不淺承ルトノ挨拶ナリ。是ノ時天文九年ノ比ナリ。斯テ草野肥前思慮ヲ廻ラシ。召仕ニ辯舌利口意地勇健ノ者アリ。度々ノ強盗忍ニ物ナレタル者ナリシヲ。シカ々々ト云含メ。西山ノ城ヘ案内見ニ遣ス。番ノ者通スマシト云フ。彼者欺テ申シケルハ。稙宗ヘ附參ラレシ誰々ハ私ノ主人ナリ。然ルニ心ニ違フコト有テ一兩年追出サレテ流浪致セシカ。此度稙宗ノ御事ニ付。私ノ主人モ苦勞致ノ由承リ。遉カ譜代ノ親ミ捨難ク。奉公仕度存シテ參リタリ。主人ニ一目逢ヒ申サハ則能リ出ヘシト云。聞之番人強テ止メス。賤キ者ノ義ヲ存ルコト奇特ナリ迚通シケリ。稙宗ヘ附參リシ人々ヲハ掛田ニテ能ク聞居タリ。城ノ案内ハ兼テ知タリ則隨從ノ側近キ衆ニ尋逢テ。相馬ノ謀略逐一樣々ト物語リテ稙宗ヘモ潜ニ達シ。萬ツ相圖ヲ定テ出タリ。立皈ル時ハ内ヨリ人ヲソヘテ出シケリ。難無ク約期ノ夜ニナリテ城ノ塀ヨリ布ヲ結ヒサケ。稙宗ソレニ取付テ下リ立チ玉フ。供ノ近士ハ二人ナリ。城外矢倉ノ下ニ肥前八人ノ黨類ヲ召具シテ待受。堀ヲハ板ヲ以テ浮橋ノ樣ニ作リテ。稙宗一人渡之。供奉ノ二人ハ游キ越サセタリ。斯テ稙宗ヲハ急キ掛田ノ城ヘ供奉シケリ。翌日信夫郡ノ士卒等掛田ヘ押ヨスル。又柴田・米澤ヨリモ追々ニ馳來リ。城ヲ二重三重ニ取卷。稙宗ヲ出シ申スヘシトノ斷リ再三ニ及フ。城

主義宗顯胤ヘ使ヲ飛ハシ、晴宗ヲ盗出シ。當城迄入來ナリ、晴宗ヨリ人數ヲ遣ハシ、城ヲトリ卷候ユヘ、某抔モ不意ノ籠城致ス。早々出馬アツテ稙宗ヲ相馬ヘ引トリ臣ノヘシトナリ。顯胤ノ曰、コレハ評義スヘキ事ニアラス迚。則チ城下ニ在合タル士卒七十騎ハカリ上下四百餘ニテ草野ヘ出陣、ソレヨリ掛田ヘ出張ナリ。殘ル諸士ハ追々ニ馳參シ、山中ニ相待左右ヲ待ヘシトナリ、時ニ顯胤三十三歲也。相馬ヨリ出兵ノ人數ヲ見テ。伊達勢俄ニ城ヲ責ル、城內ヨリモ防ク處ヘ、顯胤城近キ城ヘノリ上、備ヲ立、城內ヘ使者ヲ越ル、ニ、伊達勢強テハ不留通シケリ、偖往返一兩度ニ及ヒテ後米澤ノ老臣一族執扱ヒテ事調ヒ。平和無事ニ成ニケリ。依之稙宗ヲハ越河ヘ移シ申サレタリ　顯胤則小高ヘ皈陣ナリ。此トキハ合戰ナシ、草野肥前ニハ顯胤自筆ヲ以テ所知ヲ與ヘ、褒美ノ感狀アリシトナリ。

伊達相馬掛田表對陣之事

翌天文十年。晴宗再ヒ稙宗ヲ西山ノ城ニ押コメラル。先途ニ物コリセラレケルニヤ。此度ハ座敷ノ邊リヲ厚板ヲ以テ釘付ニシ。食物ヲ進ムル口一ツアケテ。番ノ兵士嚴カニ守之、掛田義宗其外一族ヨリ顯胤ヘ通達シケルハ。稙宗父子ノ中去年出張アリシ刻。晴宗ヘ急度意見致シ無事取扱畢ヌ。然ルニ此度又押込メラル、仍テ晴宗ヘ我々始メ再諫セシメ。相馬ヘ固ク申合取扱タルニ、約ヲ變シテ如此ノ擧動、相馬ノ聞ヘモ無面目ト。一族老臣詞ヲ盡シ異見申スト雖トモ、晴宗少シモ不致屈伏。此上ハ無力事也ト云々、因之各評談一決シテ義宗父子ヘ使者ヲ以テ申シ越サレケルハ、顯胤此方ニ居リナカラ、晴宗ヘ申入ル、コト、父兄ノ禮ナキニ似タレハ　掛田迄致中途、直々訴訟申スヘシ、自然延引ノ爲ナレハ　其領分ニ小屋ヲ掛待ラン、地形並ニ材木等申請度トナリ、義宗返答ニ委細承リヌ、此方ニテ用意致シ。是ヨリ注進可申トナリ。依之掛田ノ城ヨリ東南ノ山ニ上中下三段ノ小屋ヲ掛　敷キ物鍋釜・桙・折敷・桶・柄杓等ニ至ルマテ。小屋毎ニ夫

々ニ配リ置キ。一左右アリシカハ。顯胤則馬上十四五騎卒七八十ハカリニテ出馬アリ。斯テ相馬ノ老臣ト伊達ノ老臣ト對談及數度。度々詞ヲ盡シ。訴訟アリケレトモ。晴宗曾テ承引ナシ。晴宗ヨリ顯胤ヘ申シ越サルヽハ。幾度仰承ル共。於此義ハ不可。隨其命。永々在留有テ無詮コトナリ。早々飯館有テ可然トナリ顯胤亦御心底宥ムル迄ハ 此地ニ在留致シ 訴訟申外無之トナリ。然ルニ後々ハ伊達ノ家臣共 顯胤ノ使ヲ不請合體ニテ トヤ角紛ハシテ出合ハス。顯胤老臣共ニ申サルヽハ。 晴宗大身ニ奢リテ去年ノ約ヲ變スルノミナラス。今又我中途ニ出テ。父兄ノ禮ヲ以テ致處ニ結句不取合體ナリ。相馬ハ小身ナレハ。侮テカクハ計ラフ者ナリ。此上ハ晴宗ト軍ノ勝負タルヘシ。急キ相馬ノ人數ヲ召寄スヘシトナリ。兎ヤ角トシテ其年モ早暮タリ。 内々ハ相馬ニテモ一左右ヲ相待ケル故。三郡ノ内境目ノ加番ノ外不殘可馳來ト觸ケレハ 黑木彈正・同弟大膳ヲ始。又亘理ヨリ加勢ニ武石

ノ一族東鄉何某武石ノ人數引卒シ。各追々ニ馳來ル。年暮テ春ニ至リ 或夜一夜ノ内ニ大勢顯胤陣城ノ小屋ヨリ谷一ツ隔テ 向ノ山々ニ近々ト此彼所ニ備ヲ立タリ 顯胤早旦ニ出テ見之 此大勢ニテ備タルハ晴宗我ヲ滅スヘキノ結構ナリ。元ヨリ覺悟ノ前ナレハ一戰ヲ遂ヘシ。乍併ラ伊達ノ勢是程迄ハ不可有。諸方ノ加勢ナルヘシト。 佐藤伊勢其頃側近親シク仕ヘケルカ。敵ノ備ヲ見テ申ケルハ 先小屋近ク向タル二備ハ岩城ノ者共ナリ。彼是ノ幕旗ハ誰々ト申者ナリ。其外ノ備々ハ伊達カ 何レカ不相知ト。又相馬者共ハ是ハ柴田・刈田ノ者共ナリト取々ノ沙汰ナリ。顯胤ノ曰 岩城ノ者共ハ日來ノ手當覺タルヘシ。柴田・刈田ノ者共モ程近ケレハ聞及ハン。昔ノ手並合戰ハ案ノ内ナルヘシ 偖又此岩城勢ハ何地ヲ通リ來ツラン。各云ク 是ハ田村ヲ通リタルヘシ。田村ハ隣郡ニテハ相馬ノ先主代々今ニ至テ入魂ナリ。 然ルニ相馬ヲ討ントスル岩城勢ヲ其儘ニ通セシハ遺恨ナリ。 其子細ヲ

聞クヘシトテ、書札ヲ以田村顯隆ヘ送ラル。其旨趣ハ兼日斥ニ契約ノ甲斐ナク、岩城勢ニ道ヲ借サレシハ年來ノ約ヲ捨ラル、ヤ何レニ當方落居次第、三春ノ門外迄發向セシメ委細可申入トナリ 然ルニ境々幾重ノ番制シケレハ、飛脚ノ往來成難シトテ。掛田ノ瀨ノ頭ヲ二人呼テ。一人ニ料足三百疋宛トラセ遣シケリ、三春ノ城門ニ至リ、内ヘ入ントスルニ、番人追拂テ不入 此者云、相馬ノ屋形ヨリ頼マレテ參リタリト。番人不審ニ思ヒ夫レハ其狀書セテ殿ヘ上ヨトノ事ナラントテ則チ取出シケルカ竹ノ皮ニ包ミ、ホソク卷テ持參ス。田村ノ家臣ヘ急キ訴ヘタリ。則顯隆（清ノ父ナリ）ハ披露シケレハ、顯隆一見アッテ、家臣ニ向ツテ是相馬ヨリノ翰札ナリ、此岩城勢ハ何方ヨリカ通リツラン 家臣申スハ此方ヨハ、一人モ通リ申サス。定メテ山中ヲ傳ヘ忍ヒテ通リシモノナルヘシトナリ。因テ返翰ニ努々不存コトナリ。歸陣ニ當領ヘカヽリタルニ於テハ一人モ通スマシ、討捨ニ致スヘシト、念比ノ挨拶ナリ 顯胤重ネテ曰、岩城方備ノ内、兼日云通シタル者ナキヤ、佐藤伊勢カ曰 大形ニ存シタル者共ナリ。中ニモ楢葉能登ト申ス者、岩城ニテ年頃入魂ニ通用アル者ニテ候 然ラハ計策ノ爲矢文ヲ射テ見ヨトナリ、承ハルトテ一通ヲ認メテ射ルニ 則能登カ返札ニ委細其意ヲ得タリ。然レトモ其方一分ノ紙面ニテハ如何、大將ノ御判形アラハトナリ。則顯胤ヘ達ス許容有テ判證ノ一紙ヲ與ヘ。相圖ノ方便ヲ示シ遣シ。相馬方各用意シ、岩城勢ノ小屋ノ火ノ手ヲ待ツ處ニ。楢葉能登父子二人自身槍ヲ提テ。伊勢カ小屋ヘ來ル。伊勢驚イテ如何成コトソト問フ。サレハ内々申合セタルコト陣中洩知タルニヤ。今夜我々父子ヲ可討トノ内談アル由、告知スル者アレハ、密カニ遁出タリト、則顯胤ヘ告ケレハ。事不調ナレトモ一旦ノ忠義アレハ先ツ伊勢カ小屋ニ指置ヘシトナリ。其後相馬ニテ父ハ參河子ハ能登ト云ケルナリ 斯ル處ニ何トカ仕ケン。其夜ノ内岩城方別ノ備ヨリ自ラ火出來テ周章騷ク間

モアラセス。火勢強大トナリ。折節嵐烈シク吹出シ、枯草ニ火ウツリテ此カシコへ吹付ケ、小屋々々猛火盛ンナリ。内々待居タル相馬勢。スハヤ時コソ至レリト。短兵急ニ責カヽルニ、岩城勢一支モセス散亂ス。其後ニ備ヘタル伊達勢ハ。何コトノ有無モ不知先陣ノ崩ルヽニ騒キ立テ諸共ニ敗亂ス。サレトモ兩陣ノ間山高ク谷深ケレハ。只驚カシタルマテニテ追討ニ慕フ事モナラサリケリ。蒐ル處ニ黒木彈正同弟大膳並ニ亘理武石ノ加勢東郷掛田ニ在陣セシカ。晴宗へ内通セシカ引拂テヒソカニ行方ノ内北郷へ發向ス。敗走シタル伊達勢モ。北郷田中ノ城ヲ責ントス。彈正兄弟東郷其外北方近邊ノ者共ヲ語ラヒ來ツテ。彈正ハ今ノ壽性寺館ニソナヘ。夫ヨリ山下亦海道ヨリ東脇阿彌陀寺ノ方段々山々ニ備ヘタリ。田中ノ諸士モ皆掛田へ來リ留守居ニハ天神堂何某ヲ差置シニ、早打ヲ以テ注進ス、田中ノ城ハ境目ニモ非ス、内郷ナレハ其備ニモ不及處ニ、彈正逆心故何レモ驚キ則内談有テ北郷ノ諸士ヲ相馬ハ皈サレ。木幡主水カ父尾張ヲ小高へ歸サル。顯胤思惟有テ伊達岩城前後ニ迫レハ運ノ極メナルヘシ。急ニ一戰遂テトモ角モナルヘシトテ天文十一年二月人數大形ニアツマリシカハ、二月九日ニ掛田ヲ出立、阿武隈川ヨリ此方ノ山下ニ馬ヲ休メ、其日ハ野陣ニ備ヘラル。相馬方諸勢ノ内北郷ノ諸士ハ北郷へ皈シ、又黒木兄弟引取シカハ。殘兵百五十騎ニ不過上下八百ハカリノ人數ナリ。晴宗ニハ米澤ヲ出馬有テ。信夫大森ノ城ニ在陣ナリト聞ヘケレハ翌十日早朝ニ出陣。伊達並ニ北郷ノ勢モ須賀田川ヲ前ニ當テ。大勢ニテ控ヘタリ。其朝雲霞深クカヽリテ兩陣共ニ色合ヨクミヘス。相馬ハ小勢伊達勢ハ居ナカラ而モ多勢ナリ、如何ナル謀略アリヤモ不知敵地ニ入テノ事ナレハ。合戰ノ容子見計ヒ有テ可然ト云ニ顯胤ノ曰。夫レハ敵ノ領地ヲ貪リ、又ハ城ヲ取ントスルカ。多ク人ヲ殺シテ勝事ヲ專トスルトキノコトナルヘシ。是ハ軍ノ勝負ハトモ角モ晴宗へ一旦憤

リヲ云テ伊達相馬手切レノ驗ヲ見セン迄ナリ勝ツ所ハ別ニアルソト云モアハミニ雲霞漸々ニ晴渡レハ顯胤例ノ鐵團ヲ以テ指シ招キ大音ニ下知シ惣軍一度ニ押カヽル向フモ相カヽリニ掛ツテ河中ニテ追ツ返ヘシツ力戰ス顯胤自身川ヘ乘リコミ高聲ニ罵リ。手痛ク下知セラレケレハ。伊達勢色メキテ備アシク見ヘニケル相馬方是ニ氣ヲ得テ喚キ叫ンテ戰ヒケレハ北郷伊達方ノ諸勢散亂シテクツレ立ヲ追討ニ討テ相馬方ニテ首數級ヲ得タリ相馬方ニモ岡田丹波胤通討死スソレヨリ其邊ノ村ヘ押出シ出向フ者ヲハ切捨ニセヨトテ押行ク處ニ。敗卒又平澤ト云所ヘ集マルコレハ信夫ノ大森ヘモ程近シ敗卒又出向ヒ爰ニテ互ニ亂レ戰ヒケルカ伊達勢亦亂レテ敗走ス。相馬方追討ニ首ヲ得テ兩度ノ鬪合ニ勝利ヲ得タリ晴宗如何思ハレケン兵ヲ收メテ大森ヨリ米澤ヘ引取レケリ顯胤ハ阿武隈川ヲ越テ山下ニ馬ヲ休メ彼所ニテ味方ノ討死ヲ改メラル其中ニ水谷右衛門二十四歳青田能登二十八歳共ニ討死ス顯胤諸軍ニ向テ各忠勤勇健ノ働キ故伊達ノ大勢ヲ蹈散ス。是全ク諸士ノ武勇ナリ然レ共本意ト思フ稙宗ヲハ出シ不申故ナクシテ諸士ヲ殺シ民ヲ苦シム。今大將モナキ大森ヲ責タリトモ詮ナシ迚。翌十一日掛田ヘ皈陣セラレケリ其比世上唱ヘケルハ。稙宗・晴宗御父子不中ナレハ家中モ心區々ナリ。上ハヘハ晴宗ヘ隨ヘトモ底意ハ稙宗ヘ引モアリ。一族近親ノ輩モ晴宗異見ヲ用ヒラレヌヲ不興シテ。此戰ヲ餘所ニ聞テ大身ノ族ハ皆出張セス唯晴宗ノ旗本米澤ノ諸卒。信夫其外在住シタル一騎立ノ士卒ハカリニテ防戰アルユヘニ。如斯手弱キ働アリシト何レモ唱談シケルトソ聞ヘシ

高兒原合戰附顯胤引取稙宗於相馬事

此高兒ノ原ハ掛田ノ近所阿武隈川ノ方ナリ昔此邊川邊迄野原ナリキ。桑折・掛田瀬ノ上保原ヘモ近キ所ナリ顯胤老臣共ニ向テ評談アリケルハ晴宗何ト

思ハル、ヤ。大森出張ノ後ハ顏ヲモ出サレス。往來モナシ、大森ノ城ニハ士卒多勢コモリタリト云トモ。大將モナキ集リ勢ナレハ責ルニ恐ル、處ナシ。我思フ所米澤ヲ責テ晴宗ヲ討、城ヲ奪ントスル望ミニモ非ス。只稙宗ヲ相馬ヘ引トリテ老父ノ憤リヲ休メ度思フナリ。シカレトモ彼等ト我挑戰シテ横合ノ働キニ人ヲ損シ。又長陣ノ辛勤其費ヘ。後日ノ合戰危カルヘシ。如何セントナリ、一族老臣申シケルハ。仰尤ノ至リナリ、此上ハ西山ノ城ニ打テカ、リ。晴宗出陣アラハ。大將打合テ運ヲ勝負ニ任サルヘシ。若晴宗出陣ナクシテ。諸卒ハカリ出向ハ、、此方ヨリモ諸卒ヲカケ合セ打破リ、其内屋形ハ合戰ニ無構敵ノ間(ヒマ)ヲ窺ヒ、城中ヘ乘入玉ヒ、稙宗ヲ出シ玉フヘシ。伊達ノ士卒モ稙宗ノ苦痛ヲ救ヒ玉フ事ナレハ、內心ハ本望タルヘケレハ、勇ンテ强キ働キスル者ハアルマシク存スルナリト、一同ニ云ケレハ。顯胤モ納得、何レモ勇ミ競ヒテ今明日ニ合戰アルヘク見ヘケルカ、如何シケン是ヨリ後緩々トシテ合戰アルヘシトモ不見、尤伊達方ニモ其沙汰ナク數日ヲ經タリ、後ニ世上沙汰シケルハ。伊達ノ親族方ヨリ內證モアリケルニヤ。又晴宗ノ不義ヲ責テ押付玉フ事顯然タリ。一族衆取扱テ稙宗ヲ一旦相馬ヘ立退カセ。無事ヲ入ラル、取扱ヒ有ヤセンナト、密々ニ申者アリケルニ因テ、此事心頼ミニテ延引アリケルトナリ。又晴宗ニハ稙宗ヲサヘ出サス。會釋シテ長陣サスルニ於テハ。相馬小身ナレハ他郡ヘ越ヘテノ合戰。末々相續ナルヘカラス。己レト相馬ヘ皈陣スルノ外アルヘカラス迚、悠々ト打ノベ置レタリト申アヘリ。又相馬ノ諸卒寄合テヒソメキケルハ。此度ハ相馬ノ大事此時ナリ、相馬ニテハ黑木彈正兄弟。東鄕ト引組ンテ逆意ノ企アリ。又富岡ノ城代相馬三郎ニテモ。何トヤラン振リ惡シキ唱アリ。伊達ハ大身其上加勢ノ方モ多シ、タトヘ一旦利アリトモ。敵兵ハ汲ミテモ盡ス。泉流ノ如クナレハ。相馬ノ大事、諸士ノ滅亡　此時ナレハ面々其覺悟シテタシナムヘシト

中シ合ケルナリ。然ルニ黒木・北郷對陣シテ田中ノ城ヲ責ルニ城中ノ者多ク討レシト飛脚到來ス。又小高ヨリモ富岡ノ三郎容子疑ハシキ旨注進アリ、此事伊達ヘ聞ヘテハ惡カリナントト、一戰ヲ取急カル、結構ナリ、同年五月下旬ノ事成ルニ、佐藤伊勢宵ヨリ用アリ、頻ニ半天ヲ詠メテ居タリシカ。夜更テ方々小屋々々ノ前ヲ通リナカラ申シケル。御運目出度コトニテソアリケル、去冬ヨリ今迄數月在陣中ニ、終ニ此吉瑞ノ雲氣不見シカ、今宵ニ至リ現ハレタリ、各モ出テ見ルヘシ、我ハ先ツ疾ク顕胤ヘ申上ルナリ迚、足早ニ通リケリ。何レモ此言ヲ聞テ小屋々々ヨリ出テ見ルニ。清天キラ々々ト星キラメク外別ノ事ナシ、例ノ化物カ何ヲ云フナラン抔嘲ケリ笑フ者モアリケリ、伊勢本陣ヘ參ルト、顕胤則申サル、ハ、明日桑折西山ノ城ヘ押寄合戰アルヘシ、各其用意致シ。未明ヨリ高見原ヘ出ヘシト觸サスヘシトナリ、又伊勢ニ向テ。明日合戰ノ采幣ハ其方ニ渡スナリ、諸軍士ヲ下知スヘシト、

伊勢畏リテ曰。大事ノ合戰ト云。譜代武功ノ先士老功モ多ク候ヘハ、餘人ヲエラミ命セラルヘシ、某シハ昨今ノ者ナレハ、諸卒下知ヲ輕ンシ、合戰ノ勝利危シ、今夜吉瑞ノ雲氣ト申シ、老功ノ士ニ任サルヘシト辭退シケリ、顕胤ノ曰。諸卒何レモ重代ノ者ナレハ、吾爲ヲ思ハヌ者アルヘカラス、伊勢カ云所モ尤ナレハ。吾直々諸士ニモ此事タノミ談スヘシトテ、明日ノ戰ニ是非勝利ヲ得度思フナレハ。何レモ粉骨ヲ盡スヘシ。吾思フコト有テ采幣ヲ伊勢ニ任スルノ間、渠カ下知ヲ守ルヘシ。相馬ノ安否此時ナルソト有テ、諸軍ニ此條直ニ云含メ申サレケル。各皆當戰ノ爲可然樣ニト答ヘケリ 其後佐藤伊勢陣中小屋々々ヲ通リ。明日ノ合戰諸勢ノ下知某命ヲ蒙リタリ。再三固辭スレトモ、各ヘモ命有テユルシ玉ハス。異儀ニ及難ク領掌申シタリ。各下知ニ順ヒ玉フヘキカ。屋形モ合戰勝利ヲ得ラレ度トナリ、御家ノ大事此一戰ナリ。勝利ノコトハ各ノ働キ勇健ニアルヘシトナリ、何レモ答ヘテ如何ニ

モ計ハルヘシ、下知ニ背キ申間鋪トナリ。斯テ伊勢未明ニ高兒原ヘ打出、百廿四騎ヲ三ツニ備ヘ。夫レヨリ押出シテ阿武隈川端近ク西山ノ城ニ向ツテ押行ケリ、此マト伊達方ニテモ如何シテ知リタリケン。俄ニ兵卒ヲ揃ヘテ川ノ向フニ備ヲ見セタリ。相馬方川ヨリ此方ノ原中ニ備ヲ立テ見ル處ニ。伊達勢歩渡リノ處ヲ渡シテ、五十騎ハカリ一備押來リ。川端ヨリ二丁餘出テ。相馬勢ニ向テ備ヘタリ。兩陣ノ間二三丁ニ不レ過又跡ヨリ四十騎ハカリ川ヲ越ヘ來ル。或ハ腹帶ヲシメナヲシ鞍ヲ直シ、歩卒モ跡先ト走リ廻リ。馬上モ備ヘントス。先立テ渡シタル備跡チカシトヤ思ヒケン先ヘ出テ備ヘント色メキ立ケルヲ、相馬勢ソロソロト進ミ近付ク伊勢釆幣ヲ振ツテ詰寄タリ。伊達勢モ動キ向ヒタレハ、互ニ相懸リニ進ンテ戰フ。伊達方ハ一備ナレハ色立所ヲ、相馬方競ヒカヽリ、貝ヲ吹立テ戰ヒシカハ伊達方足並亂シテ追立ラル、跡備ハ未タ馬ニノラヌモ多カリケレハ。一支モセス川ヘ追ツメラレ、散々ニ敗走ス、相馬勢勝ニ乘テ追討シ、六七十討トリ、味方モ三十餘討レタリ、川向ニ備タル伊達勢モ、逃ル味方ノ二備ニ押亂サレ。備皆シトロナリ。相馬勢川ヲ越ヘテ追ハントスルヲ、伊勢固ク制シ止メ。各先ツ息ヲ休ムヘシトテ川ノ此方ニ居リシキタリ。顯胤モ川ノ何方ヲ見キリ。川ヲ渡リテ西山ノ城ヘ責カヽラントス。川ヨリ引上タル伊達勢ハ。何地ヘ行散ケン一騎モ見ヘス。然ル處ニ淺キ所ヲ不レ渡シテ、川ノ深ミヲ裸身ニ成テ向ヨリ游キ來ル者アリ。何者ナラント見ル處ニ。相馬勢ニ向テ云ケルハ。晴宗ハ勿論伊達衆皆々米澤ヘ引入。西山ノ城ニハ今一騎一人ノ備ナシ、早々城内ヘ打入。稙宗ヲ出シ玉ヘト云棄テ。又ヨキテ皈リケリ是誰ノ注進ト云コト終ニ不レ知ケリ。顯胤コレハ敵ノ方便ナルモ難レ計。先ツ小人ヲ遣シテ見スヘシトテ。小人三人槍ヲ持セテ遣ス、其頃迄ハ此川ノホトリ桑折ノ下。大形田畑其外野原藪原ニテ村里多カラス。小人頓テ走皈リ、此邊目ノ及フ處ニハ、敵一

人モ見ヘスト云。サラハ先川ヲ渡シテ備ヨトテ人數ヲ押渡シ、故障ナケレハ安々ト西山ノ城迄寄ラル。川ト城トノ間凡ソ一里ノ内外ナリ。右ノ注進ハ稙宗ノ御子實元是ハ顯胤内室ノ同腹ナリ其比若年ニテアリシカ。夫レヨリノ注進ナリト後々ニキコヘタリ。顯胤ハ直ニ城ノ西ノ山ヘ乘リ上テ備ヲ立ラル、夫ヨリ山ト城トノ間、段々ニ二十騎又ハ十四五騎ハカリツヽ此方ノ方ニソナヘタリ、偖歩卒十四五人、夫ヨリ五十人、追々ニ城内ヘ入レラル。門モ始ヨリ押開キヌレハ心易ク入ケリ、何方此方屋中ヲ見ルニ、兵卒一人モナシ何方ニ稙宗ヤ御座スト奥ヘ入テ見レハ。爰ニ四方板付ケニシテ小キ口アリ、是ヲ打破リケレハ。稙宗ト十六七ノ小姓一人ハカリナリ。稙宗ニハ白綾ノ小袖ノ上ニ金色ノ箔打羽織ヲ著玉ヒ。寛爾トシテオハセリ。今時ノ猶モナケレハ。厩ノ端シニ汗ハミタル馬二疋乘捨テ鞍モ敷メル儘ニテ引立置リ、則是ニ乘セマイラセ、小姓モ共ニノセテ顯胤ヘ注進ス。御先ヘ御供可申ト有テ、馬上十五騎歩卒五六十人、打圍ンテ參リケル、其後顯胤モ馬上三十騎其外十騎二十騎ツヽ追々ニ乘ツレ々々供奉シタリ、然ルニ伊達・信夫兩郡郷々ニ散在セシ伊達ノ歩卒相馬勢ノ先ヘ進リ跡ヘ廻リテ慕ノタリ、道ホソケレハ敵モ五騎ト乘リ並フコト不能顯胤下知有テ敵進ラハ追拂ヒカヽラハ打テ捨ヨ。首トルヘカラス跡ヨリ慕ハヽ只會釋シテ近付ヘカラス防クニ隙ヲトラヌ樣ニスヘシ今ハ早道ニ遲滯ナク一刻モ早ク引トルカ高名ナルソト。自身乘マハシ乘返シテ下知セラル敵爰カシコヨリ五騎三騎ノリ來ルトミヘシカ時ノ間ニ二百騎ハカリニ見ヘタリ。顯胤如何思ハレケルニヤ。道ツラニアル處ノ村ニノリ入レ、惣人數ヲモ打入ラル。此處ハ一町四方モ有ン四方一間ハカリノ堀ニテ。口一ツ芦茨シケリ、門ニハ弓槍ヲ置テ守ラセラル顯胤ノ曰敵思ノ外集リタリ思フニ此方ノ勢川ヲコス處ヲ押掛。川ヘ追ハメテ可討トノコトナルヘシ、味方惡シク引カ

ハ危カルヘシ。去冬ヨリ今日マテ。物憂旅陣ニ日ヲ重ネ。漸々ニ本望トケテ皈陣スル。今ニ至テ敵ニ遮リ奪ヒ返サレテハ。是迄ノ勝利モ皆水ノ泡トナルヘシ。縦ヘ迯タリト云ハル丶トモ。此手柄ノ上ニハ苦シカラス。士卒上下一人モ損シテハ詮ナシトテ。引取時ノ心得。各評談士卒下々マテモ。疾ト云含メテ屋舗ノウラニ萱ヲ積置タル上ニ。自ラ登リテ物見アルニ。敵ノ人數屋鋪ノマハリ堀端二重三重ニ取卷タリ。偖ヨク弓射ル者ヲ近付ケ。敵ノ後ロニ立置タル馬ヲ一疋ヨクネラヒ射付ヘシ。此積萱ニノホリテ矢ヲ放ツヘシトナリ。承ル迄。弓勢ノ者一人則積萱ノ上ニノホリ見ルニ。其間二十間餘リナリ。能引テヒヤウト射ルニ。一疋ノ馬ニハタト中ル。此馬驚キ飜廻ルニ。立込メタル馬共サハキ立テ。蹈合蹴合躍リ狂フ。敵是ニ周章騷キ。後ニ事アリトヤ思ヒケン。皆堀際ヲ立ノキ立騷ク。折シモ相馬勢此屋鋪ヨリ押出ス。敵イヨ々々周章テ馬ニ乘ン拆スル內ニ。惣軍出拂ヒテ徐々ト引除タリ。前ニ

稠シク云ヒ含メラレケレハ。跡勢ハ敵慕ヘハ少シ返シテ會釋(アシラ)ヒ引退キ。其次々ニ支ル者アレハ。又件ノ如クアシラヒケリ。顯亂先ヘ乘リ跡ヘ返シ。例ノ撞鐘聲ニテ大音上テ下知アレハ。是ニ恐レケルニヤ。深ク近付追フ者ナシ。顯亂三十騎ハカリニテ川中ニ馬ヲ立。弓槍ヲ並ミ立テ控ヘタリ。此川ノ上ミ手ニ雜人共荷物ヲ川岸ニ投捨テ置タルカ。前後來リ集リ三百餘人程ナルヲ。川上ミノ水中此方ノ方ニ立テタリ。先ニ越シタル相馬勢ハ。此方ノ川端ニ皆馬ヲ休メテ控タリ。跡勢ノ亂レテ川ヘ打入ヲ見テ。伊達・信夫ノ勢二百騎ハカリ。大風ノ吹來ル如ク追掛ル。サレトモ相馬方コレニ不構。我先ニト川ノ下モ手ヲ越シ。此方ノ川原ニ乘上テ備タリ。川上ニ人馬ヲ立ラレタルニヨリ。川水何方(アナタ)ノ岸フカクナリ。水勢尤早シ。此方ハ水アサクナリテ打上ルニ便リヨシ。川ツラノ廣サ一町ニ不過。伊達・信夫ノ諸勢ハ。常ニ知リタル川ナレハ。心ヤスケニ乘入レタリ。馬ノ膝ヒタル程ヲ見スマシ。相馬方掛カ

ケタル弓ニテ射槍ニテツキ切テ落ス其時此方ノ岸ニ控ヘタル三十騎モ乗入レ顯胤川中ニ立テ上ミ下モ乗マハシ。下知セラレケレハ、士卒皆思々ニ手柄シタリ又川岸ノ此方ニ相馬方ノ備アリ夫ヨリ五町ハカリ後ノ野原ニ、掛田ノ士卒顯胤ノ迎ニ來リ備タリ。相馬方ハ淺ミニ備ヘ、伊達方ハ水ノ深ミニ有テ人馬ノ足自由ナラス跡ヨリ渡ル勢ハ押重ナル依之多ク川中ニテ討レタリ。相馬方ハ敵ヲウツ共首トルヘカラス川ヲ渡テハ一手切討捨ニセヨ寸歩モ敵ヲ追フヘカラスト下知シタリ爰ニ飯淵尾張伊達勢ヲ下知シ顯胤ノ備ヘ向テ乗入タリ、顯胤飯淵カ指物兼テ聞知ケレハ、彼ハサル兵ナリ、遁スナトアリシカハ、側ニ控ヘタル小人六七人、槍ヲ以テ立向フ、飯淵モ槍ヲ以テ突合先ニスヽム二人川中ヘ突々ヲス。サレトモ手ニアマリテ終ニ馬ヨリ突オトサレタリ。其首ハトレト下知アリシカハ、首取テ引上マリ、伊達勢川半ヨリ此方ヘハ來ラス輕ク打アケ、軍兵半ハ川ヘモ乗リ不、

入向ノ岸ヨリ二町餘モ引上テ備タリ、又此方ノ岸五町餘ニ掛田義宗ノ人數一備控タリ。伊達勢コレヲ見テ相馬ノ新手トヤ見ケン再ヒ追慕ハスシテ引ハラヒケリ後ニ聞ヘシハ柴田・刈田・信夫一騎立ノ者共ヘ、飯淵其外伊達勢モ居殘リテ。相馬方本望トケテ引トルヲ。ノメ〳〵ト皈サンヨリハ、川ヘ追ハメテ討ントテ斯ハシタヒシトナリ。皆米澤勢ニテハナカリケリ顯胤今朝ノ合戰場ニ備ヘテ諸卒ヲ休メ、討死手負ノ穿鑿アルニ今日討死ハ一人モナシ。手負少々アリケリ、偖又在家ヘ此邊ノ百姓共、鍬ト籠ヲ持來ルヘシ、若シ違亂アラハ討捨ニセヨトテ、足輕キ侍ヲソヘテ觸ラル。頓テ近邊ノ土民共鍬籠ヲ持來ル。則打死シタル敵味方ノ死骸、又川中ニモ流レスシテ有シ死骸ハ運送シ、各骸ヲ埋ミ塚ヲ築セケリ。今ニ此高兒原ニ首塚二ツアリトナリ。此所ニテ顯胤稙宗ヘ對面有テ、互ニ日頃ノ述懐ヲ述ヘラレタリ。斯テ諸軍ノ戰勞粉骨ヲ夫々ニ賞シ、顯胤諸士ニ向テ曰、此度ノ軍打捨ニシ

テ首ヲ不取、只飯淵尾張カ首一ツ取セタルハ子細アリ。我十三四歳ノ比ニヤ有ン。近習ノ者共ニ物語ノ序ニ云シハ。今度我伊達ノ緣約違變ノ模樣アリケルハ。此飯淵カ我ヲ惡口セシ故ト聞。アハレ伊達ト敵對ノ事アレカシ。飯淵カ首ヲ取ントスルソト云シニ。其席ニ誰々ト詰合シカアサ笑ヒシ者アリ、今此ニ居タル者共覺ヘアルヘシ我其笑シ者モ知ツレトモ。手ニトラヌ事ナレハ、誹笑セシモ理リト思故。腹立スヘキニモ非ス。知ヌ體ニハモテナシケレト。何レニ首トラテハト思ヒケルニ。不測ニ今度ノ一亂出來リテ渠カ首ヲ得タルコト、多年ノ本望ナリ。大將タル者ノ思ヒ入タルコトハ。ツイニ不遂ト云コト不可有。カク云ヘハトテ其節笑ヒシ者共モ心遣不可有、少シモ妬ニ思フコトニ非ス、猶親シク奉公スヘシトナリ。誹笑セシ者共皆赤面ニ及ヒケルカ、其後場毎ノ戰ニ或ハ高名シ、又ハ討死シテ一人モ先途ニ立サルハナカリケリ。偖又飯淵ハ伊達ニ於テモ名譽ノ者ノ首ナレハ。妻子ノ方ヘ送リテ可弔トテ、尾張カ首ヲハ伊達ヘ送ラレケルトカヤ、掛田義宗父子城外ニ出向テ對面アル、慇懃ニ一禮有テ。顯胤申サレケルハ。先ツ今度領內草野迄引取。敵地ヲハナレ申サン迚。夜ノ內ニ山中ヲ草野ヘカヽリ、小高ヘ皈陣セラレケリ。稙宗ヲハ堀ノ內ノ館ヲ明ケ置申サレタリ。顯胤ハ直ニ同慶寺ヘ參入アツテ住持ニ對面アリ、今度在陣中合戰討死ノ士卒、銘々字ヲ自筆ニ注シ置タリ。此者共ノ忠誠報謝シ難シ。明日ヨリ一七日ノ間、法事執行有テ魂魄ニ回向シ可預、我モ其內ハ寺內ニ在留シテ弔フヘシトテ。懷中ヨリ討死ノ者ヲ自記セラレタル一紙ヲ取出シテ住持ニ渡サル、笑翁和尚歎美シテ。感淚ヲ浮ヘテ領掌申サレケリ。其時有合タル士將輕卒ハ不及言。是ヲ聞傳ヘタル者ハ。民家ノ男女老若ニ至ル迄。袖ヲヌラサヌハナカリケリ。斯テ法事終リケレハ。則同慶寺ヲ立テ城下ヲ乘通シ、福岡村ヘ馬ヲ寄ラレ、百姓共ヲ呼出シ。使ヲ以テ云ハセラルハ、今度永々シキ在陣中、兵粮諸物

男女連從大儀至極ナリ。汝等カ粉骨ニ依テ此度ノ本意逹タリト、厚キ禮詞ノ趣キヲ演サセテ、夫レヨリ城ヘ入テ、上下安心ノ思ヲナス、此村々ハ顕胤手作ノ地ナレハ、男ハ陣ニ立、耕作ハ女ノ手ニテ障リナク熟シケレハ、粮米諸色境目迄女モ持運ヒケルヲ、陣城ヨリ人夫ヲ出シ請取ケルナリ。顕胤小身ナレトモ、士民ヲ撫スルコト、戰國ノ一將タルヘシト。遠近其賞談アリケルトソ。

或ハ云顕胤同慶寺中ニ在留ノ内、下々ニテツフヤキケルハ、討死ノ者ヲ供養スルコトハ、其妻子ノ弔フコトナレハ。忠志ヲ法謝アランニハ。外ニ施シノ仕樣モアルヘキナリ、今北郷ニハ黒木彈正異心ヲ挾テ軍兵ヲ備ヘテアリ、又岩城境ニハ相馬三郎疑心ノ沙汰マチ／＼ノ巷説顕胤皈陣ニ及ヘ共。三郎今ニ小高ヘ出仕ナシ。先ツ此兩事ノ沙汰ナクシテ女童ノ悲歎ニ等シク。死靈報恩ノ佛事歎願ハ。其志ノフカキヨリ發ルコトモ有ヘケレト。且ハ俗ヲ馴付ン為ノ謟ニシテ、實ハ小惠ノ沙汰ナリナト。小釋成ル者共ハ樣々ノ取沙汰モ多カリケリ。

相馬三郎流浪之事

富岡ノ城代ハ岩城境ナレハ迚、顕胤ノ舍弟相馬三郎ヲ入置レケリ是ハ會津盛舜ノ女ノ腹、盛胤本妻ノ子ナリ、小高ヨリ兵士十六騎與力ニ差ソヘ又地侍モアリ。北郷五十餘人ノ内鈴木藤八(後ニ越後)ヲ與力頭トシテ、城内ニ籠置タリ、顕胤ヨリノ掟ニテ暮六ツニ門ヲ閉テ、如何ナル用事有リトモ、夜明以前ニハ不可開門トナリ。然ルニ三郎與力ノ内和泉(苗字不知)ト云者ノ女ニ心ヲ通ハシ、夜毎ニ柵ヲ乘越ヘテ城外ヘ出タリ藤八是ヲ聞及ヒ三郎ヲ諫メケルハ、夜々柵ヲ越ヘテ城外ヘ出ラルヽコト。以ノ外ナリ、必ス危難ヲ負ルヘシ、其故ハ今舍兄他郡ヘ働キアツテ永々ノ在陣士民苦窮ノ最中ナリ。又伊達方軍卒多勢ニシテ。味方ノツカレ目前危シトノ風聞モ有之、又岩城ハ晴宗ノ舅ナレハ、加勢ノ軍兵モ出張セシトナリ、然レハ此虚ニ乘テ

如何ナル急變アランモ難計、其上富岡ハ元來岩城領ナレハ、下々ノ心モ氣遣ハシ。彼是愼ミアルヘキニ、斯樣ノ事分別ノ外ナリ。愛志深キ者ナラハ、城内ヘ召入置キ宮仕セサスヘシ。若年ノ事ナレハ顯胤ノ耳ニ入テモ左迄ノ怒リハアルマシキナレハ城外ヘ通ハルヽコトハ急度控ヘラレ可然ト諫メケル三郎其場ハ應諾アリケレトモ、鈴木カ諫ヲ不用シテ其後モヒタスラニ通ヒケル。去程ニ相馬郡中ニテ唱ケルハ、三郎ハ御舍弟ノコトナレハ、顯胤モ賴母敷思ハレ、境目ノ留守ヲ預ケラレシニ。却テ岩城ヘ引組、幼稚ノ盛胤ヲ計ヒ申サルヘキ工ミアリト。密々ニ沙汰シケリ。依之小高ノ城下ニテモ今掛田ニ永々ノ對陣年ヲ越テナリ。米澤ハ大身大勢其上加勢モアツテ殊ニ地戰ナリ。此方ハ小身小勢、他郡ニ入テ遠路ノ通用運送ノ物モ多クハ商賣ノ荷物ノ内ヘ入レテ送ルユヘ。萬ツニ付ケテ窮迫セリ。然ルニ黒木彈正ハ千倉ニ出テ軍卒ヲ備ヘ朝暮野武士ト戰ヒ。夜討シテ村里ヲ騷ス事止時ナシ、其上富岡ノ城代モ、右ノ通ナレハ當城ノ運モコレ極リナリ迚、僧俗男女佛神ヲ祈リケリ。小高ノ留守居ニハ年來伊賀ヲ置レケルカ、是ヨリモ折々此事掛田迄申シ通シケル、掛田ニテモ聞傳ヘテ密々ニ顯胤ヘ告ル者モアリシトナリ顯胤ノ曰、爭テカ三郎兄弟ヲ離レテ不當ノ心アルヘキソ、岩城境ナレハ此虚ニノリ取カヽリ、米澤ヘ力ヲ添ルコトモ有ント思ヒテノ唱ヘ成ヘシトテ、左ノミ疑心ノ氣色ナカリシトナリ。斯テ小高ヘ皈陣アツテ一夜城ニ宿シ、翌日供五六騎ニテ富岡ノ城ヘ入來アリ。三郎ヘ對面有テ申サレケルハ、伊達ニ永々在陣シ難儀ノ苦窮、其方ナラテ誰ニカ語リ聞スヘキト思ヒシニ。病疾ノ由ニテ小高ヘモ來ラス、無心元侍レハ我直々來レリ。岩城ハ日頃ノ手當知リツランナレハ卒爾ニ相馬ヘハ不可寄、其氣支ナシ、又彈正カ千倉ヘ出タリトイヘトモ。是ハ領内ナレハ猶容易ク蹈ツフスニ足レリ、其方氣力モ聞シヨリハ快ケナリ、此程ノ氣ノベニ鷹ヲモ仕ヒ。我皈

城ヲ逐ラレヨトテ三郎共々馬ニ乗リ相並ンテ路次ニテノ物語イト念頃ナリ熊川ノ町ヲ打スキ川端ニテ三郎暇ヲ乞フ氣色ナリシカトモ顯胤是ヨリ小高ヘハ今少シナリ今宵ハ可ニ慰入ニ事モアリ。其上堀内ノ老母ハモ久シク對面有ヘシ。氣分モ床シク思ハル・ナレハ幸ニ對面モ有ヘシトテ引具シテ直ニ城内ヘ同道有テ種々馳走アル兼テ其用意ヤ有ケン則三郎ヲ年來伊賀ニ預ケラル、座舖ノ内ニ一間四方ノ竹籠ニ入ラレタリ伊賀ハ城ノ東曲輪ニ住シタリ尤番ヲ附置キ其夜ニ富岡ヘ檢使ヲ遣シ三郎忍ヒ路ノ供シタル者一兩人切腹。又追放モアリケルナリ。代リノ城代ニハ室原伊勢ヲ置レタリ其後黒木彈正退治出馬ノ留守ニ堀内ノ母堂ヨリ小袖ノ中ニ小刀ヲ入テ三郎ヘ送ラレケル其上相圖ヤ有ケン或時番士トモニ晝夜ノ勤苦ヲ慰メントテ酒肴ヲ與ラレシニ何レモ數獻ノ醉ニ長シ睡眠ヲ催シケル。時ニ三郎件ノ小刀ニテ竹ヲ切リ籠ヲ出テ逃走ル堀内ノ小人ニ高新六トテ長大ニ強力ナル者アリケルカ彼ノ者ニ馬ヲヒカセテ中途ニ待セ置レシカハ三郎其馬ニ打乗先ツ田村ヘ打越ヘ夫ヨリ會津盛氏外戚ノ伯父ナレハ。是ヲ賴ミテ月日ヲ送リケルカ是ヨリ相三ト號シテ武者修行ニ郡郷處々ヲ回國セリ顯胤一代ハ皈參ナカリシトカヤ顯胤聞之番士ニモ油斷ノ咎メハカリニテ別事ナシ母堂ヘモ往々ニ三郎カ爲ナルヲ惡シク心得惡名ヲ得玉ヘリト咎言セラレシ迄ニテ別ニ子細ナカリケリ。

黒木彈正責田中城ニ顯胤出張彈正兄弟誅死之事

宇田行方ノ兩郡ハ元來相馬領ナレトモ遠境ニテ下知モ不ニ行渡ニ通路モ稀ナレハ郡民モ猥リナルコト多カリシマシテ元弘建武ノ頃ノ領地ハ昨日ハ今日ニ替ル昔ハ熊野堂ノ禰宜中村ヲ支配シケリトナリ此時分ノコトニヤ熊野堂ノ鐘ノ銘ニ文永正和等ノ年號且郡ハ藤原氏ノ名アリトカヤ然ルニ亂世ノ比國

郡武威ヲ爭フコト專ラナレハ、禰宜當所ヲ蹈ヘ難ク其頃奥州ニテ武勇强盛ナルハ、白川結城入道道忠ナレハ、彼禰宜白川ニ家禮シ、後ニハ白川ノ庶流ヲ招請シテ、今田ニ居館ヲ造營シテ是ヲスヘ置。中村殿ト號ス黒木彈正カ先祖モ。宇田郡ノ内黒木・駒ケ峯新地ヲ領シタリ。坂本近所甲橋亘理・宇田兩郡境ナリ。又宇田・行方ノ兩郡ハ文治年中藤原泰衡滅亡ノ時、賴朝公配與セラレシヨリ相馬領ナリト云傳ヘシ、然ルニ元弘兵亂以後ハ、國司源顯家卿支配トシテ相馬領ナリ其後武家宮方ト分レ、合戰ノ時相馬ハ足利ニ屬シ、尊氏ヘ始終不變味方ナリ。故ニ國司宇田ヲ取テ。イヨイヨ白川ノ支配トナリ。相馬ハ行方一郡ヲ領シテ諸方ニ敵シ、又國司ニ對シテ戰ヘトモ終ニ不降、後ニ世一統シテ將軍尊氏ヨリノ軍賞アルヲ以テ。宇田郡ヲ賜リタリ。此外宮城野出羽ノ國ノ内、岩城ノ内、仙道ノ内關所ノ跡玉ハリシカ。今宇田・行方・標葉ノ三郡ハカリ、全ク相馬領ニテ殘リケリ。偖國司滅亡シテ尊氏威盛ンナレハ。宮方ニ屬シタル者共苗字ヲカヘ、名ヲ隱シテ所々ニ散在シ。安堵シケルカ。時トシテ相馬ノ下知ヲ背キシカハ、相馬ノ先主コレヲ制スルコト朝暮ナリ、偖又中村ト黒木ト不和ニシテ、朝暮鬪爭止ム時ナシ、然ルニ後々和融ヲナシ。緣ヲ組ンテ中村ヲ聟ニシタリ。中村今田ヲ去テ馬場野ニ居館ス。其比今ノ中村ノ城ハ天神山トテ。天神ヲ鎮守ニ崇敬アラハ榮久ナルヘシト。古賢ノ申傳シトナリ。又此城ハ賤ノ男カ木ノ葉ヲ搔キ、枯枝ヲ拾ハントテ、此山ニ入テ見立タル故ニ城ノ山號ヲ夫立山ト云々、偖此城ヲ中村結構スル時、黒木カ先祖舅ナレハ助力シテ既ニ成就シ、吉日良辰ヲ撰ンテ城ニ入ントスル處ニ、黒木カ先祖待設セン迚、中村ニ先立テ城ニ入シカハ。中村疑心ヤ起リケン。城ヘ不入自是シテ黒木中村再ヒ異心ヲサシハサミ、黒木馬場野ヲ責テ終ニ中村ヲ討タリ。依之白川ヨリノ後孫ハタヘタリトナリ、黒木中村ヲ討タルコト、中村カ士卒相馬ノ先主ヘ歎キ訴ヘケレハ、先

圭則手勢ヲ率シ馬場野へ出張中村カ居館へ入其夜宿衞有ニ諸卒ノ來リ集マルヲマツ其時先主中村カ位牌ニ向テ誓約アリシトナリ翌日中村ノ城ニ押寄スルニ黒木則降参シ陳訴シケルハ是全ク相馬ニ對シテ異儀ヲ存スルニ非ス中村ニ私ノ遺恨深キ子細アツテナリト樣々ニ云譯ヲ立ケレハ。則是ヲ聞届ケラレ免許アルノミナラス、太刀一腰與ヘラレタリ。斯テ先主ハ小高ヘ皈陣ナリ中村カ諸臣申ケルハ惡人ノ黒木ヲハ許容アツテ太刀迄ヲ與ヘテ時ヲ得タリ、忠節ヲ存シタル中村カ位牌ノ前ノ誓約ハ跡ナシト恨ミケルトナリ後ニハ中村ノ者共モ、黒木カ支配ニ當ラレタリ去程ニ黒木ニハ彈正居館ス中村ノ城ニハ同弟黒木大膳居住シタリ。黒木ハ相馬ノ旗下ナリトイヘトモ事明カナラス天文十年ノ秋、顯胤掛田出陣ニ、彈正兄弟又亘理武石ヨリノ加勢。東郷ヲ大將ニテ人數ヲ引卒シ掛田ヘ参陣セシカ。翌年ノ春宇田ヘ引退キ黒木、東郷其外北方ノ士卒ヲ與黨シテ北郷ヲ奪ヒ取ラント其年ノ冬千倉ノ庄ニ打入リ、壽性寺山ニ陣城ヲ構ヘタリト田中ノ城ノ留守居ヨリ小高ヘ注進ス先北田中ノ城桑折駿河カ嫡子左馬助。二男治部少輔其外北郷ノ人數又桑折カ族類ヲ差ソヘ掛田ヨリ千倉ヘ皈サレタリ左馬助カ嫡子同治部少輔カ嫡子ヲハ掛田ニ留メラレタリ。斯テ木幡尾張ヲハ相馬ニ殘ス所ノ士卒ヲ集メ、瀧迫ノ城ニ籠メ、田中ノ後詰トナシ、小高ニハ年來伊賀留守居ニテ、子息盛胤ヲ守護セサラル亦田中ノ留守居セシ天神堂ハ、前ノ駿河カ兄左馬ニハ叔父ニテ、度々戰功武勇ノ法師ナリ。偖左馬ハ本城ヲ守リ、治部ハ西館ヲ守レリ、此田中ノ城、昔ハ松柏生茂リ三方ハ大ソケニテ道一筋アツテ卒爾ニ落城スヘキニアラス、後年ニ至テ、石田治部少輔三成、堀久太郎與ノ大崎仕置ノ爲下向ノ時、此城ニ數日滯留シ、古木ヲ伐入レテ堀ヲ埋メタル所ナリ、サレハ去年ヨリ當夏マテ、彈正ト田中ト互ニ睨ミ合テ迫リ合シカ、或時黒木方屋形村ヘ夜討シテ、僞リ謀ツテ

引除ク所ニ。城ヨリ出テ追慕ヒ、壽性寺山ノ下七橋迄、勝ニ乘テ追タリ彈正元來ノ謀略シテ。難所ノ橋ヲ楯ニトリ返シ合セタルニ、田中勢色立所ヘ彈正山ヨリ下リ、田中勢ノ迹ヨリ押包ミ討ントス故ニ小勢ト云。遠ク追過シテ勞レケレハ、前後ノ敵ニ押亂サレ。今ノ海道ノ西ニアル七橋ニテ。桑折治部少輔・同子新九郎、新十郎・佐藤美濃ヲ始其外北郷五十餘人ノ内モ討レタリ。田中勢追亂サレ、城中ヘ引入ルモ難成程ナリ。入兼タル者共ハ下ノ濱ヘ落ケルカ。阿彌陀寺ノ下モユイテ橋迄。悉ク散亂シテ討レタリ。桑折カ一類其外五十餘人ノ者共、黑木カ謀略ニ落入。十三人殘リテ其外討レ手ヲ負タリ。此殘リタル十三人ハ。城ヘ逃入タル者共ナリ、此注進ヲ顯胤聞レシカハ佐藤伊勢ト評談有テ。伊達西山ノ合戰ヲ急カレシトナリ、偖皈陣ノ後富岡ノ一事ヨロツ首尾調ケレハ。再度ノ注進彼是延引アルヘカラストテ。北郷表ヘ出張アルヘシト定リケル、斯テ江足リ中館ニ本陣ヲ構ヘ、又街道ヘ出ル處、土屋ノ堀切ハ岡田備ノ口ナリ。堀内ハ中館ヨリ東ノ方杉ノ館ニハ、城代板和泉ヲ頭ニテ備フ。瀧カ迫ニハ木幡尾張、小屋ニハ岡和田ヲ始其外士卒加リテ陣ス。田中ノ城ニハ桑折左馬助、室藏寺前ノ輪藏館ニハ桑折上野、並ニ蜆ノ者共備ヘタリ。斯テ野伏シセリ合夜討抔シテ、鬪爭晝夜止時ナシ、其頃ハ鹿島ノ町モ人居ナク、江足リ迄ノ間鹿島ノ四方大形荒山野ナリ。田畑ハ後ニ開キタリ、然ルニ亘理ノ東郷ハ、木幡尾張カ壻ナレトモ未タ對面ナシ。此陣幸ナリ、アワレ此方ヘ忍ヒテ來リ候ヘカシ、對面物語リスル事モアリト。ヨリ〳〵申シ遣シケレハ東郷則瀧迫ニ來ル、袴ヲ着シ。上下七十人ハカリニテ、夜中ニ忍ヒ至ル、祝儀ノ歡盃アル所ニ、相圖ニヤ有ケン。相馬勢押ヨセ。二重三重ニ城ヲ卷タリ。此城北ハ峩々タル巖ニテ峯高シ。其外ハ敵ノ中ナレハ城ノ南ニ續キタル大岡山ト云處ヲサシテ迯シカトモ、前後不知案内所ナレハ、夜陰ト云。途方ニマヨヒ、モミノ木澤ニ迯入タリ、城ト此間四町

ハカリナリ、詮方無ヤ思ヒケン。此所ニテ七十人ハカリノ者、大形ニ自害シタリ。東郷塚トテ山下ニアルハ是ナリ、彈正兄弟憤リテ杉ノ館ニカヽリテ合戰ス。顯胤ノ旗本ハ江足リヨリ直ニ鹿島ヘ越ヘ、敵ノ跡ヨリ取カヽル、泉其外城ヨリ出テ平野ニテ合戰ス、岡田堀ノ内大井ハ館ノ下ヨリ押來リ。寺内ノ方ヨリ横合ニカヽル三方ヨリ驅合セテ責立シカハ、彈正即時ニ打負テ手負死人數々ナリ　相馬方ニモ士卒四十ハカリ亡ヒタリ　東郷自害ノ後ハ、右人數ハ皆引連レテ亘理ヘ皈ル　彈正兄弟平野ノ戰ヒニ人多ク討ル　東郷カ外ハ皆一騎立ノ寄合者ナレハ、力ナクヤ思ヒケン。コラヘ兼テ皆引拂テ退キケリ。顯胤不追之　惣軍ヲ揚テ則小高ヘ皈陣ナリ。其後日ヲ經テ黒木退治ノ爲。出陣アルヘシト觸サセ。マツ泉舘ヘ首途アリ。終日終夜遊興ニテ　翌日直ニ金澤石見カ宅ヘ移ラル。種々饗應ス顯胤金澤ニ申サルヽハ、首途ノ祝儀ナレハ、兼テ一首ト望マル　石見不取敢

天神ノ御代ニマキオク顯胤ハ、宇田ノ道
ヲハ思フ儘也。

是宇田ノ城ハ　天神鎮守ナルヲ思フテカク云ケルトナリ　顯胤興シテ褒美アリ　後軍終テ祝儀トシテ、蚫村ノ内荒谷ト云所ノ在家一間ノ田地ヲ與ヘラレシトソ、斯テ顯胤宇田ヘ發向。則黒木ヘ押寄ル　此時岩城ヨリ少々加勢アリ、コレハ木戸富岡近所ノ者共ナリ、此士卒ヲハ中村ノ押ヘニ殘シ置。相馬勢ニテ黒木ノ城ヲ攻ムル　彈正モ支ヘ防キシカ亘理ノ加勢ハ引取、其外ノ助ケハナシ　今ハ力ナシトテ降參ヲ乞フ　然ラハ人質ヲ可出ト有テ、幼稚ノ子ヲ質ニ出ス、（後ニ黒木對馬ト云々）彈正カ次男ナリ。時ニ四五歳ナリ。又中村ノ城黒木大膳ニモ彈正如斯上ハ。人質ヲ出サハ責口ヲユルスヘシトナリ、然レトモ城中疑貽スルニ依テ。則彈正カ子ヲ見セケレハ是ニテ疑ヲ散シテ人質ヲ出ス。此子黒木十郎左衛門カ父ナリ、是モ五六歳ナリ。彈正兄弟小高ヘ出仕スヘシト命ヲ諾セシカ、出仕ノ爲山傳ヘニ平

野迄出タリシカ、彈正北郷ニテ勝利ヲ得タル。其遺恨ヲ含ム者共、跡ヨリ押續キ、黑木ヲ可レ討トノ結構アリナト聞ヘシカハ此コト氣遣ニヤ有ケン、平野迄ハ三度來リシカ是ヨリ跡ヘ返シテ終ニ小高ヘ出仕セス。故ニ顯胤疑心有ケルニヤ。或時亘理武石ニ遺恨アリテ出張ノ時、黑木兄弟先陣タルヘシト定メ、偖日限ニ成テ出陣、宗禪カ原ニ備ヲ立、各一手頭ノ士將本陣ヘ可レ參、軍ノ評議可レ有ト觸タリ。彈正父子大膳父子モ可レ參トナリ。此彈正ハ大男大力ノ者ナリ、則討手ニ江井河內四十歲ハカリ、靑田太郎右衛門四十二歲、此二人モ大男大力ナリ。大膳父子ヲハ其外在合ス者共ニ、討手ヲ云渡サル、偖盃ノ上肴トアル詞ヲ相圖ニ、定メ置ル。斯テ彈正ヲ帷幕ヘ招ク。佐藤伊勢傍ニアリケルカ、彈正君前ナリ。兜ヲ脫ヘシト、彈正答テ軍陣ニ將士ノ禮ナシトテ出ケリ、盃トアリシ時。兜ヲ脫タリ、則杯ヲ請ル、肴々トアルトキ、靑田立テ肴ヲ持向フ、彈正頭ヲ下ケテトル處ヲ。江井酌ヲ採リケルカ。銚子ヲ彈正カ顏ニ打付ト否兩人太刀ヲ付ケテ天窓ヲ切割リ、則討オサメタリ。大膳始三人太刀ニ手ヲカクル處ヲ。各心得待居タレハ、四方ヨリ取卷テ討留タリ、是ヨリ馬ヲ返シテ黑木ヘ押ヨセ。僧俗男女ニヨラス。ナテ切ニセヨトアリケルヲ。一族老臣諫ケルハ、彈正一人ノ惡心故各ノカレ難ク與シタル者ナリ。侍ハ渡リ者ナレハ許容アルヘシト、諫ムルニ依テ其義ニ不レ及シトナリ、則黑木ノ城代ニハ靑田信濃ヲ差置、中村ニハ草野ノ城代草野式部ヲ移サル。此時顯胤ノ前ニテ。江井ト靑田ト初太刀ヲ尋ラル。江井ハ靑田初太刀ナリト云、靑田ハ江井初太刀ナリト云。互ヒニ爭ヒケルニ。江井カ曰。靑田カ初太刀ノ證據ハ刀ノ峰ニ某カ太刀ノ中リタル切込可レ有トナリ、コレヲ見ルニ江井カ詞ノ如ク、靑田カ太刀ニ切込ミ少シアリ。故ニ靑田カ初太刀ニ極リケル。互ニ初太刀ヲ讓リアフコト。先以テ武勇ノ心掛神妙ナリ、又江井切込ミノ覺ヘアル、流石武勇ノ功者ナリ、初太刀ヨリモ功名ナリ迚。顯胤ヲ始メ諸

一土コソツテ賞美シケリ

稙宗被移丸森并亘理武石遺跡之事

稙宗小高城ノ内ニ一年餘リ居住アリシニ。伊達ノ一族老臣等樣々執扱有テ後 晴宗ヘモ痛ク諫言シケレハ晴宗ニモ納得有テ以後逆亂アルヘカラストニカタク誓約アリケレハ 顚胤承諾有テ、此上ハ伊達ヘ移リ玉ワハシトテ 稙宗ヘモカクト告ラレケリ 稙宗恩ヲ謝シテ申サレケルハ、相馬ノ芳恩生々忘ルヘカラス起請ヲ可書トナリ 相馬ノ老臣共申シケルハ爭カ去ルコトノ候ヘキ 只御父子ノ中和平ナランコトコソ相馬ノ喜ヒニテ候ト申ケレトモ、稙宗是非ト望マルルニ依テ 然ラハ此ニ起請ノ石トテ石アリ 飯路ノ序ニ此石ニ誓約アルヘシト申ス 此石北鄕ノ中ニ有。石ノ事前卷ニ見ユ 伊達・相馬ニ向テ七代マテ弓ヒクヘカラスト。約詞アリケルトナリ 是ヨリ後ハ相馬ヲ實子ヨリモ賴母シク思ハル迚 二ケ月三ケ月ニ一度ハ丸森ヨリ必ス小高ヘ入來アリシトナリ 盛胤ノ代迄如斯アリシトカヤ、或曰靑田信濃ニ稙宗申サレケルハ、金山ハヨキ城地ナレトモ。水ノ手惡ク、去レトモ其方抔宜ト思ニ於テハ、取立テ移スヘシト 信濃申ケルハ、左樣ノ事某式ノ存スル處ニ不有レトモ 今荒山ヲ取立ル事ハ大ナル普請ナレハ 先丸森ニ御移リ 連々ノ思シ立可然ト申ス。稙宗ノ曰 我斯云ハ我可住爲ニ非ス 相馬ト伊達末々必ス敵對アルヘシ、 其時伊達ヲ責ンニハ。能キ便宜ノ地ナル故。度々カクハ云ナリト申サレケル 稙宗ノ心實ニ相馬ヘ深切ナルコト如此 時ニ稙宗ノ近士外樣下部迄 上下八十人ハカリニテ。丸森ニ居簡セラレケル。

或曰 顚胤彈正退治ノ後 石神ノ舘ニ藤橋紀伊ヲ差置キ 新沼ヲ附助セラル。藤橋村モ如元知行ス 紀伊富人ナリシカハ。稙宗ノ臺所ヲマカナヒツヽケタリ 相馬モ小身ナレハ助力續カス 折々事切レタルヲ。藤橋斯クハ見兼申シケリ 其報恩ト有テ 小齋金山ノ間ニテ 島田村ト云村ヲ紀伊、代與ヘラレ

シトコソ聞ヘシ。

其頃亘理ノ城ハ、金雄山寺ト云禪院ナリ。今ノ城ハ小堤村ノ内、妙見山トテ鎮座ノ山ナリ。今モ城内ニ妙見ノ社有トナリ。亘理ノ輩、今モ正月三ケ日ノ間ハ潔齋ナリ。千葉六黨ノ内ナル故如此天文ノ末武石氏死去ナリ。其頃乳子一人アリ老臣諸士評談シケルハ。今亂世ノ折柄幼主ヲ養育セン其内頼ミ少シ。何方ノ將ヘナリトモ、依倚シテ幼君ヲ守リ立ヘシ。サレハ伊達ハ大身ナリ。隣郡舊家ノ武士、皆旗下ニ靡ントス亘理ハ伊達ヘ隣レハ。猶親シミヲ可求コトナレトモ、米澤ハ遥隔テハ急ノ用ニ立難シ。相馬ハ一家ノコトナレトモ。是又先年黑木カ逆亂ノ時、イハレナクシテ東郷黑木ニ加勢シテ。士卒又身命ヲオトセリ シカシ是武石殿思立ニテ如此セシコトニ非ス。其頃ハ一族ノ東郷ニ郡中ノ事打マカセラレ其上伊達相馬取合ノ最中。伊達ハ大身ナレハ、相馬モ大事此時ナリ若此虚ニ乘リテ彈正行方半郡モ切トラハ大身トナリ、後々ハ亘理ヘモ取リカヽルヘシ。今度加勢シテ首尾合セオカハ。黑木ト亘理末々モ一和スヘシ。サアレハ亘理ヲ貪ル者アルマシト申スニ依テ、武石殿承引有テ加勢モセラレシ事ナレハ。當座ノ申譯ハ可立ナリト云々、或ハ夫レモ云譯ニモアラスシテ。今年月ヲヘテ云譯ノ詮アルヘカラスト云モアリ。又傍ナル人ノ云、縦如何ナル遺恨アリトモ。相馬ハ一門ノ中ナリ。今武石ノ家滅盡スヘキ時節ナレハ。幼子其外諸家中ノ斷絶、憐愍ノ心ナトカ無ンヤ。窮鳥懐ヘ入ルノタトヘナルヘシ。一旦ノ咎メコソ有ヘケレ。捨ツル事ハ不可有 相馬ヘ依倚シテトモ角モ計ヒニ任スルヨリ外アルヘカラスト議定シケレハ、亘理ノ老臣小高ヘ行テ。顯胤ヘ此コトヲ願ヒケル、顯胤ノ曰、武石一門ノ情ヲ離ル而已ナラス 某カ旗下ノ者ニ組シタルコト。頗ル遺恨ナレトモ、先主武石死去ノ上ハ。相手ニ可取樣ナシ 其上譜代ノ諸士幼兒ノ主取立ントノ志不便ナレハ、難見捨可任其願、依テ三歳ノ幼兒ト母儀トハ小高ヘ移

シ來ルヘシ亘理ヲハ此方ノ加番ト各ト相共ニ城代一スヘシトナリ、老臣應諾シ。一禮演ヘテ亘理ヘ皈リ。武石ニ蔵ノ幼兒ト後室ト則小高ヘ移シケリ。相馬ヨリノ加番與力ハ青田左衛門是ハ信濃カ嫡子ナリ。水谷伊豫二人共ニ時ノ老臣ナリ。兩人一ケ月置隔番ト定メケル。然ルニ天文十七年盛胤ノ一子長門守義胤誕生アリ。依之武石ノ後室ヲ義胤ノ乳母ニ附ラル。亘理ノ老臣一族聞之各評義シケルハ武石ニ遺恨ハ勿論ナレトモ、一旦申シ分ル處許容有テ、一門ナレハ難捨小兒養育有テ亘理ニ主トスヘシ、其内ハ加番ヲ以テ守ラスヘシトノ約諾ナリ。然ルニ今後室ヲシテ孫ノ乳母ニセラルヽハ、是ヒトヘニ家人ノ如シ。左アル上ハ武石小兒ノハ全ク相馬ノ家中ニナスヘキノ仕方ナリ。然ル上ハ亘理ハ相馬ノ掌中ニ入ン結構ト見ヘタリ。是畢竟ハ青田父子カ計略ナルヘシト角ニ小兒ハ廢リ申サレタリ。加番ニ來ラン青田ヲ討テ。其上亘理ノハ伊達ヘ附屬セント云。亘理ノ家老ノ内伊達三郎是ハ伊達ノ一族ナルカ。晴宗ヘ恨有テ武石ヲタノミ。金津ニアリシカ。青田左衛門ヲ可討企アリト聞。大平主膳ト一味シテ老臣共ニ云ケルハ。各左衛門ヲ討タリトテ亘理ヲ寄合ニモ持タハコソ。伊達ノ旗下ニ成コトハ先主ノ本意ニ背ケハ靈鑑ノ恐レアリ。所詮相馬ノ計ヒニ任スヘシ。其上相馬ノ仁愛他ニコトナリ、縱旗下ニナルトモ相馬ハ亘理ヨリハ惣領家ナリ、尤關十三將ノ其一ナリ。今出盛ノ伊達ノ旗下ニナランヨリハ、相馬ニ附屬セハ。末々アシキ計ヒハ有マシキソト詞ヲカサリ云ケレトモ。各曾テ承引セス左衛門カ來ラハ是非可討ト一決ス。故ニ三郎主膳方ヨリ右ノ次第具ニ相馬ヘ内通セシカハ、加番ノ沙汰モ止ニケリ。伊達三郎ハ亘理ヲ立退。同國ト號シテ出ケリ。大平ハ黒木ヘ立ノキタリ。依之亘理ノ一族家老評議一決シテ則亘理ヲ晴宗ヘスヽメ。皆附屬シタリ。又何レノ年ノ頃ニヤ有ケン。稙宗亘理ヲ巡見アリケル時、亘理兵庫トテ武石ノ一族家老カ元ニ寄宿セラル。

兵庫種々馳走ノ餘リ、一女ヲ出シテ酌ヲトラセケリ。此娘懷胎シテ男子ヲ産生ス。一夜子ナリ。是ヲ綱宗ト云。（近代之綱宗ニハアラス）カクテ此娘ヲムカヒトリ、妾ト定メラル、後ニ出生セシヲ元宗ト云。亘理元庵ト云シハコレナリ。偖兵庫一子ナキ故。稙宗ノ二男元宗ヲシテ祖父ノ遺跡ヲツカセリ。元宗ノ子重宗マテハ亘理ヲ名字トス。其子定宗ノ時ニ至テ。政宗ノ命ニ依テ亘理ヲ改メ。伊達定宗ト號シケル、又後ニ至テ武石市左衛門ト云シハ此三歳ニテ相馬ヘ來ル小兒ナリ、又武石讃岐ト云シハ。市左衛門ニハ弟ナリトモ云ヘリ。

掛田落城附顯胤卒去 並顯胤與頭陀寺導師契約之事

何レノ年ニヤ有ケン、顯胤川股ヘ發向アル。敵ハ誰ニカ有ケン分明ナラス。或人ノ云。顯胤先年掛田ヘ出陣ノ時、伊達義宗ノ領地ナレハ。引入馳走セラル、故、顯胤本意ヲ遂ラレタリ。其上義宗ノ女ヲ。顯胤子息盛胤ノ妻ニセラル、依之掛田ハ相馬境ナレハ、伊達ノ爲末々危シト、晴宗心ヨカラス思ハレケル折柄。義宗死去ナリ、其子俊宗ノ代ニ成テ、晴宗掛田ヲ亡スヘキノ心付有ケレハ。先ツ掛田ノ族類老臣ニテ大身ナレハ。中島伊勢・櫻田玄蕃此兩人ヲ語ラハル。兩人則應諾ス。依之卒爾ニ軍兵ヲ發シ掛田ノ城ヲ責ルニ。元ヨリ兩人内通ナレハ、内外野心起テ城保チ難ク。日ナラスシテ落城セリ、俊宗ノ弟藤田七郎ハ、伊達郡藤田遺跡ヲ繼テ有シカ。兄俊宗責ラル、ト聞テ。早馬ニテ掛田ノ城ヘ來リシカ共落城ノ時節ナレハ。倶ニ落テ相馬ニ來レリ。草野ニ久シク在テ後馬場ヘ移ル。俊宗ハ秋山ト云處ヘ落行、隱レ住ム。譜代ノ百姓共養ヒ置テ、終ニ此ニテ死去ナリ。此落城ハ稙宗石ノ誓約ノ後ナリト云々。其後櫻田等伊達方ヲ語ラヒ。相馬境ヲ貪ルニ依テ。顯胤兩度出陣アッテ軍相馬方利アリ、此時顯胤川股ニテ勝利ヲ得テ。其邊ノ山ヘ人數ヲ打揚、備ヲ立テ休足アル處ニ。頭陀寺ノ住持青牛和尚（開山ナリ）時ノ名僧ナルカ。陣所ヘ見マハレケル。顯胤ノ曰、終日ノ合戰ニ疲

レ侍レハ冑ヲ脱今夜ハ休足申サント和尚ノ曰コレハ流石ノ大將ノ詞共覺ヘ不申下世話ニモ勝テ兜ノ緒ヲシメヨト申スハ不及申勝誇ツタル油斷ヲツヽシマスルノ語ニ非スヤ顯胤尤ナリトテ、打ク面語アツテ申サレケルハ我明日ニモ亡命アラハ必貴僧ヲ賴ミ入ルヘシ契約シ申スナリト。和尚夫レハ百年ノ後ノコトヽモ角モ迚飯ラレタリ然ルニ顯胤天文十八年四十二歲ニテ卒去ナリ遺言ナレハ迚截松靑牛和尚ヲ請待シテ導師トス、其時截松靑牛和尚下火ノ詞ニ云雄山々々 昔年伐軍事 今閻羅王捧前諸訟作麼生一喝 火打而喝云 破關透關サテ古來ヨリ菩提寺ナレハ新祥禪寺ニテ追福ノ法事執行セリ 截松和尚川股ヘ歸ラレスシテ 小高ノ内小斧岡ニ庵ヲムスヒテ閑居セラル今光寺是ナリ チカキ比マテ寺領抔モアリケルトカヤ。

伊達秘鑑巻之六終

伊達秘鑑巻之七

奥陽僊府 無々軒 編集

被誅木幡主水盛清事

爰ニ相馬ノ長臣木幡主水盛清ト云シハ 則尾張カ嫡子ナリ 總州相馬以來代々ノ重臣ニシテ 系圖ヲ預置レタリ 常州信田郡浮島太夫カ後孫ナリ。亦靑田左衞門ト云シハ、山澤ノ城代靑田カ庶流ニテ少分ノ者ナルカ顯胤誕生ノ時附ケ人ナリ 顯胤嫡子ニ立テヨリ漸々ニ立身シタリ 元ヨリ平常ノ才覺武道勇健ノ者ナレハ、盛胤顯胤兩君ノ覺ヘヨク長臣ノ列ニ並ヒ、後ニ信濃ト號ス、其子左衞門ト云シハ是ナリ。其頃田舍ノ武將ハ公方ヘノ出仕モナク、事不案内ナレハ、勿論公方出勤ノ長臣ニ申シ通スル方モナケレハ、山伏年々領入ノ便宜ヲ以、聖護院殿抔ヘ便リテ名代ヲ指登セ公方家ノ大帳ニ家名實名ヲ註セリ、是等モ代替リノ時、一代ニ一度ナリ、偖顯胤ノ時ハ木幡尾張ヲ上セ

ラル。今盛胤ノ時ニ至テハ、其子主水盛清ヲ上セラル。此盛清ハ武勇文才モアル者ナリ。又青田信濃カ嫡子左衛門亦武勇謀才ノ者ナリ。盛胤ノ代兩輪ノ家臣ナリシカルニ兩雄ハ必ス爭フ習ヒナレハ盛清ヲ亡シテ信濃父子權ヲ執ラント思フ心有ケレハ、顯胤卒去ノ後盛清ニ不義吾儘ノ振舞ヲ進メケルニ。盛清自ラ愼ム心アリテ其進メニ不應時モアレハ、青田尙進メテ其方ハ相馬ノ重臣ナリ、誰カハ異儀ニ可存。是程ノ事上ノ咎メハアラジ抔、父子カハルカハル樣々ニ事ヲ巧ミテ進メケレハ。盛清終ニ是ニ與ミシ往々少シノ奢侈出來レリ。亦顯胤臨終ノ時、他人ヲ除テ信濃一人枕近ク伺候シ何事ヤラン承ル躰ニテ。請諾スルヤウニ見ヘタリ。斯テ其後信濃盛胤ヘ時々申シケルハ先主御臨終ノ時人ヲ拂ヒ某一人ヲ召ヨセ。遺戒別儀ニ候ハス、沒後ニハ木幡主水奢侈ノ振舞多ク。當家ヲ失フ計ヒ有ヘシト、連々盛胤ヘ此旨ヲ諫ムヘシトノ遺言ナリ抔譏シケル。盛胤時ニ二十歲、若年ナレハ老臣ノ言誠ト思ヒ。觀察ノ心ナカリシカハ、其意ニ應シ木幡ヲ惡ムノ心出來レリ。其比信濃ハ黑木ノ城代ナルカ、二男ヲ城代ニノコシ置信州ハ大形小高ニ在リシナリ。嫡子左衛門ハ小高新館ニアリ。又木幡盛清ハ小高城内二ノ丸ニ住ス。亦新山ノ樋渡攝津守カ子民部ハ信濃カ婿ナリ、其外ノ諸士大小身内外樣ノ面々迄、左衛門ニ親ミ寄ル者ハ。サセル忠勤ナキモ所知ヲ與ヘラレシカハ。皆人靑田ヲ敬ヒ。權威ニ恐レ諂ケル。木幡元ヨリ家ノ重臣ナレハ自ラ人モ敬スレハ。改メテ威權ヲ震フヘキ事モナケレハ、主水ニ手寄ル諸士モ。大形心ヲ變シテ信濃父子ニ附屬シタリ。然ルニ天文二十年。聖護院ヨリ兩使來レリ是ハ山伏ノ仕置ニ下レリ然レトモ相馬抔ノ仕置公方制法ノ事抔モ相兼テ指下サレタリ兩使一人ハ增梁ト云出家。一人ハ俗士藤久ト名乘ル兩使申スハ。田舍ニテ境目ニ關所ヲ据ヘ。往來ヲ苦シムルコト不可有尤三年ニ一度上洛スヘシ。若武將障リアラハ名代ヲ上スヘシ亦轂

物等境ヲ不出コトハ年ノ熟不熟ニ依テ制スヘシト是等ノ條々申立ケリ　則城下ノ長明寺ニ兩使寄宿セリ。依之盛胤長明寺ヘ來リテ兩使ニ對面アリ、暫ク話談有テ歸城ナリ。猶盛胤歸城ノ跡ニテ　増梁藤久申シケルハ　相馬ノ武將ハ盛清ト申シテ代替リノ時上洛ナリ　實名公方家ノ大帳ニノセタリ、今亦武將盛胤トテ來リ對面アル相馬ニハ武將二人アリヤトテ、疑ヒ不審シケレトモ、其沙汰ニモ不及兩使ハ長明寺ヲ發駕シテ標葉ヘ打越大聖寺ニ滯在ス。此跡ニテ誰云トナク囁合テ此事ヲ沙汰シケリ。盛清ハ夢ニモ不知左衛門是ヲ聞付テ　待設タルコトナレハ、父信濃ニ傳之則盛胤ヘ密訴シタリ。盛胤是木幡カ異心ナリト思ハレケレハ。信濃父子ニ評談有テ、兩使ノ跡ヲ追テ標葉ヘ人ヲ遣シ、尋問セラル、ニ事實證ナリ。幸兩使ヲタノミ。如何ニモシテ帳面ヲ改ヨトナリ。左衛門則大聖寺ニ至テ兩使ニ向ヒ。密談スルハ盛清ト申スハ、先年爲名代上洛シタル者ナリ。是相馬ノ舊臣ニテ候。

今度各ヘ對面セラレシハ。顯胤家督ノ武將相馬盛胤ナリ。盛清ハ木幡主水ト申ス者ナリ、何卒公方家ノ帳面ヲモ盛胤ト改メ玉ハルヘシト。兩使ヲ賴ミ談シケレハ。無子細應諾ス、左衛門カ云後證ノ爲ナレハ。相馬盛清僞作ヲ改メ相馬盛胤武將無疑上ハ、公方家ノ大帳ヲモ盛清ヲ消シテ。盛胤ト書改ラル、ヤト、墨付一紙玉ハラハヤト懇望セシカハ。兩使則加判ニテ委細ニ與ヘタリ　左衛門喜ヒ懷中シ、退ヒテ小高ニ歸テ盛胤ヘ達之兩使ヘハ盛胤ヨリモ左衛門方ヨリモ音物有ケルトナリ。盛胤オトロキ一族並ニ信濃父子各老士ヲ集メ。評議アツテ不及別儀。盛清ヲ可討ニ議定ス、兩使標葉在留中、彼ニ不聞樣ニ事急ニ計ラハル、盛清此旨ヲ聞付テ陳謝スヘキ樣ナカリケルニヤ栃窪ノ渡邊右衛門カ方ヘ落行ケリ　盛胤即時ニ押カケ。右衛門カ赤柴屋敷ニ二重三重ニ取卷タリ、此右衛門ハ元來盛清カ家中ナレトモ。武功才覺ノ者ナル故、召出シテ栃窪岡ニテ所知ヲ受ル故、栃窪右衛門ト號

ス。斯テ取卷タル士卒聲々ニ罵リケルハ。盛清ヲ討テ出スニ於テハ。其賞過分タルヘシト呼ハル。暫ク有テ右衛門カ弟渡邊平治右衛門。盛清ヲ討テ首ヲ捧ク。故ニ褒美トシテ所知ヲ施サル。此子孫今ニ有テ是モ栃窪ヲ名字トス。盛清妻ハ伊達ヘ落行ク。其時懷子ノ男子アリ。是ヲ養育シテ伊達輝宗ヘ勤仕ス。其子相續テ政宗ヘ勤仕シタリ。此子孫奥山氏ナリト云々。盛清弟ヲハ岩城ノ浪人ニ命シテ殿中ニテ討セケルニ討損シ。傍ノ人討收メタリ。又盛清カ親族被官ニ目々澤彌九郎逆武勇ノ者アリ。折節泉田ヘ行ケルヲ士卒出向ヒ。皈リヲ待テ討之。是ハ盛清ニチカキ親族ナリケリ。

青田信濃企逆意附於田中催酒興事

天文廿年。木幡主水盛清誅セラレシ後。青田信濃父子ニ肩ヲ並フル者ナク。威權イヨ〱十倍セリ。盛清討レシ時。傍ヘノ人囁キ云ケルハ。今度兩使ノ詞知リタル者ナケレハ。書キ物ヲ兩使ノ渡シタリト云モ　左衛門一人ノ計ヒナリ。又大平寺ニテ兩使ニ對面モ左衛門一人ニテ。外ニ知タル者ナシ。幸ヒ兩使モ滯留ナレハ。盛清左衛門亦此事ヲ申シ出シタル者ヲ召出シ。一決シテノ上。兎モ角モアルヘキ事ナルヲ。盛胤ヲ始メ一族老臣ノアヤマリニテ。輕々シク家ニ傳ハリタル舊臣ヲ滅シタリト評スル者モ多カリケリ。サレトモ青田父子カ權威。増々水ノ涌クカ如クナレハ。誰有テ口ヲ開ク者モナカリケリ。爰ニ桑折左馬ハ盛清カ壻ナリ。然ルニ永祿年中左馬カ嫡子駿河病死シテ無一子。故ニ遺跡斷絶シタリ。故ニ伯耆カ娘ニ桑折カ武具下人男女等ヲ添テ。家財ハ先主ヨリ與ヘラル。仍テ十一間ノ倉庫九ツヘ貯ヘ置ケルヲ。此度盛清カ罪ヲ云立テ。其餘類ナリ迚。件ノ庫中ノ武具家財闕所シテ召上タリ。此皆青田カスヽムル所ニシテ。盛胤ヲ郡領ノ士民ニウトマセントスルノ結構ナリ。駿河カ所知ノ跡ト。田中ノ城代ヲハ。佐藤伊勢ニ命セラル。伊勢カ跡立谷ヲハ岡田十右衛門　日下石ヲハ杉目參河。富澤ヲ

二ハ青田六郎ニ附セラル。伊勢吉長ヲエラミ。田中ノ城ニ人ント用意スル所ニ天神堂是ハ前ノ駿河カ兒八十餘ノ老法師ナリ桑折杢之助。同弟太郎右衛門・同新九郎。同弟雅樂允。同弟出雲・桑折丹後其外桑折ノ一族ヲアツメ申シケルハ。此田中ノ城ハ。先祖ヨリ代々桑折ノ嫡孫住館ス其由緒ヲ以テ相馬ノ支配トイヘトヒ首ヘノ不捨殊ニ度々忠戰アルニ依テ田中ノ城代ハ永々不可有相違旨相馬先主ヨリ判形ノ證アリ然ルニ相馬モ三代桑折カ家モ三代未タ多年モ不經ニ判形ノ甲斐モナク此度佐藤伊勢ヲ城代ニ移サル、コト面々ハ如何思フソ存命（ナカラヘ）テ先祖ノ名ヲ汚サンヨリハ。此城ヲ枕ニシテ討死セン。各ハトモアレ我八十ニアマレハ、此憤志不可稱ト太郎右衛門カ日老人ノ言尤至極セリ我々モサハ存合タリ新館左衛門アラハニハ申サネトモ青田信濃北ノ境目ニアレハ。信濃ニ內談シテ籠城セヨ。各爲ニアシキコトハ有マシキト定テ田中城代ノ事ハ遺恨ニ可有ナト申セ

シカハ。新館カ云ニ任セ、信濃ニ密談シテ籠城セラレ可然ト云天神堂カ曰其新館カ左樣ニ云モ逆心カ忠節カ疑ハシク存スルナリ盛淸討レテ後、信濃父子奢リ重疊シ內々逆心ノ構アリト人口ニ云觸ルト雖モ信州父子カ威勢ニ恐レテ、盛胤ノ耳ヘ入ル、者ナシト聞其逆心ニ與黨シテ、猶先祖ニ恥ヲ與フヘキヤ、是ハ先祖ヨリ代々持來ル城ヲ．桑折一族ノ子孫モアリナカラ空シク跡ヲ潰サレ我々數輩アルニ此城渡シ置レヌ遺恨ナレハ此一事ヲ以テ城ヲ枕ニセント思ヒ詰タリ此程ハ信濃・紺野カ一類ヲ懇切ニ近付。三四代過タル事ヲ云立テ盛胤ヲウラムル心ヲ告クルト聞ケハ新館左衛門カ云事モ實ト思フヘカラス、盛胤ヘ敵對ト云ニモアラス只城ヲ枕ニシテ死スル迄トソ云テ各此儀ニ、決シテ伊勢カ來ルヲ待居タリ佐藤伊勢吉日ヲ撰ンテ、磯部コリ石宮迄來ル處ニ城中ニテ鐘ヲ撞ク桑折カ一族其外北郷左十餘人モ馳集ルヲ見テ伊勢城ヘ不入シテ立皈リケリ二度迄

右ノ如クナリケレハ。不ㇾ得ㇾ入シテ立皈リ。伊勢盛胤ヘ愁訴ス。盛胤聞モ不ㇾ敢。惡キ者共ノ企ナリ。我出張シテ忽チ城ヲ蹈落シ。彼等一々首ヲ刎ヘシトテ。則陣觸有テ手越ノ原迄出陣アル。然ル所ニ新祥禪寺ノ住持來テ。馬ノ口ニ縋テ申シケルハ。田中ノ城ハ馬寄セモ惡シ。其上桑折カ一類ヲ始。五十餘モ籠城致スヘシ左アレハ諸士モ損シ侍ルヘシ。愚僧扱ヒ可ㇾ申ノ間。マツ々々馬ヲ入ラレヨト。達テ諫言アリケレハ。盛胤其意ニ從テ則小高ヘ皈城ナリ。偖新祥寺•阿彌陀寺ヲ招キ。共ニ北郷士ノ内岡和田ノ某ヲ呼ンテ申シケルハ。北郷ノ輩盛胤ヘ對シテ。逆意案外至極セリ。各ノ無分別ニテ。先祖マテノ名折ヲ與フルナリ。カヽル企ヲ結構センヨリ。何トテ駿河カ名跡ヲハ愁訴申サヌソ。左アラハ愚僧等取次可ㇾ申トナリ。和田モ岡モ其意ヲ得。兩人田中ヘ皈リ。右ノ次第ヲ云ケレハ。各モ納得シ。駿河名跡ヲ斷絶セラルレハコソ。斯ハ遺恨モ含ムナリ。名跡ヲ立ラルヽニ於テハ。異議ヤ不ㇾ申トナリ。依ㇾ之新祥寺•阿彌陀寺取持テ。盛胤ヘカクト申ス。桑折カ家ハ國司顯家ノ一族ニシテ。眞野五郎カ後胤。代々田中ニ居住シ。當家ノ支配ヲ得テモ數年城代ヲ勤メ。其忠義他ニ異ナリ。然ルヲ駿河カ名跡ヲ潰サルコト。相馬先々ノ制形モナキニ似タリ。且ハ先主ノ追孝ニモ成ヘケレハ。名跡ヲ立玉ハルヘシト。兩僧共々ニ諫訴アレハ。盛胤尤ト有テ。更ニ誰ヲカ名跡ニト望ムヘシトナリ。兩寺謝シテ則田中ヘ云遣ハス。桑折カ一類喜テ。然ラハ桑折上野カ二男太郎右衛門ヲ立ラレ預リタシトノ願ナリ。則盛胤ヘ執訴ス。承引有テ太郎右衛門桑折駿河カ名跡ト極ル。然ルニ紺野善德。コレハ駿河カ家中頭ナルカ。信濃ニ兼日與シタルヲ知テ。此度ノ籠城ニ紺野カ一類ヲハ不ㇾ入キ。然ルニ内々信濃カ云敎タルニヤ。善德盛胤ヘ愁訴シケルハ。太郎右衛門ハ駿河カ從弟ニテ候ヘ共。頃日迄傍輩ナレハ。主ニ致シテハ家中ノ思ヒ寄如何ナリ。一人ニテモ下ニ不ㇾ服者有テハ。却テ再ヒ名跡ノ故障起リ。實ニ斷絶ノ基タルヘ

シト云々盛胤又是ニ迷ヒテ然ラハ誰ヲカ可レ立トナリ紺野カ贖ヒニ着里備之丞駿河ニハ母方ノ甥ナレハ是ヲ立ラレ下サルヘシトナリ。盛胤ノ曰何レニテモアレ女系ノ因ハ立ラレマシトナリ亦其比ヨリ田中ノ西館ニハ比丘尼住居ス是ハ桑折前ノ駿河カ二男治部治部カ二男新九郎・同弟新十郎此父子三人先年七橋ニテ討死シタル孀妻共尼ニ成テ住居セリ是此處比丘尼寺トナス始メナリ其外ニモ討死ノ者ノ後家共比丘尼ト成テ此處ニ住セリ然ルニ善徳又申シケルハ駿河常々精進日ニハ彼比丘尼寺ニ於テ飲食致ス故ニ庶子ノ一族等申シ合セテ駿河ヲ毒害ス依レ之頓死致セシト申コト有テ今ニ此沙汰決定セスト申ス盛胤聞レ之然ル上ハ双論決シカタキ故桑折一類ヲ以名跡ハ立難シ他ヨリ是ヲ立ヘシト有テ大井ノ二男肥前ニ駿河カ名跡ヲ立ラレ則田中ノ本城ニ住スコレヲ桑折肥前ト云ケルナリ肥前若輩ナレハ逆苟田信濃ト同二男半右衛門ヲ田中ニ添番ニ入レ置カル信濃カ跡黒木ノ城代ニハ新館左衛門ヲ置レタリ信濃田中ニ來リテ西館ニ住セシト云桑折カ一類ノ曰前節ヨリ申ス如ク此城ハ桑折カ一類ヲ置ヤ其上西館ハ討死シタル者共ノ後室比丘尼トナリテ集リテ住ス依レ之城中ニ狭ナシトテ城内ヘ不レ入故ニ信濃ハ其町屋ニ住スルナリ其コロ三郡中ニテ上ヲアサケリ評シケルハ信濃父子心底ニ含メルコト有ヘシ其故ハ此タヒ桑折カ遺跡ノ事ニ付キナンノ罪科モナキ先主ヨリ已來忠勤ノ志恨ヲ含ムヤウニ仕カケ桑折カ族類モ年來ノ忠功ヲナキモノニセラルヽヤウニ取計ラヒ信濃カ思フ儘ニ田中差置カルヽ盛胤當然ノ理非モ決斷ナク又省察ノ心モナク信濃父子カ申スニ任セ又一族老臣モ信州カ心ニ随從ス最早相馬ノ家運末ニナル萠漸クニ見ヘ來ルト口々ニ誹談シケリ田中ニテハ萬事信濃カ下知ナリ然ルニ駿河カ時ニハ桑折新九郎・同雅樂之允・同出雲ハ小身ナリ逆所々加番出陣其外奉公ノ時ハ馬ヲ貸レケ

リ、信濃カ下知ニ成テ、馬ヲ不レ貸故ニ、加番出陣モ成
リ難シトテ右三人知行ヲ上タリ　又天神堂カ代リヲ
桑折丹後ニ云渡ス天神堂ノ仕來リ出騎三騎ナリ、丹
後ニモ出家シテ、天神堂カ代ヲ可レ勤俗ニテハ不レ可レ
成ト云渡ス此儀丹後承諾セス依レ之信濃計ツテ天神
堂ハ死去ノ後ナリ故ニ天神堂カ跡知ヲ割散シ　三分
ニシテ其一ツヲハ天神堂ニ付ケテ、小高ノ馬所ニ附
シ、一ツヲハ太田ノ星ノ宮ノ禰宜ヲ移シテ千倉ノ禰
宜トス、今一ツヲハ太田ノ門馬七兵衛ヲ移シテトラ
セタリ、桑折丹後詮方ナクシテ、舅紺野十郎左衛門ニ
二年餘リ扶持セラル此十郎左衛門モ、元ハ天神堂三
騎ノ内ナリ、都テ相馬三郡ハ青田父子權ヲ執リシカ
ハ、一族老臣聞及事アリケレトモ、父子ニ恐レテ云出
ス者ナカリケリ　サレハ信濃田中ニ於テ紺野一類ヲ
語ラヒ三十餘人與力ス　又其外モ紺野カ累年ノ朋友
共モ語ヒ寄テ信州ニクミス信濃方ノ者共各評議シ
テ時ニ與アル寄合ヲ催シテ、城代桑折肥前ト同太郎
右衛門ヲ城内ヨリ呼出シ、亂酒ヲ催シ見合セテ可レ討
ト議定ス、然ルニ桑折丹後カ妻叔父ノ紺野伊賀處へ
見舞ニ行ケルカ右寄合ノ密談ヲ聞付、立皈リテ丹後
ニ告ル、又桑折太郎左衛門ニ語ル太郎左衛門聞レ之、
左コソト思ツルナリ、頃日紺野ハ云ニ不レ及、其外俄ニ
睦シク此一兩年一味ヲ分レ青田ト飮食ヲ共ニス斯
アラント期スル處ナリ　タトヘ盛胤出張アルトモ容(タヤ)
易(スク)ハ落サレマシキソ、況ヤ信濃紺野等五十餘人カ力
ニテ、落サン事ハ無レ及事ナリ、本城ハ太郎左衛門、東
館ハ杢之助、西館ハ丹後・出雲・雅樂之允・新九郎四人
ニテ、晝夜門ヲ固ムヘシトナリ、太郎左衛門ハ滑沼ニ
住居シケルカ、佐藤伊勢ニ妻子ヲ取レテハ如何ト、先
ツ妻子ヲ佐藤小太郎ノ所へ移シテ、心易ク籠城シケ
リ。本城之門番ヲ置入ル者。一人ニ限リ二人トハ不レ
入。城ハ桑折ノ一類ト。同下ノ者ハカリニテ守護シタ
リ、偖約束ノ日限ニ至リ、北郷五十餘人ト紺野一類其
外信濃カ宅ニ來リ集テ城へ使ヲ云ヒ入ケルハ、各與

アル寄合ニテ慰ミ候ヘハ　桑折一門出テ慰遊セラレヨトナリ　太郎左衛門返答ニ　城ヲ守ルノ職分トシテ階臣ニ交リ萱員スルハ　世間ノ聞ヘモ如何ナレハ出參申マジキトナリ　再ヒ使來テ兎角ト申シケレハ　肥前ハ縁類モアル事ナレハ出ラレヨトテ　肥前一人ヲハ出シケリ　是ハ太郎左衛門モ疑心有テ出セシナリ　再三ニ紺野伊賀ヲ使ニテ云ケルハ　桑折一類今迄心底打解テ　何モ交會シタルニ　今更公私ノ差別ヲ立ラレテ會合ナキハ不二心得一其上五十餘黨モ不レ殘參リタリ　若出ラレスハ城内ヘ名躍ヲ仕掛申スヘシトナリ　其時太郎左衛門上ニ著タル羽織ヲ脱キ　著込ミヲ著タルヲ見セテ云ケルハ　黒木・中村・北郷ト一味シテ此城ヲ取ント思フカ　中々思ヒヨラス　首ノナキハ見苦シキソ　早々出ヨト云　伊賀是ハ何事ソ　思ノ外ナル申分哉トテ　早々ニ出テ皈リケリ　則門ヲ閉テ城内ノ者共ヲ集メ　天神堂老法師ノ云タルハ金言ナリ　各油断ハスナ　今夜定テ城ヲ責ヘシ　タトヘ鬼神カ責ルトモ明日迄持コタヘサランヤ　然ラハ盛胤ノ耳ニモ入兎モ角モ計ヒアラン　先ツ三所ノ橋ヲヒケ迚　今ヤ寄スルトマツ處ニ　門外ニ人聲シタリ　太郎左衛門槍ヲ取テ門際ニ寄ルニ　佐藤小太郎・北郷兵衛・佐藤孫兵衛ナリ　何モ入魂又親族ナリ　中ニモ孫兵衛ハ云號ケノ聟ナリ　立寄テ三人カ曰　紺野其外五十餘人モ　信濃ニ與力シテ　今夜城ヲ乗トラン企アリト聞ヘレハ　我々モ城ニコモラントナリ　太郎左衛門夫レハ忝ナキ志ナリ　サレトモ北郷・中村・黒木ト寄合テセムレハトテ　一日二日ニ落城スヘキニモ非ス　其内ニ盛胤出馬アルヘケレハ　少シモ氣遣フコトナシ　心ヤスク思ハレヨ　日來ノ懇志不レ捨ハ　各ハ皈テ蜆・右田ノ者共ヲ語ラヒ　信濃カ城ヲ責　或ハ後詰ノ様ニ計ラハレヨトナリ　三人尤トテ立皈リ　蜆村右田村ヲ觸マハルニ二百五十餘人集リタリ　此人數ニテ信濃カ跡ヲ可二切討一トテ待ケレトモ　其夜ハ何ノ沙汰モナカリケリ　曉天ニ及ンテ肥前皈リシカ　語リケルハ各集リタル者二

三十人ハ宵ノ間ノ酒宴ハカリニテ皈リタリ。紺野一類ハ三十人ハカリ跡ニ留リ。評談スルハ太郎左衛門大事ノ儀ヲ申出タリ、信濃早々小高ヘ出ラレ、此旨ヲ披露シ。太郎左衛門ト公事セラレヨトス丶メケレハ。信濃尤ト同心シ、今日小高ヘ可ㇾ參トノ評議ナリト。太郎左衛門コレヲ聞ト等シク城ヲ出、門ヲヨクシメヨ、一人モ出入スヘカラスト云捨テ。馬ニノリ小高ヘ一息ニ馳テ、則登城シ、直ニ申達スルコトアリト　則盛胤腰ノ物ヲ手ニ持テ出向ハル、太郎左衛門大小ヲ差置、膝元近ク伺公シ、信州カ結構叛逆無ㇾ疑段申ケレハ、盛胤怒リノ色ヲ催シ、信濃コト左樣ノ不義ハ不ㇾ可ㇾ有、是誠シカラスト専ラ疑心ノ爲体ナリ、其時太郎左衛門憚ル所ナク、左樣ノ疑心ハ相馬ノ御運ノ末ニナリタルナリ。今ニ後悔アルヘシト、面色變シテ申シケレハ盛胤左アラハ先ツ早ク皈テ城ヲヨク守ルヘシ。路次ニテ信濃ニアフコトモ可ㇾ有、又容子モ伺ヒ見ンスルソトテ　判先紀伊守ニ歩卒五十餘ヲ附テ。太郎左衛門ニ添テ歸サレタリ。

青田信濃逃ニ去田中ニ事

判先紀伊守太郎左衛門ヲ具シテ、田中ノ城ニ入、本丸ニ居住ス、依ㇾ之西館ニハ太郎左衛門居住シケル　信濃ハ如何思ヒケン　小高ヘモ參向セス、田中ノ町ニコモリ居タリ。僅一兩日ハ互ニ犬ヲ付テ容子ヲ窺ヒケリ、然ルニ中村モ逆意アリト唱フルニヨリ、紀伊太郎左衛門ニ密談シテ　石河内ニ住シタル草野小一郎ヲ呼ンテ、中村ノ城ニ至リ　草野式部カ容子ヲ見ヨ迚、指遣ス、コレハ式部ニハ又従弟ニテ、草野肥前カ嫡子ナリ、小一郎中村ニ二日滯留シテ、三日目ニ皈ル處ヲ、中村ヨリ人ヲ出シテ、八幡ニテ殺シタリ、然ルニ田中ニテハ小一郎カ皈ヘラヌヲ不審シテ、太郎左衛門下人ヲ中村ヘ遣ス。途中立谷ノ者、娘ヲ馬ニ乗セテ礒邊ヘ行ニ逢タリ。下人何方ヘ行ソト問フニ。サレハ中村ノ城代逆心ニテ、城下以ノ外騒ケハ、娘ヲ礒邊ノ姨ニ誂ヒ置ン爲ニ行ナリ。其方ハ何方ヘカ行ソト、我ハ草野小

一郎中村ヘ行レシニ未皈床シサニ中村ヘ行ナリ彼者カ云 小一郎ハ昨日八幡ニ皈リヲ待ウケテ討レタリ其時此邊モ騒キシカハ出合テ見タルナリ 八幡ノ者ノ云ケルニハ 黒木ノ不斷組待受テ討タリト云々其方モ是ヨリ皈ルヘシ 行ナハ共ニ殺サルヘキソ早々ニ皈ルヘシト云ニヨリ 途中ヨリ立皈リテシカ々々ト告タリ 太郎左衛門ハ小一郎カ妹聟ナリ 判先是ヲ聞テ則小高ヘ注進 盛胤驚キ 馬廻リ十騎ハカリニテ夜中ニ田中ヘ出馬 偖追々ニ聞付 諸臣一族士卒段々ニ馳來ル 信濃ハ盛胤著城ヲ聞ト等ク 其夜田中ヲ出奔ス 紺野伊賀モ信濃ニ相具シテ逃行タリ 判先聞之 在合タル者共ヲ引具シ 栃窪迄追行 爰ニテ問ヘハ信濃疾クニ通リタリト云 又田中ニテ太郎左衛門申ケルハ 五十餘人ノ内モ信濃ニ與力ノ者モ有ヘシ判先其追ハ危ク存スルナリ 早々ニ呼返シ可然ト尤ナリトテ其使行向ヒケレハ 栃窪ヨリ皈ケリ 偖又佐藤伊勢モ信濃ニ與スヘシト 盛胤後悔ノ心出ラレ

タリ 其故ハ始メ伊勢ニ田中ノ城代ヲ命セシニ 桑折一類承諾セス故ニ城ニ入リ得ス 伊勢カ跡ノ本地ハ割散シ 即時ニ支配アッテ 未替地ノ沙汰ナク 只磯邊村ハカリナリ 此故ニ伊勢不興ニ可存ト推思アル故ナリ 然ルニ此翌朝佐藤伊勢十三歳ノ男子ヲ召具シ田中ヘ來リ不寄存珍事ナリ 去ナカラ磯邊ノ城ヘ二十騎ノ加勢ヲ可賜。某下知シテ船ヨリモ陸ヨリモ夜討シ 伏兵ヲ設ケ旦暮ニ惱マシ候ハヽ 當年中ニ輙ク退治致スヘシ 草野モ信濃モ謀略武勇 通例ノ人ニハ勝レタレハ 早速ノ退治ハ如何ト存スルナリ 某磯邊ニアレハ 中村ニテモ磨及ノ小刀ヲ懐ニ入タル程ニハ可存トナリ 盛胤ノ曰。此北郷ヲ隔ラレナハ。伊勢ニアハンコト難カルヘキヲ 桑折カ一類コク城ヲ持シ故ニ 今其方ニモ逢ナリ 中村黒木ハ月ヲ越ヘス蹈落スヘシトナリ 其時伊勢下座ヲ尻目ニ見送リ 桑折カ黨寄特ニモ城ヲ持固メテ候ト云々 岡田泉堀内其外諸士老若伺候シタリ 時ニ桑折太郎左衛門末席ニ

伺候シケルカ、伊勢カ詞畢ルト中座ニ出テ。尾形ノ前憚リ存スレ共、此城ハ前ノ駿河ヨリ三代ノ間。城モ修復シテ堅固ノ地ナリ。又貯ヘ置タル兵器兵粮薪等迄不乏三年ノ籠城ハ心安ク存スルナリ。磯邊ハ淺間ナル小城ト云。中村ヨリ責ラレナハ落城スヘシ。其時老人ノ這廻リ死兼タルハ、後聞迄如何ナレハ能覺悟セラレヨト云ケレハ、盛胤脇ヘ向テ寬爾々々ト笑ハレタリ。座中ニハ三家族其外伺候セシカ。何レモ口ヲ閉タリ。伊勢モ詞少ナニ成ケリ。伊勢重テ申シケルハ。今ニモ敵磯邊ヘ寄來ン事無心元存スレハ。此悴ヲ城ニ差置モ如何ニ存レハ。岡田殿ヘアツラヘ申スト云捨テ座席ヲ退出シケリ。其時諸士評シケルハ、桑折若氣ユヘニ强言ヲ云テ老人ヲ詞少ナニシタリト。又若キ侍共ハ太郎左衛門能コソ云タレ。伊勢武儀功者フリシテ。人モナゲナル申分ナリト嘲ルモアリ。又老士ノ評ニハ。盛胤ノ笑モ如何ナリ。是皆靑田信濃伊勢ヲ惡シク讒訴セシヲ。コレヲ誠トシ玉フ故ナリ。伊勢ハ顯胤ノ代ヨリ度々ノ忠勤人ニ越ヘタリ。何ノ科モナキニ本地ヲ減ラサレ。替地モ與ヘラレス。サレトモ渠ハ忠義ヲ不棄。斯ハカリノ深志褒美コソ可有ニ。サハナクシテ桑折ニ傾キ玉フハ。大將ノ不明ナリトツフヤクモ又多カリケリ。斯テ伊勢方ヘモ犬ヲ付テ窺ハル丶ニ。杉目參河・岡田十郎右衛門抔。一味シテ磯邊ニコモリタリト聞ヘケレハ。偖ハ異儀アルヘカラストテ。其後加番ノ士申請ルニ任セ。標葉衆ノ內ヲ加ヘ置レケリ。偖又酒宴ニ寄合タル北鄕ノ輩。瀧迫日向・岡和田抔ヲ始メ二十餘人。盛胤田中ヘ著城ノ翌日。阿彌陀寺ヘ入テ住持ノ上人ヲ賴ミ。此會合酒宴トハカリ存シ。不義ノ企トハ努々不存。參會イタス處ナリ。全ク野心ノ爲ニアラスト申譯致スニ任セ。盛胤許容アレハ。即日皆寺ヨリ出ルナリ。紺野善德モ永閑寺ヘ入リシカ。一旦信濃カ權ニ恐レテ與ミスルコト。左モアルヘシトテ是モ則赦免ナリ。

新山城代追放附盛胤中村發向之事

樋渡攝津守カ嫡子民部ハ、信濃カ聟ナレハ、渠等カ語ラヒニテ與スル者、標葉ニモアルヘシ、先ツ民部ハ聟ナレハ可誅トテ、中村肥前・中郷ノ門馬雅樂之介・青田主殿三人ニ、小人二十人餘其外足輕モ添ラレタリ、三人ノ檢使袴ヲ著シ新山ノ城ニ至リ、席ニ著テ曰、盛胤ヨリノ使ナリ、攝州父子出ラレヨト、返答ニ唯今罷出ヘシ、袴ヲ著シ申スナリト、暫ク有テ攝津武具ヲ著シ長刀ノ鞘ヲ外シ脇ニ介挾シテ座敷ノ方ヨリ出ル、嫡子民部モ物具シテ拔身ノ槍ヲモツ、コレハ臺所ノ方ヨリ出タルヲ、竹窓ノ間ヨリ見ヘケレハ、小人コレヲ見付テ内ニ入リ、三使ニ告テ城代父子物ノ具シテ出ルナリ、早々出ラレヨト云、三使尤トテ出ケルニ、戸口近ク槍ヲ拔身ニテ數筋掛置タリ、主殿出サマニ件ノヤリヲ押シマトメテ、窓ヨリ外ヘ突出シテ出ニケル、攝津父子ハ表ヘ出タリ、三使槍ヲトリ、盛胤ノ命ナルソト詞ヲカケ、歩卒モ刀ヲヌキ、小人モ右突出シタル槍ヲ取テ立向ヒケル處ニ、城代ノ下人共刀槍ヲ以テ卅餘人城代ノ後ヨリ掛リケレハ、夫レヲ打拂ハントスル間ニ、攝津父子ハ家ノ内ヘ取籠レリ、三使下知シテ用意ノ螺ヲフキシカハ、近侍ノ歩卒共我先ニト來リ集リ、城ヲ透間モナク取マキタリ、三使則云入レケルハ、父子並ニ婦女ノ命ヲタスケ落スヘシ、刀脇差ハカリニテ外ノ兵具ヲ差置城ヲ可出トナリ、攝津承知シテ則城ヲ出テ落行ケリ、民部ハ伊達ヘ立コヘタリ、樋渡一休ト云シハ是ナリ、斯テ田中ニテハ二三ケ月ノ間、中村北郷ノ間ニテ、朝暮伏兵又ハ足輕セリ合止時ナシ、礒邊ヘハ標葉ノ士十六騎宛、加番ヲ入レタリ、時ニ加番ノ士ト北郷ノ士ト礒邊ト相加リ、尾濱・原釜ヘ船ニノリテ夜討ヲ仕カケタリ、此所兵士少ク多クハ下々ナレハ、周章フタメク所ヲ、ツマリ〱ヘ追チラシテ、首六十餘取タリ、盛胤ハ田中ノ城ニ忍ンテ。曉天ニハ小高ヘ皈リ、又曉ニ田中ヘ忍ヒ行テ暮ニ小高ヘ皈リ、忍ヒテ兩城ヘ往來アル月ヲ經テ如此ナレハ、所詮中村ヲセムヘシトテ手分アル。マツ山下・

河・原岡・和田・小川田・小池・撫原ノ者共ハ、瀧迫日向本名木幡ヲ備頭ニテ、白坂ニカヽリテ棒山ヘ出ヘシ。中道ハ鹿島・横手・寺内・小島・江足リ・河子・鹽崎ノ者共ハ、泉田備頭ニテ海道ヲ押行、田中ノ兵士ハ盛胤ノ旗本ニテ。海老・石田・大内・空洲ノ者共、柚木ヘカヽリテ出ヨトナリ。其外中郷・小高ハ如ニ相圖ニ來ルヘシト定メラル。相圖ハ敵海道ヨリ上ヘ出ハ、火ノ手立揚ヘシ、晝ハ狼煙夜ハ火也又海道ヨリ下ヘ出ハ。釘野山又枛窪ノ山瀧迫館ニテモ揚ヘシト。如斯相圖ヲ定メ待ケレトモ、青田父子モ草野式部モ、討テ出ヘキ沙汰ナク、只城ヲ守ルハカリナリ。然ルニ佐藤伊勢又評議シテ標葉ノ兵士ヲ合セ、舟ニテ尾濱・原釜ヘ押ヨセ、新沼邊ヘ夜討シ、所々焼働キセシ處ニ、中村方ヨリ兵卒ヲクリ出シテ戰フ。磯邊方ノ者共オシ亂サレテ敗走ス。舟鍛練ノ者共ハ早ク乘ツテ引トル。散亂シテ殘リタル者共ハ、芦原ノ陰ヘ追コマレテ若干討レタリ。偖翌日伊勢小高ヘ參向シテ、夜討ノ評議アル時ニ。伺候ノ諸士申スハ、初度ノ夜討ハ尤好メル事ナリ、二度メハ敵モ油斷セス。其備アレハ外ニ術テアラハ格別。無左シテノ夜討ハ。敵ノ心ヲ不レ察患ナリト誹謗ス、盛胤ノ曰、サナ云ヒソ小勢ノ利ヲ得ルハ大負ノ基ナリ、頓テ見ヨ黒木・中村滅亡スヘシトアリケレハ、皆々傍ラニテ嘲ケルハ、味方多ク討レタルヲ好コトト思ハルヽヤ、古狐ニ化サレテ屋形迄妄想ヲ云ハルヽソト囁キケリ、又片隅ニテ老士ノ言ケルハ。各若キ人々ナレハ。人ノ剛臆ヲ褒貶セラルヽナリ、伊勢ハ顯胤ノ代ヨリ、戰謀度々ノ利運アルユヘ、五ケ村六ケ村ヲ賞セラル、今コソ信濃カ奸謀ニ依テ、先忠モ無ニナリ、所知モ滅スレトモ。其色ヲアラハサス、却テ忠ヲ存スル老士ナリ、憐愍コソアルヘケレ一旦ノ越度ソシルヘカラスト云々、

中村表合戰附草野式部始城兵討死之事

其後中村黒木ヨセ來ラハ、其時城ヘ押ツメ。蹈落スヘシトマツ處ニ永祿六年ノ秋ノ末、黒木中村坂本ノ城代、コレハ伊達方ナリ、加勢ニテ各一和シテ、曉天ニ磯

邊ノ城ヘ押ヨスル佐藤伊勢待設タルコトナレハ相圖ノ火ヲアケ各手クハリノ如ク人數馳セ著タリ登胤ハ折節田中ニ在留アリシ時ナレハ判先ヲハシメ其外田中ノ兵卒ヲ引具シ柚木ヘカヽリテ出張ナリ嫡男孫次郎義胤時ニ十六歳如相圖小高ニ出張ナリ鹿島ノ者共ハ明神前ニ集ルトコロニ泉田石見ヲハ備頭ニスマシキト。異論マチ〳〵ナリ。然ル處ニ高田内膳。草野式部ニ與セスシテ中村ヲ引除キ妻子ヲツレテ江足ヘ來ル則内膳ヲ備頭ニ立ント各望ミケルニ内膳深ク辭退セシカトモ是非々々ト望ミケレハ事急ナリ延々ノ沙汰ナルヘカラストテ妻子ヲハ江足ヘ遣ハシコレヨリ鹿島勢各ヲ引具シ發向ス騎兵三十騎ハカリ其外ハ歩卒ナリ又騎々百姓ノ諸卒ヲ下知スヘキ者ナシ如何セント云ニ其頃神宮寺ノ弟子ニ圓識トテ。目ノ燒ケツリタル若キ坊主アリケルカスヽミ出テ地下歩卒ハ愚僧カ下知スヘシト云。皆々無益ノ云コト哉。イカニ人ナケレハトテ。坊主ノ下知ヲハ受マシト云々此ニ風爐燒(フロタキ)ニテ夏菊ト云虚無僧アリ兵術鍛練ニテ近邊ノ百姓若者共ノ師ニ成テ教ヘケルヲ是幸ナリトテ夏菊ニ下知ヲ免(ユル)ス皆雌伏シテ夏菊下知ヲ傳ヘ。上下二百餘ニテ。海道ヲ押行テ貝売坂ニ控ヘタリ高田内膳ハ惣下知ナレハ。乘マハリ〳〵下知シテ敵ヲマツ處ニ鷹邊ノ堀切ヨリ敵出タリ内膳カ曰コレハ盛胤ノ旗本ニテ追チラサレ式部左衞門ト一所ニナツテ除クト見ヘタリ敵ノ中ヲ割テ横合ニ打テカヽレ跡ヲハ旗本勢追來ルヘケレハ。オソルヽコトハナキソ。大將眼前ノハタラキナレハ。士卒共ニ精ヲ出スヘシト下知シケレハ。上下勇ンテ鬨ヲ作ツテ押カクル。草野式部ハ敵ニ不構金谷河子ノ橋ヲ北ヘコヘテ十間ハカリ道脇ノ兩方ニ馬ヲ立タリ新館左衞門ハ是ヨリ五十間ハカリ北ヘ行道ヨリ西ニ馬ヲ立タリ鹿島勢金谷ノ館ノ前迄追行處ニ敵方大谷地掃部馬上三十騎歩卒百七十餘ニテスヽンテ鹿島勢ニ打テカヽル此方モ相カヽリニ

カケ合セテ。橋際迄追詰。又元ノ坂下迄追返サレ。如此追ツ返シツ戰フ事三度ナリ。虚無僧夏菊敵ヲ突キ縮ムルトコロニ。中村勢目ニトマリケン。弓ノ者ヲ進メテコレヲ射ル。其矢夏菊ニ中ツテ則死シタリ。大谷地是ヲ見テ。愈々キソヒ掛ツテ下知シケレハ。鹿島勢追立ラレ。貝売坂迄追上ラル　此時鹿島ノ者共三十餘討レタリ。内膳モ馬ヲ突倒サレ。歩立ニ成テ。敵モ味方モ皆知リタル者共ソ。名コソ耻カシ。臆スルナカレ〳〵ト。頻ニ下知シケレハ。又坂ノ上ヨリ噇ト下シテ眞シクラニ突キカヽラレテ。中村方タメラヘ兼テ追クツサレ。金谷河子ノ橋際迄追詰ラル。コレ迄三四度ノ戰ニ双方討死若干ナリ　鹿島勢橋ヲコヘテ進マントスルヲ内膳制シテ曰　棒山ニ備居タル瀧迫日向敵方カ味方カ今ニ不動　其心疑ハシ　暫ク容子ヲ見合スヘシト云處ニ。磯邊堀切ヨリ盛胤ノ旗出來レリ　式部コレヲ見テ海道ニ付テ引退ク　此時ノ海道ハ藥旺寺ヘ出ルナリ　左衛門ハ西ヘ登リ引處ヲ　瀧迫日向本名木幡コレヲ待受テ打テカヽル。暫ク支ヘ戰シカ。左衛門戰負ケ西ヘ走ル。瀧迫カ手ノ者共追討ニ討トル。新館ハ日向ニ追ハレテ。眞直ニ中村ノ城ヘ迯入ケリ。瀧迫ハ則熊野堂ニ備ヲ立テ控ヘタリ。偖金谷ニテハ草野カ後陣ニ。大谷地カ敗走ノ人數折重ナリ。亂ルヽ處ヲ大谷地掃部打丸メ〳〵乘マハシテ下知シケリ。盛胤金谷ノ藥師堂ノ前ヨリ遥ニ望之。味方ノ内ニテ大谷地ヲ討者ハナキカ〳〵ト。頻リニ高聲ナリケレハ。判先紀伊暫ク待玉フヘシ可討時分アルヘシト云内ニ。味方ノ歩卒四五人　柏崎ノ方ヘ逃行ヲ追フヲ見テ判先馬ヲ乘出ス　是ハ七騎ノ出騎ナレ共五騎判先ニ續テ乘出ス　一人ハ嫡子右兵衛　一人ハ次男ナリ　石積リノ堤ヨリ少シ此方ノ程ニテ。判先五騎ノ者共式部カ勢ト大谷地カ間ヘ。十文字ニ乘切ル　中村ノ者共ハ落ント而已シケレハ。返シ合スルハ少ナシ。大谷地ニ付タル者共モ判先カ五騎ニ蹴立ラレ　討ルヽ者多カリシ　判先カ外ニモ　追々ニ乘カケ來リ　入亂レテ追討

ス大谷地ヲハ誰カ討タリケン込合テ不知首ヲハ判先カ騎馬ニ高橋文右衛門取テ差物ヲモ取リ添分捕シテ石積坂ノ東ナル山ニ登リ首ト差物トヲ指上テ大谷地掃部ヲ討タリト呼ハル盛胤悦喜不斜中村方コレヲ聞テ我先ニト逃退ケリ盛胤是ヨリ式部ヲ追テ馬場野迄押付ル式部ハ海道ヲ直ニ中村ノ城ヘ入ント心サシ引取シカ薬旺寺前ヘ敵遮テ待ツヨシ聞ヘケレハ馬場野ヲサシテ退ク盛胤金谷ヘ向ハル、トキ岡田・泉・堀内此三家ヲハ手勢ハカリニテ敵ノ先ヲ乗切ヘシト下知セラレケレハ中村勢ノ退クヲ右ニ見テ不構ニ松林ノ内ヲ乗通シ薬旺寺ノ前ニ待居タリ式部ハ馬場野ヲ心カケテ行處ニ先キニ落行シ者共敵ノ追来ン道ヲ妨ントヤ思ヒケン馬橋ノ有ケルヲ引落シテ退キケレハ道形リニ行コト不能式部始皆山際ニ添フテ退ケルカ深田ニ馬ヲ乗込タリ馬ノ太腹迄入リケレハ鞭打テトモ不動又栃窪ノ渡邊右衛門カ子虎乙十五歳ニ成ケルカ是モ式部方ニテ相具セシカ同シク深田ヘ乗入タリ馬取リニ藤七トテ物ナレタル意地健ナル者付キケルカ虎乙ヲ抱キオロシ早々ニ落ラレコト、畔道ヲ己レ先テ行ケルカ溝川ノアルヲ抱キコシテ行ニ。早アトニテ式部ニ追付テ太刀打スト見ヘテ詞ヲカケル聲耳元ニ近ク聞ヘケレハ藤七虎乙カ脇當ヲ取テ打捨足元輕カルヘシ急カレヨトテ漸々今ノ佛立寺前ノ河原ヘ逃来ル式部ヲハ道明内掃部介討取タリ伊達方坂本ノ城代ヲハ渡邊豊後討捕タリ坂本カ討ル、處迄付添来ル手ノ者モ七人討死シケリ今馬場野寺内ニ坂本塚トテアルハ是ナリ馬場野ノ橋際ニテ高田備前モ討レタリ義胤ハ小高ヨリ出張鹿島ノ川ニテ人数ヲ二ツニ分一ツヲハ海道ヲ直ニ進行カセ義胤ハ盛胤ノ備ヲ心サシ田中ヘカヽリ抽木ヲ過キ磯邊ヘ出張アリシカハ薬旺寺前ヘハ遅ク出張アリケリ盛胤馬場野ヨリ諸勢ヲ召寄セテ各一所ニ薬旺寺前ニソナヘヲ立ラル。小高勢何レモコヽニ来リ集リケリ。

瀧迫日向盛胤ノ前ヘ來テ申ケルハ。此氣ヲ遁サス城ヲ攻ラレ可然。小高モ新手ナリ。又三家ノ輩モ事ニ逢ハネハ新手ナリ。旗本ヲハ休メ。各ヲ下知シテ攻ラルヘシトナリ、判先カ曰、今朝ヨリ終日ノ働キ人馬共ニ疲レタリ其上城モ手安クハ攻ラルヘカラス、小高衆モ遠路早驅ニテ、人馬共ニ勞ルヘシ、其上新館モ城ニ引取テコモリツラン。然レハ大將ナキ集リ勢ニアラスヤ、先ツ今日ハ田中迄皈陣有テ諸勢ヲ休メ明日ノ城責可然トナリ、盛胤此儀ニ同意有テ田中ヘ諸勢ヲ入ラレケリ

中村城落居附青田信濃父子落行事

盛胤ヨリ中村ヘ犬ヲ付テ城ノ體ヲ窺フニ　討モラサレタル者ノ小旗未タ多ク立ナラヘタリト告タリ　偖方々ヨリ集リ來ル諸卒、先ツ今日ハ宿ヘ皈リ、休息スヘシトアリシカハ　翌日皆暇ヲ請テ皈リケリ、義胤モ小高ヘ歸陣ナリ、盛胤ハ田中ニ忍ヒテ在陣アル　偖又中村方ニ佐藤河内。是モ小高ヨリ與力ニツケラレタル侍ニテ、式部萬事ヲ談合セシ者ナリ。此河内ヲ潜カニ呼ヨセテ。盛胤申サレケルハ。草野式部逆心露顯ニ依テ、不得止事成敗スル處ナリ。殘ル處ノ諸士一旦與スルコトハ、城代ノ權ニ従フコト尤ナリ。強テ惡ムヘカラス、仍テ式部女ニ一男平太隆胤ヲシテ娵合セ、其跡ヲ立ラルヘシ、諸士ハ不殘。如以前安堵サスヘシ。又後家ニハ末々ノ存慮モアレハ、汝等計ヒ城ヲ明渡サセヨトナリ　河内皈テ式部カ後家ニ申シ聞ス。後家トモ角モ評談アルヘシ。各ノ意ニモレマシキトナリ　依之城内士卒ニ盛胤ノ命ヲ云聞カス　大方其意ニ順フヘキ體ナレトモ　百槻右兵衞其外五六人カ曰、各譜代ノ主ヲソムキ。惡逆ノ企ニ與スルカラハ、皆々覺悟シツラン　今盛胤ノ命ニ隨ヘハ迚　是迄逆心ノ名ハ雪カレマシ　諸朋輩ニモ指サヽレンハ。無念ノ上ノ無念タルヘシ、又方便ニテ一人ツヽ首ヲ刎ネラレハ、見苦シキ死ヲシテ耻ニハチヲ重ネ、後世ノ笑草ト成ヘシ　討死ハ善ニモ惡ニモ士ノ本意ナレハ、是ヨリ外ノ

コト不可有、餘人ハトモアレ、我等ハ城ヲマクラニシテ討死スルヨリ外無他事ト申シ切テ聞入サレハ、河内モ與角計ヒカネタリ。又各モ百槻ヲステ、ハ生テ甲斐ナシ迚皆同心セス、河内ヲ始メ式部與力ニ附属ノ十部合四十騎ハカリナリ。然ル處ハ阿彌陀寺ノ住僧中村ノ城ヘ入テ諸士ニ對シテ申サレケルハ、各ハ皆相馬代々扶持ノ武士ナリ。式部ハ時ノ縁親ナリ。其下知ニ應シタレハ、自心ヨリ起シタル叛逆ニアラス。且ハ尤ナリ。強テ盛胤ヘ敵對ハ是コソ誠ノ逆心ナリ。又相馬ヘ逆心申ス處ノ其意趣ハ何ヲ以テノ敵對ソヤ。モシ盛胤ヘ對シテ恨アラハ、訴訟申サルヘシ。詮無キ逆心シテ後代ニ惡名ヲ殘サンヨリ、城ヲ渡シ隆胤ヲ頭ニシテ永々家名ヲ保タレヨ。式部一味一旦ノ理ニナツミテ義ヲ立ルモ、コレハ非義ノ義ナリ。主ト朋輩ト違ヘテ其義ノ輕重辨ヘナキハ愚ナリ。盛胤ニモ義心アル大將ナレハ、安堵相違ハアルマシキソ。此旨執持愚僧誓紙ヲ渡スヘシト、理ヲ盡シテ申サレケル。百槻カ曰、貴僧ノ詞厚志不淺ト云トモ、某等此度ノ惡名ス、キ難シ。善惡死生時至リナハ無是非。今何ト仰セ候トモ此儀ニ於テハ承引申マシキナリ。今日ニモ討死遂ナハ、念佛ノ結縁ハ頼ミ入申スナリ。迚中々諾スル氣色ナシ。依之眞言三ケ寺・禪宗三ケ寺・阿彌陀寺共ニ中村ニ詰居テ異見再三ナト、安堵ノ處一人ニテモ相違アラハ、七ケ寺トモニ寺ヲ出、其上盛胤ヲ咒咀スヘシ。尤モ愚僧等此儀時ノ調略ニテ其言僞言ナラハ八萬奈落ニ墮落スヘシト、誓紙ヲ書テ云ハレシカハ、城中各承諾シテ盛胤ノ命ニ隨ヒ、則城ヲ明渡ス。青田信濃父子三人モ、コレ迄ハ城中ニアリシカ、中村一統ノ諸士トハ違ヒ、叛逆ノ張本ナレハ、後難ノカレ難ク思ヒケレハ、此落居ヲ聞トヒトシク、密々ニ城ヲ落テ三春ノ田村ヘ逃行ケリ。中村ノ城ヘハ盛胤ノ二男平太隆胤此時十三歲、則城代トシテ城ヘ入ル。諸士ノ禮謁先規ノ如シ。亦黑木ヘハ高田内膳ニ歩卒百ハカリ指添、使者トシテ中村落居ノ品々ヲ申

渡サル、ニコレモ異儀區々ナルヲ。様々ニ云ナタメ事調ヒ中村ノ隆胤ヘ出仕シタリ偖小高ヘ皈城ノ後、隆胤幼稚ナレハ迚。泉田甲斐守ヲ式部カ後家ニ再縁セラレ、隆胤ニ相添テ堀内ニ置レタリ式部娘ハ十六歳隆胤ハ十三歳年相應セス迚女ヲハ盛胤養ハレテ、十九歳ノ時岡田兵衛大夫直胤妻ニ定メラル。カクテ中村ノ諸士盟約ノ通リ、諸事不レ殘本ノ如ク沙汰アリケリ此戰終テ後桑折ノ一類桑折太郎左衛門・同杢之助・同丹後・同出雲・同雅樂允・同新九郎等、各加恩ノ地ヲ賞サレケリ、

名取郡北目合戰之事

其比亘理ノ城主亘理元宗ト云シハ。伊達稙宗ノ庶子ナリ。相馬顯胤ノ内室トハ腹替ノ兄弟。盛胤ノ爲ニハ伯父ナリ又名取北目ノ城主。佐藤氏ハ一族ニテ。伊達ノ旗本ニモ不レ有ナリ、然ルニ元宗ノ二男ヲ。北目ノ養子ニ兼約セシカ、如何アリケン、約ヲ變シテ別ニ契約シタリ故ニ元宗遺恨ヲ差含メリ。元宗後ニハ元庵ト號ス。或時元宗小高ニ來リ盛胤父子ヘ對面シ。種々饗應終ッテ。義胤ヘ密談シテ曰、北目我ニ對シテ堅約ヲ變シ。此遺恨散シカタシ、是非押寄。一戰シテ欝憤ヲ晴サント存スレトモ。我元來小勢ナレハ。一人ノ力ニ及ヒ難シ。其上北目ハ親族多キ者ニテ。而モ皆近邦ニアリ卒爾ニヨセテハ却テ耻ヲ懷カント。今日迄延引セリ、シカレトモ憤リヤミ難シ。加勢アッテ玉ハルニ於テハ近日ニ思ヒ立ヘシトナリ、義胤答テ某ハ若年ニテ、兎角ノ挨拶ニ及ヒ難シ父盛胤ニ相談アルヘシト。則盛胤ヘ委細密談ニ及ヒケレハ。盛胤ノ曰コレハ尤ノ意趣ナリ。加勢申スヘシトノ承引ナリ。元宗喜ンテ日限ヲ定メ萬ツ評議極マリテ。亘理ヘ皈城シタリ。斯テ評議相調ヒ、永祿七年夏。日限ノ時至リケレハ。其前日義胤ハ騎馬五六騎。歩卒五十ハカリニテ。亘理迄出馬盛胤ニハ惣人數ヲ引具シ。新地迄著陣ナリ義胤ハ其夜亘理ニ寄宿ナリ。種々饗應アリ。然ルニ合戰ノ評議夜ノ内ニコソ有ツラメ。元宗翌日夜ヲコメテ亘理

ヲ出立鷹野裝束ニテ歩卒少々ト鷹師ハカリ具シテ岩沼ノ城主長沼何某ト云人レケルハ今朝從ヲコメテタケ野ニ出被レ侍ルナリ某シノ用意未タ來ラス。城主則出向ヒ早々休有合ノ料理請タシトノ望ナリ。城主則出向ヒ早々休足アルヘシト請待ス則料理ノ用意アル處ヘ元宗ノ嫡男重宗先陣ニテ亘理ノ人數八十騎餘上下六七百餘引卒シ後陣ハ盛胤父子百七十餘騎上下八百ハカリ鑓立ツテ辰ノ上刻ニ岩沼ヘ出張有テ元宗ヘ案内ス元宗則我此所ニ居レリ盛胤父子モ入來アルヘシトナリ岩沼城主モ幸ヒナリ入館アルヘシト請待スシカルニ各兵具ヲ帶シケレハ。興サメタル氣色ニテ。元宗ヘ向ツテコレハナニ事ノ企ニテ候ヤト問ノ元宗ノ曰其許ニモ兼テキヽ及ヒ玉フヘシ北目年來ノ堅約ヲ變シ不義ノ擧動遺恨止カタク鬱憤ヲ散セン爲相馬ノ助力ヲ乞テ今日發向致ス所ナリ貴殿ハ北目ノ親族ナリ又某ニモ他人ナラス然レトモ前方ニ知セナハ北目ハ注進セラレンコトモ計リ難ケレハ

假ニ如此催シタリ此上ハ貴殿モ加勢シテ是非出陣頼入トナリ岩沼答テ曰何レモ親族ノ中ナレハ慇情分難ケレトモ今眼前ニ去リカタク頼マルヽ上ハ異儀アルマシトテ則加勢ノ仕度アリ又角田ノ城主モ亘理ヘ加勢ナリ北目ヘ發向ノ道三筋ナルヲ一筋ヲハ岩沼ノ勢ニテ押シ本道ハ北目ヘ向ヘハ元宗父子先陣ニテ押シ向フ後陣ハ義胤ナリ次ハ盛胤後殿ニテ發向ス北目方ニモ此事先立テ聞及ケルニヤ。三筋ノ道ヘ諸手ヲ分ケテ備ヘタリ尤モ近郷ノ諸武士。加勢ノ爲北目ヘモ馳集ル北目川ノ上ヲハ座流川（蛇守川トモ云）今ノ仙臺川（廣瀨川トモ云）名取川三川落合テ湊ヘ流レ出ル落合ニ薬師堂（今ハ觀音堂ナリ）アリ此堂ノ向ハ則北目川前ニ當テ待懸タリ亘理勢川ヲ物トモセス、ヒタ／＼ト乘入レテトキヲ作リ互ニ槍ヲ突太刀ヲ打兩陣凉シキ働キナリ亘理勢ハ八十騎餘ト見ヘタリ暫ク挑ミ戰フ處義胤下知有テ亘理勢ツカレヘシ入替ツテ戰フヘシトアリケレハ、相馬勢百騎ハカリ打テカヽレハ

亘理ハサツト打上タリ。北目勢荒手ニモミ立ラレ。亂立テ引色ニ見ヘケレハ。相馬方競ヒ掛テ責打。北目城下ノ町口迄追付ケタリ。然レトモ町口ニ行馬ヲ結テ。敵其内ヘ引入シカハ。相馬勢追ステ、町口ヨリ打上タリ。兩方手負討死アリト雖トモ。其姓名不詳。義胤軍卒ヲ休メ。彼所ニ備ヘテ他ノ働キヲ遠見アルニ。角田勢ノ向フタル川下ノ手モ。暫ク挑防シカ。北目方負色ニ成テ引アケタリ。岩沼ハ始終見物シテ守リ居タリ。義胤盛胤ノ備場ヘ乘リ向テ伺ハレケルハ。岩沼今朝卒爾ノ出陣ナリ。士卒モ追々ニ馳付ナン。是程勝軍シタルヲ。岩沼ノ手ニテ後レヲトランモ如何ナレハ。某ノ人數ヲ以テ押寄打散シ申サントナリ。盛胤可然早々馳ヨトアリケレハ。義胤乘返シ未タ休足シテ居タルモ。馬ノ汗入ルモ入レヌモアリ。早々ニ用意セヨト自身下知シテ諸卒ヲ押出シ。攻寄スル。北目方モ外曲輪ヲ出テ。町口ヲハナレテ相支ヘ喚叫テ相戰フ。城兵弱ハメニ見ヘケレハ　義胤團扇ヲ振ツテ乘廻ハシ。味方ニ詞ヲ掛。鯨波ヲ作リカケ〳〵。キソヒ進ンテ攻付シカハ。城兵支ヘ兼テ柵內ヘ奔走ス。相馬勢追打ニ討テ打上タリ。此時於同手木幡藤十郎討死シタリ。亘理元宗味方十分ノ勝ノ上ハ欝憤ハレタリ。今ハ心殘ルコトナシ。コレ迄ナリ。諸勢ヲ打上ラルヘシトテ。惣軍ヲマトメテ各皈陣アリケリ。北目ヨリモ城ヲ出テ。追ヒ慕フコトモ勿リケリ。岩沼ハ俄ノコトニテ。士卒ノ調儀不揃。此故ニ戰ノ手ニ合サルヤト。其頃取沙汰シケリ　義胤老後ニ至リ。機嫌ノ折ニハ。近習ノ輩ニ此合戰ノ物語シテ聞セラレシニ。亘理勢川中ノ戰ヒ。凉シキ働キナリ。未タ是ホトノ働キ見物セシコトナシト。褒美アリケルトナリ。此時分ヨリ漸ク鐵砲出來レトモ稀ナリ。又ウツ者モ物ニ中ル程ナル上手ハ五十人ニ一人二人ナレハ。サシテ未タ不用立。只太刀打槍弓ハカリノ戰ナリケルトナリ。偖盛胤ハ其夜新地迄皈陣。同所ニ寄宿有テ。翌日中村ヘ皈城ナリ。義胤ハ其夜ハ亘理ニ一宿ト。元宗父子シキリニ止メケレ

ハイナミ難ク宿セラル 樣々饗應アツテ後夜話ニ及ヒ元宗義胤ヘ申サレケルハ 某相馬ヘ萬端申合スルニ付テ 於米澤 晴宗輝宗內心ニ疑胎アルカ 亘理ヲ奪ヒ取ント內々評議モ有之由告ル者アリ 然ラハ亘理ハ小齋・金津ノ城筋ニテ 河沼ノ足掛リモナキ處ナレハ防戰ノ備ニウルサシ 萬一輝宗等某ヲ隔テ 此金津古佐井ヨリ見卸シテ責ラレナハ 此城一日モ持チ難シ 仍テ遮ツテ先ツ金津・小齋ヲ手ニ入ント存スルナリ。重々ノ賴ミナレトモ。助力シ預リ申タシ。ソノ疲ニ乘テ金山丸森ヲ責取テ 相馬領ニ仕玉フヘシ サアルトキハ 伊達ヨリ相馬・亘理ヘ手ヲサスコトナルヘカラス 其上ハ某モ相馬ヘ與スル外不可有トナリ 義胤返答ニ 一旦承リ合候ヘトモ 某ハ若年ナレハ 左樣ノコト始終ノ善惡辨ヘ知リ難シ 兎角ハ盛胤ニ相談アルヘシトナリ 元宗ノ曰其意尤ナリ 盛胤ヘモ可談レトモ 先ツ義胤承引アレコト 再三強テ云ハレケレハ 盛胤承引致サハ 某ハ異儀アルヘカラストナリ

然レハ起請ヲ申請タシトテ 懷中ヨリ熊野牛王ヲ取出シテ 堅約違變アルマシキ旨誓紙ヲ乞フ 義胤一諾ノ上ハ 不及異儀。誓紙シテ渡サレタリ 元宗ノ曰盛胤ヘハ某申シ入ル、ニ不及 義胤トクト談話賴入ルトナリ 斯テ義胤相馬ヘ皈城有テ 父ヘ斯ト談話アル盛胤聞之テ曰 古來ヨリ伊達・相馬不和ナルハ 天下ノ爲ノ爭亂ニシテ 互ニ私ノ事ニ非ス 其後亡父顯胤伊達晴宗ニ遺恨アリト雖トモ 是モ一旦晴宗ノ不義ヲ制シ 本意ヲ遂クル上ハ仔細ナシ 殊ニ晴宗ハ我爲ニハ外戚ノ伯父ナレハ 今輝宗トハ從弟ナリ 尤元宗モ同伯父ナレハ 何レモ可親愛中ナルニ 今サラ何ノ故モナキニ 伊達ト不快ニ可成樣ナシ 近年伊達氏近郡ニ手ヲ掛 旗下ニナスノ心掛アリトイヘトモ 相馬ニ於テハ其望モカケラレス 然ルニ此方ヨリ手ヲ出シテ 伊達支配ノ地ヲウハヒ取 事ヲ求メテ親族ノ因ヲハナレ 亂ヲ作ルコト不可有 其上今コソ元宗左ハ云トモ 伊達ノ一門ナレハ。末々ハ伊達ヘ與力セ

ンコト顯然ナリ。其時ハ相馬ハ故ナクシテ大敵ヲ設ルナリトテ、盛胤甚不與セラル。サレトモ義胤一應諾シテ誓紙ノ上ハ。何ヲ云テモ詮ナシトソキコヘシ。然レトモ其後元宗何ノ沙汰モナク打過ケレハ、跡ナキ事ナリナト申合ケルトナリ。

伊達秘鑑卷之七終

伊達秘鑑卷之八

奥陽仙府　燕々軒　編集

金山成相馬領事

伊具郡金山ハ城モナク唯伊達領ニテ地士ノ内ニテ武勇才覺アル者ヲ頭ニ居ヘテ其下知ニ從フ、其内四十九院何某ト云者、威勢タクマシキ者ニテ有ケルヲ、井土川將監知因ナレハ逆義胤内々將監ニ申合メ、相馬ニ附屬セヨトナリ、依之將監折々四十九院カ方ヘ內通シ、樣々ニ語ラヒ、終ニ加擔サセタリ、永祿七年八月シカモ其夜大雨大風猛シ、其變ニ應シテ四十九院相馬人數ヲ引入タリ金山ノ者共モ、過半四十九院カ才覺ニテ味方ニ屬ス如斯ナレハ力ヲ不用シテ皆雌伏シ、忽チニ相馬領ト成ニケリ、時ニ義胤十八歲ナリ。則藤橋紀伊守ヲ金山ヘ移ス其頃今ノ金山ノ城ハ古木茂森タル荒山ナリシヲ藤橋富人ナル故相馬ノ力ヲカリス普請シ。先ツ荒山ヲ伐ヒラキ地形ニナシ。又

城下中原ナルソ　農具ヲ求メ被官等又地下ノ者共ニ是ヲ與ヘ。思ヒ思ヒニ開カセテ田畑トナシ。是ヨリ村里ソヒラヤ分テ民家モ出タリ　紀伊守金山ニ居住ノ後嫡子玄蕃二男共ニ病死ス　依之義胤ヘ訴訟シケルハ子モナク某モ老タレハ境目ノ番預リ難シ免許アルヘシト度々願ヒケレトモ。先々分別アルヘシトテ許容ノ氣色ナシ。其頃盛胤ニハ中村ニ居城ナリ。紀伊守自ラ髮ヲ剃リ　本地ノ藤橋ヘ來リ盛胤ヘ謁ス　盛胤ノ曰　其方老後ニシテ境目ノ勤番ナリ難キコト勿論ナリ　早々本地ヘ戻ルヘシトナリ　又紀伊ニ附屬セラレタル物頭其外隨士六七人ハ　中村ニトメ置タリ借金山ヘハ佐藤河内ヲ移サル　後年河内ハ矢ノ目ニテ討死ノ後　嫡子將監居住シタリ　義胤紀伊ヲ呼ンテ老人ト云勤番ノ苦勞察シ思ト雖トモ　當分代番ノ者ヲ思ヒ計ツテ延引セリ　今ヨリ知行ニ有テ老若ヲ助クヘシト　イト懇切ナリ　紀伊ハ聟ノ木幡出羽カ二男ヲ以テ遺跡ヲ讓ル　是ヲ藤橋作右衛門ト云　金山相馬ノ手ニ入リシハ、畢竟井土川カ功ナリトソ

相馬義胤攻ニ取小佐井ニ事

北目飯陣之砌リ　亘理元宗義胤ヘ密談有テ後　何ノ沙汰モナカリケルカ　然レトモ密々ニ内約アリケルカ其頃ハ新地今ノ古城ヨリ田中大深田ノ中ニ屋鋪シテ　野地小屋ト云　藤田紀伊此ニ居住ス　義胤兼テ謀略ヤ有ケン　或時紀伊小齋ノ城代ヲ呼レテ　珍肴種々調テ馳走ス　酒タケナハニシテ紀伊云ケルハ　伊達殿ハ米澤ニ居住ナレハ　遠程ト云　急變ノ助ケニモナリ難カルヘシ　然レハ末々其元ノ力ニモ惡カルヘシ　今敵方ト雖トモ　主人義胤ヘ附屬アラハ　近郡ト云萬ツノ助ケ便宜好シ　侍ハ渡リ者戰國ノ習ヒナリ　此貴方ノ爲ヲ存スルノ故ナリト　樣々ニ語ラヒケレトモ承引セス　紀伊コレ程ニ申スコト承引ナキハ是非ニ不及ナリ　其元ハ伊達方ノ爲ヲ思ハレヨトテ　猶酒ヲス、メテ油斷ノ透ヲ見テ　紀伊拔打ニウツ　嫡子玄蕃二ノ太刀ヲ次テ討留タリ　則注進シケレハ永祿八年五月

上旬。相馬ノ兩將並ニ亘理元安元宗ナリモ小齋ヘ出陣ナリ、此城代ハ八替七郎兵衛ト號ス。是ハ八度迄心ヲ變シタル者ナレハ迚。仮名ニ八替ト呼ンテ本名ヲ呼フ者ナカリシナリ。本名不知先陣ハ義胤。盛胤ハ後陣。先ツ清水ト云處ニ何レモ備ヲ立ル。小齋ノ城攻其隱レナケレハ、伊達方桑田ノ侍大將小山田筑前。兵士四十騎歩卒百五十餘ニテ馳來リ籠城ス。勿論城ハ與力ノ者共百姓等三百餘馳著タリ、今朝巳ノ刻ハカリニ相馬勢押寄テ小佐井城ヲ取巻タリ、相馬ノ人數ハ七備二百五十騎ハカリ、上下一千ニ不過。先ツ五備ニテ城ヲセメ、兩將ノ備ハ不動、奇ヲ謀ツテ控ヘタリ、城兵ハ門ヲ閉テ靜マリ返ツテ音モセス、又其比柴田刈田ニ散在シタル侍共。伊達ヨリ組親ヲ付ケテ、近邊ニ變アルトキハ、馳集テ助ケ合フ手筈ナレハ。追々ニ馳アツマル、佐藤伊勢申ケルハ、推察致スニ城内此邊ノ小士共集會シテ、其外ハ皆里民ナルヘシ。追々ニハセ來ル者共ハ城ヘ入モ又人傘ルモアリ、今急ニセメハ内外ニ敵有テ。味方損スルコトアルヘシ。暫ク責ヲノベテ其容子ヲ見ルヘシトナリ、諸軍此議ニ同シテ近々ト詰寄。取巻テ守リ居タルニ。午ノ下刻ハカリニ城内喧シクナリ騷ク、伊勢采幣ヲ採テ時分ハ今ナルソ、早セムヘシト下知シケレハ、旗本ノ備押出シ。義胤自身鎗ヲ取テ諸軍ニ先立。虎口際迄取詰。諸卒ニ向ツテ此小城今ノ間ニ蹈落サスンハ、相馬ヘ不可皈ト、士卒ヲ勵シ責立ル。岩城浪人ニ楢葉能登ト云者、斧ニテ門ノ扉ノ軸ヲ伐折リ扉ヲ押返ス、義胤眞先ニ乘入ルヲ。小野田式部立向ツテ大將ノ輕々敷働キ以ノ外ナリ、退テ士卒ノ勤メヲモ見察有テコソト、馬前ヘ立塞リテ抑留ス、依之義胤先登ヲ退留アル 小野田式部・楢葉能登・片寄大藏三人、槍ヲ提ケ城内ヘ駈入レハ、諸卒續テ我モ我モト込入タリ、城兵暫ク支テ防キ戰ケルカ。集會ノ小士權柄ノ大將トテモナケレハ 防戰ノ備オロソカニテ、終ニ堪ヘスシテ城ヲトラレ、城下ニ猫入ト云在所迄。散々ニ落行所ヲ追付々々。討取首四十餘ナ

リ此時亘理元安ノ勢モ少々追討シテ首十四五ヲ得タリ此輩人ト城トノ間六町餘アリ、偖元安ハ清水ニ備ノ立テ始終見物シテ不レ動義胤ツブヤキテ曰此城ヲ攻トルコト全ク吾望ニ非ス。元安ノ進メナレハ相共ニ手ヲ下スヘキニ人ノ苦戰スルヲ只見物シテ指控ルハ頗ル怠惰ノ至ナリ迚以ノ外ニ不興ナリ果シテ後ニ小齋ヲハ相馬領ニセラレケリ斯テ谷地小屋ノ城代椎橋紀伊守ヲ移シテ小佐井ノ城代ニ差置又谷地小屋ヲ捨テ山ヲ城ニ結構シテ門馬雅樂之助ヲ城代ニ居ヘ置タリ今ノ古城是ナリ

義胤責取丸森事

其比相馬ノ一族家臣等申ケルハ小佐井・金山手ニ入ラル上ハ此丸森ヲモトリ玉フヘシ此處ハ伊達稙宗在世ノ時顕胤至孝ノ餘リ其御孫ナレハ丸森ヲハ盛胤へ讓リ玉フヘシト常々命約アリシヲ晴宗不和ニマシマセハ遺誡ヲモ立ラレス則伊達領トナレリ又亘理伊達へ與シテ此方へ敵タツトモ古佐井丸森ヲ持玉ハヽ働キノ便宜ヨカルヘシト進メケレトモ稙宗死去未レ經レ年シテ居館ノ地へ馬跡ヲ入レンコト、孝道ニ背ケリ天ノ禁シメ恐アリ其上伊達ヨリ手サシナキニ進ツテリスメ取ンモ如何ナリ迚盛胤承引ナシ各又申シケルハ稙宗ノ卒去ハ永祿八年ナレハ跡遠ク又掛田合戰以後ハ晴宗遺恨ニ思ハレ相馬ヨリ稙宗へノ孝行ハ都テ不快ニ思ハレシト承ル先立テ小齋・金山ヲトリ玉フコト元安ノ勸メトハ申シナカラ伊達ニテハコレ皆相馬ノ所爲ニシテ親族ノ好ミヲ棄ラレタリト。今更欝憤深カルヘシ。然ル上ハ伊達相馬ノ取合眼前ニ必セリ終ニハ後悔アルヘシト、衆義一同ニ諫メケレハ盛胤父子納得有テ出陣ニ極リケル其コロ丸森ノ城代ハ黒木左馬之允トテ、黒木彈正カ弟ナリ古佐井金山ヲ相馬ヨリ攻取シ後ハ伊達ヨリ丸森へ人數ヲ加倍シテ入置タリ元龜元年四月十三日時ニ義胤二十二歳ナリ則先陣ニテ後陣ハ盛胤父子相共ニ出張アル其夜金山ニ著陣爰ニテ評

議手分アツテ。翌十四日早旦ニ丸森ヘ押ヨスル。盛胤ハ三十騎ハカリニテ。上下二百餘。金山。丸森ノ間原町ノ外レニ雉子ノ尾迚。城ヨリ一段高キ山アリ。忍ンテ是ニ上リ。指物ヲシホリ人影敵ニ見スルナト。上下靜リ埋伏ス。義胤ハ直路ニ追手ヲ心サシ攻ヨセラル。黑木左馬之助城ヲ出テ。羽生川ヲ前ニ當。上下四百ハカリニテ待掛タリ。互ニ進ミカヽリ。既ニ戰始リテ相馬方川ヲ越ント川中ヘ乘入ル。丸森方川ヲ越サセシト支ヘ戰フ處ニ。盛胤雉子ノ尾山ヨリ。城中ノ體ヲ目ノ下ニ見卸シ。河戰ノ最中ニ山ヨリ下リ。旗ヲ差上自ラ槍ヲ取テ城兵ノ跡ヨリ眞シクラニ一ノ丸ヘ責入ル。城内ニモ殘ル兵卒百五十騎餘。此彼所ヲサヽヘテ防戰ス。サレトモ盛胤士卒ヲ下知シ。勢ヒ猛ニ攻付シカハ。防キ兼テ見ヘタリ。川原ヘ打出タル者共是ヲ見テ此手ヲ引入ント。戰ナカラ除ク處ヲ。相馬勢尙々キソヒ掛ツテ。透間モナク諸手ヲツクシテ。慕ヒ付テ追付キケレハ。城ヘモ不得入散亂シタリ。盛胤ハ此内ニ防ク敵ヲ追入レ。付入ニ城ヘ乘入。旗ヲ押立テ鬨ヲ作ル。城代左馬之允ハ落失。其外名アル者ハ大形ニ討レタリ。川原合戰ノ時。城兵鈴木越中ト云者。寄手井士川將監カ首取テ。川ヲ越行處ヲ。大浦監物十九歲。川中ヘ飛ヒ入テ越中ヲ追掛タリ。鈴木モ返シテ槍ヲ合セントス。然レトモ水深ク自由スルコト不能。監物若氣ニ心イラツテ。槍ヲ放シ突ニ突ハスシテ。越中カ脇ヲ後ヘ突越ス。越中此槍ヲトリ。跡ヲ顧ミテ槍ヲ玉ハリ忝ク候トテ退ク。監物尙々心怒リ。游クハカリニ川ヘヒタリ。向ノ岸ヘ上ル處ヲ越中取テ返シ。太刀討シケルカ。終ニ監物ニ打負。首ヲトラル。越中此時槍ニテ向ハヽ。監物危カルヘキニ。越中多勢ナルヲ見テ高名ハシタリ。除ントノミシケル故。長道具ハ捨タリ。太刀打シテ討レタリト時ノ人云アヘリ。相馬方新山西舘ノ城代酒井將監モ討死シケリ。桑折小左衛門十六歲ニテ諸人ノ見ル前ニテ首ヲトル。此外相馬方上下戰死アリケレトモ。其姓名未詳。盛胤城ヲ乘取テ諸勢ヲ集メ

閑居シタリ 則チ城ニハ門馬大和舍弟同民部ヲスヘ置レケル

齋藤伊賀謀討青田山城事

永祿六年 青田信濃嫡子左衛門・二男平左衛門 黑木ノ城ヲ落行 田村ハ行ク 田村清顯遠慮仕玉フハ 信濃父子ハ相馬譜代ノ者ニシテ 武勇謀略モ兼備シ 殊ニ長臣タリト聞ク 扶助センコト 相馬ノキコヘモ如何ナレトモ 指當テ頼ミ來ル上ハ 末ハトモ角モト有テ抱ヘラレタリ 清顯ノ內室ハ 顯胤ノ娘ナレハ 幼少ヨリ見ナレ玉フ故 清顯ヘ歎キ玉フ故ナリトソ 年ヲ經テ後 相馬ノ爲可然者ナリ 召返サレヨト盛胤ヘ度々異見アリシカトモ 承引ナシ 二男平左衛門ハ 田村ニテ度々群ニ抽テタル働ヲ致ス故 他所ヘ可遣ニ非ストテ 仙道二坂ト云處ヲ知行ニ與ヘ 新館ト云所ニ置レタリ 是ヨリ新館山城ト云シナリ 此兄青田左衛門修理亮 後ニ入道シテ不西ト云 コ ヲ仙道ノ內。舟引ト云ニ置カレタリ 此時岩城左京大夫親隆 コレハ伊達晴宗ノ子ナリ。母方ノ伯父重隆ノ養子ニ成テ 岩城ノ遺跡ヲ相續アル 然ルニ親隆仙道ヘ打越ヘ。田村境ニ於テ戰アリシニ 勝軍シテ同所管屋ト云所ニテ。首實檢アル處ヲ 新館山城一心ノ謀略ニテ 足輕二百餘ヲ隨ヒ 山ノ陰ヨリ忍ヒヨリ 迅風ノ如ク瞳ト押カケ 喚キ叫ンテ切掛リケレハ 岩城方大ニ亂レ 大將始メ動亂シテ逃チリ悉ク討レケリ。此後親隆コレヲクヤミ 欝心シテ狂亂ニ成玉ヒ 終ニ死去ナリ 如此戰功アル者ナレハ 山城ヲ他郡ニ差置テハ 相馬ノ爲ニ不可成 唯々召返シテ可然ト 一族折々諫メケレトモ 納得ナシ 其後イカニモシテ 渠ヲ討ント思ハレケレトモ 清顯手ヲカサシテ介抱アレハ 容易ノ沙汰ニ及ヒ難シ 然ルニ山城鷹ヲ好ミ。三坂ヨリ折々相馬領釘野山ニ來リ 犬ヲ使ヒ鷹狩ヲスルコト度々ナリ 盛胤コレヲ聞及ハレ 猶々憎ミ。深ク討手ヲ命セラルト雖トモ。兎ヤ角ヤシテ其儀ナシ。齋藤伊賀ハ元來山城扶持ノ者ナルカ。勇健儻ナル者ナレハトテ 召出シテ近習ニ

仕ハレケルカ。伊賀ニ申サレケルハ。其方ハ山城ニ扶持ヲ得タル者ナレハ。定メテ油斷スヘシ。罪有テ缺落シタル體ニ僞ツテ。山城カ許ヘ行テ。方便ニテ可レ討トナリ。則腰物ヲ賜與セラル。伊賀承諾セスシテ申ケルハ。山城武勇謀慮常ナラヌ事。平日存ノ前ナリ。某等カ謀才ヲ以テ。可ニ討果一者ニ非ス。餘人ニ命セラレ可。然ト固辭ス。盛胤重ネテ渠ヲ可レ討者アリト雖トモ。餘人ニテハ油斷スマシ。其方ハ兼テ首尾アル者ナレハ。山城モ油斷スヘシト思フナリ。仍テ汝ヲ頼ムナリ。綏急ノ心ヲ見計ヒ。何トソ討テ來ルヘシ。忠義ノ第一タルヘシトナリ。伊賀此上ハ無ニ餘儀一。カサネテ辭退モ如何ナレハ。先ツ彼地ヘ打コヘ。方便シテ見申スヘシ迚。罪ノ命ヲ待居タリ。山城ニ恩顧ノ者共。此巧ミヲ如何シテカ聞知ケン。山城ニ告ハヤト思ヒテ。釘野明神ヘ立願アル由ヲ申シテ暇ヲ乞受。明神ヘ一七日參籠ス。七日滿レトモ驗シモナシ。山城カ不運カ。又非禮ヲ納受ナキカトテ。獨リツフヤキテ下向スルニ。何方ノ岨根越シニ。山城カ聲ニ似テ列卒ヲ配ル聲。仄々ト聞ヘタリ。偖ハト急キ山中ニ分入リ。聲スル方ヲ傳ヘテタトリ行シカハ。山城ニハタト逢タリ。彼者云ケルハ。早々ニ皈ラルヘシ。其方此山ニ來ル由。盛胤聞玉ヒ。討手ヲ命シテ指越サル、結構アリト雖トモ。其方ノ運强キニヤ。未タ其儀ニ不レ及。其上齋藤伊賀ニ命シテ。三坂ヘ差越方便シテ可レ討トテ一刀ヲ與ヘラル。カク手當アレハ油斷アルヘカラス。多年ノ恩顧忘レカタク。此事申シ告ン爲。明神ヘ參籠一七日ノ暇ヲ乞テ待甲斐有テ對面セリ。コレ偏ニ神慮ノ冥驗不レ盡所ナリト。山城聞レ之驚テ曰。舊好ヲ不レ忘シテヨクコソ告ラレタリ。深志マコトニ不レ淺。生々謝シ難シトテ。落涙シテ別レ皈リケリ。斯テ盛胤伊賀ニ越度ヲ構ヘ。罪科ヲ云渡シ。改易セラレシカハ。伊賀先ツ仙道ヘ行。在所ヲ求メントテ。山城カ館ニ至ル。山城則對面シ。伊賀今何ノ用有テ來レルヤ。伊賀答テ某屋形ノ命ヲ過ツテ罪科ニ合。相馬ヲ追放セラレタリ。仍テ仙道ニ於テ在リ付

ヲ求メントマツコレ迄參リタリト云。山城能コソ來レリ先ツ草臥ヲ休足セヨトナリ。伊賀大形ニ仕負セタリト思ヒ、偖夜ニ入テ山城仕官ノ者共ニ久々迚逢タレハ、酒ヲ求メテ主従ニモス、々々シトテ、兎角シテ酒肴ヲ求テ上下ニ饗之事終テ山城兼テ謀リ置ケン仕官ノ者共ヒタノ／＼ト聞ンテ伊賀ヲ捕ヘ則縄ヲ掛タリ。山城カ曰其方盛胤ヨリ討手ヲ承リ來ルヘシ、有ノ儘ニ白狀スヘシ僞ルニ於テハ討テ捨ント。伊賀動セスシテ曰全ク左様ノ事ニ非ス、疑シクハ相馬ヘ人ヲ遣シ其實否ヲ聞ト、ケ申サルヘシ、罪科隱レナシト。山城夫ハ屯來リ謀ヲ設タル罪ナリ伊賀カサシタル刀ヲ改メ見ヨトテ。是ヲミルニ扱コソ此刀ノ拵ヘ、其方所持ニアルヘカラス、山城ヲ討テ可レ來ト。盛胤ヨリ賜ナルヘシト見ルカ如ク云ケレハ、伊賀覺悟シテ曰其方如推察勿論討手ニ來ルナリ。其方佳運強ク吾冥加ニ盡タル上ハ、如何様ニモ思フ儘ニ計フヘシトテスコシモ臆スル氣色ナシ。山城カ曰則首ヲ列ヘケレトモ。其方ノ心底ヨリ巧ミ出セシ事ニ非ス。盛胤ノ命ナレハ、君命違背ナリ難ク來レルナレハ、其勤志悪シカラス。屋形ヨリノ討手ヲ殺シテハ、逆心ノ上ノ重科成ヘシ命ハ助クルソ、早々歸ルヘシ若此上ニ仙道邊リ徘徊セハ、見付次第可レ討トテ、大小ヲ奪ヒトリ、翌日迄逐リ出シケリ。伊賀力ナクスコ／＼相馬ヘ立歸リ、直サマニ登城シテ、件ノ仔細ヲ達ス、其上ハ如何トモ爲スヘキヤウナシトテ。則伊賀ニハ五貫文ノ所知ヲ施サレコ。其後ハ中村ノ城西ノ外曲輪ニ置カレタリ。

義胤離縁附青田山城歸參之事

義胤十三歲ノ時、小高ノ城ニ於テ自ラ能ヲ催ス、是ハ稙宗丸森ヨリ入來ナリシ折、馳走ノタメナリ。稙宗褒美ノ餘リ、我ニ秘藏ノ娘アリ。義胤ニ嫁シテ聟ニセラレ度ノ由望マレケルニ、盛胤承引アツテ。則其年永祿二年、稙宗ノ御娘ヲムカヒトリ玉フ。年十五歲ナリ。妹背ノカタラヒ偕老同穴ノ思ヒ不レ淺。御娘ノ容儀ヲ始

メ難スヘキ處ナシ。母儀ハ越河ノ女ニテ稙宗ノ妾ナリ。然ルニ義胤ノ乳母ハ武石ノ後室ナルカ、惡心偏癡ノ人ニテ。義胤夫婦ノ中ヲ遠サクル事而已讒シケレハ。義胤イツトナク御中ウトクナリ行、交會ノ道タヘテ深周山島ノ思寢トナリ行ケリ。一兩年アツテ。丸森ヘカヘシ申サレンアラマシナリ。盛胤樣々異見アレトモ。義胤曾テ承引ナシ。此故ニ一族家臣相俱ニ盛胤ノ使トシテ。色々ニ詞ヲ盡シ。是非々納得アルヘシト諫メケレハ。再三ニ父ノ命ソムキ難ク。各モサ云上ハ。トモカクモト承引ナリ。サレトモ交會ノ結ヒナカリシトナリ。乳母ノ惡心ハ後ニコソシラレタリ。其トキハ義胤一心ノヤウニ盛胤モ思ハレ。家中迚モ同樣ナリ。然ルニ義胤ノ近習一人勘當ニテ流浪シ、仙道ヘ來リ。靑田山城ニ對面シ。四方山ノ閑談シケルニ。山城申ケルハ。相馬ニ珍シキコトハナキカ。浪人カ云。別事迚モナシ。去ナカラ頃日ノ取沙汰ニハ。義胤御夫婦中疎々シク。コレノミ下々迄ノ氣支ナリト。始終具ニ語ル。

山城熟々聞テ曰。惣シテ盛胤ハ心狹キ大將ナリ。其上正直一篇ニテ、物每偏ニ心ノ働キナキ大將ナリ。尤一族老臣ニモ。時ニ應シ事ヲ謀ル人ナシ。故ニ一向ニハカリ。萬ツノコト執行フナリ。左樣ニ妹背ノ不平ナルハ、高貴卑賤ノ差別ナシ。心ニ合ヌ緣組ハ、一日片時モ添ヒ兼ルコト。世上ノ通例ナレハ。義胤ノ心次第ニナシ、又似合ノ娵ヲトリ玉ハヽ、出生ノ家督モ出來テ。家名相續長久ノ基ナルヘシ。又似合ノ緣近郡ニ如何程モアランスレトモ、盛胤我儘ニ何事モ計ヒ玉ヘハ。一族家臣モ前後ヒロク分別ヲメクラシ計フヘキコトナルニ。今更左樣ノ人ハアルマシ。某抔相馬在居ノ時ナラハ。盛胤何ト宣フトモ。御家ノ爲ニ非サレハ我儘ハサス可ラストテ、夜モスカラ語リ合ヒケル。此浪人頓テ皈參シテ。或時義胤ヘ密々ニ件ノ趣キヲ申通シケル或ハ云此浪人ハ義胤ノ作爲ナリト云ヘリ。山城仙道ニテノハタラキ共ヲ聞及ハレ。召カヘスヘキ心有故。内證アリケルヤト云々。斯テ義胤先立テ盛胤ヨリ使シタル一族老臣ヲ。小高ヘ召ヨセ申サレケルハ。各ヲ賴ミ盛胤ヘ訴訟申度コ

トアリ其故ハ青田山城他郡ニ指置テハ末々相馬ノ爲惡カルヘシ。必ス後害ヲ招クモノナリ。枉テ渠ヲ召皈サレ、某ニ玉ハルヘシト、各才覺セラレヨトナリ。何モ承諾シテ盛胤ヘ參向ス。其比ハ盛胤平太隆胤ニ添フテ中村ニ在城ナレハ、各中村ヘ參向シ義胤訴訟ノ趣キヲ申達ス。盛胤ノ曰、我モ義胤ハ強テ異見シヌル事モアレハ、何事ニテモ可聞入事ナレトモ、此儀ニ於テハ免シ難シ。我明日ニモ亡命セハ。其時呼カヘシテ仕ハルヘシトナリ。各一同ニ申ケルハ。此儀我儘ノ樣ニ存スルナリ。御亡命ノ後ハ仰迄ニ不及。先達テ義胤御夫婦ノ中不順ナルヲサヘ、御異見ニ任サレ堪忍シ玉ヘリ。其思召分ケモナクテハ、向後何事ニヨラス。御父子ノ間ニテモ仰セ賴マレ難カルヘシト。色々ニ取繕ヒ申シケレハ、盛胤漸ク納得アリ。各強テ申ス所モ尤ナリ。然ハ相馬ヘ皈ルコトハ赦免スヘシ。對面ハ不可有ト。則義胤ヘ申達ス。義胤不斜喜ヒ、則山城ヲ呼返サル。山城先ツ草野迄皈參シタリ。其後盛胤ヘ又訴訟アリ。山城一度ハ召出サレ、目見玉ハルヘシト樣々執訴アリケレハ。終ニ免許アリシナリ。其後義胤誰々ニモ沙汰セラレス、一心ノ計ヒヲ以テ、內室ヲ伊達ヘ送リ皈サレタリ。相馬ニ三年程ノ起臥ハ。稙宗卒去一兩年前ナリトカヤ。此室皈鄉ノ後一兩年有テ死去ナリ。今ニ相馬ノ家ニ怨靈トテ出現スルハ此內室ナリトカヤ。越河御前ト申スハ是ナリ。偖青田信濃ハ田村ニテ死ス。山城ハ是ヨリ新館ト改ムルナリ。

義胤再緣深谷息女事

新館山城皈參ノ後。義胤萬ツ心ニ入リ勤仕日々ニ盛ンナリ。山城生得武勇ト云。才覺利發ナル者ナレハ日ナラスシテ人ノ服スルコト以前ノ如シ。山城分別シテ義胤ニ室ナクテハ如何トテ、折々コレヲ伺ヒ、宮城ノ郡主國分能登守ハ千葉六統ノ內ニテ。相馬同流ノ末ナレハ、末々ハ惡クハ計フマシトテ。則國分ヘ參向シ。對謁シテ願ヒケルハ義胤未タ再緣ナシ。一家ノ御中ナレハ。似合シキ緣方御指南玉ハルヘシト。無餘

儀申入レタリ。能登守ノ曰。聊モ疎意ナシ。心ノ及フ所ハ尋ヌヘシト應諾アッテ。山城ハ皈サレ。偖色々ト尋問有シカトモ。思滯ノ處有テ。其事延引ニ及ヒケル處ニ。黑川郡三分一所トテ深谷ノ城主アリ。先祖鎌倉權五郎景政ノ末ナリ。當時コノ深谷ハ謀勇ノ人ニテ、奥方ニテ輕ンスル者ナシ。此娘可レ然迚、能登守ヨリ山城方ヘ注進アル、山城急キ國分ヘ參向シ、委細承リ屆クルノ上、盛胤ヘカクト達ス、盛胤則納得アリ。此上ハ國分殿急キ取組頁リタシト頼マレケレハ。能登守媒ニテ契約日ヲ經スシテ相調フ。時ニ深谷ノ息女十三歳天正四年ノ春駕輿ナリ。偖深谷ヨリ舟ニテ今泉ノ濱ヘ著船ナリ、深谷ハ松島ノ續キナリ。父三分一所ニモ船ニテ海上餞別アル。此船相馬ノ地ヘ。無難ニ著岸守リ玉ハレ迚。金作リノ太刀一振。龍神ヘ手向ニ海底ニ沈メラレケルトソ。此息女後ニ於北殿ト申セシハ是ナリ。此腹ニ出生ハ則嫡男利胤。並ニ岩城貞隆ノ室。左近及胤越中久胤。右四人ノ母堂ナリ。元和四年五十五歳ニテ武陽於櫻田病死。道號月潭。

名取郡於蛇流川相馬勢敗軍之事

其後新館山城。奥方ノ大將彼方此方ヘ參謁シ。奥方功者ナレハトテ、少シノコトニモ奥筋大將ヘノ使ニハ。山城ヲ差越サレタリ、國分殿ハ媒ノ後ハ。益懇切ヲ結ハレケレハ。山城モ折々ハ推參シテ交誼不レ淺。然ルニ其頃伊達左京大夫輝宗、玉造郡岩手澤ト云所ヲ城地ニ見立。普請ノ結構有ト沙汰シケレハ。山城國分・深谷ノ兩將ヘ參向シテ話談ノ序ニ申シケルハ、內々近郡ニテ申唱ヘ候ハ。輝宗ニテハ岩手澤ヘ新城ヲ取立。葛西・大崎・深谷・國分・名取・亘理ヲ手ニ入ラルヘキ底意ナリト承ル。然レトモ巷說ナレハ誠シカラス。萬一實事ニ於テハ不レ輕大事ナリ、盛胤抔モ密々ニ承リ。各一族ノ大將ナレハ、若シ左樣ノ結構アッテ。事調フニ於テハ伊達家勝利ノ上ハ、若シ各共ニ旗下ニ属シ玉ハヽ。嘸遺恨ニ思ハルヘシ、心中推量存セラル。如何思ハレ候哉ト、盛胤兼テノ詞ニテ候ト申シケレハ、兩將偖

ハ盛胤ノ思惟左存セラルヽヤ、此方ニ於テモ右ノ唱アレハ内々用心ノ構有之ナリ。又昨今仕出シノ輝宗ノ旗下ニ成ランモ。遺恨千萬ナリト、各日暮ノ評議ナリトアリケレハ、山城カ曰、其事ヲ盛胤モ甚タカハシク存スルナリ。各歴々ノ御家ニテ、古來親族ノ御中、今更輝宗ノ下知ヲ請玉ハン事本意ナラス。近郡舊好ノ諸將、互ニ通シ來リ、殊ニ國分殿ハ相馬一門ト云。勿論深谷殿ニテモ。只今ハ縁會一味ノ事ナレハ、一入憤リ存スル處ナリト云ケレハ、兩將ノ曰盛胤ノ懇志忝キコトナリ、内々此方ニモ思立評談スルコトモアレハ。盛胤同慮ニ於テハ後詰加勢シ玉フヘシ、近郡小身ノ輩共云ヒ合テ先手トシ相馬ノ後陣ヲ得テ。岩手澤ヘ押ヨセ。敵ノ先ヲ折キナハ、輝宗ノ思慮相違シテ、當方ノ憂ナルヘカラス、然レトモ我々小身ハカリニテハ、伊達ハ對スルコト叶ヒカタシトナリ、山城カ曰各左樣ニ思召サハ、首尾相調フヘシ、盛胤常々此コトヲ存スレハ、必定加勢申スヘシ。兩將偕ハ願フ處ナリトテ、各評議一圖ニキハマリ。葛西。深谷・國分・北日・柳生・岩沼・亘理始、其與黨誓約ノ上山城方ヘ遣之、故ニ盛胤父子ヘ達之内々思立ル、事モヤ有ケン父子即時ニ承諾アル、依之山城又與ヘ至リ、各大將ヘ軍ノ次第評議シ、與七組ノ大將ハ先手、其跡ハ相馬、後陣ハ亘理ト定メ日限ヲキハメテ皈リケリ、天正四年六月下旬、相馬ノ兩將三百餘騎ニテ出張、亘理元庵ハ相馬勢ノ跡ヲオサヘ、逢隈川ニ舟橋ヲ渡シ、座流川ザル（蛇在川共）ニハ土橋ヲ渡シタレハ。道筋ノ難所ナク。イサミ進ンテ押行ク、盛胤ハサキナレハ旗本座流川ノ土橋ヲ越ヘ。二町ハカリ義胤ハ跡ナレハ。人數イマタ橋ヲ不越、義胤橋ヲコヘラルトキ、柳生ノ大將一騎盛胤ヘ乘向テ馬上ニテ申サレケルハ、遠路ノ出陣御辛勞ノ至リニ候。偖岩手澤ヘ忍ヲイレ。クハシク窺之ニ輝宗ノ人數ハ少々有之ノ由。其外ハアツマリ勢二千ハカリト申セトモ。伊達譜代ノ者モ千五百ハアルヘシ。外ハ當時ノ附屬ト見ヘタリ、我々手七頭ニテ。四百餘騎上下二千五百

ハアルヘシ相馬ノ人數都合セハ四千餘人然モ譜代ノ者トモナレハ。勝利ウタカヒ有ヘカラス。夫ニ付只今談合申度コトハ。輝宗領地ノ郡鄕三ツニ割リ。相馬ヘ一ツトリ。二ツハ七頭ヘツケラルヘキ歟。又半分ヲ附ケラルヘキカ。ケ樣ノコト後ニ違亂アレハ。年來ノ入魂無ニナルコトアリ。誓詞ニテ承ルヘシトナリ。盛胤ノ曰兼日山城各ヘ何トカ申シ候ヤ。某ハ輝宗ノ領地望ニアラス。各近郡ナレハ舊好ノ義ヲ存シテノ加勢ナリ。但シ馬ノ草飼所一ケ所モ附ケラレハ幸ナリトノ返答ナリ。柳生ノ曰。サアル上ハ申シ分ナシ。義胤ノ思慮如何アランヤ。盛胤ノ曰。我等承諾ノ上ハ異儀アルヘカラス。再談ニ不可及ト。然ラハ出陣ノ一禮ハカリ申サン迚乘通シ。土橋際ニテ乘向ヒ。義胤ヘシハラク面語有テ。柳生ハ先キニ乘返サレタリ。柳生乘戻ルト否。奥勢先手ノ旗色惡シク見ヘケレハ。盛胤不審ニ思ハレ下知セラルハ。中村田中ノ士卒。備ヲ固クシテ不可崩。何樣ノ事アリトモ。立皈ル迄ハ丸マリテ居リ。動クヘカラスト有テ。自ラ一騎義胤ノ備ヘ乘向テ。兩將橋キワニ下馬シテ。密談アリシカ。卒然トシテ盛胤太刀ヲヌキ。相馬ノ運ハ盡タリ。一騎モ命生テ皈ルマシキソトテ。土橋ヲ二太刀切玉フ時ニ今村三郎左衛門・桑折十郎右衛門二人ナカラ。弓ヲ持テ步行ニテ供シケルカ。弓ヲ捨テ太刀ニトリ付。一人ハ腰ニ抱付。此外モ走リ寄テ。押上馬ニノセタリ。此時如何シタリケン。盛胤太刀ニテ少シ怪我アリ、カヽル處ニ何地トモナク一勢群々押來リ。先手ノ七頭ヲ押隔。早鐵砲ヲカケソロヘテ相馬勢ニ打テカヽル。七頭ノ軍勢モ一致ナルヤ。其分レモ見ヘス事急ナリ。相馬方半途ニシテ。思ヨラサレハ盛胤ノ備亂レ立タリ。奥方短兵急ニ攻カヽレハ。旗本亂レテ引除キシカ。サル川ノ土橋ヲフミ落シタリ。其日晩立(ユフタチ)夥シクシテ川水濁リ水マシテ深シ。故ニ盛胤ノ馬ヲハ今村・桑折兩人ニテ川ヘ引入レテ此方ノ岸ヘ越シタリ。桑折ハ三十間ハカリ流レシカ。柳ヘ取付テ上リテ見レハ。與佐藤信濃カ

差物ヲ見付。渠ニ打ツレテ逃シカハ。盛胤ヘモハナレタリ。今村ハ如何ナリケン。行末不知トナリ。此兩人ハ常々盛胤ノ側ヲ不離鐙著用ノ役者ナリ。義胤モ川ヘ乘入除キ玉フヲ。奥勢橋ノ上ヨリ熊手ヲ伸ヘ。義胤ノ後口ヘ掛タリ。既ニ難義ト見ヘケレトモ。皆我先ニ川ヲ越シテ逃走レハ。カヘシ合テコレヲ打拂フ者ナシ。爰ニ黑木對馬川ヨリ此方ノ岸ニコシケルカ。是ヲ見テ馬ヨリ飛ヒ下リ。川ヘ飛入テ熊手共ニ敵ノ腕首ヲ切ナトセハ。義胤難ヲ遁レテ此方ノ岸ヘ乘リ上タリ。對馬ヶ手ヲトツテ指揚ケレハ。義胤今度ノ命ハ對馬ニタスケラレタリ。忠義不淺トアリケレハ。對馬カ曰。餘日ハ某式ヲハ犬ノヤツニ思ハレシカトテ。熊手ト腕ヲ川中ヘ投捨タリ。相馬勢父子兄弟モ顧ミスヒタ負ニ逃ノキケリ。盛胤ニハ橋ヨリ此方一町餘モ除テ馬ヲ立ラレ。北鄕中村勢ノ内逃ノコリタル者ニ十騎餘歩卒二百ハカリニテ控ヘラレタリ。義胤ハ逃ル味方ヲ乘切〳〵。名ヲ呼カケテ下知アレハ。小高・中村・標葉勢ノ内少々カヘシテ。五十騎ハカリ歩卒百五十許リニテソナヘヲ立直シ。シハラク支ヘ戰フタリ。相馬勢橋ヲコヘ來ルハ少ク。橋際ヨリ一町ハカリノ内ニテ。追ツ返シツ攻戰フ。此手ニ殘タル相馬勢ノ外ハ。馬上モ歩卒モ散々ニ跡ヘ皈リ。脇道ヘ走リ。一人モ返ス者ナシ。木幡藤十郎・同彦市等。此時討死ス。陪臣ノ内モ名アル者共討死シタリ。北鄕勢ノ内鈴木杢祐返シ合テ。義胤ノ目前ニテ首二ツ取タリ。義胤褒美有テ手柄見屆ケタリ。首ヲハ捨テ敵ニ向ヘト下知セラル。斯テ漸々ニ防戰シテ。一先ツ士卒ヲ引揚タリ。奥勢如何思ヒケン戰ニサノミ力ヲ入サレハ。追討ニ慕フ敵ナケレハ。相馬勢安堵ノ思ヲナス。諸卒旗本一ツニナツテ引退クトコロニ。岩沼ニ至リシカハ城ヨリシキリニ鐵砲ヲ打カケ。輙ク通リ難ク見ヘタリ。老士申シケルハ。各此鐵砲ハ恐ルヘカラス。コレ程ウツ鐵砲ニ怪我ナキハ。空鐵砲ナルソトテ。心ヤスケニ通リケリ。阿武隈川ノ船筏モ切オトシケレハ。先立テ逃重ナ

リタル者共百騎ハカリ。ヨクアツマリ居タリ。コヽニ新里猪之丞ト云者。ケ様ノ大河ヲワタスハ手縄ノ習アリト云。知リタル人アルヤ。若シサナクハコレヲ手本ニ渡レトテ。手綱ヲ左ノ方ヲ解キ。領ヨリ左ヘ廻ハシ左ノ拵ノ鏡ヘ引通シ。手綱ヲ長々ト取テ。具足ノ袖笠ヲトリテ鞍ニ結付。郎等ヲハ馬ノ尾鞦ノ房ニトリ付セ馬ヲ引イレ。其身ハ立スヨキニシテ渡シケリ。是ヲ見テ川ハ淺キソ迚。百騎ハカリ一度ニ噇ト打入レ。少々流レタルモアレト。歩卒ハ馬ノ尾鞦ニ取付キ抔シテ一人モ流レス。人馬共ニ皆押渡リケリ。亘理元庵ハ後陣ナレハ。疾々皈リテ城ニ引入タリ。定メテハ徒ラニハ通スマシキソトテ。疑心アリケル處ニ。鐵砲少々打掛タレトモコレモ玉ナシ。サレハ恐ルヽコトナク通リケリ。程モナク義胤續テノカレタリ。盛胤ニハ後殿シテ引除ル。士卒心ヤスク存スヘシ。脇道ヲスヘカラス。閑(シツカ)ニ丸マリテ引退クヘシト下知セラレケレハ各。所ニ團ファ引除ケリ。盛胤義胤身近キ勘仕ノ輩歩卒抔。兩將ヨリ先ヘ逃タルモ。父子後陣ニアリト聞テ。皆道傍ノ藪陰ナントニ隱レ居テ。兩將ノ通ラレシ跡ニ立交リ供シケリ。此一戰ハ主從父子モ不見分。散々ニ敗北セリ。盛胤一代ニ覺ナキ難儀ナレトモ。功者ノ大將殊ニ義胤勇氣アリテ立返シ。防戰アリシユヘ。奥方ノ五頭モ强テ不追ナリ。此トキ若米澤ヨリノ加勢ニテモ押來ラハ。相馬ノ運蛇流川。阿武隈ノ間ニ盡ナンモノヲ。武運强キコトナリト唱談セリ。其比ノ沙汰ニハ。奥方ノ七將伊達ヘノ忠節ニ。相馬ヲ引出シ討ントセシカトモ。運ツヨク遁レタリト。又岩城ヘモ内通ノ上共沙汰シケリ。右奥方ノ諸將ハ是ヨリ以後。伊達ノ旗下ト成ニケリ。

相馬亘理手切附伊達相馬出張之事

先年小齋・金山ヲ元宗ノスヽメニ依テ。盛胤ノ手ニ入タリ元宗相馬勢ノ戰ヲ始終見物シテ。一戰ノ自力モナカリケレハ。義胤不與アリテ。金津ハカリヲ元宗ヘツテラレタリ彼之元宗内々憤リ思ヒケルカ。此度座

蛇流川合戰ヨリ實々其中違ナカラ、前々ノ首尾ハ離レリケリ。此蛇流川合戰ノ後相馬ニテ評議シテアハ、元宗輝宗ト引組ミ度アリテ、相馬側ト離セラレンノトノ[illegible]アリト。巷説頻リナリ。其比新館山城萬ツ出頭ナレハ。南部ヘ[illegible]ニシケルハ近年伊達ト御不和其上小齋攻ヨリ後ハ元宗不快ノ心底ナリ。味ニ以テ此間ノ蛇流川ノ亂ニテ早晩好ノ親ミハ離レタリト存ス。元宗歟ニナリ味方ニナリ。今迄宜キコト候ハス。心ノ不定大將ナレハ。相馬ノ爲ニナルヘカラス。尤伊達ヘハ一家中ナレハ。タトヒ相馬ヘシタシミアルトモ、末々頼ムヘキニ非ス。却テ仇トナルヘシ。幸ヒ蛇流川ノ次手ヨキ時分ナリ。亘理ヲ攻テ御手切レアルヘシ。亘理ヲ取玉ノニ於テハ、小齋・金山・丸森當領ナリ。北ハ阿武隈川ヲ境ニテ亘理ヲ領セハ、輝宗何程大身ニナリ玉フトモ、手ヲ下ササル、コト不可有トス、メケレハ、盛胤ノ曰ソレハ勿論ノコトナレトモ、元宗ハ伯父ナリ、重宗ハ聟ナリ。兼ヨリ不義アラハトモ角モ、此方ヨリ事ヲ求ンハ、他國ノ聞エサヘ遁レ難シ。輝宗何ト思ハル、トモ、[illegible]ヘシ。[illegible]コトハ有マシキ[illegible]老臣申ケルハ。山城申ス處尤ニ候ヘトモ。惡テ思案ヲ廻ラスニ。伊達今ハ四郡ノ主ニナリ玉フ。其上老臣武功ノ分別者多ク、亦四郡ヲモ大方其下ノ如クニ随附セシム。晴宗。輝宗大將ノ模様勝レストモ云トモ、下ニハ無比類武略兼備ノ老士多シ。相馬ノ領地ヲ奪ヒトランコトモ安カルヘキナレトモ、元宗亘理ニ在テ武勇勝レタル人ナレハ、相馬ヘ與シ玉フ内ハ、自然[illegible]切ノ恐レアレハ。元宗當手ヲ放レサル内ハ。伊達ヨリ阿武隈ヲ越テ來ルコトハアルマシキナリ。是等ヲ考ヘテコレ迄相馬ヘ手ヲ付サルヤト存スルナリ。然ルニ元宗ト手切アツテ、元宗伊達ヘ引組ナハ、新地・駒ケ嶺・小齋・丸森ハ勿論・其外モ危カルヘシ。元宗ハ如何ニモ手ヲ入レテ、相馬ヘノ入魂アリタキモノナリト申シスヽムル老臣モアリケレトモ、時ノ出盛ニ任セテ山城

折々強テ此事ヲス、メケレハ　盛胤父子遂ニ納得アツテ思ヒ立レケリ　天正五年卯月十二日　先新地迄出張　翌十三日未明人數ヲ押出シ　亘理ノ村里濱汀ノ屋合ニ火ヲハナチテ燒拂フ　僧俗男女ノ嫌ヒナク、出合者ヲハ切捨テヨト下知アリケレハ、手向フ者ハ數人切捨タリ、其上世財牛馬等迄亂取シテ、穀物家財或ハ童男童女ハ下々ノ者共亂トリシ。船ニテ原釜今泉へ運送シケリ　此事急ニ告來レハ　元宗父子少々人數ヲ出サレケレトモ　如何思ハレケン　防戰ノ設ケモナク城內へ引入ケリ　義胤モ城ヲ不責。手切ノ驗ハカリニテ新地迄皈陣ナリ　此時盛胤ハ出陣ナシト云ヘリ　即時ニ元宗ヨリ輝宗へ愁訴アツテ、是非々々出陣ヲ願ハレケレハ。應諾アツテ同月晦日米澤ヲ發シ出陣アルトキニ輝宗ノ老士ニ遠藤內匠諫メケルハ、遠路ノ御出陣ナレハ。先人數ヲ揃へ。合戰ノ手配リヲモ評議有テノ後出陣可然　時日ヲ經テ延引ハ不苦コトナリ。相馬ハ小敵ナレトモ、近郡ニテハ無比類強敵ナリ、昔ヨリ相馬へ手合有テ勝利ナキコト承リ及フ所ナリト。色々諫メ止メシカトモ。輝宗承引ナク。米澤。信夫。柴田。刈田。伊達ノ人數ヲ引卒シ。同年五月六日ニ輝宗亘理ノ地ニ到着アツテ。同十五日新地ト駒ケ峯トノ間迄寄來リ　宇田中村ノ城ヲ責ラルヘシトノ評議一決ナリ　亘理重宗ノ妻ハ盛胤ノ娘ナレハ、ヒソカニ注進先立ケレハ　義胤ハ忍ンテ駒ケ峯ノ城へ入リ來ル、輝宗二三ケ村へ火ヲ放タシム、此火ノ手ヲ見テ相馬ノ人數一二ノ備ヲ押出シ敵ニ對ス。義胤ノ旗本ハ二ノ備ノ跡ニ備ラル。伊達方如何思ヒケン　戰モ不始相馬方ハ向ノ働キヲ待テ。互ニ睨ミ合テ控へタリ。然ルニ如何思ハレケン　輝宗備ヲ引マトフテ其場ヲ引除レタリ　義胤ノ三備海道ニ付テ跡ヲ慕ヒ。駒ケ峯ノ北ノ山迄追慕ヒケレトモ。返ス敵モナク。輝宗ノ備モ不知。又僞テ引ノ謀ヤアラント思惟有テ、追ステ、引返ス。輝宗ノ後陣ハ新地ノ城下田中ノ繩手道ヲ引除ク處ヲ。新地ノ城下ヨリ見物シテ有ケル輕卒共、搆へ

實テ足輕百人ハカリニ侍二人付テ下知シテ追崩シ首二十五討取。其上鑿鐵砲槍ナト奪取テ。勝鬨ヲ擧テ城ヘ入ル。新地ノ海道ハ昔ハ今ノ古城ノ東ノ田中ニテ谷地小屋トノ間ナリ今ノ海道ハ近キコロヨリ開ケリ此谷地小屋ノホトリ皆大泥ナリ人ノ股ヲモ越ツヘキ程ノヌカリナリ。田中繩手ノ一筋ヲ通リテ。北ニ高倉品寄井ナト云村アリ其所ヘ出ル迄ノ内道ノ兩脇七八丁ノ間大泥ナリ故ニ伊達勢返スコトモナラス。先ヘ駈通ルモ不叶。跡ヨリ敵ニハ追ハル、。返セハ討ル、故兩脇ノ田ヘ飛ヒ入ル、近々ト這マハレトモ。追人モ泥ヘハ入カネテ。目前ニ見レトモ討コト不能只道ニ返シタルハカリ討取ケリ輝宗ハ亘理ノ内小塀村ヘ引取滯陣ナリ近郷ノ將士又二本松迄所々ノ加勢ヲ待合セテ同七月九日伊具郡ノ内小齋河子矢ノ目ト云所ニ出張輝宗ノ大軍其外備々ヲ定ク堀柵ヲ構ヘ面々在陣ナリ。常々ハ伊達二十二備ト云ヘトモ此トキハ幾備アルヤ其數モ不知古佐井ヲ責ントテ日暮ノ謀略止トキナシ城内ハ地侍二十五騎加番ノ士十六騎歩卒彼是二百餘ナリ。城主ハ佐藤伊勢カ嫡子宮内ナリ城邊ノ野山ハ寄手ノ旗差物雲ニ聳ヘ霞ニナヒキテ物々シクソ見ヘタリ相馬ノ兩將モ對陣ノ爲相馬ト金山ノ内西海子澤大内ニ出張アリ此所ノ山ニ陣城ヲ搆ヘ在陣ナリ新地駒ケ峯古佐井凡森金山ヘ加番ノ士ヲ入レ其外所々ノ境目ノ城々ニ加勢ヲ配リ分ラレケレハ大内ニハ二百五十餘騎ニテ對陣セラル。大内ト金山ノ間一里。金山ト小齋ノ間モ一里ハカリナリ。又小堤村トハ今ノ亘理ノ城ヲ云此城ハ武石代ノ城ニ非ス沙見鎭座ノ山ナリ昔ノ城ハ今ノ雄山寺ナリ

冥加山附矢野目合戰伊達勢敗北ニ附盛胤首實檢之事

輝宗小堤ヨリ金津小佐井ノ間阿子矢野目ニ陣場ヲウツサレ諸手ノ陣モ手配手ツカ夫々ニ備テ陣々影シ小堤ニ在留ノ内最上。大崎・黒川・宮城。名取。二本

松谷ヨリ加勢アツテ、山野村里皆旌旗ヒルカヘリ亘理元庵其外伊達勢、本陣ヨリ十町餘出テ陣所ニ柵ヲ結ヒ、堀ヲホリ土手ヲ築上テ備タリ　是ハ小齋丸森ノ通路ヲ妨ケ　又時々岨峯崎ニ上ツテ城ヲ責ン結構ナリ、相馬勢常々ハ七備トイヘトモ、此時ハ加番ヲクハハル所八ケ所ナリ。是ニ城代地士ノ外十騎二十騎宛入置シカハ、兩將出陣ノトキハ、三郡ノ人數ヲ集テ、三百騎ニ不レ過、又岩城左京大夫親隆ハ、輝宗ノ舍弟ナレハ、コレモ油斷シテハ危シトテ。岩城堺熊村熊川ニアル小城ニモ、加倍ノ兵士ヲ指置、勿論新山ノ城ハ岩城ノ押ヘナレハ。猶モ兵士ヲ分チ配リ。新地・駒ケ峯・丸森・小齋ヘモ加勢ノ兵士常ヨリ多ク引分タリ　サレハ小齋・金山・丸森・大内ノ四方　二三里ノ間　伊達方ヨリセリ合不レ絕、兩陣ノ手負討死日暮ナリ　伊達勢トモスレハ、小齋ノ城續キ岨峯崎ヨリ登リ、城ヲ攻ルコト朝夕ナリ、故ニ岨峯崎ヲ堀切リ柵ヲ結テ、伊達勢ノ登ル道ヲトヽメン迚、相馬ノ兩將其外士卒ヲ引具シ、大内ヨリ金山ヘ出張。金山ノ城ニアツテ堀切普請ノ評議アル。天正四年七月十七日普請始メ　奉行ニハ江井河内。中村助右衛門。佐藤河内ハ當時金山ノ城代ナリ、同嫡子監物。杉新右衛門ナリ、小齋ノ城代ハ佐藤宮内、加番ハ北鄉五十餘人泉大膳頭ナリ。右普請奉行共ニ云渡サレケルハ敵出テ普請ヲ妨ルニ於テハ。奉行ヲ始馬乘ノ士ハ直ニ岨峯崎ノ道ヲ城ヘ乘入レヨ、人足半分ハ岨峯ノ下長者カ迫ノ長根ヲ差テ金山ヘ逃來レ。半分ハ小齋ノ小口セハケレハ、馬乘ト人足ト混亂セハ味方打スヘシ。裏門ヲ心カケ逃入シメヨ。聊モ敵ニアタルヘカラス。只難ナク上下城ニ入ルヲ手柄トスヘシトナリ、岨峯ト長者カ迫トノ間。草深キ所ニ一二三ト次第シテ、野伏ヲ隱シテ百五十人伏セ置タリ　コレハ人足ヲ追テ伊達勢長根ヘ來ラハ、其トキ伏兵オコリテ討ントノ構ナリ、相馬勢ノ惣軍ハ陣小屋ニモアリ　又金山ノ町ニ居ルモアリ。又近邊ノ村里ニ居テ相圖ヲ待ツ。盛胤・義胤ハ金山ノ城ノ矢倉ニ上リ、普請

ヲシタ、メラレシカ。此體ヲ見テ膳ヲ持ナカラ立レケルヲ。盛胤義胤ハ湯漬ヲ出ニアテラレタルヤ。アツト答ヘナカラ矢倉ヨリ下リ。膳ヲ投ナカラ兜ヲ著馬ニ乘テ。早門前ヘ乘出サル。盛胤其時敵ノ容體ヲ見付。驚テ其門開テ義胤ヲ出サハ曲事タルヘシ。矢倉ヨリ制シ玉フニヨリ。門番開兼タルヲ義胤太刀ニ手ヲ掛ラレ。急キ開ケトアリケレハ。無是非門ヲ開タリ。續テ乘出スハ泉大膳・木幡因幡・赤澤伊豆等。此外四人都合七騎ナリ。盛胤其門ハヤクサセ。一騎モ出シタラハ曲事タルヘシト言リ玉フ。コレハ跡ヨリ續ク味方ナクハ。義胤進ンテ卒爾ノ働キ不可有。又手分手配モ落居セヌ内。コト出來シテハ不調儀ニテハ危シ。其内ニ下知アルヘキトノ思慮ニテ矢倉ヲ下リ玉フ内。義胤早長根ヘ乘カケ玉フト聞ヘケレハ盛胤モ無是非。出馬ナリ。有合タル者三十騎ハカリ。足輕百ハカリ大浦上野足輕大將ニテ靜ニ從ヘマハリ。林ノアル陰ニ差物ヲシホリ。馬ノ舌ヲ結ヒ。精氣ヲシツメテ控ヘラル。惣軍ヘハ下知ヲ下スヘキ間モナケレハ。諸手ハ飲食或ハ居ネフリテ。ウカ／＼ト本陣ノ左右ヲ待テ居タリケリ。義胤ハ主從八騎ナレハ。跡ヨリ味方續クヤト振皈／＼見ラレケルニ。一騎一人モ來ラス。サレハ迚今更乘戻サンモ本意ナシ。先ツ向ノ山ヘ乘上テ敵ノ容子ヲ見ントテ。田中縄手ノ細道ヲ進マレケルニ。向ノ山陰ヨリ伊達勢ノ押來ル音。恰モ雷ノ轟クカ如ク。地響シテ山ノ鳴ルコト夥シ。七騎ノ者共申ケルハ。敵多勢ニテ追來ルト覺候。此方ハ以上八騎馬取等僅ニ十四五人ナリ。コレニテ敵ニ對サンコト。以ノ外ノ不覺ナリ。敵ノ未タ見ヌサキニ召返サレ。跡ノ田端ニ控ヘ玉ヘ。其内ニ諸卒モ馳參スヘシ。又敵モ此田中ヲ乘コシテ。急ニ追懸ルコトハ不可有ト。達テ諫メケレトモ義胤ノ曰。各ノ申ス如ク敵ハ多勢ナルヘシ。然レトモ敵ノ顏ヲモ不見。高聲ニ咎メテ乘返サンモ不覺ナリ。其上敵ヲ恐ル、體ヲ見セナハ。此八騎ハ丁揃ニセラレン。何事モ時節到來シテ。遁不叶ハ力ラナ

又此ハ雪ノ色ニ紛レ寄リナカラ伊達方ハ〔〕トモア
ルハナシ。雪深ケレハ少シモ後レハ見スマシキソコ
ト涼シク高笑セントテ馬ニ鞭ヲ當テ一騎道ノ向ノ山
ハ乗上ント山下一二間ニ乗出タラル。此時伊達勢山
上ヘ二ツニ分レ、両方三四十騎程ツヽ六七十騎ハカ
リ山上ヘ乗出シタリ。追ハレテ遁ル程ノ兵共ハ皆山上
ニテ討レタリ。義胤今ハ討死ト哀ナル一見跡ヲ一目見
玉ハトモ味方一騎一卒モ不續來。七騎ノ兵士義胤ノ
向ツハ乗迪シ、義胤ノ馬取ヲ呵シテ目ノ明ヌ奴原カ
ナ馬ノ口ヲ引セトセト云ステヽ七騎ハ山ヘ乗上ケ
槍ヲ合セケリ。義胤ノ馬ハ無理ニ引戻シ縄手ノ中程
ニテ馬ヲ立ノル山上ノ敵ト義胤ノ間一丁ニ不過。此
時ニ至リ槍一筋弓二張外ハ馬取四人ナリ。七騎ノ者
共ハ二反ニ返シ上ニ太刀ヲ合セ突下シケルカ、如何シ
ケン七騎共ニ落馬シタリ。歩卒二三人付タレハ手ヲ
引來テ彼所ノ田ノ畔ニ、二人ニ人寛ムラ〳〵ニ立
居タリ。早此トキハ伊達勢山上一面ニ乗並ヘテ、凡八
十騎程リト見ヘタリ。其後日ノ山間ニハ何百騎ケ
ラン只雷ノ如クニ鳴聲ク。此時伊達勢一息ニ乗下シ
無兵急ノ軍セハ、義胤ヲ始メ一人モ生残ルコトハア
ルマシキニ、伊達勢如何思ヒケン只ニラミ合テ指控
ヘタリ。相馬方ハ僅ノ小人數ナレハ、如何トモナスヘ
キ様ナシ。然ルニ不圖組ノ内山田源兵衛鐵砲ヲ持テ
駆付タリ。又山上ノ騎兵一騎花麗ニ出立タルカ、衆ニ
抽ンテ山ノ下一間餘乗リ下シ、勇ミ進ンテ控ヘタリ。
義胤山田ニ向テアノ武者ヨクネラヒテ討テト。山田
緒スマシテウツ。中ルト否馬ヨリ落。山下ヘスヘリ來
ル。山田片手ニハ鐵砲ヲ持、刀ヲ抜テ切レトモ不切
甲冑上テ切レトモ具足首ヘカヽル故切落サレスト
ヤカクトスル處ヘ、スケヤカナル者一人下リ來ルユ
ヘ、山田首ヲモ不取立ノキケリ。両方間近ケレトモ
手ヲ出サス只ニラミ合タリ。カヽスル内相馬方モ騎
兵五六騎朱柄ノ槍二十挺歩卒小人杯追々ニ少々走
セ來リ、五六十人ニ成タリ。此時閑ヲアケコトアリケ

ンハ、ドツト鬨ヲ作ル、山上ノ騎兵歩卒ソロ／＼ト山ヨリノリ下シ、相馬方モ追々ニ馳加リ、百四五十ニナリケリ、山上ノ伊達勢今ハ段下リ揃ヒタルヤト思フ處ヘ義胤馬ヲ進メテ、百四五十ノ者共喚キ叫ンテ一文字ニ打テカヽル、如何シケン伊達方急ニ色立テ、足並シトロニ見ヘケルヲ、此時ヲ遁スナト聲ヲカケ合、短兵ニ亂入シケレハ、未タ備モ立テサル内ニ、押亂サレテ引立タリ。始々逃來ル道ハ一筋ナレハ、行列ノ樣ニ來リシカ、山下三四十間ノアイタ小川アツテ、究ハタヽ騎ト云處ニテ、四方大泥ニテ、其芦原ツヽキニテ、馬モ人モ不叶場所ナリ。道アレトモ歩ミテヤウ／＼行程ノ細道共ナレハ、伊達勢二ツニ分レ、二百騎ハカリハ道ニハマリ引トリシカ、以ノ外ニ込合タリ、此ヲ見テ殘リノ二百騎餘ハ、道遠ト思ヒケレハ、件ノ芦原ヲ直ニ行ントノリ入シカ、大泥ナレハ進退ノ途ヲ失フ、義胤例ノ鐵團扇ヲフリ上時分ハ今ソ追付テ討トレト、乘マハシ／＼下知セラレ、敵ヲ討トモ首トルナ、先ヘ進ンニ追立ヨヽシキリニ聲ヲカケテ下知セラル、相馬方関ヲ作リカケ、ヒタ追ニ追ケレハ、伊達勢大ヌカリヘ乘コミ、働コト不叶ヲ突オトシ切落サル、卒此時ハ相馬勢三百餘、馬上モ百騎ニ超ヘタリ。伊達勢歩卒ハ土方道ヲワタリ、山々ヘカヽリテ逃走ル、道ニハマリテ引ノクハ騎兵ハカリナリ、追々追付追付討取タリ、逃行先ニ馬橋ノ有トコロニ至テ、橋ヲ越ヘ難ク、シハラク此ニ支ヘタリ、義胤此敵可返讐ニハ非ス、不審ナリ迚、逃行伊達勢ノ跡ヲ只一騎一サンニ乘通シ、落行先ヲ、切互ヘハ、馬橋ヲ蹈落シタリ、橋ノ左右大ヌカリ芦原ナル故、乘通スコト不能シテ支ヘタリ、義胤急キ乘返シテ、敵ハ返シ合スルニテハナキソ、橋落テ泥ヘ乘入レニ猶豫シタルソ、時ヲ不失、追討シテ首トレント下知セラル、此時義胤先見切ラレタルコト、後ニ老功ノ者共モ凡夫ノ所爲ニ非スト感心シケルトソ、又馬術ニ達者ナレハニヤ、主將タル人馬ハ鍛練アルヘキコトナリ、伊達方ヨリ一騎乘反シ、矢目左

馬三ト名ノリ義胤ノ馬ヲ目掛急ニ乗來ルヲ、小八三人走リ向ヒ槍ニテ突落シ首ヲ取ル、又逃ル中ヨリ取テ返シ人間田清江ト名ノリ義胤ヲ目ヲケ一サンニ乘來ル小人鞴平次石橋ノ長刀ヲ持セケルカ長刀ノ鞘ヲハヅシ中ヘキカト伺ヒ義胤聞モ時ニヨルソトアリケレハ清江ニ走リカヽツテ鑓ヲ薙ナトシタリ清江ノ孫入間田太郎續テ乘來リ鞴平次ニ打テカヽルヲ鞴平次願ル手タレナレハ又是ヲモ切テ落シケリ亘理元庵ト岩沼ノ城主長沼跡先ニ落行ケルヲ岩沼ハ返テ見ヽ山田源兵衛ニ鐵砲ニテ討レタリ後ニ聞ケハ岩沼ト元庵前後ニ落行シカ既ニアヤウク見ヘタリ相馬方此二騎ヲ目ケテ馬上六七騎歩卒三十餘ニテ一向追ニ追ケタリ元庵岩沼ニ向ツテ申サレケルハ如何ニ岩沼武士ハカヽル時ナリ如何ニ離儀ナレハ迚モ見苦シク同章ノル、ナト詞ヲカケラレ岩沼尤ニ候トテ其儘ウヘシ合セテ討レケリ元庵ハ岩沼カ乘返シタル間ニ歩卒四十餘ニ圍マレ跡ヲモ見ス馬ヲ馳テ落ル處ニ、小斎ノ城ヨリ相馬方少々門外ヘ出向タルヲ見テ、元庵城ノ方ヘ馬ヲ引向ケ、歩卒モ槍ノ穗先ヲソロヘ足早ニスヽミ來ル、城兵小勢ナレハ出タル者共引入テ門ヲサシタリ、元庵ハ一散ニ一騎駈シテ矢野目ノ取出ヘ乘入ケリ、此日元庵ハ馬三疋乘替タリトソ、松岡主郎ハ痛手ヲ負、馬ヲモ槍ニテ突レシカハ芦原ノ中ヘ乘入レ落馬シテウツ伏シニフシテ死ケル、コレハ顯宗最愛ノ士ナレハ殊ニ愍歎シ深ク松岡死シテハ此後ノ大働キハナキソト、伊達方ニテノ取沙汰ナリ、實ニ相馬方寄田石見ト相良將監日來入魂本公モ同等ナリ、小屋モ同居ナリ、今日遅クハセ付シカ相良來ルヤ否、鎧武者リヘシ來ルヲ討取タリ、石見是ヲ見何事モ今迄ハ同等ニテ是而巳劣リナハ生キテカヒナシ、コヤ敵ヲウセナラハ討死スヘシト思ヒ詰、落行輩八ニ付レテ、矢野目ノ方ヘ行ナル處ニ、鎧武者一騎槍持ニ八ニ、馬ノハヤミ落行ヲ追付タリ、石見喜ンテ近付ヨランドミルニ、中門石見ヲ

見テ。槍打振テ湯村備後ソルソ。思ヒモヨラヌ者哉。惡ク近付過チスナト。荒言吐テ不寄付。石見サテハ名有者ソト思ヒ。己モ逃行體ニナシ。備後ニ向テ味方悉ク敗レタリ。何ト思ヒ玉フトモ不可叶。只早ク無事ニ退キ後日ノ功ヲ期シ玉ヘ。ケ樣ノ難儀ナル除口ハ如何ニモカロクスルモノト承ルト欺キケレハ。備ハ味方ナリヤト思ヒケン。尤ニ候ト答テ少シ馬ヲタルムル處。草摺ヲ結ヒ擧テ股ノ透間見ヘタルヲ。石見ツトヨリ。振上テ切タルニ高股ヲ皮少シカケテ切付ケレハ。備後馬ヨリ落タリ。中間石見ニ突テカヽルヲ。側ニ捨タル槍アルヲ幸ト押取テ突拂ヒ。備後カ首ヲ得タリ相馬方早十人ハカリ追續ケシカハ石見安々ト引取テル義胤ハ逃ル敵凡マレハ追チラシ返スヲハ打トリ〳〵。矢野目ヲサシテ押行。伊達勢ケ樣ニミタレタルヲ。盛胤ハ林ノカゲニ忍ヒツシテ此容子ヲ知リ玉ハス。然ルニ鐵砲ノ響キシキリナレハ。各盛胤ヘ申ケルハ。義胤ニハ早御討死タルヘシ。何ノ爲ニ隱レ忍

ヒ玉フヘキ。跡ヨリ追カケ合戰アルヘシト云ケレハ。盛胤ノ曰。義胤卒忽ノ出陣ナレハ。早討死セラレツヘシ。今ハ悔テモ無詮。後度ノ報戰ヲ遂ルヨリ外ナシト。詞ノ下ニ鐵砲一ツ鳴タリ。是ハ最初山田源兵衛カ打タルナリ。シハラク有テ伊達方馬上歩卒少々打交リ。前後亂レテ引退體ナリ。盛胤遠見アツテ是ハ味方勝軍ト見ヘタリ。義胤モ討死ハセマシキソ。イヨ〳〵愼シムヘシ。今ニ手柄サセンソトテ。馬上三十騎ハカリ歩卒三百ハカリ。敵方ヨリ見ヘルヤウニ。藪陰ヨリ少シ押出シテ備ヲ立。又敵ノ跡ヘ遮リテ右ノ騎兵ノ差物トモヲ取ヤツメ。四十餘ヤブ陰ニ一處ニ揃ヘテ立置。前ノ備ト小旗トノ間ハ一町ノ少シ内ナリ。盛胤ハ騎兵三十餘歩卒三百餘ナリ。伊達勢ノ引除體ニテ二騎三騎五人十人。足早ニ推亂レテ我先ニト途ヲ爭フ。盛胤下知シテ逆除先ノ藪陰ヨリ件ノ小旗推出シ。又行脇ノ藪陰ヨリ一町二町ノ間ニシテ三十騎餘群々トナシ出ス。逃ル者共コレヲ見テ。勝ト先ニモ散ア

レハ返シ合スル心ハナク、何方ヘ除クヘシト益ニマヨヒ遣行先ノ定ハリ、多クハ混田義原小川孫ヘ乗込ミ。離ノ上下乗廻シ。上ヲ下ヘト混亂スルヲ。追詰追詰或ハ切ラ落シ突オトス。盛胤ノ備ハ始終クツロクス、敵ノ進ルニ順ヒ變ヘ備ヲ立、彼所ヘ備フ引ハサリテリ、コレハ輝宗出陣ヲ杏本陣ノ旗見ヘサル故ナリトソ。又義胤ハ矢野目ヲサシテ追ユク處ニ、小宮ノ城ヨリ二十騎ハカリ馳加リシカハ。六十騎餘ナリ。歩卒二百餘面七思ヒノ\ニ進ル敵ヲ討ツ、義胤ノ馬廻リハ少ナシ、敗軍ノ諸勢返シ合スルハ少ナク、皆柵内ヘ引入ケリ、相馬方續イテ入ンモ小勢ナレハ入リ難ク、柵際ヲ乗廻シ二騎三騎大刀合セタルモアリ、此時取出ノ口ニ金ノ扇ヲ圓相シ、胄ノ立物ニシタル武者一騎乗出ス、相馬方ヨリ一騎掛合テ太刀打セシカ、此立物ヲ切オトシタルニ、折節夕風吹來テ日ニ映シテ飛ヒ散タリ、實ニ見事ニ見ヘシトナリ、借日ハトクト暮メリ、相馬勢多クハ不覺敵モ出ス不戰、猶豫スル場ニ非レハ早々ニ引上ケル、後殿ハ佐藤河内打丸メテ除ケルカ、此時取出ヨリ兵卒五六十追來ル、河内如何シケン落馬シテ討レシトナリ。此日伊達方ノ討死歷々ニハ、岩沼ノ城主。角田ノ城主・瀬上ノ城主。柴田ノ城主。津田ノ城主コレハ追詰ラレ返シタルヲ、荒繩殿介討トリ、差物ヲモ分捕ス。地赤ニ三巴ナリ、村田ノ城主・小泉ノ城主。黒澤・澤田。大町。栗野・鳥田・成田・大條。長谷倉・小原。茂庭。本内。松岡十郎。眞柳宮内・湯村備後。亘理七郎是等ヲ先トシテ騎兵百五十騎餘、歩卒都合五百餘。帳面ニ載スル處ナリ、相馬方ノ討死ハ、佐藤河内・本橋四郎右衛門。高田六郎、歩卒三十人程ナリ、コレ程伊達方歷々ノ討死ナレトモ、凉シク返シテ討死シタルハ、矢目左馬丞。人岡田遠江・同孫太郎・岩沼ノ城主ナリ、岩沼ハ郎從モ主ト同シク田ノ中ニテ十三人。塚一ツ隔テ十四人合廿七人討死シタリ。コレハ翌日岩沼城主ノ首ヲ請ニ來ルニテ知レタリ、其夜盛胤長者カ迫ニ在陣ナリ、盛胤下知ニ北郷中郷ノ野武

士、近邊在々ヨリ馬ヲ集メ。人足ハ空俵二ツ宛持來レトフレサセ　是ヲ以討ステシ首共ヲ拾ヒ集メ運送ス。然ルニ手負テ未タ不死アリ。又死テモ首ノ落サル有テ、人足モ恐レテコレヲ不取得ト云依之。此郷中郷ノ不斷組馬一疋ニ人足二人ツヽ差ソヘ。首ヲ落シテ拾ハセヨト下知セラル、一疋ニ首九ツ宛附テ運ヒケレハ、漸ク夜モ明方ニナリケリ、芦原柳陰堀川ニ伏シタルハ、夜中ナレハ拾ハレス。道近キ所ハカリヒロヒ集メ。七百三十級トソ註シタリ。マツ是ニテ實驗アルヘシトテ、長野一露時ノ軍師ナレハ。實驗ノ規式執行シタリ　山ノ峯ヲ三段ニ棚ノ樣ニ切平ラケテ、上段ニ岩沼ノ首一ツ洗テ据置キ　二段ニ能武士ト覺シキ首七ツ。横ニ一トホリ並ヘ。下段ニ能首四十程是モ横ニナラヘ置　末ノ地段ノ兩脇ニ殘ル處ノ首トモヲ向合セテ積上上ニ首一ツニ据置タリ　僧侶ヲヨンテ藤楊枝ヲ仕ハセ。布ヲ指ニカラミ。岩沼ノ首ノ唇ヲ拭フナリ　此首一ツケ樣ニ仕タリ　僧大將ハ太刀ニ手ヲ掛ケ

岩沼ノ首ヲ睨ンテ立。諸士皆如此。時ニ一露箙ヲ敲テ凱ヲ揚ル。各一同ニ鬨ヲ擧。太刀ヲ眞向ニ擧。岩沼ノ首ニ向テ下段ノ際迄ス、ミ。跡ヘ去テ太刀ヲサヤニ納ム。如此始ヨリ三度執行。事畢レリ。一露此首共ニ何ヤラン字ヲ書ケルトナリ。此規式終テ其日義胤馬上二十騎ハカリ、歩卒六十餘人ハカリニテ。伊達ノ取出ノ近所ヘ出テ。小鷹ヲ終日獵ス。取出ヨリ敢テ出テ見ル者ナシ。柵ノ間所ニヨリテハ二三町ハカリナリ。此長者カ迫迄不意ノ合戰ニ。相馬方利ヲ得タルコト。天命ノ至ル處ニテ。武運ノ名利ヲ開レタリトテ。冥加山ト名付ラル。故ニ今ニ古名ヲ呼來レリ。又其時ノ首塚此處ニアリ。誠ニ相馬ハ總州千葉ノ妙見ノ冥加アリケルニヤト。世上唱談シケルトソ。長野一露カ嫡子右衛門次良ハ。故アリテ岩沼ニ扶助セラレシカ　其日ノ戰ニ地水色ニ白階子ノ差物ニテ踏止リ戰ヒシヲ見タル者トモ申ニヨッテ、一露ヲシテ首共ノ内可尋由ナリ。依之一露集リタル首ノ内ニテ。頓テ尋出シヨク洗

思ヒヲナス猶モ其張本人中野常陸ヲ誅セント、ヒソカニ是ヲ尋ネシムルニ、其所ヲ不レ知。其子何某ヲ於ニ長井ニ捜シ出シケレハ、則縛シテ米澤ニ引來リ、終ニ磔ニ行ハレケル。是ヨリシテ一家中ノ和平ノ色ヲアラハシ、君臣父子一體ニ調ヒケレハ、晴宗モ今ハ安堵ノ思ヒヲナシ、家督ヲ輝宗へ讓ラレケル。輝宗モ亦内亂ノ跡ナレハ、格別ニ心ヲ盡サレ、政事私ナカリシカハ、日ヲ追テ國中睦シク、四民和ラキ、兵卒堅ク見ヘケル。サレトモ往昔ノ領地ニ競ヘテハ、十カ其三四ニモ不レ過ケリ。

伊達政宗誕生附奇瑞

輝宗ノ室ハ、羽州山形城主最上修理大夫義守ノ息女ナリ。或時輝宗ノ室、深閨ニマトロミ、枕靜カナル折シモ、夢中ニ所ハ禁裏ト覺シキ所ニテ、齡八旬計ノ老翁、手自ラ梵幣ヲ捧ケ來テ、則彼室ニ與ヘ給フト見テ、夢忽チニ覺タリ。此ヨリ懷妊セラレシカ、程ナク永祿十年丁卯八月三日ニ男子降誕アリ。然ルニ一ツノ不思議アリ。彼息左手ノ掌ニ、滿海ト云文字ヲ握レリ。其書形偏ニ墨ニテ書ケルカ如シ、侍女集ツテ之ヲ洗フニ、ヤウヤクニシテ消失タリ、其上右ノ目盲テ片眼ナリ、輝宗頗ル不審有テ、城下領分等ニ滿海ト云者アリヤ否ヲ尋ネシムルニ、米澤ノ城下ニ滿海ト云權者アリ。彼ハ當時京都將軍義昭公ノ近臣ナリシカ、或夜不思議ノ瑞夢ヲ蒙ムレリトテ、數代ノ弓矢ヲ棄テ、熊谷直實。渡邊瀧口カ流ヲ汲ミ、忽チニ法師トナリ、滿海ト號シ、奈良。高野。三井寺ヲ住居トシテ、佛道經論ヲ執行セシカ、其後ハ高尾文覺カ跡ヲ慕ヒ、深山幽谷海岸ニ蟄居シテ。觀念行力ヲ盡シケルカ。サセル驗シモアラサレハ、倩以ニ佛法ハ異端寂滅ノ教ニシテ、甚人倫ヲ失フニ似タリト思ヒカヘ、夫ヨリシテ實學タル聖經賢傳ニ心ヲ寄セ、六經ニ眼ヲ曝シ、斯テ年月ヲ送リシニ。帝都ハ兵革眞最中ニテ。臣ハ君ヲ弑シ。子ハ親ニ逆フ、四隣八境皆合戰ノ街ニシテ、四民手足ヲ置クニ所ナク、片時安キ心モ無リケレハ、滿海甚厭ヒ、斯ル紛亂

レケルニ。七八歳ノ頃ヨリ。心根賢コク才智アッテ。威風尋常ニ超テ見ヘケレハ。輝宗喜悦有テ。近習ノ中ニモ廉直ニシテ豪傑ノ器アルヲ撰ヒテ。其傍臣ニ附屬セシメラル。梵天丸常々ノ遊ヒニモ。奸僻ノワサヲ嫌ヒ只眞直ニ物ヲモトメテ。仕兒仕女ト云トモ。少モ閑覆ノ仕方アレハ忽チニ氣色ヲ損シ。又正路ニ事ヲ携ヘテ私曲ノ構ヘナキハ。時ニ與嬉シテ之ヲ愛スルニ至ル。其賞罰自然ト義ニカナヒ。恰モ大人ノ擧動ニ異ナラス。依之九歳ノ春ヨリ。外傳小學ノ門ニ入ラセ箇諫ヲ請ヒ肄ヒ禮ヲ學ヒ。詩歌ヲ誦シ。射御ヲ習ハセラル。才能日ヲ追テ勝レケレハ。父母ノ寵愛限リナシ則守居主伯。小原縫殿助ヲ以テ補佐ノ臣トス。或時梵天丸山川ノ遊慰ニ出ラレシカ。終日遊ンテ晩景ニ及ンテ皈城アリシニ。路ノ傍ラニ一ツノ小寺アリ。梵天丸彼寺ニ立寄ッテ。暫時休息セラレ。突彼所ヲ見廻リテ後佛壇ノ正面ニアル不動ノ本像ヲ見テ。梵天丸問テ曰是何者ヲ作リタルソ。寺僧答テ曰。此ハ不動明王ト申シテ。佛ニテマシマスト。梵天丸重ネテ。佛ト云ハ柔和ノ姿ニシテ。大慈大悲ノ誓ヒトコソ聞シニ。是ハ正シク堅甲利兵ノ形ニテ。嗔恚憤怒ノ相ヲアラハシ。専ラ闘諍ノ全體ニシテ。是偏ニ修羅ノ所行ナラントアリケレハ。寺僧横手ヲ拍テ曰。幼キ御心ニテ斯ハカリ深ク尋ネ玉フ事コソ。不淺難有驚キ入候。サラハ不動ノ本體ヲ釋シ。聞セ申サン。夫不動ト名付ルコト應身ナリ。凡ソ佛體ニ應身依心ノ二ツアリ。不動ハ體ヲ以テ導ク處ノ佛ナリ。寂然トシテ盤上ニ方石ヲ居ヘシムルカ如クナル時ハ。心體動クコトナシ。人各其心體ヲ動スルコトハ。悉ク五慾七情ニヨレリ。之ヲ佛家ニ十二因縁ト云。人則此十二因縁ニ縛セラレ。五慾七情シメカラミテ八苦絶エ難シ。此ニ於テ本心自性ノ寂然ニ至ランコトハ。利劍ヲ以テ其十二因縁ノ縛リ繩ヲコト〱ク切放シ。本心。物モ滞ルコト無ニ非レハ。靈明タル佛心ニ至ルコト難シ。其五慾七情ヲ斷切ル思ヒハ。譬ヘハ生身ヲシテ盛焔ノ中ニ立ルカ如

シ此ヲ以テ其理ヲ悟得シテ全體ヲ結ンテ此形像ヲ作ル者ナリ此等ノ者ナルニ非ス此理ナリ陰陽ト申スハ本來自性ノ理ニシテ。胸中一物アルコトナシ。自性簡明無ナリ是ニ向ヘハ色聲ヲウツシ去ル時ハ空ナリ鏡來テ影ヲ移サス善惡トモニ向ノトキロニ從フ。佛體不動又作爲ナシ。タトヘハ月ハ一輪ニシテ影萬水ニ移ルトイヘトモ月下ツテ水ニ住セス水上ツテ月ヲ迎ヘス是佛法ノ本ナリ君童今御身ノ上ニ於テ。此工夫有ンニハ。不動ノ利劔縛ノ繩ニテ邪氣惡魔ヲ降伏シ玉ハヽ人心ノ智ヲ開テ十方ノ門ニ至ルニ煩惱妄想ノ毒ヲ打破ルノ謂ナリ忍辱慈悲ヲ本トスト雖トモ。怒ルヘキニ怒ラサレハ惡鬼益增長ス。一度怒ル其内ニ大慈悲ノ佛心コト〳〵ク兼備セリト念頃ニ談話申シケレハ梵天丸未タ幼稚ナリト雖トモ大ニ感シ悟ラレケルニヤシハラク黙シテ言ナカリシカ良アツテ曰貴僧ノ法談我コヽロヨク之ヲ聞ケリ併吾此法ヲ用ンニハ、體ヲ屈テ心ヲトルヘカラスト寺僧答テ曰善哉左右ノ從人梵天丸ノ得心其故ヲ辯スル事不能トカクスル内ニ日モ西山ニ斜ナリケレハ梵天丸暇ヲ乞テ出立ラル寺僧モ門外迄カニ送リテ皈リケリ其ヨリシテ梵天丸信慈愛ノ心深ク仁心ヲ專トシ政務賞罰ノ道ヲカリソメニモ心懸ラレ或時ハ武道ノ所作ヲ業トシ殊ニ文筆ヲ嗜ンテ、倭歌ノ道ヲ好ミ年齡ヨリハ萬ツノ道賢クシテ日ヲ追月ヲ重ネ英雄ノ萠隱レナカリシカハ世ニ稀ナル生先ヲ近キハ見ルニ魂ヲ冷シ、遠キハ聞テ舌ヲ卷キ初メ嘲哢シタル輩モ大ニ仰天シ心ヲ傾ケコト〳〵ク思ヒ付ニケリ誠ニ卞和カ玉ハ三世ノ後ニ光輝ヲ生シ、深山ノ櫻ハ花ノ時ニアラハルトハ偏ニ此人ノ事ナラント遠近共ニ唱談セリ

伊達最上對陣附柏木山合戰

出羽國上野山ノ城主上野山左京大夫滿兼（實ハ本名小梁川）ノ同國山形義光ノ妹聟ナレトモ先年ヨリ不和ナリ然ルニ義光近年四鄕ヲ押領シ其機ニ乘テ上野山ヲモ

攻落サント結構アル由聞ヘケレハ、滿兼家臣里見內藏助・同民部（後號遠俊）ヲ近付、義光此度我領地ヲ犯サントスルノ由其聞ヘアリ。我小身ニテ一分ノ力ニ叶ヒ難シ。伊達輝宗モ義光妹聟ナレトモ、兼テ不和ナレハ加勢ヲ乞ヒ、逆討ニ討テ後ノ災ヲ除カント欲ス　兩臣聞テ尤ノ計略ニテ候、輝宗近年內亂ノ節　領地境ノ事ニ付テ伊達最上ト中ヨカラス　事ヲ待ツ折柄ナレハ、輝宗遂亂アルヘカラス　輝宗大勢ニテ加勢アラハ、義光必ス上野山ヘ出馬アルヘシ。其內ニ手寄ノ人數、峯々谷々ニ伏置敵ノ不意ニ出テ戰ハヽ、味方勝利ヲ得ンコト、疑ヒ有ヘカラスト云ケレハ、滿兼悅ンテ則米澤ヘ使者ヲ以テ、我義光ニ對シ日比恨アリト雖トモ、微身ニテ一人ノ力ヲ以テ對シ難シ。輝宗出馬アルニ於テハ、我等國ノ案內致シ、味方得勝利、義光ヲ討取候ハヽ、輝宗ニハ最上ヲ手ニ入玉フヘシ、滿兼ハ端々ヲモ支配致度ノ旨云送ル、輝宗ニモ內々最上ノ內ニ、一味ノ者モ出ヨカシト思ハレケル、幸ナレハ流ニ棹サス。其便リト喜ヒ。加勢ノ儀安キ間ノ事ニ候。追付出陣可レ有ノ由返答ナリ。滿兼喜ヒ。此上ハ先義光カ家臣成澤道忠ヲ籠置タル成澤ノ城。程近ケレハ押寄テ攻落シ、其利ニ乘テ山形ヲ攻メント評定ス。此事山形ニ聞ヘケレハ、義光家臣伊良子宗牛（初號ニ信濃守）ト云ル老武者ヲ呼ンテ、汝ハ成澤ニ行テ。道忠ト心ヲ合セ籠城スヘシ、城中ノ若者共打テ出テ戰ントハヤルトモ、柵ヨリ外ニ一人モ不レ可レ出ト下知セラル。斯テ輝宗多勢ヲ卒シテ米澤ヲ發シ。既ニ上野山ヘ出陣アツテ滿兼ニ對面、相共ニ成澤ノ近邊マテ出張、則所ノ者ヲ呼出シ。成澤ノ城ノ樣體ヲ委細ニ聞トヽケ。諸將ヲ集メテ評議アリケルハ。成澤道忠ハ七旬ニ及フ老人ナルニ。加勢トシテ又六旬ニ餘ル宗牛ヲ遣ス事。義光カ心ヲ察スルニ。若輩ノ士血氣ニマカセ。打テ出ハ利ナキヲ察シ。之ヲ可レ禁ノ爲ナリ、殊ニ彼宗牛ハ、武田入道信玄モ東國ニテ三人ノ勇者ト稱美セシト聞、信玄今程日本ニテ武篇剛ノ者ト名ヲ呼程ノ者ヲ聞出シ、枕屏風ニ書

集メシニ。此伊良子宗牛。三番目ニ書セシトナリ。如此老功ノ者共ヲ差置上ハ 輙クハ責落シカタシ 義光此者共ヲ大將トシテ 城ヲ堅固ニ持セ 其内ニ人數ヲ出テ前後ヨリ取籠メ 討取ヘキトノ智謀ナルヘシ 斯ル所ニ攻寄戰疲レタル折柄 義光大勢ニテ後詰セハ由々敷大事ナルヘシ 蒲倉ノ曰 サレハ義光上野山マテ出陣セハ 兼テヨリ四方ノ山々ニ伏兵ヲ設テ 前後ヨリ取掛可ニ攻討ト計リシ處 義光思慮深クシテ 道筋ノ城ヘ加勢ヲツカハシ 其身ハ山形ニ止ル 左アレハトテ味方小勢ニモ非スシテ 敵ノ働キ出ルヲ待ンモモトカシ。敵謀アレハトテ一軍モセスシテ。數日ヲ遂ランコト 餘リ云甲斐ナク候間 勢ヲ分テ 成澤ノ城ヲ押ヘ置 某先陣トシテ 義光カ陣ヘ押寄 有無ノ一戰有テ 勝利ヲ得ル時ハ 成澤ハ自ラ落城スヘシト云ナレハ輝宗尤ト同意アツテ 則蒲倉先陣タルヘシト軍評定究リケル 義光ハ蒲倉・輝宗山形ヘ寄ルトモ 又成澤ノ城ヲ攻ルトモ聞ヘケレハ 氏家尾張守。志村九郎兵衛・矢桐相摸守 其外ノ諸將ヲ集メ 此度輝宗・蒲倉ニ山形ヘ馬ヲ入ラレテハ 他國ノ聞ヘモ口惜ケレハ早速ニ上野山ヘ出張シテ防クヘシト 氏家カ申不可然 敵ハ大軍殊ニ蒲倉案内者ナレハ 如何ナル謀アランモ難計 上野山マテ深々ト働キ出ル事無覺束存スルナリ 敵縱ヒ成澤ノ城ヲ攻ルト云トモ 五日十日ニテ落城ス可ニ非ス 是幸ニ成澤ヘ後詰ニナリ 城中ト共ニ心ヲ合セ 合戰ヲ遂ケ上ハ 立處ニ勝利アルヘシ 敵モシ成澤ノ城ヲ押ヘ置 此方ヘ働キ出レハ柏木山ニ陣ヲ取 森ノ内ニ人數ヲ伏セ 不意ニ軍ヲ發サハ。必勝疑ヒアルヘカラスト云ケレハ。義光ヲ始メ皆尤ト同シ 則山形ヲ打立テ 柏木山ノ邊ニ著陣ス 然ル處ニ上野山勢成澤ニハ押ヘヲ殘シ 山形ヘ押寄ルノ由 先手ヨリ告來ルナラハ 爰ニテ相待ヘシト 先陣矢桐相摸守。第二陣氏家尾張守 其外以上七手ニ分テ小泉掃部。加藤太郎右衛門ニ鐵砲二百挺相添 旗本ヨリ相圖ノ太鼓ヲ拍ツニ順テ 其時輝宗ノ旗本ヘ可打

慝ト下知シテ先立テ柏木山ヘ遣ハシ埋伏セシム、滿
兼。輝宗曾テ此謀ハ不察義光柏木山マテ發向シタリ
ト聞邊ツテ押カケ短兵急ニ攻討ヘシト士卒ヲ勵シ。
輝宗ハ山ノ麓ニ備ケレハ滿兼ハ松原ノ西裏マテ押
出シ先手既ニ鐵砲ヲ放テ矢ヲ飛シ兩陣相支テ鬨ヲ
發シ楯ヲ鳴シ時ヲ移シテ相戰フ伊達勢ハ未タ備ヲ
固メ雌雄ヲ謀テ控ヘタリ義光ノ旗本ヨリ時分ハヨ
シト備ヲ分テ伊達勢ノ方ヘ繰出シケレハ、スハヤ此
手ヘ向フハトテ伊達勢モ備ヲ動シ色立テ見ヘケル
時、義光ノ旗本ヨリ相圖ノ太皷ヲ打立ケレハ、兼テ伏
セ置タル柏木山ノ足輕共一度ニ起テ山ノ腰ヲ廻リ、
輝宗ノ本陣ヲ横合ニ見ナシテ二百挺ノ鐵砲ヲ雨霰
ノ如クツルヘ討。思ヒ不寄コトナレハ。輝宗ノ旗本騷
キ亂レテ裏崩レシテ見ヘケレハ、上野山勢是ニ驚キ
一度ニ崩レテ敗走ス、山形ノ先陣タル矢桐相模守ハ
聞フル太刀打ノ達者ナルカ黑糸ノ甲ニ同毛ノ冑ヲ
著黑ノ馬ニ乘リ、大太刀ヲ振テ四方ニ當リ八方ヲ打

テ廻ル、二陣氏家尾張守モ先手三百人備ヲ進メテ。一
度ニ打テカヽリケレハ上野山勢亂足ヲ立直スニ備
ナク返合スルコト不能シテ四角八方ヘ散亂シ追
討ニ討ル、者數ヲ不知。伊達勢モ備亂レケレハ。山形
勢勇ミ進義光ノ旗本モ諸軍ト共ニ攻蒐リケレハ、既
ニ惣敗軍ニ及ヒケルヲ輝宗士卒ヲ下知シテ半途ニ
支ヘ、手痛ク防キ戰ケレハ、山形勢長追スルコト不
能半途ニ追捨テ鐘ヲ鳴シテ打上ケル伊達勢ニモ手
負討死餘多ナリ輝宗。滿兼ハ敗軍ノ士卒ヲ集メ其日
酉ノ刻ニ漸ク上野山ノ本城ヘ引取ケル、斯ル處ヘ輝
宗ノ内室ヨリ使ヲ馳テ申サレケルハ、サセル怨讐ノ
中ト申ニモ無之ニ、輝宗。義光兄弟ノヨシミヲ離レ、
斯ク合戰シ玉フコト世ニ珍シク淺猿キコトニ覺候、
父義守常々ニ申サレシモ義光輝宗必ス中能セハ、領
國境ハ隔トモ互ニ水魚ノ交リヲ結フトキハ縱上杉。
佐竹一味シテ寄來ルトモ、オソラクハ憂ルコトナシ
ト云々自ラコソ女ナレ政宗モハヤ成長ナレハ譬如

何ナル逆意アリトモ我等ニ免シ玉フヘキニケ様ニ弓矢ヲ取結フトノウタテサヨ早々此陣引取可給若御承引ナクハ。自ラ府中ニテ如何ニモナルヘシト。ヒタスラ歎キ申越サレケレハ。顕宗モ黙シ難ク。其上此度ノ軍勝利ナカリシカハ早々ニ軍ヲ納メ。則米澤ヘ皈陣セラレケル

葦名盛隆攻高倉附立野蔓節死

扨モ葦名修理大夫盛隆ハ。養父盛氏卒去ノ後。會津ノ遺跡ヲ相續シ。父祖ノ武威ヲ受ケ継キ。近國ニ將タリシカ。父盛氏卒去ノ節。仙道ノ旗下數輩盛隆ノ喪ヲ弔ハス。音信ヲ斷チ。代替ノ形勢如何ナラント窺フ者多シ。サレトモ悲情ノ折柄ナレハ。之ヲ咎ムルニ暇ナク。暫時打捨置レケル處ニ。安積高倉ノ武士共ハヤ叛逆ノ聞ヘ有ケレハ。盛隆世俗ノ喪ニ習ヒ。程ナク倚廬ノ苫ヲ離レ。凶服モ解レ。今ハハヤ叛逆ノ者共。其儘ニ可差置ニ非ストテ。自ラ兵卒ヲ率ヒテ出馬アル。盛隆會津始テノ出陣ナレハ。其行装綺羅ヤカニシテ。誠ニ目立テソ見ヘタリケル。安積高倉ノ諸士。此由ヲ聞テ徒黨ノ餘類ハ不及云。郷士野武士等悉ク相語ラヒ。粮ヲ運ヒ兵器ヲ集メ。高倉ノ要害ニ籠リ。一戰ヲ勵ント進ミ合ケルカ。會津發向ノ多勢ニ聞懼シテ。郷民野武士ハ大方ニ落失。殘ルハ大將立野蔓兵衛其外國侍計ナリ。斯テ會津盛隆。安積高倉ノ城ヲ取圍ンテ四方ヨリ攻立ケル。城兵モ氣ヲ屈セス。爰ヲ專途ト防キ戰ヒケルカ。モトヨリ小勢ノコトナレハ。防戰矢玉ノ術盡テ持コタヘ難ク見ヘケレハ。大將立野蔓兵衛ヲ始トシテ。城兵各人質ヲ出シテ降参シケレハ。仔細ナク一命ヲ助ケ。始メテノ出陣ニ勝利ヲ得。武威ヲ仙道ニ示シテ。黒川（今ノ若松）ニ皈陣セラレケル。其後程ナク立野蔓兵衛又叛逆シテ一族ヲ催シ。會津ノ旗下ヲ叛キシカハ。盛隆大ニ怒テ。彼人質ニ出シ置タル立野カ女房ヲ串刺ニシテ殺サレケル。其時女房刑人ニ向ツテ。日頃弓箭ノ武士ハ骨肉ノ愛情ヲ捨テモ。忠ヲ遂ントスルヲ本意トス。一旦恨有テ叛ク上ハ。何ソ一婦ノ拙

キ身ニカヘンヤ。我又人質ニ渡ル最初ヨリ。死ヲ懐クハ戰國ノ常ナリトテ。少シモ顏色ヲ變スルコトナク。死ニ臨ンテ

淺猿ヤ身ヲハ立野ニ捨ラレテ寢亂髮カ串ノツラサヨ

ト一首ヲ殘シテ空クナルソ無慚ナレ 立野聞之愁涙袖ヲ浸シケルカ。イヨ／＼盛隆ヲ恨ンテ。終ニ三春ヘ落行田村ノ旗下ニソ加ハリケル。

盛胤任三浦介

盛胤ハ家人ヲ集メテ議セラレケルハ。傳ヘ聞ク洛陽ニハ織田上總介信長朝臣。武威サカンニ震ヒ。畿内近國悉ク服從シ勅令ヲ蒙リ天下ノ武將ニ備リ。諸國ヨリ旗下ニ屬セン事ヲ願ヒ。或ハ自ラ上洛シ。又ハ使節ヲ馳テ君臣ノ禮ヲナスト聞 此上ハ某モ使者ヲ上セ。貢ヲ頁シ後ロ楯ヲ堅ムヘシトテ。家人荒井萬五郎ヲ使者トシテ。駿馬二匹ニ土産トシテ黃金千鋌ヲ進獻セシメケル。斯テ荒井ハ會津ヲ立 戰國ノ道路次ニ隙取。漸ニ京著シ。此旨ヲ達シケルニ。信長喜悅有テ。彼葦名氏ハ我ト共ニ桓武ノ流レヨリ出テ。家門多ク先祖ハ三浦介ニ任セラレタリトイヘトモ。應仁ノ大亂以來邊鄙荒遠ノ諸臣朝覲ノ禮中絕シ。侍衛ノ役長ニ隔リヌレハ。一向補任有職ノ沙汰ナカリケル故ナルヘシトテ。序ヲ以テ奏問ヲ遂ラレ。頓チ盛隆ヲ三浦介ニ任セラレ。勅宣ノ綸旨ヲ帶シテ。醍醐ノ密教院會津ニ下向セシカハ。絕テ久シキ家業ヲ繼居ナカラ。綸命ヲ蒙ルコト誠ニ家ノ面目 何カハ之ニ可過 速ニ勅答謝禮申サテハ叶ハシトテ。折柄小笠原大膳大夫長時。先年武田信玄ニ戰負。越後ニ蟄居セラレケルヲ。盛氏ノ時ヨリ招イテ會津ニ置レケルカ。此節長時ノ指南ヲ受。勅答ノ文ヲ認メ。今度ハ一族金上兵庫頭盛備ヲ指上セ。勅恩ヲ謝シ申サレケル。

政宗元服ノ政宗娶田村淸顯息女

天正五年丁丑正月十一日 梵天丸十一歲ニシテ 父輝宗ノ前ニテ元服セラル。利髮ノ一族ノ伊達上野介政景

ニ[illegible]命セラルル時ニ輝宗ノ日 信[illegible]山侍中納言政朝ノ後胤トシテ 氏ハ伊達氏 字ハ藤次郎 諱ハ政宗ト名乗ルヘシト有ツレハ 梵天丸未タ幼稚ナリト雖トモ天性才智備リ 老功モ恥ル計テレハ 畏テ云ハレケルハ 累世大官領政宗ハ 智仁勇兼備リ玉フ名將ト承ル 然ルニ某不肖ノ身ヲ以ア 聊カ其名跡ヲ穢サンコト 其憚不少 此儀恐入ノ由辭退セラル 何候ノ一門一族ハ不及云 出座ノ諸士 幼君ノ遠慮深キ其志ヲ感シケル 輝宗快然トシテ重テ申サレケルハ 當家代々公方ノ諱字拜受セリ 然レトモ今亂世ニテ 京都ヘ通路安カラス 又公方ノ威勢モ段々ニ衰ヒ玉ヘハ 今ハ有リ無カ如シ 然ハ一字ヲ申受タリトモ サノミ眉目ニモ不可成 累世政宗ハ奥ノ大將 文武ノ達人ナリ 此代ニ多ク郡庄ヲモ手ニ入 當國長井ノ庄マテ當家ニ属シ。奥羽過半ニ超テ領地セラレシ吉例ナレハ。憚ヲ思フヘカラス。又外ニ思フ仔細モアル間、必ス辭スルコト勿レト有ケレハ 梵天丸再ヒ辭スルコト不能 此上ハ兎モ角モ尊命ニ任スヘシトテ 則其宴例ニ隨テ 伊達藤次郎政宗ト申ケル 其後左京大夫ト號シ美作守ト改メ 又越前守ト號 後陸奥守トソ稱シケル

政宗長年ニ隨ヒ 物毎心ヲ盡サレ 家中ノ老若ヲ親シミ 自國他國ノ風俗 政事ノ邪正主[illegible]智愚 士卒ノ強弱ハ勿[illegible] 山川海陸險易廣狹ニ至ルマテ コトノヽク尋ネ問ハレ 或ハ家中ノ諸士善惡ノ批判ニ拘ハラス 自ラ之ヲ試ミ 其器ニ隨ヒ 選擧シテ用之ラレケレハ 初メ僞リ佞リシ者トモ 大ニ恐レテ身ヲ愼シミ奢ヲ遠サケ 聊カ奸訴スル者ナク 君臣朋友ノ間尚シクモ隔コト勿リシカハ 領國次第ニ治リ 近隣遠境ノ諸大將親疎ヲ云ス 皆傳聞々々使節ヲ馳テ交リヲ結フ 何レモ親族ノ中テレハ 互ニ音信有テシハラク和睦ノ體ニ見ヘケル 然リト雖トモ代々弓箭ノ中ナレハ 何レモ一旦ノ親シミニテ。互ニ對顏モナカリケル。其上何國ニモ讒者佞人多ケレハ。少シノ節ヲ以テ。是ヲ掠メ彼ヲ惡ミ。袋ニ錐ヲ包ミタル如クニテ。境々ハ六ケ

敷事ノミ絶サリケリ、玆ニ奥州三春ノ城主田村大膳大夫清顯ハ。嗣子トスヘキ男子ナク。一人ノ息女アリケルカ近國大家ノ中ヘ因ミ家督ヲ居ヘ家ヲ讓ラント議セラレシカ近年政宗ノ行跡若年ナレトモ弓矢ノ道文筆ノ業國中ニ秀テシ形勢ヲ見聞セラレ渠ト緣ヲ結ハハ田村ノ家ノ後榮ナルヘシト思ハレケレハ、諸臣ヲ集メテ評議アリケルハ、三春ハ四境皆敵地ニシテ、屢隣將ノ爲ニ犯シ掠メラル、我小進ト云ヒ、モトヨリ援兵ノ因ナケレハ、終ニハ敵ノ爲ニ領地ヲ奪ハレンコト鏡ニ物ノウツルカ如シ、今近國ノ諸將ノ中ニ、智才勇氣若年ナレトモ政宗ニ比スル者ナシ、所詮伊達ニ緣ヲムスヒ、當家ヲ長ク傳ント欲ス、相馬義胤ハ。モトヨリ一族ナリト云トモ。我トヒトシク小進ナレハ、領地ノ事タニ手ヲ塞クニ不足、況ヤ我家ノ助ト成ンコトハ思モヨラス。然リトテナマシイニ大家ニ緣ヲ組ンテ、世繼ヲ定メタリトモ、家中ノ仕置ォロソカニシテ、家名マテ亡サンハ。是不孝ノ第一ナリ、政宗ニ緣組ンモ先キノ不見ル事ナレトモ、渠カ天性尋常ノ者ニ非ス、若輩ト雖トモ老功ヲ拒ム實ニ良將ノ器アリ是ニ因マハ不易ノ基ナラント思フナリ汝等此儀ヲ謀ルヘシト有ケレハ。諸臣皆申シケルハ。誠ニ當家ハ四方敵地ニハサマレテ偏ニ籠鳥渦魚ノ如シ、今米澤ヘ緣ヲ求メ玉ハヽ、隣將其助ケ有コトヲ知テ、輙ク犯スコトアルヘカラス。然ル時ハ兵機ヲ養フニ暇アリ第一ハ當家相續ノ基ト云、且ツ伊達ノ幕下ニアリテ少シモ不足トスルコト有ヘカラス、急キ使節ヲ以テ、輝宗ノ内意ヲ窺ヒ、輝宗同意タルニ於テハ、早々ニ御取結ヒ可然ト、皆一同ニ申ケレハ、清顯不斜喜ヒ、則米澤ヘ使者ヲ遣シテ、申サレケルハ清顯不肖ノ身トイヘトモ、代々武門ニアソフ、然ルニ賢息ノ行跡實ニ稀世ノ雄士タリ某ニ一人ノ女アリ乞願クハ貴息ニ嫁セシメ、永ク交リヲ結ヒ、幕下ニ屬セント欲ス、亦曾津。佐竹ノ諸將、其外ヘ緣ヲ求ンハ、清顯モトヨリ本意ニ非ス、某小進ト雖トモ、先祖ノ筋目彼等

繼ヲ求ム、我後難ヲ謀ツテ未然ニ送セヨ、眼前ノ義ヲ棄ンハ、將士ノ志ヲ失フニ有リトアリケレハ、何レモ其理ニ服シ評義一決シ、其趣キヲ以テ返答アリケレハ、使者悅ンテ三春ヘ歸リ、返事ノ趣キ達シケレハ、清顯大ニ喜悅アリテ、其用意ヲ營ミケル、米澤ヨリモ則兩使ヲ以テ其約ヲ定メラル、斯テ天正八年十一月廿八日、吉日ニ依テ婚姻ノ日ニ極マリケリ、サレハ近國合戰ノ術ト云、殊ニ今年寒氣甚雪深クシテ、道路其便リヲ失フ程ナリ、本宮街道ハ會津。二本松ノ氣遣アレハ、小手川筋ヘカヽリ、坂屋辭モ深雪ナレハ、小坂越ニ米澤ヘ入ルヘキナリケル、米澤ヨリ其受取ノ士卒ハ、湯川マテ出向ヒ、於此所受取渡シアリ、田村ヨリノ其添、向坂內匠水晶ノ珠數ヲ持テ、偏ニ死ノ供ノ如シ、則其ヲ渡ス時、壽テ曰、水晶ノ玉ノヤサナル子ヲ持テ、ト聞レテ、件ノ珠數ヲ添テ渡シケレハ、米澤ヨリ參向シタル遠藤山城守其請取テ、ハマ、ト末繁昌ト祈ル此珠數ヲト侍カレ、テ直ニ祝シ、秋ミテ、米澤ヘ供申シケル、政宗

御夫婦ノ喜ヒ云ハカリナシ。其婚儀ノ規式行粧善盡シ美盡ス、領國中ノ諸士米澤ヘ參向セシメ、鵜馬獻貢門前ニ市ヲナシ、上下萬歲ヲ唱ヘケリ、政宗今年十三歲、清顯ノ息女ハ十二歲、甚幼稚ノコトナレハ、婚儀ニ可及ニアラネトモ、清顯ノ望默止難ク、斯ハ執行ハレケルニ、二タ方トモニ遐齡ノ齡未逢ナレハ、偕老同穴ノ語ラヒ、幾久シクソ思ハレケル、政宗後年逝去ノ後、陽德院ト申セシハ、此內室ノ御事也、

田村清顯攻白岩付清川合戰

仙道白岩ノ城ハ、岩瀨ノ二階堂遠江守盛義ノ領地一レハ、本丸ニハ須田周防守、二ノ丸ニハ要川左衛門ヲ閣シメ、近邊七鄉ノ侍三十八ヲ屬セシメ、籠置ケル、然ルニ田村大膳大夫清顯、三春ト岩瀨ト領分境目ノ取合アリケルカ、止コトヲ得スシテ、清顯兵ヲ發シ白岩ヲ攻ントス、盛義之ヲ聞テ、白岩ハ無勢ナレハ、後詰セスンハ有ヘカラストテ、兵卒ヲ集メ、須賀川ヲ發シ玉木ト云所ニテ兩方ハタト行逢、備ヲ立シ合戰ニ及ヒ

ケルニ二階堂方利ヲ失ヒ大久保ト云所マテ引退ク田村勢追亀一直ニ大久保ノ城ニ火ヲ懸テ燒拂ヒケレハ二階堂此所ニモ支ルコト不能シテ矢田野ト云所ヘ敗走ス田村勢イヨ／＼勝ニ乘テ白岩ノ城ヲ取圍ミキビシク攻打ケレハ城兵防キ兼テ阿邊斐川モ白岩ヲ落去リ今泉ノ城ニ逃籠ル清顯續テ今泉ヲ攻圍ミ折節北風烈シク吹ケレハ。風上ノ在家ヘ火ヲ放チ。一方ヲ明ケテ三方ヨリ短兵急ニ揉立シカハ阿邊斐川又此所ヲモタマリエス長沼サシテ落行ケル清顯則家臣田村月齋ヲ白岩ノ城ニ居置テ三春ヘ皈陣セラレケリ由此會津ヘ告ケレハ。盛隆ハ二階堂盛義ノ實子ナレハ安カラスヽトニ思ハレ則會津ノ軍兵ヲ率シテ天正九年正月白岩ヘ發向シ四方ヨリ取圍盛隆自身ニ下知ヲ傳ヘ此城急ニ攻落スヘシトテ、城戸逆茂木ヲ熊手ニカケテ引倒シ曳々聲ヲ出シテ攻立ル、サレトモ城中ニモ屈強ノ兵多ク籠リ、田村月齋又名ヲ得タル老功ナレハ玉箭ヲ放チ石木ヲ飛シ、爰ヲ破ラレシト防キ戰ノ會津方ニモ濱尾內匠。同內藏助等眞先ニ進メハ。各劣ラシト打續キ。心ヲ合セ氣ヲ固メ死ヲ輕ンシテ責ケレトモ城兵強ク防キ固ク守ツテ陷サリケリ依之向城ヲ構ヘテ遠攻ニスヘシト議スル所ニ三春ヨリ清顯援兵ノ爲自身ニ發向其上米澤ヨリ伊達ノ加勢大軍發向スルノ由聞ヘケレハ兩敵一度ニハ支ヘ難シ先ツ救ノ勢ヲ防テ後此城ヲハ可攻トテシハラク圍ヲ解テ會津ノ勢ハ退キケル田村勢ハ五六百騎ニテ白岩ヲ救ン爲滑川マテ打出ケル此コト若瀨ニ聞ヘケレハ二階堂方纔カ二百餘騎ニテ馳向ヒ敵陣ヲウカカヒ見ルニ、思ヒノ外ニ大勢ナリケレハ此小勢ニテ大軍ト戰ハンニ、千一モ利アランコト難シ然レハ迚是マテ向テ一戰ニモ不及、引退ンハ後代ノ恥辱タルヘシ所詮滑川ヲ前ニアテ阿武隈川ヲ右ニウケテ、敵ヲ待ハ小勢ナルヲ繞リ、河ヲ渉テス、マントキ。一度ニ懸ツテ雌雄ヲ決スヘシトテ、滑川ノ小坂ノ上ニ備ヲ立テ控ヘタリ、捩ノ如ク田

村勢。繕ヲ双ヘテ河ニ打入リ渡リケルヲ。岩瀬ノ軍兵其半途ヲ窺テ一度ニ鬨ヲ作テ攻カヽリケレハ。田村勢備ヲ立ヘキイトマナク、既ニ崩レテ敗軍ト見ヘケル處ニ。イツノ間ニカ廻シケン。田村勢二ツニ分レテ。兒カ墓ノ西ヨリ忍ヒ寄テ。思ヒモ寄ヌ西北ノ方ヨリ。鯨波ヲ揚テ突テカヽレハ、岩瀬ノ軍兵驚キ周章、一戰ノ術ニモ不及。支ヘ兼テ柏木カ外屋マテ追立ラル。此ニテ取テ返シテ戰フト雖トモ。終ニ打負テ下モ宿マテ引退ケハ、田村勢ハ凱歌ヲ唱ヘテ皈陣シタリケル

輝宗仙道出馬附政宗初陣

其後葦名盛隆ハ頃日ノ浮説ヲ聞テ、伊達勢今ヤ寄スルト窺ハシムレトモ。敢テ其儀ナカリケレハ。扨ハ虚説流言ニテアリケルヲ。然ラハ再ヒ兵ヲ指向テ白岩ヲ攻落シ。便宜ニ依テ三春ヲモ攻ヌクヘシトテ。長臣松本圖書ヲ大將トシテ、大勢ヲ指添ヘ、仙道ヘ發向セシメ、盛隆モ追々ニ兵ヲ集メ、後陣ヲ固メテ出陣アルヘキトノ結構ナリ、此儀三春ニ隠レナカリケレハ、清顯兵ヲ率テ白岩ヲ救ハント議セラル處。其頃相馬義胤。伊達輝宗ト境目ノ争ヒ有テ。米澤ヨリ出馬アルヘキノ風聞アレハ、此序伊達ヘ加勢ヲ乞テ。其後詰ヲ堅クシテ後。會津ト戰ンコト可然ト評定シ。則米澤ニ使ヲ馳テ、加勢ノコトヲ達サレケル、輝宗許容有テ、近日直々發向遂ラルヘキノ旨、挨拶アリケレハ、使者喜ンテ早速ニ三春ヘ馳歸リ、清顯ヘ達之、清顯今ハ心安シトテ、三春ノ押ヘニハ田村右衛門ヲ始メ。其外一族ヲ殘シ守ラセ、其身ハ諸勢ヲ卒シテ、白岩ノ後詰ニ發向セラル、斯テ米澤ニハ評議有テ、此度清顯縁邊ノ手始メ加勢ヲ望ム、後詰セスンハアルヘカラス、殊ニ會津盛隆モ、出陣ノ由其聞ヘアレハ、容易ノ事ニ非ス、自身ニ出馬スヘシトアリケレハ、政宗今年十四歳、父輝宗ヘ願テ曰、某漸ク年長ハヤ戰場ノ務怠ルヘキニ非ス、此度ノ出馬コソ幸ナレ、御供ニ具セラレ、軍馬ノ駈引、旌旗ノ進退ヲモ見覺、往々ハ父ノ名代ヲモ蒙リ、軍勞ヲ休メ奉リ度存候間、是非被召具度旨、偏ニ願ヒ申

〳〵ク指添ラル、政宗其夜夜半過ニ兵粮ヲシタヽメ。諸勢ト共ニ用意シテ、ヒソカニ本宮ノ東ヨリ、阿武隈川ヲ渉リ敵ノ後ヘ廻リ。未タ黎明ノホノ暗キニ、兩ヲ揚テ眞シクラニ突テ入ル。會津勢思ヒモウケヌ事ナレハスハヤ田村ノ軍兵。後ヨリ取カケシソト云程コソアレ陣中大ニ周章騷キ、備ヲ立ル隙ナカリケル。政宗自ラ軍卒ヲ指揮シ眞先ニ進マレケレハ、上卒我先ニト押續キ陣中ヘ亂入ス政宗自身太刀打シテ勇氣ヲ震フ。伊達ノ本陣是ヲ見テ。スハヤ政宗ノ裏切アリシソ此鬪ヲハツスヘカラスト。輝宗モ士卒ヲ下知セラレ。諸手一同ニ進ンテ。前後ヨリ指挾ンテ攻戰フ。松本モ名ヲ得タル主將、會津四天王ト呼ル、程ノ者ナレハ、少シモ屈スル色ナク。士卒ヲ勵シ挑戰ス。頗ル手ヲ盡スト雖トモ、不意ニ亂レタル事ナレハ。駈引指揮ニ應セス、進退其節ヲ失ヒシカハ流石ノ松本モ之ヲ制スルニ術ナク亂軍トコソナリニケル。伊達勢イヨ〳〵力ヲ得テ、喚キ叫ンテ揉立ケレハ。會津ノ軍兵戰フニ力盡キテ、人取橋ヲ右ニ南ヲサシテ敗走ス、松本亂軍ノ中ニ蹈止マリ、キタナシ味方ノ諸勢、伊達。葦名ノ兩家ハ、東國ニテモ牛角ニテ。何レ武威ニ於テ甲乙ナシ、今日一戰ニ後ロヲ見セテ。永ク會津ノ名折レトスルヤ、返シ合セテ死ヲ決セヨヤト。高聲ニ叫ヒナカラ、群リ來ル伊達勢ノ中ヘ割テ入、横竪ニ走リ、順逆ニ破テ敵數輩切伏セ其身モ痛手數ケ所ニシテ終ニ敗軍ノ中ニ亡ヒケリ大將討レケレハ、殘黨ナトカ全カルヘキ。皆チリ〳〵ニ敗走ス。伊達勢追討ニ討テ。首數級ヲ得テ軍ヲ納ム會津敗軍ノ士卒、追々ニ馳來テ、盛隆ヘ之ヲ告ル、盛隆後陣トシテ、既ニ會津ヲ發足アリシニ。先陣破レ松本討死遂タル由、軍ノ次第追々ニ告來レハ、諸將評議ニ及ヒケルニ、何レモ一同ニ申ケルハ、此度伊達勢ト當家ト、絶テ久シキ取合ノ手始ニ。松本不意ヲ討レ、殊ニ政宗初陣ノ譽レアリ、然レハ勢猶盛ンニシテ、一先當ルヘキニ非ス、尤戰フトモ味方ニ七分ノ後レアレハ。勝利ユメ〳〵有ヘカラス。其上田

村清顯モ之ニ氣ヲ得テ白石ヲ始メ三春口ノ諸城堅固ナレハ味方此等ニ發向セハ兩勢ニ指挾マレ必定敗軍ノ基タルヘシ此度大將直ニ發向ノ上再ヒ戰ニ利ナキトキハ。此末々會津弓矢ノ後レナレハ。シハシ軍ヲ庫シテ鋭氣ヲ養ヒ重テノ出陣ニ此度ノ後レヲ雪カレンコソ。勝ノ全キト云モノナルヘシト諫メケレハ。實隆此ニ随ヒ諸軍ヲ始メテ若松ヘ皈ラレケル依之政宗モ諸軍ヲ纏ヒ田村ヘモ其旨ヲ告ラレ米澤ヘ皈陣セラレケリ。清顯此度ハ自身手ヲ下ス事モナク會津ノ大軍ヲ退ケ白石ノ城モ障リナケレハ大ニ喜ヒ三春ヘ兵ヲ入レ米澤ヘ使者ヲ馳テ此度ノ軍勞ヲ謝シ。且ツ政宗ノ初陣ヲ賞シ賀セラレケル。サレハ政宗ノ軍立是ヲ始トシテ自身備ノ分配アッテ地形ノ險易ニ順ヒ進退應變節ニ中リ奇正虛實不學シテ握奇ノ妙ニ叶ヒシカハ合戰迫合ノ毎度後レヲ取ルコトナク。自身太刀打ノ手柄モ度々ナリ。輝宗喜悦限リナク我家ヲ再興スヘキ器量ナリ。去ナカラ將タル者ハ兵卒ノ下知指引備ノ手配リ。剛臆賞罰等ヲコソ肝要ニ心ニ懸ルモノナリ自ラ太刀打ノ働キハ然ルヘカラス是ハ皆步卒諸士ノ働キナリ敵ヲ輕ンシ血氣ニハヤリ我儘ノ軍シテ其身禍アル時ハ敗亡是ヨリ大ナルハナシ向後自身ノ働キアルヘカラスト制言ヲ加ヘラル。一族老臣ノ面々モ相共ニ諫メケレハ其後ハ只士卒ノ指引ハカリニテ。自身ノ働キハ止ラレケル。ケ樣ニ軍旅ニ賢ク。強敵猛勢ヲモ打破リ。進退其道ヲ得ラレシコト老將勇士舌ヲフルヒ、口ヲ驚カシ當家再興ノ大將タルヘシト何レモ之ヲ稱シケリ殊ニ生得孝心深ク陣中ニハ取分テ晝夜ノ勞ハリ。父ノ側ヲハナレス守護シ。自ラ宮仕アリケレハ。上下感心セスト云者ナシ同年三月下旬政宗初メテ伊達福島ヘ出足セラル四月朔日梁川八幡ヘ參詣旅館ハ白石若狹守宗玄カ館ナリ同三日米澤ヘ皈城セラル其頃相馬義胤抱ノ内伊具郡小齋ノ住小齋右衛門相馬ヲ恨ムルコト有テ伊達ヘ手寄テ幕下ニ屬セン

コトヲ望ム。輝宗是ヲ諾セラル。此事義胤傳聞テ憤リ止コトナク。軍卒ヲ率ヒテ小齋ヲ攻ントス。依之右衛門米澤ヘ注進シテ、急キ救ヒノ兵ヲモトム。輝宗則兵士三千ヲ率ヒテ。政宗諸共相馬表ヘ出陣セラル。此時二本松ノ城主畠山右京大夫義継、四本松鹽松トモノ城主大内備前定綱モ。伊達ノ麾下ニ屬ス。先ツ伊具郡角田ヘ取寄ラレ。角田口ヨリ働キ。同六月金津表ヨリ。直ニ相馬領新地駒ケ峯ヘ。三十三纒ニテ取カケ。亘理兵庫元安稙宗末子ヲ先陣トシテ合戦始リ。互ニツルイヲ打カケ両軍取結ンテ既ニ槍前ニ至リケルニ。俄ニ雷光霹靂シテ。大雨篠ヲ降シケレハ。道路水湛テ恰モ河流ノ如シ。人馬ノ行歩ヲ失ヒシカハ。馳引スヘキ様ナシ。是ニ依テ両陣急ニ備ヲ堅メ。士卒ヲマトメ引上ケリ。互ニ四五人ノ外死亡ナシ。此日ヨリ雨降續キ。霖天數日ニ及ヘトモ晴ス。川々ノ水溢レテ合戦ナリ難ク見ヘケレハ。輝宗諸軍ヲヒキマトウテ。米澤ヘ皈陣セラレケレハ。義胤モ早速ニ軍兵ヲ納メテ相馬ヘ引入ケル。

伊達秘鑑巻之九終

伊達秘鑑巻之十

奥陽仙府　燕々軒　編集

天正四年矢野目軍伊達勢敗軍之或問

或相馬ノ禿翁ニ問テ曰。相馬ノ人數ハ大形馬上馬三百騎。サテハ二百五六十騎ナリ。上下千二三百。又ハ千之内外ナリ。伊達方ハ伊達。信夫。柴田。刈田四郡ノ人數ヘ。此コロハ伊具。名取。亘理其外宮城。黒川。二本松須賀川。石川是等ノ數郡ヨリモ加勢シ。又旗下ニナルモアリ。其上二日路トモ來ルハ少ナク。大形ハ地戰同然ノ道法ナレハ。遠行ノ軍旅ト違ヒ。面々召ツレ來ル人數モ多カルヘシ。又近郡ノコトナレハ。士卒旅行ノ疲レモナシ。都テ十郡ノ大將ニテ。何ツノ出陣ノトキモ。幾備ト云數ヲ不知。一備ノ數モ二百三百五六百都合シテハ七八百千騎モアルヘシ。上下合四五千ノ上ナルヘシ。先ツコレハ大抵ノ推量ナリ。相馬ハ元來小身小勢ノ上。小齋。金山。新地。駒ケ峯等。其外岩城境

所々加番加勢ノ手合アレハ。差當テ軍スル兵卒ハ多クテ二、三百四五十騎ニ不過。殊ニ輝宗ニハ今年卅八九歳未々若大將ナリ。又家族家臣モ武功武勇分別者歴々名アル輩近郷ニ知レタル人多シ。然ルニ押出シタル働キモナク城責ノ力モ盡サレス。去ミル矢野目表ノ合戰ハ中ニモ無類ノ不覺ナリ。又對陣ノ内モ夜中ニ忍ンテ後詰ノ人ナキ隙ヲ伺ヒ、敵ノ跡ハノミ立廻リ彼方此方滑リマハリ玉フハ、大身タル大將ノ甲斐モナシ。コレハ小身將ノ仕業ナリ。先年ヨリ軍毎ニ相馬ハ利アツテ、伊達勢ノ利ナキコト見聞スル處ナリ、分ケテ貝加山ノ敗北ハ、一向ノ義ニ合サルモ同然ナリ。此勝敗如何ナル故ニヤ有ン。老翁答テ曰、此コトハ相馬ニ於テモ老若賢愚打交リテノ批判トリ／＼ナリ。愚老熟々思按スルニ、晴宗・輝宗ノ兩將ハ、温和ノミニシテ勇健ノ武威ツスク、又智徳淺シ。子息政宗英雄ノ萠アリトイヘトモ、未タ十三四ノ見將。押出シタル威德アルヘキ樣ナシ。故ニ子息ノ覺悟思ヒ儘ノ執柄ナシ。皆老臣功士ノトリ行フ處ニ任セタルモノナリ。伊達ニハ智才勇功ノ長臣多シ。家國ノ爲ヲノミ謀テ、一時一事ノ功利ヲ謀ラス。時ヲ窺ヒ節ヲ見合テ一事ヲ内ニハカリ。小耻ヲ凌キ。一旦ノ耻辱ヲ思ハヌ者共多シ。相馬ハ顯胤ヨリ盛胤。義胤ニ至リ、何レモ勇健ノ生質ノミ盛ンニ。シカモ慈愛ノ志モ深シ。乍去其愛ニ偏アツテ、一統ナラサル心アル故。三代ノ士將時トシテ叛心ノ族出ルナリ。只ニ勇猛ニシテ戰ニ跡ヲ不顧、急ニ勝ヲ望ミ、少シモ臆スルコトヲキラヒ、小耻ヲモ凌クコトヲ得サラシム。去ニ依テ勇戰ニ凝テ勝利忽チナリ。其軍立又危キコト共多ケレトモ、大將士卒共ヲ大方ハ旗下ニナセリ。コレ合戰勝利ノ功ヲ以テ味方ニツケタルニ非ス。武略計策ヲ以テ降參サセタル人々ナリ。只相馬ハカリノキヲ下サス。伊達今大身ニナリテ、人數モ多ケレトモ、輝宗ノ譜代親ミ深キ者ハ伊達・信夫・刈田・柴田ノ四郡ノミナリ。今大勢ナレハ城責掛合ノ働、短兵ノ功ナキニモアルヘカラス。又

相馬ノ勇氣ニ恐ルヽコトモナケレトモ、相馬ハ小身皆譜代ノ士卒ナリ、伊達ハ右四郡ノ外ハ、昨今ノ寄合者共ナレハ、極意ノ場ニ至テハ、半分モ用ニ立タス。然レハ四郡ノ譜代ノミ手ニ合フトキハ、相馬譜代ノ者共身命ヲ輕ンシ。働ク時ハ伊達ノ譜代モ多ク損スヘシ、相馬ハ小地ナリ、小地ヲトラン迚、大切ノ譜代將士ヲ失ンハ、一ツモ本望ニ非ス、愛ヲ以テ降參或ハ加勢ノ備ヲスヽメテ合戰サセ、幸ニシテ勝利アラハ其上ナシ、譬負軍シテモ伊達代々ノ譜代ハ、損失ナキヤウニトノ謀慮、皆老臣功士ノ才覺ヲ以テ、輝宗ヲモ勸メ置テ、斯クハ軍セルモノナリ。小ヲ貪ントテ大ヲ失フハ、大義ヲ忘ス人ノセヌ業ナリ、故ニ伊達方ニテハ手放シタ卒爾ノ働キハセス、只年月日數ヲヘテ、野伏小迫合小合戰ナトシテ軍ヲ蒸シテ悠々ト對陣セハ、相馬方如何競ヒ思フトモ、諸士卒諸民下々迄モツカレ可出、三郡ノ領地自然ト飢寒ノ苦シミ起ラン、又連々ニ野心心替之者モアルヘシ、其時ハ自ラ相馬モ旗下ニナルヘシ、然レハ當戰好マサルモノナリ、勿論岩城ハ輝宗ノ兄ナリ、仙道。石川。白川。須賀川ハ親族ナリ、其外ハ折々加勢ス、奧ハ葛西大崎迄味方ナリ、相馬ナニト思フトモ、三方ヲ敵ニ受、一方ハ海ナレハ、終ニハ堪難カルヘシト、思慮アツテノコトナリ、一事ノ功ヲ立ント思フ程ナラハ。大ハ小ヲ覆フノ理ナレハ。ナトカ矢野目程ノ不覺アルヘケンヤ、又問テ曰、何時ノ戰ニモ或ハ野武士セリ合ニモ伊達方ハ多クウタレ、相馬方ハ少クウタルヽコトハ如何、禿翁答テ曰、大勢ハ多ク討レ、小勢ハ少ク討ルヽコト、昔ヨリ有來ル常ノ法ナリ、併相馬方多ク討レスコトハ子細アリ、イカントナレハ、相馬ハ小身ナレハ、元來家中モ少ナシ、地下ノ者モ只三郡ノ内ナレハ。積リテモ知レタルコトナリ、去ルニヨツテ知行扶持方モ、公役ニ順テ二人三人五人七人十人十餘人其分限ニ應シ、人數ツモリ軍卒ノ定アリテ、召ツレ出ルナリ、其時ハ小知ノ士ハ勿論、大知ノ將トイフ共、モトヨリ人不足ナレハ、可召

抱様モナケ　又可召抱貯ヘモ少ナケレハ　嫡子ハ勿論二男三男甥従弟無僕無扶持ノ浪人ノ兒輩等ヲアツメ或ハ軍ノ好ミ望ム出過者抔マネキアツメテ　供ニ立ツル故　右ノ者トモハ面々功ヲ立ンコトヲオモフ者トモニテ、主人同然ノハタラキ　又ハ主人ヨリモ指出タル高名ヲモセント心カクル者共ナリ　仍テ上下三人ノ士ハ。下二人ハ其子カ甥カ従弟ナリ。五人七人其餘ミナ是ニ等シ　高知ノ人數多ク召ツレ出ルモノモ十人ニ五人七人ハ　皆輕士ノ二男三男與力ノ士ナレハ。マコトノ凡下ハ草履トリ以下外ハナシ。此故ニ合戰セリ合トモニ　主ニ先立テ皆々高名ヲ心ガケルユヘ。一人カ弱卒五人三人ニアタルモノナリ。敵ヲ討テモ首ヲトラスハナシ　コレ高名ヲ心カクル故ナリ又味方討レテモ　其首ヲ敵ニ渡サス　奪返スカ討テ取返スナリ　コレミナ兄弟親類ノ中々ナレハ忠義ノ外ニ親族ノ情アツテ盡ス所アリ　又相馬ノ仕法伊達方ニテ首數十五ト沙汰アレハ　此方ニテモ十五ト題ヲ出スナリ、其上ニ面々首ニテ持來ル處ノ數々ヲ加フルユヘ　何時モ伊達方ヨリハ首數多ク　三ツ二ツハ相馬方強シ　コレ前ニ云通リ　皆手柄ヲ専ニスル故討テ首ヲトラヌ者ナリ　討レテハ敵ニ首ヲ渡サヌヤウニカセクユヘナリ　コレミナ親族ノ中々ナレハ　寄合者ノ働キトハ黒白ノ沙汰ナリ　伊達方ハ前ニモ云如ク此コトヲ察シテ譜代ノ士ヲ損セヌヤウニ　降參加勢ノ寄アツマリ勢ヲ先ニ立テ　相馬ノ手當スル故　鋒サキノ虚實　天地懸隔ノ違ヒアリ　依之矢野目軍ヲ始メ伊達ト相馬ノ勝劣ハカリ知ルヘシ　伊達方モ虚兵ヲ除キ實兵ヲ以テ無二ノ勝負ヲ決スルニ至テハ　元來ノ大身大勢ナレハ　相馬方イカホト強兵ナリトモ毎度ノ勝利アルヘケンヤ。ケ様ノ内々ノ事モ不辨シテ　只ニ相馬ハ剛強軍卒ノミナリト沙汰スルハ　俗ニ云手前贔負ト云モノナリ　都テ武道ノ批判ハ　親子兄弟ナリトモ　聞蓋ナク是非明白ニ沙汰スルヲ　武ノ鑑トハスルコトナリ　又相馬ノ大將ハ　偏愛ノ沙汰アリ

トイヘトモ先ツハ慈悲ノ心アリテ。侍ハ勿論百姓町人ニテモ催促ナクトモ出陣ノ供スル者アッテ、晴ナル手柄スル者アレハ之ヲ褒美アッテ。ヤサシキ詞ヲカケラレ杯ヲ玉ハリ町人百姓ニモ道ニテ詞ヲカケラレ又ハ當座ノ賞ニモ、二三百文カ或ハ布木綿帷子ナトトラセラル。ケ様ノ者身ニハ不レ着セ。則小旗ナトニ用意シテ。カサネテハ益々軍忠ヲ盡サント心カクルナリ コレ覇術ノ一手際ナレトモ 賞ハ慈愛ヨリ出ルコトナレハ 人ノ思ヒ付方ヨリ身ヲ惜マス働ク故、勝ニモ募ルモノナリ、何レニシテモ相馬ハ手強キ敵ト思フヘキナリト云々。

私ニ云 其コロハ相馬ニテハ寺社或ハ山伏等モ知行アレハ代騎ヲ出セリ 分ニ應シ 歩卒ニテ出スモアリ、伊達方ニテ相馬ハ坊主カケテ千騎ノ大將ト唱ヘタルハ此故ナリ 又金山ニ阿彌陀堂トテ 武勇剛勢ノ法師アリ 金山勢加リテ 常々戰場ニ出ル毎ニ首一ツ二ツ不レ取ト云コトナシ 又敵ヲ突崩スコト度々ナリ 或時ノ軍ニ阿彌陀堂ハ左ノ脇腹ヲ突レナカラ 其敵ヲ突タヲシ 則首ト槍トヲ分捕ス 其疵ヨリ腸出ルヲ 其邊リニ古キ苧ノ捨テアリシヲ見付テ 件ノ疵ニ押當手拭ニテ結シメテ 又走リ出テ 敵ヲ突チラシテ 引ノキシカ 肢心モナクシテ立歸リ、コノ疵ヲ療治シテ程ナク癒タリ 惣シテ大事ノ手ヲ負タルコト七度ナリ。然レトモアヤマチ無クシテ 八十餘歳マテ長命シテ 老死セシトナリ 此法師本ハ青葉村ニアル阿彌陀堂ノ別當禪僧ナリ 元ハ武士ノ筋目ナリトソ、甲斐々々シキ武勇アッテ、金山ヨリ中村ヘ呼レ、城下今ノ駒場ニ庵ヲ立テ住セシメラレ 常々相伴トセラレ、精進ノ日ニハ右ノ庵ヘ入來、終日談話アリ、又淋シキ夕暮雨夜ノ徒然抔ニモ、庵ニ入テ武勇物語アッテ、興會アリシトナリ 義胤別シテ自愛アリテ、石神ニテ知行二貫文附セラル 此法師馬ヲモ立テ、相馬出陣ノ毎度茶巾ノ差物ニ雲次ノ太刀ヲ帶シ、鬼灯ノ槍ヲ持具足ヲ

着シ馬ニ乘テ出ケルトソ。何ツノ時モ味方ノ先ニ進ミトモ跡ニ殘タルコトナシトナリ其寺今石神村常圓寺トテアリ此法師武者ノ軍立ヲ後世ノ人々アヤマツテ相馬ノ軍ニハ妙見ノ神靈法師武者ト顯レ大敵ヲモ押シ崩シ勝利毎度ナリシト云傳ヘタルハ此阿彌陀堂カ事ヲアヤマリニ云觸シタルモノナリ

義胤責坂本事

矢野目對陣ノ中天正四年八月十八日中野常陸。堀越能登ト云者二人伊達ヲ背セテ相馬陣城ヘ來ル則チレノ扶助セラル堀越ハ信夫ノ内八丁目ニ住シタル士ナリ後ニ白閑ト云相馬嘲衆ノ内ナリ中野ハ中村ニ指置タリ。併又輝宗ニハ米澤ヘ歸陣アレトモ。矢野目表ノ對陣ノ場ハ崩サレス近郷ノ助兵ニ伊達•信夫ノ兵士ヲ添テ是ヲ守ラシメ其身ハ米澤ヨリ折々潜ニ往來アレハサナカラ一朝一夕ノ對陣トハ見ヘサリキ依之相馬モ同シク大内ノ陣城ニ對陣ノ引ケスシテ年ヲ越タリ然ルニ輝宗新地。駒ケ峯ノ兩城ヲセメラルヘキトノ企アツテ時ノ加番ト號シ人數ヲ隱密ニ五騎十騎宛坂本ノ城ヘ入レラル様ノコト亘理近所ナレハ亘理重宗妻盛胤ノ娘ナレハヒソカニ相馬ヘ告知セラル坂本ノ城代ハ後藤三河ナリ相馬方ニ於テ是ヲキヽ。然ラハ敵ニ遮テ坂本ヲセムヘシトテ。義胤百三十騎ノ兵士ヲ引テ。坂本ヘ押ヨセテル。城内ニハ亘理元宗同子美濃守重宗又時ノ加番越河何某等ヲ始メ惣シテ百八十騎餘楯籠ル義胤前日新地迄出馬翌日早天ニ坂本ヘ押シ掛タリ寄手城チカクナレハ城兵少々出向テアセヲ體ニ見ヘケレハ義胤先勢ノ中ヘ乘入散會釋シテ謀セント思フナリ物眞似サスナ只押シ掛テ一散ニ蹈落セト自身下知シテ乘出ス諸卒我ナトラシト勇ミ進ミ短兵ニ押ツメテ城ノ西妙見曲輪迄押掛テ追チラシ城ヲ忽チフミナトサント。只一息ニ攻入タリ。始メハ城堀水フカクシ

テ越カタシ。岡田豊後新田猪之丞コト水陣ナリシカハ游イテ向ノ土手ヘ上ル　其外西ノ方ニ岡ミチノアル處。少シ廻テ赤澤伊豆中村助右衛門抔　此外城際ヘ仕寄シテ著タリ城中ヨリ見ㇾ之水アレハ游クソ。水ヲ落セトテ水ノ堤ヲ切オトシタルニ　水ハ増川ノ如ク漲リ落ケリ。然ル間堀ノ内ハ深泥ニテ渉ルコト不ㇾ能ハ。先立テ城際ヘ著タル者トモ。進退共ニ死ニキハマリテ見ヘケリ　又始メヨリ黒木ノ者トモハ　東ノ方ヨリ向ノ岸ヘ渡リ付ケルカ　城中ヘモ不ㇾ得ㇾ入ルコトヲ。アトヘハ深泥ニテ不ㇾ叶。是モ岡田赤澤等ト同シク敵ノ向フヲ待ヨリ外ニ仕様ハナカリケル　然所ニ花ヤカニ鎧タル武者一騎歩卒四十ハカリ打カコミ。城内ヨリ出來ル　黒木勢廿四五人相カヽリニ掛テイトミ戰フ。兩方七八人入亂レ力戰シケルカ　件ノ鎧武者討レケレハ。城兵氣臆レシテ早々ニ引入タリ。後ニキケハ此武者ハ栃窪與二郎トテ。重宗最愛ノ小姓ナリ。假令ノ様ナレト　敵味方見物ノ所ナレハ　恥カシキ働キナリ

此土手ノ下ハ刈田ナレハ城兵モ打出。寄手モ掛アハセ。互ニ入亂レテ戰ケル。赤澤伊豆ハ元來上方育ニテ物毎華奢ニ風流ナリシカハ。田舍侍トモハ物和ラカナルヲ侮テ。常ニ笑ヒ戯レケルニ。此度目ヲ驚カス働キシテ首取シカ　伊豆味方ニ向テ云。敵餘多討トツテ首數ヲ各自ニ入ルヘケレトモ。日頃仕馴レタル様ノ足本忘レラレス　足迷フテ思フ程ノ手柄モナラス無念ニコソ候ト　自慢シテ返報ケルニ。兼テ笑ヒシ輩皆閉口シタリシトソ。隨田銀之助大扇地紙ノサシ物ニテ　敵合ニテ目立ハタラキシタリ　城代後藤三河ヲハ佐藤宮内カ與力鈴木源右衛門討取タリ　相馬方ニテ大浦監物討死ス　年二十八歳　武勇ノ者ナリ　此外兩陣討死軍功取々ナリ　其日既ニ夕ヘニ至リ。兩勢相引シテ城ヘ入レハ　義胤モ夫迄ノ軍シテ大内ヘ歸陣セラレケリ

黒木中務堀内四郎叛逆之事

藤田齊庵トテ馬場野ヲ知行セラレタルハ。伊達稙宗

ノ弟義宗ノ二男ニテ、晉胤内室ノ兄ナリ。伊達藤田ノ遺跡ヲ續レシ故、俗名藤田七郎晴近ト號ス。此晴近ノ兄ハ俊宗トテ伊達郡掛田ノ城主ナリ。晴宗掛田ヲ責メラルト聞ヘ、兄ヲ助ンタメ晴近藤田ヨリ掛田ヘ來ル時ニ十八歳ハカリ。則城ヘ入テコモラントスルニ掛田ノ一族家來並ニ同郡川俣ノ城代櫻田玄蕃・中島伊勢心リハリシテ晴宗ノ人數ノ引入、落城ニ及ケレハ城主俊宗モ落行、藤田七郎モ相馬ヘ引キ除タリ。此七郎ハ黒木ノ城主相馬三郎ノ聟ナリ。七郎始メハ草野ノ城ニアリ。其後馬場野ヘ移サル。草野ニハ歸參ノ新舘山城ヲ置レタリ。山城ヨリ後ハ其聟岡田兵庫ヲ差置レタリ。サテ七郎子息嫡男中務・二男四郎、コレハ堀内ノ遺跡ヲ續ク。三番目ハ女子ナリ。此三人ハ相馬三郎ノ娘ノ腹ナリ。四男七郎ハ別腹ナリ。相馬三郎後相三ト號ス。相三孫ノ中務ヲ養子トセラレシ故、相三死去ノ後黒木ノ城代トナレリ。コレヲ黒木中務ト云。二男四郎ハ堀内ノ家跡ヲ相續ス、始メ堀内ハ顯胤ノ

弟治郎大夫後上野守胤正ノ家續ナリ。其子左衛門ニ女子一人ハカリニテ嗣子ナシ。依テ始メ此女ニ齊庵ノ弟掛田兵庫ヲ取合セテ堀内ノ家ヲ繼スルノ處、コノ女甚男撰ミシテ中悪カリシカハ、兵庫堀内ヲ退キ去リ、柏崎ニ居住シテ死去ス。其後仙道中津川ノ二男大膳ヲ呼トリテ結合アリシカトモ、コレモ嫌ハレケルニヤ、大膳無程仙道ヘ歸リケリ。然ルニ或夜男二三人面ヲ包ミ目ハカリ出シ誰トモ知ス堀内ヘ忍入、折節未タ宵ノ程ナレハ、召仕ノ女房共五六人己カ夜ノ業ヲナシテ並居タリ。左衛門ノ女ハ屛風ノ陰ニモノ見アハリケルヲ、件ノ忍ヒ一人不圖走リヨツテ此女ヲ一太刀切テ逃除タリ。侍女、人飛ヒカヽツテ組トメシカ共、女ツサナレハ取逃シタリ、件ノ忍ヒハ誰業ニヤ有ケン、後々迄不知ケリ。女ノ耳下頰ニ疵アリケリトナリ。其ノチ此女ハ二本松安房守義秀ノ嫡子右馬頭國秀ノ妻ニナル。右馬頭二本松義國ニ討レシ折、此女其子ヲ胎内ニ持テ相馬ニ歸リ來リ、則安産シテ

女子ヲ出生ス盛胤彼女ヲ養ヒ置カレシヲ中務へ縁組アルヘシト。内々沙汰アリケルカ。如何思ハレケン。引違ヒテ岡田兵衛大夫へ送ラレ中務ニハ大井ノ騎馬ニ幸田何某カ娘ヲ計ラハレケレトモ中務不興ニテ承引セス又原加雪カ娘ヲトアリシカ、コレヲモ請諾申サス。ケ様ノコトヲモフカク恨ミニ指含メリ。又人ノ進メモアリケルヤ。潜ニ逆意ヲ思立ケリ天正七年ノ冬ノ頃ヨリ、黒木ノ建昌寺ニテ江湖ヲ執行サセントテ兵粮薪鹽噌雜事等ニ至ルマテ貯へ悉ク城ニ籠タリ此時建昌寺住持意林東堂ナリ同八年ノ比ハ逆意ノ事粗洩聞へ此方彼方ニテ噂合ケリ盛胤ノ耳へモ入シカ、疑念ノ心付レケリ、其コロ盛胤ハ中村城下ノ屋舗ト北郷田中ノ城トニ居住セラル大形ハ北郷ニ居住ナリ中務隨臣ニ初鹽雅樂介トテ世間ヒロキ武勇聞ヘアル者アリカレヲシテ伊達へ内通ノ使ヲ勸ムルト盛胤唱ヲキカレ雅樂介ヲ召捕糺明セントノ浮說誰云トモナク流言ス中務コレヲ聞テ。雅樂介ヲ召捕レテハ大事アラハレントヤ思ヒケン雅樂介ヲ討ント思ヘトモ。頗ル武勇ノ者ナレハ。討損センコトヲ思ヒ古小高新右衛門トテ、椎木馬場ニ居タル相馬ノ輕士コレモ武勇アル者ニテ常々中務ニ親シケレハ渠ヲ呼ヒテ竊ニ賴ムニ子細ナク領掌シケリ、カクテ新右衛門雅樂介所ニ行テ我鹽荷ヲ持タリ、コレヲ伊達領へ遣シ賣ント思ナリ其方ハ伊達ニ知人多ケレハ、宜シク計ラヒ預リタシ先ツ我所へ來リテ鹽荷ヲ見テ指南預ルヘシト云心得タリトテ則日ヲ定メテ古小高カ宅ニ來リ、窓ノ前ニ置タル賣鹽コレカトテ持上テ見ル處ヲ用意シテ待ケレハ、窓ノ内ヨリ二ツ玉ニテ打タリ雅樂介ヒルマス吾ヲ欺ムクコト勿體ナシトテ刀ヲ拔テ内へ押入ル、新右衛一方ノ口ヨリ外へ走リ出ルヲ跡ヲ慕ヒ追掛五六間ノ家ノホトリヲ二三遍迄追マハリシカ終ニ倒レフシテ死ケリ。則中務ニ此コトヲ告ル。又雅樂介カ一子卯之松トテアリシヲ石神ノ山田源兵衛方へ使ニ遣シタルヲ、

コレヲモ可討トテ別人ニ申付ケヽルハ卯之松石神ヨリ歸ヘキ比大軍長根ニ待受ケ可討ナリトヽ心得タリトテ行向ヒケルニ案ノ如ク長根ニテ逢タリ此子十四五歳ナルカ容顔美麗。人ニ勝タレハ。一目見ルヨリ流石可討心モナク卯之松ニ向テ云ケレハ只今父雅樂介討レタリ其方ハ我ニ討テトノ命ヲ受テコヽニ待向フト雖トモ更ニ可討心ナシ吾モ俱ニ連レテ落行ン早々落ヨト云卯之松カ云吾ヲ欺ストモ可討父討レタル上ハ命ナシムヘカラストヽ落行ヘキ氣色ナシ全ク欺リ偽ルニアラス疾々落ヨト云テ林ノ内ヲ初野ヘ出。其母ヲモ連立テ。伊達大石ト云所ヘ落行ケリ偖又中務ノ母ハ。青庵ト不和ニテ黒木ニ住居タリ弟ノ四郎ハ小高ノ城内ニアリケルヲ相圖ノ日限ヲ定メオキケリ又伊達ハ與シケルトキ伊達方ノ評議ニ中務兄弟若年ナリ、加勢スルトモ敵陣ヘ人質シテ如何ナレハ老父ノ青庵ヲ人質ニトツテ加勢スヘシトナリ此時中務ハ十九四郎ハ十七歳ナリ又此コロハ逆意モ大方ニ唱ヘアレハ。其證據ヲ見出サンーカ爲佐藤丹波ヲ黒木ノ忍ヒ目付ニツケ置カル依之丹波夜毎ニ黒木中村ノ間ニ於イテ其實否ヲ窺ヒケリ然ルニ同八年八月十七日ノ夜添田美濃トテ中務ノ舊被官ノ者ナルヲ使トシテ父青庵ヘ申ケレハ此兩日諫儀違例ナリシカ邪氣以ノ外ナレハ對面アリ度モ由ナレハ早々黒木ヘ御出玉ハルヘシトヽ歎リテ申シ送リケルヲ青庵聞モ敢ヘス面色變リ美濃ニ向テ其方カ黨ニ我之ナ謀ノタリ已等自分ニ由ナキ逆意ヲスヽメ身ノ滅亡ヲ招クコト口オシキ次第ニソ早ク歸テ中務ニ切腹ノ用意シテ待テト云ヘ。小高ヘ參向シテ美濃ハ披露スルソト刀ヲ捻リマハセハ。美濃ニ言ノ挨拶ナク早々ニ歸リケリ其夜黒木ノ町中ヘ富々ニ聞ケルハ夜半過ヨリ家々ニ火ヲトモシ得道具ヲ身ニソヘテ居コトナトカクテ美濃立ヘリテ中務ニシカノヽト子細ヲ告ク青庵ヲ先立申サネハ伊達ノ調義成就シ難シトテ。中務添田肥前カ二男彌八

郎ニ槍ヲ持セ。其外齋藤左助・同彌介トテ若黨二人、又一人タレトモ不知石神源兵衛トノ説ナリ、其故ハ源兵衛ハ中務ニ男道ノ知音アリト。以上上下五人ニテ。其夜馬場野ヘ來リ齊庵ヘ子細ヲ明シ。共ニ籠城アレト云、齊庵大ニイカリ、當家ヘ對シ少分ノ憤リヲ含クミ、不義ヲ企ルコト以ノ外ナリ。義胤ヘ訴ヘテ腹キラセン。左樣ノ不義ニ與スル齊庵ナラス、子テナクハ討チステンスレトモ。命ハ助ルナリトテ。外聞ヲモイトハス。高聲ニ詈リ怒リ、馬ニ鞍セヨ。小高ヘ行ソトヒシメカレテ。中務詮方ナク黑木ヘ急キ歸リケリ。其夜小雨降テ闇夜ナルニ　程田ノ邊ニテ馬ヲ盜レタリトテ爰彼所松明多ク見ヘテサワキ渡ル。中務思フハ偖ハ我逆意露顯シタリ。如何ニモシテ紛レ忍テ歸ルヘシトテ、五人ノ内齋藤左介同彌介、此二人ハ篠川ニカヽリ歸レトナリ。中務ト彌八郎今一人ハ中野ヲ粟津ヘカヽリ。小野ヘ出テ歸ルニ。闇夜ナレハ足モトモ見ヘ分カス、殊ニ道モナキ所。其方角ヲ心アテニユクトコロニ小堀ノアルニ。彌八郎思ハスガハト蹈込ンタリ。盛胤ヨリ今宵中務馬場野ヘ行、齊庵ヲ引連除クヘシ。道ニ待テ可討ト、密カニ觸ラレケレハ。野武士ヲ引連レ所々ノ道筋ニ伏シ居タリ、此所ニハ長坂丹後堀ノ此方ニ伏シ居タルニ。人ノ堀ヘ入タル音ヲ聞テ、忍寄テ彌八郎カ這上ル處ヲ。槍ヲ以テ突留タリ。此音ヲ聞テ野伏二十人ハカリ起立タリ。兎角スル内中務ト今一人ハ、傍ヲ忍テ通リ過。無恙黑木ノ城ヘ入タリ、左介。彌助ハ篠川ヲ懸ツテ行ニ、爰彼所ノ藪陰ニ人ノ伏シタル容子アレハ、道ナキ方ヲタトリ。漸々ニ明方近ク來リシニ、早城ヲ巻ツメケレハ、追手ニテ見付ラレ。左介ハ爰ニテ討ル。彌介コレヲ見テ搦手ヨリ入ントト廻リ行クニ。コレモ西ノ門ニテ討レケリ。又伊達ヘノ人質ハ弟四郎ヲ渡セシトソ。此事盛胤ヨリ小高ヘモ注進アリ　田中ヨリ夜中ニ出馬ナリ、齊庵道ニテ盛胤ヘ參リ合セ、脇指ヲハ郎等ニ持セ。馬前近クヨレハ盛胤モ下馬ナリ、齊庵子細有ノ儘ニ披露ス。盛胤ノ曰。其

方ハ直ニ新町寺ヘ入寺アルヘシ、以後義胤ヘハ可申合草々通リ候ヘトアリケレハ、香庵ハ新祥寺ヘ入寺ナリ、翌十八日未明ニ、義胤中村ヘ發向。兩將黒木ノ城ハ押ノセノル、義胤下知ニ西北ノ表ヲ、伊達ノ方ノ備ハリ幾重ニモ可卷。定テ伊達勢ヲ引入、泉大膳ニ下知セヨトテ、初野口諏訪口ヲ卷セタリ。偖前方ニ義胤龍縫殿介ニ命シ伊達方ヨリ加勢ノ程見分スヘシトテ　縫殿介急ニ乘出シ初野口ヘ馳行ニ二騎乘來ル者アリ、何者ソト問ニ、味方ナリト答フ　味方ニテモ敵ニテモ逃スマシトテ、弓矢ツカヒテ放ツニ、一騎射ヲトス、一騎ハ引返シテ行處ヲ追矢ニ二騎共ニ射ヲトシ首二ツトツテ立歸リ、義胤ヘ指出シケル　伊達方大谷泉原ニ散在シタル士卒上下八百アマリ來ル處。城ハ早惣卷ナレハ不寄付。然ルニ西口ヨリ物見ニ出シタル士、藪陰ニ待居タルニ敵ノ來ルヲ見テ、十間ハカリ乘出シ敵此方ヲ見付ント思フ比ニ馬ヲ乘返藪陰ニテ下馬シ。差物ヲシホリ隱レタリ　伊達方ヨリコレヲ見付、藪陰ニサシモノヲシホリ隱レタルハ。何レニ謀アルヘシ。卒爾ニ城ヲカケヨリテハ、跡ヲトリ切レハ大事タルソト思惟ヲメクラシ、早々ニ引上タリ。義胤西口ヘ乘マハシ、塀際ヲ巡見アルヲ、内ヨリ鐵砲ヲ放ツ　其間二十間ニ不過、義胤ノ傍ニアタル鈴木處後ハ中務ニ與シテ西館ヲ持リタマケルカ、義胤ヘ對シテ別ニ恨ミモナキ者ナレハ、内通シテ相馬ノ人數ヲ引入レタリ。依之卽時ニ落城スヘシト見ヘケル處ニ、建昌寺意休東堂馬ニ乘、衣ヲ玉タスキニ打立、寄手ト城ノ間ヲ乘マハリ、諸卒ヲ靜メテ偖兩將ヘ歎訴セラレ、中務不義申サレヘキヤウナケレト。父齊庵クミセス處神妙ナリ。御外戚ノコトナレハ、一命タスケ玉ハルヘシト。樣々ニ詞ヲ盡シ願ハレケレハ、義胤承引ナレトモ。盛胤胸臆ハレ難カリシヲ、強テ訴訟ニ及ヒケレハ。然ル上ハ中務一人兵具ヲモ指置、城ヲ可出トナリ。依之十八日巳ノ下刻中務虎ノ尾ヲフミ、鰐ノ口ヲ遁レテ城ヲ出タリ、母義妹モ中務ニ付テ一同ニ出行ケル、義胤憐

惣アリテ、妹ハ止メ置レタリ。山田源兵衛ハ中務ニ男道ノ因アレハ。打ツレテ落ケルカ。相馬ヘ對シテウラミナケレハ、伊達扶持ハ受ヘカラストテ、仙道ヘ赴キケル。偖中務カ妹ニ泉田播摩ヲ娶セラレ。堀内ノ遺跡ヲ立ラレ黑木表ハ落居シケリ。

小深田合戰之事

宇田郡ノ中小深田トハ。駒ケ峯ノ西ノ山續キヲ云ナリ。コマカ峯元來ハ城ナシ。新地ノ續キ駒ケ峯ノ下藤崎邑ノ上原加雪ヲ屋舗構ニ差置ル、然レトモ城ナクテハ新地ノ續キ成難シトテ。盛胤駒ケ嶺ノ山ヲ切平ラケ新城ヲトリ立ラル、本ヨリ坂本ノ高良橋迄宇田郡ノ中ニテ相馬領ナリ。橋ヨリ何方ハ亘理郡ナリ、依之高良橋ノホトリ。昔ハ建昌寺領ナリ。此トキ駒ケミネノ城代ハ、原加雪嫡男攝津守範置ル。藤崎ヲ知行シタル故、藤崎攝津守ト云ハレタリ。然ルニ天正九年四月、輝宗嫡男政宗十四歳兩將共。米澤ヲ出陣、伊具郡ノ内金津小齋ノ内合子内矢野目ニ出張、陣城ヲカマヘラル、依之相馬ノ兩將モ伊具ノ内西海子（サイカチ）澤大內ノ此山ニ本陣ヲソナヘ、兩方對陣ナリ。朝暮且夕野伏迫合、十騎十五騎打ハナレ。或ハ一手切ノ夜討戰止時ナク、双方五人十人討死手負絶ヘサリケリ。相馬ニテモ氣ソカハレケルハ岩城ハ輝宗ノ兄ナリ。仙道ハ石川須賀川モ伊達ヘ通シ。川股口モ櫻田玄蕃伊達附屬ナリ、尤此口ハ輝宗ノ對陣ナレハ。其向々ノ城々ヘ加勢加番ノ手分アツテ。元來相馬ハ小勢ナリ。以前ハ伊達。信夫・刈田。柴田ヘ、米澤長井ノ人數ハカリナリシカ、今ニ至テハ亘理。名取。宮城。黑川。大崎、此方ハ二本松。石川。須賀川迄、漸ク伊達ノ下知ニ附屬セシカハ。コノトキノ對陣伊達勢雲霞ノ如クナリ。故ニ相馬方ハ境內ヲ守ルノミナレハ。動モスレハ透間ヲネラヒ、伊達勢相馬領ヲ掠ントスルユヘ、如此夜討迫合日々夜々ナリ。依之相馬方夜ハ帶ヲトクコト不能、サナカラ野宿ノ旅舍ニ等シク。士卒上下心安ンスルヒマナシ。天正四年ヨリ同九年ニ至ル間　相馬モ日々一人二人五

八十人討死セシ日ナケレハ、元來小身士卒下々迄滅少シ其子孫者十五歲ヨリ出陣ス。時ニ天正九年四月十日敵ノ間ヲ伺ヒ、新地・駒ケ峯ヲ責トラント、夜中ニ忍ンテ伊達ノ兩將矢野目ヨリ打コヘ、新地ト坂本ノ間ノ原中ニ節廬ノ如ク備ヲ立ラル。兩將夜中ニ趣リ玉フコト先立テ注進アリケレハ、相馬ノ兩將モ其夜明方ニ大内ヨリ出陣大坪ニ至リ、菅庄ノ古館ニ備ヲ立ラル。南方ノ先手互ニ守リ合テ、同月卅日迄對陣ナリシカ、五月朔日伊達ノ先鋒小深田ニヨセ來ル。合戰場ハ小深田ノ谷地ニテ平地ニ續キ、高サ一二間ノ間ノ岸上ハ、宗全原トテ新地ノ上下迄ソヽキシ原ナリ、道一スチ在テホトリハ片岸ニテ、駒ケ峯ノ城ノ西ノ山下南ノ原迄續ク。コレヲハ菅屋原ト云。伊達勢ハ此高ミヨリ掛リ、相馬勢ハ下ノ谷地原ヨリカヽリ、兩陣相カヽリニ競合セテ、鬨ヲツクリ矢ナケビシ。追ツ返シツ、喚キ叫ンテ挑戰ス、サレトモ伊達勢ノ下リ降ル道廣カラス、相馬勢道上テモ先ヘススムヘキヤウナシ。輝宗政宗ニハ、合戰場ヨリハ一里モ跡ニ備ヘテウコキ玉ハス。故ニ盛胤義胤ニモ本陣六七十騎ニテ備ヲ立テ控ヘラル。南方ノ先陣午角ノ戰ナリシカ、如何シケン相馬勢高ミヨリ追ナヒサレ。備亂レテ軍弱ハヽニ見ヘケレハ、本陣ヨリ貝ヲ吹立鬨ヲ作リ後ロヨリスヽミケレハ先手コレニ力ヲ得、足ナミヲ立直シテ。伊達勢ヲ高ミノ方ヘ追上タリ。此ニテ兩陣火出ルホトノ戰ナリ。双方首數級ヲ討トル。時ニ相馬ノ本陣ヨリ揚貝ヲ立テ、凱鬨ヲ上ケレハ、伊達勢モ鬨ヲアハセ戰ヲ止テ軍卒ヲ打上タリ。此トキ相馬方ニテ目立タルハタラキセシハ、駒ケ峯浪人藤谷藤左衛門・成田五兵衛・百槻切兵衛。青田六郎ナトナリ。又武勇秀タル者トミニハ、木幡帶刀・横田金藏。原源六郎・手來玄蕃等惜哉ミナ討死シタリ。翌二日伊達ノ兩將小深田ヲ引揚ヒ、新地ノ城ヘ鐵炮ヲ打カケテ合子内矢野目ヘ歸ラル。於是ニ對陣ナリ。此合戰ハ畢竟小嵩ノ城代佐藤宮内叛逆ノ相圖ニヨリ。相馬ノ兩將ヲ引出

シ、其跡ニテ宮内（號ニ小齋右衛門共ニ）ニ心易ク加番ノ將士ヲ打チトラセ、小齋ヲ手裡ニ入ンタメノ謀慮トハ後ニ至テ沙汰シケリ。

小齋城代小齋右衛門心替ノ事

其コロ小佐井ノ城代佐藤伊勢カ嫡男同右衛門（後號ニ宮内ト又稱ニ小齋右衛門共ニ）ナリ。父伊勢ハ本岩城ノ一族舟尾ノ扶持人ナリシカ軍法武勇ノ者ナリトテ、其時岩城ノ物頭ニ重隆ヘ召出サレ、白河トノ合戰ニ度々勝利ヲ得ルコト、畢竟伊勢カ武略ナレトモ。サセル恩賞ニモ不預。仍テ憤リ思ヒケルカ。相馬顯胤仁愛ト云。武將ト云 近郡ニ隱レナキ大將ナレハトテ。重隆ニ背キ相馬ヘ來リ。顯胤ヘ勤仕セリ。顯胤所々ノ出陣ニ。伊勢カ異見備立人數ノ扱ヒ時變ノ奇正、皆其兵法ニカナヒ、合戰ノ毎度勝利アリケレハ顯胤無二ノ者ト思ハレケレハ。次第々々ニ立身シテ。於相馬二三ケ村ヲ知行シ、家老ノ列ニクハハリ。磯邊ノ城ニ在住セリ、然ルニ盛胤ノ時ニ至リ伊勢ヲシテ田中ノ城代ニ移サル處、北郷桑折カ一類違亂ヲ構ヘ。城ヘ入リ得ス。其トキ伊勢カ本知ヲハ割崩シテ餘人ニ宛ラレ。其替地ヲモアタヘラレス。只磯邊一村ハカリヲ知行シケリ。伊勢内々ハ不興ニ存セシカ共、色ニ不出ケリ。其頃磯邊ノ城ハ。海手ノ方崩レ損スルトテ。今立谷ノ舘野山ナリシヲ平ラケテ。城形ニナシテ居住セリ 然ルニ平太隆胤中村ノ城普請アリケルニ、盛胤ニモ自身出馬下知セラル。諸士モ各自分ノ人足ヲ出シテ。吾オトラジト普請手傳ノ出精ス、然ルニ小野備前人足ト、伊勢カ人足ト。持籠ヲ奪合テ兩方打擲ニ及フ、備前カ嫡子源太ト、伊勢カ三男彌兵衛、コレヲ見テ互ニ刀ノ柄ニ手ヲカケステニ果サントスル處ヲ。諸士ノアツマリナレハ。則推シ分テコレヲ靜メタリ 盛胤コレヲ見届テラレ 我眼前ニテ普請ヲサワカシ、如此ノフル舞案外不義ノ者共ナリト。腹立以ノ外ニシテ。双方地行改易セラル 其トキハ立谷舘ノ西今海道ノ西脇ニ町屋アリシニ 磯邊分ト立谷邊ト村ノ境ヲ分チケルニ 北郷郡ノ者トモ

奉行ニテ竿打渡シケルニ舘ノ内伊勢カ居屋ノ乾ノ方柱立タル所立谷分ノ地ナリ。故ニ伊勢ニ乾ノ角ニ柱ヲ拔クヘキ由云斷リケレハ。伊勢聞ヤ否思ヒケルハサレハ咎胤ノ思慮ニアルヘカラス。桑折等カ日來ノ遺恨アレハ彼等カ所爲ト推量シ、緣ノ板ヲ打切テ偖コソ顯胤ヨリ以來度々ノ專忠ヲミナ水ノ泡ニナシタリトテ、大聲ヲ立テ強尖セリ。其上又舘下ノ町ヲ片町立谷分ニ附ケタリ。其後伊勢終焉ニ及ンテ、嫡子宮内ヲ病床ニ近付テ云ソツマケルハ、我死タルアトニハ經僧ノ供養モセンナシ、父子ノ恩愛ヲ不忘ハ、イカニモシテ盛胤義胤ノ胸ニ一箭射テ手向ニセヨ。千僧萬經ノ善根ヨリモ、マサリタル功德ナルヘシ。カマヘテ此コト忘失スルコト勿レ。モシコノ遺言ニソムカハ、七生カ間惡鬼トナツテ、汝カ子孫マテ祟ヲナスヘキソト、氣色變シテ物冷マシキ形體ニテ。終ニ無常ノ煙トナル。深閨ノ密談ナリト雖トモ、童女コレヲ聞ツタヘテ誰云トニカ云モラシケレハ、諸士町家ノ下々マテ此事ヒソカニ私語キ合ケリ。斯テ宮内ハ父ノ遺言ト云、又ハ桑折ノ一類ニ意恨アレハ、密々ニ逆意ヲ思ヒ立ニケリ。去ヌル比藤橋紀伊守ヲ金山ヘ移サル、トキ。宮内ヲ小齋ニ置レタリ。此時分ハ領内ノ城々ハ加番ヲソヘラル。小齋ノ先番頭ハ室原左衛門ナリ。是替ラン迚金澤美濃北郷五十餘ノ内三十餘手前ノ上下三十餘名具シ、天正九年四月十一日ニ小齋ヘ來リ、美濃則城ニ至テ宮内ニ對面ス。宮内カ曰、コレ迄老人ノ來ラル、事、返スヽヽモ辛勞察シ入所ナリ。子息孫三郎ヲ番頭ニサシ越サルヘキヲ、老人ノ勞ハリナリト云。美濃カ云、今伊達・相馬對陣ノ内別シテ、小齋ハ伊達備ノ近城ナレハ、自分ハ如何ト存シ、某直々參著セリト。後ニ思ヘハ此夜宮内カ逆意ヲ發スル吉日故ニ兼テ伊達方ヘ相圖ヲ定メシカハ、輝宗御父子先立テ小深田ヘ出張ナリ、相馬ノ兩將モ大坪ノ古舘ニ對陣セラル。斯テ小齋ノ加番ノ上各所々ニ休足ス。或ハ矢倉ニ居ルモアリ。又未タ城ニ不入シテ過

半城下ニ居タリ。金澤美濃ハ番頭ナレハ。城ノ傍ラニ小屋在テ此所ニ休足シタリ。宮内ハ其夜城下ノ町人ヲヨビアツメテ。内郷ヨリ珍肴到來シタル由ニテ。皆々酒ヲ呑シメ。數獻ノ上ニテ申シケルハ、何レモ兼テ聞オヨビツラン。盛胤・義胤ヘウラミ申ス子細有之ニ依テ逆意ヲ企。此度伊達ヘクミシタリ。今夜吉日ナレハ、加番ノ頭美濃ヲ始メ討テスツル所ナリ。城付ノ諸士ハミナ無二心同意タリ。其方トモ、皆同意シテ力ヲソヘヨトナリ。町家ノ者トモ何レモ尤ト同シケリ。又加番ノ士卒ヘモ何ナキ風情ニテ。辛勞ヲ晴ラサレヨトテ。各酒ヲス丶メケリ。既ニ時刻ノ程ヲキハメ。矢倉ノ下ニハ槍ヲ置。小屋々々ノ口ニモ如此シテ。時分ハヨシト押掛タリ。矢倉ヨリ下ル者ヲハ。件ノ槍ニテツキフセ切フセタリ、桑折左馬同小市郎モ。内々遺恨アレハ、矢倉ニ置テ下ル所ヲ討トメタリ。門馬七兵衛モ左馬ト共ニ討レタリ、渡邊縫殿モ討ル。宮内ハ長刀ヲ脇挾ミ。金澤美濃カ小屋ヘ向フ。美濃ハ城外ニ在テ此時ハヤ寢タリシカ。城内何トヤランサワカシトテ起シケレハ、美濃一人城ノ體ヲ伺ント出ケルニ。城ノ坂中ニテ宮内ニハタト逢タリ。則刀ヲ拔キ切付ク。宮内長刀ニテ美濃ニ向フ。美濃スカサス。宮内ニ二ケ所切付シカトモ鎖リ帷子ヲ著シ。其上ニ具足ヲ著タレハ。身ニ不通、美濃ハ素肌ナレハ、鈴木外記ト云者ニ討レタリ、美濃カ者トモ跡ヨリ追々出ケレトモ。早美濃ハ討レケレハ不叶、二三人宮内ニ向ヒケレトモ、長刀ニテ打拂フ。城兵追々續キケレハ、不叶シテミナ落行ケリ。又北郷士ノ内豊田藤兵衛小屋ヨリトビ出。城内ニテ切テ廻リ。城外ヘ出ル處ヲ宮内カ與力ニ鈴木源右衛門トテ。相撲ヲ得タル者ナリシカ、刀ヲステ飛入リ。組伏テ首ヲトル、此時北郷ノ士十六人。桑折カ一類討レタリ。城外ニ寄宿シタル者トモヲハ、心ヲ付テ夫トハナシニ諭シケレハ。城内ノ騷動ヲ聞トヒトシク皆々夜ニマキレテ何レモ落チ行ケリ、コレヨリシテ小齋ハ再ヒ伊達ノ手ヘトリ歸サル。其比相馬ノ老

士共。批判シケルハ。盛胤・義胤共ニ先ヘ走ル分別ハアレトモアトヲ顧ル思慮ナシ。一旦憤リニ好士ノ心ヲクジキ志ヲ無ニスルコト多シ、此度宮内カ心カハリモ。木桑折カ當然ノコトニマヨハサレ、忠勤ノ伊勢ヲ穢ノ如ク捨ラレシ故、如是小齋ヲ伊達ノ手ニ入レシハ相馬ノ運ノハビコラヌ最初ナリ。晴宗輝宗大將ノ機ニアラストイヘトモ、政宗若年ナレトモ、既ニ秀運ノ萠アリ。終ニハ相馬ノ地ヲ襲ハレンコト疑アルヘカラス。淺間シキ兩將ノ分別ナリト歎息セシトカヤ、コレヨリ伊達ノ兩將小齋ノ城ニ入テ在留セラル。遠路長根ニハ亘理元庵ヲ始メ、伊達勢陣所ヲカマヘ、金山ト對陣セリ。

伊達相馬金山丸森矢野目表對陣之事

天正九年五月一日伊達ノ兩將從小深田谷子內矢野目ニ歸リ、輝宗・政宗兩將トモニ小齋ノ城ニ入テ滯留ナリ、亘理元庵ヲ始メ加勢ノ暨々。冥加ニソナヘヲ固ム。コレ先手ナル故ナリ。前々此邊迄伊達勢ヨセ來ルコトナカリシニ、此度小齋ヲトラレタル故ナリト云アヘリ。小佐井ヲ伊達ヘトラレシハ。相馬兩將ノ思慮不足ナル故ナリト其コロ諸士ノ評判ナリ。盛胤ハロハ正直一偏ニシテ、何者ニテモ人ノ申スコトヲマコト、思ヒ。心ニコメテ不忘、タトヘハ少クアヤマチアル者モ、人ノ言ヲ信シ。小過ヲモ大科ニ行ハレ、或ハ前ニ罪アッテ其コトハ時スギアモ、今ノ小過ニ前ノ罪ヲソヘテ罰ヲ重ク沙汰セラルユヘ、當忠ノ好士ヲ捨ラル、コト多シ、コレ人ノ中言ヲ一偏ニ信シ。眞僞明察ノ心ニ乏シキ故ナリ、前編佐藤伊勢モサセル罪ナカリシカトモ。只靑田信濃同左衛門內々ニ惡心ヲカマヘテ申ス處ヲ、忠誠ノ心ヨリ出ルト思ハレ。信州父子カ眞僞ヲ不察、伊勢ニ替地モ與ヘラレス剩ヘ伊勢ヲハ不快ノモノトシ、コレヲウトマレ。信州父子カ內惡ヲ潛ニ告テ諫ムル者アレハ、結局彼レヲ惡ミ。越度ヲ設ケテ罪ニ落サル。或ハ桑折カ輩紺野カ一類ノ異議其外木幡黑木カ徒、野心誅伏ノ者數々ナリ。今度佐

藤宮内モ父伊勢カ遺誡ヒロク唱ヘアリケレハ。女童ノ沙汰ナレトモ如此トナヘヒロケレハ、宮内ハ内郷ヘ呼返シ。境目ノ城代ヲ替ラレ可然ト、密訴シケル者アリシカトモ、本伊勢ハ浪人取立ノ者ニテ。宮内モ浪人ノ子ナリ、今城代トマテニ立身セシヲ、羨ミ妬ミテカクハ密訴スルソト疑ハレ。上ヘハ承引ノ體ナレトモ心底ニハ結句其者ヲウタカフ心アッテ。兎ヤ角ト一慮ノ分別アル内ニ。早宮内逆心シタリ、大將タラン人ハ。偏心ノナツミアッテ。是非ノ明察ニ闇クシテハ、アヤマチ多カルヘシト。諸士評シ合ケルナリ。同月四日伊達勢金山丸森ニ押シヨセ。鐵砲ヲ打カケタリ、金山ハ佐藤將監。丸森ハ泉田播摩城代ナリ、兩城トモニナリヲシツメテ鐵砲ヲモ不打、只城ヘ入レサル用心ハカリナリ。伊達勢如何思ヒケン。セメスシテ則矢野目ヘ引揚タリ。同七月十三日相馬ノ兩將、伊達ノ陣場矢野目表ヘ押ヨセラル。先大内ヨリ金山ヘ出張アツテ 莧加山ニ亘理元庵其外ノ備押ヘノ爲、手ヲ分ケテ備ヘ置、輝宗ノ本陣ヲ志シ、先手ノ次ハ義胤ノ旗本。其跡ハ盛胤一二備合セ。百八十騎餘只此備ハカリニテ押ヨスル、伊達方モ陣所惣柵ノ外ヘ。五六町モ出テ待掛タリ、相馬先手ノ備五十騎ハカリ。伊達方モ先備ヲス丶メ、兩方平場ノ合戰ナリ。義胤ノ旗モ伊達ノ先手ニ掛リテ、追ツ返シツ挑ミ戰フ。相馬ノ先手追立ラレ。足並亂レケレハ、伊達方二三ノ備。鬨ヲ作テ進ミ戰フ、義胤ノ備モ崩レカ丶リ。先手トトモニ亂走ル。義胤馬ヲ乘廻サル。逃ル士卒ニ聲ヲカケ、見知リタルハ名ヲヨヒカケ々々、見苦シキソ返シテ勝負セヨト 大音ニ詈リ、又小人ヲ走ラセ、迯ル者ノ馬ヲ引返サセ。敵ノ方ヘ引向控キ立義胤例ノ鐵團扇ヲ以テ敲キ立、味方ヲ敵ノ内ヘ追入テ下知セラレケレハ。多分引返シテ力戰ス。義胤眞先ニ進ミ、鬨ヲ作リ螺ヲ吹キ立テ。オメキ叫ヒ、眞シクラニ掛入リタリ。依之伊達勢又モミ立ラレ。追來ル敵ヲ防キナカラ 段々ニ引上々々。柵中ヘ引取タリ、相馬方勝鬨ヲ揚テ。惣勢ヲ引上タリ。此合

戰ハ義胤ノ旗本ト先手ト二備ナリ。盛胤ハ後陣ニソナヘ、味方敗ヲ追行ケハ夫ニ從テスヽミ、又敵ニ追返サレハ共ニ退キ、始終見物シテ過サレケリ、輝宗・政宗ニハ柵ノ内ニ備テ、表ヘハ出馬セラレス。相馬方高田小八郎・岡田藤八郎・岡田カ家來大浦左近等、其外四五十人討死セリ。伊達方ニモ上下百ハカリノ死亡ナリ、兩陣ノ討死姓名慥ナラサレハ、此軍記ニ洩レタリトソ。

小深田再戰并伊具舘山合戰之事

兩陣猶々對陣、合戰ノ合々ニハ野伏迫合旦夕ナリ、八月七日伊達ノ兩將潜ニ小深田ヘマハリ。新地ト駒ケ峯ノ間ニ本陣ヲ備ラル 小深田ト本陣ノ間ハ二十町餘ナリ。相馬ノ兩將モ、大内ノ陣城ヲ出張アッテ、其夜大坪新庄ノ古舘ニ備タリ。合戰ノ場ハ谷地ト岡トノ境ナリ、同九日巳ノ刻ニ戰始リ。兩陣先ツ鐵砲討セケルニ、俄ニ雷鳴秋雨篠ヲ突ク夥敷降リ來レハ、兩方火縄消テ討コト不能。然ルニ相馬方ハ、駒ケ峯ヨリ火ヲ助ケ續ケシカハ。又鐵砲ヲ打カケタリ 伊達方堪難クシテ亂レ引ントスル處ヲ、相馬方競ヒ掛ッテ討テカヽル、相馬ノ騎兵信田甚太郎カ二男信田助七ト 富倉新助トハ常々契約有テ、引カハ相共ニ引、カクレハ相トモニ掛ル、然ルニ亘理重宗ノ騎兵十文字新助トテ、勇功ノキコヘアル者。其日ノ軍奉行ニテ團扇ヲフリテ亘理勢ヲ乘廻シ下知シケルヲ。信田・富倉コレヲ見テ。ヨキ敵ナリ討トラントテ 相共ニ伺ヒヨリ。信田助七十文字ニ走リカヽリ 乘タル馬ヲ切リケレハ。十文字馬ニ飜落サル。スカサス寄テ切伏セ。首ヲカヽントスル處ニ。十文字カ郎從五六人 透間モナク落合テ。助七ヲ討取テ十文字カ首ヲトラセス。富倉ハ十文字カ惣金ノ團扇ヲトッテ引退ク、斯テ急雨道ヲソコネ、雨未タ晴サレハ。兩陣相引ニシテ軍ハ夫マテニシテ終リケリ。其後又伊達方ヨリ、丸森ノ城ヲ可責トテ、阿武隈川ヲ隔テ、舘山ト云所ニ、人數上下二百餘人、陣城ニ小屋ヲ掛テ籠置タリ、此備頭ハ細野日近江ト云者

ナリ。又舘山ヨリ丸森ノ方川端ニ阿久士ト云村アリ。此所ニ細野日新十郎ト云者ヲ頭ニテ、人數百五十餘人差置ル。コレハ丸森ヲ攻ラルヘキ便宜ヲ伺フ爲ナリ。此外ニモ伊達勢此所手續キ便宜ノ地ヘ百二百。或ハ五十七十ツヽ、數多備ヲ設タリ。尤矢野目陣城ヘモ程近シ。義胤モ敵ヲ欺キ。引出シ可レ討トテ。舘山ト川トノ間ニ伏兵ヲ設ント天正九年秋末明ニ。逢隈川渡瀨ヲコヘテ出兵ナリ。舘山ト河端ノ間。十町ノ内ナリ。伏兵ノ將ニハ大和田近江・荒川太郎左衛門・大浦掃部介ナリ。待迎ニハ義胤出張リ有テ。渡瀨ノ川中ニ馬ヲ立ラレシカハ。諸士卒モ乘入レ。川中ニモ此方ノ岸ニモ控タリ。川ノ幅サ一町餘モアランカ水ハ淺キ所ナレトモ。人馬ニセカレテ。向ノ方ハ水ハヤク深カリケリ。伏兵ノ行程少シオソカリケレハ。夜ハホノ々々ト明ナントス。伏將漸ク舘山近クナリ兵ヲ伏ント一二三ノ伏セ場ヲ定ントスル處ニ。伊達勢舘山ヨリ伏兵ヲ探リニ來ルニ思ハスハタト行逢タリ。伏兵ヲ見ルト否。三百餘吾劣ラシト追來ル。伏兵モ見ルト等シク。迹ヲモ顧ミス逃來ル。伊達勢モ川端近ク追來ル。伏兵行時ハ川アサカリシカ。味方川中ニ控ヘタル故。彼方ノ岸水深クナリケレハ。伏兵不レ殘追浸サル。サレトモ川中ニ味方アレハ。追ステ々々乘入レス。河端近ク三百餘兵。槍ノ穗先ヲソロヘテ。後レテ水ニヒタリタルヲハ。六七人突伏セタリ。伊達勢安久士ニアリシ者トモ。其外彼方此方ヨリ騎兵歩ノ卒馳集リシカハ上下七八百。川端ニ段々ニ控ヘタリ。伏兵亂レテ逃ル時。馬上ノ追人乘リ付ルコトハ安ケレトモ。歩ノ卒ト馬上ノカケ合ハ。大形馬上討ル、者ナリ。又敵ノ方便モアルコトナレハ。馬ヲ鎮メ同勢ヲ見合々々乘ルモノナレハ。細野目新十郎下知シテ拔出タルヲハ。先ヘ乘切テ押ヘ。後レテ追者ヲハ。ス、メテ追ハシメケレハ。一騎一人モ討セス。川端迄追來ル。是擧動ハ人々出陣毎ニ思ヒ愼ムヘキコトナリ。ト時ノ人賞談セリ。カ、ル所ニ室原文九郎十六歲・櫻井四郎兵衛二騎。向ノ山岸

へ乗上ントス。櫻井ハ少ンナキニ乗出ンタルカ、如何シケン乗上ルトキハ跡ニ成タリ。伊達方ヨリコレヲ見テ、上ケ立テ討ントヤ思ケン、川端少シ引退ク體ナリシカ、返シ來テ室原カ馬ノ槍ニテ突タリシカハ、馬續上リテ主ハ川ヘ落馬シタリ。サレトモ鐵砲頭中村助右衛門下知シテ室原ヲ引立、郎等ニ負セテ退リセケ、ト。中村ハ室原カ親族ナリ。馬アハ敵ニトラレタリ。櫻井モ馬ヲ突レ、馬トモニ川中ヘ落サレシカ、其儘引立テ乗直シテ引返ス。相馬勢ノ控ヘタル下ハ、水アサカリシカハ、俵口吉左衛門・鈴木掃部・同吉左衛門、河ヲ渡ン馳付、敵ノ槍ニ太刀ヲ合ス。爰ニ伊達方ヨリ、鳥井ノ差物ニテ武者一騎少シモ臆セス、馬ヲ進メ川端ニ乗來ル所ノ、相馬方鳥毛出立ノ小人、鐵砲ニテ討テ落ス。コレヨリ伊達方色惡シク見ヘケレハ、相馬方一同ニ川ヲ渡シテ乗上ル。此トキ義胤眞先ニ乗上ラル。供兵十二騎付タリ、伊達勢備ヲ直シテ、相掛リニ掛合セ、平場ニテノ合戰、追ツ返シツ。火ヲチラシ、土煙天ヲカスメ、ヲメキ叫ンテ挑戰ス、相馬方成田五兵衛・末永右京・瀧迫日向、目ニ立タル働キアリ。小野田小十郎・桑折左馬亮・高田六郎・長轟帶刀等討死シタリ。伊達方ニハ下惣左衛門・仝四郎右衛門。細野日新十郎等、由々シキハタラキアリ。安久土ニ住セシ細野目近江モ、此所ニテ討死シタリ。誠ニ平場火合ノ軍花々シク見ヘケル所ニ、俄ニ雷光霹靂シテ、大雨篠ヲ降シケレハ、道路水湛ヘテ、恰モ流河ノ如シ、相馬勢ハ背水ヲリ、ヘタレハ、洪水ニ及ヒテハ途ヲ失ンコトヲ思ヒ。急ニ軍ヲマトメントス、伊達勢追討センニモ。路道忽チ損シ。滿望ヲ分タネハ、急ニ備ヲカタメタリ。トカクノ内義胤川ヲ越ラレ。相馬勢引上シカハ、此方モ軍卒ヲモトメ引上アリ、此日ヨリ雨フリ續キ。霖雨日ヲ追テ不晴、川々水アフレテ、合戰ナリ難ク見ヘケレハ。小齋ノ城ニ加勢ノ番兵ヲコメラレ。其外矢ノ目表ニモ當郡近郡ノ加勢彼是陣城ニ殘シ置キ、亘理表ノ固メ共ニノコル所ナク手配アツテ、輝宗御父子、元庵ヲ

伴ヒ、一先ツ米澤ヘ歸陣セラレケリ。

伊達相馬有扱和睦之沙汰事

天正四年、矢野目對陣ヨリ以來同九年迄六ケ年カ間。伊達・相馬陣城ヲ引カス、輝宗ニハ米澤ヘ歸陣アリテモ、又折々ハ忍ヒニ此對陣ヘ來リ。在留アルコト度々ナリ。依之相馬ノ兩將モ境目ヲ放レス、共ニ年月ノ對陣ナリ。然ルニ此度小深田舘山ノ合戰霖雨打續キ。川々洪水ニ及ヒ一先ツ合戰成難ク。諸軍ヲ牽テ輝宗米澤ヘ歸陣アリケレハ 指出タル合戰トテハナケレトモ未タ矢野目ノ番兵小齋ノ城兵等ヨリ野伏迫合シテ、鬪爭止ヒマナカリケリ、小齋伊達ノ手ニ入テヨリハ、兵威各別ニツノリ。今ハ長者カ崎・冥加山。石佛ニ取出ヲカマヘ、旦理元庵ノ手ヨリモ。コノ山ト小齋ノ城ノ間ニ人數ヲ出シ、此彼方ニ陣城ヲ設ケ、其備ヲナスコト不怠。小齋相馬領ナリシ折ハ。此山ノ邊リヘ敵ノ入タルコトナカリシニ。古佐井ヲ先テヨリ如此。晴宗・輝宗ノ戰功ニテ。相馬領山一ツモトラレタルコトナカリシカ。幼年ト雖トモ、政宗初陣以後。其武名近國ニ沙汰アリシヨリ、イツトナク伊達ノ兵威昔ニ返リ。秀運ノ崩シ有テ、結句今ハ相馬ノ領分ヘ。取出ヲカマユル程ノ勢ヒナリ、此取出ノ結構ハ。金山・丸森ノ通路ヲ妨ン爲メナリ、冥加山ニ伊達ノ取出構ヘシ後ハ、田邊コレハ金山ノ辰巳ニ當ル近所ナリ、八幡コレハ城ノ後ノ山崎黑森、コレハ金山續キノ山崎ヲ云。石佛コレモ金山近所ナリ右ノ所々ニテ。朝暮旦夕ノ迫合、算フルニイトマ非ス、下卒五人三人討セヌト云フ日モナシ、相馬ハ小地ト云ヒ、隣郡ノ加勢モナシ、只猛將ノ勢ニマカセ、向見スノ軍ヲ好マレケレトモ。數年ノ對陣ニ諸士モ討死シ諸卒モ多ク損亡セシカハ。今ハ戰ヲ不好。一城ヲモ落サヌ樣ニ防戰守禦ノコトノミナリ。然ルニ伊達相馬年來ノ對陣笑止トヤ思ハレケン。何レモ親族ノ中ナレハ、平和ノ扱ヒアルヘシトテ。佐竹常陸介重義ヨリ助川周防岩城左京大夫常隆ヨリ荒川・河田、田村清顯ヨリ田村月齋ヲ使トシテ、相馬兩

將ヘ平和ノ事ヲ申シ越サル。淸顯ヘハ盛胤ヨリ阿彌陀寺ヲ以テ往通數度ナリ其故ヲ不知、其上淸顯宇田中村ノ城ヘ來臨。長德寺ニ寄宿アツテ色々直々ノ扱ナリ。金山・丸森ハ元來伊達領ナレハコレヲ返シ遣ハシテ無事アルハシト種々樣々ニ扱ハレケレハ盛胤ニハ承引アリケレトモ。義胤旋トウケカヒナク一應ノ承諾ノミニテ强テ決著ニモ不及レハ、淸顯ニモ無其義三春ヘ歸城セラレケル。

私ニ云、此扱ニテ天正十一年五月、先ツ丸森ヲ返サレ、其翌年金山ヲ返サレシト云說記アリ、非ナリ、天正十年ニ丸森金山ハ落城ナリ。此年伊達ノ兩將出陣アツテ相馬領ヘ亂入兩城ヲ責オトシ。再ヒ伊達ノ手ニ入タリ。然ルヲ扱ユヘニ返サレタリトノ說コレハ相馬方ノ說ナルヘシ。如何トナレハ相馬ノ說部テ小身小勢。以テ伊達ノ大勢ニ對シテ、勝利アルコトヲ而已云フラシテ負軍ノコトハ曾テ不云。秘藏スル所ナリ然ルニ丸森・金山ヲ攻トラレ。相馬方利ナキコトヲ隱ナン爲メ幸ニ此扱ヒ此合戰ノ同時ナレハ淸顯ノ取持ヲ趣意ニ立テ扱ノ上ニ返サレタリト說ヲ起シテ翌年落城ノコトヲ紛記シタルモノナリ、家々ノ記多分ハ自己ノ非ヲ除キ、他ノ非ハ擧テ記之自己ノ勝利ノミ記錄シテ他ノ勝利ヲ不記功臆勝敗トモニアリノ儘ナラスシテ、筆記ニ私ノ說ヲカマユル武士ノ耻トス

伊達秘鑑卷之十終

伊達秘鑑卷之十一

東奥仙府　燕々軒　編集

南部信直家督相續

于ㇾ爰奥州南部ヲ領スル。南部大膳之大夫信直ハ。淸和源氏伊豫守賴義ノ三男新羅甲斐守（號ニ新羅三郎一。稱ニ刑部丞一。甲斐源氏也。）源義光五男賀々美次郎遠光ノ三男南部三郎光行。文治五年秋右大將賴朝泰衡爲ニ退治一。奥州發向ノ節。幕下ニ從ヒ阿津賀志山國見澤ノ合戰ニ軍功アルニ依テ。於ニ奥州糠ノ郡等ノ數郡。賞恩ニ賜ㇾ之。依ㇾ之光行建久（辛亥）年十二月下旬ニ。甲州南部ノ庄ヨリ。奥州平良糠郡ニ入部。直々同郡平良ケ崎ヲ居城ト定ム。其後三戸ニ移リ。子孫代々此所ニ住ス。光行多子ナリ。第一彥太郎行朝是ハ一男ナレトモ。庶腹タルユヘ。不ㇾ繼ニ家督一。一戸ヲ知行ス。則一戸氏ノ元祖ナリ。次男彥次郎實光。嫡腹タル故。家督相續ス。三男太郎三郎朝淸。四男孫四郎宗朝。是ハ四戸氏ノ元祖ナリ。五男五郎行連。是ハ九戸ノ元祖。六男破切居六郎實長。甲州ニテハ破切居ノ鄕ヲ領シ。同國身延山ノ本領主ナリ。是八戸氏ノ元祖トナル。嫡男彥次郎實光ノ子ヲ又次郎時實ト云。鎌倉宗尊親王ニ給仕ス。時實ヨリ八代南部右馬頭茂時ハ。北條相摸入道宗鑑カ味方ニ屬シテ。正慶二年五月廿二日鎌倉沒落ノ刻自害。其孫遠江守政行。足利尊氏將軍ノ味方ニ屬シ。數度軍功アルニ依。本領安堵ノ御敎書ヲ賜ル。其子南部左馬頭守行後大膳大夫。剃髮シテ禪尊法師ト號ス。鎌倉持氏ノ味方トシテ有ニ軍忠一。其子遠江守義政（號ニ南部庄司一。）將軍義敎ヘ味方シテ。持氏追討ノ勢ニ屬シ。黑母衣ヲ免サレ。威勢遠近ニフルヒシカ。應仁以來天下大亂ニ及ヒ。潜逆ノ輩不意ニ起リ。面々ニ黨ヲ立シカハ。義政十一代ノ孫彥三郎晴政ノ代ニ至テハ。僅ノ領分ヲ從ヒケリ。晴政ノ子ヲ彥三郎晴繼ト云。幼年ニシテ家ヲ繼。十六歲ニシテ元龜三年八月四日卒去ス。去ルニ依テ家督ナシ。晴政ノ娘（晴繼ノ姉）數多アリ。嫡

女ハ田子九郎信直室 二女ハ九戸彦九郎實親室 三女ハ東中務四女ハ南少弼 五女ハ北左衛門佐信愛カ嫡子主馬助秀愛ノ妻ナリ 然ルニ晴繼死去ノ時 誰ヲ世繼ニ可立ト 家中大ニ騒動シテ 更ニ穩カナラス 東中務少輔。南遠江守。北左衛門佐。石亀紀伊守。七戸彦三郎。毛馬内靱負頭。石井伊賀守。櫻庭安房守。楢山帶刀。吉田兵部少輔。福田掃部。葛卷覺左衛門等 諸老士評議取々ナリシカ 面々心々ニテ一決セス 其頃九戸左近將監政實ハ 家中一番ノ大身ナレハ 諸人之ヲ輕ク思ハネハ 政實贔負ノ輩ハ 一向九戸政實ノ弟九郎實親コソ 晴繼ノ姉聟ナレハ 是ヲ家督ニ立ラレテ可然ト云モノアリ 其中ニ北左衛門佐申ケルハ 田子九郎信直コソ 南部二十三代ノ舎弟ナリ 其上大姉聟ナリ 旁々以テ因近キ事ナレハ 家督ニ居テ相續アランニ 誰カ異義ニ可及トテ 勝レタル侍百人ニ 鐵砲百挺各物具ヲ固メサセ 田子ニ居レシ九郎信直ノ迎ニ遣シケル 信直慮リ有テ 世ノ有樣ヲ伺ヒ 田子ニ蟄居シテ居タリシカ 北左衛門方ヨリ招キノ使到リケレハ渡リニ舟ト喜ヒ 則之ニ應シテ三戸ノ城ニ入來リ 南部廿六代ノ家督ヲ相續ス 彦三郎晴繼ノ葬禮ヲ營ントテ 菩提所萬歳山聖壽寺ヘ送ラル 北左衛門佐ハ三戸ノ留守居ヲ勤メ 子息主馬助秀愛ヲ供トス 世上ノ人心未タ定ラサル折ナレハ 從供ノ面々 皆六具ヲ固メテ行列ス サレハ家中一決セサル事ナレハ 一門ノ中ニモ 供セヌ者多カリケル 既ニ葬禮ノ規式畢テ 信直三戸ヘ駕ヲ廻ス處ニ 誰トハ不知逆心ノ輩道ニ相待 信直ノ歸リヲ討ント處々ノ詰リニ相支テ 弓鐵砲ヲ放チ懸シカハ 微勢ニテ打破テ通ルヘキ樣ナカリケレハ。黄昏ニ及テ川守田ノ舘ヘ引入ラル。亭主川守田常陸入道 急キ信直ヲ請シ入ル 逆心ノ輩猶跡ヲ慕ヒ 透間モナク門内ヘ亂入ス 北主馬助・金田休助等ヲ始メ 我モ々々ト立向ヒ 手痛ク防戰シケレハ 逆徒タマリカネテ門外ヘ退リ 城兵勝ニ乘テ追討ツ 逆徒四方ヘ敗走シケレハ 皆々城中ヘ入ニケル 一揆

ノ徒如何思ヒケン、其夜重ネテ寄スルコトモナク。信直早且ニ三戸ヘ歸城アリ。則家中ノ面々、急ニ出仕スヘシト觸ラレ、若シ異議ニ及ハヽ、則討果スヘキノ旨斷之ル、是ニ依テ東中務。南遠江ヲ始トシテ。何モ登城シタリケル。九戸左近將監政實ハ。所勞ト號シ出仕セス、然レトモ信直ノコトハ。一家ノ筋目ナレハ。家督ノ事ハ聊カ非義ニ非レハ、違背スヘキ謂ナケレハ、敢テ敵對ノ色モナク。己カ本城ニ引籠テ居タリケリ。斯テ其年モ暮。明レハ天正元年ニナリヌ。誰有テ支ル者モナク。家中シハラク靜謐ナリ。

高田彌五郎自志波歸參南部。

九戸左近將監政實カ弟ニ、高田彌五郎ト云者アリ。志波ノ戸部安藝守カ婿ニテ、高田ヲ知行セシ故、高田氏トス、然ルニ北瓜ノ橋造立ノ奉行ヲ、戸部高田ニ宛課ス、依之彌五郎普請場ニ幕ヲ打テ居タル處ニ、戸部カ下部ニ、源藏ト云者アリ、日比安藝守ノ覺ヘ厚キニ依、家中ノ諸士ニ對シ。毎度禮ヲ失フコト多シ。サレトモ安藝守秘藏タルニ依。誰手サス者ナシ。時ニ此度普請場ニ來リ。何ノ禮義モナク。高田カ假屋ノ前ヲ、馬ニ乘テ通リケレハ。彌五郎カ中間ニ才太郎ト云者、若者ナレハ懲ヘカネ。タトヘ館ノ中間ニモアレ。此普請場ヲ乘打セン者。此家中ニ不覺、作法知ヌ溢レ者、安穩ニ可通カトテ。追カケテ討殺サントス、源藏心得タリトテ、取テ返シ、馬ヨリ飛下リ。刀ヲ拔テ渡リ合、シハシ打合ケルカ、才太郎カ刀ヲ受ハスシ。源藏肩口ヲ割レ。忽チニ死タリ。戸部安藝守此由ヲ聞。大ニ怒リ。乘打ノ咎メハ去ル事ナレトモ、某カ召仕ヲ無左右討殺ス條。甚タ奇怪ナリ、彼源藏ヲ討タル者。早速討テ出スヘシト。頻リニ彌五郎カ許ヘ使ヲ立ル、高田カ家中一同ニ申ケレハ。作法ヲ破ル曲者ヲ打留タルハ此常ナリ。然ルヲイカニ男ノ命ナレハトテ。才太郎ヲ討テ出サレンハ、當家ノ名折ナリ、能々思慮廻ラサルヘシト、口々ニ支ヘケレハ、彌五郎此義ニ服シ、安藝守ヘ返事ニハ。仰ノ如ク源藏ヲ左右ナク討留タルコト。其咎カ

メ無餘義候 併是家來ノ業ニテ、我等不存間ノ事ナレハ斷リ申ス 無是非次第ナリ 但彼相手ヲ討テ出シ候事ハ成リ難ク候 天下ノ法ヲ破ル者 討留ルコトハ當ノ習ナリ 於此義無念ト思玉ハヽ 某一命ヲ進スルヨリ外ハ有マシクノ由返答ナリ 戸部大ニ怒リ高田ト義絶シタリケリ 其後動モスレハ彌五郎ヲ可失計策アリ 依之彌五郎志波ニ居住ヲ苦ムルコト始終ノ策ニ非ストテ 其年ノ暮志波ヲ立退 糠ノ部ニ來リケル 兄九戸政實 此事ヲ不安思ヒ 頓テ信直ノ介抱ヲ賴ケレハ 信直則承引シ 彌五郎ヲ召出シ 其方當家ヘ歸參ノ志神妙ナリ 隨分計略ヲメクラシ 志波郡ヲ手ニ入ル樣ニ可相叶トナリ 彌五郎諾之ス 則名ヲ改テ修理亮ト號ス 三戸ニ伺候ス 其後計策ノ爲不來方今ノ盛岡中野館ニ居ラシム 修理亮樣々謀慮ヲ廻ラシテ 志波ノ諸士ヲ語ラヒケレハ 簗田。石淸水•天當生等ノ諸士 大形南部ヘ心ヲ寄ケレハ 志波ノ諸士互ニ心ヲ置テ 君臣ノ間モ睦マシカラス 斯テハ行末ノ程如何トソ見ヘタリケリ

最上八沼城沒落

最上八沼ノ城ニハ 幾志美作ト云者楯籠リ 近邊ヲ押領シテ 義光ニ從ハサリシカハ 義光則大軍ヲ卒シテ八沼ノ城ヘ押寄 三方ヨリ取卷テ攻メ戰フ 城中ニモ小關喜左衞門ト云大剛ノ兵 其外究竟ノ者共籠リ居ケレハ 射藝ニ達シタル士卒ヲ以テ 指詰引詰散々ニ射立ケレハ 寄手時ノ間ニ數十人枕ヲ並ヘテ射伏ラル 寄手ハ小城ト侮リ 諸軍責具ノ用意モセス 我先ニト攻上レハ 皆城中ノ的ニ成テ 手負死人塚ヲナス 義光遙ニ見之 先々虎口ヲ退テ 仕寄竹把等ノ用意シテ可攻ト下知セラレケレハ 諸勢ニ傳ヘテ攻口ヲ退ク處ニ 城兵勝ニ乘テ 山下マテ討テ出ル 義光コレヲ見願フ處ノ幸ナリ 付入ニシテ一戰ニ攻破レト下知セラレ 自身ニ進ンテ諸軍又備ヲ直シ挑ミ戰フ 然ル處ニ城兵ノ中ヨリ 緋威ノ甲冑著テ 鹿毛ノ馬ノ逞シキニ乘タル武者 大長刀ヲ打フリ 當リヲ拂ツテ進ミ來

ル、義光見レ之、天晴敵ヤト。馬ヲ打テ進マレケレハ。近習ノ者共大將ノ身トシテ輕々シキ働キ。勿躰ナシト留メケレトモ、更ニ耳ニモ入ラレス。控ル袖ヲ振放シテ。一文字ニ乘寄セ、敵モ馬上ナレハ、互ニ乘違ヒ乘廻シ。火ノ出ル程戰ヒケルカ。義光敵ヲ弓手ニ見ナシ、例ノ鐵棒ヲ振リ上ケ。只一打ニ馬ヨリ逆サマニ打落シ。飛下テ首ヲ取。差揚ラレケル處ヘ。氏家尾張守馳ツケテ。以ノ外氣色ヲ損シ。其首誰ニ見セ玉フソヤ、大將ノ身トシテ。端武者ノ働キ、身ニアヤマチ有ル時ハ、敗亡ノ基ナリ。近キ比葉柴勘十郎ヲ亡シ玉フ時仰アリシハ。血氣ニ任セテ自身ノ働キヲ好ミシユヘ、味方ノ方便ニ乘テ討レケルトテ、御笑アリケルニ、早クモ忘レ玉ヒ今更如レ此自身ノ働キ有レ之ハ、淺マシキ御行跡カナト泪ヲ流シ諫メケレハ。義光モ理ニセマリ。無二面目一思ハレケルニヤ暫ク首ヲ上ケ兼テアリケルカ近習ノ者ニ向テ此首取ラスルソトテ投出サル。此武者ハ大將幾志美作守カ甥幾志何某ニテソ有ケル。義光如レ斯手ヲ下シテ戰ヘハ。士卒雜兵ニ至ルマテ、我モ々々ト進ミケレハ。分取高名數ヲ知ラス。城兵引色ニ見ヘケレハ、氏家ハ自身ニ檜ヲカタメ、敵ハ兵機挫ケタリ、此時ヲ不レ失。モメヤ者共ト。眞先ニ進ンテ攻入ケレハ。義光氏家討スナ續ケヤト。頻リニ下知セラレケレハ。究竟ノ兵士二百餘人。叫ヒ喚テ城戸口ヘ押入ントス。城兵モ城戸ヲ指ントシケレトモ。追上ルコト急ナリケレハ防レ之ニ術ヲ失ヒ、詰ノ門ヘ引入處、寄手ハヤ城中ヘ込入ケレハ右往左往ニ散亂シ、本丸サシテ逃上ルヲ、氏家急ニ下知シテ、兵ヲ馳テ責上レハ。城兵本丸ノ木戸逆茂木ニ防カレ。城中ヘ入得スシテ。爰彼所ニウロタヘ、道モナキ所ニ行カヽリ、自害スルモアリ、或ハ敵ニ追詰ラレ谷底ヘ飛落テ死スル者、又數ヲ不レ知。城主幾志美作ヲ始メ。小關喜左衛門其外武功ノ者共取テ返シ散々ニ防戰。終ニ敵ヲマクリ退ケテ。本丸ヘ引入ケル。サレトモ始終難レ叶トヤ思ヒケン、其夜城ヲ明渡シ降人ニ成テ出ニケル寄手則城ヲ

請取リ八沼ノ城落居シタリ。其後小關喜左衛門ヲ始メ城中ニテ働キ強カリシ者共二十餘人召出シテ義光ノ旗本ヘ加ヘラレケルサレハ此間ノ戰ニ義光自身ニ持レタル鐵ノ棒上杉景勝謀叛ノ節マテ身ヲ放サス持レケルカ。其後天下一統ニ治リヌレハ。件ノ棒ノ銘ニ山形少將義光ト象眼ヲ以テ入レ之子孫ノ内ニ器量ノ者アラハ可レ持トテ府庫ニ納メ置レシトカヤ誠ニ當世ノ猛將ナリ。

天童合戰附落城

八沼ノ城沒落シケレハ其近隣ノ輩各山形ノ幕下ニ屬ス爰ニ府中ヨリ三里下天童ノ城主ハ天童伊豫守賴貞トテ天童ヨリ下筋八楯ヲ旗下ニ隨ヒ威勢近鄉ニ震フ先祖ハ則出羽ノ按察使兼賴ノ末葉ニテ義光ヘモ同流タルニ依テ毎度山形ヘモ出仕アリシカ永祿ノ比ヨリ義光ヘ女ヲ贈リ其ヨリ後ハ山形ヲ幕下ノ樣ニアシラハレタリ。サレトモ流石身ノコトナレハ義光敵對ナリ難ク時ヲ待テ居ラレシニ賴貞既ニ卒去シテ子息賴久若輩タリシカルニ八沼等其外所々山形ヘ屬シ義光威勢蔓ルトイヘトモ賴久モ天童八ケ城ノ大將ナレハ今更山形ヘ從フヘキ謂ナシトテ籠城ノ用意ニ及ヒケル是ニ依テ義光天童ヘ押寄賴久ヲ責潰サントテ氏家。志村等ヲ集メ軍議アリケレハ此旨先立テ天童ニ隱レテク急キ籠城構ヲナス先ツ城ノ外廻リニ柵ヲ二重ニ結ハセ馬ノ通ルヘキ道ヲ堀切城ヲ堅固ニ構ヘケリ其上下モ八ケ城ノ諸士殘リナク楯籠リ矢狹間々々ニ弓鐵砲ヲ配リ備ヘ山形勢ノ寄來ヲ。今ヤ遲シト待カケタリ斯テ義光大軍ヲ卒シテ天童ヘ押寄矢合ノ始メヨリ無透間數日攻レトモ城中堅固ニ持抱ヘ四方ノ櫓柵ノ間ヨリ矢砲ヲ飛シ爰ヲ先途ト防戰シケレハ此城早速ニ責落スコト難レ叶トテ城ノ東ニ向ヒ城ヲ構ヘ引退ク頃ハ天正十年九月末時雨降續キシカハ菊田ノ水深クシテ馬ノ進退自由ナラス城中ヨリ歩卒二百餘人ヲスクリ出シ各九尺柄ノ槍ヲ持セテ午堂マテ働キ出

山形勢ヲ追散シテ引返ス。義光遥カニ望ミ之、便宜ヨクハ付入ニセヨト下知セラレケレハ、早雄ノ若者共、三方ヨリ取テ返シ、一度ニ打テ掛ル。城兵モ取テ返シ。半時ハカリ迫合。勝負マチ々々ナル處ニ、寄手ノ内ヨリ。志村九郎兵衛・矢桐相摸三百餘人。畔ヲ傳ヘテ横合ヨリ切テ懸レハ、城兵コラヘ兼テ引退ク。寄手勝ニ乗テ城際マテ追散ス。爰ニ天童方ニ野邊澤能登守滿延ト云二手ノ大將アリ。元來無双ノ大力。名ヲ得タル剛兵ナルカ、此由ヲ見テ大手ノ門ヲ開キ、只一騎打出ケル。鎖帷子ノ上ニ黑糸威ノ鎧ヲ著、八方頭ノ兜ヲ猪首ニ結ヒ鴾毛ノ馬ニ青貝ヲ以テ、石畳置タル鞍置テ打乗リ三ケ月ト云重代ノ太刀ヲ佩、五尺二寸有リシ鐵杖ヲ打振リ逃ル味方ヲ擡分々々追來ル敵ノ眞中ヘ會釋モナク駈入弓手ニ相付、馬手ニ引請、當ルヲ幸ニ打伏セケレハ寄手是ニ舌ヲ卷テ、面ニ向フ者ナシ寄手ノ内ニ安間左馬之助トテ元來羽黑生レナリシカ、兵術修行ノ爲ニ諸國ヲ廻リ、近年山形ヘ來リテ。義光ノ旗本ニ屬ス、此度ノ軍ニ高名シテ、勸賞ニ預ラント思ヒシカ、此由ヲ見テ野邊澤ハ聞フル大力ナレハ、組打ハ叶フマシ。太刀打ノ勝負ヲ決セント、三尺餘リノ刀ヲ拔持、眞一文字ニ乗寄スル、能登守キツト見。多勢ノ中ヨリ只一人進來ルハ。天晴ヤサシキ者哉トテ、互ニ馬ヲ駈合。乗違ヒ乗廻シ。龍虎ノ勢ヲ發シテ相戰フ、サレトモ能登守モトヨリ氣量拔群ナレハ、敵ヲ下ニ見ナシ、急ニ馬ヲ馳寄。大ニ激シテ鐵杖ヲ振上安間カ冑ノ眞中ヲ打ケレハ、頭ハ胴ヘ打込レ微塵ニ碎ケ、馬モ尻居ニ打スヘタリ、是ヲ見ル者魂ヲ失ヒ、進ミ近付ク者更ニナシ、其間ニ滿延馬ノ腹帶ヲ〆直シ居タル處ヘ山形勢ノ中ヨリ、十六七ノ若者一騎駈出近々ト乗寄セ能登守カ鎧ノ袖ヲ二太刀切ル滿延少モ不騒、振リ仰キ、汝何者ソヤト問フ本間七郎生年十七歳ト名乗ル、能登寛爾ト笑ヒ天晴剛ナル若者哉、汝此所ニテ討ヘケレト志優美ニ免シテ可助トテ、馬ヲ進テ除ニケル、之ヲ見テ皆々七郎ニ向テ。汝カ小腕ニテ能登

守ヲ討ンコト思ヒ寄スト笑ヒケレハ七郎聞テイヤ々々能登守ハ強力ノ人ナレトモ腕ヲタニ打落サハ働ヤ心ニマカスマシ左アラン時ニ首ヲ取ラント思ヒシニ脛當ヲシムルトテ腕ヲ縮メテ居タル故本意ヲ遂サル口惜サヨト云ケレハ聞者各七郎カ若輩ノ大膽ヲソ感シケル義光モ自ラ馬ヲ進メ下知セラル野邊澤カ勢百騎ハカリ城中ヨリ突テ出兩方入亂レ火花ヲ散シテ戰フ中ニモ野邊澤カ手ニ有路但馬・笹原石見ハ主ニ劣ラヌ大剛ノ者ナレハ。山形上大將志村九郎兵衛カ控ヘタル備ヘ一文字ニ乘込ミ四角八方ヘ當テ力戰ス志村カ備モミ立ラレ九郎兵衛モ既ニ危ク見ヘケル處ニ旗本ヨリ二三百人一度ニ突テ懸ル野邊澤カ勢新手ニ駈崩サレ不叶シテ城中ヘ引入ケル有路・笹原手ニ當首ヲ引提乘タル馬血ニ染テ入來レハ能登守大方ナラヌ機嫌ニテ此度兩人カ働キ比類ナシトテ各褒美ヲ取セケル斯テ其日ノ軍終リケレハ義光向城ニ番兵ヲ殘シ置一先ツ山形ヘ歸陣セラレ氏家尾張守ヲ招キ野邊澤能登守ハ剛勢勇力尋常ニ非ス謀略殊ニ拔群ナレハ渠カ城中ニ有ル限リハ天童ヲ手ニ入ンコト叶フマシ如何ニモシテ能登守ヲ味方ニ招カント思ナリトテ。數日樣々ノ術ヲ以テ滿延カ心ヲ引見其後義光ヨリ一通ノ書簡ヲ送リ内々其方ノ武略及聞處ニ此度ノ働キ誠ニ以テ驚耳目處ナリ。義光深ク之ヲ慕フ乞ヒ願クハ味方ニ組セラレナハ其方子息又五郎ニ我女ヲ娶シ親子ノ契ヲ結ハン此義於僞ハ神明ノ罰ヲ可蒙ト誓紙ヲ認メテ送ラレケル滿延義光ノ書簡ヲ披見シ忽チ心ヲ變シ頓テ旗下ニ屬スヘキノ旨返簡シ。則嫡子又五郎ヲ人質トシテ山形ヘ遣シ其身モ頓テ有路但馬守・篠原石見以下ノ家人ヲ相具シ軍門ニ降リ山形ヘ來リ先ツ氏家尾張守ニ對面シ其後義光ヘ對面義光不斜喜悦有甚タ懇志ヲ盡サレ則左文字ノ刀ヲ與ヘラル又滿延カ嫡子又五郎ヲハ子息修理大夫義康同然タルヘシトテ則又五郎ヲ康滿ト改メ正宗ノ短

刀ヲ與ヘラル。父子面目餘リ。恩ヲ謝シテ退出ス。夫ヨリ天童可ニ攻討ト。諸軍ヘ觸テ。忽チニ發向ス。天童城中ノ諸軍。能登カ逆心ニ力ヲ失ヒ。斯テハ此城持カタシトテ。皆々城ヲ忍出。方々ヘ落行。タマ々々殘ルハ譜代恩顧ノ輩ナリ。何レモ評議シケルハ。當君未タ若輩ナレハ。末ハカリ難シ。一先ツ當城ヲ開キ。重テ時ヲ待申サント云ケレトモ。大將頼久承引セス。トヤ角ト時ヲ移ス處ヘ。ハヤ山形勢ヒタ々々ト取懸。四方ヲ包ンテ取詰ケレハ。城兵防ヘキ兵卒ナク。又今ハ詮方ナク自殺シテ亡ヒケリ。其嫡子未タ八歳ニナリケルカ。乳母之ヲ介抱シテ。漸ニ城ヲ遁レ。奥州ノ方ヘ落行ケリ。此子成長ノ後。兵部重頼ト號シ。政宗ノ幕下ニ來リ。子孫天童氏相續。山形勢斯トハ不レ知。城中ヘ押入ルト雖トモ。防キ支ル者ナク。頼久既ニ滅亡シケレハ。此由義光ヘ注進ス。義光則能登守ヲ呼ンテ此度其方ノ大功ニ依テ。天童早速退散シタリトテ。甚タ感賞有テ則天童ノ城ヲ能登守ニ預ラレ。下八楯ノ支配ヲ命約ス

野邊澤能登守强力附義光力競

野邊澤能登守滿延ハ。東國ニ隱ナキ强力ナリ。又義光モ奥州ハ不レ及レ言。近國ニ並ヒナキ强勢大力ノ人ナリサレハ類ニ應スル友トヤラン。召抱ユル者。毎ニ力量不レ勝ト云者ナシ。中ニモ此能登守ハ。類ナキ强力ナリシトカヤ。能登守若カリシ時。何レモ寄合テ。國々ノ武邊咄ノ序ニ。或者ノ曰。往昔金賣橘次カ建立セシ宮ニ鐘アリ。頃日モ强力ノ者共。三四人シテ引落シケレトモ不レ叶。能登之ヲ聞テ。其鐘我ニ與ヘハ。引落スヘシト云。一座ノ者共。安キ事ナリ。御邊引落スニ於テハ。宮ヘハ餘ノ鐘ヲ鑄サセテ可レ納。只跡ノ笑種ヲ仕出スコト勿レト云ケレハ。能登サラハ同道セントテ。何レモ競ヒテ彼宮ヘ行ケルニ。能登守件ノ鐘ニ手ヲ掛。安々ト引落シ。我領分ノ鶴ノ子ト云所ヘ持行。古寺ノ有シニ掛置ケル。鐘ノ重サ百八十貫目ナリ 諸人舌ヲ震ハスト云者ナシ。後ニハ元ノ處ヘ返シ置ケルトナリ。天正年中 義光山形ニ於テ雜談ノ餘リ 能登守ハ無双

ノ大力ナレトモ我未タ眼前ニ是ヲ樣シ見ス。イサヤ其力ノ程ヲ樣シ見ントテ近習ノ中強力ノ者七八人召連レ能登守カ宅ヘ入來有シカハ能登守モ内々此沙汰聞及ヒケレハ白キ浴衣ヲ著シ丸腰ニ成テ大庭ヘ出テ待居タリ。頃ハ七月十五日隈ナク何ツヨリモ客明々タリ。義光能登守ニ對面有テ近習ニ向ヒ夫取付ト有ケレハ近習輩四方ヨリ取付押倒サントシケルヲ能登守事共セス。弓手馬手ヘ二三間程ツヽ投伏ケレハ殘ル者共不叶ト。五六人一度ニ取付シヲサナカラ小兒ヲ扱フ如ク何ノ手間ナク蹈倒シ義光ノ腰ヲ無手ト抱ク。義光力對シ難ケレハ。側ナル櫻ノ木ノ廻リ二尺四五寸アリケルヘ取付。引倒サレシト爭フ。滿延ハ引離サント。互ニ力ヲツルヒケレハ。兩方ノ力ニテ件ノ櫻根引ニグツト引拔タリ。其時能登守ハ驚テ義光ヲ放シケル。義光限リナク興ジテ。誠ニ能登守ハ聞シニ增ル強力ナリ。去ヌル天童ノ軍ニ。勝ニ乘リタル寄手ノ中ヘ。唯一人駈入。多勢追退ケシモ理ナリトテ。翌日城ヘ招テ褒美ヲ遣シ。酒宴ヲ催シテ饗セラル。其レヨリシテ猶能登守ハ國中無双ノ大力ト。諸人舌ヲ卷テ唱談ス。サレハ天正十年ヨリ同十七年マテ最上・庄内不殘手ニ入シモ且ツハ滿延等カ軍功故ナリ。其後北條氏直一族誅罰ノ爲太閤小田原發向ノ刻義光モ小田原ヘ參向。太閤皈洛ノ砌義光京都ヘ上ラレシカハ秀吉公喜悦有テ義光ヲ羽柴出羽侍從ニ任セラレシ時滿延モ義光ノ供シテ上リシニ。京都ニ於テ病死ス。其後滿延カ嫡子又五郎ヲ。約束ノ如ク義光ノ聟トシテ野邊澤宮内ト云ケル。後遠江守光昌ト名乘ル。後年最上落居ノ時。加藤肥後守ヘ預ラレ。終ニ肥州熊本ニテ相果ケリ。

上野山滿兼生害

義光氏家尾張守・伊良子宗牛等ノ諸臣ヲ集メ評議セラレケルハ。去ヌル柏木山合戰ニ。伊達勢無利シテ。輝宗退散ニ及フ。是天ノ與ル處ナリ。此節ヲ不失。上野山ヘ押寄。滿兼ヲ討取ヘシ。滿兼柏木山ノ軍ニ後レ

ヲ取リ又ハ輝宗退散ニ力ヲ落シ。臆病神ニサソハレテ。防戰ノ術ナカルヘシ。氏家カ曰其意最ニハ候ヘトモ。上野山ニモ家老里見內藏助（始メ部）同民部兄弟無双ノ者共ナリ其外士卒ニモ譽ノ者數多有之事ナレハ。早速ニ落城ハ致スマシ取合數月ヲ送リ候ハヽ。又以テ輝宗加勢必定ナリ。然ル時ハ由々敷大事ニ候。所詮智略ヲ以テ退治可然。其謀ハ某別シテ恩顧アル召仕ノ者ノ弟出家ヲ送。上野山寺住ニテ。日頃里見兄弟カ許ヘ出入仕候間內々兩人カ心底ヲ承ルニ、兄內藏助ハ專ラ道ヲ嗜ム弟民部ハ武勇勝レタリト雖トモ、生得欲心深クシテ道ニ背クコト多キ由。彼出家常々物語候ヲ承リ候ヘハ、今謀ヲ廻ラシ。民部ヲ動シ、渠サヘ味方ニ引付ハ。兄弟ノ內午角ニ隔、滿兼ヲ討取ンコト。案ノ內ニ候ト云ケレハ。義光尤ト同シ。サラハ彼出家ヲ以テ里見兄弟カ心底ヲ引動シ。其上ニテ謀書ヲ送ラルヘキニ極リケル。宗牛モ尾張モ。誠ニ以テ此方便ニテ。滿兼退治手間取マシトテ頓テ彼出家ヲ呼寄兩人對面シテ。委細ニ申含メテ、上野山ヘ遣シケル。此出家日頃里見兄弟ニ無他事出入シケレハ。直チニ內藏助カ方ヘ行テ申ケルハ。貴方兼テ御存知ノ如ク、愚僧カ兄ハ氏家尾張カ許ニ奉公致候處。昨日使ヲ以テ申越候ハ。義光大軍ヲ率テ、近日此所ヘ出陣アルヘキ由ナリ、サアレハ在々マテモ靜カナラマシケレハ。我々ニモ內々覺悟致スヘキ旨申越候。今マテハ伊達輝宗ヲ。高キ山深キ海ト云御賴候處ニ。去ヌル柏木山合戰ニ勝利ヲ失ヒ。其以後ヨリ義光ト無事調フ事ナレハ、此ヨリ後ハ誰アツテ後詰申ス者モ有マシケレハ。上野山落城程アルマシク候。然レハ里見ノ御家モ滅亡センコト。誠ニ歎キテモ餘リ有リ。敵寄來ラサル內ニ、何卒御分別候ヘカシト。言ヲ巧ニシテ云ケレハ。內藏助ツクヽヽト聞テ。日比ノ因トテ能モ知サレ候。尤其方ノ申サルヽ如ク義光ト。輝宗ト和睦アルコトナラハ、今ハ味方ノ助トナルヘキ人ナシ。其上此城大勢ヲ引受。合戰スヘキ要害ニアラサレハ。日ヲ經スシテ落城

センコト疑ヒナシ然リトイヘトモ代々ノ主君ヲ捨テ身ヲ遁レンモ武士ノ本意ニ非レハ所詮義ヲ先トシテ討死センヨリ外他事ナシト云切テ内藏助カ所存中々變スル色ナク味方ニナルヘキ氣色顯レサレハ兎角ノ問答ニモ不及暇乞シテ立出夫ヨリ直ニ民部カ所ヘ往テ、又右ノ趣ヲ云傳フ、民部ハ兄内藏申ス如ク上野山小勢ヲ以テ、山形ノ大軍ニ豈一日モ敵對成ヘキヤ縱輝宗再加勢有トテモ國境ヲ隔ト云其上難所ノコトナレハ俄ノ事ニハ不可合增テヤ輝宗今程義光ト無事調フ上ハ當家ノ滅亡疑ヒナシ其上義光武勇ノ譽アル大將ナレハ。遠近皆不隨ト云コトナシ我兼テ知之ニ依テ滿兼ヘ常々諫言シテ、義光ヘ降參ヲ勸ルトイヘトモ未曾テ承引ナシ斯ル主人ヲ頼ミ闇々ト亡ンコト實ニ無念ノ餘リナリ仍テ此度ヲ幸ニ山形ヘ降ラント思ヘトモ代々ノ主君ヲ棄今義光ヘ味方セハ不義不忠ノ名ヲ蒙リ諸人ニ後指々レンコトノ口惜サニ。今マテ斯ハ默止候ト。心底不包語リケレハ出家心中ニ喜ヒ又言ヲ返シテ曰。縱滿兼コソ貴殿ノ諫ヲ不用シテ滅亡アルトモ、里見ノ家長久ニ於テハ斯中我々地下人マテモ、各安堵ノ思慮ヲ廻ラサレ一人ヲ捨テモ萬人ヲ助ケ玉ヘト、言ヲ殘シテ立ニケリ其ヨリ出家ハ直サマ山形ヘ來リ。尾張守方ヘ行テ件ノ趣キ事具ニ演說シケレハ、氏家大ニ喜ヒ出家ヲハ私宅ニ留置伊良子宗牛ヲ伴ヒ義光ノ前ヘ出テ件ノ趣キ民部カ所存ヲ達シケレハ義光喜悅不斜謀既ニ成就セリトテ則彼出家ニ對面有テ金銀ヲ與ヘ里見民部カ方ヘハ。義光直筆書簡ヲ送ラル出家件ノ書ヲ請取急キ上野山ニ到リ民部カ許ヘ往テ申ケルハ。先日貴方無底意申サレシ談話ノ趣氏家尾張ニ物語致セシ處内々貴殿ノ武勇ニ達シ玉フ事兼々義光聞及ヒ玉ヒ序モアラン折思慮ヲモ申送ラレ度兼テ乞願ハル、處ナレハ其旨義光ヘ申聞ケン迚尾張則達之ケレハ。義光悅喜限リナク則此書簡直筆ヲ以テ送ラレ候トテ懷中ヨリ取出シテ

渡シケレハ、民部大ニ悦ヒ、則味方ニ可レ屬旨肯ヒケル、彼催急キ山形ヘ立歸リ。此旨申ケレハ、義光則矢桐相摸守ニ右ノ趣云含メ。上野山ヘ趣キ民部ト共ニ諸事謀略ヲ廻ラスヘシ、自然滿兼民部カ逆心ヲ察シテ討果スカ。又ハ落行事モアラハ。民部ト心ヲ合。何國迄モ追懸テ可レ討取。未タ事ノ成ラサルニ。此事先立テ沙汰有テハ謀密ナラス、却テ事ノ破レナレハ、外ノ聟ニハ湯治ト稱シテ立出ヘシト。隱密ニ示サレケレハ。於レ山形ニ民部逆心ノ沙汰ハナカリケリ。斯テ相摸守ハ上野山ニ行。ヒソカニ民部ニ對面シ。諸事内談ニ決シテ。則内藏助方ヘ使ヲ立。民部カ許ヘ呼寄ケレハ、内藏助何ノ心モナク。民部カ方ヘ入來ル、民部件ノ結構ヲ具ニ談、義光ヨリノ旨ヲ演ケレハ。内藏助以ノ外氣色ヲ損シ。御邊ハ是ニ組シ頼マレ候ヤ武士タル者、義ヲ捨命ヲ惜ミ代々ノ主ヲ見放シ、敵國ノ祿ヲ喰ンハ、鼠犬ニモ劣リタルナリ、内藏助ニ於テハ、忽チ頸ヲ失フトモ、全クニ心ナシ。斯ル忌穢ノ座敷ニ一寸モ膝ヲ曲ムヘキニ非スト。大ニ怒リ詈テ席ヲ蹴立處ヲ兼テ謀リシ事ナレハ。次ノ間ニ隱シ置タル力者、四五人走リ出、引組テ刺害シケル。民部慾心ニ義ヲ忘レ、兄弟ノ天命ヲ失シ、惡心ノ程ソ淺マシケレ。斯テ此事延引シテ、滿兼ニ洩聞ヘ。落行事モアルヘケレハ、今宵密カニ城中ヘ忍ヒ入。討取ルヘシトテ。日頃民部方ヘ無二他事一出入シケル滿兼近習ノ侍ニ、佐竹平内ト云者ヲ呼寄、潜ニ此事ヲ議シケルニ無二二心一旨、誓紙ヲ以テ之ヲ諾ス、依レ之其夜矢桐相摸ト民部兩人、城内ヘ忍ヒ入。兼テ用心キヒシケレトモ。平内手引シケルユヘ。子細ナク滿兼ノ寢所ヘ忍ヒ込、左右ノ從士二三輩、何ノ苦モナク切伏、滿兼ヲモ討取ケル、家中ノ諸士何者ノ所爲共不レ知只上ヲ下ヘト返シテ、騷動尤不レ斜、時ニ民部書院ニ出テ。大音ニ詈リ申渡シケルハ、此度山形義光ノ命ヲ以テ。滿兼並ニ内藏助ヲ討取ナリ、則義光ノ名代トシテ矢桐相摸守、最早城中ニ入來シタリ。大將ナク孤城ナレハ。家中不レ殘速ニ山形ヘ降參スヘシ。若シ

異義ニ及ヘキ輩ハ忽チニ誅スヘシト叫ヒケレハ何レモ肝ヲ冷シ滿兼亡ヒ玉ソトモ内藏助殘ラハ謀略モ可有處力ト賴ミシ内藏助マテ討ル、上ハ何ヲ賴ミニ此城ヲ可守トテ我モ々々ト民部ヲ賴ミ山形へ降參シケル猶モ此旨城下並ニ領内ヘ觸渡シケルニ此義如何アラント評議シケレ共内藏助マテ害セラレシ上ハ誰ヲ賴ミニ籠城スヘキ樣ナケレハ何ノ評定ニモ不及皆々降ルヨリ外ハナカリケル矢桐相摸守山形へ皈テ右ノ次第義光へ演說シケレハ喜悅限リナク則尾張ヲ呼ンテ此度ノ計略何ツニ勝レタリト稱美有テ加增ノ恩賞アリ其後民部山形へ來リケレハ義光對面有テ其功ヲ賞シ則約諾ノ如ク滿兼跡式一萬八千石ヲ與ヘラル民部恩ヲ謝シテ急キ上野山へ立歸リ内藏助カ子ヲ尋出シ害セントシケルニ其行末不知ハ若シ内藏助カ妻子隱シ置ニ於テハ其者共ニ斬罪スヘシ訴人セハ褒美ヲ宛行ヘシト領内不殘觸渡シケル無慚ヤ内藏助カ妻ハ勘四郎ト

テ二歳ニナレル男子ヲ懷キ婢女一人供トシテ近在ニシルベ有テ身ヲ忍ヒ居タリシニ如件領内詮議キヒシケレハ足ヲ止ル事不能遙々成澤へ落行安養寺ト云寺へ尋行歎キ入テ賴ケレハ住僧モサスカ哀レニ思ヒ甲斐々シク彼子ヲ受取懷ニ入テ自ラ仙臺へ行テ緣ヲ求メ念頃ニ養育シケルコソ賴母シケレ

里見勘四郎復父讐

斯テ里見内藏助カ一子勘四郎ハ安養寺ノ僧ノ憐ニ因テシハラク成澤ニアリシカ其後仙臺ニ居ヲ替へテ勘四郎爰ニテ成長ス其母渠カ四五歳ノ時ヨリ密ニ語リ聞セケルハ汝カ父内藏助殿コソ上野山伯父民部ニ討レ玉へハ伯父ナカラモ父ノ敵ナリ内藏殿ヲ討テ後御身モ我モ尋ネ出シ、誅セント探サレケルニ漸々ニ立隱レ成澤ノ安養寺ヲ賴ミカシコニ隱レ居テ育チシソカシ我身空シクナレリトモ必ス此事ヲ忘レスシテ父ノ讐ヲ可討ト、搔口說キテ云含メケルニ勘四郎幼稚ナレトモ此事ヲ聞テヨリ假初ノ遊

ヒニモ敵ヲ討ンコトヲ思ヒ。同齡ノ童共ト。木刀竹刀ヲ以テ擊合駈走リテ身ヲ習ハシ。既ニ八九歳ヨリ。師ニ屬シテ。劒術ヲ學フニ。其性甚器用ニシテ。十四五歳ニ及フ頃ハ。不測ノ妙ヲ得タリ。茲ニ於テヒソカニ上野山山形邊ニ忍行。心肝ヲ碎テ伯父民部ヲネラヒケル。里見民部自然ト此事ヲ傳ヘ聞。居宅ヲ堅固ニ構ヘ。天井板敷塀水門ニ至ルマテ。悉ク心ヲ付テ覺悟セシカハ。流石勘四郎モ。輙クハ討得サリシカ。勘四郎ハ劒術輕捷神變ヲ得タルト聞ケハ。忍ヒ入ンコトモ計リ難シトテ。寢所ノ塀ニ竹ノ筒ヲ伏セ置。筒ノ中ヨリ先ツ試ニ湯ヲ流シ。其跡ニテ小便ヲ通シケル。如此用心嚴シクシケレトモ。或夜如何ニシテカ忍ヒ來リケン。勘四郎密カニ寢所ノ次ニ入テ。息ヲ潜メテ窺ヒケル。竹ノ筒ヨリ何ヤラン流シ出ケルヲ。手ニ受テ嘗試ルニ。則湯ナルコトヲ知テ。暫時待居タリシニ。又流レ出ル物アリ。是ヲモ嘗テ試ムルニ。味鹹カリケルユヘ。扨コソト思ヒ。二間柄ノ槍ヲ以テ。筒ノ中ヨリ突入タリ。

民部心得タリト飛退。狼籍者アリト呼ハル。兼テ示シ備タルコトナレハ。家人等大勢走リ集リテ尋求ムルニ。其行方ヲ不知。筒ニ殘リタル槍ヲ見ルニ。廣間ニ掛置タル民部カ槍ナリケリ。門ヲ鎖(トサン)置タルニ。何處ヨリ忍ヒ入ケルニヤト。見ル者奇異ノ思ヲナス。民部モ大ニ驚キ。カヽル事ヲ見ニ付。假令遲速ハ有トテモ。終ニハ彼ニ討ルヘシト。心細クソ思ヒケルカ。ツラツラ思案スルニ。我當分ノ慾ニ迷ヒ。兄ヲ殺シ。主君ヲ弑シ。身ヲ全フセンコトハ。天道不免ノ所ナリ。一子アレハ家相續ノ事ハ氣遣ナシ。セメテハ件ノ罪ヲ滅セン爲ニ。出家セント思付テ。自ラ髮ヲ切テ。念佛三昧ヲ志シ。山形ヘハ病氣ト稱シ。暫ク引籠テ居タリケル。是ヨリ絶テ勘四郎モ來ラサリシカ。又或夜如何シテカ忍ヒ入ケン。民部カ閨マテ入込。灯ヲ搔立テ。民部ヲ見ルニ。何ノ間ニ剃髮シケン。法衣ノ姿トハ成ケルヨト。暫クタメラヒ思案シケルカ。民部カ枕元ニ立寄テ。熟睡シタル民部ヲ引起シテ。勘四郎申ケルハ。吾ヲハ貴

方見覺有ルマシ、我ハ里見勘四郎ナリ、最其方ハ伯父ナリ、定メテ忘却ハ有ルマシ、吾カ親ノ讐ナリ、依之日來心ヲ盡シ、毎度忍ヒ入ト雖トモ、時至ラスシテ空シク星霜ヲ歴タリ。今日今宵是マテ忍ヒ入コトヲ得タリ、スミヤカニ憤怒ヲ晴スヘケレトモ、今其方ヲ見レハ形ヲ替タリ、其法師首ヲ討テハ、我本意ヲ遂シタルトハ云レマシ、頓テ其方カ一命ヲハ助ケ申スナリ、今ハ安心致サルヘシトテ。打クツロキテ曰。此三四ケ月、山野ヲ家トシテ居タリシ故、以ノ外空腹ナリ、尤飢渇ナリ、湯漬飯ヲ申付ラレ候ヘト所望シケレハ、何ヨリ安キ事ナリトテ、段々ニ云付シメ、斯テ食ヲ出シケレハ、勘四郎心ノ儘ニ認メケル、其上ニ盞ヲ出シ、又依テ勘四郎・民部ト盃ノ上ニテ申ケルハ、拙々貴方ハ早クモ法躰遂ラレ。果報ノ人ナリ。長生百歳タルヘシト。賀シテ暇ヲ乞フ、歸ルニ臨ンテ、又勘四郎カ曰、我忍ヒ入時ハアラヌ路ヲ越來レリ。只今本道ヲ歸リナハ。定テ番ノ者共於所々咎カメ、安々通ルコト能ハサランヽ然レハ大儀ナカラ、民部入道吾ヲシテ大手ノ門マテ送リ給フヘシト云、入道安キ間ノ事ナリトテ、則案内シテ三ノ丸マテ送リ出シ、是ニテ互ニ行別レントシタル時、勘四郎又曰、最前モ申ス如ク、此上其方ヲ討ニ不及トモ、其代ニ其方ノ嫡子何某ヲ討テ、亡父ニ手向ン、是親子ハ一躰ナリ、今御邊妾ヲ替ル上ハ、現在伯父ナレハタトヘ以前ノ暴逆アリトモ、釋門ノ徒ヲ手ニ掛テハ、武士ノ本意ニ非ス、依テ其方ノ嫡子ヲ以テ之ニ代シメントテ、シカ々々ト申シ斷リテ出去リケル、於此民部大ニ肝ヲ冷シ、南無三方無、是非ニ次第哉ト溜息ヲツキ十方ニ暮ケレ共、流石勘四郎ニ威ヲ奪ハレ、郎等共ニ彼ヲ討留ル事モ不叶、逃足ニ聲ヲ上テ呼リケルハ、敵ノ里見勘四郎彼所ニアリ、引包ンテ討取レヤ者共ト、訇リ下知スル隙ニ。勘四郎ハ足ニ任セテ逐電シケリ。其後ハイヨ〳〵用心稠シクシテ、中々城内ノ出入ハ不及云、其外脇道ノ所々ニ至ルマテ。堅固ニ心ヲ付ケレハ、勘四郎モ亦工夫セシメ。總身

ニ漆ヲサシ、作リ癩トナリ、上野山ノ癩共ノ其中間ニ加リ、城下ノ町々家中ニ乞食シテ歩行セリ。此時四五寸廻リノ竹杖ノ中ニ刀ヲ差入テ隱シ持、不斷杖ニ突タリ、其竹杖ヲ人見咎テ、己カ杖ハ疑シキ竹カナト云ヘハ。人ノ被下候故。有ルニ任セテト答ヘケリ。斯テ折々民部カ嫡子ニ出會ケレトモ大勢ノ供廻ニテ、中々容易ニ可討方便ナカリケリ、既ニ上野山ノ城下ニアルコト前後三年、或時民部カ嫡子城下ノ馬場ニ於テ、馬ヲ責サセ見物スルコトアリ、勘四郎之ヲ聞及ヒ、是究竟時節到來ト喜ヒ、例ノ癩ノ姿ニテ其邊リヲサマヨヒケレハ、近習ノ者共立集リ、殿ノ御前ヘムサムサシキ乞食ノ參リ候者哉トテ、事々シク呵リ罵リケレハ猶彷徨タル躰ニテ、主人ノ前ヘ逃テ行ケルカ、件ノ竹杖ヨリ透サス刀ヲ取出シ、民部カ嫡子何某ヲ、大ケサニ只一打ニ討放シ。逸足ヲ出シ、松山ノ中ヘ逃入ケリ、家來共大ニ騷キ、爰彼所ト捜シ、尋ヌル内ニ日ハ暮ヌ、夜ニ入ケレハ、松原廣々ト續キ、行道知レサリケレハ、山ヲ取卷テ捜シケレトモ、勘四郎ハ早疾ニ會津領ヘ立退キ、夫ヨリ上方ヘ落行、紀州ヘソ參リケル、此敵討ノ義其隱レナカリシカハ、紀州大納言頼宣卿ノ耳ニ達シ、早速渠ヲ召出サレ、知行千五百石ヲ與ヘラレ、旗大將ヲ命セラル、其後勘四郎死去セシメ、其子又勘四郎ト號シテ、此以後紀州ノ臣トナリケルトソ、又里見入道ハ、後年叛逆ノ事有ニ依テ、嗣子權兵衛ト共ニ、慶長十九年正月、最上家親家人ニ命シテ、父子トモニ討シメ、民部カ子孫、斷滅ニ及ヒケルコソ天罰ナレ。

傳ニ曰、右勘四郎カ弟ニ、里見勘三郎ト云者アリ、是里見内藏助カ妾腹ノ子ナリ、内藏助横死ノキサミ、件ノ妾懷胎ニテ親里ヘ歸リ、其後生レタル子ナリ、シハ／＼里ニ養育シテ成長シ、兄勘四郎カ事、世ニ隱レアラサレハ、兄ヲ慕ヒ紀州ヘ來リ。勘四郎カ所ニ同居ス、彼モ亦紀州ヘ召出サレ勤仕ス、後年如何ナル事ニヤ、傍輩ト喧嘩シテ其相手ヲ切殺シテ紀州ヲ立退、奧州ヘ下リ、仙臺ニ住居ス。故有テ大守忠

宗ヘ召出サレ勤仕ノ後。段々ニ立身シテ。知行六百四十石餘。之ヲ與ヘラル。則里見十左衛門重時ト改名シテ其後忠宗ノ嫡男綱宗ヘ仕ヘテ小姓頭ノ役ヲ勤メ。度々忠功ヲ励シ。兄勘四郎ニモ聊カ劣ルマシキ武邊雄才ノ士ナリ。伊達兵部大輔宗勝惡心。仙臺騒動ノ節マテ勤仕シテ甚タ忠節不怠シテ病死ス。

私ニ云。此騒動ノ事ハ。續篇ニ委シク出之。

伊達秘鑑巻之十一終

伊達秘鑑巻之十二

東奥仙府　無々軒　編集

相馬義胤出兵附輝宗出陣並梁川八幡之事

奥州小高ノ城主相馬長門守義胤ハ。祖父讃岐守顯胤。伊達稙宗ノ聟ニテ。子息彈正少弼盛胤ハ。輝宗ノ從弟ナリ。故ニ伊達ノ旗下ニ屬シテ。互ニ親交ノ結ヒアリケル。然ルニ盛胤ノ子息義胤ハ。先年伊達内亂ノ刻ヨリ邪心ヲ企伊達ノ領地ヲ掠ント欲シ。様々計策ヲ廻ラシ端々ヲ手ニ入。猶モ時節ヲ窺ハレケル處ニ當夏旗下小齋右衛門。伊達ヘ附屬スルニ依テ。義胤是ヲ討タントテ兵ヲ出シ。輝宗モ出馬有テ。既ニ新地•駒ケ嶺ニ於テ。對陣ニ及ヒケルニ。折節大雨日ヲ重ネ。洪水戰路ヲ妨ケシカハ。兩陣軍兵ヲ班メテ。暫時兵機ヲ練ルトコロニ。小齋カ相馬ヲ叛クコト。義胤憤リ止ムコトナク。天正九年九月再ヒ軍伍ヲ卒シ。伊達郡ヘ亂入シ。弱城ノ輩ヲ攻落シ。猶モ近郷ヲ攻取ントノ結構ナリ。

依之伊達梁川ノ城主伊達右衞門大夫宗清入道鐵齋（晴宗ノ弟）同郡川股ノ城主櫻田右兵衞弘國方ヨリ。十月廿九日早馬ヲ以テ米澤ニ注進ス。輝宗之ヲ聞玉ヒ、義胤頃年親族ノ姻ヲ忘レ、逆意ヲ起シ、我代々扶佐ノ地ヘ亂入シ、領民ヲ苦シムルコト、無道ノ所爲ナリ。速カニ發向アルヘシトテ。同十一月二日。伊達ノ三傑伊達兵部少輔實元（晴宗弟）、亘理兵庫元宗。（同上）高森上野介入道政景（輝宗ノ弟）並ニ小梁川泥蟠盛宗・桑折點了齋・原田休雪長成・茂庭佐月氏元・片倉備中景光入道休意・守屋守伯景久等ヲ集メテ軍ノ評議アリケルニ。亘理兵庫元宗申シケルハ。義胤ノ不義惡ムヘキノ至リナレハ。早速御退治然ルヘシ。去ナカラ今寒風ノ砌ニテ。難所雪積リ路埋レ。馬蹄ノ往來叶ヒ難ク候間。一先ツ嚴寒ヲ凌カレ軍ヲ延テ明春ニ至リ出馬然ルヘシ。其間ニ兵ヲ練リ粮ヲ調ヘ、雪消ン比ニ發向有ハ、御勝利アルヘシト申シケレハ、列座ノ諸將皆此義ニ一決ス。輝宗ニモ同意有テ、伊達郡ノ諸城ヘ其趣キヲ觸ラル。其年ノ出陣ハ止ラレ、境ヲ固ク守ラセラル。既ニ其年暮レテ。翌レハ天正十年春正月元日。伊達代々ノ嘉例ノ如ク。米澤西山ノ城ニ於テ規式アリ。三日山野始メ。四日嚴密ノ二宗於本丸武運長久ノ祈禱　七種（ナナクサ）ニハ如先例ノ連歌ノ會アリ。其面々云。

セリ合ニ若菜摘トルアラ田カナ　輝　宗
今日サキカケトス、ム梅カ枝　龍寶寺法印

同十一日政務始メ。十四日謠初メ。是等ノ嘉儀コト終リケレハ同廿一日伊達實元ニ命シテ。軍勢ノ差例ヲ改メラル則ハ乙女玄與是ヲ記錄ス先ツ一門ニハ。伊達兵部少輔實元・同藤五郎成實・亘理兵庫元宗・同美濃重宗・高森上野政景・同左近將監宗俊・伊達鐵齋宗清・國分彥九郎盛重、　門楯ノ輩ニハ。小梁川泥蟠盛宗　同中務宗景・白石大和義直・同若狹宗實　桑折點了不休齋同治部定重　大條尾張宗直・同兵庫宗總・泉田安藝重元同彌平次重久・田手式部義兼・原田休雪長成・同左馬介宗成・石母田左衞門景頼・濱田伊豆宗景・富塚近江仲綱

遠藤山城基信・屋代勘解由兵衛景頼・櫻田右兵衛弘國・同玄蕃弘重・同宮内弘景・黒木肥前宗久・伊東肥前重信一家一族ノ面々ニハ、鮎貝越中・柴田兵庫・藤田右衛門同但馬・鹽森兵庫・同木工・村田刑部・新田左衛門、石川右衛門・沼部越中・大町參河・貝田藤二郎・西大立目民部・今村出雲・下飯坂主計・宮内因幡・小原伊豫・同民部同信濃・近習ノ輩ニハ、茂庭佐月・同石見・守屋守伯・小原縫殿助・片倉意休・同小十郎、山岡志摩・高野壹岐・中村刑部・中島伊勢・山岸源六郎・長谷美作・永江月鑑・柴生出羽（後號[illegible]山）・小山田筑前・鈴木日向・内馬場右衛門・飯田九郎三郎・同紀伊・中島遠江・同左衛門・牧野安藝・福田玄蕃・小田邊薩摩・五十嵐蘆舟・同信濃・武山出雲・大窪玄蕃・支倉東三郎・後藤孫兵衛・古内内匠・湯目民部・宮川一毛・同丹後・七宮伯耆・湯目右近・嶺式部・佐藤駿河・同右兵衛・大和田出雲・成田左馬・本宮伊勢・湯山彦九郎・馬場左近・滑澤丹波・金森隱岐・大宮隼人・鹿又大藏・吉田越後・松木伊織・上野善次郎・桑島十兵衛・堀越

伊賀・蜂谷九郎四郎・進藤傳内・高野肥前・石田近江・齋藤式部・安部對馬・同左内・同太總左衛門・川口外記・檜木彌覺等ヲ始トシテ、士卒雜兵都合三萬二千七百六十餘人ト相記ス。輝宗一々點檢アツテ、則軍奉行ハ亘理兵庫元宗・高森上野政景。先陣國分彦九郎盛重。二陣伊達兵部實元。三陣白石若狹宗實。後陣ハ小梁川中務盛宗入道泥蟠・桑折播磨宗長入道不休齋ト定リケル。既ニ正月二月モ過ヌレハ、四方ノ霞長閑ニ、嶺ノ白雪解渡リ、谷ノ凍流ニ結合レハ、漸ク道路開ケテ、人馬ノ往來時ヲ得タリ。是ニ依テ輝宗・政宗相共ニ一萬五千餘ノ軍兵ヲ卒シ、天正十（壬午）年二月十一日、羽州長井ノ庄米澤ヲ出馬有テ、其夜ハ板屋峠ニ著陣。當所ハ雪嶺ニサシハサマレ、勝レテ峠高ケレハ、殘雪未タ淺カラス、餘寒猶退カス。依之諸軍勢ニ酒ヲ施シ與ヘ、其寒冷ヲ凌シメラル。明ル十二日、信夫郡大森ニ着陣。猶モ軍勢ヲ集メラル。伊達・刈田・柴田・伊具・亘理・名取・宮城・國分・深谷・松山ノ諸士、催促ニ從ヒ、思々ニ人數

ヲ率ヒテ馳集リケル程ニ、野ニ滿、山ニ蔓リ陣場ヲ爭フ程ニ見ヘニケリ。同十九日。政宗梁川ノ八幡宮ニ參詣アル。今年十五歲。去年參詣アリケレトモ事イソカハシキニ依テ。此度ハ所々委ク見分アルヘキノ由ナリ。若大將ノ事ナレハ供奉ノ綺羅美ヲ盡シ行伍一入嚴重ニ見ヘタリ。政宗ノ曰、神ヲ祭ルコト在スカ如クナレハ、齋明淸服タルヘシト命セラレ。各身ヲ淸正ニシテ供奉シタリ。敬拜畢テ梁川ニ滯留アリ、四月朔日。再ヒ參詣有テ神事ノ營アリ。先ツ神前ニ於テ。蘋蘩薀藻ノ禮、神馬七匹、明妙照妙和妙ノ幣帛。甕之閑意知金銀種々ノ捧物限リナク見ヘタリ。抑此八幡ト申スハ御先祖宗村入道相州鎌倉鶴ヶ岡八幡宮ヲ勸請アリテ常陸國中村ニ社ヲ立、龜ヶ岡ト號シ。是鶴ヶ岡ニ對シテ號ル也 代々崇敬ノ神社ナリ、文治五年、泰衡追討ノ軍功ニ依テ、右幕下ヨリ伊達ヲ賜リ、常州ヨリ伊達ヘ移ラレシ時。則宮居ヲ梁川ヘ遷サレ。入道宗村ノ嫡子爲宗ノ建立ナリ、旅館ハ則梁川ノ城主伊達宗淸入道鐵齋其子白石若狹、宗實」或ハ宗元 新タニ旅亭ヲシツラヘ。珍物佳肴饗應不斜。其外飯野・大沼・藤田・貝田、桑折・瀬上・保土原・秋山ノ諸將。各美物珍器ヲ進上シテ、政宗ヘ參謁ス。已ニ三日逗留有テ、伊達鐵齋ヘ黃金數兩、若狹宗實ニ秋廣ノ脇差ヲ賜ル、同四日大森ヘ皈城。此節立花外記ト云者シハラク在所ヘ暇賜リ度ノ旨願ケレハ。政宗何ノ挨拶モナク。「春霞立ヲ見捨テ行雁ハ花ナキ里ニ住ヤ習ヘル」ト、古歌ヲ吟セラレケレハ。立花外記愕然トシテ退出シ。在所ヘモ不得歸。蟄居シテ居タリケル。政宗之ヲ聞玉ヒ、外記氣ツカヘ當然ナリ、然リト雖トモ憚ル處ニ非ス、早々罷歸リ。今月廿五日以後參勤スヘシト免サレケル。外記其志ヲ感涙シテ是ヲ謝シ。急キ在所ヘ赴キケリ 扨又輝宗ニハ。小齋右衛門信實ヲ召出シ、其方當手ノ案内者ナリ。今度相馬表ヘノ働キ小手口ヨリ責寄ンカ。又金山口可然カ存念遠慮ナク達スヘシト有ケレハ。右衛門則申シケルハ。義胤先度伊具郡ヘ亂入致シ候故。定メテ伊達勢ハ此口ヨリ

向ツハシト思慮ヲ廻ラシ宗徒ノ功列ノ武士ハ皆金津・新地・丸森等ノ城ニ籠置候然ハ小手口ノ方ヨリ發向アルヘキノ由。風說セサセ候ハヽ。相馬ハ不勢ト云。金津新地ノ兵共急ニ小手口ヘ馳登ルヘシ。其時軍勢ヲ引違ヒ。金津表ヘ指向ラレ候ハヽ。不意ノ勝利疑アルヘカラスト存候 金津表近邊御案內ノ儀ハ某モトヨリ詳ナレハ隨分便宜ノ計略可仕候 某居所逢隈茂深トシテ甚見苦シク候ヘトモ。暫ク御本陣ニ定メラレ御馬ヲ立ラレ候ヘハ此所彼所ヘノ働御勝手ヨロシク候ト。遠慮ナク申シケレハ。輝宗則納得アッテ元宗・政景ニ其旨ヲ問ハレケルニ、兩人答テ小齋カ言能ク圖ニアタリテ聞ヘ候 軍法ハ不意ヲ擊ヲ尊フトアレハ可然。去ナカラ二本松右京大夫義繼鹽松ノ大內備前定綱此兩將ニ油斷ナラサレハ押ノ人數ヲ被指置可然ト申シケレハ。輝宗其ト同意有テ 則二本松ノ押ヘニハ。八丁目ノ城主伊達兵部實元。是ハ此度二陣ノ備ナレ共。二本松口ノ城主ナレハ實元ヲ引分。其子藤五郎成實若年ナレ共二陣ニ代ラシメ。且實元附屬ノ士ニハ 中島左衛門・長谷美作・桑折治部・田手式部・新田左衛門・金森隱岐・山岡志摩・大窪玄蕃・宮內因幡・増田主殿・高野壹岐。下飯坂右衛門・五十嵐信濃 遠藤出羽・伊東肥前ヲ始メトシテ。一千五百人ヲ差添ラル 又鹽松ノ押ヘニハ。川股ノ城主櫻田右兵衛弘國ヲ以テ軍監トシテ。藤田右兵衛・遠藤大和・屋代勘解由・屋代越中・鈴木日向・大和田出雲・古內內匠・成田左馬後藤彌兵衛・鎌田玄蕃・大塚木工・山岸源六郎・小原縫殿。佐藤和泉・大友讃岐・堀江雅樂允・新野大膳・本鄉出雲・中島半七ヲ先トシ 究竟ノ兵士一千五百人ヲ附屬ス。斯テ四月廿二日相馬陣ト觸渡サレケレハ。刈田・柴田・伊達・信夫・長井ノ將士四月十八日ヨリ追々ニ信夫ノ大森ヘ馳集リ諸軍山野ニ充滿タリ。先ツ小手口相馬領百目木ノ城ヘハ 高森上野政景ヲ軍將ニテ三千餘ノ兵卒ヲ引テ取懸シカハ。案ノ如ク金津・新地ノ軍勢聞之テ急キ百目木ノ城ヘ馳加ル。政景ハ敵

ヲ欺ク計ナレハ只遠攻ニシテ絕ス鐵砲ヲ打懸、靜ニ會釋シテ日數ヲ送リケル。輝宗・政宗ニハ、一萬餘ノ軍兵ヲ卒シ同廿二日大森ヲ進發。伊具郡角田ノ城ヘ著陣アリ。諸軍勇進ンテ近日合戰トコソ聞ヘケル。

金津表軍

去程ニ輝宗・政宗諸大將ニ下知有テ四月廿六日、相馬領分伊具郡金津ノ城ヘ攻寄ル。此城ニハ相馬ノ家臣朝比奈十兵衛・大崎隼人・靑木肥前大將ニテ、一千餘騎籠置タリ、斯ク伊達長井ノ軍勢。稻麻竹葦ノ如ク取圍ミ鯨波天ニ響キ。鐵砲ノ音地ヲ動シ短兵急ニ揉落サント。諸手一同ニ取詰。喚キ叫ンテ攻立ル。城兵小勢トイヘトモ。朝比奈十兵衛ハ名ヲ得タル者ナレハ。持口々々ヲ馳メクリ、自身ニ下知シテ矢砲ヲ放シ。諸卒ヲ勵シテ防戰シケレハ、輙ク可落トモ見ヘス。寄手モ少シ攻口ヲクツロケテ控ヘタリ。サレトモ此城要害堅固ナラス。殊ニ伊達勢小手口ヨリ攻入トノミ沙汰シケルユヘ。軍兵ヲ引分。百目木ノ加勢ニ遣シ城兵一千餘騎ニ不過。寄手ニ比スヘクモナケレハ。五歩十歩ノ間ニ攻落サレンコト。誠ニ瞬目ノ間ニ有ト見ヘニケリ。三將モ頗ル城兵ヲ勵シテ。防キ戰フト雖トモ。寄手目ニ餘ル程ナレハ。終ニ勇氣ヲ失ヒ。斯テハ此城持カタシ。加勢ノ救ヲ求メント、急キ小濱ヘ注進シケレハ、義胤大ニ驚キ。サテハ小手口ノ寄手ハ、謀計ナリケルヨ。百目木ヘハ長井勢發向シ。金津表ヘハ伊達勢取詰タリ此上ニ襲ヒ來ル勢アラハ、相馬ハ微勢ナリ。引分テ後詰スヘキ術ナシ。如何セント評定アリケルニ靑木主膳ヲ始メ諸將皆申シケルハ。味方モトヨリ小勢ニテ、其上諸城ヘ手分シテ籠メ置タレハ。本城猶無勢ナレハ。是ヨリ後詰ヲ差向クヘキ術ナシ。サアレハトテ旦夕ノ內ニ攻落サレンハ金津ナリ。是非後詰ナクテハ叶フヘカラス。小手口ハ僞勢ノ兵ニテ。急ニ攻ルコトハ有マシ。然レハ百目木ノ城ヘ加勢ニ來リシ。二本松・鹽松ノ兩勢ヲ以テ後詰ニ差向テ可然ト評議一決シ。則二本松右京大夫義繼ノ軍兵一千餘騎。鹽松

大内備前定綱カ加勢五百餘騎、兩勢指加ヘテ一千五百餘騎。百目木ノ加勢ヲ轉シテ。先ツ金津長ヘ後詰セシム。去年政宗出馬ノ節ハ、二本松・鹽松モ伊達ヘ屬シケルカ、其後相馬ノ頼ニ應シ、今度逆亂ヘ加勢シタリ。伊達長井ノ勢ハ。金津後詰ノ勢來ルト聞、半途ニ待受テ討破ルヘシト。國分盛重カ手勢ニ。小齋右衛門等其外ノ士卒引分レテ。二本松勢ノ馳來ル道筋ヲ指塞ク。鬨ヲ作テ突テカヽル、二本松勢モ備ヲ立テ。相カヽリニ斬合セテ矢砲ヲ放ツ間モナク、兩方入亂レテ攻戰フ。小齋右衛門信實ハ、二本松ノ先手ヲ追散シ、首取テ指上タリ。二陣ノ勢二百餘リ。透間モナク打テ懸ル、小齋カ手勢相支テ、火出ル程挑ミ戰フ、伊達藤五郎成實十一歳幼年ナレトモ勇氣ヲ發シ、眞先ニ進ケハ、白石若狹宗實・桑折伊達國淸・伊東肥前重信カ軍兵共。小齋討スナ續ヤトテ。一度ニ突テカヽリ、兩陣手痛ク攻戰フ。伊達方ニモ原田大藏・村岡左衛門・飯田九郎三郎立花外記・豬口七兵衛ヲ始メ討死ス、日既ニ夕陽ニ傾ケハ、互ニ勝負牛角ニシテ相引ニ引取ケル。討死ノ中ニモ。立花外記ハ、先頃於大森與風暇ノ願ヲ申出。政宗一首ノ古歌ヲ以テ返答アリシヲ面目ナク思ケン。兼テ討死ト思ヒ定ムト語リケルカ、果シテ義ヲ守リ。討死シケルコソ哀レナリ。城中ニハ後詰ノ來ルニ力ヲ得、此時ヲ遁サス、指挾ンテ討ントテ、城中ヨリ突テ出引上ル伊達勢ヲ喰留ントス。伊達美濃重宗・小梁川泥蟠盛宗・桑折點了宗長之ヲ見。スハヤ此城落城ノ時至レリ、横槍ヲ入レテ追崩シ、付入ニシテ城ヲ追落フ、城兵ノ横合ヨリ討テカヽレハ、國分・白石等ノ軍兵、轡ヲ返シテ支戰フ、城兵左右ニ敵ヲ受テ、挑ミ戰フコト不能、城中ヘ引入ントスル處ヲ、重宗盛宗急ニ下知シテ兵ヲ馳テ城中ヘ押入タリ、此時日既ニ暮ケレハ。城中敵味方ノ別チヲ不知。其隙ニ役所々々ノ詰リ／＼ヘ火ヲ放チケレハ。折節北風烈シク。城中餘炎天ニノホリ、恰モ白晝ニコトナラス。伊達勢イヨ々々力ヲ得早城ハ乘取タルソ、惣軍進ンテ攻討ト。聲々ニ喚キ叫

ヒ、力ヲフルヒ攻立ケレハ。城兵火ノ手ニ氣ヲ奪ハレ四角八方ヘ散亂ス。二本松ノ加勢モ。城兵打テ出タルヲ見テ。備ヲ戻シテハサミ討ントシケルカ。寄手既ニ城中ヘ入タリト見テ。少シタメラフ處ニ。猛火城ニ燃上レハ。城ハ早落タルソ。急ニ備ヲタ、メト云トコロヘ。散亂シタル城兵。加勢ノ軍兵ヘ落合ント。我先ニト亂レ來ルヲ二本松勢ハ暗サハ暗シ。敵味方ノ境モ不知。伊達勢ノ追來ルト心得ケレハ。一支モ支ヘス。右往左往ニ敗走ス。伊達長井ノ軍勢勇ミ競ヒテ。追討ニ討取首數級ナリ。相馬方ノ三將朝比奈十兵衛・青木肥前大崎隼人モ。亂軍ノ中ニ討レケレハ。殘兵悉ク退散ス。城ニハ猛炎盛ンニ家々ニ吹付。一天ヲ焦シケルカ。曉ニ及ンテ火モ靜リ。程ナク短夜モ明渡レハ。暫時ノ内ニ燒野トコソハ成ニケリ。輝宗・政宗兩將共ニ。則落城ノ跡ヲ巡見アツテ。其日ニ伊具小齋領主小齋右衛門尉信實カ居舘ヘ本陣ヲ移サレ。此度諸軍日夜ノ粉骨思ヒ計タリ。何レモ忠義猛勇ヲ勵シ。力戰ノ功ヲ以テ初度ノ軍ニ。忽チ勝利ヲ得ルコト本望ニ堪ヘストアテ。其勳功ヲ賞シ。陣屋毎ニ一瓶ヲ送リ。各軍勢ヲ慰メラル。諸軍皆其志ノ忝ナキコトヲ談賞シケリ。同五月三日ノ朝。亘理兵庫元宗伺候シテ申シケルハ。此度金津表一戰ノ御勝利。是偏ニ味方ノ鋭氣至レルナリ。此勢ニ乘シテ丸森ヲ攻給ハ、。利運疑ヒアルヘカラス。急キ兵ヲ差向ラレ可。然ト申シケレハ。輝宗モトヨリ其慮リ符節ヲ合セケレハ。則同意有テ丸森ノ城責ニ極リケル。

丸森城攻附小野寺若狹退ク相馬ナ事

五月六日。丸森ノ城責ニ一決シケレハ。伊達藤五郎成實・白石若狹宗實・原田左馬助宗長・片倉小十郎景綱。數千ノ兵ヲ卒シテ丸森ヘ取懸タリ。城主ハ大河内外記トテ。相馬ノ旗下ニ於テハ。猛勇ノ大將ナレハ。四方ノ持口ヲ堅固ニシテ。弓鐵砲ノ手配リ透間モナク。防戰ノ構嚴重ナリ。伊達雲霞ノ如ク。旗旌ヲナヒカシ。責具ヲ連ネ。段々ニ攻寄ルヲ。大河内遙カニ臨ミ見テ。敵

ハ大軍ト見ヘタリ、此城モトヨリ闇狹ケレハ、取圍マレテハ悪カリナン、取寄ルト等シク城外ヘ打テ出、此方ヨリ先手ヲ取テ追崩スヘシト下知ヲナシ、物頭小濱忠兵衞・長坂主計以下ノ兵士備ヲ定メ、大河内モ自ラ手勢ヲ引テ城門ニ付テ待懸タリ。寄手ノ先手伊達藤五郎・白石若狹・原田左馬助ヲ始、桑折・片倉カ手ノ者數百人先手ヘ進ンテ既ニ鐵砲放チ、仕寄ヲ付ントスル處ヲ、城兵時分ハヨシト。一同ニ門ヲ開キ、原田・白石カ陣ハ突テカヽル、寄手モ勢ヲ左右ヘ開キ、城兵ハ小勢ナルソ、中ニ包ンテ討取レトテ、鶴翼ニ別レテ攻戰フ、大河内ハ名ニ聞シ勇猛ノ者ナレハ、眞先ニ進ンテ士卒ヲ下知シ、自ラ大薙刀ヲ振テ左右ニ當リ、前後ニ對ス、大將如此働ケハ、從兵諸卒命ヲ惜マス、散々ニ力戰ス、依之原田・白石カ備マタリ立ラレ、隊伍シトロニ見ヘケレハ、伊達藤五郎手勢桑折片倉勢入替リ、サシ挾ンテ挑戰ス、時ニ本陣ノ下知トシテ、城兵打テ出タルコソ幸ナレ、勢ヲ入替、新手ヲ以テ急ニ攻討、直サマ城ヲ攻落スヘシト下知セラレケレハ、國分彥九郎ヲ始メ先陣二陣ニ入替リ、新手ノ諸軍一同ニ押出シ、城兵ヲ取圍ンテ火出ル程ニ揉ミ立タリ、城兵モトヨリ小勢ナレハ、大軍ニ揉ミ立ラレ、手負討死數ヲ不知、伊達勢ニモ中目丹後・三澤權六・薄木傳內・俣野十兵衞・中村與市・大森伊豆・馬場外記・笛野右馬允ヲ始メ、宗徒ノ軍士數輩討死ス、サレトモ寄手猛勢ナレハ、新手ヲ入替、喚キ叫ンテ攻討コト急速ナレハ、息ツキ合ス隙ナカリケリ、城兵前後ヲ包マレテ、今ハ萬死一生ト見ヘタリ、大將大河內外記、四方ヲ顧ミテ遁レ難クヤ思ヒケン、從兵淺野甚六ニ向テ、汝我側ヲ離ルヘカラス、我打死セハ、我首必ス敵ヘ渡サス隱スヘシト云付、大長刀ヲ馬ノ平首ニ持セ、近付敵ヲ弓手ニ廻シ、一刀二殺ノ術ヲ盡シ、十文字ニ渡テ薙廻レハ寄手多ク討レテ、面ニ進寄ル者ナシ、サレトモ數刻ノ力戰ニ全身ハ勞レタリ、殊ニ數ケ所ノ疵ヲ蒙ムリケレハ、最早戰フコト不能、馬ノ上ヨリ長刀ヲ杖突テ、

少シ息ヲ休ムル處ニ、片倉カ手ノ者、槍ヲ以テ突タルカ長刀ノ柄ヲハネ上ケテ左ノ脇壺ヲ突ク。大河内馬ヨリ落サマニ長刀ヲ伸テ拂ヒケレハ片倉カ從兵、兩膝ヲ薙レテ地ニ伏ス淺野甚六走リ寄テ。疵ハ如何ニト問フ。大河内遁レ難シト答フ。淺野則首ヲ切テ。傍ヘノ小溝ヘ押隱ントスル處ヘ片倉小十郎景綱。自ラ槍ヲ提ケ馳來。馬上ヨリ淺野カ首ノ骨ヲ突貫ク。甚六痛手ナレハ則死ニ及フ、景綱則大河内カ首ト。淺野カ首ト槍ノ穗先ニ貫ヌキテ指上タリ、斯大將討レケレハ、殘兵戰フニ力ヲ失ヒ、八方ヘ敗レテ散亂ス。伊達勢イヨ々力ヲ得追討シテ首數級ヲ得タリ。本陣ヨリ鐘ヲ鳴シケレハ。諸軍之ヲ相圖ニ備ヲマトメ其日ノ城責ハナク各遥カニ野陣ヲ張テ控ケリ。爰ニ相馬譜代ノ家臣ニ。小野寺若狹ト云者アリ、然ルニ金津・丸森ノ軍ノ次第ヲ聞テ。義胤ヘ諫言シケルハ、此間金津合戰ニ味方敗北則落城ニ及ヒ、今又丸森ノ一戰ニ、城兵利ヲ失ヒ大將ト賴ム處ノ大河内モ討レタリ、然ル上ハ丸森落城ハ旦夕ノ内ニアリ。ツラ々々伊達勢ノ鋒先ヲ考候ニ、是アナカチニ士卒ノ强猛、大將ノ勇健ノミニ非ス、輝宗善ク人ノ心ヲ兼賞罰ノ時ヲ失ハス、子息政宗若輩ナレトモ、智勇仁愛兼備ノ性質ニシテ、父子トモニ善ク人ノ思付テ、親ミ慕フ所ナリ、此故ニ上下爲メニ力ヲ盡シテ死ヲ忘ル、依テ當ル所皆如此。今此取合モ本トハ相馬ノ不義ヨリ起ル所ナリ當家ト伊達ハ正ク親族ノ中ニテ候ニ、伊達ノ内亂ヲ幸ニ。先年伊達領ノ端々ヲ掠メラレ、夫ヨリシテ不和ノ端トナリ、今又小齋カ事ニ付テ、此方ヨリ事ヲ起シ、取合ヲ求メラル。是重々ノ不義ナリ。伊達ハ大身。相馬ハ小身。伊達ハ勇功ノ將士モ亦多ク、相馬武功ノ士卒モ少ナシ、伊達ハ譜代恩顧ノ國侍、此方ハ小身ナレハ、重恩譜代ノ士モ競フヘカラス、伊達ハ皆領國ノ士卒ナリ、此方ハ諸方ノ加勢ノミ多シ。此四ツノ物皆伊達ニ比スヘカラス。小ハ大ニ敵セス寡ハ衆ニ對シカタシ是兵家ノ常ナリ。モトヨリ他人ノ御中ニモ無之候ヘハ、此

方ヨリ手ヲ下サヽルレハ、輝宗争テカ疎意アルヘケン早ク和睦ヲ求メ玉ハヽ。親族ノ情全キノミナラス。偏ニ相馬ノ御家長久ノ基ト存候、一旦ノ氣勢ヲ宥メラレ。急キ和平ノ御工夫可然時ナリト理ヲ盡シテ諫言ス義胤憤然トシテ曰小ヲ以テ大ニ勝大ヲ以テ小ニ負ル是古今軍ノ習ナリ。今度味方ノ枝城モ敗北ニ及ヒシトテ、大將タルモノ何ソ臆スル事有ンヤ、又親族ト云時ノ盛衰ヲ謀ルハ。是戰國ノ常ナリ、何ソ我一人ノ不義トセンヤ所詮汝カ臆病ニイサナハレテ諸軍ノ後レヲ引出スコト、奇怪ノ至極ナリ。一度敵ニ對シテハ。亡國死命ハモトヨリ期スル處ナリ。汝ハ何地ヘモ逃行。命ヲ全フシテ相馬ノ家ノ滅亡スルヲ見ヨト眼色ヲ變シテ怒リ罵ラレケレハ。小野寺再諫ノ言ヲ斷。紅涙ヲ流シテ退キケルカ、私宅ヘ歸テ歎息シ。嗚呼忠言耳ニ逆フ今ニ初ヽヌ事ナカラ、君臣ノ禮ヲ破ラレシ。今日ノ一言コソ恨シケレ。サレトモ惡ヲ不正、暴ヲ不諫ハ忠臣ニ非ス、一旦ノ恨ヲ懷テ何ソ再諫ニ及ハサランヤトテ。此度ハ一通ノ諫書ニ認メテ。取次ヲ以テ達之義胤大ニ怒リ、不肖ノ臣我カ非ヲ數ルヤ。急キ誅戮ヲ加ヘント議セラル。小野寺之ヲ聞テ心魂ヲ苦シメ、分別シケルカ、義ニ依テコソ死ヲハ施サメ、軍法不知ノ大將ニ隨ヒ。犬死センヨリハ立退ント思案ヲ極メ。一首ノ狂歌ヲ書置ケル。『ヨシタネヲマカハ臆病出マシキ。我臆病ハ君カ臆病』夜更城中ヲ忍ヒ出。伊達ノ陣所ヘ馳入。泉田安藝重光ヲ賴ミ。某ハ相馬義胤カ侍小野寺若狹ト申ス者ナリ。去ル子細有テ主ノ勘氣ヲ蒙リ既ニ殺害ニ及ントス、犬死センコト無念ニ存御陣所ヘ罷越候身不肖ニ候ヘトモ御味方ニ屬シ忠義ヲ盡シ相勤ムヘシ、此儀宜ク御推擧可給ト申シケレハ。泉田則小野寺カ是非ノ本末ヲ委細ニ之ヲ聞屆輝宗ヘ達之。輝宗ノ曰、義胤實ニ愚將ナリ是程ノ急難ヲ前ニ置ナカラ、忠諫ヲ不容ノミナラス。一旦ノ怒ヲ募リ。士卒ヲ勘當スルコト利ヲ失フヘキ先兆ナリ於味方ハ一勝ノ佐ナリトテ

則若狹ヲ召出シ。有ニ對面ニテ念頃ニ應對アリ。太刀物具ヲ與ヘラル若狹面目餘リ、拜謝シテ退出シケリ。則泉田カ手ニ附屬セシム。斯テ其夜明渡レハ兼テ觸タルコトナレハ。今日城ヲ可ニ攻落ニトテ。諸軍一同ニ進ンテ攻圍ム。泉田ハ則小野寺ヲ先手ノ案内者トシテ。ヒタ々々ト取詰塀際ニ付ク、城兵矢玉ヲ飛シ防キ戰フト雖トモ宗ト頼ミシ大河内ハ討死ス。首長トスル大將ナケレハ、虎口ノ堅メマチ々々ニテ、守禦ノ設ナカリシカハ、寄手不ㇾ殘塀ニ付テ此方彼所ヨリ乘入、城内ヘ旗ヲ押立レハ。スハヤ城取タルソ。續ケヤト云程コソアレ。四方ヨリ込入ケレハ城中防クヘキ術ヲ失ヒ。四角八面ニ散亂。討ルヽ者又若干ナリ、或ハ降テ助カルモ又多カリケリ。小野寺若狹申シケルハ。是ハ大河内カ討死ニ氣ヲ失ヒ、城中ニ殘止ル主將ノ旗、密カニ城ヲ出タルナラン。大河内カ外ニモ宗徒ノ者籠置候カ。此城ニテハトテモ功ナリ難ク存シ。金山ノ城ヘ落合。一所ニ成テ楯籠リ候ニ疑ナク候ト云ケレハ。則本陣ニ告テ諸勢城内ニ屯シタリ。此城十日餘リ持コタヘテ五月十八日ニ落城シケリ。

金山對陣附告ニ來ル織田信長滅亡竝落城

去程ニ金津・丸森ノ兩城日ヲ經スシテ落城シケレハ。輝宗大喜悅有テ。近々金山ノ城ヲモ攻ラルヘシトテ。小齋ノ城ニ逗留セラレ軍用ノ設ケ怠リナシ。則軍奉行ハ高森上野介政景ナリ。先陣亘理美濃重宗・二陣伊達藤五郎成實・侍大將ニハ小梁川泥蟠盛宗・桑折點了宗長・其外宗徒ノ主將ニ。白石若狹宗實。後宗弘ト改 原田左馬介宗長・石母田左衛門景頼・濱田伊豆宗景・富塚近江仲綱・片倉小十郎景綱・大條尾張宗直・泉田安藝重光茂庭石見綱元・伊東肥前重信本陣徒兵ノ輩ニハ。中島左衛門・新田式部・牧野安藝・小田邊權右衛門。黑木肥前・遠藤大炊・小山田筑前・山岸源六郎・大立日隼人・飯田玄蕃・村田式部・鹽森兵庫・山崎玄蕃・中村刑部・宮内因幡・飯坂右近・瀨上中務・秋保半四郎・西大立目式部ヲ先トシテ、諸手ノ雜兵トモニ都合一萬二千餘人。六

月三日、金山ノ城ヘ發向ト聞ヘケル。相馬長門守義胤ハ先日金津、丸森ノ後詰ヲ遣ハス。其頃ハ小濱ノ城ニ出張セラレシカ、家臣小野寺若狹、相馬ヲ立退、伊達ヘ降ル由ヲ聞サテハ此長筋城中ノ案内ハ、皆伊達方ヘ知レタリ。金山ヘ後詰スルトモ其功ハ立難シ。又小濱ニ本陣ヲ居ヘテモ本城空虚ニテハ叶フヘカラス、一先ツ退テ本ヲ固ノシテ、其模樣ニ順テ後詰加勢ノ手分アルヘシトテ。宗徒ノ軍兵トモハ。金山ノ城ヘ差遣シ、金津、丸森ノ殘兵ト共ニ配置、又百目木ノ城モ心許ナシトテ是ヘモ軍兵ヲ分遣シ、其身ハ本城小高ヘ引入ラル。時ニ六月三日、雷雨頻リニシテ山澤奔溢激水漲ニ岸ヲ溢シ陸路ニ舟ヲ浮ルカ如クナレハ、金山通路ノ小川水嵩シク增シテ軍兵渡ルヘキ便ナシ、亘理美濃重宗川岸ニ立テ水ノ勢ヲ見スマシ、諸勢ニ向テ申シケルハ、往昔治承ノ比宇治川ノ合戰ニ、關東ノ住人田原又太郎忠綱先登ニ立テ、宇治ノ大河ヲ涉ルト聞ク、斯ル名ニアフ大河ヲモ渡セハ涉リ得タリ。況ヤ名モナキ此小川、縱ヘ洪水岸ヲ嚙ストモ恐ルヽニ足ラス。若レヲ人ニ知ラレント思フ者ハ、我ニ續テ渡セヤト高聲ニ呼ハリナカラ、馬ヲサツト乘入ケレハ、川岸ニ控ヘシ若者共、差渡ニ後レナ者共續ケヤ々々ト、七八騎一度ニ筏ト乘入、矢ヨリモ早キ急水ヲ、馬筏ヲ組テ一騎モ流レス、向ノ岸ニ押渡ス、是ヲ見テ諸軍一度ニ打入々々、騎卒連綿ト打續キ、激水ヲ押切々々難ナク向ノ岸ニ打上タリ。金山ノ城ヨリモ足輕百ハカリ出シ、川ノ此方ニ控ヘテ。鐵砲少々放シケレトモ、大勢川ヲ渡ヒ渡ル勢ニ氣ヲ呑レ、則城中ヘ引入ケリ、兎角スル内ニ雨モヤミ、空晴渡リ、川風霧ヲ拂ツテ吹止マス、片倉小十郎輕卒二十人ニ下知シテ。金山城下ノ町ハ走テモ風上ヨリ火ヲ放タシム、折節風強ク吹シ場ノ竟宅ハ吹付時ノ間ニ盛火トナリ、黑煙天ニ渦マキケレハ。須臾ニシテ炎數町ニ蔓ル。時シモ大暑ノ砌ナレハ。人ヲシテ消得ルコト不能。只ナキ地ヲ燒ニ等シク、町ハ不殘燒土ト成テ、廣々タル野原ノ煙ト見ヘ

ニケリ、其日既ニ夕陽ニ及ヒケレハ、諸軍城中ノ軍機ヲ度リ、城下ニ陣ヲ双ヘタリ。爰ニ寄手ノ内ニ湯村信濃・中村伊勢・鈴木日向・梅村藤兵衛・桑折宮内・五十嵐信濃・今村伊豆、以上七騎其夜ノ五更ニ及ンテ、拔懸シテ外郭ヘ忍入。城攻ノ案内。便宜悉ク見スマシ、立歸ラントスル時、夜廻リノ士卒之ヲ見付、大勢四方ヨリ取圍ミ打取ントス、七騎ノ者共渡リ合、散々ニ戰ヒ、追ヒ散シ、手々ニ首ヲ取テ、本陣ヘ馳歸リ、郭中ノ樣子物見ノ次第、其ニ之ヲ達シ、件ノ首共ヲ指出シケレハ、輝宗大ニ褒美アツテ。即時ノ賞ヲ行ハル。誠ニ賞ハ時ヲ不越トハ如此ヲ云ッヘシト諸人之ヲ感シケル、夜モ既ニ明ケレハ。本陣ヨリ下知ヲ傳ヘテ、先陣亘理美濃重宗備ヲ押出シテ進ム、二陣三陣段々ニ備ヲ出シ、城外近ク詰寄。圍ヲ作リ鐵砲ヲ打掛タリ。城中ヨリ山城ニテ虎口甚タ嶮岨ナリ。攻ルニハ堅ク。防クニハ易シ。其上相馬枝城ノ中ニテハ。究竟ノ兵士ヲ籠置キ。先頃後詰ノ加勢ニテ、能防キ能守レハ。輙ク可落氣色ハナシ。

寄手四方ヲ取詰メテ攻具ヲ連ネ、楯ノ透間ヨリキヒシク鐵砲ヲ打カケ攻上ル。城兵モ八方ヘ手分シテ。楯塀ノ矢狹間ヨリ矢砲ヲ飛シ防キ支ヘ。兩軍喚キ叫フ聲、樹神ニ應ヘ、矢石ノ響キ。天地ニ轟キ。時刻ヲ移シテ攻戰フ。政宗自ラ城際近ク馬ヲ進ラレ、團扇ヲ揚テ味方ノ鋭氣十分ナルソ。此節ヲ失ハス揉立ヨト。諸軍ニ指揮セラレケレハ。イトト勇ミシ伊達。長井ノ精兵トモ。息ヲモツカス曳々聲ヲ出シテ挑戰ス、城兵四方ノ攻口。事急ニシテタルミナケレハ。防戰退屈ノ色見ヘタリケリ、相馬ノ主將草野修理。究竟ノ精兵二百騎餘リ、長柄ノ卒百餘人前後ニ從ヘ、大手ヲ開テ打テ出、眞シクラニ亘理カ陣ヘ突テ入。草野兼テ下知シケレハ。城門忽チ戶サシタリ。依之寄手附入ニスヘキ樣テカリケリ、亘理カ軍勢相支ヘテ挑ミ戰フ。草野自ラ槍ヲ執テ眞先ニ進ム、伊達。長井ノ兵モ、城兵城戶ヲ出タルソ。此機ヲ外サス、中ニ包ンテ討取。モシ城中ヘ引入ハ、引續テ城ヘ附入ニスヘシトテ。先陣二陣一手ニナ

リ草野ヲ包ンテ攻戰フ。依之攻口少シクツロキケレハ、城中ノ士卒息ヲ休ムル隙ヲ得タリ。時ニ寄手ノ中ヨリ小櫻ノ甲ヲ著、月毛ノ馬ニ乘タル武者、諸卒ヲ押分テ乘出シ、大音ニ罵リケルハ、是コソ先日マテ相馬方ニ隱レナキ大疊病ト云ハレタル小野寺若狹常景ナリ、今日再ヒ疊病ノ手際ヲ見スヘシト呼リケレハ。城兵聞之人モナケナル惡口。味方ヲ背テ主ニ敵對スル不忠者。天罰遁レンヤ生捕ニセヨトテ。岡部源八郎一蒔ニ進ンテ渡リ合、二三合戰ヒシカ。眞向ニ疵ヲ受テ引退ク、同ク相馬方寺田伊賀ト名乘リ、透間モナク打テカヽル小野寺得タリト懸合セ打合ケルカ、若狹モトヨリ太刀打ノ手練ナレハ。寺田カ右ノ腕ヲ切落ス。深手ナレハ戰フコト不能。若狹カ從兵走リ寄テ其首ヲ得タリ。義胤ノ御旗千葉左近景胤、小野寺ニ打テカカル兩方スコフル手練ナレハ。火花ヲ散シ。力戰數合ニ及ヒ双方薄手數ケ所蒙ムリ。遍身赤ニ染ンテ打合ケル。兩方ノ從卒追々ニ馳付、互ニ主ヲ押隔テ切結ヒ

是ヨリ亂軍ニ隔ラレ。千葉モ小野寺モ、手負ナカラ稀有ニシテ助リケル、敵味方今朝ヨリ息ヲモ不繼、終日挑ミ戰ヒシカハ、寄手モ城兵モ。手負討死若干ナリ、時ニ六月暑氣盛ンナレハ。汗ハ物ノ具ヲ浸シ。血ハ流レテ馬蹄ヲ染ム、士卒マタ土煙ニ眼暗ミ、乾水ニ口ヲ開キ。兩陣甚勞レケレハ勝負ハ後日ニ殘シ。揚螺ヲ吹テ旗ヲ振レハ。寄手虎口ヲ解テ軍兵ヲ退ケタリ。城兵モ一所ニ集レハ城中ヨリ鐘ヲ鳴シ。大手ヲ開キ、草野カ兵ヲ引入ケリ。則夕日山ノ端ニ隱レケレハ、涼風艸ヲ動シ。イト鮮キ巷ノ穢ヲ吹拂フ。其夜小梁川泥蟠。本陣ヘ來テ申シケルハ。今日ノ合戰。味方ノ士卒頗ル粉骨ヲ盡スト雖トモ、利運ナキハ理リニテ候。敵ハ山上ニ居テ日ノ下ニ見ナシ。味方ノ諸勢ノ透間ヲカソヘ、弓鐵砲ニアタ矢ナシ。味方ハ城ヲ目ノ上ニ戴テ。敵ノ透間ヲ不知弓鐵砲兵ニアタ矢多シ。難所ノ一人ハ十人ニ對シ、十人ハ百人ニ對ス。城兵小勢ト云トモ、味方ノ大軍ニ比スヘシ。所詮此城ハ力責ニハ若干ノ人數ヲ

失ハンコト目前ナリ。明日ハ先ツ大筒ヲ揃ヘ。虎口々々へ配ツテ。キヒシク討セ。小筒ノ鐵砲ハ皆狹間配リシテ アタ矢ヲ放サセス。手痛ク鐵砲責ニシテ味方ノ武威ヲシメシ。其後向城ヲ取テ對陣シ。反間苦肉ノ方便ヲ以テ。城兵ノ中ヲ斷割 自ラ落城サセン謀ヲ廻シ候ヘト申シケレハ。輝宗最ト同セラレ。其軍へ觸渡シ明日ノ城責ハ。短兵ノ力ヲフルフヘカラス。只卷詰テ鐵砲責ニスヘシトテ、大筒小筒ノ手組ヲ定メテ。明ルヲ遲シト待居タリ。城中ニモ今日ノ力戰ニ。士卒大ニ勞レケレハ。番手ノ守兵ノ外ハ。皆陣屋々々ニ引籠リテ。夜ノ明ルマテ休息シタリ 然ル處ニ伊達・長井ノ諸軍勢。一天明ルヤ否。攻口へ仕寄ヲ付。數百挺ノ大筒小筒一度ニ放チ。入替々々討カケタリ。其響聲恰モ百雷ノ碎落ルカト怪マレ。肝魂ニ徹シテ冷マシ。城兵ハ敵昨日ノ勞レニテ未タ寄來ルヘシトモ思ハサリケレハ俄ニ周章騷キ。上ヲ下ヘトモテ返ス。サレトモ草野ヲ始々。宗徒ノ守將持口ニ立廻リ、士卒ヲ下知シ防之。モトヨリ鐵砲責ナレハ。城戶塀際ノ戰ハナカリケリ。時ニ寄手ノ内ヨリ。永井左近一人進ンテ。外曲輪ノ堀ヲ乘リ越ヘ。城中へ打入ントスル所ヲ。城兵馳出。永井ヲ中ニ取圍ム 左近大勢ヲ切立戰ヒシカ。多勢ニ敵シ難ク 終ニ塀際ニテ討レケル、片倉小十郎之ヲ見テ。永井カ首渡スマシ。續ケヤ者共ト下知シケレハ。先手ニ進ミタル兵士。我モ々々ト馳付。敵ヲ城中へ追込ミ。永井カ死骸モ陣中へ引取シニ。艸摺ノ外レニ一首ノ歌アリ。

軍スル人ノ數ニハ入ネトモ。 忠義ノ死ニハモレヌモノカナ。

輝宗之ヲ見玉ヒ。ケ樣ノ志アル侍ヲ 討セケルコソ不便ナレト深ク之ヲ惜マレケル。斯ル處ニ天正十年壬午六月二日。五畿内ノ將軍正二位右大臣平朝臣織田信長公ヲ、家臣明智日向守光秀逆心ヲ發シ。京都於本能寺ニ弑スルノ由 六月十一日。金山ノ戰場へ鳥使來著シテ達之ケレハ。輝宗聞玉ヒ。 信長ハ既ニ日本ノ將

軍ナリ、我モ使節ヲ以テ禮ヲ勤メシ上ハ、君臣ノ義ナキニ非ス、是天下ノ騒動ナリ。暫ク世ノ有様ヲ見テノ後ニスヘシ、明智モ何ソ天罰ヲ遁ン、此世ノ住居程有マシ、先此陣ハ開クヘシト有テ、諸軍ニ觸ラレ、城攻ハ止ニナリ、扨又評議有テ、城兵打出ル事能ハサラシメンカ為ニ、金山ノ城近キ妙秀山ニ新城ヲ築カセ、向城トナシ、[illegible] 伊達美濃・白石若狹・田手式部・[illegible] 村田志摩宗圓。西大立目元信・伊東肥前重信、小齋右衛門信賢・小野寺若狹常景ヲ始メトシテ、軍勢二千五百餘騎、鐵砲足輕三百人、弓輕卒百五十人ヲ籠置レ。同十八日信夫ノ大森ヘ歸陣有テ。七月九日米澤ヘ兵ヲ入アレケリ、義胤之ヲ聞レ、天幸ナリト悦ヒ、始メテ安堵ノ思ヲナシ、金山ノ城ハ佐藤甚十郎ヲ大將ニ定メ、草野修理以下ノ兵ニ守ラセラル。百目木ノ城ヘ向シ高森政景入道雪齋モ城ヲ卷ホコシ。向城ニ番兵ヲ殘シテ引上ラレハ、義胤イヨイヨ心易ク、小高ニ在城セラレケル。斯テ妙秀山（光明山トモ）ノ對陣二ケ年ニ餘リテ、金山表合戰迫合度々ナリケルカ、城兵勢ヒ盡テ、城主佐藤甚十郎ヲ始。草野以下終ニ城ヲ明渡シテ立退ケレハ、此旨米澤ヘ注進ス、則中島十郎ヲ金山ニ殘シ置キ、何レモ歸陣スヘキ旨命セラル、依之中島十郎ハ金山ノ城ニ留マリ、諸將ハ士卒ヲヒキイテ米澤ヘ歸リケリ、

私ニ曰、金山落城ハ天正十二年正月十二日ナリ。光明山對陣ノ内ニ、田手肥前・原田大藏討死シタリ、年月ノ間合戰迫合度々ナリト雖トモ、記スニ暇アラス。亦別シテ異ナル事ナキユヘ略之。

義胤使、乞ニ米澤ニ於和睦ヲ事

相馬義胤故ナキ逆意ヲ起シ、枝葉ト頼ミシ金津・丸森・金山ノ三城ヲ失ヒ。剰ヘ本城マテモ安堵ナク思ハレケル處ニ、於上方惟任日向守光秀逆心ヲ企。俄ニ兵ヲ發シ。洛陽本能寺ヘ押寄、主君右大臣織田信長ヲ弑シ、光秀自ラ天下ノ權柄ヲ握ル、依之羽柴筑前守秀吉備中國高松陣ヨリ馳登リ。信長ノ弔軍トシテ。江州賤

ケ嶽ノ一戰。並ニ山崎ノ戰ニ。光秀並ニ柴田勝家等ヲ討亡シ、秀吉又天下ノ權ヲ執テ。上方戰國ノ街トナル信長滅亡ノ次第。金山表ヲ引拂ヒ、輝宗父子米澤ヘ歸陣セラレケレハ。相馬表一先ツ安心ノ思ヲナス。義胤ハ小高ノ城ニ有テ。一門一族並ニ郎從ノ面々ヲ集メテ。評議セラレケル處ニ。皆々申シケルハ。相馬ハ小地ト云、殊ニ後ロ楯ト頼ムヘキ大將ナシ。會津。佐竹大家ト雖トモ。境遠クシテ急變ノ助手ニ合ハス。今伊達。田村緣ヲ結ヒ仙道ノ固メ手ツカイヨリ、隣郷皆之ニ從フ、然ル上ハ米澤ヘ敵對有テハ。何ツトテモ味方ノ勝利ハアルヘカラス。度々後レヲ取ルノミナラス。士卒ヲ其度每ニ失ヒ。兵勢ヲ折ク事。御家ノ爲ニ非ス、先ニ小野寺カ諫メモ此ノ事ニテ候。モトヨリ伊達ハ御親族ノ中ト云、和睦義ヲ取結ハレ。永久ノ謀ヲ廻ラサレテ可然ト。一同ニ諫メケレハ。義胤モ軍利ナキニ氣臆シケレハ。再應ノ評定ニ不及。急キ和平ヲ求ムヘシトテ、先ツ高森雪齋政景ハ。義胤ノ從弟ナレハ。和談ノ事ヲ憑マレケル。政景モ内々伊達・相馬ノ取合、笑止ニ思ヒケル折節ナレハ。是レ幸ト領掌シ、急キ輝宗ヘ達シ之。和平ノ儀ヲ勸メケル。輝宗モトヨリ仁心アル大將ナレハ。許容有テ申サレケルハ。此方ニ於テ最初ヨリ別心ナシ。義胤先立テ逆意ヲ發シ。我領民ヲ掠メ苦シム、此故ニ兵ヲ發シテ討トコロナリ。義胤先非ヲ改メテ。和睦ヲ乞フ上ハ。異議ニ及フヘカラストノ返答ナリ、雪齋喜ンテ則義胤ヘ此趣キヲ云遣シケレハ、義胤ヲ始メ皆々安堵ノ心ヲ納メ。使者ヲ以テ和平ノコトヲ謝セラレ、相馬表ハ靜マリケル。

相馬妙見並野馬追之事

相馬ノ家ニ妙見ト號シテ。代々ノ鎭守アリ。祭禮年ヲ隔テス。每年五月中ノ申ノ日ヲ以テ。神事ノ當日ト定ム。社ハ一社ハ小高ニアリ。一社ハ中村ノ城郭ニアリ。小高ハ右ニ記ス如ク、天正中戰國ノ時相馬義胤ノ居城トス。始メ小高ニ居城アリシ故。妙見ノ社小高ニアリ、其後中村ヘ神影ヲ遷サレ。城中ノ鎭護トス。然ルニ

此妙見ト號シ申スハ、何レノ神・何レノ佛ト云。其垂跡本地ノ詮議ヲ知ラス。其所ニ於テ問之ニ不知。若シ其本地ヲ穿鑿スルヤ。又モトヨリ隠密ノ事ニシテ、其故ヲ探リ知ルコト不能シテ不答ニヤ。誰有テ其神佛分明ノ神躰ヲ窺ヘ言ス者ナシ。然レハ實ニ此家ノ深秘ナル哉。抑此妙見ノ威徳不測ニシテ、霊驗ノアラタナルコト。世々ニ傳ヘテ。今又目前ノ奇瑞ヲ見聞スルコト、世ノ耳目ニアル所ナリ。或ハ曰妙見ハ平親王將門ノ霊ヲ祭レルナリト云々。相馬ノ家ハ將門カ旗ノ紋ナリ。往昔朱雀院ノ御宇、相馬小次郎平將門ハ、下總國南島ニ大内裏ヲ造營シ自ラ平親王ト號シ、百官ヲ置テ朝拜セシメ、關八州ヲ靡ケテ猛威ヲ震ヒシカハ、王命アツテ常陸大掾平國香・下野國田原藤太藤原秀鄕等ニ官兵ヲ授ケ、武藏・下總ニ於テ相戰フ。國香ハ流矢ニ中テ死ス。其子上平太平貞盛・藤太秀鄕相戰ヒ終ニ將門ハ秀鄕カ爲ニ亡ヒタリ。其霊ヲ祭テ武州神田明神ト云説アレトモ、其眞僞分明ナラス。然レトモ相馬ノ家ニ於テ、妙見ト崇ムルモノハ、件ノ將門カ神霊ヲ祭ルトノ説アリ。將門ハ顯ル朝敵ナレハ、アラハニ將門ヲ崇ムルトノ披露ハ難成事ナレハ、往古ヨリ秘密シテ、其霊威奇瑞ノ靈妙ヲトツテ、妙見ト號スルモノ哉。此説推量ナカラ尤近シト可謂。申ノ日ヲ以テ祭日ト定ムルモ、馬ニ因テノ儀ナルヘシ。意馬心猿ハ業ケル馬ノ戒ナリ。紋ニ付テハ謂レナキニ非スト云々。

私ニ曰、五月中ノ申ニ祭禮アリ。其神事ノ例ニ野馬追ト云アリ。家中ノ武士、其分限ニ應シ、甲冑ヲ著シ、旗差物ヲ押立馬ニ乗テ行伍ヲナシ。中村ノ城下ヨリ、南鹿島・原町ノ街道ニ、各陣ノ控場有テ。夜中ヨリ來テ各之ニ陣ス。其妻子衣服ヲ正シ、相共ニ送リ來テ屯ス。其様子偏ニ軍旅ノ首途ニ等シ。妻子酒肴ヲ携テ。其立別ヲ餞ス。斯テ時刻ノ相圖ニ順テ、勢子ハ山林ニ入テ野馬ヲ狩出シ廣原ニ之ヲ追出ス。其野馬ノ散亂スルヲ、件ノ騎兵縱横ニ備テ馬ヲ飛シ、得物ヲ挽テ南ノ方小高ノ原ヘ追出ス。進退駈引

偏ニ戰場ノ如シ。小高ノ原ニ方百間ノ行馬ヲ構ヘ。狩出ス程ノ野馬ヲ。無殘其ヤライノ内ヘ追込ミ、則其行馬ノ口ヲ閉シテ究竟ノ力卒數十人。白キ繻袢ヲ著シ。ヤライノ内ヘ飛入件ノ野馬ヲ組ンテ捕之。二匹捕ヘテ其餘ハヤライノ口ヲ開テ殘リナク去シム。則捕ヘタル二疋ノ馬ヲ。綱ヲカラミテ小高ノ神前ニ牽キ來ル。此所ニ相馬城主ノ棧敷アリ、則城主ノ前ニ於テ馬ノ賈ヲ勢利上ケ。其賈極マル時。城主則件ノ馬ヲ買求メテ。燒鐵ヲ以テ驗シヲ推シ。悉ク野髮ヲ切テ。之ヲ妙見ノ神馬ト稱シ。則放チ去ラシム。其賈ハ列卒ノ者ニ分散シテ是ヲ與フ、來年神事ノ狩ニ。件ノ驗アルヲ狩出シテモ之ヲ捕ヘス。追年皆如此。力卒並ニ勢子ノ輩、過テ怪我アルカ。或ハ馬ニアテラレテ悶絕スルノ徒。則小高ノ神手洗ニ於テ濺之洗之ニ。痛苦忽チ愈テ平身ノ如シ。奇トスヘシ、此神事前後ノ日。其ニ小高原・鹿島ノ廣原ニ。諸國遠境ノ商人集リ。且茶店・酒店數ヲ不知。男女夜市ヲナシテ群集ス、遠近ノ四民參詣。遊慰ノ爲メニ日ヲ重ネテ來リ會ス。實ニ珍シキ祭禮ナリ。

又曰。相馬戰ノ刻。每度相馬方負色ニ見ユル時ハ。イツクトモナク。白衣ノ法師長刀ヲ提ケ。馬ニ跨リ敵陣ニ駈入追崩ス、其烈シキコト向フ者ナク。當ル者ナシ。終ニ其衆兵ヲ敗テ相馬ノ利運トス。或ハ我侯ヲ始メ。件ノ法師武者ト戰。負或ハ組ンテ組伏セラル時ニ。降參シテ云此以後相馬ヘ手指ヘカラス、其神禮ニハ社ヲ建立シテ。祭祠ヲナスヘシト誓フ。於此則免シ放ツト云々。

此兩條偏ニ國民ノ俗談ニシテ。世俗皆語リ傳フト雖トモ。未タ曾テ諸記ノ表ニ見ヘス。疑フラクハ里民ノ妄談ナル哉。但シ若シ妙見ハ其地ノ鎭護ナレハ、味方ノ負色ヲ見テ防之。利運ニ轉シテ其敵ヲ退ケシムト。此儀ハ自然ノ靈驗ニシテ、サモアリヌヘキ事ナリ。然シ敵將ヲ捕ルニ及テ。祭社ノ僞欺ヲ信シ。神トシテ非禮ノ慾ニ觸レテ。何ンソ罰ヲ加ヘス

シテ之ヲ危ンヤ。是只ニ妙見ノ奇瑞ヲ重ク云觸ントシテ却テ神慮ヲ穢スモノナリ、俗ニ云贔屓倒シト云ニ等シ其威靈ヲ厚クセントテ結句狐狸ノ所爲ノ如クス論スルニ不ㇾ足可ㇾ笑ノ至リナリ

又曰妙見信仰ノ徒正月一日ヨリ三日魚鳥ノ味ヲ斷チ精進ス然レハ釋ニ近キ哉。本文ニ云將門カ靈ヲ祭ル。南部兼對スルモノナラン哉後ノ見ヲ待ツ而已。

伊達秘鑑卷之十二終

伊達秘鑑卷之十三

東奥仙府　無々軒　編集

片倉小十郎景綱立身潛傳

片倉小十郎景綱父備中守景光入道休意始メ小身ナリ小十郎未タ小身ナリシ時或時米澤ノ城下ニ出火シタリ、其頃政宗幼若ノ時ナレハ。勇ミ進ンテ馬ニ乘リ自ラ出火ノ場ニ馳付諸士ニ下知シテ火ヲ消サントセラレケルニ風烈シク猛火盛ンニナリケレハ火消ノ士卒防キ兼テ退ントス、時ニ片倉小十郎政宗ノ馬廻リニ居タリシカ。此躰ヲ見ルヨリ。政宗ノ下知モナキニ槍ヲ持テ猛火ニ驚キ退キ逃ル者ヲ士卒ノ辨ニ不ㇾ構。二人マテ突倒シ。大聲ヲ上テ罵リテ曰。イカニ旁々是ハ假初ノ火難ト云ヘトモ、君ノ御出馬タル上ハ大敵ニ向フニ異ナラス如何トナレハ君出馬有テ是程ノ火事ヲ消兼玉フト沙汰アッテ若シ隣國ヘ聞ヘテハ、當家弓矢ノ名折ナリ、一足モ退ヘカラスト

テ自ラ風下ニ廻テ槍ヲ持ケレハ、諸士是ニ力ヲ合セ。稠シク防、之ケレハ、火ハ程ナク消タリケリ。政宗幼年ナカラ斯ク下知セラレント思ハレケル心中ニ、恰モ符節ヲ合セケレハ、其勇氣ヲ感心アリ、是ヨリシテ小十郎ヲ取立用ラレ、父休意共立身シタリ。其後小十郎ハ毎度先鋒ヲ免サル 後年白石ノ城主ニナリ。二萬石ヲ領シテ、片倉備中守ト稱ス。後一族ニ配分シテ 一萬七千石餘ナリ　或時太閤秀吉公政宗ヘ御茶ヲ下サレケル時 片倉小十郎ヲ召出サレ 政宗ニ所望有テ 大名ニ取立ント仰アリケレハ、小十郎承リ、貴命難、有候ヘトモ、奥州者ノ習ニテ、譜代ノ主ヲ替ルコト難、成作法ニテ候、御赦免下サルヘシト申上ケレハ、秀吉公片倉カ志ヲ感シ玉ヒ 然ラハ政宗ニ奉公スヘシトテ 田村六十餘鄕ノ所ヲ賜フトノ上意ナリシトソ。是太閤會津下向ノ刻ナリ。サレハ小十郎智勇全ク、最剛強ノ兵ニテ、會津仙道ハ云ニ不、及 後年慶長元和ノ軍功共ニ天下ノ耳目ニトヽマル、伊達成實ニ相雙ンテ。共ニ政宗兩翼ノ忠臣ナリ

南部信直遣ニ使者ヲ於北國。ニ

天正十年六月二日於ニ京都、惟任日向守光秀信長ヲ生害シ奉リ 同十三日山崎ニ於テ秀吉ト戰ヒ 光秀打負テ自殺ス。其後天下皆羽柴秀吉ヘ離伏セスト云コトナク、中國西國普ク秀吉ノ幕下ニ屬スト雖トモ、東國ハ未タ武威ニ服セス、依、之秀吉關東ヘ發向アルヘキノヨシ。世上其聞ヘアリケレハ。南部信直ハ一族北左衛門佐カ諫ニ從ヒ、信直則渠ニ命シテ 北國加賀利家ヲ賴ンテ秀吉ヘ降參シ、本領安堵ノ 朱印ヲ乞ヒ請ケントナリ 北左衛門佐、則天正十二年二月十日。南部糠ノ郡ヲ打立。北陸道ヲ上リシニ 折節兵亂ノ最中ナレハ、道スカラ合戰ノチマタニシテ、往來自由ナラス 爰彼所ニ日數ヲ經テ 漸ク四月二日ニ加州金澤ニ到着シ右ノ趣ヲ演說ス 其頃秀吉ニハ出馬。西海ノ筋順見ノ砌ナレハ 利家之ヲ背ハレ 國元ニ於テ信直ヘ返ハシ、御朱印ノ儀ハ、某取計ヒ追付跡ヨリ下サントアリ

ケレハ左衛門喜ヒ南部ノ儀ハ偏ニ貴將ノ御執成奉レ願トテ暇申シ歸國シケリ、利家ヨリモ世上動亂ノ節ナリシカハ多田右京亮ヲ指添ラル信直ハ北國ノ左右延引上方ノ首尾如何トト胸ヲ苦シム折節信愛歸國シ書簡並ニ口上ノ趣相演ケレハ。喜悅不レ斜、多田右京亮ヲ馳走シ引出物等シテ被レ歸ケリ。其後秀吉ヨリ南部本領相違アルマシキノ朱印三戸へ下着シケレハ信直始メ一門一家何レモ喜悅ノ眉ヲ開キケル、其中ニ九戸左近將監政實獨リ上ニハ賀祝シケレトモ內ニハ憤心有シトソ聞ヘシ

志波安藝守沒落

爰ニ戸部安藝守ハ去ル頃舅ノ志波彌五郎ヲ退去セシムルノ後志波ノ地モ押領シケル然ル處家中ニ岩清水右京ト云者アリ然ルニ中野修理カ語ラヒニ依テ志波ハ南部三戸ニ屬シ。後ニ中野[illegible]。南部へ降參ノ心出來タリ。仍テ右京兄肥後守ニ此趣ヲ語リ、共ニ南部へ通センコトヲ密謀ス肥後守甚怒テ承引セス、右京頻リニ此事ヲ勸ムルトモ。大ニ怒リ罵リ。不忠不義ノ徒、骨肉ヲ穢ス。目前可ニ討果一キ者ナレトモ。兄ノ情ニ命ハ亡親草底ノ歎キニ免シ助クルナリトテ既ニ義絕セントス、右京事ノ不レ叶ヲ見テ即時ニ歸宅シ下中ヲ集メ最早討手來ルヘシ、各日來ノヨシミヲ不レ忘ハ、此度ノ先途ヲ見繼ヘシ若同心ナキ輩ハ早々落行テ、身命ヲ助ルヘシト云ケレハ家中ノ者共一同ニ申シケルハ此一大事ヲ見捨、何方へ落行ン。只一所ニ討死ト他事ナク見ヘケレハ右京大ニ喜ヒ。其儀ナラハ先ツ防戰ノ用意セントテ。夫々ニ下知ヲ傳ヘケル、斯テ岩清水肥後守ハ右京カ氣色只事ナラサルヲ察シ。何程ニ諫メ押ユルトモ。止ルマシキ樣子ナリ、然ハ無ニ心元一宿所ノ躰見テ來レトテ。人ヲ遣シ見セシムルニ人一人モナシ。使歸テシカ〳〵ノ由ヲ告ル。肥後守聞レ之テ執ルモノモ取アヘス、急キ登城シテ申シケルハ、頃日弟右京亮、中野修理ニ語ラハレ、南部へ降參ノ事、某ニ勸メ候間。大ニ耻シメ候ヘハ。何トナク座ヲ立罷リ歸リシカ。只今

宿所ヘ人ヲ遣シ見セ候トコロ。人一人モ無之由申シ候定メテ岩清水ノ城ニ籠リ候カト覺候。勢ノ未タ付サル内ニ討ツフシ可然。人手ニ懸ンヨリハ某馳向ヒ腹切ラセ可申候急キ御勢ヲ可賜ト云。安藝守ノ曰。譜代ノ者共ケ樣ニ我ヲ見棄。剩ヘ弓ヲ引ントスル心出來ル事偏ニ天運ノ爲ス處。力不及。敵スルハ弟。討ルハ兄ナレハ。御邊カ心中モ難計。若シ謀ニ云ナラハ早ク我ヲ討テ南部ヘ降參セヨ。全ク汝等ヲ可恨ニ非スト。心細ケニ申サレケレハ肥後守泪ヲ浮ヘテ云甲斐ナキ御所存哉縱ヘ自餘ノ者ハ兎モ角モ。肥後守ニ於テハ全ク異心無之。左樣ノ疑心故ニコソ梁田等ノ者共モ勘氣ヲ蒙リ。引コモリ候ヘハ。何トヤラン別心モ可出ヤト無心元事ノミ多ク候。若シ右京ヲ其儘ニ打捨置レハ。由々敷大事タルヘシト。指切テ申シケレハ。兎モ角モ汝カ計ヒニ任スルトテ。三百餘騎ノ軍兵ヲ催シ岩清水ヘ指向ケル。斯リシカハ郡山高水寺ノ木城ニハ。人少ナク警固心元ナシ。皆々人數ヲ可出ト。志波ノ諸士ヘ觸渡スト雖トモ何レモ返答ハ申シナカラ。人一人モ不馳來。サレトモ肥後守ハ手勢彼是三百餘騎引具シ。岩清水ノ城ヘ馳向フ城中ニハ騎馬ノ武士十三人。雜兵合五十人ニハ不過ケリ此岩清水舘ハ。三方ハ深田。西一方ハ山續キナリ。寄手ニ前ノ長繩手ヲ越サセ。平地ヘ押出サレナハ。頗ル戰ニハ自在ナラス。大勢繩手ヲ押來ン時。急ニ突テ出追散サハ。輙ク深田ヘ追込。立所ニ勝利疑ヒナシト城中一途ニ相待トコロニ。案ノ如ク寄手侮リテ徐々ト打寄スル。軍勢繩手半分打入ヲ見テ。時分ハヨキソトテ。城中ヨリ右京ヲ始メ。十三騎ノ者共。イサンテ切テカヽル。何レモ必死ノ兵ナレハ。其勢ヒモツトモ烈シ。寄手馬武者ハ跡ニ下カリ。先ハ大形歩卒ナレハ。何カハタマルヘキ。唯一揉ニ驅立ラレ。右往左往ニ崩レカヽリ。三百餘騎ノ兵卒。左右ノ深田ヘ驅落サレ。周章フタメク有樣。偏ニ渇魚ノ泥ニマミレタルニコトナラス。城兵勝ニ乘テ追討ニ切殺ス。討ルヽ者ハ多ク。遁ルヽ者ハ稀

ナリ、肥後守旗ヲ振テ下知スト雖トモ。大勢崩レタルコトナレハ。心ナラス引立ラレ。馬ヲ深田ヘ乘込ミ。進退ニ途ヲ失フ城兵是ヲ見テ大將討テト詈リ、我先ニト爭ヒ寄ル。右京亮馳寄 城兵ヲ制シテ其敵討ヘカラスト下知シケレハ、皆々追捨テ馳歸ル、親兄ノ恩愛コソヤサシケレ 斯テ肥後守甲斐ナキ命助リ 軍ニハ負タリ 志波ヘモ歸ラス 片寄ニ知人アリケレハ 暫ク此ニ忍居タリ サレハ兼テノ相圖ナレハ、梁田大炊急使ヲ以テ右ノ有增ヲ不來方ヘ注進ス 中野修理亮大ニ悅ヒ 頓テ三戸ヘ告ル。信直喜ヒ。則志波表ヘ出馬アル 安藝守大ニ驚キ、諸家中ヲ催促スト雖トモ 面々身構シテ終ニ催促ニ從ハス、信直ノ勢ハヤ經ケ森ヘ向フト聞ヘケレハ 稻藤大炊左衛門急キ登城シ 此躰ニテハ中々防戰難叶。一先ツ何方ヘモ御忍ヒ、時節ヲ伺ヒ候ヘカシト云ケレハ、安藝守トカク猶豫ノ折柄、長岡ニモ一揆起リ騷動ス、トヤ角時刻移ル程ニ。南部勢陣ケ岡ニ寄來ル由告來ル。於此安藝守取モノモ取敢ス、稻荷別當成就院カモトマテ忍ハレ 夫ヨリ山王海ヘ落行レケル、抑志波ノ家ハ。其往昔前陸奥守家長始テ此所ヘ下向、當安藝守迄ハ七代ナリシカ、忽チ此時亡ヒクリ 信直陣カ岡ヘ來ル時ニ。梁田大炊來服ス 則千石ノ賞アリ。夫ヨリ高水寺ノ本城ヘ向ハレケルニ。城中一人モ殘リ止マラス。依之人數ヲ入置 志波郡ヲ仕置セラル 岩清水右京ニモ千石ノ賞アリ。此度ノ事偏ニ中野恩賞アルトソ聞ヘケル。

最上兼山落城附竹田兵庫討死

最上出羽守義光ハ 近年處々ノ軍ニ打勝テ。勢ヒ既ニ羽州ヲ蓋ントス、依之近郷遠郡、義光ノ旗下ニ屬スト雖トモ 同國鮭延兼山（眞室トモ云）城ニ、佐々木典膳ト云者。代々眞室ニ在城シテ、義光ノ下知ニ從ハス 典膳未タ若輩ニシテ 生年十六歲ニナリケルカ。生得智勇人ニ超タル聞ヘアルニ依テ、義光使ヲ遣シテ。向後麾下ニ屬スヘキ旨ヲ云ハレケレハ、典膳大ニ怒リ。我佐々木ノ支流ニテ 代々此處ニ居住シ 他ノ支配ヲ受サル身

ノ今更義光カ武勇ニ怖テ。降參センコト。思モヨラスト返事シケレハ。義光大ニ怒リ。其儀ナラハ押寄テ。攻討ヘシトテ大勢ヲ卒シ。山形ヲ出馬セラル。先ツ鮝山近邊ノ在々ヲ放火シ燒拂ヒ。其夜露宿シ。翌黎明ニ押寄。城ノ躰ヲ窺ヒ見ラルヽニ。西北ハ鮭川ト云大川流レ、岸高ク底深ク、淺々トシテ超エ難シ、南ハ鹽野原ニ續テ。平地ナレトモ堀ヲ深クシ。壘ヲ高フシ、柵ヲ稠シク結廻シ。所々ニ高櫓ヲ上ケ。鐵砲ヲ透間モナク仕掛置キケレハ、輙ク可ニ攻落一トモ見ヘサリケリ。義光思惟ヲメクラシ。鮭川一方ヲ開テ明ケ置。三方ニ向ヒ砦ヲ構ヘ。向城トナシ。只遠攻ニシテ足輕ニ夜廻リサセ、用心ノミキヒシクカマヘ。城中ノ糧ノ盡ルヲソ待セケル義光猶思慮深ク。眞室ノ諸民共ニ安堵サセン爲ニヤ。數日小鳥狩シテ遊歷セラル。頃ハ天正十二年六月中旬、炎暑尤甚シク。一滴ノ雨モ降ルコトナシ、此城元來用水ノ便リ惡ク、城内井乏シク、汲井一二ケ所ノ外ハナク。水不自由ナルニ依テ。城中ヨリ夜每ニ忍ヲ出シ、澤水ヲ汲セケル。山形勢此由ヲ窺ヒ知テ。宵ヨリ彼水邊ニ足輕ヲ伏置テ待懸タリ、斯トハ不レ知シテ。城中ヨリイツモノ如ク、水汲ニ出ケルヲ、一人モ不レ殘討殺ス。典膳（異本ニ大膳）易カラヌコトニ思ヒ。又水汲者ヲ出、其跡ヨリ究竟ノ兵卒百餘人指添。其不意ヲ窺ハシム。寄手是ヲハ不レ知、伏兵共一度ニ起テ。水汲ヲ眞中ニ取籠メ討ントス、時ニ後詰ノ百餘人、不意ニ出テ。二手ニ分レ。切先ヲ揃テ打テカヽレハ。伏兵共按ニ相違シテ。一度ニパツト追立ラレ。我先ニト逃歸ル、其近邊ニ陣取テ居タリシ竹田兵庫ト云者、此由ヲ見テ口惜キコト哉トテ、只一騎掛ニ乘出シ。多勢ノ中ヘ切入。縱横ニ追靡ケ、敵二三騎切テ落シ。火ヲ出シテ力戰スト雖トモ從兵ハ不レ續。敵ハ大勢ナリ、前後ヨリ取圍マレ。終ニ其場ニテ討レケル、城兵竹田カ首ヲ得テ。則鉾ニ貫キ。勝鬨ヲ揚ケテ城中ヘ引入ル、此時漸ク山形勢馳付ケレトモ、敵早引入ケレハ力ナク引返ス。義光大ニ怒テ。此城一二ケ月ノ内ニハ自滅スヘキニ、小事ニ口ヲ

掛味方ノ後レヲ仕出シタリ。自今以後城兵討テ出ルトモ。味方ノ兵一人モ柵外ヘ不レ可レ出ト。堅ク制シテ贊遠巻ニシテ守セケル。案ノ如ク城中糧盡キ。水ニ渇シ今ハ守職ノ勢ヒ折ケテ次第々々ニ弱リケレハ或ハ馬ヲ朝シテ其血ヲ呑其肉ヲ喰フ。城主典膳若年血氣ノ者ナレハ。斯テ此城内ニ於テヤミ々々ト餓死センヨリハ未々力ノ不レ竭先ニ花ヤカニ軍シテ討死スヘシト。城兵一同ニ議シテ大手ノ門ヲ開キ。一度ニ打テ出ントス。時ニ大江図書ト云者申シケルハ。迚モ此城ニテ利運叶ヒ難シ。今又討テ出テ討死シタリトモ敢テ益ニモ不レ可レ成。將タル人ハ命ヲ全フスルコソ本意ナレ。幸敵鮭川一方ヲ不レ圍シテ明置タレハ。急キ此道ヨリ庄内ヘ御除キ可レ然ト勸ケレハ。何レモ其儀ニ同シ。典膳ヲ東ク。其夜密ニ城中ヲ忍ヒ出。鮭川ヨリ船ニ乗テ。庄内ヘ落行ケル。夜廻リノ者共此由ヲ窺ヒ見テ。急キ本陣ヘ走リ來リ。城兵落行ト相見ヘ。鮭川ノ方ニ人數多ク。松明ノ影見ヘ候ト告ケレハ。義光思フ仔細アレハ自由ニ落セトテ。追手ノ沙汰モナク。只静リカヘツテ控タリ。翌ル日城中ヘ押入テ見ルニ。痩タル馬四五匹有テ人一人モナシ。諸勢之ヲ見テケ程ニ兵粮ニ竭果テハ。忽チニ攻落シ。一人モ討洩スマシキモノヲ殘念サヨト。皆々語リアヒケル。義光ノ曰。我ハ兼テヨリ斯アルヘシト思惟シタリ。去ナカラ典膳ハ若年ト雖トモ武勇ニ賢キ者ナリ。其上家筋モ常ナラネハ助ケ置テ味方ニ成ン爲ナリ。定メテ庄内大寶寺ヲ憑ミ落行タラン。日ヲ經スシテ我手ニ從フヘシト云レケルカ。按ノ如ク庄内沒落ノ後。土田半左衛門ト云者ヲ以テ典膳色々詫言申シケレハ。義光許容アツテ本領無二相違一返シ與ヘラレケリ。典膳ハ武勇ハカリニモ非ス。才覺人ニ勝レタル者ナレハ。往々山形ニテモ股肱ノ臣トナリ。後ニハ鮭延越前守ト號シ。後年最上落居ノ時ハ。土井大炊頭ヘ預ラレケル。斯テ兼山ノ城ヲ掃除サセ。押ヘノ軍兵ヲ殘シ置レ。其身ハ諸勢ヲ引テ山形ニ歸陣セラル。

庄内惡屋形滅亡附草苅備前謀略

羽州庄内三郡ノ主ハ。武藤出羽守義氏ト云テ 大山ニ居城シケルカ。元龜二年三月六日。義氏不慮ニ果ショリ以來 越後ノ上杉謙信ノ領地トナリ、大寶寺光安ト云者。大山ニ居城シケル 彼光安其性極メテ暴惡ナリケレハ、近隣ハ勿論 領内ノ士民等ニ至ルマテ。疎ミ惜ンテ其異名ヲ 惡屋形ト稱ス。實ニ稀ナル惡行ノ人ナリ。然ルニ光安 義光ト不和ナリケレハ。互ニ討滅シ。領地ヲ併セン事ヲ ノミ工ミケル。義光兼山ヨリ歸陣有テ後 氏家尾張守。草苅備前守ヲ義光寢所ニ招キ。何カハ不知 終夜密談アリケルヲ。各不審ニ思ヒケル處ニ 天正十二年ノ秋。草苅備前最上領ノ内ニテ。常ニ殺生ヲ禁セラレシ山ニ行、或ハ 鹿狩又追鳥狩ナトシタリケレハ。義光之ヲ聞テ大ニ怒リ。此山ハ先考ノ廟アル故。堅ク殺生ヲ禁メ置ケリ。然ルニ如此惡行。前代未聞ノ狼藉。尤罪科輕カラスト雖トモ、數代ノ家人ト云。其身モ度々ノ武功アリ。其上子共竹田兵庫兼山ニ於テ討死ス。仍テ之ニ免シテ一命ハ助クルナリトテ。最上領内追放ニソ行ハレケル。備前ハ是非ナク莊内ヘ落行テ。光安ヘ手寄リテ賴ケルニ。同國ノ事ナレハ。備前カ今度ノ始末。國中ニ隱レナカリケレハ。光安兼テ之ヲ知ル故。此者ニ於テハ再ヒ 山形ニハ歸ルマシト思ヒケレハ。則諾シテ召抱ヘ、近習ニ加ヘテ奉公セシム。元來備前間者ノ爲ニ如此謀リテ來レル事ナレハ。惡屋形ノ心ニ叶フヤウニ。佞諛ノ追從セシホトニ。幾ノ內ニ過分ノ知行ヲ與ヘラレ。程ナク 出頭ニソ成ニケリ 然ルニ光安代々ノ家臣尾山中務トテ。齡六旬ニ餘ル者アリ、彼カ子十二歲ニナリシヲ。光安側近ク仕ケルカ 或時少シク誤リ有トテ、引寄テ刺殺シケル。依之父中務カ悲歎云ハカリナシ。實ニ云傳フ悲ノ至テ悲キハ、 老テ子ニ後レタルヨリ悲シキハナシトカヤ。餘多アル子ヲ失ヒテ。夕ニ歎クハ人ノ習ヒナルニ。増テヤ六旬ニ餘リ、 躬ノ行末ノ賴ト思ヘシ只一人ノ幼子ナレハ、斯ト聞ヨリ肝消心迷ヒ。茫然トシテ居タ

リケルカ、良有テ云ケルハ、抑光安ノ武名隣國ニ耀キ莊内ノ領主トナリ給ソハ、皆某カ武功ニ因テナリ。然ルヲ賞翫シ玉フマテコソナカラメ。少ノ過アレハ迚。東西モ辨ヘサル幼稚ノ者ヲ殺害シ給ノコト、返ス返ス、口惜ンケレトテ、一度ハ怒リ、一度ハ恨ミ、啼哭シケルカ是ヨリ後ハ病ト稱シテ、高橋ト云所ニ引籠リテソ居タリケル。是ヲ聞ク人毎ニ忠義類ヒナキ中務々ニ如是ナレハ、自餘ノ者共ハイヨイヨ頼ミ思ヒ難シ、山形ノ義光、米澤ノ輝宗等ノ事ヲ傳ヘ聞クニ、常ノ詞ニモ大將ト士卒ハ扇ニ譬ヘタリ。大將ハ要ノ如ク、物頭ハ骨ノ如ク、諸卒ハ地紙ノ如シ。イツレ不具ニシテハ勝利ヲ得難シトテ、家人ヲ吾子ノ如ク。撫育シ玉フトカヤ。斯ル人ニ仕ヘテコソ。一命ヲ抛テ忠義ヲ勵ムヘキニ、此屋形ハ武勇ヲ好ミ給ノ迄ニテ、曾テ仁愛ノ心ナケレハ、刑罰ヲ恐レテ從フト雖トモ、眞實ニ思ヲ盡ス者一人モ可有ヤト。口々ニ囁キ誹リケレトモ。光安ノ聞コヘヲ恐レ。憚リテ中務カ方ヘ音信ル、者一人モナカリケル。サレトモ草苅備前ハ下心アル事ナレハ、折々音物ヲ遣シ、又常ニ行テ物語シ、薬リ心ヲ慰マケル。中務ハ斯ル企アル者トハ夢ニモ不知、年來ノ舊友タニモ屋形ニ恐レテ訪ハサルニ。斯ク度々尋ネ問ハル、コトコソ嬉シサヨト悦ヒケル。或夜雨降リ物淋キニ、イト、世ノ哀レヲモ催ス折節備前、竹葉ナト取持セ、密ニ忍ヒ尋ネケレハ、中務喜ンテ對面シ、今宵ハ雨中ト云、是マテノ達來不淺トテ、樣々ニ饗シ、終夜シメヤカニ語リケルニ、諸國ノ大將ノ評ニナリテ、中務問ケルハ、誠ヤラン義光ハ武勇ヲ以テ國中大半切隨ヘ。近國ニ於テハ鬼神ノ如クニ沙汰スト雖トモ、士卒ヲ憐ミ、老少ヲ撫育シ、慈愛ノ心ヒタスラニシテ、上下ノ老若其情ニ順ヒ、馴付候ト、語リケレハ。中務其ニ聞テ、戰國ノ風俗、報國盡忠ノ志アル者ハ稀ニテ、唯名奔利走ノ輩多キノミナルニ、義光慈愛ノ志深ク、士卒ヲ憐ミ玉フコトノ、忝ナサヨトテ。ツクツクト思按シテ居タリケルカ、其時中務備前カ側ヘ近々

ト指寄テ申シケルハ。斯申ニ付テモ無二面目一ハ候ヘトモ。此度ノ形勢餘リニ情ナク恨メシク候間。事ノ仔細ヲ具ニ語リ。我心ヲモ明シ申サン。光安二十二歳ノ時。越後本庄村上ノ合戰ノ時。某比類ナキ高名シ。其後數度ノ軍ニ大功ヲ顯シ。終ニ庄内ノ領主ト成セシハ。是皆某カ働キナリ。然ルヲサセル恩賞ヲモ宛行レス。剩ヘ一子ヲ殺害ニ及フ事。餘リト云ハハ情ナク。斯辱カシメニアフコト。骨髓ニ徹シ。無念晴レ難シ。左ハ云ナカラ。我既ニ恨ヲ以テ存シ立ニハアラネトモ。足下常々見聞ノ通リ。當主武勇ノ强キノミニテ。聊カ慈愛ノ心ナク。縦ヘ忠アル者ト云トモ。一旦ノ怒ヲ以テ殺ㇾ之。佞人近習ニ蔓テ。惡行日々ニ彌增候ヘハ。諸人安堵ノ思ヲナサス。不忠トヤ云ハン。去ナカラ。此暴君ト共ニ骸ヲ亡サンハ口惜ク候間。所詮義光ヘ降參シ。味方ニ屬スルニ於テハ。庄内ノ侍多クハ殘リ申マシ。足下幸ニ當地ニアリ。此趣ヲ注進アラハ。其功ヲ以テ山形歸參疑ナシ。是義光ノ爲ニハ大忠ナリ。某庄内ノ案内シテ。義光發向アルニ於テハ。當ノ諸將悉ク降參致シ。庄内三郡ハ立處ニ手ニ入申スヘシト。心底無二殘ス所一明シケレハ。備前モトヨリ此謀ヲ行ハント。義光ト密謀シテ來リシ事ナレトモ。未タ年月ヲモ不ㇾ經コトナレハ。諸士ノ心モ難ㇾ計。一大事ノコトナレハ。容易ニハ遂カタク。肺肝ヲ苦シムルノ處ニ。中務如ㇾ斯云出ケレハ。是天ヨリ庄内ヲ授ルトコロナリト。心中大ニ喜ヒ。貴所ノ欝憤尤無二餘儀一。某一旦ノ越度ニテ。山形ヲ拂ハルト雖トモ。數代ノ主人。殊ニ賞罰正シキ人ナレハ。密ニ本ヲ慕フ心出來レリ。足下其志アル上ハ。急キ山形ヘ落行。注意申ヘケレ共。某只今山形ヘ落行カハ。自然洩レ聞ユルコト可ㇾ有哉。只此儘ニシテ一味スヘキ輩ヲ。密ニ語ラヒ。其上山形ヘ注進スルナラハ。義光早速出馬アルヘシ。然ル時ハ惡屋形ハ庄内境ヘ出テ對陣アルヘシ。其時城ニ火ヲカケ。跡ヨリ追詰。前後ヨリ攻討ハ。如何ニ猛キ光安ナリトモ。即時ニ討取ンコト。手裏ニアリト云ケレハ。中務此儀尤可ㇾ然ト。密談

任ニ終リテ別レケリ。斯テ中務ハ思惟ヲメクラシ兼テ一味同心スヘキ輩ヲ、忍ヒ々々ニ招キ寄セ。此度萬民ノ爲ニ惡屋形ヲ退治スヘシ。是一人ノ暴ヲ捨テ國中ノ諸民ヲ救フ所ナリト己カ思立ニ任セテ。詞ヲ盡シテ勸メケレハ。家中大方光安ニ飽果タルコトナレハ願フ處ノ幸ト我モ々々ト同心シケル。則連判ノ起請文ヲ認メ、各判形血判相極リケレハ。急キ備前ヵ方ヘ通シケル。草苅則夜中ニ中務カ居住ヘ來リケレハ件ノ連判ヲ備前ニ渡ス。則書簡ヲ添テ腹心ノ從者ニ持セ、急キ山形ヘ注進シケレハ。義光大ニ喜ヒ。備前當地ヲ出テヨリ、遙カニ延引ニ及ヘハ。如何無心元。是ノミ心掛リナリシカ。ケ樣ニ庄内ノ者共。有增味方ニ引付シコト誠ニ備前カ謀略不淺サラハ時日ヲ移サス發向アルヘシトテ。軍大將ニハ野邊澤能登守・楯岡甲斐・里見式部・氏家尾張・志村九郎兵衛ヲ始トシテ騎兵三千人餘。即日山形ヲ打立。六十里越ノ難所ニカヽリ。月山ヲ廻リ。松根・黑川邊ニ打出ラル。歩卒ハ月山ノ嶽ヲ直チニ越ヘケル處ニ。天俄ニカキ曇リ。氷雨降ルコト夥シ。義光則馬ヨリ下リ。是權現ノ咎メナルヘシトテ、手水ニ身ヲ清メテ。此度惡屋形ヲ討テ。萬民ノ歎キヲ休ントスルニ。爭テカ斯ル御咎メノ可有ヤト。四方ヲ睨ンテ拜シ玉ヘハ。須臾ノ間ニ一天晴テ本ノ如ク快明タリ。義光急キ馬ニ乘テ。六十里越ヲ超ヘラレケレハ。諸勢勇ミ進ンテ押行程ニ。松根黑川ニテ先陣ト一所ニ成テ押寄ケル。既ニ田川郡ニ入テ。相圖ノ貝ヲ吹セケルニ。大山城ニハ不思寄コトナレハ是ハ最上ノ勢寄來ルカ、又越後ヨリノ討手カト。上ヲ下ヘト返シ。周章騷クコト不斜。惡屋形ノ曰。察スルニ是ハ最上勢ナルヘシ。何ニモセヨ。近年鬼神ノ如ク云ハヤス義光ナレハ。我相手ニ不足ナシ。暗々ト城ヲ圍マレテ討死センヨリハ。途中ニ出向テ存分ニ力戰シ。雌雄ヲ一擧ニ定ン。何レモ粉骨ノ働キスヘシト。旗本ノ勢不殘引卒シ。城ヲ出テ馳向ヒ。山形ノ先陣ト川ヲ隔テ對陣ス。光安今日ヲ限リト思ケルニヤ。緋威ノ

鎧ノ上ニ、白綾ニ妙ト云字ヲ。金紋ニ置タル羽織ヲ著。淺黄ノ手巾ニテ鉢巻シ。仁加保黑ト云馬ニ　孔雀ヲ蒔繪ニ置タル鞍置テ打乘。塗籠ノ弓ニ。廿四指タル鷲ノ羽ノ矢ヲ負、元來精兵ノ手垂ナレハ。義光ヲ只一矢ニ射落サント、片手ハケテ待懸タリ。義光兼日此事ヲ知テケレハ。先陣ヨリハ五六町程引下テ備タリ。然ル處ニ尾山中務一味ノ者共指加リ。　ヒシタタト城ヘ入替リ。本丸ヘ火ヲ放セハ、折シモ風烈シク。猛火熾(サカン)ニ燃上リ、黑煙天ヲ掠メ、夥シクウツ巻上ル、惡屋形光安ヲ始メ、近習ノ軍兵コハイカニト騷動ス。時ニ光安旗本ノ前後ニ備タル家人等。光安ノ備ヘ弓鐵砲ヲ雨ノ如ク放チカクル、是ヲ見テ山形ノ軍大將野邊澤能登。黑馬ノ大長ナルニ打乘。五尺三寸ノ例ノ鐵杖ヲ提ケ。敵陣ヨリ二町程川下ヘ廻リ。唯一騎川ヘ乘入ケレハ　能登カ徒軍有路加賀・落合伯耆・行澤周防ト云者。相續テ乘入。上下四人向ヘ渡テ。光安ノ旗下ヘ駈入。四角八方ヘ打テ廻ル、是ヲ見テ山形勢一度ニ川ニ浸テ。無二無三ニ乘渡セハ。庄内ノ軍勢何カハタメラフヘキ。光安ノ陣ヘ一度ニドツトナタレカヽル、惡屋形苛テ下知スト雖トモ。元來防戰ノ心ナケレハ、支ヘ戰フ者ナク、右往左往ニ敗散ス。然ル折シモ尾山一味ノ者トモ。敵ニ内通シ、城ハ燒失シタリ、則草苅備前カ間謀ナル由告來レハ、殘兵イトヽ途ヲ失ヒ、八方ニ散亂ス、惡屋形今ハ近習ノ者僅十四五人ニ成テ。五六町走リケルニ。諸卒皆寄手ニ降參シ、兼テ可遁道筋ヲ、先立テ取塞キケレハ。落行コト不能。光安既ニ勢竭テ大ニ叫ヒ詈テ曰。近年草苅備前計略ノ爲ニ來リシヲ不知シテ心ヲ緩シ、斯ル後レヲ取コトノ口惜ケレ、此上ハ義光カ旗本ヘ駈入。討死セント懸出ントスルヲ、左右ノ者共抑留メ、義光ノ旗本ハ是ヨリ一里先ニテ候。中々近寄ルコト不叶。雜兵ノ手ニ死ンヨリハ。此ニテ御自害有ヘシ。我々防矢致サントヽ云トコロヘ、鐵砲來テ光安ノ弓手ノ脇腹ヨリ討拔ケレハ。最早叶フマシキソトテ　腹切テ伏シタリ。從兵各腹切テ、惡屋形立所ニ亡ヒ

ケリ。大寶寺光安トテ、サシモ手強キ大將ナレトモ、日比慈愍ノ心ナク、積惡年ヲ重ネシ故、家中ノ諸心ヲ變シ、一戰ニモ不ㇾ及、開々ト亡ヒケル。惡行ノ果コソ淺マシケレ。備前頓テ惡屋形ノ首ヲトリ。義光ノ本陣ニ來リ、實検ニ入ケレハ、義光大ニ悦ヒ、此度ノ勝利偏ニ其方ノ謀略ノ致ス所ナリ。其上味方ヲ損スルコトモナク、安々ト光安ヲ討取コト、莫大ノ忠義ナリトテ、過分ノ領地ヲ報賞セラル。備前則案内シタル尾山中務ヲ始メ、味方ニ属セシ者共、殘リナク義光ヘ目見得サセケレハ、何レモ本領ヲ與ヘ、中務ニハ本地ハ不ㇾ及、云、惡屋形ノ跡識恩賞アルヘキ由ナリケレトモ、中務辭シテ曰、某六十ニ餘リ、一子ヲ失ヒ、全ク後榮ヲ計リテ味方申スニ非ス、只御厚恩ニハ、此ヨリ御暇給ハルヘシト達テ願ヒケレハ、無ㇾ是非ㇾ其意ニ任サレケル中務其ヨリ直ニ山形ヲ立出、大和國金峯山ニ引籠リ。出家シテ淨住シケルカ。八十歳ニシテ往生スト聞ヘシ、其後義光惡屋形モ近國ニ隱レナキ猛將ナレハトテ、加茂浦ト云處ニ一字ノ寺ヲ建立シテ。光安寺ト號シ。寺領ヲ寄附シ。永ク光安ノ菩提ヲ弔ハレケルトソ。

會津内亂附松本栗村叛逆伏ㇾ誅

其頃會津葦名家ニ、四人ノ老臣アリ、松本・平田・佐瀬・富田ト云。是ヲ葦名ノ四天王ト稱ス。其中ニ松本圖書ト云者、去ヌル年郡山ノ戰ニ討死シケレハ、其子太郎幼稚ナレトモ、家ヲ嗣シメ置レケルニ、太郎十一歳ニナレルコロ、彼カ母容色イマタ衰ヘサルユヘ、平田某カ妻ニセンコトヲ請望ケルニ、盛隆モ同心ナリシカハ、太郎ハ幼年ナリ。仔細アラシトテ、婚姻ノ約ヲソ極メケル。太郎此事ヲ傳聞テ申ケルハ、某幼年ナレハトテ、父カ遺跡ヲ相續イタス上ハ、假令盛隆ノ仰ナリトモ、爭カ母ヲ他ニ嫁セシメンヤト、以ノ外ニ立腹ス。然レトモ流石ニ幼年ナレハ。屋形ノ仰ナリトテ、強ク怖サハ。ナト諾セテハアルヘキトテ。或人太郎カ許ニ行テ、今度母カ婚姻ノ事、屋形ノ御意ヲ以テ極リタルヲ、汝カ兎角申スコト甚奇怪ナリ。急キ切腹スヘシトノ

仰ニ依テ。檢使ノ爲ニ來レリト云ケレハ。太郎少モ驚キタル體モナク。斯中上ルヨリ兼テ期シタルコトニテ候トテ。身ヲ淨メ衣服ヲ易テ　實ニ切腹スヘキ風情ナレハ　彼者イヤ〳〵。此兒ノ形勢。如何ニ怖シタリトモ。中々心ヲ變スマシト。舌ヲ卷テ逃歸リケル。其後母ハ遂ニ平田ニ嫁シヌルトモ　太郎ハ繼父ト義絶シテ居タリケル　然ルニ此事ヲ深ク遺恨ニ思ヒ。天正十二年。太郎十六歲ニテ叛逆ヲ思ヒ立。己カ男色ノ知音ナリシ　笈川ニ住セル栗村下總守ト　密々ニ謀ヲ廻シケル。今年六月三日。盛隆城東ノ羽黑山東光寺ニ參詣アツテ。終日舞樂ヲ遊覧セラル。栗村モ供シケルカ　兼テ謀リシコトナレハ。聊カ所勞ノ心地トテ　途中ヨリ引返シ。松本ト牒合　其勢八百餘人ニテ　黑川舘今ノ若松ニ押寄セタリ　居合セタル者トモ　驚キ騒キテ防キケルヲ。悉ク追出シ。四方ノ城戸ヲ指固メテ楯籠ル、城ノ近邊ナル者共。俄ニ城中騒動スルハ。如何ナル仔細ヤ有ト。取モノモ取アヘス。馳來ルヲ城戸口ニ待受テ。突伏斬伏殺防ス。家中何故ト云ヲ不レ知。後ニ松本・栗村カ叛逆ト聞テ。互ニ疑ヒ合フテ暫シ出合者ハナシ。此時兒徒等輕卒ヲ手分シテ。棟門ヲ立並ヘタル家々ニ。火ヲ放タントシケル處ニ。佐瀨河内守足輕ヲ引具シテ。西ノ城戸口ニ馳付。敵ヲ四方ニ追散シ。火難ヲ防ク。本名右衛門佐ハ己カ屋敷。二ノ丸ノ城戸向ナレハ。最初騒動ノ音ヲ聞ヨリモ。直チニ城ノ東門ヨリ本城ニ馳入。盛隆ノ簾中ヲ介抱シ。寳藏ノ中ニ入レ。側ニハ簾中ニテ仕ハレケル　林甚次郎・森代又次郎・大場平五郎ト云幼年ノ童ヲ附置。其身ハ近邊ヲ立廻ツテ。油斷ナク守護シケル　此事急ニ東光寺ニ注進ス。諸臣評議シテ。此上ハ直ニ御歸城不レ可レ叶。速ニ岩瀨ニヒラキ。重ネテ仙道・伊達・佐竹ノ勢ヲ催サレ。攻罰アルヘキヤト勸メテ。供奉ノ諸士周章騒キケレトモ　盛隆少モ驚レス。奴原カ叛逆。思フニ左コソ有ン。一々ニ首ヲ刎テ。後來ノ見懲ニセントテ。則羽黑山東光寺ヲ打立レケル。相從フ士卒纔ニ百人ニ不レ過。剩ヘ弓箭甲冑セサル故　如何

トアヤツム者多ケレトモ。大將進ンテ向ハレケレハ、無是非相從ノテ馳向ノ、黒川ニ殘リ居タル士卒、追々ニ馳加リシカハ、程ナク五百餘人ニソナリニケル。盛隆ノ曰、長沼ノ新國上總介ハ栗村下總カ父ナレハ、後詰ニ來ルコトモアルヘシ、急ケヤ者共トテ息ヲモ不突、駒ニ鞭ヲ進メテ、黒川ニ引返シ、則城ヲ取卷テ、短兵急ニ攻立ル　松本栗村ハ俄ニ楯籠リタルコトナレハ、防ク勢ハ少ナシ、分内ハ廣シ　只西ヨ東ヨト。騒メケル處ニ、盛隆槍ヲ採リ、自ラ一陣ニ進ミ、責ヨ者共ト、衆ヲ勵シ進マレケレハ、從兵誰カ猶豫スヘキ。透間モアラセス、城戸ヲ破テ城内ニ切テ入、火ヲ散シテ戰ノ。時ニ城中負色ニ見ヘケレハ、双方ノ色ヲ見合居タル家中ノ者共モ、寄手ニ馳加リケレハ、時ノ間ニ多勢ニナリ、四方ヨリ揉破ル　盛隆ノ近習大波主膳。同弟彌太郎ハ、向フ敵左人ヲ討取テ、終ニ其身モ討死ス、此兄弟ハ須賀川ヨリ盛隆ニ付キ來レル者ナレハ　一入惜マレケル　寄手イヨ々々力ヲ得、揉立切立攻ケレハ兒徒悉ク戰負、八方ヘ散テ殘リ少ナニ打ナサレ、松本太郎モ討レケルヲ、家人其首ヲ深ク泥中ニ押込置タリケルヲ、夜明テ兎角搜シ出シケル、栗村下總ハ手負戰勞レテ臥シ居タリ、赤塲藤内ト云者、聲ヲ上テ早松本ハ討レタルニ栗村ハ何國ニ隱レ居ルソ　斯ル大事ヲ仕損シテ、落失タルカト呼リケレハ。栗村是ニ有ト云マヽニツヽト入テ赤塲ヲ丁ト突　ナレトモ藤内健者ナレハ突レナカラ栗村ヲ取テ引寄、押ヘテ首ヲ掻落シ、朱ニ染ナカラ刀杖ニ突、盛隆ノ前ニ首ヲ持參シケルカ　深手ナレハ次第々々ニ弱リ行テ、頼少ニ見ヘケルニ盛隆申サレケルハ　扨モ今夜ノ振舞、類ナキ働キナリ　弱リタルモノ哉ト云ハレケルヲ。藤内キヽテ今ハノ際ニ候間、憚ナク申上候　某此頃御勘氣ヲ蒙リ居ル處、推參ノ御免ヲ蒙ルノミナラス、忝キ御詞ヲ添ラルヽ事、今生ノ思出之ニ不過　恐ナカラナキ跡ノ儀ヲ頼ミ願ヒ奉ルト申ケレハ。盛隆向後ノ事仔細アルヘカラス、心易ク思ヘシ、是ヲ將來ノシルシニセヨトテ。

著セラレタル羽織ノ裾ヲ裁テ與ヘラレケレハ。藤内生涯ノ面目忝シト頂戴シ。人ニ扶ケラレテ宿所ニ歸リツヽ。幼少ノ一子ヲ近付、爾々ノ御諚ナルソ。構ヘテ向後ノ事。疎ニナ思ヒソト。呉々ニ教訓シテ、去ル仔細有テ勘當ヲ蒙リ、在所ニ籠リ居タリケルニ。此騒動ヲ聞ヨリ。近隣ノ武士共ト、倶ニ黒川ニ馳來ルトテ。言ヲ殘シケルハ、我此頃勘氣ヲ蒙リテ籠居セリ。此度松本カ栗村カ。二人ノ内一人ヲ討テ、生前ニ免許ヲ蒙ルカ。サラスハ必ス討死スヘシト思ヘハ。無ラン跡ニテ。是ヲ最後ノ物語ト思ハレヨト、道スカラ云ヒ出ケルカ。果シテ栗村ヲ討テ、勘氣ヲ免サレケリ。其夜ノ明方ニ兇徒悉ク誅セラレ。其後面々カ忠勤ノ甲乙ヲ僉議セラレケルニ、先一番ニ佐瀨河內守ヲ呼出サレ。今度不慮ノ騒動ニ、汝最初ニ馳著。城中ヲ兇徒ニ燒カセス、其上早ク本丸ニ攻入タルコト。拔群ノ働キナリ。汝カ父源兵衛ハ近國ニ隱ナク、武功ノ名ヲ得タル者ナレハ。我宗ノ名譽ナリ。父カ名ヲ稱スヘシト。常々云ト雖トモ。父カ名ノ世ニ高カリシヲ憚リテ辭退セシ。今度ノ勸賞ニ強テ源兵衛ト號スヘシトテ盃ヲ賜ル。二番ニ本名右衛門ヲ召出シ。昨日籏中ヲ退ケタル振舞。神妙ナリト感シ。讃岐ト名ヲ改メ。盃ヲ賜フ。是ヨリ以下其次第ニ依テ。忠賞ヲ加ヘラレケル。

新國上總介降參

盛隆思惟アリケルハ。磐瀨郡長沼ノ城主新國上總介ハ。栗村下總守カ親ナレハ。子ノ叛逆ヲ知ヌト云コトアルヘカラス、此次手ニ誅戮スヘシトテ。千餘騎ノ兵ヲ引具シテ長沼ニ押寄。二重三重ニ取卷テ鬨ヲ噇ト作ル、新國兼テ家人ニ下知シケルハ。必ス屋形ニ向テ。弓引鐵砲放ツヘカラス。只攻入輩ハカリ防クヘシトテ。閉テ控ヘタリ。寄手モ四方ヲ取圍テ。夜ヲ明ス處ニ、早天ニ上總カ許ヨリ。寄手ノ陣中親キ者共ノ方ニ使ヲ遣シ、御邊達ヲ賴テ。屋形ヘ申演度仔細アル由ヲ云送リケレハ。沼澤豊後守等ヲ始メ。二三人打連テ城ニ行ケルニ。新國ハ城中綺麗ニ掃除シ。兵具等ヲ飾リ

並ハ言、則出向テ曰、面々ヲ是迄請シ候事。別儀ニアラス。某カ所存ノ通リ、屋形ヘ申上テ後、潔ク切腹致サンカ爲ナリ。各克ク之ヲ聞届ケテ給ルヘシ。今度下總カ由ナキ者ニ賴レテ謀叛ヲ起セシコト、親ナレハ某有增ヲモ知ラン歟トノ御疑モ是一ツ、又ハ父子ノ間ナレハ下總討レシコトナレハ。折ニ觸レテ上ニ恨ヲ含ンカトノ疑心此二ツ。是ニ依テ御馬ヲ向ラレタル者ナリ。サレトモ下總ハ常々不義ノ事ノミ多キ故。度々不通致セシコト。各ニモ存知ノ處ナリ。唯何レノ日カ。親ニ憂目ヲ見セツラント。諫マシク存詣有ト雖トモ是ハ私ノ覺悟ニテコソ候ヘ、靡然親子ノ事ナレハ。上ノ御疑心ハ理リ至極ニ存スレハ。某尋常ニ切腹致スヘシ。併如斯腹切ヘキ者ナラハ、異眞ニ可及事ナラネハ。邪心ニ籠城セストモ然ルヘキニト、各迄モ思ハレン歟。某不肖ナカラモ。盛氏君ヨリ此境目ノ城ニ居ヘ置レタレハ。申モ過言ナレトモ。會津ニサル者アリト。隣國マテモ沙汰セラレタル身ニテ。一應ノ仔細ニモ不及、切腹致サハ、流石大將ノ眼力ノ揣キニ似タレハ。一先盛隆ノ御馬ヲ向ラレタル上ニテ、腹ヲ切ハ盛氏ノ恩顧ノ程モ理リナリト沙汰セラレントノ寸志マテニ候。所詮方々早々出城アツテ此事本陣ヘ能樣ニ達シ、急キ檢使ヲ賜ハランコト賴入候ト申切テ、更ニ餘儀アリトモ見ヘサレハ。沼澤ヲ始メ、賴レタル者共、急キ味方ノ陣ニ歸リ。上總カ心底具ニ披露シタリケレハ。事ノ始終ヲ僉議セラレ。新國ヲ赦免アリテ、盛隆ハ黑川ニ歸陣セラル。新國ハ則チ僅ノ從者ヲ召具シ。頓テ黑川ニ來リ。恩免ノ辱キ由ヲソ謝シニケル。

葦名龜王丸誕生附大庭三左衞門弑盛隆

天正十二年九月中旬。盛隆ノ内室安產。男子誕生アリケレハ、軈テ龜王丸ト號ケ、甚寵愛シテ。一家中モ喜ヒノ色ヲ顯シケル。然ル處ニ十月十日ニ、盛隆不慮ニ逆臣ノ爲ニ弑セラル。其仔細ヲ尋ヌルニ。盛隆先年二本松ニ趣カレシトキ、町屋ノ内ニ齡十四五歲ハカリノ男童。其容色イト勝レケルカ。手ニ一枚ノ花ヲ持ナカ

ラ。書ヲ讀テ居タリシカ。盛隆不圖目ニ止マリ。元來男色ニ耽ル心深カリケレハ。使ヲ以テ此子ヲ所望セラレケルニ。其父母答テ曰。奉ランハ易キ事ニ候ヘトモ。天性嗚呼ノ者ナレハ。行季如何心許ナク候。自然ノ事モアルトキハ。國主ノ御爲ニモ無之。子ヲ見ルコト親ニ不如トヤラン承ル。此儀ニ於テハ御免有テ指控ラレ被下ヘシトテ。曾テ同心セサリケルヲ。盛隆再三求之強テ此兒ヲ請受ツヽ。乘替ノ馬ニ乘セテ會津ニ歸リ。大庭三左衛門ト稱シテ。寵愛不斜。年月ヲ重ネ出世シタリ。然リト雖トモ。世ノ中ノ盛衰愛樂ノ道。互ニ移リ變ル事。偏ニ紅榮黃落ノ樹木ノ眺ニ等シキ習ナレハ。程ナク又外ノ美童ニ心移リテ。盛隆何シカ大庭ヲ疎意ニモテナサレケルニ。譜代ノ兒姓等。此間三左衛門ニ權ヲトラレタルヲ憤リ。妬シク思ヒシ折カラナレハ。皆々スサメラレタルヲ悅ヒ。傍ニ有テ各目引鼻引キ訕リ笑ヒ。後々ハ眼前ニ於テ嘲弄シケル。故ニ三左衛門大ニ怒リ。胸塞リ心迷ヒ。彼者共ヲ打果シテ腹切ンカト。千度百度思惟シケルカ。イヤ〳〵是ハ彼等カ云ニハ非ス。畢竟ハ盛隆ノツレナキ心ヨリ。起リタルモノナレハ。數ナラヌ奴原ニ恨ヲ含ムニ足ラス。イカニモシテ時節ヲ窺ヒ。盛隆ヲ一太刀恨ミ。ツラカリシ欝憤ヲ晴サント。只一筋ニ思籠ケルカ。或夜常ニ親キ者共ヲ呼アツメ。種々饗應シ。夜モスカラ酒宴ニ及ヒテ。客各退出シケルトキ。三左衛門アラ名殘惜ヤト云ケルヲ。後ニ思ヒ合スレハ。其夜ノ覺悟トコソ聞ヘケレ。既ニ夜モ明テ十月十日ノ早朝ニ。三左衛門沐浴清身シテ。出仕ノ衣服。常ヨリ美麗ニ引繕ヒテ登城シタリ。斯ル折節盛隆ハ弱鷹ヲスヱテ。書院ノ南椽柱ニ靠リテ居ラレケル。側ニ近習一人モナカリケレハ。三左衛門見之願フ所ノ幸ト。刀ヲ拔キ。走リカヽツテ切ケルニ。盛隆モ心得タリトテ。脇差ニ手ヲ懸ラレシヲ。二ノ太刀ニテ切伏セ。追手ヲサシテ逃出ル。諸士此音ニ駭キ騷キ。盛隆ノ死骸ノ側ニ集リ。大庭ヲ討留ント追駈クル者一人モナカリケル。其中ニ胴坊一

人三左衛門ヲ追懸テ走リ出ケルカ。折節向ヨリ橋大藏ト云者番代リニ登城シケルヲ見カケテ。爾々ト呼リケレハ大藏心得タリトテ西ノ城戸口ニ追詰。三左衛門ヲ斬殺ス。斯テ城下共ニ騒動シケルヲ。佐瀬金上等ノ舊臣等。心ヲ合セ制之。一先ツ靜カナラシム。斯淺猿キ世ノ中ナレトモ。責テハ亀王丸ノアリケレハ。之ヲ守立テコソト。舊恩ヲ思フ輩ハ。其志ヲ一ツニシテ幼主ノ守立ルヨリ外他事無リケル。

伊達秘鑑巻之十三終

伊達秘鑑巻之十四

東奥仙府　燕々軒　編集

伊達政宗家督相續

天正十一年癸未十月廿一日。輝宗家督ヲ政宗ヘ相續セシメ。米澤西山ノ城ヲ讓ラレ。御身ハ隱居ト號シ。米澤下長井ノ内小松ノ城ヘ移ラル。時ニ政宗十六歳。敢テ御受ナク。某未タ若年ニシテ。政道ノ統ヲ不辨。就中今世上靜謐ナラス。爭闘絶ルコトナシ。軍旅ノ掟曾テ不存。爭カ不肖ノ身ヲ以テ。速ニ御受仕ラン。政道邪マニシテ境内背キ。軍法猥リニシテ。士卒費ヘハ。家中ノ侮リ輕シメ。敵ノ爲ニ地ヲ奪ハレン事。先祖迄ノ不孝ニ候。未タ御齡傾キタルニモ候ハネハ。暫ク御代ニ座マシ。御教訓ニ隨ヒ。出陣ノ折ハ御供ニ候シ。士卒ノ駈引ヲモ見習ヒ。折節ハ代官ヲモ承ツテ。自然ト軍旅ノ指揮ヲモ稽古仕リ。且政事ノ善惡ニモ心ヲ付。家中ノ仕置ヲモ仕度ト。兼テ覺悟仕處。只今家督ヲ讓リ受

奉リテハ。一家中ノ思惑、他國ノ嘲リ遁レ難シ。且ハ御思慮不ㇾ足ニモ可ㇾ罷成ㇾ歟。先以テ此度ハ御赦免ヲ蒙リ、五七年モ御側ニ伺候仕度候ト、再應ニ及ヒ、辭退申サレケル、輝宗重ネテ曰。政宗ノ訴訟、尤神妙ナリ。去ナカラ予カ思慮有テ。讓ルトコロナレハ。必ス辭退ニ及ヘカラス。最若輩ニシテハ事早シト雖トモ、若年ノ内ヨリ物毎ニ心ヲ付。家中ノ仕置、軍ノ下知モ自ラ工夫受用セハ。末宜シカルヘシ、予カ陣中ニノミ有テ。見聞ニ年月ヲ費シテハ、墓行コト有ルヘカラス。今四境草創ノ時ナリ。身ニ受テ事ヲ務メ。譬ハ東ニ事起ラハ。政宗出陣シ、西ニ變アラハ。我馳向フト云如ク。首尾相動ク時ハ。防戰守禦進退應變共ニ全シト云ツヘシ、縦勇將猛士タリトモ。人ノ前後ニノミ從ヒテハ。物ニ伺フ心有テ。其圖ヲ外スコト多キ者ナリ。内々ニ物ヲ習テ。事調ヲ待ントセハ。一生成就スルコトアルヘカラス、必ス斟酌ニ及フ事勿レト有ケレトモ。政宗猶モ辭退有テ。尊命ヲ返シ奉ルコト、其恐多シト雖トモ。然ル上ハ責テ廿歳ニ及フ迄、家督ノ儀延引可ㇾ給ト、ヒタスラ訴訟アリケレトモ。輝宗曾テ承引ナク。我子孫ノ後榮ヲ思コト一方ナラス。一年モ早ク世ヲ繼。萬ツ仕置ニ心ヲ可ㇾ仕。我又後見トシテ、事餘ラハ共ニ心ヲ合スヘシ、是我一心ヲ以テノ故ニ非ス。一族並ニ諸老臣ノ内意タルニ因テ。我心ニ附合セシムル間。旁々急ニ思ヒ立ノ處ナリ。無用ノ遠慮アルヘカラスト。更ニ背ヒ給ハス。一門ノ面々モ詞ヲ揃ヘ、此義御受有テ可ㇾ然候。御若年ニテ御思慮ノ難ㇾ及時ハ、大守ヘ事ヲ御伺ヒ候ニ。何ノ煩カ可ㇾ有ㇾ之。達テ御斟酌ハ却テ父公ノ命ヲ違背シ玉フニ等シク候ト。何モ頻リニ申勸メケルニ依テ、政宗ニモ此上ハ兎角申スニ不ㇾ及強テ辭退ハ不孝ニ似タリ。兎モ角モ尊命ニ順ヒ申スヘシト。則御受有テ其厚禮ヲ演達アル。斯テ吉辰ヲ撰ミ。相續ノ廣メ嘉儀ノ營アリシカハ。一族郎從コトコトク米澤ヘ參向シ、兩所ヲ祝シ、種々ノ献貢門前ニ市ヲナシ。萬歳ヲ唱ヒケリ。則古例ニ順テ、祝儀ノ取繕ヒ不ㇾ斜、總

家中武功ニ到マテ、各目見ノ一體アリ、毎日雅音ノ曲、洋々トシテ耳ニ滿チ、馬上ニ陣外ニ達リテ、誠ニ勇ゝ敷ソ見ヘニケル。抑又伊達實元ハ、信夫ノ大森ニ居城シケルカ、兒ニ隱居仕度ヨシ、兩君ハ願ヒ申シ、嫡子藤五郎成實ニ跡ヲ讓リ、其身ハ八丁目ニ安住ス。其外隱居ノ願ヒ相濟、家督ヲ讓リシ輩ニハ、亘理兵庫元宗ハ嫡子亘理重宗ニ家ヲ讓リ、亘理元安ト號ス。伊達右衛門大夫宗清ハ、長孫白石若狹宗實ニ家ヲ讓リ、伊達鐵齋ト號ス。高森上野政景嫡子武藏守宗作ニ家ヲ讓リ、高森雪齋ト號ス。小梁川中務盛宗長男中務宗景ニ家ヲ讓リ、小梁川泥蟠ト號ス。桑折播磨守長宗ハ、長男治部宗重ニ家督ノ閑居シ、桑折點了不休ト號ス。原田甲斐長成ハ、長男左馬介宗長ニ家ヲ讓リ、原田休雪ト號ス。片倉備中景光ハ、長男小十郎景綱ニ家督ヲ讓シ、片倉意休ト號ス。茂庭左衛門氏元ハ、長男石見綱元ニ家ヲ讓リ、茂庭佐月ト號ス、石川右衛門宗光ハ、長男右衛門宗昭ニ家ヲ讓リ、石川嘉休ト號ス。石母田遠路景盛ハ、嫡子左衛門景頼ニ家ヲ讓リ、濱田右兵衛弘國ハ、長男左京ニ家督ヲ附ス。此面々隱居ナリト雖トモ、政宗ノ奉公少モ怠ル事ナク、父子同樣ニ出勤シタリ。サレハ奥羽ノ諸將皆使節ヲ以テ其祝儀ヲ演フル。且小身輩ハ直ニ米澤ニ參向シ、其喜ヒヲ達サレケル。

大内備前定綱米澤參向

爰ニ仙道鹽松ノ領主大内備前定綱ト云者アリ。先祖ハ百濟王ヨリ生レシ子ヨリ二十一代（異本ニ廿七代ト有）ノ後胤太宰大貳多々羅朝臣大内介義隆、周防國山口城ニ居城シ。西國ノ管領ヲ得ルト雖トモ、國家衰亂シ。大内家滅亡セシ頃。一門ノ内奥州ニ下リ。山名ノ家ニ仕ヘケル。此山名氏ハ清和天皇十代ノ後胤山名伊豆守義範ヨリ七代山名左馬頭時淸ノ舍弟山名小次郎滿氏。弘安二年三月奥州安達ニ下向有リ。鹽松ニ居住、家屋軒ヲ並ヘテ繁昌セリ。夫ヨリ十二代山名左馬頭義久ノ時ニ至テハ腹臣ノ臣トナリ。大内備前定治ト云ケル。其外石川彈正久國・小野寺越中久光・中村主水久純・彼等四人。

山名家臣トシテ内外ノ政用ヲ勤メケル處ニ。山名左馬介義久頓死シテ、家督相續ノ一子ナキニ依テ領國亂レ。家中ノ諸士散亂ス。小野寺越中・中村主水ハ、佐竹義重ヲ頼ミ。常州水戸ヘ立除、石川彈正ハ田村清顯ヲ頼ミ。鹽松ノ内仁志ノ城ニ直ニ居城シテ。田村ノ家臣トナル。大内備前定治ハ伊達晴宗ノ家臣トナリ。小濱ノ城ヲ預リ居城シテ無二ノ忠義ヲ盡シケル處ニ。嫡子大内備前定綱カ代ニナリテ。伊達家内亂ノ砌リ。定綱忽チ心ヲ變シ會津盛隆ノ味方トナリ。伊達ヘ逆意ヲ表シ相馬合戰ノ砌リモ。相馬義胤ハ加勢シタリ。サレハ定綱天性勇武ニシテ。殊ニ智謀モ深ケレトモ。表裏ヲ好ンテ信ヲ失フ質アリ。去ニ依テ或ハ敵トナリ或ハ味方トナリテ其旗色ヲ諜ル者ナレハ近年ハ只不知顔シテ折々ハ米澤ヘモ使者抔遣シ去氣ナキ風情ニモテナシテ居タリシカ。近頃政宗ノ武儀凡ニ勝レ所々ノ取合ニ武威ノ振舞拔群ナルヲ見聞シ心ニクヽヤ思ケン。祝儀見舞ニコトヨセ、且ハ行跡ヲモ窺ント思慮ヲ廻ラシ、常ニ不參ノ身トシテ。十一月七日米澤ヘ參著シ。先ツ白石若狹ヲ以テ御禮ヲ達、音物ヲ献進ス。政宗ノ曰大内當家ヲ放レテヨリ。其志海トモ山トモ度リ難ク、此迄疎遠ニ打過タルニ。今改テ參向ヲ遂タルコト。甚不審ノ至リナリ。君臣トシテ義ヲ失ヒ、時ニ變シテ身ヲ啇フ者ニ。參會無用ナリトアリシヲ高森雪齋申ケルハ仰尤至極ニハ候ヘトモ。古ヘヨリ降ル者ハ免之トアレハ。御赦免有テ御對面可然ト諫メケレハ、則其意ニ服サレ。對面アルヘキノ由ナリ、白石若狹取次之ヲ。則於書院備前ニ對顔セラレケル政宗定綱ニ向テ申サレケルハ。大内コト代々當家ヲ頼ムノ由及聞ト雖トモ、近年萬ツ疎遠ニ打過ヌル處此度ノ參入。喜悦不過之。自今以後米澤ヘ參向ヲ遂ケ、我等若年ノ間ハ、萬端ノ差引頼ミ入ノ由、念頃ニ仰セケレハ備前謹テ申ケルハ。忝キ仰不淺次第ナリ、愚臣亡父代ヨリ當家ヘ勤仕致スト雖トモ。近年伊達御内亂弓矢ノ劉、田村ヲ頼ミ入候處。聊ノコト有

テ、清顯ノ旨ニ背キ候故。其後會津・佐竹ヘ申寄リ、助成ヲ以テ身ノ上相續罷在候。自今ハ米澤ヘ相詰奉公可仕ノ間、於當地屋敷ヲ給リ候ハヽ、早速ニ引越申度由申スニ依リ。政宗喜悦有テ、其方當所ヘ引移サルヽニ於テハ。我等元來本望タルヘシ。屋敷ノコトナト安キコトナリ。此上ハ早速ニ取移シ可然由、約諾セラレケレハ。備前畏リ應諾ス。其後酒肴丁寧ノ饗應ニテ、終日定綱ヲ留置シ。暮ニ及ンテ備前厚情ヲ謝シテ旅宿ニ歸リ、兎角シテ其年ハ米澤ニ越年シケリ。

大内達變

佐竹義重・會津盛隆・岩城常陸・岩瀬盛義・石川顯光等、何レモ伊達ノ親族ナレハ。互ニ入魂タルヘキトコロ。右ノ諸將田村ノ小身ヲ侮リ。其地ヲ掠メントシテ。度々合戰絶ルコトナシ。田村清顯諸方皆敵地ニテ數年窮勞スト雖トモ。輝宗ノ時代ニハ内騷ニ拘ハリ。援兵モ成リ難ク、空シク遠間ニ及ハレシカ。政宗ノ爲ニハ清顯舅ノ御事ナレハ、田村騷動ノ折柄ハ。伊達ヨリ援兵ヲ差向ラレ成助度々ナリシカハ。會津・佐竹其外ノ諸大將。何レモ伊達ヘ中絶シ、忽チ確執ニ及ヒケリ。然ルニ其年モ暮レ天正十二年。家督始メノ嘉儀常ヨリ猶モ嚴重ナリ。一門門葉ノ諸士。遠近共ニ參勤シ、西山小松ノ兩城、門前ニ駕馬滿々タリ。三日ノ初山。四日ノ修法七日ノ連歌、十一日ノ政務始メ、十四日ノ謠初ニ至ル迄、古例ノ通執行ハレ、由々敷春ノ壽キトコソ見ヘニケル、大内備前定綱ハ。年頭ノ禮事畢テ後、政宗ヘ達シケルハ、某舊臘ヨリ種々厚恩ニ預リシカノミナラス、屋敷迄給リ、誠ニ面目ニ餘リ候。然シ雪深クシテ急ニ普請モ成難ク候ヘハ、暫時暇ヲ給リ。先以テ歸鄉セシメ、萬ツ支度ヲモ仕リ、其後妻子ヲモ召具シ、伺候可仕、其上會津・佐竹ノ恩顧モ候ヘハ。是ヲモ謝シテ後參向仕ラン。旁々以テ當分ノ暇給リ度ノ由、達テ願ヒ申ニ付、最ト許容有テ、則歸鄉ヲ免サレケリ。備前喜ヒ。恩ヲ謝シテ急キ鹽松ヘ歸リシカ、雪消テ後モ。米澤ヘ不引移、依之遠藤山城守方ヨリ度々指圖セシム

ルト雖トモ。定綱曾テ其意ニ不隨。剩ヘ返答ニ伊達殿幾度催促アルトモ。米澤參向存モ不寄ト申放チケル。抑此備前事ハ小身タリト雖トモ。生得武勇ニシテ。謀略ニ長シケレハ、隣鄕ノ諸將ト度々取合ヲ起シ。小卒ヲ以テ大勢ニ打勝。是レヲ得テケレハ。身ヲ高慢シ。勇ヲ憑ンテ敵ヲ侮ル故ニ 其言奢リテ傍若無人ナリ。政宗件ノ返答ヲ口惜ク思ハレケレハ。急キ大内退治アルヘキ由ナリ 輝宗思惟有テ大内事ハ會津・佐竹・岩城石川等ノ諸方ヘ。兼テ手寄申合スコトナレハ。大内退治ニ於テハ、諸方敵多クシテ由々シキ大事タルヘシ。先ツ和睦ノ扱ヲ以テ大内ヲ透シ見ルヘシト有テ、宮川一毛齋五十嵐芦舟齋兩人ヲ使トシテ。鹽松ヘ差越サル、其趣キニ曰。其方此度違變セラルヽニ付。政宗立腹セシメ。其地ヘ出陣セントノ結構ナリ。然レトモ輝宗ニ於テ先代ノ因ミ捨難シ。其方コト田村ヘ度々敵對、其上米澤ヘモ中絶セラレシ故。今更參向有テモ末々ハ如何アラント。氣遣ハシク疑心ヲ含ミ。違變セラレタルモノナランカ。其理ナキニ非スト雖トモ。斯ク事調フ上ハ。今改テ可咎コトニ非ス。身命知行ニ於テ相違アルヘカラスノ間。急キ米澤ヘ參ラルヘシ。政宗腹立ノ儀ハ我等宜シク取扱ハン。 諸事ハ輝宗ニ任セ申サルヘキノ由ヲ演說セシム、大内返答ニ、御意忝ク候ヘトモ。ケ樣ニ申切タル上ハ。滅亡覺悟ノ前ニ候間。全ク參向申スマシク候、其上會津・佐竹ノ近將衆ヘ申合セ、政宗御出馬ニ於テハ。援兵加勢アルヘキノ由。何レモ約諾候ユヘ、偏ニ龍ノ水ヲ得。虎ノ山ニヨリカヽリタル心地ニテ、聊カ御出馬ノ恐レ無之候ト云放シ。使者ノ扱ヒ疎輕ニシテ、耳不聞カ如クス。兩使歸テ此趣ヲ達シケレハ。輝宗重ネテ片倉意休・原田休雪ヲ差下サレ、其身氣遣尤ナリ。左アラハ自身ニ不參トモ。人質ヲ可差越ノ旨望マレケレトモ、人質ノ義モ曾テ罷成間舖由申拂フ。剩ヘ其座ニ大内親族同氏長門守。大河内兵部正ヲ始メ居合セタリシカ。 長門守申ケルハ、政宗殿大内退治ノコト。輙クハ成ル間敷候。下萠ノ

タトヘニ瓜蔓ニハ瓜トヤラン。伊達ノ弓矢御鉾先。サノミ往昔ニ替ル事モ有之間敷歟。是偏ニ毛ヲ吹テ疵ヲ求ムルノ譬ヘナルヘシト云々。此長門守ハ大内方ヨリ先年度々米澤ヘモ使者ニ來リ。輝宗ニモ御存知ノ者ニテ、後ニハ大内芳賀齋ト申ケル。伊達家二代内亂シテ弓矢區々ナリシ故、當家ノ鉾先弱キヤウニ、他國ノ唱アリシ上ナレハ、長門守斯クハ惡口シケルナリ。兩使挨拶ニ。大内事前々伊達ハ本公ノ因ヲ以テ輝宗擒黨給ヒ。是程ニ心ヲ盡サル、ト雖トモ。其情ヲ失ハル、上ハ兎角ノ論ニ不及御自分米澤ヘ召上サルルカ。又ハ御退治アルカ何レ後日ニ見得申サント尋常ニ挨拶シテ米澤ヘ歸リ、其趣ヲ委細ニ御父子ヘ演進シケレハ、兩所共ニ猶口惜キ事ニ思ハレ、イヨ々々出陣アルヘキニ極リケリ、其後原田左馬介宗長、片倉小十郎景綱、兩人ヲ呼ンテ。政宗申サレケルハ。會津盛隆先達テ使者ヲ遣シ。大内備前赦免ニ於テハ、米澤ヘ可遣、會津ニ於テ少モ介抱アル間敷ヨシ云越ト雖トモ我此底意ヲ探ル處ニ、盛隆黨テ備前ヲ引付、彼ニ逆意ヲ企サセ、我ヲシテ憤ラシメ、大勢ヲ發シテ大内ヲ討タハ米澤ハ空虛ナラン。其弊ニ乘テ盛隆兵ヲ發シ。我留守ヲ討テ米澤ヲ掠メ取ント謀計ノ使ト察セシ故。大方ノ挨拶ヲ以テ應答シタリ。果シテ此度鹽松ヘノ再使、休雪等カ具ニ樣躰ヲ見屆來ルノ處。大内逆變セシムルコト。畢竟盛隆カ勸メナルコト顯然タリ。介抱スマシキ由云送リナカラ。備前カ方ヨリ一味ノ誓文ヲ請取置。尋テ逆意ヲ勸ムルコト會津ノ表裏、大内ヨリモ口惜キ次第ナリ。大内小身ニシテ後楯ナクテハ。當家ヘ敵對成難シ。旁々以テ會津合躰ノ謀叛疑ナシ。尤此段體ナル方ヨリ告知スル者アレハ疑ナキニ非ス。如何程武勇ニ誇ルト云トモ、大内ハ小身ナリ。今指當ル大敵ハ盛隆ナレハ、先ツ會津ヘモ一當アテ、其謀計ノ先ヲ折キ。此方ニ於テ先立テ察之、無油斷備ヲ示サハ、鹽松ヘ發向スルトモ、米澤留守ヲ窺フコト不能ヘシ。斯ノ後大内ヲ討ンニ。後ロニ災アル

ヘカラス、此義如何思フトアリケレハ、原田・片倉カ曰、仰尤理ニアタリテ候、大内退治ハ日ヲ延テモ。會津ヨリ助勢ナケレハ。外ニ可加勢ナシ、此度ノ一儀大内ハ本ニシテ枝ナリ、會津ハ枝ニシテ本ナリ。仰ノ如ク會津ヘ御手當可然ト申ケレハ。先ツ此義ニソ落付ケル。政宗重ネテ申サレケルハ、會津ヘ働キ入ンニ。彼口ハ何方モ難所ニシテ。進退自由ナラサレハ。輙クハ越行難シ。若シ會津ノ内ニ、味方ヘ志ヲ通スル者一兩輩モ非スシテハ。卒忽ノ出陣如何ナリ。會津ノ内ニ味方ノ便トナルヘキ者。心苑有ルヘキヤト問レケレハ、左馬介承リ。幸某與力ノ内ニ平田太郎左衛門ト申者。元來會津浪人ニテ、生得辯舌才覺ノ者ニ候ヘハ。彼ヲ差越、兩人モ味方仕樣ニ取計ラハセ可申ヤト申シケレハ、其儀可然ト有テ、則平田ヲ呼テ談シケレハ、平田仔細ナク領掌ス。左馬介猶謀使ノ品々云含メ。頓テ會津ヘ遣シケル。兎角シテ其年モ秋ニ至リ、内間ニ時ヲ移シケル。斯ル處ニ於會津。大庭三左衛門逆心ヲ發シ、主君盛隆ヲ弑シ、會津騷動不斜。幼主亀王丸未タ水子ノ事ナレハ。上下事ヲアヤフム折柄ナリ。依之此弊ニ乘テ。會津ヲ攻テ可然カ。又此騷動ニテハ、援兵加勢ノ沙汰モアルマシケレハ。速ニ大内退治有テ。枝ヲ拂テ本ヲ伐ルノ法可然カト。兩條ノ評議區々ナリシカ。何篇ニ先會津ノ手寄リヲ求ルコト可然ト一決シケルカ。時節ハヤ寒風ニ指懸リ。雪ハ山々ニ積リケレハ。難所ノ進退叶ヒ難ク。出陣ハ明年ニ延。緩々ニ事ヲ可謀トテ。其年ノ沙汰ハ止ニケリ。

關柴合戰

斯テ平田太郎左衛門ハ。左馬介カ内意ヲ含ミ、米澤ヲ立テ會津ヘ赴キケル處ニ。盛隆逆臣ノ爲ニ弑セラレ、家中騷動、領國穩カナラサレハ卒忽ニモ事ヲハカリ兼。兎ヤ角ト月日ヲ送リ見合セケルカ、盛隆死後ノ政道ハ。何事モ皆富田平田等ノ舊臣執計ラヒケレハ、上下漸々落付、諸將士モ己カ領地々々ヘ退キケル。依之太郎左衛門思惟ヲ廻ラシ、關柴ニ住セル松本備中。柴

野彈正ヲ語ラヒケルニ父子共ニ安々ト同心ス。宍澤九郎五郎モ同心シケレハ平田悦ヒ。急キ米澤ニ馳歸リ、會津北方ニ於テ柴野・松本父子共ニ御味方可仕由、其外一兩輩同心ノ者有之由、具ニ之ヲ達シケレハ輝宗ノ曰然ル上ハ會津ヘ手當可然。政宗ニハ宍澤ヲ案内者トシテ。檜原口ヨリ向ハルヘシ。原田左馬介ハ、新田常陸ト共ニ。松本備中・柴野彈正ニ加ハリ、事ヲ謀ルヘシ。予ハ先ツ此度ハ米澤ヲ不離、留主ヲ可務ト下知セラル。依之先ツ原田左馬介宗長・新田常陸等其外人數ヲ卒ヒテ。天正十三年五月二日、猿倉越ヘト云難所ニカヽリ。會津ヘ越テ忍ヒヤカニ關柴ニ至リ、松本備中・柴野彈正カ舘ニ參著ス。此者共城持ニハ非レ共要害ニ屋敷ヲ構ヘケレハ、柵逆茂木ヲシツラヘ、猶嚴重ニ防戰ノ備ヲ設ケ。左馬介等カ手勢ヲ合セ。彼是八百餘人楯籠リ、會津手切レノ事ハシメニ。北方五十餘ケ所ノ在家ニ火ヲ放チケル。コハ如何ニ何者ノ所爲ソト。周章騷キ若松ヘ注進ス。富田・平田大ニ驚キ則軍兵ヲ催促シ、黑川ヲ發シテ。鹽川ノ七宮自然齋カ舘ニ著テ各評議シケルハ。抑是程ノ一大事ヲ、備中等カ思案ハカリニテ思ヒ立タルニハ有ヘカラス。味方ノ中ニモ彼カ一味ノ者アランカ。殊ニ今此川ヲ越テ敵ニ向フ跡ニテ。若シ橋ヲハツシ。裏切セラレハ譬我々矢武ニハヤルトモ甲斐アルマシ。左有ルトキハ葦名累代ノ武名。忽チニ滅亡セン、兎角今度ハ小事ノ大事ナレハ。所詮此川ヲ前ニ當テ。寄來ル勢ヲ支ヘ、幾度モ戰ハンニ。味方ニハ萬事ニ付テ便リヨケレハ。敵必ス利ヲ失ハンカ。其上ニテ敵ノ機ニ乘テ追討ニモスヘシト。評定區々ナリ。時ニ中目式部進ミ出テ。旁々ノ由ナキ長僉議ニ時尅移リ候。某ハ各モ存知ノ通、慶德善五郎トハ無二ノ入魂ナレハ、今度敵亂入シ北方ヲ燒拂フ。慶德一人ニテ大勢ヲ引受ハ、定テ討レンコト必セリ。斯ル事ヲ知ナカラ、目前ニテ討センコト武道ノ本意ニ非レハ、某一人ナリトモ慶德カ舘ニ走行、安否ヲ共ニ決シ可申ト云ケレハ。各言葉ヲ揃ヘ、イヤ

々々是程ノ大事ヲ指置。私ノ義不義ヲ論センヤ、只此ロヲ支ヘテ、領地ヲ敵ニ奪ハレス。葦名ノ家相續ノ思慮コソ專一ナレ。御邊假令慶德カ方ニ行ル、トモ。今時ノ世ノ中ナレハ、彼モシ敵ニ一味ノ志アラハ如何可爲ヤ、中目カ云フ。旁々ノ思慮ノ如ク。萬ニ一ツモ慶德心變リセハ。即座ニ討テ捨ンニ、何ノ仔細カアルヘキ、所詮某ハ各ノ思按ニハ同スヘカラストテ打出ケルニ。本名木工允ハ元來中目ト合躰ノ者ナレハ。同ク伴フテ慶德カ宅ニソ趣キケル。斯ル處ニ如何ナル天魔ノ勸メニヤ有ケン、米澤ノ間者平田太郎左衛門。俄ニ心ヲ飜ヘシ。富田平田カ鹽引ノ陣ヘ駈入。此度ノ始終不殘之ヲ告達シ。政宗ハ勢ヲ揃ヘテ檜原口ヨリ向ハルト雖トモ。未タ米澤ヲ發足セス。先ツ此口ノ檢見トシテ、原田左馬介一頭・新田常陸彼是手勢ヲ以テ。關柴ヘ引籠リ、松本柴野ニ牒シ合。惣勢七八百ニハ不過候ト。具ニ告之ケレハ。會津勢始メテ安堵ノ色ヲ顯ハシ。心靜カニ手分シテ關柴ヲ攻ントス、中目・本名兩人ハ。急キ慶德カ方ニ行テ見ルニ。夜既ニ曙ニ及テ門未タ開カサレハ。中目指寄門ヲ敲キ內ニ入テ。慶德ニ對面シ、鹽川ニテ面々爾々ノ僉議ナルヲ、我ハ如斯云捨テ來レリ。扨モ世ノ中ノ次第、備中等カ所爲故ニ爭亂ニ及ヒタルコト無念ナリ。此儘ニテ敵ニ取籠ラレンヨリ。此方ヨリ逆寄ニシテ思フ敵ニ逢テ。共ニ討死セハヤト存。本名共々來レリト云々。慶德則同心シテ、手勢二百餘人。直チニ慶德ヲ打立、小荒井ノ宿ニカヽリ。街道ヲ直ニ寺窪ト云所ニ到テ。敵ノ樣子ヲ伺フ。斯テ關柴ニハ平田俄ニ心ヲ變シ。會津ヘ回忠シテケレハ。今ハ此手ノ樣子敵方ヘ明白ニ知ケル上ハ。小勢ヲ以テ水石ノ固メモナキ。此屋舖城ニ引籠リ。四方ヲ圍テヤミ々々ト。討死センヨリハ。中途ヘ出テ、一戰ヲ遂。花々シク討死スヘシ、平田カ敵ヘ通セスハ。五七日モ指控ヘ。米澤ノ出陣ヲ待テ、事ヲ謀ラハ必定勝利アルヘキヲ、惜キ平田ノ振舞。今更怒ルニ詮ナシ、一刻モ早ク打出テ戰フヘシトテ。原田・新田・松本柴野其他

一味ノ諸士雑兵、合テ八百餘人ヲ二手ニ分。新田常陸ハ先陣ニ進ンテ、土橋瀧川ヲ打越稻田ノ白山ノ前ニ陣ヲ取ル原田ハ二陣ニ控テ、大用寺川ノ彼方總社原ニ陣セリ茲ニ鹽川ニ支タル若松勢ノ内佐瀨源兵衛ハ中務式部カ弟ナリシカ、兄カ先驅シテ總社原ニ向ヘシト聞己カ手ノ足輕並ニ一味ノ者共ヲ引具シ、鹽川ノ街道勝ノ里ニカヽリ、新田常陸カ備タル處ヘ、一文字ニ突テカヽリ散々ニ攻戰フ、赤澤勢ノ中ヨリ、葉名左近ト云者群ニ勝レテ驅廻ル、黑川勢ノ中ヨリ。棚木何某ト云者馳合セ、馬上ニテ無手ト組ンテ落ケルカ、指違テソ死ニケル是等ヲ軍ノ花トシテ入亂テ戰ケル又寺窪ニ控ヘタル中目慶德カ手勢ハ、原田カ陣ヲ目ニ掛テ大用寺川ヲ渡テ。原田カ勢ト戰フトコロニ鹽川ニ殘リタル黑川勢、佐瀨•中目ヵ拔懸ニ。先ヲ越サレタル口惜サヨトテ、能倉ノ街道ヲ眞直ニ總社原ニ押寄、圍ヲ揭テ攻蒐リ黑烟ヲ立テ揉タリケル、伊達勢ハ山路ノ嶮岨ヲ超テ。士卒勞ニ及フトイヘトモ

元來義ヲ重ンスル者共ナレハ。爰ヲ追立ラレテ嶮難ニ懸テ引キ敗ラハ、一人モ助カル者アランヤ、迚モ死ナン命ナレハ。一足モ不退、爰ニテ討死遂ヘシト。互ニ勇々勵シテ防戰イサヽカ不怠。兩陣討ルヽ者數ヲ不知。會津ノ先陣高田播磨諸勢ヲ勵シ、自ラ槍ヲ取テ先ニ進ム、原田左馬介•柴野彈正モ士卒ヲ下知シ。自身太刀打シテ四方ニ當ル。サレトモ伊達勢ハ僅ニシテ。外ニ後詰ノ助モナシ會津方ハ領國ノコトナレハ、諸勢追々ニ馳加リ。次第々々ニ新手ニ成テ攻戰ノ、依之松本備中モ沼澤出雲ニ討レ、白山前ノ戰モ敗レケレハ、新田常陸モ亂軍ノ中ニテ討死シタリ。今ハ原田カ陣モ大勢ニ圍レ既ニ危ク見ヘケル處ニ、原田カ家人片倉勘八•芦立傳三郎ト云者。原田•柴野ニ向テ早々此場ヲ引退候ヘ。跡ハ我々防戰致サントト云モ果ス、群リ來ル大勢ヲ引受。無二無三ニ切テ廻リ。四方ニ當リ八方ニ馳立テ、死狂ヒニ力戰シケレハ。黑川勢タマリ得ス川岸サシテ追マクラル、其隙ニ原田•柴野從兵少々

引具シ。一先ツ綱木ト云所迄退タリケル。片倉・芦立ハ敗卒ノ中ニ蹈止マリ。千變萬化ヲ盡シテ防キ戰ヒシカ、芦立傳三郎ハ大勢ニ取圍マレ、遂ニ討死ヲ遂タリケル。片倉勘八ハ敵ヲ四方ヘ追散シ、左馬介ニ追付ント。敵ノ首二ツ提テ、綱木ヲ指テ引取ケルニ。關ノ宿ニテ左馬介ニ追付。軍ノ次第ヲ語リ、二ツノ首ヲ見セニケル。左馬介其粉骨ヲ感賞シ、汝ハ先立テ米澤ヘ馳行。御出馬アラハ於ニ途中一其旨ヲ申達ヘシト云含メ。其身モ米澤ヘ引入ケリ。扨又政宗ニハ、兼テ五月三日ニ出陣ト議セラレケルニ、如何シタリケン、總勢未タ集ラネハ。先ツ長井勢ハカリヲ召具シテ。檜原口ヨリ打入ラル、然ル處會津ヨリ此口ヲ押ヘタル、三瓶大藏以下ノ兵路ヲ塞キ。通サシト防キケルヲ。兎角シテ打散シテ通ラレケル程ニ。思ノ外遲滯ニ及ヒ、日モ西山ニ傾キヌレハ。山中ニ夜ヲ明シ。翌未明ニ白石若狹ヲ先陣トシテ。萱カ峠マテ打上ラル。白石ハ五六町先立テ。長坂ト云處ヲ下リケルカ。折シモ五月雨降續キ、イトヽタニ若葉茂リ。路滑ク山險シク。霧深カリシカハ、本陣ニ使ヲ馳テ。カヽル不審キ隘路ヲ通ルサヘ心元ナク候ニ。今此前後ヲ分タヌ霧ノ中ニ、自然伏兵ノ設有テ。若驅出ル者ナラハ。一楯モ可ニ立合一トモ不レ覺候。一先檜原ニ御陣ヲスヱラレ。諸軍ノ來リ集ルヲ、御待有テ可レ然ト申シケレハ、政宗實ニモト同心セラレ、萱カ峠ヨリ檜原ニ陣ヲ移サレ。暫ク總軍ノ來ルヲ待レケル。斯ル處ヘ片倉勘八ハ。左馬介カ命ヲ受。政宗ノ本陣ヘ馳參シ、平田太郎左衛門カ心替リ。並ニ軍ノ次第。新田松本カ戰死。且芦立傳三郎カ討死等マテ具ニ申達シ。主人左馬介事、此度ノ手合セヲ仕損シ、一戰ニ後レヲトリ、其上味方ノ諸士討死仕ルニ依テ。面目ヲ失ヒ。遠慮愼ムヘキノ至リナレハ。直々米澤ヘ引取、御出馬先ヘ參向不レ仕ノ由。共ニ相演ケル。政宗之ヲ聞玉ヒ、平田カ變心口惜キ次第ナリ。原田カ與力ニテ、其方ノ手ヨリ事ヲ仕損シタルコトナレハ、遠慮ノ趣キ尤ナレトモ、軍中ノ習。勝敗ハ時勢ニヨレハ、敢テ原田カ後

レヲ取タリトテ、不覺トハ不可言。一旦遠慮スルトモ。愼ニ不可及ト有テ、米澤ヘ其趣ヲ云越サレ、則勘八ヲ召テ、此度退口ノ働キ。神妙比類ナシト稱美有テ。其賞トシテ有銘ノ一刀ヲ賜フ、陪臣ノ身トシテ。面目殊ニ餘リテソ見ヘケリ、

護法山示現寺構要害事

今度松本備中ハ、譜代ノ主君ニ弓引ケル天罰ニヤ。事ナラサルノミナラス。關柴ノ合戰ニ 黑川勢沼澤出雲討レケレハ。其子柴野彈正ハ。如何ナル所存ニヤ有ケン。米澤ヘモ來ラス、何處トモナク落失ヌ。備中カ父松本長門ハ。齡既ニ九十ニ及ヒ、行歩心ニ任セサル故。黑川ニ殘リ居タルヲ、主ニ弓引無道人ノ親ナレハトテ。富田・平田カ下知トシテ、天寧寺河原ニ引出シ。串刺ニシテ失ヒケル。古來七十稀ナル者ハ。死刑ヲ宥ムルハ天下一統ノ情ナルニ。イカニ謀叛人ノ親ナレハトテ。百歲ニ近キ老ノ身ヲ、串刺ノ刑ニ行ソコト。餘リトイヘハ情ナシ、東西モ分タヌ幼君ナレハ。政道ノ權ハ皆富田・平田カ心ノ儘執行ヒ、斯ル刑罰モ度々ナレハ、葦名家ノ廢亡モ遠キニ非スト。心アル人ハ嗟嘆シケリ。是ニ就テ護法山示現寺ノ 住持樹芳東堂モ。備中カ弟ナレハ、兄ヲ討レ父ヲ害セラレタル上ハ。深ク憤リ思フラン。然ルヲ沙門ナリトテ赦シ置ハ。後日ニ必ス臍ヲ嚙ムノ悔アルヘシ、事ノ序ニ 此法師ヲモ誅スヘシナトト僉議スル由。樹芳ホノカニ聞テ。コハイカニロ惜キ世ノ沙汰哉。兄備中無道人ナレハトテ、我ナンソ累代ノ君ニ對シ。野心ヲ含ンヤ、然レトモ黑川ノ面々。科ナキ沙門ヲ疑ヒ、斯ル沙汰ニ及ヒヌル上ハ。如何ナル謀ニテカ。誅セラレンモ難計、所詮要害ヲ構ヘ楯籠リ。非常ノ枉難ヲ免レ 辭ヲ盡シテ陳謝シ。ソレニテモ不叶ハ。恨ノ筋矢射懸テ尋常ニ自害セハヤト思定メ。兼テ相馴レタル 地下人ヲ驅催フシ 護法山ノ尾崎ナル坂口纔ニ八九間カ際タニ、土ヲ高ク築テ、通路ヲ塞キ。東方ノ鼻ヲ山際迄深サ七尺計ニ乾堀ヲホリ通シ、額ニハ柵ヲフリ、門前ノ溪水ヲ堰入タレハ、程ナク碧

水蕩々ト湛ヱ、緑樹森々ト深クシテ。タトヘ内ヨリ矢一筋射出サストモ、左右ナク打入ヘキヤウハ無リケル。殊ニ一途ニ思切タル者共ナレハ。易々ト討ルヘクハアラネトモ。曾テ弓矢ノ道ヲ知ラヌ僧徒ノ。纔ナル一山ヲ頼ニシテ。郷民百二百驅集メタルヲ。事々シク甲冑ヲ帶シ、軍勢ヲ催シテ攻討モ。世ノ聞ヘ不穩、トヤセン角ヤセマシト、僉議區々ナリケルカ。法師ナリトテ免シ置ハ武威ノ不足ニ似タリ。此上ハ彼僧等カ心底ヲ糺明シ、必定任俠ノフルマヒセハ。押寄打テ棄ヘシトテ。黑川ヨリ大勢ヲ遣シ。「先護法山ノ此方ナル河原表ニ控ヘテ。使ヲ示現寺ニ遣ハシ、此頃僧徒ニ似合サル闘諍ヲ企。勢ヲ集ムル聞ヘアリ、若シ心底ニ別義ナクハ速ニ出テ意趣ヲ述ラレヨト云々。樹芳聞テ是愚僧カ心ヨリ起テ思ヒ立タル事ニ非ス。備中カ弟ナレハ叛逆ニ與シヌラン、方便ニテ可誅ト沙汰有之由。告知スル者候ヘハ。敢テ野心ナキ身ノ。屍ニ耻ヲ晒サンヨリハ、暫シ要害ヲ構ヘ。急難ヲ免カレ。無逆意ニ仔細ヲ陳シ其ニテモ許サレスハ。討手ノ輩ニ一矢射テ。自害セントコソ存スレ、奚ソ慈悲ヲ專ニスル沙門ノ。嗔恚ノ闘諍ヲ企候ハンヤト。佛祖ニ誓テ陳シケレハ、此上ハ其沙汰ニ不可及トテ。各疑心ヲ黜シ、黑川ニソ引歸シケル。

示現寺開山玄翁和尚之事

抑此寺ノ開山玄翁和尚ノ行狀ヲ窺フニ、和尚ハ越後ノ國萩ノ里ノ人ニシテ、其父ハ源ノ何某トカヤ云々。其子幼フシテ異稟アリ。七歳ニシテ出家センコトヲ父ニ請ヒ。同國陸上寺ニ登リテ兒トナリ、程ナク俱舍論三十卷ヲ誦ス、年ヤヽ長スルニ及テ、譬喩方便ノ權門ハ、頓悟成道ノ要法ニアラス。願クハ竊ニ少林ノ遺風ヲシタフテ。一華五葉ノ結果ヲ甘ンセンコトヲ要シ、十九歳ニシテ薙染シ、遍ク列岳ノ諸善智識ニ會參シテ。終ニ能州惣持寺ニ至リ、俄山禪師ニ謁シ進ラセ、心ヲ敎外ノ別傳ニヒソメ。身ヲ工夫純一ノ禪床ニ勞スル事八箇月。和尚一日方丈外ニ面壁シテ坐セリ。師

錢ヲエタリ、最稀有ノ思ヲナシ直ニ吾家ニ歸リ。果報ノ程ヲ爐ニ墮シメ。忽チ髻ヲ切テ出家シ。穢土ノ苦界ヲハナレケレ、コレ則慶昌庵ノ祖ナリ、爐モ祖カ言ニ恥心シ、終ニ懺解ノ本明ニ至リ、同ク髮ヲ剃落シ、比丘尼ト成テ一庵ヲ結フ是レ格庵ノ祖ナリ 去レハ和尚ハ知道奇特ノ大善智識ナリト云ヘトモ、後小松院應永七年正月七日示寂有テヨリ當今ノ始ニ及フ。凡三百年ナリ。抑射禮ノ犬追物ハ近衛院久壽二年ニ、三浦上總ノ介ニ勅宣有テ。下野國那須埜ノ狐ヲ狩シメ玉フヨリ事始リ。世ノ聞ニ昔ンシヌレハ、今更記ニ不レ及其時彼野干ノ精氣怪キ石ニ化シテヨリ、後小松院明德應永ノ頃マテ凡二百三十餘年カ間。此石ノ邊リニ近付人民畜類ハ不レ及レ言、忽チニ石毒ニ當ツテ不レ沒ルハナシ。ユヘニ世擧テ殺生石ト號ク。去ホトニ明德元年ノ春、鹿苑院殿ヨリ、能州總持寺ヘ使者ヲ立ラレ、時ニ那須野ノ殺生石ノ害惡ヲ衰シメンニ、一山ノ法力ヲ以テ引導セシメ、彼一國ノ士民ヲ安シ申サルヽニ於テハ、叡慮ニモカナヒ、武恩モ深カルヘキノヨシ仰ケレハ、貴命ニ應シ今ノ五塔頭ノ一祖大徹禪師。那須野ヘ下テ殺生石ヲ一見アルニ、年ツモリテ死タル鳥獸ノ白骨。堆シテ山ノ如クナルヲ、拄杖ニテ掻ハラヒ。手ニテ石ヲ撫ラレケルニ、石忽ニ震動シテ奇驗アリトイヘトモ、石毒ノ氣未タ滅セス。是ヨリ六年ノ風霜ヲ經テ應永二年五月十一日、源翁和尚那須野ノ溫泉ヘ湯治ノ爲ニ行レケルカ、彼殺生石ニ向テ垂示シテ曰ク。

汝元來石頭、喚謂殺生石。靈自何來、而受業報如是、破去々々 自今以後證汝成佛性眞如之全體。

云了テ三度擧頂シテ曰 會那々々

法々塵々端的底、本來面目未曾滅 現成公案大難事

異類中行住度量。

誦シ了テ拄杖ヲ以テ一卓ス 時ニ石面震動シテ忽チ三ニ破裂ス 和尚斯ル奇特ノ靈驗有ルヲ如何ソ、永代擯罰セラレタルソト、其謂ヲ仄カニ聞ニ。末代ニ及テ

亦斯ル稀代ノ障礙有テ。人民ノ苦ニ至ルコトアラン時。後世我本山ノ法力ヲ頼ンニ、和尚ノ如キ有驗ノ活僧ナケレハ。是一山ノ瑕瑾ナリ 所詮此僧ノ龜鑑ニ爲サン爲メトナンキコヱシ。

政宗檜原出陣附猪苗代盛國隠謀

會津表ノ間者平田太郎左衛門回忠ニ依テ、柴野彈正ハ行方ナク落失。松本・新田ノ輩ハ一戰ニ討死シ、原田左馬介ハ敗北シテ、米澤ヘ引取シカハ、政宗愈憤リ深ク、五月三日檜原表ヘ出陣有シカ。三瓶大藏等ノ兵卒路々ヲ遮リケレハ、是ニ隙トリ 柴野・松本等カ一味ノ計策ニモ間ニ合ス、空シク萱ケ峠ヨリ引返シ。暫ク檜原ニ陣ヲスヘ、軍勢ノ遅參ヲ待合サル。會津ノ勢ハ大鹽ノ城ニ籠置、檜原口ヨリ寄來ル伊達勢ヲ遮ラント、防戰ノ備嚴重ナリ 抑此口ハ會津北方ノ難所ニテ、山上迄ハ通路ノ便有ト雖トモ。山下ヘ落スヘキ道甚嶮難ニシテ 假令城近ク打寄スルトモ、備可レ立地形モナク、大山ケハシク岩石重リ出テ。尺寸ノ空地ヲ尋ヌルハカリナレハ。先陣合戰アルトモ、後陣之ヲ不レ可レ救。實ニ不レ關不レ守ノ隘路ナリ、政宗ハ檜原ノ領主檜原四郎兵衛ヲ呼出サレ、若松ノ城ヘ可レ取掛、路次ノ案内ヲ問ハレケルニ。桑折點了不休齋進テ申ケルハ、コレヨリ會津口大鹽エハ、山谷巉々トシテ峯ソヒヘ。大木茂リ路細ク、苔水岩石ヲ垢付シメ 滑ルニ辷リ、走ルニ倒レ。大勢ノ通路不レ可レ叶、畢竟此口ヨリ出陣ト定メラレタル。最初ノ計略ト申スハ。關柴ノ一揆ニ、敵ノ疑心ヲ起サセ置 其間ニ此難所ヲ潜ニ越行 不意ニ黑川ヘ押懸、一戰ノ勝利ヲ得ルカ。左ナクハ鹽川ヘ向ヒタル、若松勢ヲ指挾ンテ攻破リ。伊達ノ武威ヲシメシテ後、大内ヲ退治アルヘキノ結構ナリシニ。平田カ回忠ニ依テ。身方ノ方便露顯シ、關柴ノ合戰モ敗レ、敵方ニハ如レ形備アレハ、今更此口ヨリ攻入ヘキ軍法ニ非ス、其上大鹽ノ城ニハ、大勢ヲ籠置タルコトナレハ、縱攻ルトモ味方利運ハ十ニ八九アルヘカラス。斯ル難所ニ、炎天ノ時節取籠リテハ。軍勢難儀ニ可レ及候間、一先ツ

時ヲハカリ。會津發向ハ重ネテ御思慮廻ラサレ可レ然ト諫メケレハ。政宗最ト同意有テ。大鹽ノ城攻ハ延引ノ由觸ラレ。追々ニ馳來ル諸勢モ米澤ヘ歸サレ。旗本ノ手廻リ三百騎ハカリ殘シ置レ。檜原ノ山里ニ逗留アル。如レ是會津表ハ手切アリケレトモ。二本松境ハ無事ナリ。其頃伊達大森ノ城主ハ伊達兵部實元ナリシカ。子息藤五郎成實ニ大森ノ城ヲ渡シ。其身ハ去ヌル頃隱居シテ。八丁目ニ安住シケル。然ルニ二本松ノ領主畠山右京亮義繼ヨリ。度々實元方ヘ使者ヲ遣ハシ。別シテ入魂ヲ求メラル。其底意ヲ窺フニ。會津・佐竹何レモ義繼ノ身方ナレトモ。政宗ノ武威自然ニ秀シカハ。此度伊達ノ弓矢募ラハ。實元ヲ頼ミ伊達ヘ便リ。領地ヲ相續セント。義繼內々分別セラレシトナリ。依レ之二本松表ハ靜謐ナリシカハ。伊達藤五郎成實。五月八日ニ大森ヲ立テ。同九日檜原ノ本陣ヘ參著ス。政宗則對面有テ。二本松ノ樣子ヲ尋ラル。成實申ケルハ。愚父實元方ヘ。義繼ヨリ度々書翰ヲ送ラレ。使者ノ往來有レ之。イト念頃ニ取結ハレ候故。二本松表ハ靜謐ニテ候。義繼當家ヲ頼ル底意ト相見得。家臣遊佐下總ト申者。愚父多年懇切タルニ依テ。彼ヲ以テ度々使者ニ預ル由申シケレハ。政宗則左右ノ人ヲ拂ハレ。暫ク密談有テ後。政宗申サレケルハ。二本松境靜謐ノコト。偏ニ父子ノ働キ神妙ノ至リナリ。然ニ當方會津ノ境。大險ニシテ攻寄ヘキ術ナシ。其上平田太郎左衛門カ變心ユヘ。身方ノ軍法露顯ニ及ヘハ。先以テ此手ノ役ハ延引セリ。且ツ鹽松ノ大內モ。此弊ニ乘テ後軍ヲ襲ンモ難レ計。難所ニ人數ヲ留置。前後ニ敵ヲ受テハ。進退心ニ叶ヘカラス。先々軍ヲ班シテ。二本松境ヲ靜メン事肝要タルヘシト。桑折點了以下諸將ノ諫メ尤ナレハ。近日米澤ヘ歸陣シテ。大內ヲ退治スヘシトアリケレハ。成實又申シケルハ。會津芦名家ノ事。盛隆ノ時ヨリ政事ニ私多ク、公事訴訟ノ捌キ直ナラスシテ。家中不快ノ輩有レ之由。其上盛隆不慮ノ橫死。子息ハ未タ幼稚ト云。一國ノ政務ハ富田・平田カ權柄ヲ握リ候ユヘ。兩雄

爭フノ心アレハ。自ラ諸將士モ二ツニ別レ候ヤウニ承リ及ヒ候 然ル上ハ何トソ因ヲ以テ謀ヲモメクラシ候ハヽ身方ニ屬スル者モ可レ有レ之哉。某家來ニ羽田右馬助ト申者ハ。會津家臣猪苗代彈正盛國カ家來。石部下總ト申ス者ニ所緣ノ筋有レ之。兼々申談スルコト候ヘハ、幸此度右馬助ヲモ召具シ候間。彼カ手寄ヲ以テ彈正方エ密通シ、相語ラヒ見申スヘキヤト申ケレハ。政宗何ヨリノ謀ナリ。急キ取計ヒ可レ然トテ 則右馬助ヲ召出シ。其方猪苗代ニ因有レ之由。此度計策ヲ廻ラスヘキカ爲 會津表ヘ差越サルノ間。隨分ト智謀ヲメクラシ 彈正カ心ヲ引動シ。身方ニ屬スルヤウ忠義ヲ勸ムヘシト有ケレハ。右馬助畏テ、某不肖ノ身ヲ以テ。密謀成就仕ランコト。御受如何ニ候ヘトモ 猪苗代所緣ノ筋ヲ以テ 其命ヲ蒙ル上ハ 違背仕ランハ却テ恐レ多ク候間。事調ハヌ迄モ。隨分思慮ヲメクラシ御身方ニ引付可レ申ト應諾ス 則成實政宗ノ前ニテ 書札ヲ認メ 右馬助ニ相渡ス。片倉小十郎・七宮伯耆守モ添簡可レ遣ノ旨申サルヽニ依テ、何レモ相認メ、成實カ書翰トトモニ 右馬之助ニ相渡シ。返事ハ直ニ大森ヘ持參スヘシト 委細ニ申シ含ム 右馬之助則檜原ヲ立テ猪苗代ヘ赴キケル。右七宮伯耆守ハ 元來會津浪人ニテ、鹽川ノ七宮自然齋カ由緣ニテ。兼テ便宜モ有レ之ユヘ。斯ク添翰ヲモ申シ付ラレケル、政宗重ネテ二本松境無二心元一思フ間、成實事ハ早々大森ヘ歸城スヘシトアリケレハ 藤五郎承リ最早暮ニカヽリ。其上從卒モ草臥候ヘハ。明朝早旦ニ可レ罷歸一由申シケレトモ。義綱表裏モ難レ計一刻モ早ク歸城スヘシ、今夜ノ旅宿ハツナキノ民部カ所申シ付ル間、早々出立スヘシトアルニ依テ 成實遲滯ニ不レ及 速ニ檜原ヲ立テ大森ヘ歸城シケル。其後四五日過テ、檜原ヨリ三浦式部・七宮伯耆兩人ヲシテ 大森ヘ差越サル。其趣キハ猪苗代ヨリノ返事 此地ヘ到著セシムルニ依テ、一々披見セシムルノ處。彈正同心ノ由云送ル。偏ニ其方才覺故、會津表ノ便リヲ得、滿足不レ過レ之 其地ヨリ又以テ猪苗代

へ返答セシメ。猶更相語フヘキ旨ナリ。依レ之兩使ヲハ大森ニ留置。三藏軒トテ。元猪苗代ノ出家ナリシニ。大森ヘ來リ。成實扶助シ置ケルカ。彼僧ヲ使トシテ。大湯通リヲ越ヘシメ、猪苗代へ指遣ス、其狀ニ曰、

從二檜原一進候、書翰之御返答披見申候處、政宗方ニ奉公可レ有由。致二滿足一候。於二政宗一悅喜不レ斜候。此上者御望之儀モ候ハヽ。具ニ可レ承候。政宗判形調可レ進候謹々。

五月十八日　　伊達藤五郎

成實判

猪苗代彈正殿

彈正則披見セシメ、直チニ返翰ヲ認メ申遣ス　其趣キニ曰。

一會津御手ニ　入候ハヽ。北方半分　知行可レ被レ下候事。

一我等以後會津之者。御奉公申者候共。於二會津一如二仕置之一。拙者座上ニ被二指置一可レ被レ下候。御譜代衆ニハ構無レ之事。

一御弓矢被二思召一候通ニ無レ之候ハヽ、猪苗代ヲ引除可レ申候間、伊達之内ニ而。三百貫文堪忍分可レ被レ下候事。

右三ケ條ノ外ニ望無レ之由申ツカハスニ付。式部・伯耆兩人ヲハ未タ大森ニ指置。書付ハカリ檜原へ達シケレハ、彈正カ書付ヲハ檜原ニ留置シ、申送通リノ箇條少シモ相違アル間布ノ間。猪苗代引除クニ於テハ。刈田・柴田ノ內ニテ、知行三百貫文可二宛行一ノ旨。判形ヲ添テ之ヲ送ラル。依レ之三浦式部・七宮伯耆ハ檜原へ歸リ。判物ハ又三藏軒ニ持セ。早速ニ猪苗代へ指遣ス、三日過テ三藏軒大森へ立歸リ。爾々ト申シケルハ。御判形則彈正ニ相渡シ。慥ニ落手仕ルノ處。彈正カ子息盛胤。更ニ合點不レ仕。代々會津ノ重恩ヲ蒙リ、子孫全ク榮ルコト、會津ニ於テ誰カ肩ヲ双ヘキ。然ルニ今ニ至テ如何ソ。數代ノ主君ヲ捨テ、敵ニ組シ。其地ヲ奪テ子孫ノ後榮ニ施サンヤ。天罰尤遁レ難シ。若シ此不義ヲ

改メ候コト叶ヒ難ク八盛胤ニハ暇ヲ給ハリ候ヘ。主君ノ爲ニハ、親子ノ間モ隔ルハ世ノ習ナレハ。速ニ討死シ先祖迄ノ恥ヲ雪キ候ハント申ニ付。父子ノ間不快ニシテ急ニ一定シ難シ。如何樣ニモ盛胤ヲスカシ宥メ。其上ニテ御味方可仕ヨシ、彈正申越シ候ト樣子委細ニ相演ル、依之成實又以テ三藏軒ヲ猪苗代ヘ指遣シ、其長父子合躰ナキニ付、延引ニ及ハルノ條尤ニ存候、左アラハ事延ヒ顯ハレテハ。身ノ爲不可然大事難成ク候ハン、御子息ノ事ハ漸々ニ勸メ宥メラレハ、終ニハ和睦アルヘシ、足下ハ早々會津表手切レ有テ可然由申遣ス、盛國同意タリト雖トモ。盛胤敢テ承引セス。三藏軒モ色々ニ言葉ヲ盡シ勸メケレトモ父子ノ心懸隔シ猪苗代家中二ツニ分レ。手切レ成難ク見エケレハ、三藏軒モ力ナク空シク大森ヘ歸リケル、如斯會津口ノ弓矢不調ナリケレハ、伊達勢ハ旗ヲ納ム。政宗或日檜原ノ小川ニ於テ。漁獵ノ遊興セラレ、晩景ニ至リ。白石若狹カ陣屋ニ入玉ヘハ。若狹旅宿トイヘトモ。饗應種々心ヲ盡ス。終夜遊興アツテ、鷄啼ニ及テ本陣ニ歸ラレケリ。翌日若狹御禮トシテ參向。則濱田黑ト云馬ヲ進上ス、政宗ヨリモ帷子五重。白石ニ賜之。斯テ檜原ノ宿ニ。古城ノ跡モナカリケレハ。彼方此方巡見有テ、要害ノ地形ヲ究メ則新地ノ砦ヲ築キ。後藤孫兵衛近元ヲシテ守ラシメ、政宗ハ諸勢ヲ班メテ。米澤ヘ歸陣セラレケル。

或曰、其比黑川ヨリ檜原口ノ警固ニ三瓶大藏ト云者ヲ大鹽柏木森ノ城ニ入置タリ。内々檜原ノ者共ト談合シケルハ、不意ニ伊達勢寄來ル事モアラハ。八森ノ澤ノ上ナル峯々ニ忍ヤカニ勢ヲ伏セ置カ、亦琵琶峠ノ後ヨリ勢ヲ廻スカ。何サマ時宜ニ計ラヒ敵此九折ヲ通ル處ヲ、ミネヨリ近々ト見下シ。弓鐵砲ヲ組テ喚叫ハヽ、斯ル岩嶺ノ中ナレハ、敵ヨモ勢ノ多少ハ見スカシマシ、案ノ外ニクツレ騷カン處ヲ、思フ儘ニ打テトラント。兼テ合圖ヲ定メケルカ、其日伊達勢此方ヘ向フ由ヲキヽ付、先ツ檜原峠

ト萱ケ峠ノ間ナル。鹿垣ト云處ヘ、件ノ伏兵ヲ遣シカクシ置ケルニ。其比ノ風說ニ主ニ勘當セラレタル者モ、今度戰功ヲ勵マセハ。先科ヲ宥メラルノ由唱ヘケレハ、政宗ヨリ不興受タル者共、扨ハ今日ノ軍ニ、先陣ノ眞先カケテ、此比ノ勘當ヲユルサレ。忠賞ニモ預ラントテ、件ノ手合ノ者共人交モセス。馳來リケルヲ、內々鹿垣ノ邊ニ隱置タル檜原勢、不意ニ起テ追散シ、首トリケルカ。時シモ五月雨イヤマシニ降ツヽキ。林木茂森ト立ハヒコリ。前後モ分タヌ闇カリナリケレハ。イヤ々斯ル霧雨ノハレマモナキニ。今日敵ノ來ランコトハ。思モヨラヌ事ナリ、昨日田村ノ合戰ニ、黑川ヨリ打出シ四天ノ面々。皆鹽川ニ滯留ナレハ。打トリタル首共ヲ實檢セサセ、此邊ノ爲體ヲモ。念比ニ注進スヘシトテ、大鹽ノ者共、皆鹽川ヘ來ケル。其跡ヘ政宗向ハレケレハ。內々ノ相圖モ相違シ。伏兵ノ難モナカリシトナリ。

又曰、就中政宗ノ運强カリシ事ハ。萱カ峠ヨリ引返サレテ後。檜原峠ニ向城ヲ築テ。五十餘日滯留セラレタル內、馬場ヲ拵ヘテ每朝自ラ馬ヲ攻ラレケルヲ、會津方穴澤善左衛門ト云者。如何ニモシテ忍ヨリ。一矢ニ射落サハヤト思ヒ。或日朝霧ノ紛レニ遙ノ岨ヨリ這ヒヨリ、忍ヤカニ馬場ノ末ナル、深草ノ底ニ隱テネラヒケルニ、兎角政宗天運ノ强カリケレハ。思ノ外馬場半ヨリ馬ヲ引返シテソ戾ラレケル。穴澤ハ案ニ相違シ。コレ程マテ心ヲ碎キ。徒ニ歸ランモ本意ナシトヤ思ヒケン。矢立取出シテ一紙ヲ染メ、恐ナカラ某カ鏑矢ヲマイラセント存。是マテ推參申ス所、御運强ケレハ仕損候。斯申者ハ葦名譜代ノ侍穴澤善左衛門ト申者ニテ候ト。札ヲ書テ矢ニ結付ケ、馬場ノ末ニ立置テソ歸ケル。跡ニテ此矢ヲ政宗ヘ披露シケレハ。シヤツニネタクモ狙ハレタルヨトテ。其後ハ馬ヲモ責ラレサリシトナリ。

伊達秘鑑卷之十四終

伊達秘鑑卷之十五

東奥仙府　燕々軒　編集

新春良馬批判

天正十三年春正月三日、奥州名取郡ヨリ、良馬ヲ米澤ヘ献シケル。其丈十寸ニ餘リ、背細カニ筋大ク。白牡ナリ。首ハ長クシテ鶏ノ如ク。兩耳ハ柳葉ニ似タリ。双ヘル眼ハ鈴ヲ垂ルカ如クニシテ、紫光鮮カナリ、牛潰彫梁スル事ハ。恰モ龍馬ノ相トモ可レ謂見エタリケル。斯ル奇相ノ名馬、當世ニ出ルコト、誠ニ珍事タルヘシト。君臣奇異ノ思ヲナシ、諸人其可不可ヲ辨ヘス、時ニ小梁川泥蟠齋宗カ曰、抑嘉辰令月ニ當リテ。名馬ノ來ルコト是賢將ノ奇瑞ナリ。如何トナレハ、馬ハ南方ニ配シテ、大陽物ナリ、今時ハ初春ニシテ。春ハ東方ヲ主ル、陽氣秀ルノ候ナリ。兵ハ陽德ヲ守フ。其法殺伐ハ術ニシテ。生育ハ行ナリ。時候ヲ以テ是ヲ占スレハ、東ハ木・南ハ火・木生レ火ト相生ス。之レ陽德ノ順道ナリ。弓馬ハ武家ノ的用ニシテ、主一ノ備ナリ、則大將ノ威義此ニアラハル嘉瑞ニシテ。實ニ珍重ト謂ツヘシ。古ヘ虞舜ノ代ニ鳳凰來リ。孔子ノ時ニ麒麟出ルト承ル。是等ハ聖代ノ。吉兆比スヘキニモ非レトモ、今時ノ濁世ニ、斯ル良相ノ奇獸到來セシムルコト。賢將ヲ待テ出現セシモノナルヘシ。指當テ先ツ當家ノ手ニ入シハ、是ニ過タル慶事ハ非スト申ケレハ。輝宗御父子喜悅有テ、則酒食ヲ設ケテ群臣ヲ饗シテ、其祝詞ヲツクサレケル。

大内退治并青木修理弘房加二米澤一

同年七月始。成實使者ヲ以テ米澤ヘ申ケルハ。猪苗代ノ儀、計略不レ調。口惜キ次第ナリ。今ハ會津ニ御手入無レ之候間、此上ハ大内備前御退治可レ然候。御出馬ニ於テハ。備前家來ノ内當家ヘ奉公望有レ之者ハ、相語ラヘ可レ申ヤト伺ヒケレハ。政宗ニモ會津表ノ計略破レ。無念ニ思ハレ、此上ハ鹽松ヘ出張セシメ。大内退治アルヘシト、其結構アリケレハ、則同心有テ使ノ趣キ同

意タルノ間大内家人ノ内隨分計ヲ廻シ。奉公ノ望アル者ハ家中ヲ引分。相語フヘキ由ナリ。依之成實思慮ヲ廻シ。家人元鹽松侍大内藏人・石井源四郎ト云者兩人ニ云含メ。鹽松領刈松田ノ城主青木修理弘房ト云者ヲ。色々ニ勸メ語ラヒシカハ。味方ニ屬スヘキ由申ニ依テ。知行ノ望ミ書等。判物彼是米澤ヨリ申受。青木方エ指遣ス事。大方ニ相調フ。然ル處ニ大内備前已カ領分ト。田村境ノ城主ヨリ久シク人質ヲトリ置シニ。青木修理モ十六歲ニナル弟ト。幼子新太郎（後號ニ諸部ニ）當五歲ニナリケルヲ。兩人人質トシテ。小濱エ渡シオキケルカ。修理思ヒケルハ逆心シテ米澤ニ取付テモ。證人ヲ捨ンハ無據事ナリ彼是ヲ見殺ニシテハ。我望ミ達セシトテ詮モナシ。何トソ證人ヲ取返サント。樣々工夫ヲ廻ラシケルカ所詮證人替ニシクハナシト分別極メ、備前カ家來ノ子ニ中澤・大河田治郎吉・大内新八郎此三人方エ書狀ヲ遣シ申ス條。只今頃當方追鳥ノ時節ニ候ヘハ共々被申合。各當地ヘ御越有テ。欝勞ヲ晴サレ可然。入來ニ於テハ我本望タルヘキノ由云送ル。何レモ若者共ナレハ。修理カ書簡ヲ見テ大ニ喜ヒ。何ノ分別ノ辨ナク。使ト打ツレ。八月五日ノ晩。三人共ニ刈松田ヘ入來ル。修理不斜喜ヒ。明ル六日ノ早旦ヨリ。追鳥ノ結構列卒ヲ入レテ雉ヲ獵シム。終日遊獵シテ晩景ニ城ニ歸リ。其夜ハ各一宿セシム。修理元來期シタルコトナレハ珍肴美酒ヲ備ヘテ酒宴ヲ始メ、種々サマ々ニ饗應ス。酒半過ニ及テ。修理何トナク云ケルハ。旁々酔狂ノ上ニハ過チモ危ク候ヘハ何レモ刀脇差ヲ此方ヘ渡サレ。心易ク亂酒シテ慰サマレソウラヘト云ケレハ。三人ノ者共少シモ不苦心遣無用ノ由云ケレトモ。修理重ネテ旁々何レモ年若シ。自然アヤマチモアルトキハ。老年ノ某面目無據候間。ヒラニ渡サレ候ヘト。サマ々ニ云透シ。容貌ウルハシキ侍女二三人出シテ酌ヲ取ラセ。實ニ打解テ饗シケレハ三人ノ若者共。心浮々シテ魂ヲ翻シ。此上ハ老人ノ心ツカヘ。背ンコトハ却テ失禮ノ至リナリ。兎角我々

カ身ノ程ヲ思ハレテノコトナレハ、何篇存分ニ任セ中ヘシトテ三人共ニ大小ヲ相渡シ亂酒シテ樂ミケル修理ハ大小請取、一々ニ之ヲ納サセ其後家中ノ健士十人餘リ。各具足ヲ固メサセ。夜更散々ニ醉臥タル處ヘ一度ニ曈ト押懸ケ修理大音ニ申ケルハ大内殿ヘ恨ルコト有テ心ヲ變シ米澤ヘ味方セシム各モ存ノ通我等子弟兩人共ニ小濱ニ人質トシテ差置處、其證人ニ替ヘンタメ。如レ斯計フナリト云ケレハ。三人ノ者共驚テ起上リ。防カントスルニ無刀ナレハ心ハ矢武ニ思ヘトモ。如何トモスヘキヤウナク。周章ウロツク。其間ニ四方ヨリ取圍ミ終ニホタシヲ打レテ刈松田ニ押籠ラル同日修理小濱ニ向テ火ノ手ヲ揚ケ鹽松ノ手切シテ大森ヘ注進セシム、成實則米澤ヘ飛脚ヲ馳テ青木修理早速ニ手切レ仕ルノ間御出馬マテハ延引ニ候條先立テ軍勢ヲ差向ラレ可レ然ノ由注進シケリ。

小手森城攻

大内カ旗下ニ張道村ノ領主内藤勘介ト云者、備前カ狼戻ノ振舞ヲ見聞シ、往々ノ急難ヲ遁レンコトヲ欲シケレハ米澤ヘ飛脚ヲ以テ申ケルハ、鹽松御發向ニ於テハ某不肖ナレトモ御味方ニ屬シ當方ノ案内可レ仕備前事近年ヒタスラ士卒ノ氣ヲ使シ侮ル故ニ幕下ノ輩之ヲ惡ミ心離レ候ヘハ。御退治ニオイテハ一戰ノ御勝利アルヘシト申達ス、輝宗・政宗喜悦アッテ。則使ノ者ヘ引出物シ。念頃ニ返答有テ歸サレケル斯テ成實カ注進ト云ヒ。青木カ手切シタル上ハ時日ヲ移スヘカラス、先軍勢ヲ差向ラルヘシトテ。小梁川泥蟠・白石若狹宗玄・原田左馬之助宗長・濱田伊豆四人ニ士卒ヲ授ケ發向セシム、則刈田ノ近所飯野村ニ着陣ス、成實ニモ可レ爲ニ參陣一旨觸フレケレハ、諸勢ヲ引テ立山ト云所ニ出張ス龍子山ニ陣ヲ取斯テ政宗ニハ同十二日米澤ヲ發シ福島ヘ着陣ト聞得ケレハ成實則青木修理ニ使ヲ添テ、福島ノ本陣ヘ參向セシム。片倉小十郎ヲ以披露ヲ遂ケ、則對面アッテ腰ノ物賜レ

之カヽル所ニ張道村ノ領主内藤勘助モ同福島ヘ着シ遠藤山城ヲ以御味方ニ參向ノ由披露ヲトケシカハ同ク對面有テ一刀ヲ引手物セラレケル。靑木修理ニハ鹽松領分繪圖可致由望マレケレハ修理則鹽松領内ノ地形嶮岨平易殘リナク微細ニ繪圖ニ認テ指出ス其ニ一覽アツテ申サレケルハ。此度刈松田近邊ヨリ働入ント兼日期スルト雖トモ今度ハ田村清顯ヘ同陣有ヘキ旨約セラルノ間刈松田口ハ田村ヨリ手越シナレハ小手森ヨリ可働入ト有ケレハ各可然ト同スルニ依テ八月十八日川股エ本陣ヲ移サレケル。同廿日田村清顯ニモ蕨ケ平マテ出陣ノ由。川股ヘ鳥使來ケレハ。政宗ニハ則蕨カ平マテ參向有テ。清顯ヘ對面有リ。軍ノ日限等其外萬事評定有テ川股ヘ歸陣セラル。去程ニ大内備前定綱ハ。數百騎ヲ催促シ。小手森ニ出張シテ楯籠リ城中堅固ニ。防戰ノ備嚴重ナリ。會津・佐竹・二本松其外仙道ノ諸勢。小濱ノ加勢トシテ小手森近所マテ助來リ數千ノ士卒旗旌ヲ靡カシ兩陣機ヲ謀テ控ヘタリ。同廿二日小手森ヘ諸陣ヲ取詰ラレ政宗諸將ヲ集メ評定有テ申サレケルハ。大内カ催促ノ助勢モ小手森近ク見ヘタリ。是ヨリ小手森ヘハ其間遠ケレハ。是ヨリ直ニハ軍兵ノ勞アレハ働キ難シ。先明日ハ張道村ヘ陣ヲウツシ。敵ノ氣ヲ見合。軍慮ヲ定メ明後日ノ拂曉ヨリ小手森ヘ攻寄ントアリケレハ。高森雪齋・亘理元安兩人モ尤可然ト同心ス時ニ新參内藤勘助末座ヨリ進出テ申ケルハ某新參ノ身トシテ譜代ノ諸臣ヲ遮リ無憚申條ニ候ヘトモ斯御身方ニ屬スル上ハ遠慮ニ不及。愚意ノ程ヲ申演ヘン。抑大内カ軍事某兼日能知得仕ルニ。彼カ軍法元來敵ヨリ先ニトハカリ萬事立廻ル者ニテ候其證據ニハ此度モ小濱ハ本城ナレハ。御勢モ最初ハ小濱ヲ目當ニ向ラル處遮テ小手森ヘ出張仕處ナリ。御軍法明日ト延ラレ候ハヽ今日中ニ大内ハ某カ居城張道マテ出陣シ先達テ伊達勢ヲ待受申サン事必定案内ニ候時ニハ御對陣ニ等ク。何ツモ敵ニ先ヲ

トラレ。味方ハ後手ニ罷成候、兵法ニモ先則制人トコソ承ル、同クハ先手ノ衆ハ今日中小手森ヘ差向ラレ敵ノ思慮ニ先立テ折キ候ハヽ、是ヨリ後ハ味方先ニ立申サント申ケレハ。大將始メ老臣等、皆其意ニ同シケル、泉田安藝重光カ曰、内藤ノ軍旅尤ナレハ、某今日張道マテ發向可仕ヨシ申ニ付、政宗則泉田ヲ以テ先陣ヲ免サレ、且ツ明日ノ軍奉行ハ高森伊齋ニ左陣ハ伊達成實、右陣ハ小梁川泥蟠。中軍ハ白石若狹ト定リケレハ段々ニ兵ヲ發シテ小手森ヘトリ詰ケル。斯テ先陣泉田ハ張道ヘ著陣シ大篝ヲ焚テ其夜ヲ明カス。大内備前是ヲ見分シ城邊東北ニ煙リ立ハ伊達勢寄ルト覺ヘタリ。油斷スヘカラスト城中上卒ノ氣ヲ勵シ殆モ堅固ニ守リケル、夜ニ入リテ政宗片倉小十郎・原田左馬介ヲ近付、今夜兩人小手森近ク押懸、城外ノ構町屋ナトヘ火ヲ放チ敵ノ氣ヲ奪ソヘシト有ケレハ兩人則手勢ヲ引テ其夜二更ニ川股ヲ立テ、四更過ニ小手森ヘ馳着則城外ノ構町屋々々ヘ。東西ヨリ火

ヲ放チケレトモ城中騷動ノ氣色モナク。靜リ返リテ一人モ出テ合ハス。依之城外悉ク燒拂ヒ。原田・片倉ハ其夜ニ張道マテ歸リケル、翌レハ廿三日。大雨頻リニ降テ不止。依之止ムヲ得ス。其日ノ城攻ハ延ニケリ。斯テ後レ馳ノ軍勢モ大方ニ參著シケレハ。二十四日ノ拂曉ニ、先陣泉田安藝・左陣伊達成實・右陣小梁川泥蟠・中軍白石若狹都合二千五百餘人。小手森ヘ押寄、圍ヲ作テ攻近付ク、雖然城中ハ靜リ返リ、鳴ヲ潛メテ一人モ不出合。成實備ヨリ先鐵砲ヲ打カケ會釋シケル處ニ、中軍白石カ圍陣ニ備タル眞中ヘ。城兵二三百眞シクラニ馳下シ、短兵急ニ採立タリ。是ハ會津加勢ノ者共ナリ。若狹カ屯兵二三十騎、眞先ニ進テ追ツ返シツ挑戰ス又二本松加勢ノ軍兵、成實カ左陣ヘ打テカヽル、大内カ侍大將大内長門五十騎ヲ引卒シ。兩口ヨリ槍衾ヲ作リ押入々々突カヽル、泉田安藝ハ左右ヘ不構虎口際マテ近々ト攻寄タリ。是ヲ合戰ノ始トシテ右陣小梁川泥蟠モ兵ヲ進メ。大内長門ヲ引包ン

テ攻戰フ、城兵左右ニ敵ヲ受テ。備亂テ引色ニ成タル處ニ、大内長門取テ返シ。向敵四五人突伏、防戰スト雖トモ、伊達長井ノ軍勢物トモセス、喚キ叫ンテ長門ヲ討ント責寄ル。大内備前城中ヨリ是ヲ見、長門萬死一生ナリ アレ討スナト下知シケレハ、城兵我モ我モト馳出ル中ニモ、松木與市馬上ニ槍ヲサケ。長門ヲ救ント、白石若狹カ陣ヘ駈向フ、城兵松木ニ續テ、我劣ラジト進ム。與市眞先ニ立テ突テカヽリ。兩陣入亂レテ攻戰フ 政宗ノ本陣モ備ヲ進メ。先手ノ輩思々ニ合戰ヲ始ム、原田左馬介ハ松木與市ニワタリ合戰ヒシカ。松木カ槍ニテ原田カ草摺ノ外レヲ一突突レタリ。原田物トモセス。蹈込テ與市カ兜ノ吹返ヲ一太刀切テ、持タル槍ヲ打落シ。其太刀ニテ切伏タリ。與市カ叔父松木助左衛門、透サス切テ蒐ルヲ。原田開テ助左衛門カ弱腰ヲ拂切ニ薙倒ス 城中ヨリ 安部宮内混冑ノ若武者十騎ハカリ從ヒ乘出シ、面モ不振討テカヽル、泉田安藝重光・中島伊勢宗長・富塚近江仲綱・茂庭石見綱元、一同ニ蒐合セ、馬煙リヲ立テ相戰フ、中ニモ茂庭石見ハ槍ヲ以テ 安部宮内ヲ突伏ケル。殘ル城兵勇ヲフルヒ。一足モ引シト戰ヒシヲ、片倉小十郎カ手ノ軍士共、新手ニ進テ揉立。東西ヘ追靡ケテ 首ヲ得タリ。去トモ城兵堅固ニシテ、落城ノ色見ヘス。伊達勢ハ北ヨリ進ミ。田村衆ハ東ヨリ働キシニ、田村勢ノ間ニ大山有テ。合戰ノ間ニ不、合。然處ニ政宗旗元ノ不斷組鐵砲五百挺程ニテ、東ノ山際ヨリ押切リ、横合ニカケテ討シム、雷砲山ニ響キ谷ニ徹マス。旗本ノ勢ヲ分テ同ク横槍ニ駈立ケレハ、城兵右手ニ敵ヲ受テ、防戰ニ利ヲ失ヒ。色メキ立テ引鹽ニ見ヘケルヲ、諸軍力ヲフルフテ攻立ケレハ。悉ク敗走シ。一ノ行馬(ヤラヘ)ヘ逃入ヲ、伊達・長井ノ勢 勝ニ乘テ追打ニ討テ。首五十餘級討取。脇備ノ軍兵モ、二本松後詰ノ勢ト戰ヒシカ。城兵敗レタルヲ見テ。早々ニ引上シカハ、少々追討シテ見合人數ヲ班メケル、則本陣ヨリ使ヲ馳テ勝鬨ヲ揚サセ。惣勢ヲ打上ラル。大内備前元來軍法功者ナレハ、己カ領内

當城ハ云ニ不及、新左木樵山黒範大場野内若津野ノ諸城ヲ始メ軍兵ヲ籠置、兵粮玉藥夫々ニ分ケ配リ、堀ヲ深クシ壘ヲ高フシ柵ヲ結ヒ櫓ヲ出シ。塀丈夫ニ構ヘ小濱ノ本城ニハ大内一家ノ者共力ヲ盡シテ楯籠リ備前ハ浮武者ト成テ、所々ノ城ニ駈廻リ油斷ヲ禁シメ怠リヲ勵マシ、其能虎風ノ勢ヲナシテ、寄來ル敵ヲ待受サセ、其身マツ此城ニ足ヲ留テ軍配ヲナシケルカ伊達勢ノ軍立尋常ナラス。初度ノ戰利ナキニ心ヤ臆シケン又深キ慮リ有ケン。其夜月ノ出サルニ、小手森ノ城ヲ忍出、小濱ノ本城ヘ引移ス。寄手ハ二里程打上テ野陣ヲトリ、敵若シ夜掛モ可有カト遠近ニ斥候ヲ設ケ陣中ニハ所々ニ篝ヲ焼テ、張番ヲ嚴シク守ラシム同廿五日未明ヨリ軍兵ヲ進メ。猶近々ト相働ト雖トモ、城兵固ク守テ不出合一人モ對スル者ナシ會津・佐竹ノ後詰ノ勢モ出張スルト雖トモ、長クキト云所ニ相備テ山下ヘハ打オロサス、只幕打廻シ、用心堅固ニノミシテ控タリ。依之城下ノ通路自由ナレトモ、助ケノ勢敢テ之ヲ不遮、依テ其日ハ無何事寄手人數ヲ打上テ野陣ヲ固ム。翌廿六日同ク惣勢ヲ取詰ケレトモ。其日モ不出合、片倉小十郎景綱カ曰ク。城兵機ヲ納テ戰ヲ不好ハ、士卒不足ナルヘシ、鐵砲數挺ヲ掛テ氣ヲ動カシ。容子ヲ御覽有ヘシト申ニ付、小筒七八百挺内行馬ニ打カケシカ共、城内猶モ靜ツテ一向ニ不取合。早々依之諸勢ヲ打上ラレ。野陣ニ於テ諸將ヲ集メ軍議評定取々ナリ時ニ成實申ケルハ、明日ノ戰ハ茱南ノ竹屋敷ヘ陣ヲトリ。城ト助勢ノ通路ヲトメン。其時總陣ヲ取詰ラレ然ルヘシ。今日マテ城近ク働クト雖トモ、城兵不出合。空シク日數ヲ費スコト口惜キ次第二ツ口通路ヲ取切。時宜ニヨッテ惣責ニ及フトモ又助ノ勢ト無二ノ合戰アルトモ何レニ一手際無之候テハ、墓行マシク候ト申ケレハ、政宗ノ曰其義最ニ聞ユレトモ。左有ル時ハ助勢ノ者共折合セ、彼方ヨリ合戰ヲ仕掛クヘシ、時ニハ城中ヨリモ突テ出ハ、兩口ノ戰ニナリ。前後ニ敵ヲ受テハ軍法危

カルヘシ。鹽松モ武勇ノ家ナレハ。輕々シク取合カタシ。心靜カニアシラヒ。敵ノ備クツロクヲ見合セ。勝易キニ勝ヲ取ヘシ。今初ツロノ戰ニ卒爾仕出シ。人數ヲ損シ。謀不出來セハ。我等弓矢ノ耻辱ナリト有ケレハ。成實重ネテ申ケルハ。時分ヲ度リ全キ勝利ノ御工夫ハ。元ヨリ御本意ナレトモ。兵ハ危キニコソ利アリ。通路ヲ取切候事。元ヨリ兩口ノ合戰ト。思ヒ設ケテ覺悟アランニ。爭カ輙ク味方敗北仕ラン。竹屋敷ヘ陣ヲ移シ候ヘハ。田村衆ト某ト兩勢ニテ相備。城中ヨリ兵ヲ出シ候ハヽ。兩勢ヲ以テ合戰ヲ遂申サンニ。十ニ九勝利ヲ得ルコト必定ナリ。城兵如何ニ敵ヲ輕ンシ候トモ兩備ノ處ヘ卒爾ニ出向ヘ可申ヤ。又助ノ勢打オロシ。合戰ヲ仕掛ンニハ。惣勢ヲ以拂ハレ候ハヽ。是亦本陣マテハ近付事不可叶。其上援兵ノ人數相控候ハヽ。地形甚難所ニテ合戰仕掛候コト。安々トハナルヘカラス。此間ノ戰ニモ城兵強ク働キ。押籠ラレ候得共。二本松勢ハ强テ働モナク。早速ニ引上候。縱危キ合戰ニ候トモ一手際無之候テハ。敵兵味方ヲ侮リ。雌伏仕マシク候。虎口ヲ捜ラサレハ虎子ヲ得スト承ル。是非々々御陣ヲ移サレ可然ト勸メケレハ。政宗同心有テ。成實カ軍議至極セリ。明日ハ早々通路ヲ取切ルヘシト有ケレハ原田休雪申ケルハ。成實ノ軍議尤據ナキニ非スト雖トモ。御陣ヲ移サレ候コトハ危キ謀ニテ候。會津仙道二本松ノ援兵。多勢ニテ候ヘハ。如何程難所ニ控ルトモ。大内救ノ爲ニ來リタル者共ナレハ。不戰シテ安閑トシテ守リ居可申ヤ。城中ノ人數モ大勢コモリ候ヘハ。合戰仕掛ル程ニテハ。十死一生ノ戰ト可存詰。然ルトキハ味方多勢ト云トモ。兩口ノ間ニ挾マレ。進退自由ナラス。駈引心ニ任セスンハ。必定後レヲ取申サン。一方打勝候トモ。一方負軍ナルトキハ。共ニ敗軍仕ラン。無理ナル働ハ。勝テモ人數ヲ損ヒ。全體ニテノ後レナレハ。御陣移シノ義ハ先以テ控ラレ。敵ノ機ヲ見テ。城兵援兵トモニ長陣ニ退屈シ。勇氣折ケ軍法怠ル時節ヲ見澄シ。内簡ヲ以テ敵ヲ分ケ。城兵ノ

心動ク時。件ノ如キ御手當有テモ可レ然カ左ナクシテ血氣ノ戰ヒハ、却テ敗軍ノ基タルヘシト云ケレハ。成實休雪カ兩談區々ニシテ、其日ノ軍議一決セス諸軍勢皆々野陣ノ用心シテ又モ其夜ヲ明シケル。

小手森城撫切

明ル二十七日、成實思案ヲ極メ、昨日ノ評定ニ竹屋敷ヘ陣ヲ移シ、敵ノ通路ヲトリ切コト異議區々ニシテ暮行カス夫軍將外ニ有テハ君命モ不レ受所アリ、爰ハ我若氣ヲ以テ有無ヲ極メントテ、未タ東雲ノホノ暗キニ成實手勢ヲ引テ。竹屋敷ヘ陣ヲ移ス、然ル處ニ伊達上野介政景入道雪齋モ成實ニ押續キ同ク陣ヲ移ス此由本陣ヘ告ケレハ、然ル上ハ惣陣ヲ取詰。有無ノ合戰有ヘシトテ陣具等ヲ運送ス、惣勢ハ常ノ如ク靜ニ備ヲ立テ野陣ヲ取堅ム、然所ニ城内ヨリ武者一人立出。成實カ陣ニ向テ旗ヲ振テ招ク。成實則人ヲ遣シ其趣ヲ尋ネシムルニ、石川勘解由ト云者ナリ。成實家中遠藤下野ニ直談ヲ望ムニ付急キ下野ヲ遣シケレハ勘解由申越シケルハ當城ニハ小野主水・荒井半助ヲ始メトシテ、大内近習ノ者共數多籠リ候處、今日ヨリ城兵ノ通路ヲ取切ラレ候上ハ。落城程アルマシク覺候。依テ軍兵ノ一命ヲ乞フ處ナリ、於レ承引ニテハ則城ヲ明渡シ。小濱ヘ立除可レ申付候、成實ノ才覺ヲ以テ此旨申達度由ナリ。仍レ之其趣キ使ヲ馳テ本陣ヘ告ケレハ、兎角弓矢ノ暮行ク事肝要ナレハ、彼等カ望ニ任セ。一命ヲ相助、城ヲ可レ受取、併軍兵ヲ小濱ヘ立除セ候コトハ叶ヒ難シ。早々伊達領ヘ可レ罷退旨、云遣スヘキ由下知セラル、依レ之成實陣ヨリ人ヲ遣シ、石川勘解由ヲ呼出シ。件ノ趣キ通シケレハ。城内ヘ引込、暫ク有テ立出。城中ノ者共伊達ヘ立退候コトハ。此偏ヘニ命乞ニ等シ。大内切腹程アルマシク候間。何レモ切腹ノ供ヲモ仕度存ル故、小濱ヘ立退ノ儀。訴訟申所ナリ此趣今一應執成預度ノ由、再訴セシムルニ依テ、又モ本陣ヘ訟ケレハ。幾度訴訟ニ及フトモ。小濱ヘ立除セ候コト。曾テ叶難キ由返答アル、遠藤馳歸リ。成實

ニ斯ト告テ。則下野城門二重ノ内マテ入テ。右ノ趣斷之。其内ニ政宗思惟有テ。城兵勢ヒ弱リ。扱ノ往復ニ付戰ハ有マシキト。持口少々油斷アルヘシ。此圖ヲ外サス不意ニ責テ勝利ヲ一擧ニ極メントテ。急キ成實カ陣ヘ軍使ヲ馳テ。城中ノ者共强責ニ出合ヌ故。我儘ノ仕方奇怪至極ナリ。惣攻ニシテ本丸迄モ押付スンハ。城兵伊達ヘ不可除。此手ノ諸勢最早取懸ルノ間。其手モ急ニ取詰可攻ノ由下知セラレ。諸手旗本トモニ一同ニ押寄ル。依之成實・政景カ軍兵モ。我先ニト取掛。四面八方。一度ニ鯨波ヲ作ケレハ。山谷ニ動搖シテ。恰モ十萬ノ甲兵。天ヨリ降レルカト怪シマル。遠藤下野ハ漸々ニシテ城中ヨリ逃出ケル。案ノ如ク城兵扱ニ氣ヲ緩シ。持口ヲ退テ休息シテ居タリシカ。鬨ノ聲ニ驚テ。俄ニ槍長刀トヒシメク内ニハ。成實カ兵大手ノ虎口ヲ乘テ。城内ヘ旗ヲ入ル。諸軍之ヲ見テ。無二無三ニ柵ヲ破リ。塀ヲ崩シテ込入ルヲ。城兵爰ヲ先途ト命ヲ捨テ防キケレトモ。寄手八方ヲ責破リ。蟻ノ如クニ群テ。早火ヲ放テ亂レ戰フ。折節風烈クシテ山城ニ炎ヲ吹飛シ。方々散亂シテ吹付シカハ。黑煙天ヲ掠メ。喚叫ノ聲地ニ震フ。城兵不意ニシテ隊伍ヲ失ヒケレハ。防戰ノ術盡キ。役所ヲ捨テ逃迷ヒ。討ル丶者數ヲ不知。午ノ尅ヨリ戰始リ。則大手ヲ攻破リ。申ノ尅ニ至テ本丸マテ落城ス。撫切ト觸ラレ。所々ノ口々ヘ横目ヲ附。男女老若ノ差別ナク。牛馬鷄犬ニ至マテコトコトク切棄。暮ニ及テ勝鬨ヲ作リ。揚貝ヲ吹テ惣勢ヲ打上ラル。是ヲ聞テ其夜ノ内新庄・木樵山ノ兩城共ニ自燒シテ引除。同廿八日未明ニ本陣ヲ。木樵山ノ處ヘ移サルヘシト觸ラルニ付。各陣場ヲ取ン爲メ。木樵山ヘ赴。成實モ手勢四五騎先ヘ遣シ。陣場ヲ見合セシムル處ニ。築館ノ城ノ方ヨリ。武者一騎馳來ル。是ハ服部源内トテ。成實扶助セシ者ナレ共。當時鹽松ニ居タリシカ。成實カ手ヘ馳加リ。築館城（異本ニ月舘）モ内議區々ニシテ。兵士心一致セス。此弊ニ乘テ攻ラレハ。忽チニ落城スヘシト告ケレハ。此旨本陣ヘ達シ。則築館ノ城責

心動ク時。件ノ如キ御手當有テモ可レ然カ左ナクシテ血氣ノ戰ヒハ。却テ敗軍ノ基タルヘシト云ケレハ。成實休雪カ兩談區々ニシテ、其日ノ軍議一決セス諸軍勢皆々野陣ノ用心シテ、又モ其夜ヲ明シケル。

小手森城撫切

明ル二十七日、成實思案ヲ極メ、昨日ノ評定ニ竹屋敷ヘ陣ヲ移シ。敵ノ通路ヲトリ切コト。異議區々ニシテ墓行カス夫軍將外ニ有テハ君命モ不レ受所アリ、爰ハ我若氣ヲ以テ有無ヲ極メントテ、未タ東雲ノホノ暗キニ、成實手勢ヲ引テ、竹屋敷ヘ陣ヲ移ス、然ル處ニ伊達上野介政景入道雪齋モ、成實ニ押續キ同ク陣ヲ移ス此由本陣ヘ告ケレハ、然ル上ハ惣陣ヲ取詰。有無ノ合戰有ヘシトテ陣具等ヲ運送ス、惣勢ハ常ノ如ク靜ニ備ヲ立テ野陣ヲ取堅ム、然所ニ城内ヨリ武者一人立出。成實カ陣ニ向テ旗ヲ振テ招ク。成實則人ヲ遣シ其趣ヲ尋ネシムルニ、石川勘解由ト云者ナリ。成實家中遠藤下野ニ直談ヲ望ムニ付急キ下野ヲ遣シケレハ勘解由申越シケルハ當城ニハ小野主水・荒井半助ヲ始メトシテ、大内近習ノ者共數多籠リ候處、今日ヨリ城兵ノ通路ヲ取切ラレ候上ハ。落城程アルマシク覺候。依テ軍兵ノ一命ヲ乞フ處ナリ。於二承引一テハ則城ヲ明渡シ。小濱ヘ立除可二申付一候。成實ノ才覺ヲ以テ此旨申達度由ナリ。仍レ之其趣キ使ヲ馳テ本陣ヘ告ケレハ、兎角弓矢ノ墓行ク事肝要ナレハ、彼等カ望ニ任セ、一命ヲ相助、城ヲ可二受取一併軍兵ヲ小濱ヘ立除セ候コトハ叶ヒ難シ。早々伊達領ヘ可二罷退一旨。云遣スヘキ由下知セラル、依レ之成實陣ヨリ人ヲ遣シ、石川勘解由ヲ呼出シ。件ノ趣キ通シケレハ。城内ヘ引込、暫ク有テ立出。城中ノ者共伊達ヘ立退候コトハ。此偏ヘニ命乞ニ等シ。大内切腹程アルマシク候間。何レモ切腹ノ供ヲモ仕度存ル故、小濱ヘ立退ノ儀。訴訟申所ナリ、此趣今一應執成預度ノ由、再訴セシムルニ依テ、又モ本陣ヘ訟ケレハ。幾度訴訟ニ及フトモ。小濱ヘ立除セ候コト。曾テ叶難キ由返答アル、遠藤馳歸リ。成實

ニ斯ト告テ。則下野城門二重ノ内マテ入テ。右ノ趣斷之。其内ニ政宗思惟有テ。城兵勢ヒ弱リ。扱ノ往復ニ付戰ハ有マシキト。持口少々油斷アルヘシ。此圖ヲ外サス不意ニ責テ。勝利ヲ一擧ニ極メントテ。急キ成實カ陣ヘ軍使ヲ馳テ。城中ノ者共强責ニ出合ヌ故。我儘ノ仕方奇怪至極ナリ。惣攻ニシテ本丸迄モ押付スンハ。城兵伊達ヘ不可除。此手ノ諸勢最早取懸ルノ間。其手モ急ニ取詰可攻ノ由下知セラレ。諸手旗本トモニ一同ニ押寄ル。依之成實・政景カ軍兵モ。我先ニト取掛。四面八方。一度ニ鯨波ヲ作ケレハ。山谷ニ動搖シテ。恰モ十萬ノ甲兵。天ヨリ降レルカト怪シマル。遠藤下野ハ漸々ニシテ城中ヨリ逃出ケル。案ノ如ク城兵扱ニ氣ヲ緩シ。持口ヲ退テ休息シテ居タリシカ。鬨ノ聲ニ驚テ。俄ニ檜長刀トヒシメク内ニハ。成實カ兵大手ノ虎口ヲ乘テ。城内ヘ旗ヲ入ル。諸軍之ヲ見テ。無二無三ニ柵ヲ破リ。塀ヲ崩シテ込入ルヲ。城兵爰ヲ先途ト命ヲ捨テ防キケレトモ。寄手八方ヲ責破リ。蟻ノ如クニ群テ。早火ヲ放テ亂レ戰フ。折節風烈クシテ山城ニ炎ヲ吹飛シ。方々散亂シテ吹付シカハ。黑煙天ヲ掠メ。喚叫ノ聲地ニ震フ。城兵不意ニシテ隊伍ヲ失ヒケレハ。防戰ノ術盡キ。役所ヲ捨テ逃迷ヒ。討ルヽ者數ヲ不知。午ノ尅ヨリ戰始リ。則大手ヲ攻破リ。申ノ尅ニ至テ本丸マテ落城ス。撫切ト觸ラレ。所々ノ口々ヘ横目ヲ附。男女老若ノ差別ナク。牛馬鷄犬ニ至マテコトコトク切棄。暮ニ及テ勝鬨ヲ作リ。揚貝ヲ吹テ惣勢ヲ打上ラル。是ヲ聞テ其夜ノ内新庄・木樵山ノ兩城共ニ自燒シテ引除。同廿八日未明ニ本陣ヲ。木樵山ノ處ヘ移サルヘシト觸ラルヽニ付。各陣場ヲ取ン爲メ。木樵山ヘ赴。成實モ手勢四五騎先ヘ遣シ。陣場ヲ見合セシムル處ニ。築館ノ城ノ方ヨリ。武者一騎馳來ル。是ハ服部源内トテ。成實扶助セシ者ナレ共。當時鹽松ニ居タリシカ。成實カ手ヘ馳加リ。築舘城（異本ニ月舘）モ内議區々ニシテ。兵士心一致セス。此弊ニ乘テ攻ラレハ。忽チニ落城スヘシト告ケレハ。此旨本陣ヘ達シ。則築舘ノ城責

ト觸ラレケル。

築舘始鹽松領所々落城

築舘城ニハ大内カ幕下朝倉右衛門國清楯籠ル。伊達ノ先陣泉田安藝重光・後陣大條尾張宗直ト相定リ。其勢二千餘リ先陣ハ手戸村、後陣ハ小瀬川ヲ隔テ、小島村ニ控タリ。九月四日東雲白ム頃ニ。先陣既ニ手戸村ヲ打立。築舘城エ攻近付ク。後陣大條モ小島村ニ居餘リテ。梅松寺ニ押入陣シタリ。大條之ヲ見大ニ驚テ、諸勢ニ向テ曰ク面々ハ君臣ノ禮ヲ不レ知ヤ。抑此小島村ト云ハ、伊達ノ御先祖兵部少輔氏宗御隱居ノ舊跡ナリ。又此寺氏宗ノ御曹司梅松丸ト申セシ幼稚ノ君。早世アツテ。菩提ノ爲メニ此梅松寺ヲ建立。則幼君ノ名ヲ象リ。梅松寺ト號ス。斯ル舊跡ノ道場ヲ蹈穢ス事失禮ナリ。急キ引退クヘシト制シケレハ。諸兵理ニ伏シテ梅松寺ヲ退キ。各野陣ヲ構ヘケリ。斯テ先陣泉田築舘ニ取カケ鬨ヲ作リテ數百挺ノ鐵砲ヲ打カケタリ、城將朝倉右衛門國清聊驚ク氣色ナク、近々ト寄手ヲ引受相戰フ右衛門カ弟朝倉伊賀國兼、勇ヲ振ヒ戰シカ。伊達勢ノ中ヨリ山岡志摩馳向ヒ。數合力戰シケルカ。終ニ山岡ニ討レケル。之ヲ見テ城兵二三十騎出。山岡ヲ討ント追カケシヲ、寄手大勢立隔。城兵ヲ中ニ取コメ。散々ニ攻戰フ、城兵力竭テ一足モ引カス、枕ヲ双テ討死ス。大將朝倉右衛門、今ハ是マテト思切テ。城戸ヲ開キ突テ出ル。依レ之城兵我モ我モト國清ニ續テ討出。兩陣入亂挑ミ戰フ、朝倉勇ヲ振フト雖トモ多勢ニ小勢難レ叶、終ニ戰敗レ。八方ヘ散亂シケレハ、朝倉モ亂軍ノ内ニテ討レケル。大將亡ヒケレハ則城ハ陷タリ。依レ之政宗ニモ其夜馬ヲ入ラル、明レハ九月五日。田村大膳大夫清顯ヨリ鳥使來テ。則田村ノ三春ヘ移ラレ。築舘ニハ伊達成實・白石若狹・片倉小十郎・櫻田宮内・石母田左衛門・桑折點了齋・村田民部・茂庭石見・鈴木日向・粟野藏人・小山田二平・吉田傳内・松原越中・小原式部・安部對馬ヲ始一千餘騎、鐵砲三百挺・弓二百張・槍百筋・足輕都合五百人殘シ置カレ。本陣旗本ノ諸勢、彼

是都合二千餘リ相從ヘ。其日未ノ刻ニ。田村領ノ内黑籠ヘ本陣ヲ移サル。斯ル處ニ大内備前。五百餘騎ニテ小濱ヨリ築舘ヘ押來リ。小瀨川ヲ隔テ相戰フ。片倉小十郎軍兵ヲ進メ。小瀨川ヲ打渡シテ挑戰シ。小濱近所マテ追返ス。小濱城中ヨリ又數百騎打テ出。小十郎カ勢ヲ追返ス。小瀨川マテ押來リシカ。備前思案深ケレハ。小瀨川ヲハ涉ラス。片倉カ勢ヲ追捨テ。輕ク備ヲタヽミ。小濱ノ城ヘ引入タリ。政宗ニハ黑籠ニ在陣。翌六日田村ヘ使者ヲ送ラレケレハ。同七日大膳大夫清顯黑籠ヘ出馬。則政宗ヘ對面アル。高森雪齋・亘理元安・小梁川泥蟠・原田休雪・茂庭佐月・泉田安藝・伊東肥前等列座。軍評定アリケルニ。大内備前カ楯籠ル小濱ノ城ニハ。佐竹・會津・二本松ノ加勢。又ハ所々ニテ討洩サレタル弱兵共馳加リ。大勢トハイヘ共。皆所々ノ集リ勢ナレハ。サノミ恐ルニ不レ足。サレトモ備前ハ雄功ノ者ナレハ。種々ノ謀計ハカリ難シ。侮リ攻テ味方多ク討損シテハ。勝テモ何ノ詮カアラン。敵ヲ侮ラサルハ良將ノ軍慮ナリ。先ツ大内カ味方ニ頼ム小城共悉ク責落シ。會津・二本松ノ通路ヲ押隔テ。其後小濱ヘ取カケ。一戰ニ大内ヲ誅罰有テ可レ然ト。諸將ノ軍談一決シケレハ。清顯ニハ其日夕鐘ニ及ヒ。三春ヘ歸城アリケリ同八日政宗近郷ノ地形小城共ノ形勢ヲ爲二見分一。岩豆野邊ヘ出ラレ。東西南北一々ニ巡見有テ。申ノ上剋黑籠ヘ歸陣。則高森雪齋ヘ下知セラレケルハ。今日見分スル處ノ小城共。一兩日ノ中ニ破却スヘシトナリ。雪齋承リ。ケ樣ノ小城ハ若者共ノ手慰ニ相渡シ申ヘシ。歷々ノ手ヲ下シ候ニハ及申間敷ト申ケレハ。政宗聞玉ヒ。殊ノ外イヤシマレタルヨト笑ハレケリ。此事近郷ニ聞ヘケレハ。スハヤ小手森ノ如ク。撫切疑ヒナシト大ニ驚キ。周章騷クコト限リナシ。所々ノ領主制レ之ト雖トモ鎭ラス。時ニ岩豆野ノ城主岩津丹後。白岩ノ城主白岩主水。政宗此近邊巡見有シハ疑モナク。短兵急ニ攻落シ。武威ヲ示サン爲ニ。例ノ撫切タルヘシ。迚モ大内カ利運叶ヘカラス。妻子ニ憂目見センヨ

リハ。暫シ降參シテ一族ヲ全フセント内議シテ。其夜ノ明ルヲ待テ。黒瀧ノ本陣ヘ馳參シ。中島伊勢ヲ頼ンテ幕下ニ屬センコトヲ乞フ。則人質ヲ指出シテ加リケル。之ヲ聞テ滑津村ノ領主滑津三良左衛門。大窪村ノ領主大窪久左衛門。後山村ノ城主後山十郎右衛門十三佛村ノ領主十三佛刑部。以上四人黒瀧ヘ馳來リ。濱田伊豆ヲ以テ降ヲ乞フ。依之其地ヲ略シ。六ケ城ノ證人共ヲ受取。面々暇ヲ賜リケレハ。各安堵ノ思ヲナシ。居城々々ヘ立歸リ。人數ヲ催シテ先手ノ勢ヘ加リケル。爰ニ大内カ幕下ニ大場野ノ内ノ城主里見隼人義正。未タ降參セサリケレハ。即時ニ發向有ヘキ由ナリ。亘理美濃カ曰。彼躰ノ弱城出馬ニ及ヘカラス。某手勢ヲ以テ攻落シ申ヘシト云ケレハ。窮鼠却反テ猫ヲハムノタトヘアレハ。侮ルヘカラストテ。伊東肥前・原田左馬之助ヲ指加ラル。則時ニ大場野ノ内ヘ押寄園ヲ作テ無二無三ニ攻入ル。城兵防キ戰フト雖トモ。寄手多勢ナレハ。持口ノ手ニ合ス。終ニ城戸ヲ押破ラル。寄手イヨ〳〵力ヲ得。城中ヘ亂入。短兵急ニ採立ケレハ。城兵防ヘキ術ナク。或ハ討レ或ハ降リ。城將里見隼人ハ伊東肥前ニ討レ。隼人カ從弟里見次兵衛ハ。原田左馬介討取ケル。原田カ家臣片倉勘八。詰リ々々ノ役前ニ火ヲ放チケレハ。忽チ炎盛ニナリ。八方ヘ吹付シカハ。殘兵散々ニ敗亂ス。追討ニシテ首數級ヲ得タリ。亘理美濃・伊東肥前・原田左馬介・士卒ヲ揚テ其日午尅黒瀧ヘ歸リ。本陣ヘ是ヲ達ス。政宗喜悅有テ。則黒瀧ヨリ築舘ヘ移ラレ。此ニテ人馬ノ勞レヲ休メラル。築舘滯留ノ間。川股ノ近ク木幡村ノ辨才天ノ社ヘ參詣有テ。下向ノ刻土佐村ト云所ヲ通ラレケルニ。彼村ノ領主佐々木土佐ト云者。政宗ノ歸城ヲ待受。道ヲ進テ怒レル面色シテ罵リケルハ。爰ヲ通リ玉フハ伊達殿ト見受候。何條武士ノ禮儀ヲ棄ラレ。最初通ラレ候セツモ予カ不肖ヲ侮リ。一禮モナク蹈通ラル事コソ遺恨ナレ。其返禮申サンカ爲ニ待受タリ。武士ノ志ナレハ中指ヲ進上申サント。既ニ鏑矢ヲ射カケント

ス、近習ノ諸士從卒立隔。四方ヨリ取籠。網代ノ魚ノ如ニス、政宗ノ曰。ヤサシクモ武士ノ意地ヲ立タルモノ哉。助度思ヘトモ只今ノ雜言。他ノ見聞モアレハ免シカタシ、汝等心ノ儘ニ計ラヘト有ケレハ。若者トモ畏リ候ト云程コソアレ。眞中ニ引包ミ。從兵諸トモ散々ニ切倒シ。其戸モ皆ズタ〳〵ニ切捨ケル。政宗馬上ニテ馬柄ノ橋ノ古歌ヲ吟シ玉ヒ。渠モ口ユヘニ命ヲ果シケリ。淺猿サヨトテ則築館ヘ歸城セラレケリ。扨又先頃青木修理抱置シ三人ノ人質ノ事。小濱ヘ通達シケレハ。大内モ修理カ異心。口惜ク思ヒケレトモ。流石家老ノ子モ捨難ク。日限ヲ極メ。小瀬川ト云處ヘ双方ヨリ出テ。三人ノ人質ヲワタシ。青木カ子弟ト取替ケル、ケ様ニ鹽松表ハ合戰ノ街トナリ。心ヲ安ンスル隙非レトモ。八丁目ニ成實カ老父實元。機變ヲ謀ツテ控ケレハ。二本松境ハ靜謐ナリ。其仔細ハ義繼兼日ノ思按ニ伊達鹽松何レ弓矢ノ强キ方ヘ便ヲ求メ。身ノ上持立ヘキトノ志ナリ。依之此度モ義繼大内ヘ加勢セラル。然ト雖トモ。伊達ノ武威次第々々ニ盛ニシテ。攻ルニ不破ト云コトナシ。往々ハ伊達ヘ詫言アルヘキト見ヘ。八丁目ヘ使者ノ音信怠リナク。別シテ懇志ニセラレケル。實元思案ニハ會津仙道ノ諸將。皆鹽松ヘ加勢シケルニ。田村ハ敵地ナレハ通用不叶。二本松領中ハカリ通路セシム。實元義繼ニ入魂セハ。會津仙道ノ者共義繼ヘ疑心ヲ起シ。往々ハ内亂シテ。助勢ノ通路モ不自由ニ成ヘシ。然ルトキハ鹽松表弓矢ノ墓行クヘシト分別シテ。境目ヲ鎭メケル。此事先達政宗ヘハ潛ニ察示申シケレトモ。子息ナレトモ藤五郎成實。其年十七歳、政宗ニハ二ツノ年オトリニテ。若輩血氣盛ンナレハ。討洩テハ如何ト。成實ニハ曾テ知セス。其上實元成實ニ申含メ。二本松ト八丁目交リ斷絶ノ事。政宗ヘ勸メ申マシキノ旨。兩度マテ誓紙ヲサセ。義繼ヘ無事セシムル事。誠ニ實元老功ノ思按ノ由。何レモ後日ニ唱ヘケル。

鹽松合戰附大河内兵部少輔變死

大内抱ノ城々既ニ沒落シテ、備前ハ小濱ノ本城ニ楯籠リ、鹽松ノ城ニハ一族大河内兵部少輔ヲ籠置ケル。兵部カ嫡子大河内治郎吉・次男同半助若年ナレトモ、何レモ心猛キ者トモナリ。又家臣ニ菊池修理其子十三郎・齋藤越中子息孫右衛門・橋本中務其子次郎兵衛・其外家中ノ者共。武勇ヲ勵ミ譽ヲ顯ハシ。數年大内芦名ノ合戰ニ名ヲ得タル者多シ、兵部士卒ニ下知シケルハ。モハヤ鹽松領城々沒落シテ、今ハ小濱ノ本城ト此城ハカリ殘レリ。兵粮乏シク自滅センヨリハ。花々シク一戰ヲ遂。討死シテ名ヲ後世ニ殘サントテ、殘兵都合三百四十餘人。死ヲ一途ニ極メテ楯籠ル。九月中旬伊達勢鹽松へ取カケ。先陣片倉小十郎・濱田伊豆城ヲ圍ミ。矢石ヲ飛シ。喚キ叫ンテ攻立ル、城中ニモ兼テ覺悟ノ事ナレハ。同シク開キ合セ、楯出塀ヨリ鐵砲ヲ放シ。槍長刀ニテ突落シ、爰ヲ先途ト防戰ス、時ニ濱田カ手ヨリ赤松太郎・早川十太夫ト名乘リ。敵アマタ討取烈シク相働ク、又城中ヨリ菊池修理・澀川源五郎ト名ノリ打テ出、修理ハ太郎。源五郎ハ十太夫トワタリ合、五六合戰ヒシカ。菊池ハ數度ノ戰ニ手柄ヲ顯シ。六十ニ餘ル覺ノ者ニテ、太郎カ膝ニ刀ヲ討込ミ、タヽヨフ處ヲ乘カヽリ、首取テ立上ルトコロヲ。寄手ヨリ武者一人カケヨリ。修理カ首水モタマラス打落ス。嫡子十三郎遙ニ見テ走來リ、彼武者ヲ切倒シ、修理カ首ヲ奪返シテ立歸ル。其隙ニ澀川源五郎。早川十太夫カ首ヲ取リ歸サントセシ處ヲ、鐵砲ニテ面ヲ討レ。痛手ナレハ其場ニ倒レ死タリ。其外城中ヨリ和田藏人・齋藤孫右衛門・橋本次郎兵衛・皆川八左衛門等突テ出、伊達上野介政景入道雪齋カ陣へ亂入シテ攻戰フ。城中小勢ト雖モ　名ヲ得タル兵部少輔士卒ヲ勵シ防キケレハ、速ニ落城スヘシトモ見ヘス、斯テ未ノ下尅ニ至テ。一先ツ攻口ヲ退ケテ休息ス、政宗茂庭石見。片倉小十郎・原田左馬介・濱田伊豆等ヲ近付 評議アリケルハ。此城攻落ンコトイト安シト雖トモ。大河内兵部少輔ハ代々武勇ノ家ニシテ、就中十文字槍ノ名譽ヲ得ル

ト聞ク何卒遂シ宥メテ味方ヘ招キ、一方ノ用ニモ立度思フナレハ。汝等計ヲ廻ラスヘシト有ケレハ。茂庭石見承リ某幸ヒ大河内ニハ近キ良縁ニ候間、何卒スカシ相計ヘ可レ申トテ。則使ヲ以テ兵部少輔カ家來武内刑部カ方ヘ云ヒ送ル、刑部則此趣大河内ニ告ケレハ。兵部少輔是ヲ聞テ我不肖ナレトモ、定綱一門タルニヨツテ。頼シクモ此城ヲ預ケラレシニ。ナンソヤ今代々ノ武名ヲ捨テ、數代ノ領地ヲ離ンヤ、譬政宗ノ味方ニ屬スルモ。百年ノ齡ハ期ス可ラストテ。曾テ承引セサリケル。依レ之重テ政宗ヨリ自筆ノ書簡ヲ以テ。サマ々々ニ懇切ノ招キアリケレハ。兵部今ハ默止カタク。終ニ幕下ニ可レ屬旨返答シ、今宵潜ニ石見カ陣迄參入セントナリ斯テ兵部少輔ハ家臣齋藤越中。橋本中務兩人ヲ召具シ。中務カ家人黑澤久左衛門トテ。名ヲ得タル武功ノ者ニ挑灯ヲ持セ、夜ノ五更ニ城ノ後ノ山ヨリ潜ニ茂庭カ陣中ヘ行トコロヲ、爰ニ寄手ノ夜廻リ鈴木五郎右衛門、足輕十餘人手ノ者二三人召連テ來リシカ、兵部カ挑灯近付ヲ見テ、五郎右衛門走リヨリ、是ハ大河内殿ト見受タリ、城ヲ持兼テ何方ヘ落玉フヤ。討取テ見參ニ入ント。十餘人ノ者トモハラ々々ト打テカヽル、大河内扨ハ欺ラレヌルヨト、主從四人太刀拔合戰ヒシニ、月未タ遲キ秋ノ夜ノホノ暗クシテ、中務石ニツマツキ倒レケルヲ。鈴木カ足輕スカサス。上ニ乘テ首ヲ取ラントス。中務聞フル者ナレハ。下ヨリ刀ノ柄ヲ握リ、ハネ返シテ足輕ノ首ヲ取リ。起上ル處ヲ又後ロヨリ高股ヲ切落サレ動ト臥ス。首取ント馳ヨル敵ヲ、臥ナカラ拂刀ニ横腹ニ打コマレ、同シ枕ニ倒レケル、有合者共走ヨリ、中務ヲ切殺シ首ヲ、取テ名有者ヲ打取タルト逃行ヲ、黑澤久左衛門南無三方ト馳寄。捕テ押ヘ刺殺シ、中務カ首ヲ奪返ス。齋藤越中モ足輕二人マテ打取シカ、多勢ニ無勢叶ヒ難ク。痛手ヲ負テ動ト倒レケレハ。今ハ力ナシト、兵部少輔モ自殺シテ伏タリ。黑澤久左衛門ハ此旨城内ヘ告知セント。城中ヘ走歸リ。鈴木五郎右衛門モ十餘人ノ者

其殘リ少ニ討レケレトモ。兵部少輔主從カ首ヲ得テ悦ヒ勇ミ本陣ヘ馳歸リ。片倉小十郎方ヘ訴ヘケレハ。景綱大キニ驚キ。急キ此旨相達ス。政宗立腹限リナク。一應ノ沙汰ニモ不及。卒忽ナル鈴木カ仕方不屆ノ至リナリ。依之五郎右衛門ハ切腹。殘ル者共ハ成敗セラル、斯テ茂庭石見城中ヘ使ヲ以テ。鈴木五郎右衛門カ卒爾ノ至リ。兵部少輔ノ變死。近頃本意ナク存候。此上ナカラ才覺ヲ以テ少知ヲモ宛行ル、樣。取次可申ノ間城ヲ開テ御越アルヘキノ由云遣ス。城中ニ殘ル者トモニハ兵部少輔カ二人ノ子共。家人齋藤孫右衛門・橋本次郎兵衛・玉造玄通・和田藏人・赤間左覺・皆川八左衛門・武内刑部・大柳權右衛門・菊池十三郎・梁川源之助（源左衛門子今年十六歲）是等ヲ先トシテ、何レモ久左衛門カ注進ニ憤リ中々承引ノ氣色ナシ。兵部少輔カ子息同苗次郎吉・同半助返答ニ近頃ノ念使忝ク候ヘトモ。兵部少輔滅亡ノ上ハ。今更我々御味方詮ナシ。只速ニ討死ト存定メ候ト返事シケレハ。石見力ナク此旨政宗ヘ相達ス、其後本陣ヨリ下知ニ依テ。城近ク押寄。各矢軍ハカリニテ、其日ハ暮ヌ。城中ニハ談合シテ小勢ト云ヒ。殊ニ大將亡ヒ。士卒ノ氣散亂シ。中々半日モ敵對難シ。所詮一先ツ落行テ後軍ノ時ヲ期スヘシトテ。嫡子次郎吉ハ菊池十三郎ヲ供トシテ。越後ノ長尾家ニ知人有テ落行。次男半助ハ茂庭ヲ賴來ケルヲ。石見才覺ヲ以テ湯目近江方ヘ與力サセ。其後白石・大坂等ノ陣ニ出テ。手柄ヲ顯シケレハ。政宗之ヲ召出シ。再ヒ大河內ノ家ヲ相續ス、抑此大河內カ流上ヲ尋ルニ。源三位賴政ノ末葉ナリ。賴政鵺ヲ退治セシ刻。帝叡感ノ餘リ菖蒲トイヘル官女。並ヒニ菊ノ御紋ヲ賜ハル。夫ヨリ三蝶ニ菊ヲ以テ代々其流ノ紋トス。則大河內ノ紋是ナリ、誠ニ兵部少輔小身ト雖トモ。先祖ノ弓矢ヲ受繼。仙道ニ於テハ名ヲ呼レタル家筋ナレハ。政宗ニモ大河內カ故ナキ變死ヲ惜マレケリ。斯テ鹽松落城シケレハ。今ハ小濱ノ本城ハカリ殘リケレハ。伊達勢イヨ々々勇ヲナシ。一擧ニシテ定綱ヲ追落サント競進ム。政

宗諸將ニ下知ヲ傳ヘ。翌日早旦ヨリ段々ニ人數ヲ出シ。小濱ヘ惣陣ヲ取詰ラル。

大内定綱小濱沒落

田村大膳大夫清顯ヨリ使者ヲ以テ申サレケルハ。小濱ニハ援兵多ク。其上鹽松ノ者共。並ニ方々ノ落武者馳集リ。大勢楯籠リノ間。早速ノ勝利アルヘカラス。先々田村ヘ馬ヲ廻サレ。大内抱ノ殘城ヲ拔取。二本松方ノ通路ヲ取切リ。助兵ノ道ヲ遠サケ。粮道ヲ斷ハ。自然ト小濱落城スヘシト云々。政宗則同心有テ。九月二十七日田村ノ地黑籠ノ城ヘ。又以テ本陣ヲ移サレ。同廿三日モ同所ニ滯留。然ル處ニ小濱城中ニ。伊達ヘ志ヲ通スル者有テ。城中ヘ人數ヲ引込可申ヨシ。片倉景綱ヲ以テ之ヲ通スルニ。依之猶慮實ヲ窺ヒ。便宜ヨクハ其旨可計ノ由命セラレ。景綱・成實等ハ築舘ニ殘シ置レケル。此間小濱・小瀬川ノ近邊時々小迫合有テ。双方得ル處ノ首十級ニ過キス。同廿五日政宗岩角ヘ出陣。大物見ヲ以テ地理ヲ順見セラレ。此城責拔ニ於テハ。二本松ノ通路切テ。小濱籠城ノ弱リナレハ。明日速ニ攻落シヘシト有テ。又黑籠ヘ打入ラル。然トコロニ小濱ニ於テ。會津・二本松ノ助勢打寄テ評シケルハ。岩角落城ニ於テハ。二本松ヘノ通路ヲ留ラレ。網ノ中ノ魚ノ如ク。引除コト叶フ可ラス。殊ニハ兵粮運送ノ道絕テ。多勢空シク此城中ニ飢死スルカ。タトヘ運ニ任セ引除トモ。爰彼所ニ待伏ラレ。野武士一揆ノ爲メニ人數ヲ失ヒ。太刀物具ヲ奪ヒ取ラレ。有カ無カ如クニテ逃歸ラハ。永ク後レヲ取ノ基ナリ。一先ツ大内ヲ勸メテ當城ヲ可退ト談合シ。會津ノ軍將中目式部・平田尾張兩人ヲ以テ。備前ヲ諫テ申ケルハ。今日政宗岩角ヲ順見セラレ。彼城ヲ攻拔ヘキ樣子ニ相見得候。岩角落城シテ。伊達勢取籠リ候ハヽ。會津仙道ヨリ重ネテ可助方便ナク。小濱籠城ノ勢モ可引除道ヲ失ヒ。空シク當城ニ於テ自滅スヘシ。御存知ノ如ク會津ニハ田野四民分ニ超テ。只缺ルトコロノモノハ。軍功勇猛ノ士ナリ。故ニ我先生盛隆ニモ常々貴殿ヲ懇望有シ者

也。若今運ノ末ニ殘シテ、會津ヘ引除玉ハヽ、大内殿ニ於テハ不幸タリト雖トモ、會津ノ為ニハ大幸不過、之千斤万斤ヲモ惜ミ申コトアル可ラス。今我主幼稚ナレハ、幸ニ國政ノ執事ト頼ミ、幸ヒ家老松本圖書之助カ亡命ノ跡、明地ニテ候間、其領地ヲ以テ直ニ宿老タルヘシ、且ハ士卒ノ為ト云事ヲ負テ。今夜潜ニ會津ヘ引除カレ可然。斯士卒ノ變動ニ及テハ。防戰迚モ利ナキコト必定セリ、可退ニ退サルハ將タルノ道ニ非ス。是非々々此義ニ從ヒ候ヘト、ヒタスラニ勸メ催促シケレハ、大内モ會津・二本松ノ通路ヲ大事ニ思ヒシ處ニ、抱ノ城々悉ク沒落シ、宗ト頼ミシ大河内ハ滅亡シタリ。其上ニ岩角ノ城取切レテハ、進退途方ヲ失フノ時ニアリ。末頼少ク大功可立謀ヲ失ヒ、思慮ヲ決スルコト不能。只茫然トシテ置コトナク、取コト叶ハヌ折節ナレハ、再應ノ意義ニモ不及、則中目・平田カ諫ニ隨ヒ、天正十三年九月二十五日ノ夜、ヒソカニ妻子從者ヲ引マトヒ、住馴タル舊居ヲフリ捨、小濱ノ城ヲ忍ヒ出、二本松ヲ打越ヘ、會津ヲサシテ落行ケル。大將立除ク上ハ、誰カ跡ニ止ルヘキ、諸將士卒ニ至マテ、皆右往左往ニ退散ス、小濱沒落シケレハ、岩角モ其夜ノ内ニ開除キ、鹽松領分殘ル所ナク伊達ニ屬ス。斥候ノ者共、此由急キ黑籠ヘ注進シケレハ、諸軍皆追討ニ大内ヲ討ントヒシメク。政宗制シテ予カ思フ仔細アレハ。落ハ落シテ追討ス可ラス、天明ケハ兩城ヲ點檢シ、築館並ニ三春ヘモ、早速ニ告知スヘシト下知セラル。大内ハ名アル勇將ト云、殊ニ近郷遠境ヨリ加勢ハ大勢ナリ。輙ク伊達殿ノ手ニハ入難シト。諸人申シアヒケルカ、小手森ヨリ始テ石卵ノ勢ヲ震ヒ。諸城不日ニ沒落シ、サシモ勇猛ノ備前モ、一戰ノ功ヲモ不遂落居シケレハ、政宗ノ雄名遠近其不恐ト云者ナシ。抑大内ハ百濟王ノ流裔ニシテ、太宰大貳多々良義隆ノ一姓ナレハ、俗姓賤シカラス。中古ヨリ大内上杉トテ東西ノ管領重キコト、諸人眼ノアタリナレハ、今又大内備前小身ト雖モ、家風ト云、武名ト云、遠近恐レ順ヒシカト

モ。時勢ノ得失ニ不レ精。政宗龍門ノ秀蓮ニケナサレ。術盡キ力窮リ、數代ノ領地ヲ離レ、漂泊ノ客トソナリニケル。既ニ先言ニモ利ヲ先ニシテ。義ヲ後ニスル者ハ滅フト。誠ナル哉。武士タルモノ。身ヲ商賣スル時ハ其害終ニ至ラスト云コトナシ。大内モ己カ勇ニ誇リ。身ヲ商フノ士ナリ。義將トスルニ足ラス。天刑奚ソ其志ヲ全フシテ遂ルコトアルヘケンヤ。

伊達秘鑑巻之十五終

伊達秘鑑巻之十六

東奥仙府　燕々軒　編集

伊達政宗與ニ相馬義胤ニ初對面之事

大内備前勢ヒ盡テ。小濱ヲ沒落シケレハ。伊達ノ武威猶々盛ンニ。日ノ始テ昇ルカ如ク。水ノ堤ヲ割クカ如シ。相馬義胤ハ大内退治加勢ノ爲メ。三春ヘ出張アツテ。道場ニ滯留アリシカ、使節ヲ以テ對面ノ事ヲ申シ越サレ。宮森ノ西ニ當ル樵山ト云處ニテ。政宗義胤初メテ芝居ニ於テ對謁アル。伊達ノ隨臣ハ、亘理美濃重宗・白石若狹宗堅・片倉小十郎景綱・富塚近江以上四人扈從ス。相馬ハ泉大膳・木幡出羽・青田山城・原如雪ナリ。互ニ初對面ノ式終テ。數年ノ胸懷ヲ演ラレ、則双方退宿ナリ。其後義胤政宗ノ陣城宮森ヘ見舞ハレ。對謁ノ時互ニ帶刀ヲ替ヘラレタリ。相馬ヨリハ手額ト云刀ナリ。伊達ヨリハ新ラ身ノ刀ナリ、翌日三春ノ道場ヘ政宗來臨アリ、此時泉大膳ニ大鷹。木幡出羽ニ日貫

并青田山城ニ小袖ヲ賜フ。且ツ政宗小濱在陣中。相馬ヨリ原如雪ヲ附置レタリ、依之如雪ニ伊達ヨリ領地三百石施サレケリ、其黒印今ニアリトソ。

二本松義繼頼ニ伊達實元ニ事

此度鹽松表大内退治ノコト。容易ノ戰ニ非サレハ。輝宗ニモ心許ナク思ハレ、追々ニ士卒ヲ催促アッテ。先比ヨリ川股マテ著陣アリ、其變ヲ謀ハレケルカ、大内虎狼ノ勢ヒ竭テ天正十三年九月廿五日ノ夜小濱ノ城ヲ立除鹽松領城々無殘落居シケレハ輝宗急キ政宗ノ本陣黒籠ヘ入來アッテ御父子對面此間ノ軍勞ヲ犒ハレ諸軍ノ辛勞ヲ慰セラレケル。斯テ兩所共ニ黒籠ヨリ小濱ヘ陣ヲ移サレ押付二本松ヘ取カケ、城責アルヘシトノ評定ナリ。然ル處ニ二本松ノ城主右京大夫義繼ハ兼テ近國ノ諸將其強キ方ヘ便リテ、身上ヲ立ラレケルリ。近年ハ會津・佐竹ヲ頼ミ大内備前ニモ一味シテ、後詰ノ加勢ヲセラレケルカ、大内介抱十餘ケ城悉ク責落サレ剩ヘ備前モ小濱ヲ沒落シ。會津ヲ頼テ落行ケレハ。義繼大ニ心ヲ苦シメ。家臣新庄彈正・小舘刑部・高田内膳・鹿子田和泉・遊佐下總等ヲ呼集メ。伊達勢近日寄來ルトノ沙汰アリ。政宗威勢盛ンニシテ向フ所靡カヌト云コトナシ。多勢ト云。對陣難叶思ヘトモ。此城ヘ引受一戰シテ腹切ンカ。又此方ヨリ進テ小濱ヘ押寄。勝負ヲ一擧ニ決センカ。又降參シテ可然カ面々ノ思惟ヲ聞ントアリケルニ、何モ大事ノ評定ナレハ左右ニ讓リテ敢テ返答スル者ナシ。爰ニ中野常陸宗時ト云者アリ。彼ハ元來伊達譜代ノ家臣ナリシカ、晴宗ノ代逆心ヲ企テ伊達内亂ノ張本タリ。事ナラサルニ及ンテ。一所懸命ノ地ヲ捨テ、二本松ヘ逃來リ義繼ノ扶助ニ預リ居ケルカ、進ミ出テ申ケルハ。某カ存スルニハ。敵ヲ此方ヘ引受ンコト然ルヘカラス。逆寄ニ小濱ヲ攻ラレテ可然ト云々小舘刑部カ云。其術理ナキニ非ストイヘトモ。去ナカラ今伊達ノ兵勢秀運ニシテ容易ニアタルヘカラス、殊ニ田村清顯ハ父子ノ因ミアリ。其上ニ相馬モ一和セリ。此方

ヨリ小濱ニヨスルニ於テハ。必田村勢裏切スヘシ。左ナクハ跡ヘ廻リテ。當城ヲ乘取ランコト必定ナリ。然ル時ハ味方敗北センコト目前ナリ。勢ノ多少ヲ謀ルニモ。伊達勢ニ合スレハ。十カ其一ツニ不過。中々敵對不可叶。所詮八丁目ノ城主伊達實元ハ。兼々懇意ヲ結ハレシ事ナレハ。平ニ御頼アッテ。伊達ヘ和睦アランコト。肝要ノ謀ニシテ。此外ニ他事アルヘカラスト申シケレハ。一座皆コノ義ニ同シ。和睦ノ手入可然ト。一同ニ諫メケル。義繼元來此義心ニ思ヒ設ケシコトナレハ。再評ニ不及。其議ニソ究リケル。依之義繼則八丁目ニ至リ伊達兵部大夫實元ニ對面アリ。言葉ヲ盡シテ頼レケルハ。某先祖ヨリ代々當家ヲ頼ミ。身上ヲ立ルノ處。近年會津・佐竹・岩城ヨリ田村ヘ弓箭有之刻。義繼モ田村淸顯ヘ遺恨アレハ右ノ諸將ヘ加勢ノ軍兵ヲ遣シ。合戰ヲ遂ル所ナリ。此罪遁ル丶所ナシト雖トモ。前々ヨリ御介抱ノ厚心不忘所ハ。相馬出陣ノ刻味方致セシハ。皆眼ノアタリ何モ存知ノ前ナリ。兎ニ角ニ前々ノ不義赦免アッテ。自今幕下ニ相加ヘラル様。執成偏ニ頼ミ存スルナリト。委細ヲ演談アッテ。義繼ハ歸ラレタリ。依之實元二本松降參ノ趣キ具ニ兩將ヘ達之ケルニ。輝宗ノ曰。先年相馬ト弓矢ノ節。義繼加勢セシハ我無失念是ヲ覺ヘタリ。雖然此度前約ヲ變ヘシ。大内ニ心ヲ合セ。小手森合戰大場野ノ内働キ等ニ備前ニ加勢シ。若シ大内利得ル時ハ伊達ヲ掠ンコト何ノ疑ヒヤアラン。今政宗運ニ叶。勝ニ乘ルヲ見テ身ノ難ヲ遁ン爲。暫時ノ降ヲ乞コト。彌々不義ノ至リナリ。所詮押寄一戰ノ勝負ヲ遂ヘキノ間。其用意アルヘキノ旨。申送ヘシトノ返答ナリ。實元力不及。急キ八丁目ヘ立歸リ。輝宗返答ノ趣キ。義繼ヘ達シケレハ。義繼ヲ始メ上下兵士呆レ果。茫然トシテ泥魚ノ醉ルカ如クナリ。鹿子田右衛門・中野常陸等一同ニ申シケルハ。今更伊達ノ鋒先ナリトモ。サノミイカメシキコトアラン。大内カ如キ運命ノ盡タル者ノ。利ヲ失フテ敗散ストテ。聊動轉スヘキニ非ス。疾々

小濱ハ逆寄ニ取カケラレ、不意ノ一戰可ㇾ然ト云ケレトモ義繼敢テ承引ナク汝等血氣ニ任セテ廣言ヲ吐コト勿レ併ニ此度大内カ滅亡モ大内長門カ惡言ヨリ事起レリ人ノ嗜ムヘキハ口言ナリ我ヲ亡ス媒トナル一言奇怪ノ至リナリ士卒ヲ窮苦シテ其上ニ家名ヲ滅サンヨリハ降ヲ乞テ無難ヲ謀ハンニハトテ其日ノ沙汰ハ果ニケリ

義繼再訴推參小濱之事

斯テ左京大夫義繼ハ小濱ヘノ訴訟不ㇾ叶其意ヲ失ヒ。今ハ早一戰ニ及フヨリ外。他事ナシト思ハレケレトモ對陣シテハ利ヲ得ンコト金石ヨリモ堅シ何卒シテ降ラハヤト思慮ヲ廻ラシ十月二日再ヒ八丁目ニ至リ。實元ヘ賴マレケルハ。兩將ノ憤リ至極セリ。去ナカラ某一人ノ非ヲ以テ。家中ノ兵士故ナキニ身命ヲ捨サセ。且亦流浪ノ身トナサンコト、實ニ歎キ入ル所ナリ義繼一分ノ身ノ上ハ、兎モ角モ意命ヲ背キ申スマシ、家中ノ安堵願フ所ナレハ、如何樣ニモ執計ヒ、再訴賴ミ入ルヨシヒタスラニ賴マレケレハ實元モ痛ハシキコトニ思ハレ。再訴ノ趣キ聞屆ケ。同二日ノ夜中ニ實元小濱ノ陣所ヘ參リ右ノ次第ヲ演達ス輝宗之ヲ聞屆ラレ匿ㇾ怨而友ㇾ其人ㇾ左丘明恥ㇾ之丘亦恥ㇾ之ナレハ降和ヲ願フハ、自他ノ恥ナラサレハ出陣ノ義控ユヘシ二本松領ノ内南ハ杉田川北ハ油井川ヲ限ニ相渡シ中五ケ村ヲ以テ可ㇾ相立ㇾ右ヲ以二本松ノ家跡相續アルヘキナリ其上長男國王丸證人トシテ米澤ヘ差越サルヘシ、是等ノ趣キ申述ルヘキ由ナリ實元則件ノ趣キヲ義繼ヘ申述ル義繼ハ案ノ外ニ思ハレケレハ、諸臣ヲ集メテ內談アル各申ケルハ今更無ㇾ是非次第ナリ雖ㇾ然弓箭ノ家ニ生レ廣原ニ死ヲ致スコトハ、モトヨリ武士ノ本望ナリ有爲轉變ノ習ヒハ、只此城ヲ枕トシ君臣共ニ黃泉ノ旅ニ出ンヨリ外他事ナシト。皆一同ニ申シケレハ。義繼感淚ニ不ㇾ絕、誠ニ賴母敷忠心報スルニ詞ナシ夫ニ付ケテモ各ノ命ヲ亡サンコト、我千悔是ニ不ㇾ過、我前恩ヲ不ㇾ

願。大内ニ加勢シタルコト。全ク非義ナリ。伊達ノ憤リ無餘儀。再三ニ訴訟スルニハ如シトテ。諸臣ノ諫メヲ押ヘ。亦以テ實元ヘ賴マレケルハ。意命ノ趣キ承知致ス所ナリ。乍去領内南北ノ内一方ヲ殘サレ。家名ヲ立家中ノ露命ヲ救ヒ玉ハルヘシ。夫モ承引ナキニ於テハ家老並ニ門栖ノ族ハカリ。本領ニ屬シ預リタシトノ趣。再三願ハレケレハ。實元則小濱ヱ告達スト雖トモ。聊承引ナカリケリ。依之義繼最早是迄ト思ヒ切。十月五日諸臣ヲ集メ。再三訴訟ヲ立ルコトモ。各ノ身命ヲ惜ミ思フ故ナリ。此上ハ是非ニ不及。各ノ身命我ニ與ヘヨ。悔恨ルコト勿レ。九原ノ旅ニ於テ。又君臣ノ禮ヲ爲ントアリケレハ。皆々本ヨリ其義思ヒ定メタルコトナレハ。少モ臆スル氣色ナク。忠死一同ニ決定シタリ。時ニ新庄彈正進出。何レモノ存念ニ叶ヒ。先以本意タルヘシ。去ナカラ。敵ヲ此城ヘ引受テハ。慕々シキ働キハナルヘカラス。雜兵ノ手ニカヽリ。犬死センハ無念ノ上ノ無念ナリ。コノ上何卒謀ヲメクラシ。伊達殿父子ノ内一人欺リ討カ。又生捕ニシテ籠城セハ。此上ノ術ナシ。仕損セハ其時コソ。一人モ不殘切死センニ。難キコトアラント云ケレハ。義繼耳ヲ傾ケ。默然タリシカ。彈正カ詞アタレリ。其計略ハ我ニ任スヘシ。若仕損スルニ於テハ。二度此城ヘ歸ルマシ。其時ハ各國王丸ト諸共ニ城ヲ枕トシテ。穢土ノ火宅ヲ出ヘシ。行モ止マルモ忠義。供ハ一同必行止ヲ爭フヘカラストテ。各手分ヲ定メ。同六日ノ早朝ニ。二本松義繼主從三十餘人ニテ。小濱ノ陣所ヘ推參アル。同日輝宗政宗ノ陣場ヘ御越シ有テ。家臣ヲ集メ。義繼再訴ノ趣具サニ談話アツテ。兩將評議アル處ヘ。義繼推參セラレ。遠藤基治ヲ以達サレケルニ。始ヨリ伊達兵部實元カ取次ナレハ。若年タリト雖トモ。嫡子藤五郎成實可ニ申次トナリ。依之成實ヲ以テ。義繼推訴申サレケルハ。二本松半領ノ義モ。家族ノ者共本地ノ儀モ。兩條ノ訴訟共ニ願不叶。承諾無之ニ依テ。不及是非推テ參上致ス處ナリ。此上ニハ切腹ノ命ヲ給ハルトモ。如何

様ニモ兩將ノ心ニ任セ浮沈ヲ究ント存詰、慮外ヲ不顧推テ參上候。此旨演達可預トナリ。成實思惟シケルハ義繼柔和ノ詞ノ中時トシテ怒ノ色眼中ニ顯レケレハ。本領ノ願ヒトリ上ナキニ於テハ。恨ヲ懷ンコト必定ナリ當分憤リ甚シキ折ナレハ末々ハ諫訴シテ本領義ハ可計ト思慮シケレハ色々叮嚀ニ詞ヲソヘテ和ラケ置義繼推參ノ意趣、具ニ兩將ヘ達之御父子評談アツテ武將タルモノ知祿ヲ捨。身體ヲ投打、首ヲ押テ來ルコト義理尤餘儀ナシ。此上ハ爭カ情ナキ沙汰ニ及ンヤ最初ノ願ニ任セ南方ノ領地、指添ラルヘキノ由ナリ。尤不思議ノ參入。滿悅ノ至ニ候以來殘心アルヘカラスノ旨念比ノ御返答ナリ。成實則右ノ趣義繼ヘ演說ス義繼喜ヒノ面ヲ和ラケ。慈愛ノ御憐ミヲ以テ身上相濟申事忝キ旨謝禮ヲ演ラレ迚モノコト對顏遂ラレタキ旨願ナリ。成實則達之。依テ兩將對面アルヘキ由ニテ、彼是トシテ時移リ。燈立テ後對面アル慇懃ノ扱ニテ義繼一禮事相濟ム。兼テハカリシコトモ。思ノ外ニシテ。訴訟調ヒケレハ。其義ニモ不及。又時ノ便宜ヤアシカリケン。何事ナク則退宿セラレケリ。輝宗ニハ其夜三更ニ宮森ノ本陣ヘ歸ラレケリ。斯テ義繼成實方ヘ使者ヲ以。此度ノ一件輝宗ノ計ラヒヲ以テ沙汰宜ク。一身大幸不過之。此旨輝宗ヘ謝禮ヲ遂。早速ニ歸城セシメ。愚息國王丸米澤ヘ相送ル支度モ申付度、且伊達上野介政景ヲ始、門族ノ輩餘多宮森ヘ參向當方靜謐ヲ賀シ申サル斯折柄一同ニ參禮如何アルヘキヤト申コサル。成實コノ旨政宗ヘ伺ケレハ、兎モ角モ其意ニ任サルヘキ由ナリ。則義繼ヘ申送リケレハ。同日小濱ヲ出立。宮森ヘ赴カレケリ

左京大夫輝宗生害附義繼以下滅亡之事

斯テ二本松降參ノ賀祝トシテ。高森雪齋・亘理元庵・國分彥九郎・小梁川泥蟠・桑折點了・泉田安藝・石母田右衛門・原田休雪・濱田伊豆・富塚近江・遠藤山城・中島伊勢・茂庭佐月・同石見・片倉休意・白石若狹・守屋主伯ヲ

始トシテ各宮森へ參向ス。同八日二本松右京大夫義繼宮森へ參入アル。義繼ハ畠山河内守國詮ノ末葉ニシテ客人ノコトナレハ。客位ニ義繼主位ニ對席ナリ。輝宗ニハ紙袍ヲ着用。小脇指ヲ帶ヒ。軍配團扇ヲ携ヘテ出合玉フ。其下ニハ伊達上野介政景入道雪齋・伊達藤五郎成實着座ス。義繼從臣ニハ。高田内膳・鹿子田和泉・大槻中務三人。座席へ連ラレタリ。然ル所ニ城下ノ町屋ニ於テ宮森ノ足輕一人刄ヲ研者アリ。傍ノ人其故ヲ問ヘハ。彼者戯レテ云義繼ニテ參ラレタリ。此刀ヲ以從類ヲ切テ高名セント欲ス。問者誠ニ然リト云。爰ニ二本松ノ商人在合シカ。此言ヲ聞テ大ニ驚キ。則走リテ城ニ入鹿子田和泉カ從者ニシカ〻ト告之。彼者ヒソカニ和泉ニ通シケレハ。和泉驚イテ何心ナキ躰ニテ義繼ヲ次ノ座ヘマネキ。竊ニ囁キ告テ座ニナヲラシム。輝宗義繼席定ツテ一禮アリケレハ。義繼慇懃ニ前日ノ誤リヲ謝シ。且輝宗ノ計ヒヲ以。今度ノ滅亡ヲ遁レシコト。ヒトヘニ深情ニ依テナリト。再三ニ

コレヲ謝シ。互ニ無事ノ挨拶悅ヒノ旨。大形ノ出會ニテ義繼暇ヲ乞テ立レケレハ。輝宗門送ノタメニ。庭上マテ一禮有之トコロ。義繼土ノ上ヘ手ヲ突キ。色々懇意ノ御扱忝ナシト云ヤイナヤ。飛ヒカヽリ。左ノ手ニテ輝宗ノ胸元シツカリトリ。脇差ヲ拔テ胸ニ突キ掛テ引立ル。ソコシモ細道ニテ。兩方竹カラ垣ナリ。成實・政景モ其間二三間程隔テ庭ニアリト雖トモ。急變救フコト不能。卒爾ニカヽランモ易ケレトモ。義繼輝宗質トシテ。スハトモイハヽ忽チ刺殺サン眼色ナリ。兎角スル内義繼ノ從士トモ。竹垣ノ間義繼ノ後ヲ潛ツテ。成實・政景カ間ヲ立隔。輝宗義繼ヲ眞中ニ引ツヽミ。五六十人四方ヲ圍ミ引トル。道セハケレハ脇ヨリ可進樣ナク。門ヲ打ヨ抔ヒシメキ呼ハル内ニ。早門外ヘ出タリ。トカクスル内ニ。二本松方上下百人ハカリ。其内半澤源内ト云者。月鉧ノ槍持テ。一人遊佐孫九郎ト云者。弓持テ一人。此外ハミナ振太刀。何レモ步立ナリ。義繼ノ跡ヲハ猿足太郎兵衛トテ。武功ノ者。前後ニ

下知シ、眞丸ニ成テ引除。義繼ノ馬ヘ口トリヲノセテ、二本松ヘ一サンニ馳行、十一騎疾ク翔來レト申セ迚。馬ヲ飛ハセテ差遣ス折節、其日冬霧深ク。一歩ノ先モ見ヘサリシカハ道ヲ踏違ヒ此彼所ト乘廻ル内早事破レタリ二本松ノ兵士共ヘ左右ヲ待テ川ノ向フニ、馬ヲ引立待居タルニ其甲斐ナシ、伊達方ハ周章騷キ陣中上ヲ下ヘト返シケレハ諸卒夢ノ心地ニテ弓矢打物取物モ取敢ヘス只御跡ニ附ソヒ。左右ヲ取マキタル計リニテ、何思案モナクソ見ヘニケル、誠ニ無念ノ事共ナリ其日政宗ニハ軍務懸勞ノタメ鷹獵ニ出ラレシニ宮森ノ早打櫛ノ齒ヲ引カ如ク。シキナミ打テ注進ス政宗大ニ驚キ是非ノ言葉モナク。馬引寄テ飛ヒ乘宮森ヲ目當ニ馳玉ヘハ供ノ士卒我先ニト。狩場ヨリ早馳ニテ三田畠溝路ノ嫌ヒナク短兵急ニ馳付テ向フヲ見レハ無慙ヤ輝宗ノ御手ヲ左右ヘ引ハリ。籠中ノトリノ如ク、四方ヲカコミ、拔ツレタル刄ノ光リハ夕日ニ耀キ誠ニ目モ宛ラレヌ形勢ナリ。大將ノ心中推計リ兎角言ニノヘカタシ、宮森ヨリ付來ル輩モ心ハ矢武ニハヤレトモ。手指ヘキヤウナケレハ。只身ヲ慄ハシ。拳ヲニキルハカリナリ。其間近クナレハ。輝宗聲ヲ發シテサケヒ玉フハ、我既ニ運命極ッテ擒トナリ恥辱ヲ萬人ノ前ニ殘シ先祖迄ノ名ヲ下ス。我ヲ以テ父トスルコト勿レ。主君ト思フヘカラス。親族從者ニ離レテ。今匹夫ノ身ナリ何ノ悲ミカアラン、義繼トトモニ討果シテ、武威ヲ全フセヨト叫ヒ玉ヘトモ、政宗迚カ父諸共ニ打果サンコト、非情ニ絕ス、眼前ノ生害忍ヒ難クサテ又生捕ノ身トセハ、此上ノ憂目淺マシキ次第ナリ、如何セント怒ル面ニ。泪ヲ浮メ齒ヲ喰ヒシハリ、御思案、決セス、老臣諸士ノ面々、主君トトモニ討果サンコト兎角言語ニノヘカタシト、只呆レタルハカリニテ宮森ヨリ高田マテ、其間二里ハカリ。打圍ンテ附ソヘ供スルハカリナリ、小濱ヨリ馳付タルハ。過半武具ハ帶シケレトモ宮森ヨリ出タル輩ハ。素肌步素足ニテ。採物モ取アヘス。皆淺マシキア、

リサマナリ。高田ヨリ逢隈川ヘハ。其間僅五六町程ナリトキニ桑折播摩政宗ニ向ツテ。義繼川ヲコヘテハ。何ト思召トモ不レ可レ叶。遁レ難キ御變死ナレハ。御後悔アルヘカラス。押掛テ果シ玉ヘト云々。政宗未タ思案決セス。タメラヒタマフ躰ナリ。早ヤ川近クナリケレハ。何者ニカ有ケン。後殿シテ引除タル猿足太郎兵衞ヲ鐵砲ニテ討オトシタリ。義繼コレヲ見テ。遊佐靭負ニコレ迄ソトアリケレハ。輝宗ノ御手ヲ左手ニテトリ。右ニ刀ヲ拔持。御胸ノ下ヲサシ通ス。義繼靭負ニ我ヲモ害セヨトアリケレハ。則義繼ヲモサシコロス。首ハ石田茂左衞門ニ給リケリ。鹿子田和泉。石田茂左衞門。其外大形差違テ死シタリ。小濱宮森ノ惣勢。無二無三ニ亂レカヽリ。切トモナク射トモナク。二本松方百人計。大將義繼ヲ始メ。一人モ不レ殘キリ散シケリ。斯テ其夜ハ高田ニ滯留アツテ。夜モスカラ愁傷ノ餘リ魂絶シテ倒レ玉フヲ。左右ノ人々漸クニ助ケ起シケレハ。政宗牙ヲ噛テ申サレケルハ。我謀拙クシテ心ヲユルシ。不測ニ父ヲ白刄ニ失ヘリ。其罪我ニ歸セリ。所詮明日拂曉ニ二本松ノ城下ニトリ掛。無二ノ合戰シテ。一時ニ城ヲ押クツシ。此讐ヲ復サントアリケレハ。老臣等諫メケルハ。御憤リ去ルコトナレトモ。寔ニモ同所ニテ討レシト云[illegible]レタリ一先ツ小濱ヘ歸城アツテ。葬送ノ御營有テ後。出陣可レ然ト各强ヒテ諫ケレハ。政宗納得アツテ。即戰ノ沙汰ナク。同十九日未明ニ。小濱ヘ馬ヲカヘシケル。諸將士卒ニ至ルマテ。愁歎セストイフモノナシ。義繼ノ死骸ズタズタニ切放シタルヲ尋求メ。骸骨ヲ糸ニテ連ネ。尸ヲヌヒ合。小濱町外ニ磔ニ掛ラレケリ。時ノ人評シケルハ。義繼モ畠山ノ一將ナリ。不倶戴天ノ遺恨ハ。最モナレトモ。磔トマテハ餘リ情ナキ仕形ナリト云合ル者モアリシトナリ。誠ニ秋田ノ白露ヲ落シテ。共ニ消ルタトヒニ等シク。義繼一旦ノ奄忽ヲ企。自滅スルノミナラス。永クノ仇ヲ結ハレ。終ニ其地ヲ失ヒケリ。

私ニ云。此一條伊達鑑。相馬戰記等ニハ。義繼眞實ノ

心ヲ以テ降參ス然ルヲ宮森ノ町家ニ於テ足輕ノ者刀ヲ拔イテ義繼ヲ切ントノ讒言ヲ告ルニ因テ備ハ不義ヲ謀ツテ黨キ討ン爲ニ誅セラレケルコト義繼始逆心ヲ發シ輝宗ヲ擒ニセシトノ趣意ナリ是レ非ナリ義繼再訴不叶身ノ沈落ヲ憤テ推參ノ上存亡ヲ一事ニ極メント結構ハ本文ニ記ス通リナリ然ルニ半領ノ沙汰ニ心ユルミ前夜ノ對面ニ其巧ヲ遂サレトモ。元來謀リタルコトナレハ。謝禮ノタメト稱シテ。再會ヲ願ハレタルハ。其コトヲ遂ン爲ナリ義繼ヲ始メ高田・鹿子田等ノ勇功ノ士輕々シク市中ノ雜談ヲ眞僞ヲモ正サス讒トシテ俄ニ事ヲ企不意ノ危忽ヲ働ンヤ右等ノ說非ナルコト顯然ナリ。

輝宗遺骸并ニ遠藤山城守一族之追腹之事

斯テ輝宗ノ御亡骸其夜高田ヨリ諸々々昇セテ小濱ヘ送リ移シ申シケル兼テ近習ニ親シク仕官セシ遠藤山城守・内馬場右衛門・須田伯耆等ハ尊骸近ク畏

リ臣等連日傍側ヲ賞ル、コトナカリシニ如何ナレハ今日ニ限リ御側ニ候セス御先途ノ御用ニ立サルコト能々借臣ノ因緣ウスキコトコソ口惜ク候ト終夜悲嘆シテ翌ル九日政宗小濱歸城ノ跡ニテ三人トモニ殉死ノ志一同ナリ政宗先立テ此事ヲ思ハレケレハ櫻田右衛門・織式部兩人ヲ早打ニテ殉死差留ムヘキ旨ナリ然ルニ須田・内馬場ハ早腹切テ果タリ山城モ腹ヘ刀ヲ立タル處ヘ兩使馳著テ聲ヲ掛タルニ介錯ノ者心得テ山城カ刀ヲ奪取タリ時ニ嶺・櫻田政宗ノ命ヲ述テ何レモノ志感歎ノ餘リナリ去ナカラ二世ノ供ニ仕ヘンヨリ今戰國ノ時專ラ存命シテ痛ミ居タル吾ニ奉公セハ亡父尊靈モ黃泉ノ喜ヒタルヘシ。一士一卒ヲ失フコトハ。國家ノ本意ニ非ス。我カ爲ニ止リ生キテ忠義ヲ可盡トノ使命ナリ山城低頭シテ御旨有難キ仕合ナリ此上ハ命ニ任セ死ヲ止リ御馬ノ先ニテ可相果トノ御受ナリ則内外ノ醫ヲシテ治療彼是沙汰セラル去程ニ輝宗ノ尊骸ハ路次ノ

行粧尋常ノ如クシテ。米澤ヘ送リ玉フ。同十八日。長井ノ資福寺ニ於テ葬禮ノ執行アリ、戒師ハ輪王寺虎哉和尚、法名ハ覺範寺殿性山受心大居士或有慧山ト號ス。御年四十二歳ナリ。千部百僧ノ供養、法華佛花、其日々々ノ執行、言葉ニモ盡シカタシ。抑二本松右京大夫義繼ハ、畠山ノ一統ニシテ、家門賤シカラス。數代二本松ノ領主タリシカ、近年勢ヒ微ニシテ。伊達ノ幕下トナリ。數年恩ヲ得ラレシカ。伊達ノ賊臣中野常陸宗時ヲカクシ介抱シ。其上大内備前定綱カ不義ニ屬シ。汚名ヲ蒙リ。伊達ニ背イテ會津。佐竹ニ與シ。彼是ノ不義ヲ不顧。輝宗ノ質義ヲ背キ、却テ其恩ヲ思ハス、其人ヲ殺。天罰即時ニ己レニ歸シ。父母ノ遺骸ヲ破リ。尸ヲ街ニ曝サレ。家ヲ失ヒ。耻辱ヲ末代ニノコシ、佛事供養ノ營ミサヘナカリシ。一城ノ主ノ甲斐モナク。淺マシカリシコトトモナリ。斯テ其年モ終リ。明ル正月十九日。輝宗ノ百箇日ニイタリケレハ、遠藤山城基治。廟參ノ願ヲ立暇ヲ乞ヒ。正月十四日小濱ヲ立テ。同十六日米澤ニ參著シ。法養ノ寸志ヲ營ミ。十九日ノ早旦ニ廟參シ。靈前ニ向テ連日御約束申シタル詞ノ末、今日コレニテ御目ニ懸ン、當君ノ命默止シ難ク、今日マテ遲滯仕ル段、御赦免下サルヘシト云モ敢ヘス。腹十文字ニ搔切、石上ニ伏シテ死シタリ。誠ニ大義ノ致ストコロ。二度ノ追腹ハ例シ稀ナルコトトモナリ。政宗コレヲキヽ玉ヒ。感涙袖ヲヒタサレ。嫡子遠藤文七郎ヲ召出サレ、功用ニ時ヲ期セスト有テ、百貫文ノ加增ヲ玉ハリ。父カ大義忘ルヘカラストノ示命ナリ。

二本松籠城附城責竝城中籏之威德ノ事

二本松ノ城ニハ、義繼ノ嫡子國王丸十二歳ナルヲ惣大將トシテ、義繼ノ叔父新庄彈正・同尾張・同左衛門・箕輪玄蕃・小舘刑部・鹿子田右衛門等ヲ始テ、以下才覺下知シテ籠城シタリ、安子島ノ城代伊藤右衛門。高玉ノ城代高玉攝津守、中山ノ城代中山大藏。コレラハ行程遙ナレハ。談合モナリ難シ。義繼領内ニハ。本宮・玉ノ井・澁川此三城ノ士卒等モ。十日ノ夜ニハ二本松ノ

城ヘ入ル。其外ノ麓下油井。苗代田。堀社ノ人數ヲ催促シ。兵具矢石運送シ。國道茂木ヲ構ヘ。籠城堅固ニハ見ヘケレトモ。城內小勢ニテ。伊達ノ大勢ヲ防カンコト[illegible]虎覺エケレト。彈正。尾張武功名譽ノ者ナレハ。高田治義[illegible]ノ供シテ死シタル諸士ノ妻子共ヲス丶メ。赤町人等マテモ云合シテコモラシメ。義[illegible]ノ北ノ方ヲ國王ノ副將トシテ。本丸ヲ堅メ。役所定メハ先栗カ迫口ヘハ新庄尾張。騎兵十一騎。雜兵六百餘人。南谷口ヘ新庄右衛門。靑田美作。騎兵十騎。雜兵六百餘人。此內佐竹義重ヨリノ者一人。強テ籠城ヲ望ムニヨリ止メタリ。瀧川口ヘ新庄彈正。筆輪玄蕃。馬上十騎。其外爰彼所ノ山々ノ難所ニハ。五人三人鐵砲モタセ。配リ置テ待掛タリ。斯テ小濱ニハ十月十四日。初七日大法事ノ執行畢リケレハ。千部萬部ノ供養ヨリ。父ノ讐ヲ亡シテ尊靈ニ手向ルニハ如シトテ。兵卒ヲ集メ。手分ヲ定メ。同十五日ニ出陣アル。先二本松。岡山口ハ伊達藤五郎成實ヲ軍將トシテ。小濱川刑部。長谷美作。原田左馬介。桑折治部。是等士將ヲ附屬シ。柴田。刈田ノ軍兵ヲ相加ヘテ。上下合二千五百餘人。瀧川口ハ片倉小十郎ヲ軍將トシテ。泉田安藝。石母田左衛門。濱田伊豆等士將トシテ。武山出雲。牧野傳左衛門。畑中主計。砂金長七。後田玄蕃。貝田長八郎等相加ハリ。上下二千八百餘人。本陣ハ大手作ノ瀨口。隨フ軍將ニハ亘理元庵。高森雪齋。伊達武藏。國分彥九郎。石川右衛門。石田隼人。大條尾張。沼部越中。高野不伯。伊東宗心。茂庭佐月。村田民部ヲ始メ。三千八百餘人。天正十三年十月十五日先陣二本松ニ發向。後陣ハ逢隈川ニ控ヘタリ。政宗ノ本陣ハ城ノ巽ノ方八幡平ト云。今ハ愛岩ト云高岡此山ニ陣備ヲ立ラレタリ。又田村大膳大夫清顯。加勢トシテ一千五百餘人。高田ヘ出張アッテ。菅田ニ陣ヲ設ケラル。相馬義胤モ三春ヨリ直ニ出陣。菅田川ヲコヘテ備ヲ設ケ。政宗ヨリノ一左右ヲ待レタリ。片倉小十郎ハ先鋒ニテ。大手栗ケ迫ヨリ。池ノ入[illegible]カ谷ヲトリ卷ケリ。田村淸顯ニハ西谷口ヘ廻リ。龍泉ノ前マ

テ責入玉フ。伊達成實ハ城ノ艮ノ口ヨリ攻カヽル。政宗下知セラレケルハ。敵ノ要害ハ鐵城石郭ノカマヘ有テ其上高山ナレハ馬上ニテ攻難シ。雜兵諸兵歩立ニ成テ弓鐵砲ノ矢先ヲソロヘ、矢挾間々々ヲ打スクメ次第々々ニ攻上リ透間ナク詰ヨセヨ、城中ハ小勢ナレハ矢スクメニシテ塀ヲノラハ攻破ランコト時ヲ過スヘカラスト下知セラル。軍使カケマハリテコレヲ傳タリケレハ。惣歩立ニ成テ弓鐵砲ノ矢先ヲソロヘテ挾間クハリシテ入替次替。透間モナク討立段々ニツメカケタリ。矢玉ノヒヒキ鬨ノ聲。山谷ニ應ヘ。樹神ニ通シ。坤軸ニフルヒワタル。城中ニモ新庄等嚴重ニ守リテ持口ヲ放レス。鐵砲ヲハナチ矢ヲトバシ。投石投ニ材木ニシテコヽヲ先途ト防戰ス。モトヨリ城兵小勢ナレハ。木戸口開イテ打テ出テス。專ラ守城ノミナレハ。矢タネ盡勢氣タルミ。カクテハ如何防キカタク見ヘタリケリ。コヽニ一ツノ不思議アリ。二本松ノ先祖ヨリ代々相傳ノ旗アリ。コレハ天子ヨリ玉ハリシ旗ナリ。一説ニ畠山遠江守義胤ヨリ傳ハル。源氏白旗十餘旒ノ内トモ云フ。常々難儀ニ及フコトアルトキハ。此旗ヲ開キ。再拜スルニ。毎度祥瑞アリ。新庄尾張コレヲ思ヒ出シ。急キ本丸ニ上リ。件ノ旗ヲ開キ。板ニ掛ケ拜之。案ノ如クコレヨリ雪チラチラト降出タリ。コレ卯ノ刻ノ事ナリ。片倉カ諸勢息ヲモ突カス。揉立々々セメケレトモ。山城ノ要害ヨク其上大木ヲ伐テオシ倒シ。逆茂木ニ引渡シ。城兵死ヲ輕ンシ防戰シ。中ニモ新庄尾張八方ニ下知ヲツタヘ。卯ノ初刻ヨリ終マテ。伊達勢塀下ニ付テ。逆茂木ヲ除ケントスルヲ。十餘度マテ追拂フ。サレトモ寄手大勢ナレハ。三方ノ責口一寸ノタルミナク。終日ノ鐵砲ニ城兵屈シテ見ヘケルトコロニ。其夜ノ亥刻ヨリ。大風大雪降止マス。十八日マテ晝夜降續キシカハ。谷峯ノ分チモナク降埋ツメ。人馬ノカヨヒタヘケレハ。城責ノ術不叶。士卒ヲ揚テ政宗小濱ヘ歸陣アレハ。田村清顯。相馬義胤兩將モ、各歸陣セラレケル。此時義胤ニハ出張迄ニテ。城ハ責ラレサルナリ。

日之丸之旗之事附泉大膳諫ニ義胤ニ事

二本松堅固ニ持堅メケレハ、年月ヲ經スシテ速ニ落城シ難ク見ヘニケリ此節相馬義胤ニモ加勢ノタメニ出張アリ菅田川ヲコヘテ在陣ナリ然ルニ政宗義胤平和ノ後ハ双方家臣郎從ノ交リアリ中ニモ相馬ノ長臣泉大膳ハ、政宗ノ本陣ヘ參上スルコト折々ナリ政宗殊ノ外機嫌ニテ參向ノ毎度相伴申付如何ニモ心ヤスケニ談話致シケレハ。政宗ニモ身近ク愛セラレタリ。其上泉カ家ニ傳リタル差物ハ地白ニ緋ノ丸ナリ政宗ノ曰吾用フヘキ差物ヲ今迄見聞スル處ニ泉ノ差物ニコヘタル差物ナシ願クハ無念ナカラ予カ差物ニ申シ受タシトシキリニ所望セラル大膳家ニ傳ハリシ物ナレトモ強テ懇望有ケルユヘ是非ナク之ヲ進上ス其後ーコイヨ親近淺カラス折々政宗ヨリモ召使有テ〓上シ交談度々ニ及ヒケリ、此旗ノ緋之丸ヲ日ノ丸ト唱ヘテ、成勢日ノ出ルニ採テ後代マテ大馬印トセラレケル、然ルニ大膳義胤ヘ密談申シケルハ。和睦アツテヨリ以來、政宗某ニ懇意ヲムスハルコト別シテナリ殊ニ此陣中ニ某カ差物迄所望アツテ、無ニ餘儀ニ之ヲ指上ル、既ニ家臣モ同然ニ心ヲユルシ玉フナリ此程心ヲ付テ見屆ルニ第一心一偏ナラサル大將ナレハ、行末迄モ相馬ノタメニハナルヘカラス、又走リヌケタル武意アレハ此心ニテ仙道會津ヘ向ヒ利運アラハ忽相馬ヘモトリ掛リ玉フヘシ其時謀略シ玉フヘキタメニ、某抔カヨウニ懇切ヲ盡サルヽカト存候此陣中幸ナレハ政宗ヲ討玉フヘシ成實片倉等強キ者共ナレトモ、時ノ勢ヒニ付ナレハ。大將タニ討タハ。サノミ恐ルヽニ足ラス。其外ハ猶更ナリ、然ル時ハ二本松モ力ヲ得會津佐竹始メ、近部ノ大將皆々相馬ノ武威ニ助合ハ、末廣大ノ基ナルヘシトスヽメケレハ義胤ノ曰政宗ヲ輙ク討ンコト思ヒ不寄相馬ノ手勢ハカリニテハ及ヒナシ、外ニ救ヒ加勢ノ助ケモナシ、今政宗秀運日ノ出ルカ如クナレハ相馬何程練兵ナリトモ、小ハ大ニ敵シカタシ、寵

忽ノ働無用ナリト。大膳重ネテ其儀ハ御心易カルヘシ。某一人ニテ軍兵ヲモ不レ用。討申サンコトイト易ク存スルナリ。其故ハ今更政宗ニテ某ニ入魂セラルヽ。コレ幸ヒ天ノ授ナリ。某ハ老年俗ニ申往キカケノ旅馬ナリ。御家ノタメニ。命ヲ棄ンハ本望ナレハ。政宗ヘ近ヨリサシコロシ。某モ其場ニテ相果ヘシ。トカクニ政宗殿サヘ討申セハ。其跡ハ如何樣ニカ、トキノ變ニ應シ味方ノ强ミ眼前ナリ。是非々々討玉ヘト。兩度マテ密諫ニ及ヒケレトモ義胤曾テ承引ナク。卒爾ニシテ仕損シナハ。家ノ滅亡ヲ招クノミナラス。後代ノ耻辱ヲ受ンコトヲ企ルハ時節アルヘシ。先モ見ヘヌコトニ。老人ノ命捨サセンコト。後ノ嘲リアルヘシトテ。大膳カ諫ニ從ハス。其後諸士ノ申ケルハ。大膳ヨクヨク思ヒツメテコソ申ツランゾ。去レハ政宗ニテハ手モ不レ置。討レ玉フヘキニ。能々天運ニ叶ヒ玉フ大將ナリト。相馬ニテ私語合ケリトナリ。大膳カ詞ノ如ク。其後政宗仙道會津ヲ取テ。相馬ト伊達再ヒ不和ニナラレケリ。依テ泉カ指物モ。又モトノ如ク白地ニ緋ノ丸ヲ用ヒタルトソ聞ヘシ。或人ノ曰。長州義胤嫡男大膳亮利胤卒去ノ後。嫡孫大膳亮義胤ト號ス。其守立後見ノ爲ニ。祖父義胤中村ノ城下ニ還住シ玉ヒ。折々江戸ヘ登ラレ。大樹ヘ出仕アリシナリ。或時長州登城アリシニ。其コロハ八十有餘ノ白髮ナリ。御城内ヘ參入ノ所ヘ。政宗ニハ殿中ヨリ退出シ玉ヒシカ。駕籠ニノリ玉ハス。暫ク立テ長州ヲ見送ラレケリトナリ。此事相馬隨從ノ者トモ。義胤ヘ夜話ニ申シケレハ。長州其コトハ何トモノ玉ハス。嫡孫義胤ヘ向ツテ語ラレケルハ。惣シテ政宗ニハ若輩ヨリ志氣各別ノ人ナリキ。我政宗ト和睦シテ初對面ノ後。小濱ノ政宗陣所ヘ見舞ケルニ。政宗我寄宿シタル三春ノ道場ヘ見舞ハレケルニ。入口ノ小坂ニ階(キザハシ)アリ。其下マテ吾出向テ互ニ式禮アリシニ。政宗ノ曰マツ亭主アカリ玉ヘトアレハ。吾先ニ立テ階ヲ二段上リ。三段目ヱトモ足ヲフミ。跡足ヲ上ルトキ。政宗下段ヨリ二段目ヘ。大聲ニアツト云

テ某カ足ヲアトヨリハネ付タリ我何トモ思ハス側シモセス閑カニ階ヲ上ル政宗ニハ足ヲト丶メテ、アトヲフリ向ヤ随身ノ供ニ向ヒ寛爾々々ト笑テ靜ニ一階ヲ上リシトナリ。政宗トカク氣性別ナル生レナリ。其十八九ノ若將トシテ三十ニ餘ル我等ヲオビヤカサント試タリ。我其時驚テ後ヲフリカヘルカ。少モ様子アシクハ定メテ評シテ笑ヒツヘシ若キモノハ惣シテ常ニ心ヲ治メ朝暮交アル中ナリトモ何事ニ依ラス。ウツカリトハセヌモノソト教訓アリシトナリ。

伊達秘鑑巻之十六終

伊達秘鑑巻之十七

東奥仙府　無々軒　編集

七大將安積表出張之事

佐竹義重・會津義廣・岩城常隆・石川昭光・白河義親・須賀川盛行等何レモ伊達ノ縁者ナレトモ先年伊達内亂ノ砌リヨリ。互ニ領々ノ端々ヲカスメ。怨讐ノ思ヒ絶サリシカ相馬伊達ヘ和睦シテ後。イヨイヨ諸將妬ヲフクム折柄會津義廣大内カ不義ヲ佐ケ頃日鹽松動亂ニモ會津ノ縁ヲ以テ諸將大内ニ加勢セラルト雖トモ政宗ノ武威月ヲ追テサカンニシテ。定綱終ニ沒落シ鹽松領伊達ニ屬スルノミナラス剩ヘ會津・佐竹ノ手ニ従フ二本松義繼モテ不慮ノ滅亡シテ土ニ塚タリノ上ニサラシケレハ。猶憤リヤムコトナシ。折シモ二本松籠城ノ者トモヨリ會津・佐竹ヘ後詰ヲ乞フコトシキリニシテ、楯ノ歯ヲ引ニヒトシ。依レ之兩將近郡遠境ヘ催促シ、多勢ヲ以テ此度伊達ヲ亡サント一決ス、

岩城佐兵衛督常隆ハ。伊達ヘ恨ミハナケレトモ。數年田村ト地ヲ爭ヒ自ラ伊達ヘモ不平ナレハ、大内カ一條モ力ヲソヘラレタリ。依テ今度ノ催促ニモクミシ。會津・佐竹ヘ同道ナリ。白河上野介義親・石川大和先生昭光ハ。政宗ヘ對シサセル遺恨モナケレトモ。佐竹・會津ニ背テハ近國ト云。各大家ナレハ。カネテ力ラニ賴マレケレハ。猶コノ度ノ催促ニ組セラル。須賀川二階堂左近將監盛行遠江守トモハ。元來會津ノ枝流ニテ。義廣ノ近親ナレハ。會津一圖ノ味方ナリ。右六將ヘ二本松畠山國王丸長臣一族等。附屬シテ以上七大將ナリ。政宗兼テ慮リアツテ。信夫郡鳥屋ノ城主安部對馬重定ニ命シテ。偸(シノビ)ニナレタル者五十人ヲエラミ。扶持ヲ與ヘ。コレヲ黑脛巾組ト號ス。柳原戸兵衛世瀬藏人ト云者ヲ首長トシテ。安部對馬之ヲ差引。所々方々ヘ分置キ。或ハ商人・山臥・行者等ニ身ヲマギレテ。連々入魂ノ者モ出來レハ。其便宜ヲ以テ密事ヲモ聞出シ。其時々コレヲ密通ス。依之政宗ニハ疾ク此事ヲ聞レケレトモ外ニ知ル人ナシ。仍テ二本松攻已前ヨリ。境目ノ城々ニハ人數ノ手當アツテ。マタ時ニ十一月十日。安積郡ノ內郡山ニコメ置レタル。大町宮內・太宰金七方ヨリ。早馬ヲ以テ注進シケルハ、佐竹・會津・須賀川・岩城石川・白河ノ六將軍。約ヲ定メ二本松後詰ト稱シ。實ハ大軍ヲ以テ一戰ニ當家ヲ亡サント。佐竹・岩城ノ兩將ハ。一萬餘ノ軍卒ヲヒキイテ。三春口ヨリ打コヘ。會津義廣ニハ一萬餘ノ人數ニテ。中山口ヨリ進發セラル。白河・石川ノ兩將ハ、數千ノ兵卒ヲ引テ。須賀川表ヨリ出張シ。須賀川ニ群會シ。安積郡當手幕下ノ小城トモヲカスメトリ。昨九月中村城モ責落サル。近日高倉本宮表ヘ發向セラル、ノ由。其唱ヒ隱レ無之ノ旨注進ス。田村清顯ニハ元來須賀川・石川邊ハ皆旗下ナリシカ。此次手ヲ以テ幸ニ身ヲ持替ントスル由。風聞アリケレハ。コレハ尋常ナラヌ一大事ナリトテ。二本松攻ハ差置。三春ノ境ヲ固メテ此陣ヘ向ハル。又阿久津ニハ前方ヨリ清顯ノ家臣田村右近大夫居住スレ

ハ清顯ハ阿久津ノ巳手ノ方ヘ陣セラル　コレハ近所田村領ナレハ便宜アル故ナリ。一族田村月齋ハ今泉ノ城ヲ守ル　政宗此注進ヲ聞レ　藩塀ノ中ニ我地ヲ奪ントスルハ梟鳥ノ食ヲトルカ如シ　運ハ天命ニ任スヘシ　摩利支天モ八幡モ　我義戦ニコソ與シ玉ハメ　爭リ非義ノ軍ヲ助ンヤトテ　少シモ驚騒ノ色ナク　小濱ヨリ岩津野マテ出陣。軍評定有テ　先ツ高倉表ヘハ富塚近江仲綱・泉田安藝重光。桑折治部宗重。伊東肥前重信。山岡志摩重長ヲ始メ　宗徒ノ兵八百餘人。並ニ旗本ノ鐵炮二百挺。槍百筋指ソヘラル。本宮ノ城ヘハ瀬上中務高救。大條尾張宗直。中島伊勢永宗。濱田伊豆宗景・櫻田右兵衛尉弘國ヲ始メ六百餘人　足輕二百人・弓五十張・鐵炮百五十挺・槍百筋ナリ　玉ノ井ノ城ヘハ、白石若狭宗實。遠藤大炊盛房ニ五百餘人差ソヘラル　藤五郎成實ハ二本松オサヘトシテ八丁目要害ノ爲澁川ニオカレケルカ　小濱在陣無勢ナレハ　早々參陣スヘキヨシ。尤モ小濱留守居ニモ。手ノ者殘シ置ヘキ旨使者到來スルニ付　澁川ノ城ニ人數過半殘シ置鹽松ヘマハリ小濱ヘ參著セシムル處。最早出馬アリケレハ。青木備前・内馬場日向彼コレ馬上三十騎ノコシオキ　岩津野ヘイソキ馳參ス。政宗曰前枝澤兵部（異本前田澤トモアリ）、身ヲ持替ヘ會津ヘ味方セシム、定メテ明日ハ高倉カ本宮ヘ出張スヘシ、其心得申スヘキ由ナリ。依之成實ハ其夜糠澤ト云處ニ陣ヲトル　此前枝澤兵部ハ元來二本松ノ者ナリシカ　義繼滅亡シ、則當家ヘ附屬シケルカ　此度佐竹出陣ニ付テ　忽チニ心ヲ變シ　又伊達ヘソムキケリ　然ル處高倉ノ城主高倉近江（異本ニ高森近江トモアリ）使ヲ馳テ　須賀川參列ノ敵軍ハ、先陣ハ郡山ヲ踏越シ　昨夜中福原表マテ進發ノヨシ　日和田ヨリ告來ルノ由注進ス、依之敵高倉表ヘ働キ入ト思ハレケレハ。最初本宮ニコメラレタル瀬上中務。大條等兵士ヲ率イテ高倉山ノ上觀音堂ニ打上リ　旗ヲ立テ見合　敵高倉ノ城ヲトリツメハ　則高倉表ヘ馳下シ　防戰スヘシト下知セラレ　政宗岩津野ヲ打立本宮ヘ本陣ヲ移サ

ル、俄ノコト故軍勢不參セシメ。其上旗本ヨリ方々へ人數ヲ分ラレケレハ、以ノ外ノ無勢ニシテ、七將ノ大軍ニ比スレハ、十カ其一ニモ不足九毛ノ一毛、大海ノ一滴誠ニ危キ合戰　伊達ノ興廢ハ此一戰ニアルヘシト。諸人舌ヲマキテアヤフミケリ。

高倉本宮大合戰附伊達成實武名之事

本宮其コロハ只今ノ町場平岡ニテ、人家ナク小川流レ要害ノ地ニテ内町ハカリニ人居アリ。同十七日敵高倉へ寄スヘシトキコヘシカハ助勢ノタメ。本宮ノ人數觀音堂へ打上リ、政宗ノ下知ニ從ヒ。敵ノ氣勢ヲ寬テ備ヘタリ。又本陣ハ本宮今ノ觀音堂ノ左ニ當テ高地アルニ、旗本ノ備ヲ立、黑白ノ旌旗紅白ノ旗兩段ニ押シ立、時宜クハ高倉へ入ルヘシト。高倉海道ノ岡續キ山續キ段々ニ備ヲ立ル。旗本ノ惣人數ハ四千ニハ過サリケリ、敵陣都合五千餘騎　歩卒合セテ三萬餘ノ人數三手ニ分レ　佐竹、須賀川ノ大軍ハ一筋ニ押シテ高倉ノ前ヲ城へハ目モ掛ス、シツシツト押通ル高倉籠城ノ輩見之テ本宮ノ本陣無勢ナリ。城ヨリ出テ中ヲ切リ。一支へ遮テ見ント云モアリ。イヤ〳〵敵ハ目ニ餘ル大勢ナレハ。喰トメンコト叶フマシ。卒爾ニ合戰ヲ仕掛ハ。結句城ノ爲ニ禍ヲ招クハシナリト云モアリ。詮議區々ニシテ時刻移リケルヲ。富塚近江・伊東肥前同意ニテ。タトへ敗軍シテ押コメラルルトモ。目前ヲ通ル敵ヲ爭カ見物シテアルヘキソ。少シナリトモ敵兵ヲ喰留ル時ハ。本宮ノタメナリトテ、泉田・山岡等ニハ城ヲ守ラセ。伊東・富塚ハ馬上三十騎。歩士輕卒三百ニタラヌ勢ニテ。城中ヨリ突テ出。備ヲ鋒矢ニ固メ。鬨ヲドツト作テ。大勢ノ中へ横合ニ切テカヽル佐竹ノ先陣コレヲ見テ小勢ト侮リ。備ヲ亂シテカヽル處ヲ。肥前足輕ヲ下知シテ、鐵砲ヲツルへ放チ敵兵足並シラケルヲ見スマシ。急ニ歩兵ヲススメテ。肥前自ラ槍ヲ持、眞先ニ馳入、先ニスヽム武者二騎。弓手右手ニ突落ス。コレヲ始トシテ。双方互ニ槍ヲイレテ相戰フ。佐竹方モトヨリ多勢ナレハ　高倉勢ヲ眞中ニ取

コメ短兵急ニ揉ミツブサントス。サレトモ肥前勇ヲ震ツテ士卒ヲハゲマシ無二無三ニ打ヤブレハ。佐竹勢コラヘ兼テ兩方ヘ別レテ引退ク。二陣ニ控ヘシ須賀川勢入替ツテス丶ミ來ル。肥前・近江人數ヲマトメテ備ヲ立ナヲシ猛威ヲフルヒ支ヘ戰トイヘトモ、多勢ノ荒手ニモミ立ラレ。足並シドロニ見ヘケレハ。觀音堂山ニ備ヘタル瀨上中務・大條尾張士卒ヲ引テ、眞シグラニカケ落シ、須賀川勢ノ横合ヨリ。海道ノ西ヘ廻ツテ、伊東・富塚カ手ト立ハサム。依之須賀川勢左右ニ敵ヲ受ケ引別レテ色立處ヲ。兩方ヨリ差挾ンテ散々ニ攻戰フ。二階堂ノ先陣モミ立ラレ、路先ヘ別レテ敗走ス。海道ヲ直ニ押來ル佐竹二陣。潮ノ滿來ルカ如ク、高倉勢ニ打テカ丶ル。伊東・瀨上ヲ始メ一手ニナリ、相支ヘテ挑ミ戰フ。兩陣ノ矢サケビ鐵砲ノヒヾキ耳ヲツブス。佐竹ノ先陣モ返シ來リ。須賀川ノ敗卒モコレニ力ヲ得テ備ヲ立カヘ。佐竹須賀川一手ニナリ、中ニ包ンテ攻戰フ。須賀川ノ軍將森山筑後。佐竹ノ先手花井主計諸卒ヲ下知シテ。敵ハ小勢ナレハ引包ンテ息ヲツカスナ。只氣ヲ奪ツテ後レヲツケヨト。乘マハリ々々。透間モナク下知シケレハ。兩勢喚キ叫ンテ。イキホヒ猛ニ攻付シカハ。城兵モトヨリ小勢ト云。先刻ヨリ手痛ク働キ、入替ル新手モナケレハ。終ニ勇氣ヲ碎カレ士卒亂レテ散々ニ逃走ル。肥前嚴シタ下知シテ亂卒ヲ引マトメ。繰引ニシテ城中ヘ入ントスルヲ。佐竹勢追慕フテ城ヘ入事不叶。見之テ高倉近江。泉田安藝。桑折治部、木戸ヲ開イテ突出シ追シタフ佐竹勢ヲ一サンニ追クツス、其間ニ肥前ヲ始諸士不殘城中ヘ引取タリ。須賀川勢モ追來テ。泉田ヲ始メ城兵一支ヘサ丶ヘテ防戰シ。軍新タニナリケル處ヲ。富塚近江內ヨリ人數ヲ立直シ。緊シク鐵砲ヲ打掛。透間ナクフセキケレハ。虎口近ク責付ケタル。佐竹・須賀川ノ兩勢モ。コラヘカネテ引色ニ見ヘケレハ。泉田槍ヲヒネツテ一文字ニ驅渡シ、ス丶ム者二三人突ケル、桑折治部足輕ヲ下知シ。鐵砲ヲ打カケサセ。其間ニ城ヘ引

取テ木戸ヲナス。虎口際迄付タル敵モ、鐵砲ニ打立ラレ。不レ殘街道筋ヘ引取タリ。高倉ノ手ヘ討トル首百二十級餘。味方ノ討死四十六人ナリ。會津ノ大軍。一手ハ前枝澤ヨリ押來リ。義廣ノ旗本並猪苗代ノ一手ハ。會津本道長沼ヨリ押來リ。直チニ政宗ノ本陣ヘナシ向フ。佐竹。須賀川ノ軍勢等モ高倉ヲ退カス。城ヲモミツブシテ後ロニ氣ツカヘナクシテ、本陣ヘ取カヽラント議定スル内、義重。盛行ノ旗本モ押來。其勢恰モ雲霞ノ如シ。石川白河ノ兩將ハ一手ニナリ。高倉川ヲコヘテ高倉ヨリ坤（ヒノシトル）ニアタツテ備ヲ立ラル。城中ノ諸將評議シケルハ。敵日ニ餘ル大勢。其上義重。盛行ノ旗本マテ取ツマタル上ハ。此小城要害トテモ淺間ニシテ。此小勢ヲ以テ堅固ニ持コタヘン事。中々以テ叶ヒカタシ。大勢ニ取圍マレ。ナマナメト腹切。落城センヨリハ。城中不レ殘討テ出。命限リノ軍シテ何トゾ切ヌケ。本陣ヘ一手ニナリ。存亡ヲ共ニ極メン。サモ本陣無勢ナレハ。今日ノ一戰甚タ以テ心憂シ。何レニ城ヲ拂ツテ。此方ヨリ客戰ニ仕掛。運至ラハ本陣ヘ加ハルヘシ。左ナクハ共ニ討死シテ。武名ヲ黄泉ニ殘スヘシト評議一決シテ。士卒不レ殘兵粮ヲ認メ。馬ニ水飼ヒ玉藥ヲ繼カヘ城中ノ諸卒一手ニ丸メ。木戸ヲ開イテ鬨ヲ作リ。佐竹。須賀川ノ大勢ヘ眞一文字ニ突テカヽル。兩勢待モウケタル備ナレハ。鶴翼ニヒラキ。箕ノ手ニマハシ。高倉勢ヲ中ニ取コメ。双方オメキ叫ンテ火出ル程ニ戰フタリ。又玉ノ井ヲ固メタル白石若狹。遠藤大炊。高野壹岐等。此日高倉ノ者共ト。心一致ニ落合ケルヤ。コレモ玉ノ井ノ場ヨリ會津勢ニ馳向ヒ。驅ツ返シツ攻戰フ。前枝澤ヨリ押來ル會津ノ先陣ハ。既ニ佐竹須賀川勢ニ落合フ如ク。高倉觀音堂ヨリ出ル伊達勢ト合戰ス。又荒井口ヨリ押來ル岩城勢ハ。先陣後陣旗本トモニ。成實カ備ト相戰フ。爰ニ合戰未タ始マラサル前ニ。下郡山内記彼ハ政宗ヘ近習シ。殊ニ相馬弓矢ノ節ハ。足輕ヲモ預リ。忠功ノ者ナリシカ。サル事有テ勘氣ヲ蒙リ。當時成實ヲ賴ンテ。此戰場ニモ出タリ。然ル

ニ成實ヵ備近ヮニ小山有シカ、内記馬ヲ乘上テ遠見スルニ先徑ヨリ高倉ニ當テ鐵砲矢叫ヒ鬨ノ聲夥シ。然ルニ差物サシタル武者六十騎・歩兵百四五十人ホド高倉ノ方ヨリ本宮ヲ望ンテ馳來ル又其跡ハ町餘モ隔テ大勢之モ馳來ル敵カ味方カト見ル處ニ跡勢ヨリ鐵炮ヲ打カケタリ、備ハ敵ト見定テ成實カ陣ニ向ツテ之マテ敵ノ大勢ニ味方ノ勢タレトハ不レ知追立テレテ來レリ急キ旗ヲ上ノレヨト申上ヨリヨハヽリケレハ、成實旗ヲ直シ備ヲ靜メテマツ處ニ馳來ル味方ヲ見レハ白石若狹。濱田伊豆。高野壹岐ナリ、玉ノ井ノ城破レ、高倉表觀音堂ノ軍利ナクシテ本陣ヘ引取所ナリ、高倉勢モ軍破レテ大田原マテ引取タリ、佐竹勢間近ク追來レハ、高野・濱田。白石等返シ合セ、散々戰ヒ首一級宛引ツケ佐竹勢ヲ切ヌケ、成實カ備ノ前ヲ打通リ、旗本ヘ參リケリ、成實ヵ備ハ味方續カス左ハ阿武隈ノ大河ニテ、本陣ト成實カ備ノ間八九町餘リ、早敵軍其間ニ滿々テ敵ノ後ロニ備タリ、藤五郎成實生年十八歳血氣盛ンニシテ敵ノ大勢ニモ屈セス、僅ニ手マハリノ備ヲカタメ、士卒ヲ下知シテ居タリシニ下郡山内記成實ヲ馬ニ乘セ、武邊モ時ニ依ルコトナリ。觀音堂ノ勢ニモ隔チ。其上玉ノ井ロモ破レタルト見ヘ、白石等皆落來レリ、然レハ高倉モ落城シツランカク大勢滿々テ本陣ノ間マテ推隔ラレ目ニ餘ル大軍ノ十ニ一モ勝コトヲ得難シ。早々此陣ヲ除レヨトテ小旗ヲ歩卒ニ渡シテ諫メケレハ、成實怒ツテ我聞ク軍ハ勢ノ多少ニ不レ依、小ヲ以テ大ニ切勝コト、古今其例ナキニ非ス大軍ヲ見テハ不レ戰シテ逃走リ小勢ヲエランテ軍スルナラハ。小國ノ士將ハ軍セスシテ大敵ニ向テハイツモ降參スルヨリ外ナシ。今我此備ヲ退カハ。敵イヨ〳〵重サミ來リ、本陣迄大崩レシテ誰カ安穩ナルヘキ。一身ノ未練ヲ以テ、伊達ノ名ヲ汚シ、敗散シテ亡名ヲ後世ニ殘サンハ、口オシキコトナラスヤ。各始メ數代當家ノ祿ヲ食ミ、君臣ノ義ヲ

守ル、斯ル時節ニ命ヲ棄テ。大軍ト戰ヒ討死センハ武士タル者ノ本意ニ非スヤ、成實ニ於テハ、一足モ退クコト不可有、各ハ勿論輕卒ノ者トモ迄、義ヲ磨キ節ヲ守ル心アラハ、我ニ隨ツテ此戰場ニ骸ヲ共ニサラスヘシト、大ニ叫ンテ士卒ヲ勵マシ、少シモ動スル氣色ナク、旗ノ手ヲオシナヲシテ。イヨイヨ備ヲ固ムル處ヘ、濱田。白石等ヲ追來ル佐竹勢、成實カ備ヘ眞蕩ニ突テカヽル、成實團扇ヲ揚テ衆ヲ勵マシ乘出セハ。早雄ノ若共、吾先ニトスヽンテ鯨波ヲ作リ、矢砲ヲ放チ。喚キ叫ンテ攻戰フ　中ニモ成實カ備ノ内ヨリ伊場野遠江、其年七十有餘、眞先ニ駈入テ、スヽム敵ヲ弓手右手ニ切テ落シ　士卒ヲ下知シテカケ廻リ。南ノ方ノ山ヲ下リ、三四町追落ス、荒井口ヨリ取詰シ岩城勢。見之テ敵ハ小勢ナルソ、引包ンテ一人モ不殘打トレト、新ラ手ノ大勢無二無三ニ攻付ケタリ　成實カ軍兵兩方ニ敵ヲ受テ。前後左右ニツイテ一所ニ止ラス。八方ニ當テ力戰ス、サレトモ元來小勢ナレハ、心ハ矢猛ニ勇メトモ。岩城ノ新手ニ蒐立ラレ。人取橋ヨリ南野山ノ半迄追上ラル、成實カ陣ヨリ羽田右馬之助。後レル士卒ヲ立ナヲシ。敵味方ノ境ヲ乘分。突テマハル處ニ。岩城勢ノ中ヨリ武者一騎、槍ヲ以テ進ミ來ル。右馬之助槍ヲナヲシ。上ヨリ兜ノ天邊ヲシタヽカニ打ケレハ。ウツフシニナル處ヲ。錣ノ外レヨリ頬先ヘ突抜キ。首ヲハ下人ニトラセケル。右馬之助スヽムヲ見テ。足輕大將萱場源兵衛。牛坂右近兩人モ。轡ヲ双ヘテ喚イテカヽル、岩城勢彼等カ働キニ氣ヲ折カレ。少シ足並亂レケルヲ、成實諸卒ニ下知シテ。一度ニ返シ合セケレハ、高ミノ勢ニ駈立ラレ、馬ノ足ヲ立カネ、人ナダレヲツイテ崩レケル。岩城勢ノ中ヨリ、此新助人取橋ヨリ取テ返シ戰ヒシニ、馬ノ足ヲ薙ラレ。歩立ニ成テ引除ク、岩城勢スハヤ敗軍ト見ル處ニ。前枝澤ヨリオシ來ル會津ノ多勢。稻麻竹葦ノ如クナルカ、段々ニ雁行ニ連ツテ鬨ヲ作リ。鐵砲ヲ放ツテモミ立ル。成實カ備ハ入替ル軍兵ナク、人馬トモニ勞レケレハサヽヘ

戰フコト不レ能。コラヘカネテ引退クサレトモ伊場野遠江大剛ノ兵ニテ、六七度マテ返シ合セ魁殿ス。其年七十三。冑ヲキテハ目見ヘストテ、鉢卷ヲシタリケル。白髮ヲ左右ヘ亂セシ形勢、ヒトヘニ鍾馗ノ如ク、黃髮ノ華ナセシ富麗モカクヤト思ハレ、敵味方目ヲ驚スス。餘リ手痛キ戰ニ、遠江モ頭ニ二太刀マテ薄手ヲ蒙ムリケレトモ。少シモ怯ム氣色ナク。朱ニ成テ支ヘ戰フ。下部由內記モ猛獸ノ荒タル如ク、前後左右ヲ嫌ハス切テマハリ、味方後ルヽ時ハ、敵ノ間ニ馬ヲ立乘マハシ々々、比類ナキ働キナリ。小勢ト雖トモ、成實猛氣ヲフルヒ。士卒又死ヲ一途ニ極メテ力戰シケレハ、敵大軍ト雖トモ、速ニ勝利ヲ得ヘシトモ見ヘサリケリ。

茂庭佐月討死同津田七之助勇氣ニ伊達勢蹴ル芝居ニ事

爰ニ觀音堂高倉敗走ノ伊達勢ハ、大田原迄引取シカ、茂庭佐月延元（七十八）カ備ハ落合、佐月ヲ大將トシテ、大田原ハ備ル處ハ、前枝澤ヨリオシ來ル會津ノ大軍、嚴重ニソナヘテ押ヨセヒシ々々ト取詰、先足輕ヲスヽメテ、互ニ鐵砲ヲハナツテイトミケルカ。間チカクナリケレハ、鬨ヲ曈ト揚テ、吾先ニト進ンテ槍ヲ入ル。兩陣入亂レテ馳違フ足音、打合スル太刀響キ、天ニ轟キ地ニフルヒ。土烟虛空ヲカスメ、火ヲ散シテ責戰フ。佐月カ備死ヲ爭ヒコヽヲ先途ト戰ヘトモ、會津ノ大勢盤石ヲ疊ンテオスカ如ク、切レトモツケトモ、路方ナク疊ミ重ネテ責付ラレ、伊達勢コラヘカネテ敗走ス。會津勢勝ニノリ、鬨ヲ作テ追討ニ攻カヽル。大將佐月延元駒ノ手綱ヲ引返シ、大音ニ罵ツテ、此ニテ敵ヲサヽヘスハ、本陣ノ難義タルヘシ、踏止ツテ討死セヨト。馬ノ頭ヲ立直セハ、敗軍ノ中ヨリ中村八郎左衛門・大町參河・同源四郎・同清九郎、其外究竟ノ者共十餘騎、馬ノ鼻ヲ一面ニ双ヘテ取テ返シ、追來ル勢ヲ遮テ、一文字ニ突テカヽリ、大勢ヲ押シ靡ク、菟人々々力戰ス。敵餘多切伏セ、大町參河・同源四郎等、亂軍ノ中ニ討レタリ。渠等カ猛勇ニ辟易シテ、敵軍左右ニナタレテ。引

色ニ見ヘケル處ニ。後軍ノ勢入カハリ。並ニ須賀川ノ荒手モオシ掛來リ、立挾ンテセメ立ケレハ。戰ヒ勞レ引立タル伊達ノ軍兵、大勢ニ引ツヽマレ悉ク討レケリ。サレトモ中村八郎右衛門・大町淸九郎兩人ハ。打テトモ突ケトモシラマス、敵數人切テ捨、大勢ニ手ヲオハセ。其後袖印差物カナクリ棄。敵ノ勢ニ打紛レテ後陣ニ掛ヌケ。無恙軍果テ後本陣ヘ參リケル、斯テ伊達勢散々ニ敗走シケレハ會津。佐竹。須賀川ノ大軍勝鬨ヲ作リ。喚キ叫ンテ洪水ノサクルヽ如ク慕ヒ來ル。岩城勢ハ成實ニ喰留ラル、押破ルコト不能、彼方モ死戰ノ秘術ヲ盡ス。其時大將茂庭佐月味方ヲ先ニ退カセ、士卒ヨリ跡ニ殘リ。追來ル敵ヲ乘リカケ、突退ケテハ取テ返ヘシ。亂卒ヲ下知シテ後殿ス、時ニ七十餘歲冑ヲ不着。黃ナル綿ニテ頭ヲ裹ミ。其進退速カナルコト恰モ神變ヲ得ルカ如シ、敵軍コレニ目ヲ驚カシ。他ノ者ニ目ナカケソ、只黃綿帽子ヲ討トレト、聲々ニ喚キ叫ヒ。爰彼所ヨリ攻カヽリ、味方ニモ佐月討スナト、返シ合セ々々、散々ニ戰ヒケレトモ。敵軍限リモナク折リカサナリ、佐竹ノ從軍窪田十郎。延元ニ渡リ合、双方手ヲ盡シテ戰ヒシカ、老武者ノ悲シサ。終ニ窪田ニ討レケリ、佐月カ家ノ子熊河伊賀、亂軍ノ中ニ戰ヒケルカ。馳來テ切拂ヒ、佐月カ首ヲトラセス、嫡子茂庭石見綱元。遙カニ見付、父カ敵ヲ討ント諸鐙ヲ合セ馳來ル、原田左馬介。黑木肥前モツヽキ、石見討スナト押分々々戰ヒシカ。窪田十郎ハ亂軍ノ中ニ見失ヒ、其子窪田三郎右衛門、父ヲ隔テ戰ヒシヲ、茂庭石見馳合セ、三郎右衛門ヲ切テ落シテ首ヲトリ、父カ死骸ヲ從卒ニ負セテ退カセ。其身ハ本陣ヘ引取ケル、原田。黑木モ大勢ヲ追散シ。面々ニ首ヲ取テ引返ス、佐竹勢コレヲ討ント。騎卒合セテ三百ハカリ追掛タリ、片倉小十郎カ手勢、入替ツテコレヲ支ヘ。互ニ追ツ返シツ、火ヲ飛ハシテ挑戰ス、長沼口ヨリモヨセ來ル義廣ノ旗本勢。猪苗代ノ勢ヲ合セ、雲ノ如ク押來リ、政宗ノ旗本本宮ノ觀音堂ヲ日當ニ備ヲ立、段々ニ詰寄タリ、桑折點了

カ嫡子桑折攝津定重。高倉山ヨリ此有樣ヲ見渡シ、南無二方伊達ノ危此時ナリト馬ニ鞭ヲ當テ、一文字ニ敵中ノ蹴散シ高倉ヨリ本宮マテ。一命ヲ的ニカケテ馳着シニ早會津ノ先手鐵砲トヒシメク所ヘ、海道ヲ直ニ本陣ヘカケ通ル。會津ノ斥候岡田兵部・一色孫次郎ニツト行合。双方一言モナク渡合。太刀ヲ以テ戰ヒシカ、攝津モトヨリ打物ノ達者ナレハ、兩人ヲ討トリ本宮ノ本陣ヘ馳加ハル。佐竹・須賀川大勢モ、前枝澤ヨリ向ヒシ會津ノ先陣金上遠江モ、海道ノ南ヨリ筋違ニ本宮ヘ押來リ、會津・譜代ノ旗本勢トリ合二萬餘ノ人數三手ニ分レ、政宗ノ先備ヘ迫合。先刻ヨリ所々合戰ノ衢トナリ、鐵炮ノヒヾキ天ヲ動シ、太刀音弦音耳ヲ埋ミ、馬蹄ノ塵煙白日ヲクモラシム。伊達ノ備所々破レテ、高森雪齋。亘理重宗。高野近江。伊東肥前。原田左馬介。大條尾張。片倉小十郎。瀬上中務。追々ニ本陣ヘ引取ケレハ、今ハ早成實カ岩城勢ヲ支ヘタル、敵中ノソナヘ一ツ、其勝敗生死ノ程モ不知、只政宗ノ旗本備ハカリナリ、カヽリシカハ會津・佐竹・須賀川ノ三軍西南ヨリ引包ミ、圍ヲ作テ本宮ノ本陣ヘ攻カヽル。旗本ニハ亘理元庵・國分彦九郎盛重、侍大將ニ小山田筑前ヲ始メ、其外一族近臣ノ面々ヘ右落合ハスル雪齋・片倉等カ手勢、彼コレアハセ五千ニ不過人數ヲ五行ニ備ヘテ押出シ、兩陣ヲカケ合セ、鐵砲ヲ飛ハスコト氷雨ヲ降スニヒトシク、矢ノ走ルコト蝗ノ群カルカ如シ。槍間近ク成テ歩兵透間モナク立並ヒ、既ニ槍ヲ合スルトヒトシク。双方ヘミタレテ挑ミ戰フ。寄手ノ三軍ハ政宗ノ旗本ヲ中ニ取コメ、短兵急ニモミツフサント曳々聲ヲ掛テ三手ノ大軍一面ニ連ツテ、何レ敵味方ノ分チモシレス揉合フタリ。政宗諸將ニ下知セラルハ、敵軍味方ノ敗北ヲ追テ、勝ニノリ備サカタチ亂足ニ見ユルナリ。本陣ノ相圖ニ順ヒ備ヲ亂サス。緩ヲ見テ一散ニ追崩サン。以佚待勞ノ謀コト、一戰ニ勝利ヲ得ン。重ネテノ掟ヲ守リ、味方ヲハナルヘカラス、長追スヘカラスト先立テ軍法ヲ定メラレ、使

番ノ武者馬ヲ飛シテ、諸將士ヘフレ流シ。横目ヲ走ラセ、ヒマナク下知ヲ加ヘラル、案ノ如ク佐竹ノ大軍、所々ノ先手ヲ押破リ。勢ヒ猛ニシテ堤ノサクル如ク。眞驀ニ元庵・重宗カ手ヘ責鼓ヲ打テ突テカヽル。元庵・重宗・雪齋等。合圖ヲ定メ。旗ヲ上テ士卒ヲスヽメ。備ヲ左右ニ開イテ。亂足ニオシ來ル佐竹勢ヲ。兩方ヨリ一度ニ噇ト打テカヽリ。命ヲ輕ンシ攻戰フ。佐竹ノ先鋒猛勢トイヘトモ。今朝ヨリ數ケ度ノ合戰ニ人馬ツカレ。其上遠駈シタル上ナレハ、一戰ニ利ヲ失ヒ。二陣ニ讓ツテ退散ス。佐竹義重本陣ヨリ下知セラルハ、政宗ノ旗本小勢ニシテ、尤外ニ備ナシ。荒手ヲカロク入替々々。タルミナク攻惱マシ、敵ノ勞ヲ見スマシ、會津勢ト牒シ合セ一度ニ包ンテ討ツヘシトテ。二ノ手ノ新手ヲ入替レハ。伊達勢モ國分彦九郎盛重。原田左馬助宗長、二ノ手ヲスヽメテ挑戰ス。又本陣ヨリ弓鐵砲ヲ手分シテ、足輕大將卒ヲクリ出シ。兩方ニ別レテハサミ打。其間ニ重宗・雪齋等。備ヲ直シ衆ヲハケマシ。閧ヲ作リ矢叫ヒシテ。オソヒ蒐テ攻戰フ。伊達勢小軍ト雖トモ、究竟ノ兵士大將ノ下知ヲマモリ。死ヲ一途ニキハメテ力戰ス。敵モ同ク諸軍ヲ下知シテ。息ヲモ突カス曳々聲ヲ出シテ、觀音堂ヲ追上セ追下シ。六七度マテモミ合タリ。兩陣入亂レテ。射違フル矢ハ蜂ノ飛フカ如ク、鯨波山下ニ動搖シ。鐵砲ノ音太刀ノ響キ。坤軸モ裂ルカト怪シマル。サレトモ敵軍目ニ餘ル大勢ニテ。猛威盛ンニ見ヘケレハ、政宗今ハ我旗本ニテ駈散サント。馬ノ口ヲ差向。既ニ駈ントシ玉フヲ。亘理元庵絆ツラヲ控ヘテ。カク競ヒカヽツタル大軍ノ中ヘ駈入玉ンハ、燈火ニ飛入ル夏虫ニ等シ、勿體ナク候。暫ク備ヲ堅メ、敵ノ勞ヲ見澄シ。馬ヲ入ラルヘシト押止ム。政宗ノ曰イヤ々軍ノ圖ハ今ニアリ。此時ヲ遁スヘカラス。アノ白旗ヲ靡シタルハ佐竹ノ本陣ト見ヘタリ、數ナラヌ端武者ノ手ニ戰ハンヨリハ。伯父義重ノ手ニ渡リ合。一戰ニ興廢ヲ決シ。原上一堆ノ土トナラン。運ヲ天命ニ任セヨト。馬ニ鞭ヲアテラル處ヘ。佐竹

勢遮テ押掛來リ。政宗ノ旗本ヘ一文字ニ突テカヽル。佐竹ノ軍士荒川和泉。岡田兵部。戸村左近。山名刑部。一色原左衛門ヲ始メ一騎當千ノ者トモ東西南北ノ軍兵ヲ下知シ。アレニ見ヘタルコソ。伊達殿ニテアルソ。必ス生捕ニセヨト、聲々ニ下知スレハ數千ノ軍兵勇ミスヽミ二重三重ニ取包ミ火水ニナレト攻戰フ、伊達勢必死ヲ極メ中ニモ片倉小十郎。原田左馬助命ヲ惜ンシ備合ヲ破ツテ、敵ノ跡ヲ切ントス佐竹ノ後軍コレヲ見テ少シ騎隊シテ足並ユルムトコロヲ政宗旗ヲ揚テ旗兵急ニ下知セラレ、散ニ蒐立レハ佐竹勢圖ヲ失ヒ備亂レ引色ニ見ヘケレハ政宗自ラ諸卒ヲ勵マシ敵ハ早引色ニ成タルソ此機ヲ不失一戰ニ追チラセト身ヲ先ンシテスヽマレケレハ、旗本ノ一手眞黒ニ成テ蒐立レハ、佐竹勢足ヲ立兼右往左往ニ崩レケル、伊達勢イヨヽヽ氣ニ乘テ鬨ヲ作テ攻討處ヘ會津ノ軍將金上遠江。松本式部。生駒太郎左衛門。杉目越中新手ノ大勢ヲスヽメ本宮小川ノ北ヲ越ヘ、觀音堂ノ後ヨリ政宗本陣ニ突テ掛ル、大將義廣ニハ旗本ノ惣軍ヲ統テ長沼口ノ海道ヲ眞直ニ觀音堂ノ前ヲ直通シ政宗ノ旗本ヘ旗兵急ニ攻付タリ、伊達ノ軍兵實ニ勞タル處ヘ。會津ノ新手、雲霧ノ如ク取詰テ攻討ツコト急ナレハ、防戰ノ力盡テ備シラケテ見ヘタリ、佐竹勢之ニ力ヲ得敗卒ヲ下知シテ。義重自ラ馬ヲ進玉ヘハ戸村左近。荒川和泉。備ヲ直シテ討テカヽル會津。佐竹ノ大軍前後ヨリ攻付左右ヨリ驅立レハ、伊達勢心ハ矢武ニハヤレトモ多勢ニ無勢、入替ル新手ハナシ金鐵ノ身ニ非レハ或ハ討死又ハ手負。歷々ノ軍將兵士、彼所爰ニ押シ分レ、皆大軍ニ隔ラレ、旗本ノ備散々ニ分崩ス須賀川盛行ノ軍勢ハ成實カ陣ト旗本ノ間ヲ取切リ稲麻竹葦ノ如クナレハ成實旗本ノ亂軍ヲ知ラス只鬨矢叫ノキヒシサ矢俑音絶間ナケレハ。敵味方ノ勝利ヲ危フミ。心ヲヒヤスハカリナリ其上己カ手ハ岩城ノ大勢ヲ喰トメ今朝ヨリ一寸ノ隙ナク討ツ討レツ馳ツ返シツ小勢ヲ以テ大敵

ヲ取縮メ。街道ヲ立挾ンテ支ヘタレハ。旗本ヲ見繼ン様ハナク。四方八方敵中ニ死地ニ落テ戰フタリ。斯ク本陣破レケレハ會津・佐竹ノ軍卒旗本へ亂入ス。會津ノ兵士横田木工之助・齋藤豐後。政宗ヲ目掛馳寄ルヲ。桑折攝津・濱田治部鑓ヲ以テ馳合シハシ支ヘテ戰ヒシカ。齋藤豐後ハ桑折攝津ニツキ落サル、濱田ハ横田ニ左リノ二ノ腕ヲ突レ。槍ヲ遣フコト不能。既ニ危ク見ヘケルヲ。簗川右近馳合セ。木工之助ヲ突テ落シ。濱田治部ヲ助ケタリ 又歩立ノ武者二人馬上一騎。槍ヲヒネツテスヽミ近ツク。 櫻田右兵衛政宗ノ後ロニ控ヘケルカ。弓矢番ヘテ切テ放ツ。先ニスヽム馬上ノ内冑へ射込ミケレハ。馬ヨリサカサマニ落タリ。歩立ノ武者ハ コレニ猶豫シテ見ヘケルヲ。桑折攝津槍ヲ以テ突立タリ。會津・佐竹ノ猛勢旗本ヲ取縮ムルコト。其間早二町ニ不過。前後左右ノ備皆分レ隔テ。思ヒ々々心々ニ死戰ス。旗本ニ殘ル者ハ軍將ニハ亘理元庵・上野介政景入道雪齋・軍士桑折攝津。濱田 治部。簗川 右近・櫻田右兵衛。傾坂右近。中島左衛門・新田 式部。屋代勘解由兵衛。大塚右衛門。奥山出羽。松坂 長門。今村 丹波・五十嵐信濃・國安與平治・小關宮内・木村 源七・鹿股肥前・馬場右衛門ヲ始メ。以上二十騎ニ不足。輕卒小人モ殘ル所二百人ニ不過。大將ノ四方ニ連ツテ。押シ來ル敵ヲサヽヘテ死戰ヲ決ス。伊達ノ運命風前ノ一燈ニヒトシ 政宗將几ヲハナレ玉ヒ。合戰最早コレ迄ナリ。運ノ盡ルヲ不辨シテ命ヲヲシミ 見苦シキ匹夫ノ手ニ亡ンヨリハ。速ニ生害シテ家名ヲ潔ク殘サン。桑折攝津ハ我ヲ介錯スヘシトテ。鎧ノ上帶ヲトキ。脇楯ヲオシタツロケ。腰刀ヲヌキ玉フヲ。側ニ候セシ小姓津田七之助生年十六歳。大將ノ刀ヲ奪ヒ取テ。ハタト白眼テ申シケルハ。コハ日コロニモ似ヌ。後レタル御振マヒカナ。腹召サレンハ何時ニテモ手裏ヲ返スヨリイト易シ。未タ左右ノ從臣モ盡キス 諸手ノ滅亡モ分明ナラス。大將ノ命ヲ果シ玉ハンニハ未タ半時ハヤシ。七之助身不肖ナカラ御側ヲハナレサレハ。御

生害ノ期ハ某ニ任サルヘシ、アレ見玉ヘ今西風ノ烈シキニ紅白ノ眞御馬驗。却テ西ヘ吹ス、ムハ味方ノ精運時至ルト見ヘタリ。暫ク御控ヘアルヘシト、其言未々終ラサルニ、國分彦九郎盛重手ヘ佐竹ノ軍將荒井和泉ヲ討取タリト聲々ニ叫ヒ罵ル、之ヲ聞ク味方兵卒力ヲ得、片倉・原田・瀨上カ手勢一ツニナリ、蜂ノ巢ノヤフレタルコトク、ムレニ起リ立テ無二無三ニ切立、死人ヲ飛コヘ手負ヲ引ノケ、一命輕塵ニ力戰ス、佐竹勢大軍ト雖トモ死戰ノ猛威ニ碎カレシトロニ成テ人ナタレヲ築キ崩レ立、茂庭石見・伊東肥前・富塚近江・大條尾張等、亂卒ヲ引マトヒ國分・片倉ニ助ケ合テ、短兵急ニモミ立ケレハ、ナタレツイタル佐竹勢一崩レクツレケレハ、大勢立直スコト不叶、大木ノ倒ル、如ク。勝誇ツタル會津ノ陣ヘ。波濤ノ汀ヘマクル、如ク崩レカヽル。義廣ヲ始メ諸手ノ軍將。備ヲ直セト下知スルト雖トモ、大勢崩入リケレハ、敵味方ノ分チモ辨ヘ難ク、會津ノ備モ友崩レニクツレ立テ、足並旗色散々ニ見ヘケレハ。亘理元庵大將ニ馬ヲスヽメ。自ラ馬ニ乘テスハヤ味方ノ運至レリ。此圖ヲ失フヘカラスト諸卒ヲ勵マシ一陣ニ進メハ、雪齋桑折黒津ヲシテ足輕ヲ下知セシメ。百五十挺ノ鐵砲ヲ二行ニ立、會津勢ノ色メキ立タル眞中ヲ、其間近ク押出シテ、スキマナクツキカヘ々々ツルヘウチニ討シムレハ、崩立タル其勢矢砲キヒシク討カケラレ備亂レテ立カネタリ、旗本ノ軍兵二十騎アマリ、槍ヲ突テスヽミ打ツ。政宗自ラ下知セラレ、槍組ノ歩卒ニ鑓トノ柄ヲ揑キ合シメ、勝鬨ヲアケサセケレハ。茂庭・片倉・原田・瀨上・伊東・富塚・大條等ノ諸手、之ヲ聞テ同シク勝鬨ヲ合セ、イヨ々勇ミ力ヲ得テ、モミ立々々追討ニ進ンテ、首ヲ得ルコト數ヲ不知、玉ノ井ノ固ニ向ヒシ白石若狹・遠藤大炊モ打テ出テ・會津ノ先陣ト戰ヒシカ、大軍ニナシ包マレ、城ヘ入コト不叶、此戰場ヘ引取、敵ノ後ロニ支ヘシカ、本宮本陣ニ當テ勝鬨ノ聞ヘケレハ、扨ハ味方ノ勝利ナリト勇ミ競ヒ。會津・佐竹ノ

後ロヨリ鬨ヲ作リ鐵砲ヲ討ケレハ。イト、クツレシ大軍。裏切アリト周章ル程コソアレ。二萬餘ノ軍勢惣崩ニ及ヒケレハ。旗金鼓ノ列モ亂レ。聢引ノ下知モ聞者ナク谷溝ノ分チサヘ失フテ散々ニ敗走ス。伊達勢イヨ々々力ヲフルヒ。喚叫ンテ追討ス。日モ早晩(クレ)ニ近ケレハ。今更勢ノ多少モ見ヘス、鬨ノ聲矢叫ヒ勝ニ乘テ勇ミキソヘハ。恰モ數千ノ助兵加勢ノ來レルヤト疑ハル政宗諸卒ヲ制シテ。味方ハ小勢ニテ。終日ノ合戰ニ甚タ勞セリ。敵ハ猛勢ナレハ重ネテ荒手ヲ以テモリ返サレハ、此上ノ大事タルヘシ。勝軍ニ怪我スルコト勿レ、早々軍ヲ返シテ備ヲ堅ムヘシト。使武者ヲ以テ嚴重ニ制サレケレハ。急ニ本陣ヨリ鐘ヲナラシテ諸軍ヲ班メ、敗軍ヲ追捨テ段々ニ打上タリ。偖成實備ノ戰モ味方勝利ヲ得タルト見テ。勇氣ヲ勵マシ責立レハ、岩城勢勢ヒヲ碎カレ。常陸軍利ナクシテ備ヲ崩ンテ引トルヲ。成實曾テ追討セス。逢隈川ヲ後ロニシテ軍兵ヲソナヘ、海道ヲ前ニ見テ備ヲ固メテ陣場ヲ動カサス。其後會津・佐竹ノ兩將モ。本宮觀音堂ノ南ニ當ツテ備ヲ引上。高倉道川切ニ列ヲ直シテ見ヘケレハ。伊達勢四五町程ツ、隔テ。何レモ備ヲ固クシテ打靜リテ控ヘタリ、義廣・義重兩將共ニ此兵機ヲ見察有テ。再ヒ戰ヲ仕掛ルトモ。勝利アルマシトヤ思ハレケン、諸軍ヲマトフテ何事ナク引上タリ、會津・佐竹・岩城・須賀川ノ四軍ハ。始メヨリ稠シク戰ヒシニ。白河・石川ノ二軍ハ兩手ノ間ニ陣ヲトリ。後ツメト成テ居タリシカ。軍場ヲモ見スシテ。四軍ト共ニ相双ンテ退陣シタリ。其日既ニ暮ケレハ。政宗本陣ノ芝居ヲ放レス。岩津野ヘ軍勢ヲ入ラレ。稠シク夜ノ用心シテ士卒ノツカレヲ晴サレケル。夜半ハカリニ山路淡路ヲ使トシテ、政宗自筆ノ書ヲ成實ニ賜フ。其趣キハ今日大敵兩陣ノ間ニ挾マレテ。本陣ト隔ツコト甚タ遠シ。萬死一生ノ戰ヒ。小勢ヲ以テ大軍ニ切勝。終ニ敵ヲ追退ケ、誠ニ奇代ノ勇猛ナリ、其方ノ大功故。味方ノ軍兵、命ヲ救フノミナラス。勝利ヲ遂ル事。大幸言語ニ演

ハ難シ。然ルニ四日實本宮ヘ再陣ノヨシ風說アリ。家士從軍ノ輩手負死亡數多アルハケレトモ、餘人ニ申シ付ンヿト如何ナレハ、大義ナカラ本宮籠城タルヘシト也。上野介政景ヲモ差ソヘラル由ナリ。濱路・成實ニ向ソテ申シケルハ、某今日ノ合戰ニ味方ヲハナレ、心ナラス敵陣ヘ紛レ入シニ、敵方ノ評定ニ明日ハ本宮ヲ取圍ミ、二本松籠城ノ者共ヲ助ケ、連立テ引除ヘシト評議ヲ承リ、夜ニ入テ遁レ出、只今本陣ヘ馳參シ、其趣キヲ達スルニ付、件ノ如クニ候ト委細ニ演達シケレハ、成實御答ノ受ヲ申シ、則本宮籠城ノ用意ナシケレトモ、俄ノ事ナレハトヤ角シテ十六日ノ未明ニ成實本宮ヘ籠城シケリ。夜ノ内ヨリ物見ヲ付ナキ伺ハセケルニ、敵ノ陣所ニ火ノ手見ヘケレハ、陣拂ヒカト不審ニ思ソ處ニ、斥候ノ者早翔ニテ馳來リ、佐竹。會津・岩城勢其外悉ク退散、前枝澤兵部モ城ヲアケテ引除由注進ス。依之則前枝澤ヘ人ヲ走ラセ見セケルニ一人モ不殘引拂ソ、此旨岩津野ノ本陣ヘ注進シケレ

ハ、政宗則本宮ヘ入來アッテ、昨日ノ合戰ニ粉骨ヲ盡シ、或ハ討死手負ヲ改メラル。時ニ濱田伊豆合戰ノ記錄ヲ以テ披露スルニ、味方ノ手ヘ打トル首八百六十一級、味方ノ討死雜兵共ニ三百八十餘人ナリ。手負ハ記スニイトマ非ス。時ニ伊豆申シケルハ、昨日ノ合戰味方敗軍ノ節、佐竹・須賀川ノ猛勢ナシ續キ、一人モ助カリ難ク候處、茂庭佐月後殿ヲ相勤メ、敵味方ノ間ヲ乘切リ、大敵ヲオシ緩メ討死仕リ、兩陣ヲ驚カス働キ、差續イテ大町參河・同源四郎父子猛威ヲフルヒシ働キ、粉骨ヲ盡セル手柄シテ討死仕ル。亦中村八郎右衛門・大町淸九郎・桑折攝津等、比類ナキ働キニ候ト、討死手柄ノ次第具ニ之ヲ相達ス。政宗先ッ茂庭石見綱元ヲ召出シ、昨日大軍ノ中ヘ翔入、父カ敵ヲ早速ニ討トルコト神妙ナリトアリケレハ、石見申シケルハ、恨ミハ晴レ候ヘトモ、久保田十郎ハ亂軍ニ見失ヒ候處、原田左馬助・黑木肥前等、其子三郎ヲ討取、本望ヲ遂候ト申シ上ル。政宗ノ曰一人ノ功ニホコラス。賴母

敷言ナリトテ感賞ヲ施サルヽ、備又亘理元庵。同美濃重宗・高森雪齋政景・伊達藤五郎成實・白石若狹宗堅・大條尾張宗直・泉田安藝重光・濱田伊豆宗景。原田左馬助宗長・富塚近江仲綱・片倉小十郎景綱。桑折攝津定重・櫻田右兵衛弘國・黑木肥前宗久・高野壹岐重廣。伊東肥前・瀨上中務・濱田治部ヲ始メ、各此度無二ノ合戰、面々粉骨ノ働キ故大軍ヲ碎キ家ノホマレ不過之ト感賞、其程々ニ應シテ之ヲ施サル。又中村八郎右衛門。大町淸九郎ヲ召出シ、打損シタル渠等カ太刀ヲ一見アリ、甚タ稱美アツテ於鹽松知行加增ヲ施サレ、八郎右衛門ヲハ中村備前ト名改、淸九郎ハ大町飛驒ト改メラレ、不斷組鐵砲士百人ヲ預ケラル、其外分捕高名手柄ヲ顯シタル者トモ、其品ニ順テ何レモ感狀ヲ玉ハリ、又討死シタル者トモ無殘、遺跡ノ相續神妙ニ沙汰セラレ、其後別シテ伊東肥前ヲ招カレ。高倉表ノ働キ比類ナシ。兵卒ノ指引誠ニ神妙ナリ、其方最初ニ敵ヲ支ヘシユヘ敵軍ノ勢ヒヲ折キ、味方全クノ勝利ヲ根指シタリト別シテ稱美アツテ、其上肥前カ二男伊東某ヲ召出シテ近侍セシム、カヽル大合戰ノ芝居ヲ去ラス。於其場莫大ノ恩賞ヲ施シ玉フコト、誠ニ良將ノ器ニ非スヤト。諸人感心セスト云者ナシ。

安積表七軍退散之事

抑此度ノ一戰ハ、伊達ヲ打果スヘキ結構ニテ、七大將評議アツテ三萬ニ及フ軍勢ヲ卒シ、各出張アリケル處ニ安積ノ一戰ニカケ負。早速退散セラレシコト、後ニ聞ヘケルハ。色々軍議出來シケルユヘトソ聞ヘシ。石川白河ノ人々ハ伊達ヘ親族ナレハ內通アリト云唱ヘ、又會津ノ者共伊達ヘ傾キ、境目ノ諸將逆心シテ伊達ノ人數ヲ引入ルト云出シ、又白河石川ノ陣中ニテハ、會津・佐竹疑心オコリ此陣ヘ押ヨスルナトヽ誰云トモナク私語立テ、陣中靜カナラス。コレハ政宗ノ謀略ヲ以テ、今度ノ軍一大事ナレハ、彼黑脛巾ノ忍ヒヲシテ、信夫鳥屋ノ城主安部對馬ニ密々ニ謀ヲ授ラレ、柳原戸兵衛・世瀨藏人等手下ヲマハシ。樣々ノ流言

ヲ云觸シ反間ヲ行フユヘ三軍ノ疑ヒヲナコシ暫時ノ退散ヲ遂シムナリ、依之白河・石川ノ兩將モ不審ハレス備ヲ固メ用心セラル會津・佐竹ノ兩將分別アツテ白河・石川ノ兩勢今日ノ合戰ニ遠幕打テ人數ヲ出サス見物シテ居タルコト不審ナキニ非ス會津ニテ柴彈正逆心シテ伊達勢ヲ引入シコトモ遠カラス兎角明日本宮出張ハ相ノヘ白河。石川ノ陣中ヲ糺明シ異心ナクハ人質ヲトリ固メ重ネテ安積表ノ出陣可然ト評定ニ決シ使者ヲ以テ石川。白河兩將ヘ申サレケルハ存スル仔細有之ニ付明日本宮ノ出陣相延候間其元人數モ相控ヘ申サルヘキ由ナリ兩將聞之玉ヒ偖ハ咄フル處モ謂レアリ此上ハ長陣不可然トテ則其夜ニ陣拂ヒシ歸陣セラル會津・佐竹ノ陣中ニハコレヲ見上下動轉シテ騷亂スルコト不斜義廣此躰ヲ見玉ヒ無心許思ハレケレハ此度ハ歸陣シテ領國堅固ニ持コタヘ重ネテ本意ヲトケント同十六日未明ニ義廣會津ヘ歸城ナリ依之佐竹義重ニモ急ニ歸陣ヲフレテ高倉在陣ヲ引拂ヒ。水戸ヘ歸城セラレケリ。依之岩城・須賀川ノ兩陣モ同ク陣ヲ拂テ歸城ナリ。政宗ニハ大敵ノ勝利諸軍ノ勞レヲ慰セシメント於本宮酒肴ヲ設ケ大ニ興宴シ其日ノ暮ニ及ンテ岩津埜ヘカヘラレ二三日逗留有テ四方ノ一揆ヲシツメ敵騎モ不殘悉ク退散シケレハ同廿一日諸軍ヲヒイテ小濱ヘ歸城セラレケリ

私ニ云伊達鑑與陽軍秘錄等ニハ七將ヘ相馬義胤ヲ加ヘタリ非ナリ義胤ハ鹽松陣以前ヨリ伊達ヘ和睦アツテ大内二本松ノ取合ニモ加勢セラル其後田村内亂以來再ヒ不和ナリ。仍テ右ノ七將ト云ハ二本松國王丸ヲ加ヘテナリ

伊達秘鑑卷之十七終

伊達秘鑑卷之十八

東奥仙府　燕々軒　編集

伊達嘉例七種之連歌附二本松勢寄ニ澁川ニ事

明レハ天正十四年丙戌正月。新タマノ春ニナリヌレトモ世ハ未タ無爲ノ昔ニモ歸ラス。去歳ハ夏ノ始メヨリ伊達・葦名等。其外諸家ノ確執ニ因テ。兵革交打續キ。萬民。日モ手足ヲオクニ暇ナカリシカ。猶今年ハ如何ナル亂事カ出來ント。各語リ合ナカラモ。道カニ新春ノ壽キトテ。門々ニ千歳ノ色ヲカサリ粧ホヒ。霞立空ノ氣色。野邊ノ若草ホコロヒテ。梅カ下陰ニハ。初春ノ先ヲ爭フモイトヤサシク。池ノ氷モ始テ心解アフ元日ノ賀ヒコソ目出度ケレ。斯テ戰爭ノ最中ナレトモ。家々ノ規式行ハルニ。政宗ニハ小濱ニ於テ。年始ノ儀式アリ。七種ノ壽キ。取分伊達ノ家例ナレハ。陣城ニ於テ各連歌ノ會アリ。家例ナレハ大將ノ發句ナリ。七將ニ對シ勝利アリケレハ。政宗。七種ヲ一手ニヨセテツム野哉。』雪齋『サキカケテマツ梅ニホフ陰。』偖又二本松境澁川ノ城ニハ。成實ヲ押置レタリ。然ルニ去年十月。二本松義繼滅亡シテ後。殘臣家人嫡子國王ヲ守立。イカニシテ亡君ノ跡ヲオコサント。日夜ニ伊達ノ透間ヲ伺ヒケルカ。今日元旦ノ祝儀ニ。敵モ油斷スヘシイサヤ成實カ陣城澁川ニ押ヨセテ。其不意ヲ討ントテ。去年義繼ト共ニホロヒタル。鹿子田和泉カ一子鹿子田右衛門ト云者。兵士五六十騎・歩卒足輕二三百人引具シ。澁川ニ馳向フ。先ツ道ノ傍ラナル蓊蒼ノ陰ニ勢ヲ藏シ。物馴レタル侍一騎ニ。歩立ノ者十人ツケテ先ニ遣ハシ。容子ヲ伺ハセケルニ。成實カ陣所ノ末ニ流井アツテ。折シモ雜人トモ出テ水汲居タルヲ。四方ヘハツト追散ス。陣中ヨリ見之スハ敵ノ寄セケルソ。憎キ奴原遁スナト。人數少々出テ追掛ル。二本松街道小山ニ柴立ノ細道一筋ノ所ヘ。敵逃行ヲ追ツメシニ。隱レ居タル伏兵四五十騎。歩卒二三百。小柴ノ陰ヨリ討テ出。一度ニ切テカヽリケレハ。不意ノコトヽ云物

具モセサル故防キ兼テ引退ントスルヲ追討ニ切立ル城中ヨリ之レヲ見テ成實カ家臣遊佐藤右衛門・志賀大炊左衛門手勢ヲ卒テ討テ出追來ル敵ヲ遮ツテ打テカヽル遊佐ハ元來瀬川出生ナレハ案内ハ知タリ敵ノ追來ル道筋ヨリ西ノ方ヘ開イテ追マハシ深田一枚ノ中ヘ敵三人切テ落シ其外餘多ニ手ヲ負セテ少シ息ヲツク所ヘ鹿子田右衛門後ロヨリ藤右衛門ヲ谷地ノ中ヘ切落ス志賀大炊左衛門モ敵四五人ニ手ヲ負ス爰ニ成實手ニ羽田右馬之助ハ他所ヘ出テ歸リシカ此迫合ニ味方足並アシキヲ見テ直サマニ討テカヽル處ヘ八丁目ヨリノ助勢只今ノ海道ヲ二本松ヘ打シ切ル樣ニ谷地ヲ直ニ越ユルヲ見テ二本松勢跡ヲ打シャラレテハ叶ハシト吾先ニ崩レテ逃行ヲ右馬之助ヲ始メ追討ニシテ首十六打取ケル此趣キ則小濱ヘ注進シケレハ政宗喜悦不斜當年ノ吉左右物始ヨシ二本松退治踵ヲメクラスヘカラストテ手柄シタル者トモニ面々褒美ヲ賜リケル

二本松合戰之事

同二月二日二本松籠城ノ中ニ箕輪玄蕃・氏家新兵衛・遊佐丹波・同下總・堀江越中以上五人ノ輩。密々ニ相談シテ伊達ヘ降參ヲ望ム其本公ニハ城中ヘ手引可致玄蕃屋舗ハ人數入ラレ候ニモ便宜ノ場所ナリトテ銘々人質ヲ潜ニ小濱ヘ相送ル其内玄蕃ハ人質ニ娘ヲ本丸ヘ置ケルカ老母ヲ遣シテ娘ニ差替娘ハ小濱ヘ遣シケリ右五人ノ者トモハ二本松ニ於テ歷々大身ノ者共ナリ。依之政宗發向アルヘキニ極マリケル同三月三日上巳ノ佳節ナレハ迚城内各祝儀ノ設アリケル處ニ伊達勢俄ニ寄來ル由聞ヘケレハ前々定メ置所ノ役所々々ヘ手分シテ待掛タリ政宗則出陣アツテ去年ノ通陣ヲ取テ先ツ試ミニ城ヲ責ルニ、城内堅固ニシテ。更ニ落ツヘキ躰トモ見ヘサリケリ。箕輪カ屋敷ハ要害ノ地ニテ本丸ト栗カ迫ト云取出ノ間ナリ城ヲ攻ムルニ便宜ヨケレハ此屋舗ヘ片倉小十郎カ人數ヲ夜中潜ニ引入タリ氏家・遊佐・堀井等

カ屋敷ハ城下ニテ淺間ナレハ。持抱ヘキ所柄ニ非ストテ四人共ニ皆玄蕃カ屋鋪ヘ立ノク。女童ニ至ルマテ笹輪カ屋鋪ヘ入込ケレハ。立亂レ込合テ尺寸ノ空地ナク。槍取マハスヘキ樣モナシ。城内ニモコレヲ聞テ力ヲ落スヨリ外ナシ。新庄尾張吾持口ヲハ緊シク固メサセ吉例ノ旗ヲ拜シ人數三百ハカリニテ三ノ曲輪ノ風上ヨリ火ヲカケタルニ風俄ニ吹來テ烈シキコト雷ノ如シ尾張兵卒ヲ下知シテ風上ヨリ笹輪カ屋敷ヘ責カヽリシカハ片倉カ人數五人ノ家男女込合テ我先ニ逃ントノミ心カケ女童混亂シテ門ヨリ出ルコト難ケレハ塀柵ヲ乘リコヘ險難ノ所ヨリ落重ナツテ男女六七十人蹈殺サル。片倉モ五人ノ降士モ命辛々ニ引取タリ其比人々嘲リ笑ヒケルハ。箕輪ヲ賴ニシテ入コミシ片倉カ思慮。以ノ外ノ僻事ナリ。天罸ヲモ不顧忠豪ノ手柄立コソト誹謗シケリ玄蕃カ輩淺智ニシテ計策拙ナク事不遂ノミナラス片時ノ内ニ顆ハレテ味方ヲ損シ城兵ニ利ヲ付ル事。ヒトヘニ不孝不義不忠ノ天罰。立所ナリト唱ヘケリ。是ヨリシテ城中無油斷。イヨ々堅固ニ忠戰。勇氣ヲ勵ムトイヘ共。籠城ノ諸士名字憶ナル者。百騎ニ不足。其外ハ町人百姓等。譜代親ミヲ思テ催促ニ應シタル迄ナレハ。百千ノ力ヲ盡ストモ防戰守城持堪ヘ可シトモ見ヘサリケリ新庄彈正。同尾張其外諸士モ。一同シケルハ此城微力ニテ永々ノ籠城不可叶。其上第一ノ味方ト賴ミシ會津モ。安積ノ一戰ニ利ヲ失ヒ。伊達ノ兵威ニ碎カレケレハ。今安子島。高玉兩城ノ守リハカリニテ指出タル加勢モナシ大内兄弟ハ平日不定ノ將ナレハ賴マレス。所詮一夜討シテ。政宗ハ不討トモ。近陣ヲ追拂ハヽ。安子島。高玉ノ城代モ力ヲ得會津ノ合力モ忿比ナルヘシト。評議一決シ。上下三百餘人ニテ。政宗ノ本陣八幡平ヘ夜討シタリ伊達勢少シモ周章スシテ立合タリ。尾張ハ所ノ案内者ナレハ夜討仕損シタル輩ヲシテ。谷道ヲサシテ逃行キ伊達勢勝ニノツテ追掛ルヨキ所ニ引ツケ尾張取テ返シ手

痛ク打テカヽル伊達勢モ追ツメテコヽニテ双方力戰ス間ニハ輪シ家内ハ不知伊達ノ兵卒此所ニテ多ク討ル。今其處ヲ伊達ノ損取谷ト云ツタヘシモ。二本松ノ惡口ナリケレトモ寄手ハ多數ナレハ終ニ城兵追立ラレ城中ヘ引取リケリ兎ヤ角シテ夜明ケレハ本陣ヨリ立合タル士卒モ八幡平ヨハ打入タリ伊達・田村去ルヨリ此城ヲ攻ムレトモ毎度利ナシ五人ノ士降參スレ共城内益々堅固ナレハシハラク戰ヲヤメテ遠責トコソ聞ヘケレ。

再二本松城攻ト相馬義胤援二本松落居之事

斯テ寄手城ヲ圍ミタルハカリニテ遠責ニシテ日ヲ送リケルカ四月ニ日再ヒ城ハ取附鐵砲責ニ打立シカトモ城中兼テ不取合堅ク守ッテ出合者ナシ、道茂木少々破リタルハカリナリ依之政宗高森雪齋。亘理元庵・原田休雪・桑折點了齋等ヲアツメテ評定アル老臣等申シケルハ敵ノ氣ヲ謀ルトコロ此城山高ク谷深ク要害尋常ノ山城ニ品替レリ殊ニ兵粮ノ貯ヘアリト覺ヘ候彼兵粮ヲハコヒ續ルハ會津義廣ノ合力又ハ高玉安子島ヨリ城ノ後ロ森々タル深谷ノ間道木ノ葉隱レノ通路アッテ運送スルモノナリ味方長陣ノ勞ヲ待テ例ノ如ク諸將後詰セントノ計略ナラン如何様ニモ此城ノ後ロ大山ノ通ヒ路ニ伏兵ヲ置運送ノ兵粮ヲ追落シ粮ノ通路ヲトリ切ラハ、城中飢ニ及ヒ自滅センコト無疑候ト評議一決ス則伊達長井ノ人數ヲ分ケ所々堅固ノ地ニ取出ヲカマヘ兵粮武具丈夫ニ籠置二本松ヲ遠燕ニアテカヒ、政宗同七日小濱ヘ歸陣セラレケリ斯テ伊達長井ノ軍勢、令ヲ受テ人替リ入替リ二本松通路ノ深山ヘ伏兵ヲ設ケ運送ノ兵粮中途ニテ追落シ奪ヒトリ。一俵モ二本松ヘ不通、田村清顯ヨリハ佐久間宮内左衛門ニ足輕ヲ預ケ、青田ト云所ヨリ嶽山迄ヲ警固ス、依之會津運送其外ノ通路トモニ。遙カニ沼尻ノ温泉本ニカヽリ。嶽ニマハリ猿鼻ヨリ出、田地カ岡國司カ舘ヘカヽリ。兵粮ヲ送リ續クル所ニ。伊達成實之ヲ勘察シテ築切

ル故。會津ノ往還ハ絶ニケリ。依レ之籠城ノ者共。會津ノ通路ヲ失ヒ。敵中ニ包レテ城外ニ出ルコト不レ能。偏ニ籠鳥ノ雲ヲ慕ヒ。網中ノ魚ノ淵ヲ願フニ異ナラス。兵氣折テ勇力タユミ。斯テハ行末如何アルヘシト心細ク成行ヌ。去冬會津。佐竹其外ノ諸大將。大軍ニテ後詰アリシカ。爭カ伊達勢タマルヘキ。定テ降參スルカ又ハ米澤へ退散スルカ。此度ハ二本松運ヲ開クヘキ時至リスト。喜ヒ居タルカヒモナク。政宗ノ小勢ニモミ立ラレ。諸將本宮ヲコユルコトタニ不レ叶。高倉ノ城モ不ニ取得一シテ。空シク退陣セラレ。今年ノ夏モ暮ユケトモ。後詰セント云方々モナク。剩へ兵粮ノ道キレテ。日マシニ乏シクナリケレハ。ケ樣ノ折ニハ人ノ心モ變化スレハ。若シ異心ヲ生スルコトヤ有ント。危キコトヲ。朝夕ニ笹蟹糸ノ如クニヨハリケリ。此上ハ城ヲ明テ降參スルトモ。政宗ノ憤リ深ケレハ。ヨモヤ國王ノ命ヲモ助ケラルマシ。其外ハ不レ及レ云。如何センヤト城中集ツテ評議シケルニ。小舘刑部忠興聞レ之テ。諸士ノ申サル如ク。西モ東モ辨ヘナキ幼君ヲ眼前ニ失ハンコト。コレノミ心魂ノ痛苦ナリ。何卒國王殿ノ命ハカリモ助ケ申サン。願ハ相馬ヲ頼ムヨリ外ナシ。某潜ニ忍ヒテ此コトヲ計ラハント云ケレハ。何レモ尤同心タリ。依レ之小舘刑部奴僕ノ躰ニ姿ヲヤツシ。七月三日ノ夜ニ入テ。城中ヲ忍ヒ出。相馬ノ小高へ馳着。隨臣ニ便リテ長門守義胤へ願ヒケルハ。二本松籠城保チ難ク。城中飢ニ及ヒ。必死ニ極リ候間。伊達へ降參可レ仕候へ共。政宗鬱憤江海ノ如クナレハ。一人モ助カリ難ク。何卒大將ノ御扱ヲ以テ。幼君國王ノ命助リ候ニ於テハ。城中ノ者共不レ殘自殺仕リ。伊達ノ憤リヲ晴シ。幼君ノ命ニ代リ申シ度。此旨御計ヒ願入所ナリト。泪ヲ流シ訴訟申シケル。義胤ニモ哀レニ思ハレ。兎モ角計フヘキノ間。暫ク此地ニ控ユヘシトナリ。折柄八丁目ニ居住セシ。成實老父實元。コレハ義胤再伯父ナリ。故ニ實元ヨリ義胤へ。二本松ノ事扱ヘレヨト云ヒ送ラル。又田村淸顯ヨリモ。扱ノコト同樣ナリ。旁

々三方落合ケレハ、義胤ノ違答ニ委細其意ヲ得タリ、扱ワ入レ候ヘシ、然ル上ハ二本松城内幼主國王ヲ始メ各命助ケラレハ扱ヒ申サントナリ、依之清顯・實元談合有テ政宗ヘ斯ト申サレケレハ、兎モ角モ義胤ノ計ヒニ任セラルヘシトナリ。依之義胤ヨリ小舘刑部ニ使者ヲソヘテ、新庄彈正・同尾張其外ノ諸士訴訟ノ趣キ政宗ヘ扱ワ處、其旨聽諾アレハ、急キ城ヲ開テ伊達ヘ渡シ、國王ハ會津ヘ立除レ可、然モ各ノ一命トモニ障リアルヘカラスノ趣キナリ、城中渇魚ノ流レヲ得タル心地シテ喜ノモ又ハカナケレ、依之天正十四年七月十四日、相馬勢ニ二本松ヘ打入リ、本丸ハカリ自燒シテ城中不殘會津ヲサシテ立除ケリ、抑亡主右京大夫義繼ノ先祖、從四位下畠山中務大輔國詮當城ヘ下向シテヨリ以來二百年餘、住馴シ其跡ヲ煙トトモニ顧ミテ、親ハ子ヲ携ヘ、夫ハ妻ヲ誘引ヘテ落行形勢哀レナリシコトトモナリ。國王丸ヲハ新庄彈正・小舘刑部・鹿子田右衛門供シテ義廣ヲ頼ミ落行ケリ、義繼一旦ノ所爲ニ因テ、數代ノ領地忽チニ伊達領地トナリニケリ、藤五郎成實其日則二本松燒跡ノ城ヘ入カハリ、本丸ノ内地ニ三尺ノ深サ削リ捨、茅店ノ假屋ヲ立、小濱ヘ注進シケレハ、同廿六日政宗馬ヲ入ラレ。悉ク點検アッテ吾此城ヘ入ル事、一度ハ歎キ、一度ハ喜フ亡父尊靈ヘ注進セスンハ有ヘカラストテ。即日ニ使者ヲ以テ二本松落居ノ由、米澤ヘ注進ヲ走ラシメ具ニ輝宗ノ廟所ヘ告ラル。泉下ノ尊靈。其神アラハサコソ喜ヒ玉フラメト皆人泪ヲ催シケル、成實則饗膳ヲシツラヒ壽キヲナシ。上下賀ヒノ醉ヲナス、二本松ノ城ハ成實、小濱ノ城ハ白石若狹、大森ノ城ハ片倉小十郎右三將ニ預ケラレ、其日小濱ヘ歸城アッテ、同八月八日米澤ヘ馬ヲ入ラレケリ、

庄内ニ挟最上上杉取合付中山玄蕃武功之事

爰ニ最上義光ハ、先年押領セラレタル庄内ニハ、一郡代トシテ東禪寺右馬允ニ尾浦（異ニ大山）ノ城ヲ預ケ、介添トシテ中山玄蕃ヲソ置レケル、然ル所ニ如何ナル仔細

ヤアリケン。地下人等彼兩人ヲ踈ミ。越後ノ上杉殿コソ慈悲深シト傳ヘ聞ク。イサヤ越後勢ヲ引出シ。兩人ヲ打コロシ。上杉殿ニ從ントテ。連判ノ起請文ヲ認メ。越後ヘ注進シタリケル。因レ之上杉景勝家臣本庄越前守繁長ニ數千ノ軍兵ヲ相ソヘ。出羽國ニ差向ラル。此コト先達隱レナク。東禪寺中山等ツタヘ聞。此旨山形ヘ告ケレハ。義光大ニ驚キ。加勢トシテ草苅虎之助ヲ差コサレ。自身モ後詰セラルヘシトテ。近習馬マハリハカリヲ召ツレ。山形ヲ打立。諸勢ハ庄内境ニテ出アフヘシト觸レラレケル。斯テ虎之助ハ尾浦ノ城ニ參着シ。兩人ニ對面シ。軍評定ス。右馬允カ曰。敵ハ多勢ト云。殊ニ地下人等不レ殘心カハリシタルコトナレハ。城中ノ輩ニモ敵ニ一味ノ者多カルヘシ。然ル時ハ此城持遂ンコト難シ。憖(ナマシヒ)ニ籠城シテ暗々ト責オトサレンヨリ。潔ク打テ出。花ヤカニ討死シテ名ヲノコスヘシ。然レトモ城中ノ女童ヲ越後勢ニ亂妨サレンヨリ妻子ヲ引具シ。最上ニ送リ屆ケ預ルヘシト。玄蕃聞テ承引セス。不肖ナカラ某モ數年足下ト共ニ此城ニコモリ。義ヲ守ル處。今急難ヲ見ステ。城中ノ妻子ヲ具シテ退キナハ。諸人ノ嘲弄。生涯ノ耻辱逃ルニ所ナシ。中々思モ不レ寄ト申シ切テ居タリケル。虎之助申シケルハ。玄蕃能々心ヲ靜メテ聞カルヘシ。右馬允ハ此城ノ本人ナリ。斯云某ハ加勢トシテ來レルナリ。足下ハ右馬允介添ト定メオカレタルハ。兩人トハ違フタリ。殊ニ城中ノ妻子皆名アル者ノ親族ナレハ。コレヲ敵ニ奪ハレスシテ。最上ニ送リ屆ケラレハ。此城ニテ討死アランヨリハ莫大ノ忠節ナルヘシ。其上今迄ノ如ク城中ニ女童有レ之ハ。諸士卒ノ足手纏ヒト成テ。思フヤウニ働レシ。彼ト云此ト云。トクトク妻子ヲ引具シ。立退候ヘト言ヲ盡シ云ケレハ。玄蕃頓テ納得シ。實ニ道理至極セリ。コノ上ハ旁々ノ意見ニ任セ候ヘシ。能々城ヲ持固メ防戰アルヘシ。某女童ヲ山形ニ送リ屆ケ。義光ノ供シテ押付後詰ニ參ルヘシト云捨テ。城中ノ妻子トモヲ引ツレ。月山ノ峯ヲ過。湯殿峠ヲコヘケル

ニ近邊ノ郷民トモ蜂起シテ、此處彼處ノ谷々ヨリ閧ヲアゲテ寄セ來ル。玄蕃ハ態ト彼等ニ目モ不掛、夫ヨリ一町ハカリ向フニ當テ見ユル山ノ上ニ女童ヲ上セ置、其身ハ一騎打ノ細道ニ控ヘ、寄セ來ル者ヲ待居タリ。案ノ如ク一揆トモ一手ニ成テス、ムル處ヲ、玄蕃思フ圖ニ受、時分ハ能ソト眞先ニス、ミ、大薙刀ヲ打フリ向フ者二三人忽チニ薙スヘタリ。家人等モ主ニ劣ラシト群ル一揆ニソツテ入、四方八面ニアタレハ、郷卒トモ一支モセス崩ル、ヲ。或ハ切フセ或ハ谷ニ突オトス。此強勇ニ辟易シ、近付者ナカリシカハ、玄蕃ハ女童ヲイサナヒ、靜々ト山形ヘ引取ケリ

十五里原合戰附尾浦城燒亡東禪寺草鬼討死之事

去程ニ越後ヨリ、本庄繁長ヲ大將トシテ。尾浦城ヘ發向ス。東禪寺右馬允・草鬼虎之助相義シケルハ、吾城中ニ在テハ花々シキ軍叶フマシ。迚モ死セン命ナレハ、十五里原ニ打出軍シテ、繁長ヲ打トルカ、我々首ヲ軍門ニ双フルカ、一時ニ勝負ヲ究ント、二手ニ成テ打出ル。案ノ如ク城中ニモ寢返ノ者アツテ、本丸ニ火ヲ放ツ。折節風烈シク吹ケレハ、家屋門戸ニ吹付ケ、時ノ間ニ灰燼トコソナリニケル。右馬允・虎之助コレヲ見テ。今ハ手分モ入ルヘカラスト。一手ニ成テス、ム所ニ。越後勢モオシ來リ。十五里原ニテ兩方ハタト行逢タリ。東禪寺草鬼等モトヨリ討死トキハメケレハ。會釋モナク繁長カ陣ニ打テカ、リ。左右ヘ當ツテ追ナヒケ。二陣ニ駈入戰ヒケル。越後勢ハ目ニ餘ル大勢ナレハ。前後ヨリ取圍ミ、一騎ニ十騎打重ツテ戰ヒケレハ、最上勢ハ悉ク討レケル。殘ルハ右馬允・虎之助ハカリナリ。サレトモ強勇ノ二人。少シモヒルム氣色ナク。多勢ノ中ヘ割テ入、向フ者ヲ切テステ、アタルヲ幸ニ力戰ス。然ル處ニ虎之助カ乘タル馬、鐵砲ニ中ツテ倒レケレハ、虎之助歩立ニ成テ、近付者ヲ切チラシ、戰數合ニ勇ヲフルフトイヘトモ。痛手數ケ所被リ。今ハコレ迄ナリ、追付レヨ右馬允トテ、鎧ノ草摺疊上ケ。腹

掻切立テソ死ニケル。右馬允ハコレ迄モ猶討レス。討レタル味方ノ首ヲ取テ弓手ニ提ケ。鐔本マテ血ニソマリタル大太刀ヲ打カタケ、千安川ヲ渡リテ歩立ニナリ。繁長カ本陣ニ近付今日ノ案内者ニテ候カ。只今川端ニテ敵ノ大將東禪寺右馬允ヲ討テ候。實檢ニ入ンタメ參リ候ト名乘テ。徐々ト通リケレハ。見ル者コトニ由々敷御働キニ候ト。稱美シテ中ヲアケテ通シケル。此時本庄繁長ハ床机ニカヽツテ。討トル處ノ首實檢シテ居タル處ニ　右馬允持タル首ヲ擲ツテ飛カヽリ。繁長カ正面ヲ礑トウツ、試ノ冑ナレトモ筋金四ツ刪サケ左ノ耳合迄切付タリ。コレヲ見テ近習ノ者共。前後ヨリ取カコミ散々ニ斬ケレハ、サシモ無双ノ東禪寺モコヽニテ終ニ討レケリ。斯テ繁長ハ一戰ノ功ヲ全フシテ。二人ノ勇士ヲ討トリ。其首ニ右馬允カ太刀ヲ添テ。景勝カ實檢ニ入ケレハ、不斜悅レケリ。又義光ハ既ニ庄內境迄出馬セラレシニ。尾浦ノ城落サレ。東禪寺草兒ヲ始メ。城兵悉ク討レタル由ヲ聞キ大ニ怒リ。直ニ越後ヘオシ寄。二人カ弔ヒ軍スヘシトスヽマレケルヲ。家臣氏家尾張守以下ノ者トモ諫メケルハ。マツ此度ハ俄出陣ニテ、遠方ノ者ハ參リ合セサル故以ノ外ノ小勢ナリ。敵ハ勝誇タル大軍。シカモ地下人等マテクミシタレハ。切所ヲコヘテ働キアフコト遠慮ナキニ似タリ、一先ツ歸陣アツテ重テ勢ヲ催サレ。合戰アルヘシト諫メケレハ。義光獅子ノ怒リヲオサヘ、山形ヘ歸陣セラレケル。

會津葦名家有ニ裏表之沙汰事

會津ノ領主三浦介葦名盛隆。去ヌル年不慮ニ近臣大庭カ爲ニ弑セラルト雖トモ、一子龜王丸襁褓ノ內ニシテ。家督相續セラレ既ニ三歲ニ及ヒケレハ、各行末永ク頼ミ思ヒケル處ニ　幾程ナク早世アリケレハ　闇夜ニ灯ヲ失フ心地シテ　如何ナリ行世ノサマヤト。國中安心ノ色ナカリシカ。サレ共龜王丸ノ姉アレハ。近國ノ大家ノ子息ヲ養子聟トシテ　葦名家ヲ相續セント僉議シテ。其比相集ル輩ニハ。猪苗代彈正盛國・金上

淺江守盛信・中目式部太輔、旗下ニハ白河ノ結城七郎義親ヲ始メ田島ノ長沼備後守實國・嫡子七郎盛秀・横田ノ山內刑部太輔。伊南ノ河原田治部少輔盛次・家老ニハ富田美作守・平田左京亮等ナリ。養子ノ事何レカ宜シカラント相談シケルニ。富田・平田ハ伊達政宗ノ御舍弟ヨロシカルヘシト云ケレトモ。結城・金上並ニ沼澤出雲守・瀧川助左衛門等ハ佐竹義重ノ御舍弟平四郎義廣ヨシ然ルヘカラント議定シ、斯テ使者ノ往反アツテ不日ニ約諾相調ヒ今ノ義廣ヲ迎ヒトリケレハ富田・平田ヲ始メコレニ同意シタル輩、深ク憤リケレ共。是非ナク月日ヲ送リケル。サレハ大家ト雖トモ。斯ク內方不熟ニシテ家中ハ云ニ及ハス幕下旗下ノ面々迄、心區々ニ別レ々々ナリケル故過ツル仙道ノ出陣モ大軍ヲ引キナカラ政宗ノ一戰ニ碎カレ後年摺上ノ敗軍モ內々不和ナラサル故ナルヘシ。抑義廣養子タルコト會津君臣不和ノ基、葦名家滅亡ノ兆ナリト後ニゾ思ヒ合セケリ。

田村清顯卒去、附四本松知行割之事

天正十四年十一月三春城主田村大膳大夫清顯頓死セラル、代繼ノ御子ナシ清顯末期ノ枕元ヘ一族諸臣ヲ集メテ遺言アリケルハ、我今ハカラサル急病ニ因テ泉路ニ赴クノ期ニ至レリ、吾歿後ニ及ヒ田村ニ主ナシ依テ諸家中ハ云ニ及ハス、下々ノ者共迄安堵ノ思ヒアルヘカラス吾衰年ノ今迄代繼ノ沙汰セサルコト等閑思慮ニ思フヘキカ吾亦其志ナキニ非ト雖トモ各モ知ル如ク佐竹・會津・岩城ヲ始メ、先年ヨリ近國ノ諸將不和ニシテ端々領內ヲカスメラル。當家小身ニシテ田村ヲ持コタユルコトハ、永キ謀ニ非スト思シニ。政宗ニ緣ヲ結ヒシヨリ以來近國ヨリ犯シ掠ムルコトナク、領地全ク心ヲ安ンス。故ニ我今死ニ赴クトイヘトモ。更ニ憂フルコトナシ。仍テ我死後ノ政事ハ云ニ及ハス軍事ノ指揮尋常ノ沙汰マテモ萬事悉ク政宗ノ下知ヲ受ケ各心ヲ合セ和睦和平ニ取計ヒ仕ナキスヘシ政宗若輩トイヘトモ文武ニ賢ク近

國ノ老將モ誰カ之ニ肩ヲ並ヘン。政宗ニ子アラハ。田村相續ノコトハ、政宗ノ思慮次第タルヘシ、兎ニ角ニ伊達ノ佐ケニヨラサレハ。田村ヲ持抱ルコト能ハスト家士ノ面々ニ無殘遺言アッテ。星霜五十九歲ニシテ歿シ玉フ。淸顯生得仁愛アッテ。物コト律義ニ行ハレ。諸人ノ思ヨリ一入ナレハ。一家中ノ悲歎云ハカリナシ。急キ米澤ヘ脚力ヲ走セテ達ス。政宗大ニ驚キ玉ヒ。則福島マテ來著アッテ富塚近江。泉田安藝ヲ名代ノ兩使トシテ。喪ノ營ミ念比ニ申シ送ラレ、其後米澤ヘ歸城セラル、三春ノ諸臣遺言ヲ守ッテ。萬事米澤ヘ相伺ヒ、葬送佛事ノ營マテモ悉ク政宗ノイロヒナリ、倩又此兩年以來。鹽松二本松退治。且ツ高倉本宮ノ合戰ニ付。戰功粉骨ノ者トモ。其場ニ於テ功賞ハアリケレトモ。猶其賞ニモレタルヲ正サレ。又田村ノ諸士ノ中ニモ、近年功アル者トモハ選ミ出サレ。其賞ヲ施サル。且ツ大内沒落以後。打ツ、キ戰爭ニイトマナク。四本松領未タ知行ノシラヘナカリシカハ。此度郡村ノ役者ヲシテ。悉ク其地ヲ點検セシメ、土地ノ貢品ヲ割分シム又先達テ賜フ處ノ銘々感狀ヲ取上ラレ。其勳功ノ淺深ニ因テ、鹽松ニ於テ加恩ノ地ヲ施サル。亦預ケ置レシ面々ノ城々ハ直ニ居城ニ宛行ハル、先ッ二本松ハ伊達藤五郎成實鹽松小濱ハ白石若狹宗玄伊達大森ハ片倉小十郎景綱。小手森ハ田村ノ隨將石川彈正。右ノ通領地居城ニ沙汰セラル依之仙道安積表マテ。暫ク靜謐ノ思ヒヲナシ、往來ヲ安ンシテ見ヘニケリ。

伊達秘鑑卷之十八終

伊達秘鑑卷之十九

東奥仙府　燕々軒　編集

大崎動亂之事

大崎左衛門大夫義隆ハ先祖清和源氏新田大炊介義重ノ末流足利尾張守高經嫡子伊豫守家兼ト號ス。人皇九十四代花園院ノ御宇　正和年中足利左馬頭義氏ノ末孫石堂右馬助賴房カ嫡子石堂刑部義房ト云者　奥州玉造郡赤條山岨ノ地ニ城ヲ構ヘ楯コモリ。帝威ヲ輕ンシ武命ヲ背クニ依テ　伊豫守家兼ニ　石堂追討ノ院宣ヲ玉ハリ奥州ニ下向シテ　彼石堂ヲ誅伐セシヨリ以來奥州ノ探題ニ補セラレ　玉造郡大崎ニ居住シテ大崎ノ元祖トナル　伊豫守家兼二男修理大夫兼頼ハ出羽國ノ守護トシテ　最上郡山形ノ城主修理大夫義光ノ元祖ナリ　家兼ヨリ十代左衛門大夫義隆マテ。打續テ大崎ニ居住ナリ　然ル處今度大崎ノ家臣　二ツニ別レテ伊達ヘ申シヨルコトアリ　其濫觴ヲ尋ヌルニ。義隆ノ先祖家兼大崎（志田遠田栗原加美玉造谷五郡稱大崎）ヘ下向セラレシヨリ以來義隆迄數代ニ及ヒ。仁木・里見・澁谷・中目トテ大崎ノ家ニ四家老アリ。其内加美郡狼塚ノ城主里見紀伊守隆成カ二男新田刑部隆景ト云者。生得其貌秀美ニシテ　双ヲ色ナキ男色ナレハ。義隆甚タ彼ヲ寵愛セラル。サレハ其性不直ナルモノハ。必ス其寵ニホコル習ヒ　刑部義隆ノ寵愛ヲ頼ンテ　出頭ニソ成ケリ　傍輩ヲ侮リ上ヲカロンシ。ナニコリヲ専ラニスルニヘ諸士コレヲ惡マサルハナシ。モシ彼カ非ヲ詐ル者アレハ　義隆ヘ讒言シ　己ニ不如者ハ悉ク遠サケラル　其後又伊場野外記カ子ニ　同氏惣八郎容貌端正ナルニ因テ　義隆亦彼カ美色ナルニ氣ヲ奪ハレ　片時モ側ヲハナサス。寵愛尤他ニコトナリ。刑部ハイツトナク寵ニ踈ク。咲花アレハチル花アル世。人々ノ眺メ移リカハル。心日惜ク無念ニ思ヒケレハ。刑部カ一門類葉ノ者トモマテ　何レモ面々立身ノ故障ナレハ。其々欝憤ヲサシハサム。惣八郎思案シケルハ。刑部ハ大崎

ニテモ一類多キ者ナレハ。自然ノコトアリトモ。我獨身ニシテハ、他ニ賴ム所ナケレハ。身ノ禍ヒノカレ難シ。然シ岩手山ノ城主氏家彈正隆繼ヲ賴ミ、後ロ楯ニスルナラハ。大崎ヒロシト雖トモ。三ニ一ハ氏家カ類黨ナレハ、タトヘ大事ニ及フトモ。身ノ程心ヤスシト思惟シテ、則彈正カ方ヘ申シ通シケルハ。新田刑部寵ニホコリ吾儘傍若無人ニシテ。傍輩ヲ侮リ。賢士ヲ却ク、剩ヘ某カ新愛ヲ憤リ。折ヲ得テ失ントス。某少進ト云、殊ニ以テ類葉少ナク。獨身ニシテタヨリナク候ヘハ。自然ノ禍アリトモ。避ルコト不能。願クハ前々ヨリノ因ヲ以テ、心ヲソヘラレ合力アツテ。某カ獨立ノ力不足ヲ憐ミ玉ヘ。且ツハ刑部カ奢リ長シナハ。大崎ノ滅亡出來センモ難計。何分足下ヲ後楯ト賴ミ存スルヨシ。無餘義ク賴ミケル。彈正一々聞トトケ。委細尤ノ由承引シ。隨分伊場野ヲ可引立ト。固ク誓約シタリ、此コト刑部カ聞出シ、徒黨ヲ集メテ評議シケルハ氏家彈正伊場野ニ同意スルナラハ。大崎ハ過半惣八郎味方タルヘシ。シカル時ハ刑部カ浮沈此トキナリ。所詮米澤ヘ申シ寄、政宗ヨリ加勢ヲ受テ、氏家一黨伊場野カ一類可打果ト、一決シテ、則米澤ヘ使ヲ以テ加勢ノ儀ヲ願ヒケリ、政宗ニモ隣國ノ事ト云。無餘儀許容アツテ、何時ニテモ一左右次第、加勢遣スヘキ旨返答ナリ。依之新田カ一類安堵シテ、何コトモ心易シト悦ヒケル。新田刑部ハ名生ノ城ニ相ツメ、少モ異心ナキ躰ニモテナシ、義隆ヘ勤仕シ、折ヲ得テ遺恨ヲ晴サントソ巧ミケル。氏家彈正ハ刑部カ輩伊達一手ヨリ加勢ヲ乞フヨシ傳ヘ聞。潜ニ義隆ヘ申シケルハ。新田刑部御寵愛ニホコリ。一族類葉我意ニマカセ少ノ義ヲ恨ンテ君ニ述懐ヲサシハサミ。密々米澤ヘ申シ寄候ヨシ。其隱レ無之候。サアル時ハ滅亡候間、御思慮ヲ廻ラサレ可然。所謂双葉ニキラサレハ、斧柯ヲ用ルト承ル。勢ヒ微ナル内ニ、刑部切腹申シ付ラル、カモシ死罪ヲ不便ト思召サハ。キヒシク逼塞籠居。コレラノ御沙汰可然ト。達テス、メ諫ムレトモ。義隆

曾テ承引ナク刑部コトハ幼少竹馬ノ比ヨリ我側ニテ生長シタル者ナレハ。ヨモ不忠不義ノ心アルヘカラス。去ナカラ各始メ家中ノ疑心ヲ晴ス爲メナレハ暫ク刑部カ在所新田ヘ差遣スヘシトアリケレハ。彈正重テ申スハ。ケ様ニコト延々ノ御計ヒ。マコトニ御運ノ末ト存候。尤刑部幼稚ヨリ御寵愛深ク今サラ難捨思ヒ玉フコト尤ナカラ。彼今却テ君臣ノ道ヲ忘レ他家ヘ申ショルコト。不忠何カコレニ過ヘキ。御沙汰ユルカセニテ刑部カ一類叛逆シ伊達勢亂入候ハヽ、由々シキ大事御後悔甲斐アルマシ。勢ヒ微ナル内ニ刑部ヲ押コメ。一類不日ニ穿鑿アッテ刑法ノ御沙汰可レ然。御家ノ安否只今ニ候ト。サマ々々諫ヲ盡シケレトモサラニ承引ナカリケリ。其後義隆新田刑部ヲ呼ンテ申サレケルハ。其方コト一族ヲハシメ米澤ヘ内通シ伊達ヲ招キテ義隆ヲ亡フヘキ逆意ノ企。其カクレナシ。其根本ハ其方ユヘナレハ切腹可二申付一旨。スヽムル者アリトイヘトモ。幼少ヨリ勤功ヲ思ヒ不便ヲ加ヘ其沙汰ニ不レ及ノ間早々其方カ在所新田ヘ參リ身ヲ愼ミ事穏便ニシテ蟄居スヘシ。事靜リシ以後ハ。亦以テ奉公元ノ如クナルヘシト。丁寧ノコトトモナリ刑部愼テ申シケルハ。御意忝キ仕合トカク申シ上ルニ不レ及。某一族ノ者トモ。不義ヲ企米澤ヘ申シ寄候ヨシ御耳ニ相立。口惜ク思召サレ候儀御尤ノ御事ニ候。御先祖ヨリ代々御厚恩ヲ蒙リ一族ヒロク御家中ニ蔓リ候コト。偏ニ君ノ御惠ミアツキ故ナリ。カヽル大恩ヲ忘レ何ノ不足アッテカ不義ノ企仕候ヤ天罰尤難レ遁コソ候ヘ。某幼稚ノコロヨリ君ノ御側ニ召仕ハレ御不便ヲ加ヘラルルコト身ニ於テ冥加ノ至リ言語ノ及フ所ニ非ス。縱ヘ一族ノ者共如何ナル不義ヲ企候トモ。某ニ於テハ君ヘ對シ不忠ノ企可レ仕トハ全ク存モ不レ寄。彼企某夢ニモ不レ存候ヘトモ。今更御不審難レ遁候間。只此上ノ御慈悲ニハ御前ニ於テ首ヲ召レ候ヘ。在所新田ヘ罷コシ候トモ君ニ不忠ノ者ト、傍輩ニ後ロ指サヽレンコト。何方無二面目一コソ候ヘ

ト、己カ惡心ヲナシツヽンテ、辯舌ニ任セテ欺キケル、義隆思慮淺クシテ奸說ヲ眞トシ申ス處不便ナレトモ一門不審ノ處穿鑿シ、事ノ實否極ムルマテハ、先ツ先ツ新田ヘ引コムヘシ。其方コトハスコシモ別義アルマシケレハ心ヤスク思フヘシ必ス苦勞スルコト勿レト有ケレハ刑部重ネテ申シケルハ。一族トモ不忠ノ罪某爭カ可遁候ヘトモ、別義ナク身命相助ケラレ候義恐入所ナリ、去ナカラ御意ニ任セ罷出候共、一サレハコソ刑部ハ逆心仕リ、新田ヘ立除候ト披露仕ラハ、御家中ニ某ヲ惡ミ申ス者餘多候ヘハ、追蒐討タレ申スヘシ、迚モノ御厚恩ニ中途マテ召連ラレ下サルヘシ、左ナクシテハ御意ニ順ヒ候テモ、中々新田迄安穩ニテ罷越候儀難叶ヨシ申シケレハ。義隆尤ノ由ニテ、則供ノ用意ヲ觸レサセ、乘馬二疋ヲシテ、一疋ハ義隆、一疋ハ刑部ヲ乘セ伏見マテ召ツレ放サルヘキトノコトニテ、名生ノ城ヲ出馬セラル然ル處ニ刑部兼日ヨリ巧ミ置タルコトナレハ、究竟ノ手ノ者三十人餘リ、刑部ニハカマハス、義隆ノ馬ノ口ヲ引、前後左右ニ立圍ミ。隨從ノ供ハ不寄付、何カ仕出サン氣色ニテ、鞭ヲスヽメテ伏見ニ至ル、義隆ノ曰刑部コト途中ヲ氣遣フユヘ、コレマテ可召連トノ約束ナレハ、最早是ヨリ歸城スヘシトアリケレトモ。刑部カ者トモ耳ニモ更ニ聞入レス鞭ヲスヽメテ急キケレハ、無程新田ニ著タリ、夫ヨリ義隆ヲハ名生ノ城ヘモ返サス。新田ノ城ニ入置キ、氏家伊場野ヲ退治アルヘシト。無躰ニ訴訟申シケル。義隆新田ノ城ヘ入玉フトキコヘシカハ、大崎ノ輩馳集ル面々ニハ。マツ猿塚ノ城主里見紀伊守刑部カ兄同氏大膳隆元、刑部カ伯父柳澤ノ城主柳澤備前守高綱、舍弟谷地森ノ城主米泉權右衛門コレラハ刑部カ母方ノ叔父ナリ。其外宮崎ノ城主富崎民部百々ノ城主百々左京亮隆元、高清水ノ城主高清水彈正 高城孫市高久・四釜尾張守隆秀・中目兵部・飯川大隅。鳥崎駿河・黑澤治部少輔（義宣ノ男） 此外氏家一黨ニモ一門ヲハナレ、岩手山ヘ敵對スル者共ニハ。一栗

兵部・下新田監物・保柳主計・渠等ハ兼テ彈正ト心ヲアハセケレトモ、義隆新田ヘ入玉フユヘ、皆心ヲ變シテ新田ノ城ヘ馳集ル。サレハ刑部カ一類初メ、義隆ヲウランテ伊達ヲ頼ミ、氏家伊場野ヲ討果シ、逆心シテ義隆ヲモ亡サント巧ミケルカ、思ノ外一族家中悉ク馳集リケレハ、刑部ヲ始メ何レモ安堵ノ思ヲナシ、今更義隆ヲ尊仰シテ。シキリニ氏家伊場野退治ノコトヲ訴訟ス。義隆モ前ニ氏家カ二心ナキヲ思ヒ、トヤカクト猶豫アリケレトモ。刑部カ一族強テ之ヲ望ムニ因テ止コトナク。氏家伊場野退治ノコトヲユルサレケリ、依之日夜ノ評議トリ／＼ナリ。義隆薄智ニシテ刑部カ巧言ニ迷ヒ。安々ト欺カレ、心ナラス新田ノ城ニ日ヲ送ラル。何ハノコトノヨシアシモ。只刑部カ一類ノ申スニ任セ、鹿ト馬トヲ分ケカネタリ

氏家彈正乞米澤手加勢事

氏家彈正隆繼倩物ヲ案スルニ、移リ替レル世ノサマ、今ニ始メヌコトナレトモ、新田カ一類義隆ヲ恨ミ、米澤ヘ加勢ヲ乞ヒ、大崎ノ家ヲ覆ヘサント。逆意ヲ巧ム折節ハ、彈正味方ニ參リ、岩手山ヲ名生ノ城ニ移シ。命ヲ義ニカケテ防戰シ、事叶ハヌ時ハ義隆ノ切腹ノ供ヲモセンモノト日比思定メシニ。不計モ義隆却テ刑部ニ味方セラレ。氏家一家ヲ誅罰アルヘキトノ企。昨日ハ今日ノ夢トナリ。忠臣不忠トナリ。佞奸ハ世ニ蔓ル。頼ミ少キ世ノサマ此上ハカナシ、今更刑部ニ手ヲ下ケテ降參セハ、吾コソ謀叛人ニキハマリテ、萬人ノ誹リヲ受ンコト口惜キ次第ナリ。吾ニ誤リナキハ、天マサニ之ヲ知レリ。生キテ面ヲ穢サンヨリ、討手ヲ待受。花ヤカニ討死シテ名殘サンニハ如シトテ。一門家中無殘岩手山ニ取コモリ、皆必死ヲソ極メケル。氏家方一味ノ輩ニハ。松山ノ城主遠藤出羽守・宮野豐後守・間山修理亮・富澤日向守等ナリ。又追々ニ新田ノ城ヘ加ル輩。室山（師山トモ）ノ城主古川彈正・高岡太郎左衛門・石川越前守・中新田ノ城ニハ南條下總守・桑折ノ城ニハ黒川辨齋ヲ始メ各要害ノ地ニ楯コモル。然レトモ刑

部方ニモ。サスカ大崎ニ名ヲ得タル氏家カ一族悉ク岩手山ニ籠城シ。殊ニ義隆ノ寵中子息モ。彈正カ方ニ御座シケレハ。早速ニ押寄テ討果スヘキ樣モナク。今日ヨ翌日ヨト評定ノミニテ延引ス。彈正モ今ヤヨスルト。待テトモ々々新田ノ者トモ一人モ寄來ラス。既ニ其期モ過ケレハ。隆繼思案ヲメクラシ。空ク手ヲ納メテ死ヲ待ンヨリハ。何トソ伊達ヘ手ヨリテ政宗ノ威勢ヲ假ツテ。身ノ禍ヲ遁レント思惟ヲキハメ。家臣奥山式部・峯河内ト云者兩人ヲ使トシテ。米澤ヘツカハシ。片倉小十郎ヲ以テ。右ノ趣キ具ニ御加勢ノコトヲ乞願ヒ申シケル　政宗ニモ先年領分境ノコトニ付テ　義隆ヘ遺恨アリ。其上此度新田刑部カ一族等逆變ノコト、モ。口惜ク思ハレケレハ。則承引アツテ。氏家カ身上氣遣フヘカラス　不日ニ加勢差コサルヘキノ旨ナリ。兩使大ニ悦ヒテ岩手山ヘ馳歸リ。御返答ノ趣キ具ニ彈正ニ告ケレハ。隆繼ヲ始メ一族等喜悅不レ斜トコソ聞ヘケレ。偖又義隆新田ヘ移ラレシ後ハ。名生ノ城ハ明城トナリ。義隆ノ内室（葛西ノ息女）ト子息庄三郎母儀東方（氏家和泉娘黒澤治部妹）此三人ハ人質ノ如ク。名生ノ城ニ留置キ。彈正カ老父ト伊場野惣八郎兩人ニテ守護シ居タリ。彈正心ニ思ヒケルハ。我一事ノ恨ミヲ以テ。累代ノ主君ニ敵對フコト。誠ニ本意ニ非ス。コレ併ナカラ新田カ惡心ニ同意アツテ。科ナキ我ヲ誅セントセラルユヘ。一身ヲオク所ナク。伊達ヘモ申シヨル處ナリ。君君タラストモ臣臣タラサランヤ。内室子息ノ身上マテ取コメ置キ。父子ノ間迄斷隔　忠孝トモニ廢センコト。淺マシキ次第ナリ。運命ハ天ノ爲セル業ナレハ只我身一ツノ滅亡ト思ヒ定ント。分別シテ。義隆ノ子息庄三郎ヲハ。鈴木・高橋抔云家來ノ者共ニ供サセ。中新田ノ城ヘ移シ。當城ノ留守居南條下總守隆信ニ渡シケル。義隆ノ内室ト東ノ方ハ心ナラスモ引分レ。名生ノ城ニ過コスコト。中新田モ見渡ス程ニテ遠カラネト。今ハ妹背親子ノ契リモ　イツシカニ朽木ノ橋文ノ渡リモ事タヘテウカリシ歳モ終クレテ。新玉ノ春

ニナレトモ代々ノ嘉例元三規式モナク。剰ヘ敵ヤヨスル伊達ノ勢ヤ寄來ルト魂ヲ冷シ田面ニ騒ク雁自鶯ノ声聞ニ飛クウサヘ心ヲナヤマシ　泪ノ乾ク隙モナシ、斯テ中新田ノ城ニハ　南條下總守隆信ヲ始トシテ、加美郡川南ノ輩一家ニハ四釜尾張守高秀・高城孫市隆文・黒澤掃部　是等ハ庄三郎ノ母方ノ叔父ナリ。小野田ノ城主石川玄蕃隆重　其舎弟味ケ袋九郎左衛門隆家等　皆中新田ヘ馳集リ　義隆ノ子息ヲ守護セントソ聞ヘケリ。

松山城軍評定附黒川月舟背伊達事

氏家彈正伊達ヘ加勢ヲ乞フニ依テ、事延引シテハ詮ナシトテ　岩手山加勢ノタメ　大崎ヘ軍兵ヲサシ向ラル、大將ニハ政宗ノ叔父伊達上野介先生政景入道雪齋、副將ニハ泉田安藝重光・濱田伊豆守・宮内因幡・永井月鑑齋　栗野助太郎・宮城周防・田手助三郎ヲ相添ラル、軍奉行ハ小山田筑前　目付ニハ小成田惣右衞門・山岸修理　是等ヲ始メトシテ。宗徒ノ者數百騎、其外伊達・永井ノ勢ヲ加ヘ　都合三千餘兵　天正十五年丁亥正月十六日、米澤ヲ打立　同廿三日ニ遠藤出羽守カ居城志田郡松山ニ着陣シテ　軍評定取々ナリ。又大崎ノ内伊達ヘ加ル輩ハ　マツ岩手山ノ城主氏家彈正隆継ヲ始トシテ　湯山ノ城主湯山修理・一迫伊豆・宮野豊後・三迫ノ城主柳澤日向貞久等ナリ　是等ハ何レモ彈正カ縁者ナリ　其外ハ皆義隆ノ味方ニ加ハリケリ　斯テ松山ヨリ大崎ヘヨスル評定ニ。伊達上野介・泉田安藝・濱田伊豆守三人ノ評議ニハ。黒川ノ城主黒川月舟晴氏　兼テハ伊達ノ味方ナリシカ　此度月舟敵トナリ、桑折ノ城ニ入　師山ニモ人數ヲ込オキ　大崎勢ト云合セ　兩城道ヲサシハサミ伊達勢押コスルニ於テハ　南北ヨリ合戰仕掛ニ喰トメント見ユル間、卒爾ニ人數出シ難シ　面々ノ謀略如何ト云ケレハ　遠藤出羽カ曰、大崎新沼ノ城主上野甲斐ハ我等縁類ニ付テ　當家ヘハ代々忠節之者ナレハ、甲斐ニ約束ヲ合セテ師山ヲ押ヘサセ　中新田ニ仕掛ンニ　別義アル間敷ト云々、政景

カ曰 凡ソ此ヨリ中新田ヘハ行程四里ニ餘ル道ナレハ、往歸十里ニ近シ、餘寒ト云、日ハ短シ。大勢ノ進退自由ナラス。況ヤ敵ヲ受テ戰フ共、不知案內ノ場ヘ深働キシ、十カ八九味方勝利アルヘカラス、然ル時ハ引取ニ難義シテ。人數ヲ害フノミナラス。伊達ノ弓矢ニ疵付ンコト、雪齋ニ於テ同心成リ難シ、我等所存ハ先ツ桑折師山ノ兩城ヘ仕掛 城中ヲ欺キ、敵若シ城ヨリ出テ合戰セハ、付入ニスルカ 或ハ城中ヲ引分、內亂ヲ以責破ルカ 何卒二ケ所ノ城ヲ攻オトシ、後ヘヲ易フシテ後 味方ノ兵ヲス丶メ、彈正ニ力ヲ併セ可然。政宗ニモ敵ヲ侮リ 深働キスヘカラス、身ヲ愼ミ勝ヲ全フセヨト制シ玉フハ。偏ニ此事ニ非スヤト云ケレハ、泉田安藝思ヒケルハ、政景ハ數年我ト中アシク互ニ快ヨカラス、此度ノ加勢モ我等申シス丶メシコトナリ、其上桑折ニ楯コモル、黑川月舟ハ、政景カ爲ニ舅ナリ、然レハ彼ト云 コレト云、今度ノ合戰ハ政景情入マシキト思案シテ ス丶ミ出テ申シケルハ 吾等ニ於テハ出羽ノ評議尤ト存候。抑此度ノ軍トイヘハ。氏家彈正ニ力ヲ合セン爲ニ差向ラル處ナリ。彈正岩手山ニ籠城ナレハ、伊達勢近々ト攻寄セハ、岩手山モ力ヲ得テ、籠城イヨイヨ堅固ナルヘシ。然ルニ法罰ノミ全フセントテ。永詮議ニ日ヲ費ヤシ 遠方ニ備テ桑折師山邊ニ長陣ヲ張ラハ 彈正力ヲ落シ途方ヲ失ヒ、却テ義隆ヘ降參センモ難計 タトヘ危キ働キナリトモ、中新田ヘ押ヨセ 時宜ヲ謀ツテ城ヲ攻ン。大崎勢ノ弓矢モ募々シキコト有ヘカラス。一情出ヌニ於テ落城疑ヒアルマシ。敵ヲ恐レテ遠卷ニ日ヲ重ネハ。募行難キノミナラス。却テ禍ヲ招クヘシ、所詮師山ニ押ヘヲ殘シ置、早々中新田ヘ押ヨセ可然ト云ケレハ、何レモ此義ニ同心シテ、中新田責ニ究リケル。偖又黑川月舟逆心ノ濫觴ハ、月舟カ伯父黑川式部ト云者、輝宗君ノ時伊達ヘ奉公ニ參リシヲ、飯坂ノ城主飯坂右近ト云者ノ壻養子トシテ、右近名代ニ相立ヘキ旨命セラル、其頃右近娘ハ十歲ハカリニテ。式部ハ三十有餘ナレハ、

嫡幼少タルニ依テ婚姻ハナク、言號ハカリナリ。右近所存ハ式部コトハ年モ拔群相違ナレハ。東ニ家ヲエツリテモ當時壯年ノコトナレハ隱居モ程アルマシ然レハ身ノ榮花僅ノ内ニテ、ハカナキ親子ノ契リナルヘシ此緣ヲ變替シテ娘ヲ政宗ヘ參ラセ、御子アラハ飯坂ノ家ノ後榮タルヘシト思ヒ。サセルコトモナキニ式部ト義絶シ、輝宗ヘハ作惡ヲ訴ヘテ、名代ノ緣ヲタツ此時式部無念ニ思ヒ伊達ヲ引拂ヒ黑川ヘモ不歸、越後路ヘ赴キケル其後飯坂ノ名代ヲ不定シテ事ヲノハシ娘ヲハ政宗ヘ宮仕ニ差出ス此恨ヲ含ンテ月舟伊達ヘ敵トナル、其上月舟ノ内室ハ義隆ノ姉儀ニテ義隆ノタメニ月舟ハ繼父ナリ、義隆ノ舍弟義康ヲ月舟ノ家督ニ定メ大崎ヘハ所緣ト云ヒ殊ニ黑川ハ大崎ノ手前ナレハ、義隆滅亡ニ及ハヽ黑川モ共ニ亡サルヘシ。所詮一族一味シテ。前日ノ恨ヲ晴サントテ。伊達ヘ叛ヒテ大崎ヘ與セシトソ聞ヘケリ。

中新田合戰付小山田筑前討死之事

斯テ軍議究リシカハ、正月廿八日、伊達勢松山ノ城ヲ出段々ニ川ヲコヘテ先陣ハ師山ノ前ヲオシ通リ、新沼ニカヽリ中新田ヘ押ヨスル下新田ノ城ハ義隆ノ味方ニテ下新田監物籠城シ加勢ニハ里見紀伊・其子大膳、又笠原黨ニハ柳澤備前・舍弟谷地森主膳・同宮内・米泉權右衛門・宮崎民部・鳥崎駿河・笠原内記ヲ始メトシ其外一關伊勢・保柳主水抔云者、數百人コモリ居テ伊達ヲ一人モ通スマシト兼テハ一決シタリシカ伊達勢存ノ外ノ氣勢ニテ先陣下新田ヲ過レトモ。後陣ハ新沼ニサヽヘ早先陣ハ中新田ヘ働ケトモ下新田籠城ノ者トモ兼テノ詞ニ相違シテ。一人モ不ニ出合靜リカヘツテ音モナシ。伊達ノ先陣中新田ヘ押ヨセケレハ、城中ヨリ南條下總守備ヲ出シ町曲輪ヨリ四五町程押出シテ合戰ヲ始ム。伊達勢コレヲ事トモセス弓鐵砲ヲ伏テ勇士健卒爭ヒスヽンテ短兵急ニ蒐破リヒタ〳〵ト付入テ、二三ノ曲輪町構マテ放火シタリ下總大ニ敗軍シテ、ホウ〳〵本丸ヘ引入ケリ。

伊達勢勝ニ乘テ虎口際マテ攻付。スハヤ危ク見ヘシ處ニ、持口ノ者トモ命ヲ忘レテ防キケレハ。容易ニハスヽミ兼、攻破ルヘキ樣モナク、暫シ支テ控ヘタリ。軍奉行小山田筑前・思惟ヲ極メ。味方數ケ所ノ敵城ヲ押通リ。甚タ重地ニ入タリ。城ハツヨシ。斯テハ何地ニ諸軍ヲ止メン。今日ノ合戰コレ迄ナリト。小山田自ラ旗ヲ振テ、惣軍ヲ打上、段々ニ備ヲ立ル、然ルニ岩手山氏家彈正ハ。伊達勢中新田ヘスクニ戰フヘシトハ夢ニモ不思軍評議シテ居タリシカ伊達勢中新田マテ押ヨセ責ル由告來ル。彈正驚キ取物モ取アヘス。中新田近クマテ馳付ケレトモ、最早伊達勢引上テ旗色モ見ヘサレハ。加ハルヘキ樣モナク、岩手山ヘ引返ス、此事後日ニ伊達勢ハ聞付タリ。如此先陣ニハ戰アリケレトモ。伊達上野介入道雪齋ハ。濱田伊豆守・田手助三郎・宮内因幡ヲ伴ヒ、師山ノ南ニ當テ、ヒロキ畠原ノアリケルニ。四百餘騎ヲ備ヘテ控ヘタリ、師山ノ城ニコモル輩ニハ、マツ侍大將ニ古川ノ領主古川彈正隆忠・百々ノ城主百々左京亮隆元・不動堂ノ城主小齋何某。休塚若狹。此四人義隆ノ一家ナリ、外清水ノ城主古川越前・宮澤ノ城主葛岡太郎左衛門・川熊ノ城主川熊美濃。其外志田遠田ノ者トモ大勢コモリ居タリ。南ノ桑折ノ城ニハ澁谷中目ノ一類城主飯川尾張。加勢黑川月舟。其外黑川勢不殘籠城シテ、海道ヲ中ニ挾ンテ靜リ返テ控ヘタリ。斯テ伊達ノ先陣泉田安藝重元・軍奉行小山田筑前繰引ニ人數ヲアケ。士卒ヲマトヒ。徐々ト通ル處ニ、下新田籠城ノ者共、城中ヨリ突テ出、道ヲ塞テ通スマシキト遮ル。サレトモ伊達勢物ノ數トモセス。切拂ヒ追退ケテ押通ル。終日深雪ヲ蹈ンテ戰ニハツカレタリ。細道ニテ急ケ急ケト。同所ニ躍ル心地シテ。人數速ニアケ兼タリ。此時中新田加勢加美郡川南ノ勢ト。下新田新治ノ間ニテ。七八度返シ合セテ戰ヒシニ。小山田カ擧動マコトニ軍奉行トソ見ヘタリ。オヒ蒐ル敵兵ヲ前後左右ニ突テ廻ル。敵モ此驍勇ニ僻易シ。暫シ猶豫シテスヽミ得ス。然ルニ師山ニコ

モル大崎勢用水ノ小川ニアリシ橋二ヶ所引落ス依之伊達通ルコト不能先手新沼ヘ引返ス後陣ニハ軍アリトモ不知。斯テ足並亂レケルヲ。小山田筑前後殿シテ大勢ヲ差引シ大崩レハ勿リケリ。小山田其日ノ裝束黒革縅ノ甲ニ白星ノ冑ヲ猪首ニ著ナシ。黒地ニ白馬櫛ノ小旗ヲサシ。長ケ七寸ハカリノ黒馬ノ太ク逞シキニ乘リケルカ戰場ハ皆白妙ニ雪アリテ出立ハ黒シ。際目立テソ見ヘケル。敵味方ノ間ヲ乘分ケ辛ヲ退リセ追付敵ヲハ突テ落シ追退ケ千術百手サナカラ神ノ如クナレハ。敵モ近付得スシテ控ヘタリ兎角シテ伊達勢過半引上シカハ筑前味方ニ追付カント轡ヲ當テ馳ケルカ折シモ風ハゲシクシテ吹雪面ヲ掠メ。道サタカナラサレハ。誤テ深田ニ馬ヲ馳コミ。打テトモヒケトモ立上ラス。筑前運ノ極メト思ヒ。急キ畔ニ飛下リ。聲ヲカケテ馬ヲ引上ントスル所ヘ。大崎勢ノ中ヨリ藤繩目ノ鎧著タル武者。四釜惣次郎ト名乘テ槍ノ柄葉短カニ取テ。小山田ヘ突テカヽル小山田心得タリト取テ返シ打拂ヒ打拂ヒ。十合餘リ戰ヒシカ。終日ノ軍ニ腕綬ルミ。内冑ニ槍ヲ突込マレ。左ノ眼ヲツカレタリ。サレトモ疵淺ケレハ。筑前少シモヒルマス。蒐寄蒐寄戰フ所ニ。笠原黨ノ者トモ四釜カ親族ナレハ。惣次郎討スナ續ケヤ者トモトテ。大勢手シケク切テカヽル。筑前猛威ヲ震ツテ打合ケレトモ。疵口ノ血ニ眼クラミ。左右ヲ顧ルコト不能。左ノ股ヲ切落サレ。痛手ナレハ丈居ニ倒ル。四釜カ從兵落合セテ首ヲ取ント駈ヨル。小山田ムクト起直リ。死出三途ノ供セヨト二刀マテ切付タリ。キラレテ彼者小山田ニムツトクム。筑前心ハ矢武ニ勇メ共。老者ト云必死ノ痛手。今ハ最後ト四釜カ郎等ヲ弓杖ニ長ケハカリ突トハシ。入日ノ空ニ手ヲ合セ。南無阿彌陀佛ト高聲ニ唱ヘ。處ヘ敵餘多折重ナリ。終ニ首ヲソ取レケル。コロハ正月末ツ方春トハイヘト。寒國ノ野風ニ入日ノ影サヘ隱レ。雪モフリシク薄氷トトモニ消ルソ無慙ナリ。川南ニ控ヘシ大崎勢川ヲ渡シテ切テカヽ

リシニ。小山田ハ討死ス。日ハ暮レユク。先陣ハ引タリ伊達勢散々ニ敗軍シテ。新沼ノ城ヘ逃コモル。新沼ハ上野甲斐居城甲斐ハ遠藤出羽聟ニテ伊達ノ味方也。小山田筑前。今朝陣屋ヨリ物具ヲ固メ乘リ出シケルニ。筑前カ馬十間ハカリ過テ。閑ノ太鼓ハ早オソシタ々ト。人ノモノ言フ如ク云ケレハ。小山田カ従卒等大ニ驚キ。如何ナル奇瑞ヤ有ナント。色ヲ損シテ見ヘケルヲ。筑前士卒ニ向ツテ。汝等何ヲカ怪シム。凡ソ龍吟スレハ雲ヲ發シ。虎嘯ケハ風ヲ生ス。コレ則龍馬ノ相ナリ。何ノ怪シミトセンヤ。今日ノ軍ニハ勝タルソ。目出度々々ト。士卒ヲ勇メ出シトナリ。小山田討死ノ後。件ノ馬ヲ敵方ニ見知タル者アツテ申シケルハ。一年義隆祈願ノコト有テ。篦嶽ノ觀音ヘ奉納セラレシ馬ナリト云。義隆不思議ニ思ハレ。則其馬ヲ引セテ見分アルニ。實ニモ拜納アリシ靈馬ニ疑ヒナカリシカハ。マコトニ何方ヨリ出シテ小山田カ手ニ渡リ。此馬ニ乘テ討レケルソヤト。義隆ヲ始メ何レモ奇異ノ思ヒヲソナシニケル。

伊達上野介退陣附自新沼入質之事

伊達上野介高森雪齋・濱田伊豆守等。川ノ東ニ控ヘタル先手ノ人數。引付ケ度思ヒケレトモ。早日ハ暮タリ。敵兵所々ニササヘ。其上桑折・師山ノ兩城道ヲ挾ンテ拒ミケレハ。人數ヲ引取コト不能。桑折ノ城ニハ黑川月舟籠リケレハ。政景城中ヘ使者ヲ以テ。今日ノ戰陣後レヲトリ。コレ迄引上ルコト不叶。我等又ス丶ンテ伐ヘキ樣ナシ。仍テコ丶元引拂ヒ。松山ヘ人數引取候處。定テ兩城ヨリ喰トメラルヘク候間。左候ハ丶有無ノ合戰致シ。死ヲキハメ申スヘシ。去ナカラ月舟當城ニコモラレ候ヘハ。御才覺ヲ以テ無異儀退陣セサセ可預ヤト申シ送ル。月舟返答ニハ。貴殿一人ニ候ハ丶相通シ可申。其外ハ通スマシキ由ナリ。政景押返シテ申シ遣シケルハ。濱田伊豆・田手助三郎・宮内因幡。何レモ同陣ニ候處。通サレ難キ由。月舟ノ才覺ニ成兼申スト相見得候。雪齋事數年因ミ候ヘハ。心中兼テ御存知アルヘシ。同陣ノ者ヲ捨テ命ヲ惜ミ。モシ一人引ノ

キ可ㇾ申カト心見ノ道理リハ口惜ク存候、此上ハ存分ニ任サルヘシ、吾等殘卒ヲ引マトメテ。押付ヶ城下ヲ押通リ、其間随分ト喰トメラレ、伊達勢ハ人モ不ㇾ殘濱田手柄候ヘト云達シ、備兩人ノ輩打ヨツテ政景カ旗本人數引取ンニ於テハ敵兩城ヨリ備ヲ出シ前後左右ヨリ攻討ヘシ。タトヘ大勢ナリトモ。敵ハ身構ヘシテ手強キコトコモアラン、去ナカラ味方萬ニ一ツモ押通ンコト不定ナレハ、何レモ心ヲ一ニシテ必死ト極メ向ノ敵ヲ目ニ掛テ、左右ヲ顧ルコトナク攻入ラハ如何ナル堅陣ナリトモナトカ一軍通リ難カランヤ然ラハ莵立々々。追スカツテ城中ヘ心掛付入ニシテ時宜ニ任セ城ヲ責破ルカ、左ナクハ本斥ヲ枕トシテ、討死スヘシ、心懸シテ犬死シ、伊達ノ名ヲ汚ス勿レ。大崎ニ嘲弄セラルヘカラスト。士卒ヲ勵シケレハ。濱田ス、ミ出テ凡ソ必死ト極ムル時ハ、又幸ヲ得ルト云ヘリ。命ヲ惜ミ身ヲ遁レントセハ。敵ハ案内者ナリ、爰彼所ニ押詰ラレ、骸ヲ曝シ、助カル者ハ有ヘカラス、大崎勢ノ軍立モ元ヨリ期スル所ナリ、左ノミ事々シキコトハアルマシ、敵ヲ尾引コセ、大返シニ備ヲ直シ、真ノ如ク莵立ナハ一手際付ンコト無ㇾ疑、先陣ハ我勤トテ士卒ヲ下知シテ備ヲ出ス、政景ハ旗本田手・宮内ノ兩人ハ後陣ニ遣リ、何レモ長蛇ニ備ヘテ、シツ々々ト軍勢ヲ繰出ス、城中ニハ之ヲ見テ。月舟カ伯父八森相摸月舟ヲス、メテ政景ヲ始メ、悉ク討果シテ弓矢ノ安否ヲ付ヘシ、大崎ハ内中區々ニシテ未頼ナシ、伊達ハ大身ナレハ果シテ大崎モ滅サレ。月舟身上モ立ヘカラス、夫ノ與フルヲ取スンハ。後悔ストモ甲斐アルヘシ、急キ兵ヲ出シテ討ント云ケレ共、流石月舟モ眼前ノ甥ヲ打果サンコト情ナクヤ思ヒケン、此上ハ是非ニ及ハス、同陣無ㇾ相違、相通シ可ㇾ申ヨシ、返答ナリ、使者城中ヨリ馳歸リ、月舟ニカクト申ケレハ、有合ノ兵共ニハ二千餘人ナレハ、新沼小地ト云、兵粮次第ニ乏シク、諸卒飢ニ及ハントス、城主上野甲斐ハ松山ノ城主遠藤出羽守ニ親シキ中ナレハ、前々ヨリ伊

達ヘノ奉公モ他ニ異ナレハ。此度モ義ヲ勵ミテ。一筋ニ味方申シケルカ。元來小地ノ籠城。貯ノ兵粮モ乏シケレハ。大勢永ク相續セシメ難ク、ツラ々々思案ヲシケルハ。大崎勢僉曰伊達勢ヲ恐ル、コト鬼神ノ如シ。敵ニ卒爾ニ此城ヘ攻來ルコトアルヘカラス。イヨ々々強ミヲ稱シテ敵ヲ驚カシ。首尾ヨクハ和談ヲ入レ。諸勢ヲ助ケハヤト思ヒ、城中ニアル雜人皆所々ノ者トモナレハ。其中ニ小サカシキ者十人ハカリ。甲斐自ラ之ヲ撰ミ。謀ヲ授ケ潜カニ城ヨリ之ヲ出ス。彼者トモ所々方々徘徊シテ云觸シケルハ。伊達勢籠城シテ可引取樣ナレハ。桑折師山ノ兩城ヘ夜討シ。十死一生ノ合戰セント其支度アリ、今夜ニヤアラン抔ト云ハセケレハ。一人二人語リ合。聞傳フルコソアレ。所々ニ其唱ヘ喧シ。城中殊ニ唱ヘケレハ。兩城ノ諸將士之ヲ聞テ。サラハ其心掛セヨヤ迚。詰リ々々ニ人數ヲクハリ。夜毎ニ大篝ヲ焚キ散シ。拍子木ヲ打立夜マハリシケリ士卒通夜シテ氣ヲ屈スルコト常ナラス。又彼

者トモ云出シケルハ。兩城木稠ク伊達勢夜討不叶。依之手ノ使ヲ得。心ヲ通スル人々アレハ。城中ノ油斷ヲ見合セ。火ノ手ヲ上ルヲ相圖ニ。伊達勢亂入ノ手筈アリト。誰彼トナク囁キ出シケル程ニ。城中互ニ人ヲ疑ヒ。諸將士卒皆面々ニ手前々々ノ用心ヲ固メケレハ。軍議評定決セス。故ニ新沼ヲ攻ムヘキ心ハナク。然リト雖トモ。城中日ニ粮盡テ人馬トモニ勞レ果。甚々シク敵ニアフヘキ樣モナシ、籠城ノ諸將議シケルハ。カク空シク城中ニ餓死センヨリハ。何レモ必死ニ極メ打テ出。一人ナリトモ敵ト果スカ。モシ切拔テ通スニ於テハ大幸タルヘシト、各一同シケレハ。深谷ノ城主永井月鑑カ曰。各ノ評議一理アレトモ。今此城中ノ形勢ヲ見ルニ。士卒勢ヒ折ケ力撓ミ。弓ヲ引キ太刀ヲ揮フヘキ樣躰ニ非ス。人馬トモニ偏ヘニ惱メル者ノ如シ。此勞兵ヲ以テ強敵ニ駈合セハ。徒ラニ下臈ノ手ニ生捕ラレ。恥ヲ晒サンコト眼ノ障リナリ。政景等既ニ陣ヲ返ス。定テ米澤ヘ訴ヘツラン。數千ノ士卒敵地

ニナヤマサレ鐵炮ニ及フト聞ユハ、。自ラ兵ヲヒイテ出馬アルカ左ナクハ助ケノ軍兵不日ニ下向セスト云フコトアルヘカラス、救ヒ延引ニ及フコトハ今四季皆無地ニシテ時ヲ伺フ折柄ナレハ、境々ノ手當且味方ノ人數滯ルモノナルヘシ 何レニ今暫ク此城ヲ持コタヘ敵若シ助兵ノ到ラサルニ寄セ來ラハ、其時コソ遁レヌ所ト思ヒ定メ、此城ヲ枕トシ討死スヘシト云ケレハ何レモ又コレニ同意シテ。一先ツ命ヲ延シケリ 城主上野甲斐此有増ヲ聞キ 兩城ヨリモ寄來ラマハ我計略ニ落タリト思ヒケレハ。泉田安藝・永井月齋ニ評談シ 師山ノ一將百々左京亮隆元カ家來鈴木伊賀、古川彈正カ家來北郷右馬允 從テ所緣アレハ潜ニ云遣シケルハ 此度ノ軍ノ起リハ氏家彈正頻リニ米澤ヘナケキ入ニ依テ、武將ノ習ヒ政宗止コトヲ得ラレス 加勢ノ軍兵差向シ處、先日岩手山近ク中新田迄、伊達勢働キ入ト雖トモ 彈正不知カ如クシテ不出合。依之伊達ノ勢利ヲ失ヒ 直ニ新沼ヘ引籠ル。

仍テ軍將高森上野雪齋モ人數ヲアケ 米澤ヘ注進ニ付政宗モ不日ニ出馬アルヘキヨシナリ。元來大崎ヘ對シ、合戰アルヘキ謂レナキ處ニ、畢竟ハ彈正カ願ニ應スルトコロナリ 然ルニ彈正出合ハス。伊達ノ軍威ヲ失フ。伊達此鬱憤ヲハサンテ重ネテ大軍オシ來ル程ナラハ。大崎家ノ大事タルヘシ。トカク和談ヲ計ラハレ、新沼籠城ノ伊達勢ニ無構、歸陣致サセナハ。政宗出馬アルマシ、彈正重テ加勢ヲ乞フトモ。此度ノ仕形不調ナレハ、政宗承引アルヘカラス、元來伊達大崎先年コリ不平ノ如クナレト。セメテ合戰ニ及フヘキ意趣ナシ。當時伊達ニハ仙道表ノ諸大將ト確執ノ最中ナレハ、大崎表ハ永久ノ無事トコソナルヘシ 此旨百々・古川ノ兩人ヘ演說アルヘシト云送リケレハ。鈴木・北郷則主人々々ヘ告之依之諸將各評談シ。此旨義隆ヘ届ケタリ、元來大崎ハ最上家ニテ、諸事義光ノ指圖ナリケレハ。早速鳥使ヲ馳テ最上ヘコノ旨通達アル。義光ニモ此度伊達大崎ノ敵々。薄氷ヲ渉ル如ク

危ク思ハレシ折ナレハ。早々扱ヒニ軍將泉田安藝・永井月鑑兩人ヲ人質ニ受取。其外諸軍ハ無構相通サレ可然由申來ル。依之鈴木伊賀・北郷右馬允ヲ中途ニ出シ。上野甲斐カ家來大谷某・加澤某兩人ヲ呼出シ。泉田・永井二人ヲ證人ニ出サレ候ハヽ。籠城ノ軍勢無構ノ旨。皆一決ノ由挨拶ス。依之新沼ニモ此義如何アルヘシト。諸將評議區々ナリ。時ニ泉田カ家來湯村源左衛門スヽミ出テ申シケルハ。此事曾テ無用ニ存候。一命ヲ投打切テ出テ。打死仕ルハ諸人覺悟ノ所ナリ。尤諸軍ノ命ニ替ルトハ申ナカラ。安藝一人敵ノ手ニ渡リ。後ニハ縛リ首ヲ刎ラレ。死後ニ耻辱ヲ曝スカ。或ハ敵僞テ軍將ヲ擒ニシ。其後約ヲ變シテ道ヲ塞カレテハ。新沼ノ諸勢途ヲ失ヒ。肉ヲ喰ツテ可死。兩將モ詮ナキコトニ敵ノ手ニ渡リ。永ク禁獄ノ苦痛ヲ受ンヨリハ。一向死ヲ究メテ打テ出。一戰シテ腹切ンコソ。此場ノ本望タルヘシト云ケレハ。深谷月鑑カ云フ。吾々兩人證人ニ渡リ。諸人ノ命ヲ助クルコトハ。政宗ヘノ忠節ナレハ。死後ノ譽レ何コトカコレニ如カン。某ニ於テハ證人ニ渡ルヘシト云。湯村重テ今戰場ニ於テ命ヲ捨。名ヲ殘サンコソ。武士ノ本意タルヘシ。何ソヤ首ヲ延テ敵ノ手ニ擒ト成テ。獄中ノ苦ミヲ受。後ノ耻辱ヲサラサントハ。伊達ノ名折トコソ申スヘケレ。貴殿ノ心中推量仕ル抔。惡言ニ及ヒ。兩方口論ニ至ル。泉田默然トシテ居タリシカ。大ニ湯村ヲ呵シテ退カセ。抑敵方ニテ月鑑ト我ト兩人ノ命ヲ以テ。三千近キ諸勢ノ命ヲ助ントス。然ルニ是ヲ受ケ合ハス。衆ト命ヲ同フシテ。主君ニ損トラセ申スコト。何ノ高名ニナランヤ。鐵壁ヲ以テ四方ヲ圍フトモ。叶ヒ難キハ此城ノ形勢。迚モ期スヘキ命。敵ノ望ニ隨テ證人ニ出。譬ヘハ骸ハスタ々々ニ刻マル共。諸軍ノ命ヲ救テ主君ヘノ奉公ニ仕ラン。殊ニ此度ノ敗軍ハ。松山ニ於テ軍評定ノ刻ミ。雪齋ノ軍旅宜シカリシヲ。我シキリニ軍ヲ進メ。深ク働キシテ軍奉行勇猛老功ノ小山田ヲ失ヒ。其上ニ越度ヲ取シコトナレハ。政宗君ヘ對シ。大ナル不

忠ヲ仕出シ、愁ニ生テ歸リ。人ニ指ヲサヽレンモ無面目。月鑑同意ニ於テハ。片時モ猶豫アルヘカラストテ。城主上野甲斐ヲシテ、師山ノ兩使鈴木。北郷カ方ヘ返答申サシケルハ、吾等不肖ノ身ヲ以テ、大勢ノ命ニ替ラレ、百騎籠城ノ者トモ無恙ク退ケセラルヘキ旨、武士道感シ入リ、大悅不過之、士卒ノ命ヲ全フスルニ於テハ。何分御望ニ可隨ト返答ス。依之二月廿二日師山ヨリ人質受取ノ爲大勢ヲ差遣シ、泉田安藝・永井月鑑兩人共ニ、加美郡味ケ袋ト云所ヘ引取ケリ。新沼ノ諸軍勢ハ則松山ヘ引除タリ。濱田伊豆・小成田惣右衞門・山岸修理。米澤ヘ參向シテ、大崎表戰ノ品々委細ニ申シ達シケレハ、政宗申サレケルハ、此度ノ深入越度誠ニ血氣愚妄ノ至リ。言語道斷ナリ。コレシカシナカラ予カ軍法ノ不足トコロ、世ノ嘲ヲ遁レカタシ。重ネテハ氏家彈正ニ心ヲ合ハセ、急折陽山ノ兩城ヲ責破リ彈正ニ相加ハリ、根ヲ深ノシテ勝ヲ全フセヨト制サレケリ。

傳ニ云、米澤ヨリ續テ勢ヲ向ラルヘカリシカトモ、折節仙道戰爭ノ半、諸手ノ配リ心ニ任セラレス、剩ヘ氏家彈正ハ病死ス。彈正カ父參河守ハ。義隆ニ屬シタレハ、大崎ノ手引モナシ、其翌年仙道ノ弓矢再亂シ、政宗勝利ヲ得ラレ會津迄手ニ屬シケレハ。此勢ニ乘シテ。東國一圓ヲ打靡ケント思ヒ立レシユヘ、大崎如キハ討ズト歸伏セシメントテ、其儘ニ捨置レケリ。其後義隆ハ中新田ノ城ニ住セラレシカ、秀吉公奧州征伐ノ時、所領沒收セラレ。加美ノ小野田ト云處ニ移リ居テ、出羽ノ最上ニカヽリ上洛シ。安堵ヲ願ハレケレトモ、許容ナクシテ蒲生氏郷ニ御預ケアリシカハ、再ヒ奧州ニ下リ。會津若松ニ住セラレシトソ聞ヘシ

小山田筑前附泉田安藝。深谷月鑑ノ事

大崎左衞門督義隆ヨリ、味ケ袋與惣兵衞ヲ使者トシテ、最上義光ヘ申コサレケルハ。此度當臣氏家彈正逆心ニ付テ、伊達勢領內ヘ亂レ入候處、一戰ニ勝利ヲ得。

軍將泉田安藝・永井月鑑ヲ將トシテ諸卒ヲ相除セ候。シカノミナラス、軍奉行小山田筑前ヲ討取候トコロ。其勇猛ナル事誠ニ比類ナキ働キニ候間、彼カ指物進覽ニ供ル由ナリ。義光則披見アルニ、黑地ニ白馬櫛ノ小旗家中ニ於テサスヘキ者ナシ。又倉庫ニ納テ虫ニ喰センモ益ナシ、武運冥加ノ爲ニ、且ツハ士卒ヲスヽムルノ一助ニモナルヘシトテ。羽黑ノ寶殿ニ奉納セラレシトカヤ。小山田骸ハ新沼ノ泥中ニ朽ルト云トモ、名ハ羽黑ノ山ニ今ニ止リ、生テノ大功、死テノ名譽、世ニ類ヒナキコトトモナリ　偖又泉田安藝・深谷月鑑兩人ハ加美郡小野田城主石川玄蕃隆重　其弟味ケ袋九郎左衞門隆長兩人ニ預ケラレ。籠鳥ノ雲ヲ乞ヒ。涸魚ノ水ヲ慕フ風情ニテ。雲井ノ雁ニ故郷ノ思ヒタヘサリケル　是偏ニ忠義ノ爲メ、士卒ニ替ル命ナレハ露程モイトハシト、我ト心ヲ慰メテ、憂月日ヲ送リシハ、コレソ後漢ノ蘇武カ往昔何奴カ爲メニ虜トナリ　節ヲ斷テ田野ニ放サレ、天上ノ雁ニ飢ヲ助ケ　月窟ノ水ニ渴ヲ救ヒ。十九年ノ春秋ヲ送リツヽ。故郷ヲ慕ヒシ形勢モ、今身ノ上ニ知ラレタリ。カヽル處ニ最上義光ヨリ、延澤能登守ヲ使トシテ。味ケ袋ヘ差越サレ。義隆ヘ相談ノ上。深谷月鑑ニ對面シ。如何ナル密謀カアリケン、月鑑ハコト故ナク故郷ヘ歸サレケル。泉田一人ハ小野田ヘ同道シ　其夜對面シテ能登守申シケルハ、義光コト會津・佐竹・岩城・相馬ノ諸大將ヘ申合セ、近日伊達ヘ合戰アルヘキニテ候。夫ニ付相馬殿ヨリ栃窪又右衞門ト云者ヲ以テ、最上ヘ内談ノ爲。差越サレ候トコロ　貴殿コトハ政宗君ヘ忠節ノ程。誠ニ神妙ノ至リナリ　早コレ迄ト思キラレ　義光ヘ隨身アルヘキ所存モアラハ、賴ミ入度ヨシ、義光懇望タルニ依テ、大崎殿ヨリ足下ヲ乞トリ。最上ヘ同道申スヘキ爲。コレマテ參向セシムルナリ。　願クハ理ヲ枉テ平ニ義光ヘ奉公賴ミ入ヨシ演ヘケレハ。泉田申シケルハ。誠ニ數ニモアラヌ某ヲ招カレ候コト。弓矢ノ面目忝キコトニ候ヘトモ。主君政宗重恩ヲ受。奉公ノ爲メ敵ノ手ニ渡リ。

諸軍ノ命ニ替リシコト推察モ給ハルヘシ。忠死ノ外各々別心無之候。但シ御芳志ニハ早々首ヲメサレ候樣大崎殿ヘ御成頁ルヘシト。少モ變動スル氣色ナカリシカハ能登守大ニ感賞シ誠ニ比類ナキ志ナリ。サリトテハ泉田義士ナリト褒美シケル。カクテ泉田此由政宗ヘ知セ申サン爲メ、潜カニ齋藤孫右衛門ト云者ヲ近付ケ最上ノ容子具ニ云含メテ忍ヒヤカニ米澤ヘ遣ハシ、故郷ヘモ身ハ萍ノ根ヲ絶テ今生ノ對面叶ヒ難シ。未來ノ緣コソ願ハメト。夫々ニ暇乞ヒ云ヒ送ル。其後延澤カ手ニ打圍マレ、居所ニ赴ク羊ノ歩ミモカクヤト思ハレ、最上山形ヘ引トラレケル。政宗ニモ重光カ義心ヲ不便ニ思ハレ、ヒタスラニ感涙セラレケリ。コレヨリシテ永井ヲ深ク疑心アツテ、密カニ月鑑カ底意ヲ探ラセラル。

伊達秘鑑巻之十九終

伊達秘鑑巻之二十

東奥仙府　無々軒　編集

鮎貝太郎出奔山形ニ付中野常陸被召捕事

最上出羽守義光ハ、政宗御母方ノ伯父ニテアリケレトモ、輝宗ノ時ハ度々合戰ニ及ヒケルカ、近頃和睦アツテ互ニ音問不絶、双方境目靜謐ナリ。然リト雖トモ義光生得表裏ノ人ニテ、常ニ僞計ヲ好ンテ疑心深ク、嚴苛ノ仕置專ラナリ。然ルニ近年仙道會津ノ諸大將、伊達ヘ怨讐タルニ依テ、義光モ右ノ諸將ヘ牒シ合サレ、伊達ノ領分羽州長井ヲ奪ハント思ハレシカハ、延澤能登守ヲ以テ大崎ヘ使者トシテ、泉田安藝ヲ最上ヘ乞ヒトリ。米澤ヘ出陣アルヘシトテ。マツ下長井ノ住鮎貝太郎ト云者ヲ味方ニ招カレケルニ、鮎貝則義光ヘ屬ス。此鮎貝太郎ハ先年伊達內亂ノ砌リ、晴宗・輝宗ノ寵臣中野（異本ニ永野トモアリ）常陸宗時ト云者、逆心シテ永井ノ庄ヲ押領セントハカリ、鮎貝太郎ヲ語ラヒ。コ

トヲ巧ミケレトモ。天命不レ遁。其不義顯ハレケレハ。伊達内騒ノ張本タルニ依テ。米澤ニ足ヲ止ルコト不レ能忽チ奔走シテ行方ヲ隱セシカ。時過テ二本松義繼ヲ頼ミ。彼所ニ扶助セラレ。諸士ト列ヲ同フシテ。二本松合戰ノ折モ。軍議ノ列座ニ連リ。二本松夜戰ノ時如何シケン。常陸深入シテ道ノ岐ニ追出サレシヲ。小濱勢常陸ト知テ四方ヨリ取圍ミ 生捕ニシテ小濱ヘ引ケル。如何シケン取逃セリ。常陸以前因ミアレハ。鮎貝カ方ニ逃來テ。深ク忍ンテ身ヲ隱ス。鮎貝山形ヘ一味ノコト隱レナク。不日ニ注進ニ及ヒケレハ。政宗大ニ怒リ玉ヒ。早速ニ誅伐アルヘシトアリケレハ。老臣等申シケルハ。定メテ鮎貝方エ最上ヨリ加勢アルヘシ。其上味方ノ中ニモ。内々最上ヘ手ヨル者有レ之樣ニ。浮説區々ナレハ。卒爾ノ出馬如何ナリ。先ツ内外ノ樣子ヲ見ラレ。其後人數ノ御手分可レ然ト申シケレハ。政宗ノ曰。各ノ意見一理アレトモ。延々ノ沙汰モ時ニヨルコトナリ。今火急ノ時節ニシテ四方皆敵タリ。物ハ定ツテ定マラヌハ。ツネノ習ヒナリ。最上ヨリ加勢必定ト思フトモ。其期ノ延ルコトモアラン。譬ヘ加勢アリトモ。衆卒未タ一致セサル内ニ。急ニ取掛テ其不意ヲ討タハ。スミヤカニ追散サンコト延引ニ及ヒ。敵ノ計略成就シテハ戰ニ骨折ラルヘシ。家中野心ノ者アツテ各疑心スト雖トモ。未發ノ敵ヲ計ランヨリハ。差アタル逆賊ヲ誅センニハ如カス。目前ノ鮎貝ヲ指置キ。コト廣ク成テ。此彼所ニ逆賊ノ者蜂起セハ。一同ニ退治センコト難カルヘシ。兵ハ拙クトモ速カナルヲ尊フ。時ヲ不レ失ヲ軍法ノ本意トス。早打立ヤトテ早々ニ出馬セラル。俄ノ事ナレハ人數不レ揃。軍兵五六騎ツツ追々ニ馳付々々押掛タリ。案ノ如ク下永井ニハ最上ノ加勢未タ來ラス鮎貝太郎防クコト不レ能。一弓ノ敵對ニモ不レ及。取物モ取リアヘス。山形サシテ逃行ケリ。サテコソ永井ハ無レ事故ニ仕置ヲ加ヘ。則米澤ヘ歸陣セラル。誠ニ政宗ノ思惟淺カラスト諸人感シ合セラル。鮎貝出奔スル上ハ。中野常陸又此所ニモ身ヲ置

カネ。コヽ彼所ト隱レサマヨヒケル。見知タル郷民アツテ人數ヲ語ラヒ召捕テ米澤ヘ引來ル。政宗之ヲ聞カレイニシヘモンマリトテ、手柄ノ者トモニ褒美ヲ賜ハリ。當座ノハ牛割ニ可行トアリケル。高森雪齋諫メケルハ、五逆十惡ノ不忠者ナレトモ、七十ニ餘ル老衰ナレハ背判ノ仕置ニユルサレ只命ヲハサレ候ヘト色々ニ訴訟申スニヨリ、牛割ハ止ラレ身命ヲ助ケ亘理美濃重宗ノ弟長谷美作ニ召預ケ、其罪重極ノ者ナレハ石窟ニ入レ老朽タルヘシトノ嚴命ナリ。不忠不義ノ天罰。終ニハ無遁コト明カナリ。

大内備前降參并玉井道合之事

天正十五年ハ、最上大崎ハ取合アリシカトモ、安積表ハ靜謐ナリ。依之苗代荒井太田三ケ所ハ伊達成實ニテ境ノ地ニ近シト雖トモ百姓ヲ通シ、古城ヘ集メキ田畠ヲ開カセケル。然ル處ニ大内備前定綱方ヨリ、成實方ヘ密ニ使者ヲ以テ申シ越シケルハ、某不慮ノ義ヲ以テ政宗ノ御心ニ背ク罰ヲ以テ、浪々ノ身ト罷成、面目ヲ失ヒ候去ヌルコロ、小濱相除キ候時分、會津諸士ノ諫メニ黒松ノ城々過半散地ニ奪ハレ、其上政宗若津野巡見ニ付此城モ通路ヲトヽラレ、二本松退散モ不叶、小濱ノ引退クコトモ成ヘカラス。伊達勢取詰サル內ニ、急ニ小濱ヲ立ノキ、會津ヘ參リ候ヘハ、幸會津宿老松本圖書之助跡斷絶ニ候間、此知行ヲ以テ直々宿老ニ爲ヘキ由申スニ付小濱ヲ立除會津ヘ退散仕ル處、知行ノ義ハ勿論、扶持米ヲタニ不賜、飢ニ及ソ、依之會津住居モ難成候條、軍門ニ首ヲ延ヘ、其地ヘ參向仕度存候。先組ノ首尾ヲ思召サレ、當時ノ罪科ヲ宥メラレ先非ヲ悔ヒ永ク御幕下ニ於テ、再功ヲ可抽。乍去御心ニ背キシコトナレハ。御耳ニ入間敷ケレハ、免許蒙ムルニ於テハ、忠功ニハ愚弟片平助右衛門ヲ御家ヘ引付、奉公仕ラセヘキノ旨申シ越ス。成實則此旨片倉小十郎ヲ以テ達之ト雖トモ、政宗曾テ承引シ玉ハス、大内元來表裏ノ者ナリ。用ルニ不足今度コソ能幸ヒナレハ、僞テ召寄死罪ニ行フヘシ

トアリケレハ。成實・景綱諫メケルノ。備前コト赦免有テ可然。其仔細ハ清顯御卒去以來、田村ノ地ニ主ナクシテ。家中區々申承リ及ヒ候。渠カ望ミニ不任シテ大内若シ本意ヲ遂度存シ。田村方ヲ引付。弓矢物主ニ罷成ヲモ難計。其上片平ノ地ハ。高玉阿古ケ島ヨリハ南方ニテ、片平助右衛門當家ヘ屬シ候ハヽ。右ノ兩城持兼會津ヘ退散仕ンハ必定。家附屬ノ者共ナレハ。仙道會津方御合戰ノ勝手モ可然。降參ノ者ヲ僞リ召寄。誅戮ヲ加ヘラレハ、重ネテ味方ヘ降ル者アルヘカラス。備前會津ヲ頼ミニ存スル處。義廣用ヒ玉ハス。棹テキ舟ニヒトシク、漂泊シテ寄ル方ナク。別ニ異心モアルヘカラス。備前願ヒニ任サレ。領地ヲ可賜ト。兩人達テススムルニ依テ、政宗大内カコト口惜ク思ハレケレトモ、兩臣ノ諫ヽ難默止。片平助右衛門當家ヘ奉公スルニ於テハ、大内赦免アルヘキ旨ナリ、右ノ趣キ成實方ヨリ使ヲ以、早速ニ申シ送ル　偖鹽松當領主自石若狹宗玄ニモ、右ノ趣キ談話シケレハ、宗玄カ曰、

此義一段可然、鹽松領百姓等遍ク大内譜代ノ者トモナレハ。萬ツニ付氣遣ハシキコトノミナルニ。備前幕下ニ參ルニ於テハ、何ヨリノ堅メナリト。成實モ内々左思フユヘ、米澤ヘスヽメ申セシト。委細說談セシトナリ。此備前コト前々ヨリ武勇ノ家ニテ、家中ニ勇士餘多アツテ、近隣諸將ヘ度々戰フト雖トモ。一度モ後レヲトル事ナキ譽レノ勇士ナリシカ。政宗ノ盛威ニ碎レ、會津ヘ浪人シケルヲ、義廣重ク用ヒ玉フカ。左ナクトモ少地ヲ與ヘラレ、伊達田村ハ數年大内カ遺恨ト云ヒ。無二無三ニ心ヲ勵マシ、會津大内カ影ヲ以テ。何トソ本地ニ歸ント思ヒナハ、會津譜代ノ諸將ニモ異儀アルマシキヲ、義廣末々軍功ナク。思慮疎カニシテ、勇士ヲ用フルコト不能。結句侮之備前ヲシテ柄ナキ斧ノ如シナト嘲リ玉ヒシカハ。家中ノ若侍目鼻ヲヒイテ笑ヒシユヘ。大内無念ニ思ヒ　是非ナクカクハ申シヨリケリ。然ル處大内重ネテ成實ニ申シコシケルハ我等伊達ヘ申シヨルコト。モトヨリ隱密ニ預

ルヘキ處其隱レ無之世上ニモレシコト迷惑至極ナリ此ニ候ハヽ吾等切腹モ難計ト申シコシケレハ成實挨拶ニ別シテ他言不致白石若狭ハ當地小濱ニ居城セシムル處若狭ニ知セス候テハ。貴殿ノ執成不叶仍テ若狭ニ通達ノ外別ニ他言セサルノ由返答ス。其後此事不審ニ思シ處白石若狭所存ニハ。大内コト武勇ノ者ニテ先年田村取合ノ節モ隣國ノ加勢モ不受田村勢ト境目ニテ毎度合戰ニ打勝コト政宗存知ノ前ナレハ備前降參スルニ於テハ鹽松領ナレハ返シ賜ンハ必定ナリ然ハ我年比ノ領地ヲ上ラレ。取替ニ及ンハ口惜キコトナリ大内譽ヘ降參スルトモ。我ヲ頼テ奉公申スニ於テ左樣ノ沙汰モアルマシ兎角此コトヤソリナハ會津ニ於テ大内切腹スルカ。吾カ方ヘ便リテ申コルカ二ツノ内何レ外ルヽコト有マシト思案ヲ極く若狭方ヨリ間者ヲ以會津ヘウタハセケル故カク露顯ニ及ヒシトハ。後ニソツタヘ聞ケリ誠ニ頼ム木ノ下ニ雨モルトカヤ大内備前會津ノ住居氣遣ナレハ其年暮ニ義廣ニ暇ヲ乞片平ヘ引越シ越年シケリ翌年二月十六日片平阿古ケ島高玉三ケ所ノ人數ヲ大内定綱成實抱ノ地苗代田ヘ未明ニ押寄城内ニコモリシ百姓數十人打コロシ。物主本内主水ト云者腹キラセ同月下旬ニ成實方ヘ申シ遣シケルハ舊冬政宗君ヘ降參仕處御家中ニ表裏ノ者アツテ會津ヘ知セ候ニ付吾等切腹ニ及ヘキトコロ。會津ノ疑心ヲ晴サン爲智謀ヲ以テ漸々ニ遁レ候御家中ノ表裏モ静リ候ハヽ訴訟可致キ所存ナリ此趣キ聞分ラレ御免ヲ蒙リ奉公仕樣執成シ預度由又以云遣ハス成實返答ニ曰會津ノ疑ヲ避ル爲ナラハ吾等領地ノ内事切レハアルマシキニ本内主水迄腹切セラル事不得其意今更申シ直スヘキ樣無之由返答ナリ備前押返シテ申遣スハ。某兼テ成實ト別シテ入魂タルハ全ク本意ヲ以致スニ非ス會津表ノ沙汰ニ。大内片平成實ニ申合逆心企ルノ由其唱ヘ専ラナルニ依テ急難ヲ遁ン爲メ態ト貴殿ヘ手キレ致ス所ナ

リ、片平助右衛門味方ニ參リ候處、阿古ヶ島高玉ハ兩城トモニ持氣申ヘシ、御末廣ク成候事第一ニ候間。强ヒテ咎メ玉フヘカラスト。片倉ヲ以米澤ヘ相達ス。政宗ノ曰、大内兄弟當代田亂妨ノコト、口惜キ次第ナレトモ、片平助右衛門味方ニ屬セント申ス上ハ。大内赦免アルヘシ助右衛門奉公セルニ於テハ、大内分リハ仕ル間敷由ナリ 其趣備前方ヘ云遣ハシケレハ。片平コト近村ニテ四ヶ所賜ハリ候ハヽ、御奉公可仕由。望書ヲ以テ達スニヨリ 則望ニ任サレ、備前ニハ伊達ノ保原ヲ賜ハル、然ルニ助右衛門申シ達シケルハ、瀨上丹後コト勘氣赦免下サルヘシ。丹後コト某聟養子ニ相定メ。名代相續ノ約束仕ル處、若勘氣ノ免シナキニ於テハ、今更變替モ難成候ヘハ、滅亡仕ルトモ不及是非候間。頂戴ノ御判トモニ指返可申キニ付 何角御内談時移リ 廿日程過タル後瀨上丹後ヲ召出シ。赦免有テ片平カ望ミ相濟ケリ。斯テ片倉小十郎モ、二本松ニ來リ 成實ニ云合セ 大内片平ヲ相待ケル。此瀨上丹後ハ輝宗御代中野常陸逆。出頭無双ノ大進。威盛ンニシテ。一家中常陸カ心ヲ取。緣ヲ結ヒテ出入ス。依之威ニホコリ上ヲ輕ンシ。大有ヲ擅ニシテ。終ニ害心ヲサシハサミ。朝夕逆意ヲ計リ。諸士ヲ馴付ケテ賞祿ヲ施サント約スルコト。漸々ニ顯ハレ。誅罰ノ期ニ及ンテ、諸人同意ノ約ヲ飜ヘシ、討手勢ニ加ハリケレハ。威勢忽チ衰ヘ。片時ノ防戰モ不叶。散々ニ逃走ルヲ。爰彼所コリ搜シ。黨類ヲカラシ、常陸ハ後年召捕レテ石室ニ牢朽トナリシ。此中野常陸カ子ナルヲ以テ。斯ク勘氣ニテ居リケルナリ。然ルニ成實抱ノ地玉ノ井ト云所ハ。高玉ヨリハ其間四五里隔チタリ 玉ノ井近所高玉ノ山路ニ檜井澤ト云所ヘ。三月廿三日高玉ノ者トモ 亂入スヘキ企ナリ 其比マテ大内片平降參ニ極リケレトモ。味方ヘ手切レセサリシカ。同廿二日ノ晩。助右衛門阿古ヶ島ノ人數ヲ引ツレ、本宮ヘ來リ、明口玉ノ井ヘ敵妨スヘキ由、企ノ趣キ告ルニ依テ、成實本宮玉ノ井ノ人數ヲ引卒シ、 廿三日早朝ニ檜井澤邊

へ出ケルニ。敵敢テ來ラス。備ハ僞リナルカト、引取ントスル處ヘ足輕二三人玉ノ井ノ近所ヘ來リ、成實カ手勢ヲ見付ケ、早々ニ引上ルヲ、本宮寺臺渡戸ト云所ヘ追付テ相戰フ。敵退陣ト見ユルヲ、玉ノ井ノ者共手強ク仕掛ケレハ、敵崩レテ足並早ク退ク所ロニ、楯井澤ノ森ノ陰ヨリ隱レ居タル者トモ押切ント馳出ル依之味方少々崩レテ川岸迄押付ラレ、二三人討レケル。味方川中ニテ取テ返シ、備ヲ直シテ追合タリ。高玉太郎右衛門南陣ノ間ニ馬ヲ入レ、下知シケルヲ、成實カ小姓志賀三之助ト云者、小川ヲ隔テ鐵砲ヲ打カクレハ、太郎右衛門カ腰ニ中リ、馬肩モミ合ヲ打拔レ、馬ハシヤリニハネ上リ、眞逆サマニ落ケレハ、馬モ即時ニ倒レケリ。味方コレニ氣ヲ得テ、足並ヲ追返ス。實ニ又高玉方ニ大田主膳ト云大剛ノ者、踏止ツテ後殿スルユヘ、敵モ左ノミ崩レス。主膳小坂ヲ徐々ト乘上ルヲ、成實カ足輕志賀由三郎ト云者、二ツ玉ニテ上リ矢ニ打ケルカ、主膳カ乘タル馬ノ鞍ヲ打コホタレ、主膳ウツ風ニナリ我差タル小旗ナミキ、舍弟同采女ト云者ニサヽセ其身痛手ナレハ則退ク。采女兒ニ劣ラヌ者ナレハ、後殿ヲハシケレトモ、高玉大田手負シカハ、亂レ足ニ成テ逃行ヲ追討程ニ、首五十三打取ケリ。戰場地形アシケレハ、追捨テ人數ヲ揚ケル。則首ハ耳鼻ヲ缺キ、鹽ニ染メ米澤ヘ送リケリ。

大内備前米澤參向附石川彈正逆心之事

天正十六年三月廿三日、玉ノ井戰過テ成實二本松へ皈陣ス。大内片平米澤參降ヲ相待トテ、片倉小十郎モ二本松ヘ來リ逗留シケル處ニ。四月五日ノ晩、大内備前カ勢加治彈正ト云者景綱カ旅宿ヘ來リ。伯父備前今夜本宮ヘ參リ、明日片平助右衛門會津手キレ可致由申スニ付、成實景綱同道ニテ、六日早朝ニ本宮ニ於テ備前ニ會ス。大内申シケルハ、助右衛門コト不同意ニテ、降參申スマシキ覺悟ニ候ヘトモ、某カ爲ニ可參由申スニ付、片平ニテ如何樣ニモ可相成ト存シ極メシカトモ、ケ樣ノコトヲモ相違シ、御家ニ兎モ角御仕

置次第相果シ御憤リヲ休ント存シ、我等一人罷越候。此上ハ米澤へ如何樣ニモ執達アツテ、身ノ落居ヲキハメ頤ルヘシト歎キ入テ申シケレハ。成實・景綱カ曰。助右衛門逆變ノ儀。不及是非、貴殿僞ノ計策ニモ非ス其上身ヲウツテ降參ノ上ハ。今更米澤ニ於テモ口惜ク思ハルヘカラス。其段ハ吾々申シ直シ候半間。心易ク思ルヘシ、助右衛門ニテモ今コソ我意ニ任ストモ。未遂テ敵對モ叶フヘカラス、貴殿定テ其事モ計ラハレン。定綱カ曰夫ノミナラス。會津ノ疑心ハレ難ク候ヘハ。片平ノ地ハ會津ヨリ攻取ラレンコト必定ナレハ。往々ハ愚弟助右衛門モ當家へ降參不仕シテハ。身ヲ可治所ナケレハ、降參仕コト必定ナリ、成實カ曰當家奉公ノ手初ナレハ。貴殿敵地へ一當働カレ可然ト云ケレハ。定綱無人數タリト雖トモ、一働キ致サントテ。成實・景綱・白石若狹諸共ニ。阿古ケ島へ押ヨスル。サレトモ城中ヨリ一人モ不出合。依之人數ヲ打上。翌日又ヨスル處。先年鹽松ニ居住シケル石川彈正ト云者二本松落居已來。小手森ノ城主タリシカ。比日竊ニ相馬へ手ヨリテ身ヲ持替へ、白石若狹カ領地ノ内。手キレシテ火ノ手見へケレハ。若狹ハ則鹽松へ皈リケル。同八日小十郎大森へ皈リ。大内カ品々米澤へ達シケレハ 片平變替シテ隨身セサル段口惜ク、又大内カ申シ分モ不審ナレトモ。首ヲ延テ軍門ニ降ル上ハ。今更改ルニ及フマシトアリケレハ。依之大内ハ米澤へ伺候ヲ遂。目見申度旨ナレハ、成實則家來遠藤駿河ヲ差添テ。米澤へ遣ハシケリ、同十五日鹽松領白石若狹抱ノ地西ト云城へ。石川彈正早旦ニ押ヨセ。城ヨリ出ル者二三人討トル、コレヲ見テ城中ヨリモ出合テ戰ヒシニ。彈正追返シテ城へトリ付、首二十ハカリ取ル。成實モ二本松ニテ鐵砲ノ音聞クト等シク。早打ニテ駈付ケレトモ。時過テ跡莵着タリ。若狹喜ヒ色々ニ饗應シケリ。此石川彈正ト云者ハ。安達郡鹽松ノ城主山名左馬頭義久ノ家臣ニテ。大内備前ト傍輩ナリ。義久仕置アシクシテ。惡事長シクルニヨリ。家中

ノ者共一揆シ義久ヲ追出シ大内備前親ハ伊達ヲ頼ミ彈正久國カ親ハ田村ヲ頼ミ身ヲ置タリ。然ルニ伊達内亂ノ砌大内モ田村ヲ頼ンテ別シテ田村ヘ奉公セシ處ニ會津陣ノ砌リ片平助右衛門下中ト、田村右馬頭手ノ者野陣ニ於テ喧嘩セシ時大内備前右馬頭手ノ者ヲ成敗アルヘシト田村清顯ヘ訴ヘケレトモ承引ナキヲ憤リ其後大内會津ヲ頼ンテ田村ヘ義絶シ清顯ヘ度々弓矢仕掛シナリ、石川彈正久國カ知行モ鹽松ニテ田村領ナリ。清顯ヘ奉公忠勤怠リナカリシカハ先達テ大内退治ノ砌リ鹽松領數ケ所ノ城破ラレケレトモ石川カ所領ヘハ。政宗手サシモナカリケリ清顯遺言アッテ田村ノ仕置。政宗ヘ頼マレ。尤御子アラハ田村遺跡相續アリ度コシ遺命ニ依テ田村家中ノ者トモ何レモ政宗ノ御下知ヲ相守ル殊ニ清顯隨臣ノ者彈正ヨリ外ニモ寺坂・山城・大内能登ヲ始メ鹽松ノ者共何レモ伊達ヘ附屬セラル依之白石若狹ハ給主タリト雖トモ石川彈正ハ直參ニ仕ハレ小森ノ城主トシテ本領ハ不及云新知迄施サレシニ。其恩ヲ不顧。何ノ恨ニモナキニ相馬ヲ頼ミ、伊達ヘ敵對ニ及フ誠ニ不義ノ至リナリ。百目木ノ城ニハ。彈正カ父石川攝津久景。筑山ノ城ニハ彈正カ手勢ト。相馬ノ加勢ヲコメオキ。逆意ノ旗ヲ揭タリ。依之田村ノ家老田村月齋・橋本刑部此企ヲ聞テ白石若狹ヲ以テ早々御退治玉ハルヘキ旨米澤ヘ訴ヘケリ

田村內亂附大越紀伊心替・相馬加勢之事

田村大膳大夫清顯盛胤ニハ妹聟義胤ノ爲メニハ伯母壻ナリ。清顯ノ一女ハ。政宗ノ内室陸奧守忠宗母堂。松島陽德院殿是ナリ。清顯一女ハカリニテ男子ナシ依之近郷敵戰ノ時節ナレハ政宗ヲ聟トシ出生ノ子ヲ田村ノ主ニセントノ思慮ヲ以テ。政宗ヲ聟ニセラレタリ。然ルニ天正十四年十月十八日清顯頓死シ玉ヘリ兼テ田村ノコトハ清顯ノ遺言ニ因テ政宗ノ下知ニ任サレント。一族家臣ニ至ルマテ。衆議一同シテ有ケル處ニ政宗内室ト間中不和ニシテ視シカラス、

其故ハ片倉小十郎姉ハ。輝宗ノ妾ニシテ。政宗ノ母堂ニ等シク威ヲフルヒケルカ。此姉政宗ヘ折々內室ノコト讒言セシ故ナリ。又別ニ異事モアリシトカヤ。故ニ清顯卒去ノ後。三春ノ城ニ清顯ノ後室於北殿オハシマシ。家中萬事指引ハ。田村梅雪・同氏右衛門。橋本刑部四人。評定ヲ遂トリ行ヒ。事大事ニ及ヒ一決シカタキハ。米澤ヘ伺。政宗ノ下知ヲ受テ落居シケリ。然ルニ右ノ如ク政宗御夫婦ノ間。疎マシク心ヨカラヌコトノミナレハ。後室於北殿恨之憤リ。音信モ遠サカリサナカラ不和ノ如クナレハ。田村家中ノ輩モ。斯テハ行末如何アラント嗟嘆トリトリナリ。田村月齋。橋本刑部。後室ヲ諫メテ曰。伊達殿御夫婦間ノコト。內々ノコトニテ今更改メテ計フヘキ樣ナシ。大殿御遺命ノ通リ。萬端米澤ヘ打掛御賴ミ有テ。末々御子アラハ田村ノ家督ニ立ラルヘキ旨。遺命ニ候ヘハ。米澤ヨリ義絶アランハ格別。此方ヨリ中絶ノ義ハ。曾テ有マシキ御事ナリ。尊遺命無之トモ。是非トモニ伊達ノ合力ニヨラサレハ。當家ヲ永ク保ツコト不能。第一田村全キ謀ナリ。其故ハ政宗若年ト申セトモ、義ヲ守リ約ヲ變シ玉ハス。イサヽカ表裏無之故ニ。近將モ田村ノ慮ヲ寛フコト不能。コレ偏ニ伊達ノ威力ニヨレル者ナリ。御夫婦御不快ノ義ハ。暫時ノ不和ニシテ。取上ルニ不足。其上此方ヘサセル遠間モ非ス。其シルシモナキニ雜說ニ驚キ。恨ヲ懷キ義絶ノ御催シアランハ。却テ禍ヲ招ク端ニテ候ヘ。自今前々ノ通リ。御和睦ノ交通アルヘシト。兩人評談シテ於北御前ヲ宥メ。家中ノ浮說ヲ靜メケル。然ルニ田村梅雪ト同氏右衛門打ヨツテ內議シケルハ。後室ハ讃岐守顯胤ノ息女ニテ。大膳大夫盛胤ノ妹。當長門守義胤ヘハ伯母君ノコトナレハ。タトヘ伊達ヘ義絶ストモ相馬ヲ賴ム時ハ苦シキコト更ニナシ。世上政宗ノ擧動文武二道ノ大將ト皆人稱美スト雖トモ。イマタ年未タ二十ヲ不越。專ラ頓智ヲ憑ンテ。軍法ノ駈引分チナク。血氣ニ任セテ人ヲ侮リ。ムサムサト强ミニ越テ。動モスレハ自身先登

シテ太刀打ヲ好ミ、雜兵歯武者ノ振舞、眞ノ大將ト頼ミ難シ。其上佐竹・會津・岩城・仙道、皆々武功ノ諸大將ニ中違ヒモアレ、伯父甥ノ從弟一人トシテ敵對セスト云コトナク、譜ツ味方人ト云コトナク一タヒ後レトルニ於テハ、タトハ討死ニハ不及トモ、大敗ヲ仕出サレン、御夫婦ノ中不快ナルモ、家齊ハヌ表事國家危キ基ナリ。然ハ末頼ミナキコトナレハ。所詮相馬ヲタノミ、佐竹最上ハ内應シ、後ヲ固フシテ田村ヲ持抱ンニハ如シト内議シケル、依之表ハ米澤ヘ從ツ躰ニモテナセトモ、内々ニハ相馬ヲ頼ミ、密カニ此事ヲ謀リケレハ、四家老ノ間モ上ハ一ツニシテ、底意二ツニナリ夫ヨリ家中コリノ〳〵ニ分レ、月齋刑部梅雪右衛門方トテ各個々ルヲ友トシテ、義ニ進ミ又非義ニ組シ。善ニ睦マシキヲ味方トシ、疎キヲ以テ敵トス、一笑ノ中ニ偏ハ、僻ゝ淺マシカリシコトトモナリ、元來後室於北御前ノ思慮ニモ、舍兄相馬盛胤ハ田村ヲ附屬セラレナハ、末々ノタメニモ可然トノ心ナリ。コレニ同意ノ一族ハ、田村梅雪・子息右馬頭・同右衛門・大越攝津守・同嫡子紀伊守・石川攝津守・同嫡子彈正ヲ始メ。其外諸士二十人ハカリナリ、又政宗ヘト志ス輩ニハ門澤左衛門・石澤修理・田村月齋、是等ヲ始メトシテ。前方清顯ノ思ヒヨラレシ如ク、家筋トイヒ威勢トイヒ政宗ヘ附屬セテハト各此議ニ一決ス、又清顯ノ御舍弟田村善九郎ノ子息孫七郎十六歳、コレヲ取立テ、田村ヲ相續サセント存シ含ム輩ハ、鹿山兵部・田村宮内・橋本刑部等ナリ、如此各存念アリケレトモ、時ノ威勢ニ恐レ、上ハヘハ伊達ヘ志アル樣ニハ見ヘタリケリ、然ルニ各談合シケルハ。田村ノコト兎角末々ノ爲、相馬ト伊達ヘ内意ヲ伺ントテ。マツ孫七郎一人ハカリノコトヲ伺ヒケル。然リト雖トモ後室政宗ヘ憤リ深ク、一族老臣ニ向ツテ、此コト沙汰シ玉ヘハ、何レモ難澁ニ及ヒケレトモ。面々ノ意ヲ遂ケ難ク。後室ノ心ニ同意シテ申シケルハ。田村領ヲ政宗ヘ進セタリトモ。只今ノ如キ御夫婦ノ御中ニテハ、末々ハ娘モ無

キカ如クナリ玉フヘシ、然ル上ハ後室ノ御爲ニモ不レ可レ然、尤モ諸士モ本意ヲ失フナリ。又孫七郎殿ヲ立タリトモ政宗遺恨ヲ取カヽリ玉ヘハ、其威ニ應シ、須賀川白河モ異心スヘシ。然ル時ハ田村ノ一分ニテ敵對センコト難カルヘシ、只相馬盛胤ヘ属セハ。後室ノ爲家中ノ爲アシキコト不レ可レ有、相馬ト田村ト一和セハ政宗ニハ勿論、他將ノ人々モ田村ヘ思ヒヨルコト不レ可レ成ト評談シテ、中ニモ無二ト思ヒヨルハ、田村梅雪・同右馬頭・大越父子各一同シ。是非々々相馬ト評議シタリ。同年四月末、引地伊賀守ト云者ヲ、後室ヨリ使トシテ盛胤ヘ申サレケルハ。和人見舞ト有テ御供二三騎ニテ、三春ノ城ヘ御コシアルヘシ、萬ツノ苦勞ヲ聞セ參ラセテ、心ヲモ慰メ侍リタシトナリ。此伊賀守ハ後室ノ使ニテ兼テ相馬ヘ往參ノ士ナリ、其コロ盛胤ハ北郷田ニ在城ナリ、伊賀ヲ奥ヘ招カレ、隱密ノ直談アリ。知ル人ナシ。サテ伊賀翌日田村ヘ皈ル。即日盛胤ハ供ノ騎士ヲ具シ、小高ヘ入來アリ、義胤ヘ密談アル。此コトモ其故ヲ知ル人ナシ。後ニ聞ヘシハ盛胤五六騎ニテ、後室ヘ見舞ノ爲、三春ノ城ニ入玉フニ於テハ。梅雪父子二人・紀伊守兄弟三人・石川彈正・田村彦七、何レモ大身ナリ。此外相馬ヘ志ス諸士云合セ、登城可レ致。若シ月齋・刑部等違亂アラハ。即時ニ打果スヘシ、其外モシ從ハヌ者トモアラハ。一々ニ打果シ。相馬ト田村ト一味セハ政宗何ト思ハルヽトモ、手サシ不レ可レ成ト。內談申シ來リシトコソ聞ヘシ。然ルニ盛胤入來ナク、義胤參ラレシ故、コト相違シタリト、後日ニ此ノ事沙汰シケリ。未タ其コト顯然ナラサルニ。石川彈正ハ先達テ白石若狹預リノ西ト云所ヘ伏勢ヲ入レ。伊達ヘ手キレヲ始メケリ。又後室方人ノ其一人タル大越紀伊守、彼ハ田村一門ニテ。相馬義胤ノ從弟ナリ、田村ニ於テ一二ノ大進ナリシカハ。政宗ニモ兼テ懇切ト云、清顯卒去ノ後、田村領地ノ掟等、宜シクトリ行フヘキ由任サレケル。然ルニ此度野心ヲハサミ。梅雪ヲ始メ其外數輩云ヒ合セ。田村ヲ背キ伊達ヘ敵セ

ント相馬ヘ内應シテコリヨリ叛逆ヲ企ケル田村月齋・橋本刑部此由ヲ傳ヘ聞、白石若狹方ヘ申シ越シケルハ大越紀伊主恩ヲ忘レ内々相馬ヘ申シ合セ叛逆ノ企事然ニ候、其上徒黨ノ者餘多ナレハ、其儘指オクニ於テハ田村ノ騷動不料。宜シク御計ラヒアルヘキ由注進ス、依之則米澤ヘ告達ス、政宗ノ曰、大越コトハ田村一門ト云ヒ、異心可企者ニ非ス、頃日田村内方區々ニシテ物騷カシキヨシ、其弊ヘニノツテ虛說有ンモ難計。再應ニ實否ヲ正シ、能々眞僞ヲ究ムヘキ旨伊達成實ニ命セラル、依之成實家來内ケ崎右馬之助ハ、紀伊ト一族ノ大越備前ニ、久シク懇意ナル故リレヲシテ右馬之助ヘ呼ヨセ、成實自ラ右馬之助カ宅ヘ參リ、備前ニ對面シテ内々紀州ヘ直々談スヘキ事ナレトモ、カヽル大事ノ義、有ノ儘ニ申サンハ無遠慮ニ似タレハ。其方一族ノコトナレハ呼ヨセ候ヘトテ、政宗ノ内意シカ〳〵ノコト共云渡ス、備前立皈テ紀伊ニシカ〳〵ト語リケレハ、紀伊如何思ヒケン、三春ヘ出仕ヲ止メ、居城大越ニ引籠ル、依之月齋・刑部方ヨリ使者ヲ以テ尋ネケルニ、始メ一兩度ハ兎角會釋シケルカ、使シキリニ及ヒケレハ、紀伊挨拶ニハ三春ヘ出仕致スニ於テハ、クセコトタルヘキ由。成實ヨリ申スニ付、偖コソ引コモリ候ト答ヘケル、月齋・刑部大ニ驚キ、成實方ヘ紀伊心替リノ義、足下ヨリノ事故ト承ル、此義如何ト不審ノ由申シコシケレハ、成實返答ニ、夫ハ無跡方。大越カ詭計ニテ候ハン、田村御内何トヤランムツカシキ樣子承リ及ヒ候故、コロシク相靜メラルヘキ由、異見申シ遣ハシ候ト答ヘケレハ、此趣キ則紀伊方ヘ云遣ハス。紀伊返答ニ、然ラハ定テ右馬之助カ備前カ兩人ノ内、何レカ聞違シコトナルヘシト云返スニ付、鬼生田ト云所ニテ。大越備前ト内ケ崎右馬之助對決シテ。備前カ曰、成實ヨリ其方ヲ以テ三春ヘ出仕申スマシ。出仕アルニ於テハ、身ノ爲宜シカルマシキ由、御知セニ候間、有ノ儘ニ紀伊ニ申シ通スルトコロナリト云々、右馬之助聞テ、夫ハ跡方モナ

キ虚言ナリ。マツ其節成實申セシハ、清顯御卒去以後、田村主ナキニ因テ、御家臣打寄テ先法ノ如ク仕置宜クトリ行ヒ若コト徐ラハ當家ヘイロヘ可申段、御遣言ヲ以テ何レモ安堵ニ可有之トコロ。却テ徒黨ヲ結ヒ僻ヲサシハサム族有之由。風聞ニ付、家老ノ面々別シテハ紀伊殿一門トイヒ。大進ナレハ諸談合アツテ御領中全フセラルヘシ。此コト成實一身ノ才覺ニ非ス政宗底意同前ナリ。少々不快ノコトアリトモ。述懐ハ私事ナレハ。田村相續ノ計ラヒ。第一ニ怒リヲ抑ヘ、憤リヲ靜メ。公私穏便ノ沙汰可然カ。虚聞ニ從テ不慮ノ雜說アツテ、紀伊殿コトモ不審ノ唱ヘ。政宗耳ニモ立ト雖トモ。爭テカ左樣ノ事アルヘシト、別シテ賴ミ存スル由、能々内意可申旨、米澤ヨリ申シ來ルニ付成實直々私宅ニ於テ申シ渡ス。其時某其方ヘ自分ニ申シ候ハ ケ樣ニ申渡サル義、紀伊殿コト無二心許ニ存シテノ義ニ非ス、田村御家ノ爲メ。次ニハ紀伊殿當家ヘ御懇切タルニ依テノコトナリ。此上ナカラ紀伊殿御存分逆ヒ候ハヽ御出仕御無用トハ申候、爭カ三春ヘ出仕ニ於テハ、身ノ爲メ惡ク候ハントハ申スヘキト云ケレハ。備前閉口シテ、トカクノ挨拶ナカリケリ、右馬之助重ネテ申シケルハ。成實麁忽ニシテ出仕無用ト申遣ストモ、田村一族ノ身トシテ。何ノ仔細モ聞屆ナク。主君ノ城ヘ出仕ヲ止ラルコトサラサラ心得難キコトナリトカクハ雜說ノ通リ。逆心ニ疑ヒアルマシト云ケレハ、備前何偏我等承リ損シト相見ヘ候トソコソコニ云捨テ歸リシカ、之ヨリ紀伊ハ出仕夫々ニツトメケルカ、忍ヒ々々ニ謀計止コトナシ、依之一門家老又以テ會合シ。評議シケルハ清顯君ノ遺命ナレハ伊達殿ヲ賴ミ入コト本意ナレトモ、於北殿オハスレハ相馬賴ミ可然義アルニ於テハ。何レ宜シキニ付テ。田村相續第一ナレハ。皆々心ヲ殘サス評議ヲ遂ヘキ旨ナリ群臣皆心中ヲ明シ兼、口ヲ閉テ誰云出ス者ナク暫ク猶豫シテ見ヘタリ。時ニ常盤伊賀ト云者ス丶ミ出テ云ケルハ。歷々ノ會合ト云ヒ、列座皆

發言モナキニ某愚案ノ身トシテ卒爾無遠慮ノ至リナレト亡君ノ遺命ヲ引違ヒ相馬ヲ頼マルヘキハ更ニ心得難キコトナリ。清顯君ノ御爲ニハ政宗ハ眼前ノ御讎、義胤ハ叔甥ノ因ミナリ。ヨシ夫ハトモ角モ御遺言ト云ヒ且ツ伊達殿ニ何ノ違亂モナキニ今改メテ義絶シ相馬ヲ頼ミ伊達ヘ手ヲヤランコト石ヲ懐テ淵ニ沒シ油ヲソヽイテ火ニ入ルニヒトシ。コレ國家ノ騒動ノ自ラ招ク者ナリ。殊ニ伊達ハ先祖代々武勇ノ家ニシテ筋目トイヒ武略トイヒ近國無双ノ政宗殿、誰カ此下知ヲ受テ不足トセン。其故ハ會津仙道ノ諸大將昔敵ニトツテ合戰及數度ト雖トモ敵中ニ挾ツテアリナカラ終ニ後レヲ不取コレ君臣一致ニシテ賞罰正シク軍法嚴ケナルニハナリ。然ルニコノ人ヲ差置キ義胤ヲ頼マレンハ偏ニ禍ヲ招ク元ニシテ全ク國家相續ノ謀ニアルヘカラス。凡武士タルノ道ノ專ニシ守約ヲ無二心節ニ臨ンテ命ヲ捨ルコソ士ノ本心ナリ。今事モナキニ亡君ノ遺命ヲヤフリ、伊達殿ヲ押除ケンコト、只國家ヲ亂シ、笑ヒヲ招キ耻ヲ萬人ニ殘サントノコトニテ候ハン。去ナカラ相馬殿ヲ頼ミ宜シキ道モ候ハヽ、御家ノ爲ニ候ヘハ、幾重ニモ各存分ノ評談アルヘシト云ケレハ。一座否ト云者ナク、心ニ合モ不合、伊賀ノ詞誠ニ至極ヲ盡セリ。尤遺命通リ可然ト同シケレハ其日ノ評議落居シタリ。然レトモ佐竹。岩城。會津。仙道。相馬方ノ浪人トモ、田村右衞門・大越紀伊等ニ徒黨ヲ結ヒシ輩ハ、政宗ヲ頼ミテハ末々身ノ上大事タルヘシ。只諸將ノ多勢ヲ力ラトシテ義胤ヲ頼ミス、相馬ノ太刀影ヲ以テ田村ヲ手ニ入レナハ永々取立預ラント、奸曲邪知ノ者トモ言ヲ巧ミニシテ、内々於北殿ヘ申スヽメシカハ、後室モ元來相馬贔負ノ事ナレハ、悅喜限リナク。宜シク謀ヲ回ラスヘキ旨語セラル。依之後室ヨリ相馬ヘ申シ越サレケルハ、石川彈正相馬方ニ成リシコト、顯然タル上ハ、政宗彈正ヲ退治セント、米澤ヲ立テ不日ニ田村ヘ發向アルヘシトノ説ナレハ。加勢アッテ彈正ヲ

ミツキ煩リタシト、後室ノ飛札申シ來ル義胤ノ返札ニ此度彈正ヲ見續スンハ。政宗ヲ恐レテ日來ノ盟約ヲ空クスルコトニ成ルヘシ。四方ノキコヘモ恥カン。彈正ト共ニ家ヲ穢ストモ無是非。加勢申スヘシトナリ斯テ人數ヲ催促アッテ義胤旗本四十騎餘。岡田兵衞大夫三十騎餘、小高ヲ出馬有テ。彈正カ月山ノ城ニ到着シ籠城セラレタリ、殘リノ人數ハ。伊達ノ樣躰ヲ見テ左右アルヘシトナリ。彈正ヲハ小手森ニ籠ラセ、月山ノ城ハ相馬勢バカリニテ持固ム。小手森ハ彈正カ知行ナリ。此度政宗ト極運ノ勝負アルヘシトテ。相馬ノ惣人數ヲ引卒セリ、マツ田村右京大夫城ニ泉藤右衞門胤正相馬中郷ノ士四十餘騎ニテコモル、田村彥七居城ニハ泉田雪齋、標葉相馬組五十騎餘。石川攝津守居城百目木ニモ相馬勢二十騎ハカリ。舟引ニハ靑田不曲コレハ靑田山城弟浪人シテ田村ヘ來リ、釘山ヲ知行シケルヲ此時免許セラレ。標葉ノ徒ヲ相加ヘテ城代ニ置レタリ。又紀伊守ハ手勢六百餘人ニテ。大越ニ籠城シタリ。如此人數手配アッテ。義胤モ月山ニ籠城ナリ。然レトモ如何思ハレケン。政宗出陣ノ沙汰ナカリケル、

安積表再亂之事

天正十六年四月、大内備前守定綱、米澤ヘ降參セシムルニ依テ。會津須賀川牒シ合セ。安積表ヘ出陣ノ由其聞ヘアリシカ成實大森ヘ羽書ヲ飛シ、小十郎ニ告ケレハ。景綱又米澤ヘ注進ス。政宗ノ曰。會津須賀川兩勢バカリナラハ。サノミ多勢ニアルベカラス、最上方仕置ノ爲出陣中ナレハ若シ佐竹岩城方モ出陣ト聞ヘナハ。早々ニ注進スベシ。サナクハ成實景綱兩人ニテ宜シク相計ラヒ。本宮ニ於テ防戰スヘシ。勝利疑フヘカラストテ伊達信夫ノ勢早々馳參ルヘキ旨、廻文ヲ差下サル。然リト雖トモ事急ニシテ士卒未タ不馳着。成實景綱ト兩手ノ人數バカリニテ。本宮ヘ出陣ス高倉ヘモ加勢セント計リケレトモ。無勢ニテ人數分チ難シ。然リトテ其儘ニ指置ンハ計不足ニ似タリトテ。成

實家中八丁目ノ者トモ馬上二十騎鐵砲五十挺其外片倉ヵ士卒少々指添加勢トシテ高倉ノ城ヘ遣ハシケル然ル處城主高倉近江本宮ノ本陣ヘ來リケレハ成實敵ノ容子ヲ問近江カ曰我等元會津譜代ノ者ナレハ會津仙道ノコトハ委シク知レル所ナリ此度ハ會津勢ト須賀川ノ士卒バカリニテ人數千騎ニハ過ベカラス然モ會津須賀川トモニ境目ノ者トモナリ成實カ曰明日ハ敵何方ヨリカ可働近江カ曰敵モ小勢ナレハヨモ深入ハ致スマシ大形高倉ヘ寄來ラン成實景綱ヵ曰然ラハ我々軍兵ヲ觀音堂ヘ上セ容子次第高倉ヘ助ケ入リ可働敵若シ本宮ヘ押寄セハ此勢ハ城ニ籠リ敵觀音堂ヘ備ヲ立ハ其時士卒ヲ出シ弱々ト扱ヒ町口迄敵ヲ引付可戰羽田右馬介成實家臣ニ軍勢ヲ付先陣ニ進マセ後陣ハ小十郎手勢ヲ以テ跡ヲオサヘ成實軍兵合戰ニ不構觀音堂ヘ押キル樣ニ横合ニ驅出ヘシ然ラハ敵ノ後陣足並亂レ備タヾヨフヘシ其時高倉勢取掛テ敵ノ跡ヲ切崩サハ即時ニ勝利ヲ得ン然レトモ高倉ハ城高クシテ四方ヲ見定ムルニ足レリ彼城ニ物見ヲ置敵高倉ヘ寄セハ西ニ狼煙ヲアケ本宮ヘ寄スト見ハ。東ニ放火ヲ上サスヘシ軍談決定シテ近江ハ高倉ヘ皈リケリ同十八日成實景綱軍兵備ヲ押出シ遠見スル處ニ高倉ノ西ニ火ノ手揚ルサテハ敵高倉ヘ寄ルソト觀音堂迄打下ロセハ又東ニ相圖ノ火見ルニ付サテハ本宮ノ働キト引返ス景綱カ曰進退ニ時移リテハ勢ヒノ妨ケナリ。コヽニ備ヲ立テ。敵ヲ待受ケ合戰スヘシト云ケレハ成實可然ト同シ則備ヲ立直シ士卒ヲ下知シテ待處ニ會津勢ハ先ツ片平ヲ攻ント向ヒシトコロ助右衛門ニ心ナキ旨陳謝シテ質ヲ出セル故不及其儀夫ヨリ直クニ本宮ノ觀音堂ニ打出シカハ成實景綱トモニ敵陣ヲ見渡ストコロ、先ニスヽムル武者ノ旗ハ正シク鹿子田右衛門ト覺ヘテ足輕四五人引具シタリ其跡ニ引下リテ大勢段々續タリ成實物頭石川彌平ニ向テ御邊ハ元來二本松家ノ人ナレハ鹿子

田トハ累年ノ朋輩ナレトモ。今ハ互ニ敵味方ト隔タリ君命ニハ私ノ親交ナシ御邊眞先ニ馳向ヒ、暫ク會釋シ靜々ト引退ヘシ敵其勢ニ乘ナカヽリ來ラハ、相莵リニ馳合テ勝負ヲ決スヘシトテ。鐵砲少々彌平ニ相添シカハ。石川頓テ馳向ヒ、鐵砲ヲ打掛タリ。鹿子田進テ寄セ來ルヲ。彌平少々アヒシラヒ、合圖ノ如ク引退ク、コレヲ見テ鹿子田ヲ始メ須田小十郎・新屋敷平左衛門以下大勢打續テ觀音堂ヲ見渡シニ我劣ラシト進ミ追フ石川兎角會釋シテ觀音堂ノ下迄引寄スル處ニ。成實景綱左右ニ分レ一度ニ突テ蒐レハ。會津勢一タマリモ溜ラス。崩レカヽル、成實カ先鋒羽田右馬介追詰追詰戰シニ敵七八人取テ返シ、既ニ危ク見ヘシ處ニ、右馬介カ小姪佐藤文九郎ト云者。押隔テ戰フ右馬介モ力ヲ得テ、四方ニ當テ戰ヒシカ文九郎ハ討レケリ。小十郎ハ備ヲ亂サス。ヒタ〳〵ト責討ハ。會津方人取橋ヲモ逃コヘテ、橋ノ向フニ纒ヲ立テ。踏止リ備ヲ立ル備又其日ノ働キニ。前田子勘五郎ト云者

ハ。政宗ノ小姓ナリシカ。聊カノコトアッテ。勘氣ヲ蒙リ。成實幕下ニアリシカ。此時無比類働キ。敵味方ノ間ヲ乘切士卒ヲ勵マシ戰フ處ニ馬ノ太腹ヲ槍ニテ突レ叶ハシト歩立ニ成テ働キ、鐵砲ニ中リケレトモ淺手ナレハコトトモセス。槍ヲ以テ突テマハリ馬上首二ツ取テ成實ニ見セタリ。敵又備ヲ進メ、競ヒ討ヲ伊達勢又觀音堂ヘ押返サル。サレトモ手坂右近介・石川彌平等返シ合セ、オシ來ル敵ヲ押縮ム、成實モ後陣ヲカヘテ責カヽレハ。オシ來ル敵ヲ押縮メテ人取橋迄追ツケテ首四十級ヲ得タリ、味方八十三人討レケリ會津勢此合戰ニハカニテ返シ合スルコトモナク軍兵ヲ引上テ、片平助右衛門叔母ヲ人質ニ取テ、則會津ヘ引入ケリ、定ニ大内カ申セシ如ク。備前米澤ヘ属スルニ付。會津ニテ片平ヲ疑フ故、伊達ヘノ弓矢ハ首尾合ノミニテ。片平カ違變ヲ探ン爲ナリシトカヤ。成實頓テ人數ヲ班メ。二本松ヘ皈陣シケレハ。小十郎ハ米澤ヘ參向シ軍ノ次第披露シタリ。政宗對面有テ成

宮景綱ヲ軍功ヲ賞シ。且ツ前田子助左郎ヲ勘氣赦免アツテ四月廿九日富左郎米澤ヘ歸參シケリ。

政宗鹽松出陣并宮森在陣之事

田村三春ノ城ニハ石川彈正逆心ニ因ト　政宗早々出馬アルヘシト思ノ處ニ無沙汰。會津須賀川ノ勢本宮ヘ入ルニヨリ出馬ナク。成實景綱ヲ指向アレ。會テ出陣ナクトモヨリ。ハ田村月齋橋本刑部南八方ヨリ　自石川彈正ノ類ニ米澤ヘ申シケル石川彈正叛逆ニ依テ。田村家中物騷上下心ヲ動シ候條。急キ御出馬アツテ彈正御退治。田村御恙ナキ樣ニ頼言相達ス。政宗此出馬アルヘキナレトモ。今コロ最上ヘ不和ニ付。境目ニ大身ノ者ナキニ依テ。米澤表ノ武者ハシケク遠ニ出陣難成由御返答アリ月齋刑部早使ヲ馳テ申シケルハ。御出陣ナキニ於テハ田村ハ當午相馬ヘ心ヲ傾ケ候ヘハ不日ニ三春ハ義胤ノ有ニ成サレ　永ク敵地ト成候ハヽ、畢竟伊達ノ御弓矢甚衰薄キニ似タリ　且ハ亡主ノ遺命モ立難ク。甚シク埓ヘノレンコト無本意仕合ニ候ヘハ。急ニ御出陣奉乞旨。再三ニ及ヒケレハ。不得已天正十六年四月廿四日。政宗自ラ米澤ヲ打立玉フ先鋒ハ櫻田右兵衛弘國。二陣原田左馬助宗長。三陣國分彦九郎盛重。本陣ニハ亘理美濃重宗。田手助三郎義久。黒木肥前宗久。村田刑部宗友。飯坂右近宗季。富塚近江仲綱。茂庭石見綱元ヲ始ク　伊達信夫永井ノ軍兵五千餘騎ナリ。翌日伊達ノ大森ヘ着陣。小十郎待設ケテ饗應ス　此所ニ五六日逗留有テ　名取宮城國分伊具亘理刈田柴田ノ人數ノ内　所々ノ境目ヲオサヘシク　其ノ外ハ軍兵ニ相加リ　同廿九日鹽松ノ築館ヘ出陣アル　石川彈正カ老父石川攝津守ハ　百目木ノ城ニコモリ居タリ　コレハ相馬境目ナリ。義胤ハ彈正加勢トシテ。月山(築山トモ)ニ先達テヨリ籠城ナリ。石川彈正ハ小手森ニ移リ籠城ス。此小手森ハ政宗鹽松退治以來恩ニ施サレシ所ナリ　伊達勢ハ築館ヨリ小手森ヲハ南ヲサシテ押通ルヲ　城中ヨリ鐵砲數十挺打カケル、サレトモ伊達勢不ニ取合シツ／＼ト通リケレハ　其日

ハ別義ナカリケリ。成實ヲハ仙道口氣遣ハシク思ハ
レケレハ其夜二本松ヘ皈サル。翌日ヨリ毎日迫合ハ
アリケレトモ、連日雨天晴間ナク。合戰モナカリシカ
ハ政宗軍兵ヲ宮森ヘ入ラレ、先々米澤ヘ皈陣ノ由唱
ヘケレハ月齋刑部大ニ驚キ急キ白石若狹ヲ以テ。此
度訴訟相調、御出馬ニ付、田村ノ諸士安堵仕リ。諸人喜
ヒニ不絶。然ル處只一日ノ迫合ハカリニテ。米澤ヘ御
馬ヲ入ラレ候ハヽ、田村逆心ノ者トモ。モハヤ御再陣
アルマシト存、皆々相馬ヘ便リ候コト無疑候。然ハ傘
日義ヲ専ニ重ンシ志ヲ立候者トモモ、無是非ニ義胤
ヘ申シ寄ル外ハ有之マシ。其期ニ及テハ月齋刑部滅
亡程ナク田村三春ノ城義胤手裏ニ入リ候ハヽ、昨日
迄治ニ置臣ノ所望ノ霧ニ落ハレ御手自然ト狹マリ
テハ。末々御本意ノ如ク參リ候トモ。敵地ヒロクナリ
テハ、暫ク御手間トラレ、重ネテノ御出馬ハ軍勞ノ費
不少候間、宮森ニ御在陣ノ內田村ノ是非御付ラレ候ハ
ハ亡主清顯モ貴殿ノ本望タルヘシト、達テ訴訟申ス
ニ付若狹方ヨリ原田休雪。伊東肥前・片倉小十郎迷ニ
達之原田カ曰。田村兩臣訴訟尤ナレトモ。當時宮森
滯留ノ間、最上境ニ不意起ル時ハ、行程ハルカニシテ、
シカモ大山ヲ越行ケハ、急變救フコト叶ヒ難シ。最上
ヨリ永井ヘ亂入セシメハ。永井ノコトハ措置、米澤迄
危キコトナラスヤ。本ヲ勤メテ末ヲ知ルトカヤ。近キ
愁ヒヲ捨テ。遠キヲ計ルコトハ如何アラント云ケレ
ハ、景綱カ曰、遠近ノ謀ト云ハヽ、石川彈正逆心ニ因テ。
鹽松領內ニ在ナカラ、相馬ヘ奉公ス、大越紀伊モ田村
ニ有テ逆意ヲ企、義胤ノ馬ヲ引入ントス。田村中ニハ
疑心ナコリ將士時ヲ伺フコト。深淵ニ臨ンテ薄氷ヲ
フムカ如シ。コレヲコソ近キ愁ヒト申スヘシ。最上勢
氣遣ハ尤ナレド。去年春鮎貝太郎山形ヘ內通ノ刻ミ、
出奔以後、義光永井ヘ出馬アルヘキヨシ、米澤永井ニ
於テ。ヒタスラ唱之トイヘトモ。今ニ義光ノ出馬ハ
不及申。軍將ノ一人モ境目マテモ出張致セシコトナ
シ。去ナカラキハメテ出馬アルヘシトモ申シ難シ、カ

カル折ヲ伺テ義光出陣候ハヽ、体等ノ申サル如ク危キコトニハ候ヘトモ、然リトテ米澤ニバカリ御引コミ候テハ田村ノ亂ハイツトテモ救フコト叶ヒ難シ

一最上ノコトハ未タ目ニ見ヘヌコトニテ。田村ノ亂目前ノウレヒナリ、トニ角面々ノ存分ヲ以テ大將ノ賢慮ニ任スヘシト相談シ此旨政宗ヘ達シケレハ、最上境心許ナキコトナレトモ。月齋刑部兩人カ訴訟モ默止難ケレハ暫ク宮森ニ在陣アツテ田村ノ仕置アルヘキ由ナリ依之若黨方ヨリ兩人ニ此旨ヲ告知セケレハ月齋刑部限リナク喜ヒ急キ田村ヘ皈リケリ宮森ニ在留ノ内仙道日ニ高倉日巡見有ヘキコシニテ、五月十一日前田澤迄出馬アリ所々無殘巡見アツテ。其間ニ宮森ヘ皈城セラル。

伊達秘鑑巻之二十終

伊達秘鑑巻之二十一

東奥仙府　無々軒　編集

相馬義胤竄入三春城事

石川彈正・大越紀伊叛逆ニ付テ、田村月齋。橋本刑部米澤ヘ訴訟相叶ヒ政宗出張アッテ、宮森ニ在陣ナリ。相馬長門守義胤ニモ出馬アッテ、月山ニ籠城アル、コレ偏ニ田村ヘ手キレト思ヒ、月齋刑部内談シテ、ケ樣ノ折柄ハ色々表裏モアルコトナレハ、シハラク後室於北殿ヘ相馬ヨリ音信無用ト可斷。尤モ相馬バカリ左可計モ如何ナレハ伊達ヘモ同樣ニ斷リ置クヘシ、政宗ヘ對シ非本意コトナレトモ、表向キノコトナレハ、相馬ヘノ響キノ爲可然ト内議シ、一族譜臣ヘモ談シケレハ。各尤ト一同シケレハ、伊達相馬双方ヘ使ヲ以テ、カヽル騷動ノ時節ハ、表裏内亂モ難計候間、當所一亂決候迄ハ。三春ノ城ヘ御出ハ不及申、後室ヘ御兩所ヨリ。御音信モ控ヘラレ被下度ト、兩方ヘ達シ

之ヲ政宗右ノ趣キヲ聞玉ヒ。月齋刑部一段ノ思案仕者カナト、後ニ褒美アリケリ。然ルニ五月十一日相馬ヨリ青田山城・中村助右衛門・杉七左衛門三人使トシテ後室ヘ對面ノ爲明日登城申スヘシ。此度月山ノ城ニ在陣近所ナレハ如斯トノ口上ナリ。後室悦ヒ入玉フ由返答ナリ。三使ノ町屋ニ寄宿シテ。翌十二日早朝ニ三人共ニ登城シテ。當番ノ士本田因幡ト云者ニ向ツテ、山城申シケルハ、昨日モ申ス如ク、今朝義胤後室ヘ對面ノタメ登城致サルルナリ。此旨後室ヘ達シ候ヘト、因幡カ曰、義胤方便ヲ以テ此城ヲ取リ玉フヘキ結構カ中々叶フマジキソ。早々ニ城外ヘ出ラレヨトナリ。山城カ云、因幡謂レサルコトヲ申サルヽ、城ヲトリニ來ル者ガ。素肌袴カケニテ可レ參カ。今ニ見ラレヨ義胤ニモ袴カケニテ登城ナルソ。互ニ問答スル處ヘ。田村梅雪出向ツテ、城州トカクノ問答モ不レ入コトナリ。只城ヲ出ラレヨト云。山城カ云。城ヲ出ヨトナラハ可レ出。居ヨトナラハ可レ居。何ゾヤ物々シゲニ城ヲ取リニ來ルヤ抔。餘リナル過言ナリト云ナカラ。耳ヲ立レハ傍ラニテ具足ヲ着ル音モシテ鐵砲ナトドヨメキ弓ノ素引スル音モシケレハ。早ク城ヲ出向ツテ、義胤ヘ告ハヤト思ヘトモ、流石走リ出テモ皈ラレネハ。靜ニ座ヲ立テ出ル。夫ヤルマシキモノヲナンドト。跡ニテ罵ル聲モシタリ。偖城門ヲ出ル時、山城門番ニ云フハ。ケ様ノ時ハマヅ門ノ海老ヲ卸ス物ゾ。早々門ヲシメヨトイヘハ。畏リタリ迚海老ヲ卸ス立シケリ。山城跡ハ心易シト思ヒ、是ヨリ足早ニ皈ルニ　義胤早城下ノ熊ト云所マテ乘カケ　三春ノ城坂中ニテ。山城仔細ヲ達スニ、早城内ヨリ鐵砲ヲ打カケシカ。義胤ノ乘リ馬平頭ニ中ル。馬跳上リシカハ、義胤落馬セラル。則俵口喜右衛門カ馬ニ乘替玉フ。城ノ入口ニ板橋ノアル所ヘ上リタル者共ニハ　岡田攝津守・杉新右衛門・江井河内中村太郎右衛門・羽根田源右衛門等ナリ。攝津守ハ鐵砲ニ中テ死ス、杉新右衛門モ弓ニ射ラレテ死ス。紺野九郎兵衛モ鐵砲ニテ討レタリ。藤田登庵・泉田甲斐守

モ矢ニ中レリ 殘ル内ハ田村月秀。橋本刑部カ下知ナリ
相馬方ハ木幡出羽カ下知シタリ 然トモ供ノ騎馬十
五騎皆々義胤ナレハ 如何トモ爲ヘキヤウナシ 只不
背組鐵砲五十人ナリ 此方ヨリ鐵砲不可打ト制シケ
レトモ 城中ヨリ頻シク鐵砲矢玉打出シテ 岡田等ヲ
始メ打殺サレケレハ 鐵砲組其下知ヲ聞入レス 又此
方ヨリモ討カケタリ 此時城内ヨリ突テ出ハ一足モ
不引討死スヘシトテ。各槍ノ石突ヲ土ニ突入シ。小
膝ヲ折ヲ義胤ノ馬前ニ進ミタル者トモハ 大浦庄右
衛門。二本松右馬頭。依田吉右衛門。中村太郎左衛門
鈴木掃部左衛門 其外二三人ナリ 義胤本意ナキ躰ニ
テ 搦手ヘ廻ハレケレトモ 可入様ナシ 爰ニテ江井
河内モ鐵砲ニ中テ死ス 時ニ八十五歳ナリ。義胤暫ク
馬ヲ立テ。思案ニ屈セラレシ躰ナリ。誠ニ二度トアル
マジキ難義ノ場所ト見ヘタリケリ、大越甲斐守義胤
ヘ向ツテ 月舘刑部カ屋敷ヘ押寄、妻子ヲ人質ニトリ
玉ヘ 左アラハ心易ク城ヲ渡シ申サント云ケレハ、義
胤ノ曰 如何ニモ尤ナケレハトテ。男モナキ處ヘ入テ、
女童ヲ召トルハキヤヤ 欲シクテ討出ハ腹ヲキルヨリ
他事ナシ迚 溜々ニシテ其場ヲ引ノキ、其夜ハ舟引ニ
退宿ナリ 此時城中多勢ナラハ 追討ニ討テ義胤滅亡
セラルヘキニ 小人數ニシテ只城ヲ固メタル迄ナレ
ハ 危キ場所ヲ遁レタリ 依之諸方ノ手分相圖モ、甲
斐ナキコトニナリケレハ 此事田村中ニカクレナク、
早所々ヘキコヘケレハ 始メ相馬ヘ心ヲヨセシ者ト
モモ 俄ニ思案ヲ轉シテ 皆々敵トナレリ、相馬ヘ退口
ハ 富葉邑順路ナレトモ 城主石澤修理ナレハ無心
元マツ舟引ニ二兩日滯留アルニ 翌十三日政宗宮森
ヨリ出張アツテ 月山ヲ攻ラレケレトモ 城中岡田兵
衛大夫静リ返テ不手向 依之卒爾ノ城攻スヘカラス
トテ 其機變ヲ見合セラル、偖舟引ヲ攻ラルヘシトノ
風聞有ケレハ、義胤立除ルヘキ道ナシ 依之義胤懸ヒ
ニ城ヲ出テ 政宗ニ追掛ラレテ滅亡センヨリハ 此處
ニ籠城シテ討死アルヘシトナリ 泉田雪斎諌メケル

ハ、タトヘ政宗大勢ニテ押カケ玉フトモ。相馬ノ者トモ進退極リヌト存セハ。見苦シキ死ハ致スマシ。此城ハ某ニ預ケラルヘシ。敵來ラハ防戰シテ討死致スヘシ。此所ハ他ノ城ヨリ淺間ナレハ。御籠城頼ミナシ。マツ此所ヲハ御引除アルヘシト、達テ諫メケレハ。義胤其意ニ從ヒ、泉田雪齋ヲハ舟引ニ殘サレケリ、雪齋ハ相馬ノ忠士ナリト世上賞シ唱ヘケリ、

傳ニ云田村梅雪ヲ始メ。一族大身ノ歴々一味シテ。義胤ヘ田村ヲ附屬セント内通シ。先達テ石川彈正。大越紀伊。相馬ヘ傾キシ上ハ。最早田村ハ義胤掌握ノ中ニアリト思ハレ、後室ヘ内通アッテ登城ニ及フ、然ル時ハ城内ニハ梅雪始メ各一味ノ輩アレハ。無事故城ヲトッテ相圖ノシルシヲ揭ケンニ於テハ。大越紀伊其外ニ兵ヲ授ケ。近林近谷ニ忍ハセ置キシ者トモ一度ニ集リ來リテ城ヲ守護シ。時ニ不順者ハ、即時ニ討果スヘキトノ手筈ニテ。四方ノ手配リヲ固メラレシカトモ。田村月齋・橋本刑部カ忠臣ノ武威ニ折カレ、梅雪始メ其期ニ及ンテハ。兩人カ顏色擧動ノ烈々タル勢ヒニ氣ヲ呑マレ、巧事一トシテ遂ルコト不能、皆兩人カ下知ニ服シタリ、月齋刑部ハ尋常ノ者ニ非ルコト知ンヌヘシ。城中ニサルモノアルコトヲ知リナカラ、梅雪等カ一味バカリヲ頼ンテ、義胤平服ニシテ登城。慮リフカヽラス。此一件相馬ノ麁忽トヤ言ント云々。

義胤舟引退口之事

義胤舟引ヲ除ントセラレシカトモ。田村領中皆敵ト成テ、其中ニアレハ如何トモ詮方ナシ。然處ニ政宗ノ先鋒櫻田右兵衛ニ相加ハリ。片倉小十郎・國井新左衛門士卒ヲ引テ來著ス、則門澤左衛門居城ヘ引入レタリ、南ハ小野新町ノ領主梅雪カ嫡子右馬頭。岩城常隆ノ人數ヲ居城ヘ集メ、私曲ノ意地ヲ構ヘタリ、直ニ相馬領ヘ皈ントセラルレハ、鹿山兵庫・栗山門澤ノ城ヲ岩城ヨリ攻ルト聞、助力セント行ケルカ相馬不調義ニテ義胤引退ルト聞テ。急キ引返シテ鹿山ノ城ニコ

セリタヽカヽル程ニ前後ニ迫リ義胤進退道ヲ失ヒ、如何セントアルトコロニ、鹿山ハ堀越自関カ聟ナレハ堀越方ヨリ使ヲ立、此度義胤進退口及難儀ケレハ事故ナク通シ顧リマシトナリ、鹿山則承諾ス、去ナカラ政宗ハ申シ披キノ為ナレハ、人数少モ出スヘシ、其時義胤通リ玉ノヘシ、夫ヲ塩ニ城中ヘ引トルヘシ、其隙ニ通リ玉ヘトナリ、約束ノ如ク城中ヨリ人数ヲ出ス、相馬方右ノ内意ヲ不知者多ケレハ、誠ノ働キト心得、取テ返シ鹿山カ家人鈴木與右衛門・菅野難樂之助其外仲間二人討取ル、義胤モ心底叶ヒアレハ、大根曲輪ノ二ノ丸マテ追入ケレハ、西村次郎右衛門・横川織部・早川軍曹ヲ始メ、十三人討レケリ、然レトモ兵庫自関ト心ヲ合セケル故、下知シテ人数ヲ本丸ヘ引入シケハ、義胤虎口ヲ遁レテ、中山ト云所迄引取ラレケリ、兵庫方ヨリ申シ遣シケルハ、直ク様御供申スヘケレトモ、三春ノ明王別當廿六歳ノ嫡子ヲ預置候、其上相馬ヘ味方申セシコト隠レアルマシケレハ、政宗定メテ攻ラルヘシ、落城ニ及ヒ候ハヽ、相馬ヘ参ルコトモアルヘシ。其時ハ一助ヲ加ヘ玉ハルヘシト言送テ籠城シタリ、サレハ初メ田村孫七郎ヲ取立ント與シタル者トモ、皆々心ヲ變シテ、政宗ヘ附属シタリ。案ノ如ク政宗鹿山ヲ責ント取掛ラル、本陣ハ鹿股一本松ニ居ヘラレ、先手ヲ以テ城ヲ攻ル。此鹿山ハ北條相模次郎時行八代ノ後孫ナレハ、譜代恩顧昔ノ如ク、名アル者ノ子孫多カリケレハ、三日マテ城ヲ持コタヘタリ。然ル處ニ三春ノ明王別當聞及ヒ、馳来テ扱ヒヲ入、城ノ囲ミヲ解セテ、兵庫ヲ三春ヘ立除セ、鹿山ノ城ハ落居シタリ、相馬境ノ山中ニモ、五十百ツヽ所々人数ヲ待伏ス抔ト聞ヘケレハ、義胤夫ヨリ岩城領川上内ト云所ノ者トモヲ語ラヒ頼マレケルニ、井出玄蕃ト云者案内シテ道ナキ峯ニ道ヲ作リ、五十間森ト云難所ノ山中ヲ越ヘテ、岩城領富岡ヘ出ラレケリ、コレト云モ前方岩城常隆ヘ同領菅屋ノ原ニ於テ初對面以後互ニ平和セラレシユヘ、井出カ徃ニ至ルマテ、斯ク馳

走ハ致セシトソ聞ヘシ。

仙道相馬一味之城々沒落附田村逆臣之城々被責落事

伊達信夫ノ人數ヲ以テ。月山（築山築館トモ月舘トモ云フ）ノ城ヘ兩日合戰ス。サテ又田村モ無心元トアツテ。伊達成實ハ白巖ヘ止メラレ。兩日ノ合戰ニハ加ハラス。五月十六日。石川彈正カ籠リタル小手森ヲ攻ムヘキ間。成實モ小手森ヘ來ルヘシトナリ。又成實ハ助兵來ル時防クヘシトテ。小手森ト月山ノ間ニ陣ヲトル。斯テ政宗城邊ヲ巡見セラレ。段々ニ取圍ミ。一勢々々備ヲ固メ。持楯蓋楯竹把等ノ攻具ヲ以テ。仕寄ヲ付ケ寄々責立ル。城中ニモ死ヲ不顧。コヽヲ先途ト防戰ス。サレ共大手旗本ノ先陣片倉小十郎カ攻口ヨリ破レケレハ。寄手大勢責入テ。方々ヨリ火ヲ放ツ。城中騷キ亂レテ。我先ニト奔走シケレハ。彈正防クヘキ術盡キテ。煙リニ紛レ落ケレハ。ナンナク城ヲ乘取リタリ。此小手森ハ伊達ノ鋒先ニ兩度マテ落城シタリ。翌日田村ノ内大藏寺ノ城ヘ押ヨスル。城主ハ田村右衛門カ弟同氏彥七郎ナリ。義胤ヘ屬シテ田村ヘ敵對シ。故ナク既ニ二三ノ丸ヲ破リ。放火シテ攻ケレトモ。内ヨリ矢一筋モ不射出。下定何某トテ家來ヲ城ヨリ出シ。田村月齋ヲ賴ミ降參ヲ願フ。則チ許容アツテ城ヲ出サレ。大藏モ落居シタリ。日暮テ宮森ヘ皈陣。惣軍勢ハ其夜野陣ヲ張ル。翌日石澤ニ相馬勢楯籠ルニ付。田村彥七郎ヲ先手トシテ押ヨスヘシトテ。マツ彥七郎政宗ヘ謁見ナサシム。此石澤ハ田村領內ニテノ構ヘ能キ所ニテ。相馬ヨリモ泉藤右衛門胤正ヲ籠置タリ。尤モ堅固ニ抱ヘケル。白石若狹領內ハ舘ニ在陣ト定リケレトモ。本陣ニナルヘキ家ナシトテ。野陣ニ掛。惣軍モ原野ニ陣ヲ列ス。其夜雨頻リニ降リシヨリ。夜更ニ及テ猶不止諸軍多ク濡レシホル。夜半ハカリニ東南ノ方ニ當ツテ。火氣雲ヲツラヌク。軍使ヲ命シテ見セシムルニ。築舘石澤等ノ城兵自燒シテ。其明リヲ便リニ叢行。火ノ手ニテソ有ケリ。又城々ニハ石川彈正カ持固メシ小

手森モ落城シ大森寺モ降リテ伊達ニ属シ、押續テ彼方此方相馬方人ノ城々責催ツルト告來ル。程コソアレ上ヲ下ヘト騒擾シケル處ニ十八日ノ夜騒シキ大雨ナレハ講或者此紛レニノケヤ逆月山大倉石澤等ニアヒリケル相馬勢、散々ニ逃落タリ彈正カ父掃部守カコモリシ百目木ノ城モ開除タリ、舟引ニハ泉田ヲ大將トシテコモリケルカ、政宗ノ勢ヲ引受一責セメラレスハ出マシキソトテ籠城シタリ、泉藤右衛門胤正ハ石澤ニコモリシカ、當面ノ篠ヲツク如クナルニ閉章テ各逃除タリ、田澤ノ檜木ト云深山ニ入テ道ニ迷ヒ其外散々ニ成テ二三日四五日ハカリ過テ歸リタル者モアリ。此時金澤備中ハ泉カ備ノ小頭ニテ有ケルカ、ケ様ノ時命活ントスレハ必ス恥アル死ヲスル者ナリ、運盡ナハ何國ヘ行トモ遁ルヘカラス、迚モ死ン命敢テ、ハ引組テ可死トテ手勢ノ騎兵七八騎上下四十ハカリニテ大道ヲ引除ケル本ヨリ敵モ來ラサレハ、心易ク引除ケル、コレハ十八日ノ夜。政宗石澤ヲ責ラル、ト聞テ驚キ周章皆開逃シテ如是相馬ノ侍士武功ノ人、往々ニ云ケルハ、コレハ盛胤義胤ヲ始メ其外マテ我勇ニノミホコリ、[illegible]ノ下知モナク面々心々ニ働キ誤ル故、軍法ノ掟ナケレハ、ケ様ノ騒動出ルナリ、石澤ノ總勢三四百、騎兵六七十モアルヘケレハ、金澤カ如ク打丸メテ徐々ト引取ナハ、譬ハ敵追蒐來ルトモサノミ敗亡ハ有マシキニ。未練ナル聞逃シタリ。是皆戰法ナキ故ナリトツフヤク人アリケルトソ此時栃窪勘兵衛ハ泉胤正ト、若道ノ知音アリケレハ、政宗石澤ヲ攻ラルト聞テ、相馬ヨリ急キ石澤ヘ馳來リ夜半ハカリニ行着タリ、早胤正ヲ始メ皆逃チリケレハ、伊達勢城ヘ入替リタルヲ不知シテ門ヲ敲キ急キ門ヲ開カレヨ、栃窪勘兵衛相馬ヨリ來リシト云。内ニハ之ヲ聞テ夏ノ虫火ニ入ルソトテ。門ヲ開イテ押取コメ敢ナクモ討レシコソ無慙ナレ同二十二日ノ比。政宗舟引ヲ攻ラル由言騒キケルニ、棠ノ如ク伊達勢押寄タリ城中泉田雪齋、國田與三右衛

門・中村正兵衛、何レモ評議シケルハ。此寄手誰々ニカ有ンヤ政宗ノ旗ハ見エス若シ政宗城近ク寄セ玉ハハ。能々見定メ。城ヲハ薬テ打テ出。迯ヲ一擧ニ任セヨト互ニ議定シテ、追手ハ岡田與三右衛門・中村正兵衛・竹澤井土川標菜ノ士バカリニテ。地士ハ一人モ不レ加。搦手ハ雪齋齊庵、其外大越カ手ハ敵ノ入難キ難所ヲ守ラセタリ寄手初日ハ責ルコトナク鐵砲少々打カケタル迄ニテ城ヲ見上テ聲々ニ詈リケルハ、トテモ城ヲ持遂ルコトハ成マシキソ。雪齋モ坊主天窓ワラレンヨリ。城ヲアケテ降參シ大身ノ家ニ奉公セヨト。聲々ニ悪口シタルバカリニテ、其日城ヲ責サリケリ。其夜城内ニテ評談セシハ、政宗來陣ナリトモマツ取カヽリ攻ムヘキニ鐵砲ハカリ打カケタルハ不審ナリ、舟引ノ地兵ノ内ニ内通ノ者ヤアルヘシトテ。城主ニ斷リ、侍町人ノ妻子ヲ取入レ。皆々土藏ヘ押コメタリ。後ニ聞ケハ大内大越ノ者心替シテ、城攻ノ最中ニ火ヲ掛クヘシト約束セシトナリ如レ此謀略相違シケレハ。キビシキ城責ハナカリシトソ。夜明ケレハ伊達勢又押寄セタリ、サレトモ政宗ノ旗ハ見ヘズ。追手ヲ防ケハ。搦手ノ方心元ナク。何方此方ト相馬勢ハカリ走リ回リ。互ニ味方ヲ追テ防戰ス。岡田與三右衛門ヲ始メ。先程ヨリ見ルニ地黑ニ無紋ノ差物指タル騎兵乘來レハ。其外七八騎輕々トスヽンテ隨ヒ來ル。此差物來ラネハ殘ル騎兵モ不レ進。必定大將ト見ヘタリ。重ネテ來ラハ門際ヘ近々ト引付。不意ニ門ヲ開イテ、何レモ無音ニテ突テ出。餘人ニハ目ヲ掛ス只地黑ノ差物一騎ハカリニ目ヲ付テ上下一同ニ引包ンテ討トルヘシ。迚モ落城スヘキ此小城。一擧ノ戰死ヲ遂ヘシト、一決シテ一圖ノ兵士四十餘。足輕四十餘。都合百餘人ナリ、岡田ハ矢倉ニ上リテ寄手ヲ見ルニ、案ノ如ク地黑ニ無紋ノ旗サシタル騎兵。眞先ニスヽメハ。十五六騎輕々ト引續テ乘來ル。岡田矢倉ヲ飛下リ、中村井土川竹澤等ヲ始メ兵士四十餘騎。足輕トモニ門際ニ付テソヽメキ居タリ。件ノ騎兵門外近ク來ルコト二

十間ニ不レ過。スハヤト云程コソアレ門ヲ開キ一文字ニ突テカヽル。富塚等相支ヘテ戰フ處ニ、地黒ノ差物乘マハシテ下知シケルヲ、見懸ノ内ニ無二ノ約ヲ忘正一坊ナリ討トレト、四五人聲々ニ呼リケレハ、此其者ヲ引包ンテ大勢ノ中ヘ取入タリ、城兵遠ク不レ追シテ城内ヘ引入ケリ。後ニ聞ケハ政宗ニテソアリケル。其後城中ヨリ正一坊ニ、寄手ハ其程ノ大勢ニテ、此小城一ツ責兼玉フカ。何ノ爲ニ物々シク取掛タルヤト。戰場ノ習ナレハ樣々惡口シテ呼リケリ。此時ハ政宗差物ヲ絞リ玉ヒ。何地ニアリトモ知レサリシカ。向フノ岡ヘ人數ヲ押上備ヲ立政宗ノ旗ヲ差上。勝関ヲアケテ打上タリ。大越ノ地兵トモ。前夜差子ヲ押コメラレシ。疑ヲ散セントヤ思ヒケン。伊達勢ノ跡ヲ慕ヒ東ヨリ出向シテ戰シリ。悉ク打散サレ方々逃テ城ヘモ入ラス落行ケリ。政宗未タ小濱宮森ニ滯留アツテ。再ヒ押引ヲ攻ラルヘシトモ。又田村中相馬方人ノ者トモ退治アラントモ。浮説樣々聞ヘケレハ。相馬領

分大原ニ出城ヲカマヘ。仙道ノ手ヨリ寄セラレントテ、若亂ニハ此所ニ在留普請セラレアリ。斯テ政宗ニハ宮森ニ留陣アレハ田村ノ四家老ヲ始メトシテ其外内々相馬ヘ申シ寄リシ者トモ迄、皆宮森ヘ參向シテ石川弾正御退治田村中靜謐ノ軍功ヲ謝シ申シケル。政宗各ニ對面有テ、何レモ心ヲ合セ田村領中ノ仕置出精々ルトヘ、此度ノ大難事故ナク、三春ノ城堅固ニ持コタヘ候コト誠ニ久シヤ家系ノシルシ。殊深ク覺ユルナリ。自今以後モ忠勤ヲ抽テ。春公如在タルヘシ。政宗隨身心ヲ合ストイヘトモ。遠境ニ隔テハ急變ノ手ニ合難シ、其内ハ皆々心ヲ合セ。一支ハ持堪ヘ候ヘト。面々ニ向ツテ懇切ノ挨拶ヲ盡サレケレハ。各低頭感涙ヲ催シケリ。中ニモ常葉伊賀最前評定ノ砌リ。一番ニ當家ヲ頼入ヘキヨシ發言シ。皆々其儀ニ同スル段相聞得、別シテ其方頼母敷ニハ、田村若ナシトテ一刀ヲ玉ハル。伊賀面目身ニ餘リテソ見ヘケル。四家老重ネテ、大越紀伊未タ在所ニ籠城仕ル。カレハ謀叛

ノ張本人ニ候間、彼カ城ヲモ御責落シ賜リ度旨相達ス。政宗ノ曰、大越事尤口惜キ者ナリ、去ナカラ彼カ地ハ要害尤堅固ナレハ、早速ニハ落城セマシ。此城ヘ手マトル内、佐竹義重例ノ諸將ヘ言合セ、仙道表出陣ノ聞ヘアレハ、折角ト取ツメタル城ヲ卷ホコサンモ無念ナレハ、マツ此度ハ此ヨリ皈陣ニ定ムルナリ、シカハアレト望ミトイヒ、アマリ無念ナレハ、代官ヲ以テ攻ムヘシトアツテ、又本宮ヘ使ヲ立、成實ヲ招カレ、吾大越ヲモ取詰可レ攻カ、佐竹義重會津仙道ヲ語ラヒ、安積表出陣ノ由ナレハ、事半途ニテハ叶ヒ難シ。其方向ツテ大越ヲ可レ責トナリ、成實申シケルハ、佐竹殿出陣ノヨシ、本宮邊ニテ曾テ其風聞候ハス、卿カ虛說ニテ候ハント申シケレハ、政宗近習ノ人ヲハラハレ。密談ニ須賀川ノ須田美濃方ヨリ告來ル。彼ハ佐竹無二ノ者ト聞シカ、當春ヨリ當家ヘ申シ寄リシカトモ、表裏如何ト猶豫スルトコロ。今ハハヤ須田一人ニ不レ限、會津・須賀川ヨリ申シ寄ル者數多有レ之、此度ノ内通ハ佐竹ニ於テモ密々ノ企ナリト隱密ニ說談アル、成實カ曰、御仕置ト云ヒ武威近國ニ隱レナク候ヘハ、身ノ行末ヲ考ヘ兼テ申シ寄ルナルヘシ。偖又義重出陣ニ於テハ、會津ハ勿論其外モ同陣タルヘシ。左アラハ大軍ニ對シテ、掛合ノ戰叶難カルヘシ、其上義胤田村ヘ出張アラハ、境々ノ城々。御加勢トイヒ、人數猶不レ足ルヘシ。能々御工夫ヲ以テ、地形ノ險難ニ備ヲ固クシテ對陣ニ日ヲ送リ玉ハヽ、大軍粮盡ナン。變ヲ伺ヒ夜討シテオビヤカシ、陣中ヲ勞セシメハ、自ラ退陣仕ルヘシト云々。政宗ノ曰、佐竹ノ出陣何レノ所爲ト云其意趣ハ不レ知ト雖トモ我推量スルニ。相馬ノ首尾又仙道方味方安堵ノ爲ト云立テ內ニハ慾心ヲ發シ。諸將ヲスヽメテ兵ヲ起シ。我領地ヲ削リ奪ン爲メ成ヘシ。敵軍ヲ謀ルニ、佐竹一輩モ味方ノ勢ヨリ多カルヘシ、況ヤ諸將同陣ニ於テハ、誠ニ勢ニ於テハ敵シ難シ、殊ニ先年本宮ニテ後レヲ取リタルヲ無念ニ思ヒ、此度ハ粉骨碎身シテ。勝利ヲ一擧ニ決セント定ムヘシ。然

レハ此度ハ大切ノ戰ナリ。去ナカラ佐竹會津仙道ノ輩先先年ヨリ數度手合セニ覺ハタリ。タトヘ味方小等ナリ。陣地ハ案ニ敵ヲ待受テ戰フニハ倂以テ待勢ノ利アリ。敵ハ大軍ト雖トモ諸方ノ集リ勢ナレハ兵氣中々一決シカタシ。味方心ヲ一和セハ、一騎十人ニ十騎百人ニ可對。難所ニ敵ヲ尾引カリ左ナクトモ大軍ノ纔ナ何モ平場ノ合戰謀ヲトアルヘシ相馬若シ出陣セハ已モ佐竹カ岩城ト同陣タルヘシ諸將ノ一手トシ政宗一方ヲ固メ、必死ノ覺悟ヲ以テ戰ハヽ利ヲ不得ト云コトアルヘカラス此度ハ田村勢モ少々相加ノヘシ。三春ヨリ遣アツテモ數ノニ便宜アレハナリト委細演述終リテ其後何レモ召出シ色々評定有テ各退出シケリ偖成實ハ二本松ヘ皈リ、一兩日支度シテ。大越カ城ヘ寄セケレトモ。一人モ不ニ出合、依之人數ヲ引上タリ。然ルニ其日政宗ニモ忍ニテ城セメ頭見セラレン爲。宮森ヲ出ラレ此ノ鹿股ヨリ忍ヒ來ラル、又成實カ跡ヲ慕ヒシ城兵ハ東ヨリ働キ伊達信夫ノ勢ハ北ヘ引上タルニ、鹿股ニテ横合ニ皆ト出合トコロヲ成實惣人數ヲ返シ合テ戰フ。政宗ノ手勢南方ヨリ引包ミ押切テ攻戰フ。城兵コラヘ兼テ蜘ノ子ヲ散ス如ク、爰彼所ヘホウホウニ逃ケ走ルヲ追討テ首六十三得タリ。翌日政宗宮森ヘ皈ラレケレハ。成實モ二本松ヘ皈城シケリ。

相馬勢責和佐川小屋事

其頃大越紀伊守城ニモ、相馬ヨリ標葉勢ヲ入置タリ、入替ノ番手ニテ城ヲ守ラセントテ。天正十六年六月上旬、木幡出羽同苗子因幡中郷ノ士八十騎ヲ卒シテ、岩城領ヘカヽリ來ル處ニ、田村領和佐川ト云處ニ田村月齋カ次男右馬助ト云者山小屋ヲ構ヘ居テ、相馬ノ往還ヲ妨ントス。相馬ノ番手其小屋下ヲ通ルニ、日ハ既ニ暮レタリ、道筋モ不知、山中ノ險難ヲ凌テ越ンコト危シトハ思ヒケレトモ外ニ路ナケレハ漸々ニタトリテ難テ大越ノ城ニ到着ス。紀伊カ目標葉衆モ明日ハ滯留アッテ、中郷ノ手ト一ツニナリ、和佐川ノ

小屋ヲ攻ラレヨ。其釋ヲ聞レナハ。政宗宮森在陣ナレハ、定テ當城ヘ貴カヽリ玉フヘシ。然ラハ義胤ニテモ。在陣程近ケレハ早速ニ馳付玉フヘシ。然ル上ハ當城ノ後詰堅固タルヘシト。各紀州ノ言尤ナリ。然ラハ和佐川ヲ攻ムヘシト議定ス。翌出立ノ相圖ヲ定メ待居タリ。辰ノ刻ニ至テ。大越ノ騎兵遠藤采女、因幡カ小屋ヘ來テ早相圖ノ鐵砲ハ鳴リタリ。出陣セラレヨトテ。則打立テ押行ケリ。斯テ小屋ノ東ノ方一段低キ方ヨリ鐵砲ヲ打カクレトモ。小屋ハ山ノ上ナレハ。玉一ツモ中ラス。因幡ト木幡作助歲十六小屋下ノ畦道ヲ乘リ通ルニ。敵小屋場ノ大石ニ、鐵砲ヲ載セカケテ此一騎ヲネラフ。其間五十間餘也。作助初陣ナレハ危ク思フテ、因幡ニ向ツテ鐵砲ニテネラフヲ見付ラレシヤト云。因幡吾モ疾ニ見付タリ。ケ樣ノ時ハ如何ニモ馬ヲシツメテ乘ルモノソ。馬進マハ引シメテノルヘシ。間遠ケレハ人ニ中ラスモノソト云内ニ、作助カ乘リタル馬ノ鼻先ヲカスリテ玉落タリ。馬驚イテ脇ヘフリムクトコロヲ、作助引シメテ乘タリ。因幡カ云。サレハコソ心得テ乘タル故。アヤマチナシ。惣シテケ樣ノ時驚イテ乘出シタルハ。餘所目見苦シキソト云處ニ。亦因幡カ馬ノ爪際ヘ玉落シカハ。馬立ントスルヲ引シツメテ乘通ル。因幡作助ニ云ケルハ。何コトモ見テハ恐シキ樣ナルモノナレト。思ヒ切テ驚カネハ。其時ニ至テハ何コトモナキモノソトテ。暫ク有テ又此道ヲ乘通リシカ、其時ハ鐵砲ヲ討サリケリ。此小屋ハ山茂リタルヲ、中道ヲキリアケテ木戸口迄三十間餘。廣サ二丁程ニシテ、其兩脇ハ伐ラサル細木ヲ引ハヘテ垣ニ仕タリ。此木戸口ヘ堀内因幡・中村兵衛・室屋文六郎、山田日向右四人。木戸際ヘ乘付タリ。中村下リ立、槍押取木戸口ニ付ケハ。各下リ立。木戸押破リ。内行馬ノ柵際マテ押入タリ、防ク敵ハ柵内ニアリ。又塁ニ有テ柵際ヘヨル者ヲハ矢倉ヨリ槍ニテツク。末永右京・青田文七郎手柄ノ働キアリ。作助ハ矢倉ヨリ鑓ヲ突レ、水谷源之丞ハ門ノ扉明タルニ急キ内ヘ入ントシテ、

鬢ヲ耳カケテ切レタリ、大石清左衞門モ槍ニテ突レ、矢嶋惣八郎ハ鐵砲ニ中リテ死ス、堀内因幡ハ元來片目シイタリシカ、ヨキ方ノ目ヲ射透サレ。矢ノ根留リテ入ルヲ、即時ニ馬上ニテ室原丈六郎ニ拔セタリ、此外寄手雜兵ノ傷キ手負討死アリ、其外ハ出タル數ハ大形ニ討トル首三十二勝鬨ヲアゲ引取ケリ、此時義胤ニハ岩井澤ト云處ヘ出張ナリ、コレハ政宗未タ宮森ニ在陣アツテ米澤ヘ皈陣セラレス、大越カ居城且ツ前引ノ城共ニ未タ手掛リナレハ、再ヒ城責モアラン時ハ加勢有テ合戰ノ便宜ニ因テ、三春ノ城ヲモ手ニ入レ、先度ノ後レヲモ雪ントノ下心アレハ。カクハ滯陣セラレケリ、老士ノ口、義胤三春人ニ後レヲトラレテヨリ以來、所々ノ合戰利ナキニアラネトモ、畢竟ハ負軍ノ方多クアリ、然レトモ奧州白河ヨリ奧大崎迄ノ内二十人餘ノ旗ノ諸大將、皆以テ政宗ノ旗下ニ屬セシカ、相馬ヲハ如何思ハレケン、政宗終ニ望ミヲカケラレス、此ノミ相馬ノ武威トヤ云ヘシト云々。

亘理元庵相馬盛胤大森合戰之事

今年會津義廣・佐竹義重一味ニテ、政宗ト對陣アルハシ拆云フレタリ。コレハ去ヌル歳七大將一致シテ政宗ヲ可責トテ、仙道本宮ニ於テ合戰ニ及ヒ、コレニ會津佐竹ヲ始メ利ヲ失フ、其遺恨アルニ依テ。カクハ流言シケリ、依之政宗田村ノ一亂ニハサノミ深キ手入ナケレハ、相馬トノ合戰モナカリケリ、カヽル處ニ同年六月下旬、亘理元庵宇田郡ノ内新地ト駒ケ嶺ヲ攻トルヘシトテ、出陣ノ由聞ヘケレハ、相馬盛胤モ義胤出張ノ留守トイヒ、自ラ北郷ノ兵士ヲ催シテ出張アリ、新地駒ケ嶺ノ間、大森ニ於テ合戰アリ、コレハ政宗會津佐竹ヘ向ツテ合戰アルヘキニ、相馬佐竹ヘ與力アラハ、伊達ノ勝利危カルヘシ迚、元庵謀コトヲ以テ、態ト亘理ヨリ新地駒ケ嶺ヲ攻トルヘキ躰ニ見セタルトナリ、相馬勢ハ駒ケ嶺ノ山崎ニ備ヲ立、元庵ハコレニ對シテ備ヲ設ケ、互ニ鐵砲ヲ掛合タリ、相馬方石梱兵衛玉二ツ中テ馬ヨリ落ツ、コレヲ始メトシテ兩陣

太刀打組合セテ挑ミ戰フ。相馬勢シドロニ成テ既ニ芝居モ打散サルヘク見ヘケル處ニ佐藤左近。鹽松大藏羽根田主膳ナト返シ合テ乘コミタルニ亘理方ォシ縮マル色ヲ見テ相馬方競ヒ返シ打テカヽル。亘理勢足並アシク引色ニ成ケレハ盛胤勝鬨ヲ揚サセテ。軍ヲ强ヒス引上ラル。此合戰ニ岩沼ノ城主長谷修理亮カ家老岡崎將監討死シタリ相馬勢如斯ナレハ元庵モ兵卒ヲ引テ則亘理ヘ皈陣ナリ。

或書ニ此合戰元庵父子出陣トアリ。嫡子亘理美濃重宗ハ成實。片倉等ト共ニ政宗ヘ隨從シテ。在所ヲ離レテ仕フコト久シ。仍テ亘理ニハ父元庵バカリ居住シ相馬ノ境ヲ守テ忠勤ス。此時父子出陣トアルハ非也。

伊達秘鑑巻之二十一終

伊達秘鑑巻之二十二

東奥仙府 燕々軒 編集

仙道再亂附安積表城々加勢手配之事

天正十六年六月安積郡郡山ノ城主郡山太郎左衛門久保田ノ城主中村右衛門方ヨリ。早馬ヲ以テ宮森ヘ注進シケルハ。佐竹修理大夫義重。會津右兵衛尉義廣同心有テ仙道ヲ侵サン爲。佐竹ハ常陸下總ノ兵ヲ催シ岩城常陸ヨリハ。名代ヲ以テ加勢セラレ。數千ノ軍兵ヲ卒シ芦野白坂邊ヲ打從ヘ白河郡ノ弱兵等悉ク降人トナリ。軍勢ニ加ハリ。會津義廣ハ中山口ヨリ發向須賀川左近將監盛行長沼ノ城主新國上總盛利等馳加ハリ其勢雲霞ノ如ク去ル七日ヨリ。當地郡山久保田邊ヘ先陣ハ押來レトモ。後陣ハ何地ヲ限リトモ相知レス。サルニ依テ熊谷三十郎。桑折三吉等申シ合セ士卒ノ氣ヲ勵シ今日迄ハ兩城トモニ堅固ニ持候。一刻モ早ク御出馬ハ勿論。先以テ急キ御加勢可

將大町宮内其外ノ面々ニ、持口ノ手分防戰ノカマヘ。悉ク軍議シテ城兵加勢取合都合七百餘人、小勢ト雖トモ氣ヲ不屈、金鐵ニ固メテ楯コモル。翌レハ十二日拂曉ニ政宗杉田ノ宿陣ヲ出立有テ、午ノ刻ニ久保田表ヘ出張、惣軍三千餘ニ不過、諸勢ハ高倉日和田福原邊ニ駐メ、馬廻リノ士卒バカリニテ。久保田ノ山王山ヘ登リ佐竹岩城會津ノ軍機ヲ遠見有テ、高倉ヘ皈城セラル同十二日黎明ヨリ、佐竹ノ軍勢郡山ヘ押寄。只一モミニ揉破ント、三方ヨリ取詰テ、短兵急ニ攻付タリ城兵寄手ニ比スレハ大江一盃ノ水ニ等シケレトモ兼テ死ヲ覺悟ノ者トモナレハ、詰リ詰リ虎口ヲ大事ニ持固太郎左衛門。大町宮内自身持口ヲ駈廻テ。狹間配リシテ弓鐵砲ニ宛矢ヲ放サセス塀ニ付ヲハ槍ニテ突落、砲砂ヲ振リ熱湯ヲソヽキ。透間モナク死ヲ一圖ニ防戰シケレハ、寄手案ニ相違シテ。城中多勢トヤ思ヒケン。鐘ヲ鳴シテ諸軍ヲ引揚ケ。遠卷ニ備テ鐵砲ヲ打ケタルマテニテ、再ヒ寄スル氣色モ不見捨ヘタリ。城兵ハ猶不打出、防キ矢射出スバカリ也會釋シテ其日ノ軍ハ果ニケリ。同十四日又以テ政宗山王山ニ登リ、神前ヘ參詣アッテ。抑山王權現ノ靈地ヲ我動シ申スニ非ス。佐竹不義ニ依テナレハ。此地ノ騷動ヲ鎭メン爲。出陣仕ル所ナリ。願クハ神力ヲ加ヘラレ。守護ノ地安穩ナラシメ玉ヘト、丹誠ヲ盡サレ、其後芝居ニ席ヲ設ケ。小梁川泥蟠。桑折點了。原田休雪。同左馬助。伊達藤五郎。白石若狹。富塚近江。濱田伊豆。伊東肥前。片倉小十郎。各左右ニ列ス政宗敵陣ノ強弱ヲ遠見アッテ。評議アリケルハ、昨日郡山ノ城ヘ。佐竹勢寄スルトイヘトモ城兵固ク守リ。防戰ニタルミナク、一柵モ破ラレストハイヘトモ。多勢ニ無勢ナレハ。終ニ落城スヘシ。此上ハ三軍ト對陣シテ、運ヲ天命ノ降ルニ任セントアリケレハ。桑折點了齋申シケルハ。凡ソ戰法ハ奇正虛實ヲ謀ルコト專一ト仕ル處ナリ、今敵兵ヲ見ルニ凡ソ三萬ニ近シ味方ハ以上五千ニ不足。勝敗多少ニ不依トハ雖トモ小ハ大ニ勝コト不

能寡ハ衆ニ敵スルコト不叶ハ已定ノ理ナリ尤十死一生ノ御合戰アランニ於テハ勝ヲ得ルコトモアルヘケレトモ伊達ノ御運此度ニ限リタルト申スニモ非ス危キヲ遁テ末ヲ謀ルコレ良將ノ格ナリ今度ノ御對陣ハ十ニ九ハ理ニアタラス退イテ本陣ヲ二本松ノ要害ニ移サレ本宮ヲ出ハリトシテ前ヲ守ラセ其内ニ刈田柴田名取黑川宮城國分ノ軍勢到ルヲ待テ諸軍一時ニ押出シテ御對陣アラハ勝利アルヘシ只今ノ對戰ハ吹毛求疵モノナルヘシト言ヲ盡シ申シケレハ一席ノ諸將點頭ノ異見的當ノ理ナリト各此議ニ一同ス政宗ノ曰老人ノ評定至極セリトイヘトモ我思フニ奇正虛實ヲ論セハ今度ノ合戰ハ勢ノ多少ヲ以テハ論スヘカラスマツ虛ト云ハ安世ノ民ヲ使シ實ト云ハ亂世ノ民ヲ救フヲ常ノ虛實ト云ヘシ變ニ至テノ虛實ヲ云ハヽ佐竹義重吾慾ヲ以テ民ヲ勤リシ吾領地ヲ削リ貪ントシテ兵ヲ起スコレ多勢トイヘトモ虛ニ非スヤ我コレニ對シテ一戰ヲ遂窮民ヲ撫セントス是小勢トイヘトモ實ニ非スヤ敵ハ大軍ナレハ我小勢ヲ以テヤハカ對陣叶フマシ其上最上相馬大崎ヲ始メ皆敵ナレハ後ロヲ恐ル、所アレハ一旦出陣ニ及フトモ兵ヲ引テ伊達ヘ戻ルカ米澤ヘ皈陣スルカ然ラハ其虛ニ乘テ山道ヲ掌握セント謀ツテ出張シタル義重ナリ然ルヲ退イテ二本松一兵ヲ入レハマツ敵ノ謀ニ落タルニ非スヤ對陣ハ叶フマシト思フ所ヲ遮テ對陣セハ敵ノ思フ圖外レテ其氣不應其不慮ニ出ルモノハコレ奇ニシテ正ナリ勢ノ多少ヲ以テ虛實ヲ論スルモ時ニ因ルヘシ其上此山王山ヘ日々ニ馬ヲ出シ吾旌旗ヲ崇シタリ佐竹岩城ノ軍士共兩眼ノ役ナレハ政宗ヵ旌見知ラサル事ヨモアルマシ然ルニ對陣モセスシテ空シク眼前ニ郡山ノ城兵ヲ見殺シ落城サセンコト伊達ノ弓矢ノ不覺此一事ニ不可過其時節至テ滅亡スルコト古今一同ニシテ少シモ後悔スヘカラス無二無三ニ對陣タルヘシト顏色變ツテ見ヘケレハ各白

ト門ヲ見合御家ノ疵トアルカラハ、此上申スハ自他トモニ死ヲ重ンスルニ似タリ。皆戰場ヲ枕ト覺悟仕ル上ハ御尤ニ候トテ對陣ニコソ極リケル、左アラハ御陣場ハ何方可レ然ヤト評議アルニ、原田左馬助カ曰、朴澤沼ヲ後ロニ當テ、西ノ原可レ然ト云ニ、濱田伊豆カ曰、是背水ノ理ニシテ尤可レ然。シカレトモ大勢ニ小勢ノ掛合ハ右ノ備ニ非ス難所ヲ前ニ當モシ利ナキ時ハ陰口ノ能樣ニ陣トルコソ本意ナラメ何ソ當家ノ盛衰此合戰ニ可レ限ヤ。惡所ヲ後ロニシテ平場ニ陣取アラハ、大軍ニ取包マレ防戰ニ利アルヘカラス、窪田ヲ前ニ當テ、福原ニ御陣居ラレ可レ然ト申シケレハ、伊東肥前、片倉小十郎モ此場尤可レ宜ト一同ス。依レ之福原ヨリ西久保田原陣場ニ相定マル、郡山ノ城ヘ又以テ石川右衛門。富塚近江ニ、刈田柴田ヨリ遲參ノ軍兵百餘騎差ソヘコメラレタリ、窪田ノ城ニハ、右近大嶺判官。中原ハ、瀨上中務。高倉ヘハ大條尾張名取國分伊具ノ催促後レ馳ニ來ル軍勢少々ツヽ分レ之テ右三人ニ附屬シテ三ヶ所ヘ加ヘラレ。本丸ヲ受トリ。守護スヘキヨシ命セラル。其夜政宗本宮邊巡見アツテ高倉ヘ着陣。軍ハ明日ト觸ラレタリ。

伊達佐竹福原表出張附六月十八日合戰之事

六月十六日未明ニ、政宗安積郡福原表ヘ出張。其日辰ノ刻福原西久田原ニ著陣。備ヲ立ラレ諸將ノ陣場ヲ定メラル、中ニモ藤五郎成實ヲ招キ、佐竹會津岩城ノ軍兵押來ル道筋ヲ謀ル處久保田ノ方ハ皆青田ニテ水カヽリ通路狹シ、山王林ツツキ。北ノ原足場ヨク見ユレハ、此所ヨリ敵責寄スヘシ彼所ヲ成實カ陣場ト可レ定ト下知セラル、成實モ其所ヲ見分スルニ、尤敵ノ可レ働筋ナリトテ。軍勢ヲ繰出シ、陣場ヲ定メ備ヲ立ル、郡山久保田ノ間ニ押寄タル佐竹會津ノ先陣見レ之。山王林ヨリ西北ニ段々ニ備ヲ立成實カ陣ニ向テ鬨ヲ揚ケ鐵砲ヲ打掛タリサレトモ此方ハ無勢ナレハ。敵ノイキホヒアラハ。一先ツ凌イテ時ヲマツヘシト。兼日ノ評定ナレハ、成實カ備ヨリ人一人モ不レ掛合。只

備ヲ固メテ動カサリケレハ。寄手モ左右ナク不ニ近付ニ。勇氣ヲ凝シテ暫ク白眼合テ控ヘシカ　敵ノ機變計リ難シ。炎天ニ兜ヲ照サレ苦シク此ニ控ヘンヨリハ、元ノ陣場ヘ返シテ、時宜ニ因テ戰ヲ始ントテ。一マツ備ヲ入レケレハ。成實ハ備ヲ立。向フヲ固メ置キ。其後ロニテ心易ク陣場ヲ普請ス　用水ノ堀ノアリシヲ。コレ究竟ノ外備ナリト　竹束ヲ運ヒ　高サ五尺ハカリニ築地ノ柴垣ヲマハシ　右ノ用心堀ヲ深クシテ、水ヲ仕掛、要害ニ拵ヘタリ、十七日ニモ敵働ク氣色ナケレハ。二重ノ築地ヲ七尺バカリニ築立ケリ　白石若狹陣場ハ福原ヨリ南五町バカリ隔テ　行馬堅固ニカマヘタリ。片倉小十郎陣場ハ　成實ノ右ニ續テ近所ナリ　原田左馬助陣場ハ　本陣ヨリ六町西ニ隔リ、其外ノ諸將ハ本陣ヲ取卷々々　夫々ニ備堅固ニ陣取タリ　同十八日朝佐竹ノ軍兵山王林ノ陰ヨリ押出シ。　福原表ヘ數千人ス、ミ來テ　伊達勢ヘ鐵砲ヲ打懸ル、此方モ同シク弓鐵砲ヲ掛合　會釋シケル處ニ、佐竹義重ノ家臣白井筑前則定、四五百ノ兵卒ヲ引具シ　弓鐵砲ヲ配ツテ進ミ來ル。桑折治部定重兼々鐵砲ノ上手ナレハ　雜兵ニ交リ、ネラヒ寄テ一陣ニス、ミタル白井筑前ヲ討タリ、身ニハ中ラス　乘馬ノ太腹ニ中リ打ヌキケレハ、馬痛手ナレハ躍出テ跳廻ル　白井馬ニ放レジトヤ思ヒケン　馬ノ頭ニシカトトリ付、敵味方モ不ニ見分ニ一文字ニ引カレ翔來ル　桑折ハ我鐵砲ニ中リ　勝負セント馳來ルト思ヒ、太刀ヲ拔テ待カケタリシニ、白井ハ見ヤリモヤラス　治部カ側ヲ踏散シ　虛空ニ馳拔走リ行シサテハ馬ニ引レケルヨト見ルヨリ。桑折一散ニ追馳追付テ　白井カ鐙ノ草摺ニ手ヲ掛　無手ト捕テ曳ト引ケハ。白井カ馬次第ニカクヲ當テ驅出ス、互ノ力ニ草摺ヲ引切、白井ハ馬ヨリ落ツレハ、治部モ犬居ニ居ハリシカ　起直テ白井ニ組ム　白井モ聞ユル大力、上ニナリ下ニナリ、組合シカ、治部終ニ上ニナリ、筑前カ冑ノ錣ヲタ、ミ上テ首ヲ掻、佐竹ノ一將白井筑前。桑折治部討取タリト　高聲ニ詈リ。本陣ニ來リ、大將ノ實驗ニ入

ケレハ。軍神ノ血祭リニ備ヘラレ。治部ハ感狀ニ預カリケリ。コレヲ軍ノ花トシテ。兩陣矢玉ヲ飛ハシ。鬨ヲ作リ。喚キ叫ンテ揉合ケル。成實ハ隨兵十六七騎。各鑓ヲ取テ陣頭ニ進ミ。諸卒ヲ下知シ挑戰ス。片倉小十郎手勢五十騎バカリニテ。橫合ニ槍ヲ入レケレハ。佐竹勢ナタレヲ付テ開キ走ル。石母田左衛門・伊東肥前・櫻田右兵衛・牧野安藝。轡ヲ並ヘ駈立レハ。諸卒兵士力ヲ得勇ミ進ミテ追討ニ首數級討取タリ。伊達勢モ手負討死餘多ナリ。佐竹勢ハ義重ノ旗本近ク迄クツレテ備ヲ直ス。成實モ諸勢ヲ押ヘテ追討ヲ止メ。人數ヲ輕ク引上タリ。既ニ申ノ刻ニ及ヒケレハ、兩陣軍ヲ納テ各陣ヲ固メケリ

會津軍兵戰場普請附久保田合戰之事

昨日山王林前ノ戰ニ。佐竹勢利ナクシテ敗レケレハ。此後レヲ雪カント。今日ハ手痛キ合戰アルヘシト評定有テ。窪田ノ水田ヲ前ニ當。田村孫七郎顯季。田村月齋顯廣。片倉小十郎景綱。備ヲ双ヘ屯ス。明レハ十九日。諸將備ヲ儲ケ侍ケルニ。敵兵働ク氣色ハナク。會津義廣ノ家臣尾熊因幡ト云者。侍足輕四五百人引卒シ。陣場ノ道筋普請ノ爲用水ノ流アリシヲ切塞キ。奉行シテ道ヲ造ラシム。件ノ普請場成實カ陣ヘ近ケレハ。成實是ヲ見テ。ナヒヤカシテ見ンズルトテ。鐵砲ノ上手足輕八人選出シ。汝等彼敵ニ忍ヒ寄リ。鐵砲ヲ打カケ。敵若シカ、ラハ。爭スシテ引上ヨト下知シケレハ。八人ノ者トモ畔ヲツタヘ。畷ヲ便リテ忍ヒ寄リ。ネラヒ澄シテ放チケレハ。足輕三四人討倒シ。剩ヘ奉行尾熊因幡カ肩先ニ中ツテ。馬ヨリ落ケレハ。士卒因幡ヲ介抱シテ引上タリ。依之其日ノ普請ハ止メ。則鐵砲ヲ打掛ル。伊達モ同シク足輕ヲ大勢出シ。互ニ鐵砲打合バカリニテ。合戰ハナカリケリ。其夜寄手ニモ軍評定アツテ。大將義重ノ曰。昨今味方ノ先手軍利ナシ。明日ハ須賀川ノ軍兵先陣タルヘシトアリケレハ。須賀川ノ軍將河井甲斐。委細承知仕ル所ナリ。併ナカラ二陣ハ岩城ノ軍兵ヲ仰セ付ラルヘシ。若シ二陣會津ノ勢

ニ候ハヽ心底ニ落申サヽルコト候ヘハ。須賀川軍勢先陣ハ是非闘戰ヲ候ト。辭退ニ及フ。義重問玉ヒ。夫ハ難題ヲマヽシ訴ナリ。早速ハ身退ントスルニ似タリ。旗行ナリ。関東ノ爲差コサレタル上ハ。奇特ノ奉公何ト申ヲランナ。先土ニ別シテ訴詔アルヘカラス。是非須賀川先陣ハ會津勢ニ陣タルヘキト。飽マテ軍法定メラル。須賀川勢心ニ落ミヌトナレトモ。身ヲ退クトノ一言ニ恥テ。先陣ニソ定リケルカ。ヽル處ニ須賀川ノ軍勢須田中務。佐竹ノ長臣車中務重頼。陣ヘ來リ云ヤルハ。明日ノ御合戰ハ先ツ控ラレ可シ。然ハ其仔細ハ伊達成實陣場ノ如クニ構ヘ。其上南ハ舘田筒青田面皆水ノ引掛ヒトヘニ沼ノ如シ。此所ニテ御働キアラハ。久保田部由ヨリモ出合。三方ヨリ支ヘナハ。伊達無勢ナリトモ。由々シキ大事タルヘシ。先ツ部由ノ城ヲ取山青蓄シ。道ヲ塞クシテ。會津ハ山王林ヘ取掛リ。當陣ハ久保田ヘ押シ掛ナハ。伊達勢二ツニ割レテ。サヽヘ戰ンニ元ヨリ無勢ナレハ。救ヒ合コト叶ハス。本陣ヨリ救ヒヲ分ントスルカ。左ナクトモ政宗自ラ出戰必定ナリ。其時須賀川若城勢一致ニ成テ伊達ノ本陣ヘ取掛。勝敗ヲ一戰ニ決シ候ハヽ。圖ニ中リ可申ト云ケレハ。中務旧合ノ趣演達ス。義重其計略尤可然トテ。廿日ノ合戰ハ止ラレケル。此評定兼テ敵陣ヘ紛スラセル伊達ノ黒脛巾組忍ヒ者トモ聞出シテ。其夜ノ内ニ久保田ノ本陣ヘ告タリケル。又守屋筑後其比須賀川ニ奉公ニテ。此陣中ニアリケレハ。委細ヲ伯父守伯カ方ヘ内通ス。依之伊達方ニモ其心得ヲ以テ。當備ノ手當シテ待居タリ。サレトモ二十日ハ無別事。部由ノ通路モ障リナカリケリ。同廿一日久保田原本陣ニ於テ。四聞ノ諸將士ニ料理酒肴ノ饗應アリ。カヽル烈シキ於戰場。悠然タル振舞。政宗ノ大器量リ知ルヘシ。且ハ敵ノ氣ヲミクヘキ爲ノ計略トモ。取々ニ沙汰シケリ。寄手ハ軍法延々ニシテ。何ノ氣色モ見ヘサリキ。同廿二日津田近江・梅津藤右衛門ニ。足輕二百人相添ラレ。部由ト久保田ノ間ヘ塹ヲホラセ。其上部由備ノ

内ヨリ。鐵砲不ㇾ絶打セヨト下知セラル。依ㇾ之敵兩方ヘ可ㇾ働。通路不自由ニ成ケレハ。諸軍ヲ郡山ト久保田ノ間ヘ押下ロサセ。通路ヲ可二押切一タメニ。取出ノ構ヲ普請セラル。依ㇾ之寄手兩口ヘ可ㇾ働様ナカリケレハ。其模様モナカリケリ。同廿三日モ如二先日一會津勢戰場ヲ普請シテ。合戰ノ氣色ナシ。政宗近習ノ將士上下三百バカリニテ。本陣ヲ出ラレ。所々巡見アル、佐竹ノ軍勢遙ニ見テ。アレコソ伊達殿ナリ。小勢ニテ物見アルハ幸ナリ。押掛テ討ヤトテ。竹貫主水。志賀監物。花房太郎右衛門等。其外究竟ノ兵士百餘騎。雜兵合七八百。海道ヲ直ニ馳來ル。政宗自身下知セラレ。是ハ政宗直キニ物見スルト知テ。手詰ノ働キセン爲ナリ。此方ヨリ掛合セス。待受テ圖ヲ見合セ。一散ニ左右ノ深田ヘ追落セト下知セラル。士卒勇ンテ待カケタリ。佐竹勢竹貫主水。眞先ニス、ミ近付處ヘ。高森雪齋カ手勢後軍ノ爲來リシカ。此躰ヲ見テ雪齋自ラ下知シテ。足輕ヲ揃リ出シ。窪田街道ノ右手ヨリ田ノ廣畔ヲツタヘ。一文字ニ並ヘテキビシク鐵砲ヲ打セタリ。佐竹勢横合ノ鐵砲ニスクメラレ。矢庭ニ十餘人討コロサレ。手負三十人ニ及フ。依ㇾ之進ミ得スシテ色立ケレハ。時分ハヨキゾト下知ニ從ヒ。桑折治部。大町備前等。眞先ニ進ミ馳立レハ。竹貫カ先手押亂サレ。退ントスレト。一筋ノ街道ニテ。左右皆水田ナレハ。進退ニ途ヲ失ヒ。散々ニ敗レ崩レ。多クハ泥田ノ中ニテ突コロサレ。射コロサル。コ、ニ大和田佐渡ハ。久保田ノ旗本ニ殘リシカ。鐵砲ノ音ヲ聞テ。只一人馳來リ崩レカ、ル敵ノ中ヘ。會釋モナク切テ入。右往左往ニ當テ力戰ス。竹貫敗卒ノ跡ニ留テ。後殿シテ戰シカ。大和田ヨキ敵ト掛合セ。暫シ打合シニ。竹貫カ從兵二人主ヲ打セジト討テカ、ル。大和田一人ヲ切テ捨。一人ヲハ高股ヲ切落ス。其間ニ竹貫ニ隔ルコト半町程。大和田モ最初ヨリ薄手數ケ所負ケレハ。追掛ルコト不ㇾ能。竹貫ヲハ討モラシ。件ノ首二ツ取テ。本陣ヘ引返ス、白石若狹。原田左馬助。片倉小十郎。伊達成實モ、本陣ニ軍ア

リトテ俄ニ兵士ヲ引テ来リシカ敵ハ早敗走シテ味方ハ久保田ノ高畠ノ地ヘ打上シカハ、諸勢モ陣々ヘ打入、山上林ト久保田ノ高岡ト、於二ノ所勝鬨ヲ揚タリケリ、當時ノ合戰ナリケレトモ首百餘打トリ味方ニモ討死手負五十三人ニ及ヒケリ、同廿六日ニモ會津ヨリ大勢打立。西原ニ要害ノ普請シテ、片平助右衛門ノ定番ニ指ハ置、會津ノ宿老佐瀬・富田・平田等順番ノ廻リヲ以テ此處ヲ固メ、伊達勢ノ道路ヲ塞カントス、依之諸士是非取掛テ打破ント進ミケレトモ、原田休雪・伊東肥前 無勢ニテ此方ヨリ働カンコト必ス無用タルヘシト堅ク諸勢ヲ制禁シテ、敵ノ動クヲ待タセタリ、

久保田取出合戰并伊東肥前討死之事

久保田ニハ諸將打寄 サテモ今日戰ヒ不意ニ起リケレトモ勝利ヲ得ツル、ヿト盡テ軍法惡リナク士卒油斷セヌ故急變ニモ越度ナシ 是又山下但見ノ威力モ加ハル處ナラメト、各勝軍ノ賀ヲ述タリ 高森守齋カ日寄トカタノ如ク取出ノ音聞スルハ。ヨセテ寄サスノ術ナリ、味方小勢ナレハ、尾引出サン爲ナリ、敵ニノミ要害アツテ、此方ニ防戰ノ構ナキハ。對陣ノ備ニ非ス、敵ノ普請ノ間ヲ幸ニ、此方ニモ其設アツテ可、然ト云ナレハ、大將モ尤ト有テ、則足輕郷卒ノシテ富田川ノ外ニ大土手ヲ築ツケセ、其上ニ竹垣ヲ丈夫ニ結ヒ、要害既ニ成就シケレハ、外備ノ番手ヲ定メラル、鬮ヲ以テ一番ハ白石若狹・遠藤文七郎 二番ハ濱田伊豆・原田左馬助。三番伊達藤五郎。片倉小十郎ナリ。七月二日ヨリ番手初リ、順番ニ守ル之 然ルニ成實片倉ニ向テ云ケルハ、會郡由手ツメニ寄來ラハ、有無ノ合戰アラント兼日ノ定ナリ、敵最早郡山ヘ取詰メ城責ノ支度ト見ヘルナリ、掛合テ一戰ヲ初ンヤ、カク永々ト對陣ニノミ日ヲ經テ。普請ニ暇ヲ費シテハ、イツヲ期トセン限リモナシ、一先ツ此方ヨリ軍ヲ發シ、敵ノ動靜ヲ試ンヤト、景綱カ日、此度ノ合戰大切ナレハ、俄忽ノ手出シ無用ナリ 只對陣ニ機ヲ謀テ不意ヲ伺ンコト。古老ノ

評議ナレハ。一人ノ思慮ニ任スヘカラス。成實依之如何アラント遠慮スル處ニ、成實カ家來ニ遠藤駿河ト云者ス、ミ出、今日敵ノ取出ノ番ハ、平田左京助小旗ト相見得候。景綱カ曰、汝左京助ニ知人ナリヤ。駿河此以前會津ヘ使者トシテ罷リ越候節、度々平田ニ參會。懇切ニ候ト。景綱然ラハ其方ヨリ。平田カ陣中ヘ矢文ヲ射ルヘシ。サアラハ敵皆左京助ニ心ヲ置テ、内亂ノ端トモ成ヘシト下知シテ、駿河ニ書札ヲ書カシム。其狀ニ曰。

一筆令啓上候。先年爲使者若松罷越候時分、遂貴顏。色々預御指南。別而御懇切、於于今難忘候。其後者相互依弓箭無暇。雖不私、疎意之體所存之外存候。然者友元取出之番相見得。今朝ヨリ御小旗拜見仕候得共、依此節不能尊面候。御和睦相調ニ二度得御意度所希候。此方窪田之當番、成實景綱相勤在候。我等一命今日モ難計覺候條、一札如斯候。恐惶謹言。

七月四日　遠藤駿河

平田左京助殿

ト書テ取出ノ内ヘ射サセケル。暫ク有テ寄セ手ヨリモ一人出テ。右ノ矢ニ返報ヲソヘテ射返ス。披テ見レハ寔ニ他見ヲ憚ルト見ヘテ。草々一札ノ返禮マテナリ。

御狀忝存候。如仰相近候得共不得御意。御殘多存候。恐惶謹言。

七月四日　平田左京助

遠藤駿河殿

右ノ返札ハ大將一覽ノ爲、景綱コレヲ取納ム。同五日巳ノ刻程ニ、會津ノ加勢長沼ノ城主新國上總介盛重、兵士三十騎、歩卒二百人バカリ引卒シ、郡山ノ方ヨリ東北ノ取出ノカマヘト、久保田外行馬ノ間ヲ物見シテ通リシヲ、成實之ヲ見テ願フ處ノ幸、ヨキ合戰ノ媒チナリト、手勢二三百押出シ、遮テ道ヲ拒ム。景綱モ勢ヲ引テ一手ニ合テ、上總カ人數ヲ喰留ル、コレヲ見テ

ル。コレニ力ヲ得テ田手助三郎・桑折治部・黒木肥前等。踏止ツテ力戰ス。サレトモ會津佐竹ノ猛勢。イヤカ上ニ重リ來リ、終ニ肥前モ亂軍ノ中ニ討レケリ。政宗無心元思ハレケレハ。本宮ヨリ直チニ馬ヲ馳テ。窪田へ馳付玉フニ。大軍競ヒ蒐テ。味方既ニ敗走ス。政宗自身下知ヲ勵マシ。荒手ヲスヽメテ鬨ヲ作ラセ、山王林ノ原ヲ筋違ニ、會津ノ陣へ馳向ヒ。眞シクラニ突テ入ル、旗本健兵小梁川刑部・石母田左衛門・湯村右近・山岸孫市郎・大町備前・同源四郎・山路淡路等。面モ不振乘入レテ、左右ニ當テ相戰フ。會津勢思ヒモコラス。旗本ノ勢ニ駈立ラレ、足並亂テ見ヘケレハ。政宗守屋主伯・桑折點了ニ下知ヲ傳ヘ、足輕大將ヲ引分ケテ一所ニ備ヘ。會津勢ノ跡ヲ、キビシク鐵砲ニテ打スクム、依之義廣旗本ト先手ト二ツニ分レ 横合ニハ政宗アリ、跡ハ鐵砲ニ隔ラレ、戰ヲ捨テ引上ントスルトコロヲ、成實・景綱・原田・白石等モリ返シテ討テカヽレハ。引立タル大勢前後左右ヲ不顧。クツレカヽル程コソアレ。佐竹岩城ノ勢モ押立ラレ、心ナラスモ敗走ス伊達勢勝ニ乘テ。追討ニ討テ會津勢ヲ取出ノ内へ追入タリ。押シ續イテ柵破ントヒシメクヲ、政宗軍使ヲ馳テ嚴シク制シ。鐘ヲ鳴シテ軍勢ヲ引上ラル。柵内ヨリ鐵砲ヲ打カケタルバカリニテ、取出ノ内ヨリ喰留ル者モナケレハ。シツ〳〵山王林へ備ヲ立。暫ク此ニテ息ヲ休ム。成實景綱等カ勢モ、佐竹岩城ノ勢ニ對シ、白眼合シカ重ネテ戰ヲ催ス容子モ見ヘサレハ。段々ニ繰引ニ引テ。取出ノ前ニ暫ク猶豫シテ備ケルカ。日モ晩景ニ傾キケレハ。本陣ノ下知ヲ受テ。各陣々へ打入レ、兩陣トモニ篝ヲ焚キテ。用心キビシクソ見ヘタリケリ、今日巳ノ刻ヨリ。未ノ下刻マテノ戰ヒニ。伊達ノ手へ討取首三百餘級。味方モ伊東肥前ヲ始メ。名アル兵四十餘人。雜兵合二百餘リ討レケリ。サレトモ敵ノ取出へハ。兩度迄押入ケレトモ。味方ノ行馬ハ一度モ不破。斯テ本陣ヨリ使者ヲ以テ、成實景綱ニ今日手痛キ働キ。家中ノ者トモ手負討死餘多有之由。上下共ニ

昔時某ニリルハ、ニ、今夕ノ行馬番ハ濱田伊豆。原田左馬助ニ相替ル。波賀景則休息タルハ、シトナリ。則兩人番代トシテ役所ノ開濟ス。又白華ノ昔ヲ成實ニ逆ラレ今日下專ノ製ヒニ勝利ナルコト。畢竟成實ノ手柄ナリ。仍テ明日ハ會津佐竹ノ陣ヘ此方ヨリ仕掛。一戰ニ雌雄ヲ決シ度心ナレト異見區々ナレハ無是非存分ニ不任。日暮ニ旨趣クラル。偖又政宗頼母數思ハレシ伊東肥前討死ノ事。深クヲレヲ惜マレ夜トトモニ積傷ナリケレハ。大將ノ志深キヲト皆々感涙ニ及ヒケリ。

追善之連歌

大將肥前ヲ討死ヲ忘レ食業々トシテ心ニ不絶悲情忍ヒ難ク見ヘケレハ、諸士打寄テ日比嗜ハレシ連歌ヲ興行シ、且肥前カ亡ヲモ弔ヒ、大將ノ愁思ヲモ慰メバヤト、願ヲ寫シテ進ラセケリ。誠ニ風雅ノ德タル、ウカ[illegible]上矢前ノ軍中。骸ヲ草野ニサラシ、白骨ヲ泥土ニウヅメ、日夜鯨波ニ耳ヲ冷シ、狼煙ニ目ヲミボル、命塵芥ヨリ輕シ。名ヲ金鐵ノ重キニ比セント。コレノミ心ニカクル兵士トモナレトモ。流石ニ日ノ本ノ神ノ敎アリカタクモ敷島ノ道ノ餘リヲ拾ヒ連ネ。歌ニ和ラク東夷コソ優シケレ。

去リシ頃思ハサル戰出來テ、伊東肥前命ヲ君ニ奉ル。其コロ志賀甘釣齋常陸丈ノ私ノイキトヲリヲヤハラケンタメ。伊達ノ陣ニ日ヲ送ル、安積山ノ山ノ井ノ水手向ニ添テ。發句ナト各進シ勸メ玉ヒシコト。淺クハ思ハヌコトナカラ。事多ニ紛レテ打過ヌレハ。其替リニ弔ヒ仕フマツレトアリケルヲ。度々スサヒケレ共シキテ催サレ。指アタリテノムツカシキ座ヲノカレントテ。後ノ嘲ヲワスレ侍リヌ。

消カヱリオケハアタナル露モナシ　兼如

草ノ花ツム道ノアサタ　濱田伊豆景隆

中ノ音ニアリミ名殘ノ野ヲ分テ　耳釣青玄湖

月ノ光ヲ片敷濃袖　長安

眞木ノ戸ヲ涼シキマヽニサシツラン　傘如男如仙

軒端ノ宿ニ雨過ルメレ　大和田筑後忠清

オフカラス春ノ葉傳フ風ノコヱ　志賀左衛門成清

ヤトリ定メス鳥ヤ鳴ラン　志賀右衛門武清

何レモ如斯シテ大將ヲナクサメ申シケリ。扨此伊東肥前先祖ハ工藤左衛門尉祐經カ末孫ニシテ。伊達代々ノ家臣ナリ。中比安積氏ヲ名乘ル。安積ノ跡ヲ領セシ故ナリ。右肥前廟所元祿年中。子孫伊藤新右衛門碑ノ銘ヲ鐫リ。郡山奥ノ入口巽ニ當ル小川ノ脇ニ建ル。誠ニ義臣ノ魂骸ハ黄泉ニ朽ルトイヘトモ　其名後ニ殘ツテ往來ノ唇ニ止ル。可賞ノ至也。

伊東肥前石碑之圖附碑銘　（圖略ス）

私ニ云。一ト年爲仕宦。上東都。久保田郡山ノ間ニ於テ。古戰場ヲ尋ネ。巡見セシ折柄。伊東カ碑ヲ尋ネ後世ニ殘サン爲石碑ノ尺寸ヲサシ。躰ヲ圖ニ模シテ。今此書ニ載スルモ。忠戰ノ功ヲ末代ノ家士ニ示シ。龜鑑ト爲ントノ微意也。

石碑高サ五尺五寸。幅三尺。

臺石五尺ニ七尺　拜石三尺。

碑銘

奥州義士伊東肥前月心信公傳賛

公諱重信。號肥前。出奥州伊藤氏。父紀伊祐長　母某氏。大職冠鎌足公三十三世孫也。其祖安積薩摩守祐長。備前守祐時。皆有勳業於國。公嘗領安積郡。天正十三年。佐竹義重與會津義廣等。率三萬餘人。將襲中村城。太守伊達政宗公　命公與仲綱政長等。守高倉城。或議曰。今敵人經此城下。欲出戰陣則寡不敵衆奈何。公曰。與其束手待戮。孰若死戰。遂領二千人。衝軍大戰。得勝而還。十六年敵人又來攻城。公誓不屈。乃忿然單槍入陣。格鬪而死。葬於窪田。政宗公感其死難。大息不已。以其子重綱擢爲桃生郡主。孫重義。鎭小野城。事今大守羽林綱村

公不幸早世。元祿三年秋大守自武州還仙臺經
其墓所、謂孫成實曰、汝高祖有大節於國、恐後
無聞、幸有支那大雄禪師在佛國、盍不乞之一語以
傳於後乎、於是其孫以大守之言、白父重良與兄
重實、介其從弟靈松東乞余文、余感大守重義重
道、爲述此傳、並係以言、

天生英傑　義氣冲天　爲君爲國
矢志弗遷　際時有難　勁敵在前
奮威猛戰　得勝凱旋　由是偉望
湖海爭傳　及乎再戰　身國難全
雖保其國　厥身竟捐　世人聞訃
莫不悲憐　緊公之忠　義貫脊肩
漢之關氏　又不間然　神威赫々
曜後光先

元祿壬申五年冬十二月佛成道前之日
支那國黄檗道人高泉手書於良實方丈

岩城石川扱仙道表和睦之事

斯テ菅田ノ對陣日ヲ經ルトイヘトモ。互ニ雌雄ノ模樣ヲ謀テ。イツ夏付ヘキトモ見ヘサリケリ。然ルニ岩城左兵衛督常隆ハ。伊達佐竹會津ヘ何レモ親族ノ御中ナレトモ。數年田村領地ヲ爭ヒ。折節佐竹會津ノ催促アレハ。止事ナク一味アリシカ。此度ハ出陣ナク。加勢少々出サレケル。仙道表ノ對陣ヲ見合玉フ處ニ。佐竹會津二萬三千餘ノ軍卒ト雖トモ。手負討死ノ外四方ノカリ武者ハ。忍ヒ々々ニ逃出日便衰シテ。殘兵二萬ニ不過サレトモ未タ大軍ナリ。伊達勢ハ追々ニ馳加リテモ。漸ク七千ニ不足。然レトモ大軍ニ對シテ。一度モ越度ナク。兵勢少シモ屈セスシテ。猶モ兩家ヲ呑ントス。然ルニ上ハ多勢トイヘトモ。後日敗北センコト疑ヒナシ。累年枝ヲ連ネタル。一門ノ終リヲ見ンコトモ淺マシケレハ。何トソ和睦ノコトヲ取扱ヒ見ハヤト思ハレケレハ。七月十日石川大和守昭光ヘ參會アリ。密談アリケルハ。此度安積表ノ對陣。伊達方勝利崩シ見ヘテ。會津佐竹ノ方兵糧至テ衰ヘタリ。抑伊

達佐竹會津ノ三家トモニ。親族ノ因ミ有ナカラ。サセル遺恨モナキニ、同血ヲ爭フコト思ヒサルニ非スヤ、足下ハ義ヵ父親隆トハ兄弟ナリ。然レハ義重ト某ハ、足下ノ甥ナリ、又政宗ヘモ足下ハ叔父ナリ。義廣義重ノ舍弟ナリ。須賀川成行ハ。足下ノ姉聟ナレハ、政宗ニモ某ニモ伯母聟ナリ　高森雪齋モ足下ノ兄弟ナレハ、某ニハ伯父ナリ。其餘ハ從弟ノ因ミ。斯ク親交ノ緣アリナカラ、共ニ不和ノ合戰、他家ノ指笑遁ルヘカラス。某政宗ヘ直談申スヘキコトナレトモ　前年高倉合戰ノ砌リ佐竹會津ノ催シニテ、止事ヲ不得出張ニ及ヒ候處。此加勢ヲ政宗遺恨ニフクムヘキコト無餘儀。去ルニ因テ直談ニハ扱難シ。足下ハ其頃白河ト同陣タリト雖トモ、軍ノ場サヘ蹈玉ハス　催促ニ應シタル迄ナレハ、政宗サノミ恨モアルマシケレハ。足下ノ執持ヲ以テ。仙道表對陣双方和平アルヤウニ　扱ヲ入ラレ候ヘト有ケレハ　大和守委細ニ聞屆ケラレ　恩命其理至極セリ　某モ度々佐竹會津ノ催シニ　止コトナク及加勢トイヘトモ　政宗ヘ意趣ナケレハ。八大坊ト云山伏ヲ以テ度々及音信ニ上ナレハ　隨分扱ヒ申サン、如詞高森雪齋モ肉緣ナレハ。彼是熟談致サント請合レケレハ。常隆ハ岩瀨ヨリ岩城ヘ皈ラレケリ。大和守昭光七月十九日久保田ノ本陣ヘ參入アツテ。先ツ高森雪齋ニ對面セラレ　委細密談終ツテ。雪齋政宗ヘ演達ス。對顏アルヘキ由ニテ。桑折點了・小梁川泥蟠・原田休雪。亘理美濃。伊達成實、原田左馬助。白石若狹。濱田伊豆。片倉小十郎。彼是十二人列席ナリ　雪齋昭光ヲ案内シテ著座アツテ、互ニ遠會ノ述懷其禮義過テ　昭光和睦ノコトヲ演說アリケレハ　政宗不ニ取敢、凡ソ敵兵ハ三萬ニ及フ大軍ヲ以テ和睦センハ。兵機弱リタル故トハ云ヘカラス、政宗ハ僅五千餘ノ小勢ナレハ。勢ヒ盡テ。和ヲ求メタリトイハンニハ。弓矢ノ瑕瑾ナリ。其上父輝宗ニオクレ、若輩ノ獨夫可賴兄弟モナシ、只可賴ハ叔父力ニスヘキハ從弟輩ナルニ。左ハナクシテ右ノ緣輩却テ我領地ヲ貪ラント　義重義廣

ノ扱ナレハ不及異儀、領掌ナリ、斯テ寄手ノ取出ノ番モ久保田外構ノ番兵モ、コレマテノ通リ守衛シケレトモ。鐵砲ハナツハ制禁ナリ。斯テ八月四日岩城ヨリノ使者矢吹薩摩ト云者黒母衣ヲカケ乘來リ。久保田ノ本陣ヘ參著シ、高森雪齋ノ家臣ト原田休雪ヲ呼出シ、義重ニモ同意アツテ。御對陣御和睦相調候由、申シ斷テ歸リケル、仍テ同五日佐竹義重ヨリ。佐倉隼人ヲ使者トシテ久保田ノ本陣ヘ差越サレ。和睦ノ儀ヲ演サセラル、同六日佐竹ノ陣ヘ政宗ヨリ返禮トシテ。桑折治部ヲ差越サル。同八日佐竹一家ノ長臣小埜彥三郞久保田ヘ來リ成實ヲ賴ミ。政宗ヘ御禮ノ日見ヲ賴フニヨリ。則對面有テ皈サレタリ斯テ陣拂ノ約日ヲ定メラレ。双方トモニ天正十六年八月十一日。佐竹會津須賀川伊達ノ諸陣場悉ク引拂ヒ各皈陣セラル。政宗ニハ其日本宮ヘ著城。翌十二日宮森ヘ皈陣ナリ。政宗又石母田左衞門。中島伊勢ニ命シ。今度ノ對陣ニ粉骨ヲ盡シタル兵士並ニ討死ノ者トモ委細ニ記錄シテ可ニ指出ニナリ、兩人承ハリ。軍忠ノ輕重悉ク諸將ニ尋ネ、一々筆紙ニ記シ指出ス。政宗一覽アツテ軍功ノ輕重ニ應シ、大刀。刀。武具。馬具。金銀等賜ハリ、討死ノ輩ニハ其跡目々々。賞祿ヲ施シ行ハレケル。

伊達秘鑑卷之二十二終

伊達秘鑑卷之二十三

東奧仙府　蕪々軒　編集

伊達最上和睦附泉田安藝歸參之事

最上義光先立テ羽州長井ノ庄ヲ掠ント巧マレ伊達家臣鮎貝太郎ノ引付アルニ依テ政宗早速ニ最上出馬ト思ハレケレトモ仙道表急ナルニ依テ最上ノ手キレハ延ラレタリ。然ルニ義光ハ會津佐竹へ内評アッテ仙道合戰ノ間ヲ窺ヒ長井庄米澤迄モ乘取アントト評議アリケル處ニ米澤ヨリ長井境ノ城々堅固ニ守リ油斷ナケレハ速カニ手ニ入レ難ク是又手切レヲ延ラレシ處ニ安積表ノ對陣政宗小勢ト聞トモ會津佐竹須賀川ノ大軍ニ對シ數度ノ合戰ニ一度モ不覺ノ後レナク毎度勝利ヲ得ラレシコト隣國ニ隱レナク忍ヒニ付置レシ者共追々ニ告來レハ義光倩(ツラツラ)分別アリ、一門一家ノ長臣トモヲ山形ノ城へ召シ集メ評談アリケルハ政宗仙道表合戰ヲキクニ大將ノ器ニ叶ヒ其上武道天命ノ至ル所ナリ我今是ニ敵センハ後災ヲ招クニ似タリ和睦ノ備ヲ整ヘラサント思フハイカニトアリケレハ。一座ノ面々元來親族ノ御中ナレハ何レモ和平アレカシト思ヒ折柄ナレハ一應ノ評ニ及ハス可然ト同シケレハ則米澤へ使者ヲ以テ輝宗ノ後室義光ノ御妹東館へ細々ト直言ヲ送ラル。使者ハ延澤能登守ナリ則米澤へ參著シ政宗ノ母公東之方へ達之。母公不斜喜ヒ玉ヒ則久保田表ノ陣中へ使者ヲ馳テ右ノ趣キ具ニ仰セ遣サレケルニ政宗承諾アッテ義光ノ暴動ヒ悟ケレトモ伯父ト云ヒ殊ニ母公ノ命ト云ヒ彼是違背申スヘキニ非ストト御返答アリケレハ延澤喜ヒ急キ山形へ馳セ皈ル此旨義光ハ演達ス母公ヨリモ有ヒノ使者ニ盟約ノ趣彼是義光へ仰セ遣サレ天正十六年七月九日米澤ト最上ノ境ヒ北條郡中山ト云所へ東ノ方出輿アリ義光ニモ出馬アッテ於此處御對面和睦ノ首尾相濟ヒ。東ノ方米澤へ皈輿アレハ、義光ニモ山形へ皈城ナリ。

最上ノ諸將モ皆賀ヒニ構エサリケリ。此旨則米澤ノ守臣屋代勘解由兵衞景頼、烏使ヲ飛セテ和平ノ都合。久保田ノ一本陣へ披露シケル、依之先年大崎新沼合戰ニ諸卒ノ命ニ代リ。大崎義隆へ證人ニ參リタル泉田安藝重光、義光ノ預リニテ山形ニ有ケルカ、此度ノ和睦ニ付テ、泉田ヲ義光ヨリ米澤へ返サレケリ。誠ニ重光カ身ノ上ハ蘇武カ胡國ニ囚ハレ。十九年ノ春秋ヲ經テ、故郷へ皈リシ風情、今眼ノ傍リノ悦ヒ也。則米澤ヲ立テ、七月十五日久保田ノ陣へ參向シケレハ、信友輩出合テ、サナカラ蘇生ヲ見タル心地ニテ、互ニ隨喜ノ袖ヲヌラシケル。重光モ往事ヲ語リ。近年弓矢ノ御勝利ヲ悦ヒ又各粉骨ノ働キヲ感シケル。政宗重光ヲ召出シ大崎軍役ノ節、諸卒人命ヲ救ヒ助クルコト。武士ノ忠義コレコリ大義ノ至レルハナシ。誠ニ伊達ノ面目ナリ、累年辛勞至テ悲情ヲ盡スナリトテ、褒美ノ餘リ一刀駿馬小袖五重賜之。重光厚恩ヲ謝シ、感涙餘ツテ退出シ夫ヨリ成實カ陣所へ見舞ヒ、頃日軍事ノ有増ヲモ問談シ。重ネテノ軍役ニハ相勤ムヘシト約シケリ。

三春城代附浪人拂並政宗田村出馬之事

同年八月十九日。田村ノ四家老田村月齋、同梅雪・同右衞門・橋本刑部、宮森へ參上シ。白石若狹ヲ以テ。今度久保田表ノ首尾、皈陣ノ賀祝ヲ申シ上ル、則四人ノ者トモニ對面アリケレハ。月齋始メ申シケルハ。當夏相馬義胤。三春ノ城ヲ乘取ントセラレシハ。本丸ニ後室於北殿居住セラレ、相馬へ心ヲ寄ラルヽニ依テ。家中ノ心區々ニテ、一日モ安堵不仕。剩サへ大越紀伊。相馬へ頻心ヲ通ハシ候。兎角ニ後室ヲ別所へ移シ。城代居置レ給リタシト願ヒケル。依之舊臣等ヲ集メ。內談アッテ田村一門孫七郎顯季ヲ立ラルヘキ由ナリ。四家老承リ。伊達ノ御家ヨリ相續ノ義ハ、各別田村一門ニ於テハ、孫七郎外ニ無之、大膳大夫清顯弟田村善九郎清重ノ嫡子ニテ清顯現在ノ甥ナレハ、誰有テ異議無之旨申シ演べ、各三春へ皈リケリ。則白石若狹・守

其主信片倉小十郎ニ人ヲモ添ヘ差遣サレ四家老ハ申談シ田村孫七郎ヲ以テ三春ノ城代トシ後室ニハ田村右衛門居城舟引ノ城ヘ隠居アルヘキ由政宗命ノ旨申シ渡ス。後室ハ世ノ中恨メシク思ハレケレトモ無是非シテ舟引ヘ移ラレケリ。孫七郎ハ三春ノ城ヘ入替ル。門閥ノ諸士不殘登城シテ形ノ如ク祝儀アリ相馬ヘ心ヲ通セシ者トモハ苦笑シテソ見ヘニケル其後後室ソハ相馬ヘ引トラレ小高ノ後ノ山ハ堤谷ヲ營作アッテ置マイラス。コレヲ堤谷御前ト申シタリ後ニ相馬没落ノ時政宗ハ引取上セテ後死去ナリ。同廿八日四家老宮森ヘ參上前日ノ謝儀ヲ演ヘ逆モノ願ヒ孫七郎ニ諱ノ一字ヲ賜リ度ヨシ之ヲ申ス。政宗他邦ヘ一字遣スコト遠慮アリトイヘトモ。望ニ任セ宗ノ一字ヲ賜ハル。田村孫七郎宗顕トソ名乗ケル斯テ政宗田村ノ仕置沙汰セラレ米澤ヘ歸城アルヘシト思ハレケル處ニ。田村月齋始メ各又以テ宮森ヘ參リ片倉小十郎ヲ以テ申シケルハ。田村家中所々ノ浪人窃ニ國ヘ打入リ牢人徘徊スルニヨリ相馬ヘ心ヲ合セ當代厚々ヲハ引入レ不義ノ企不絶安心不仕候。先年宿老清顯ノ代同様ノ義有之候ニ付浪人擯有リ下中御吟味仕ル其先例ニ任セ田村下中モ浪人ヲ擯ハレ可然由申スニ依テ高倉近江。小梁川泥蟠・桑折宗長・原田休雪ヲ召シテ後室隠居ノ上孫七郎城代ノ義沙汰セラレ未タ日数モ不經ニ浪人擯ノ義我國意ニ非ス。満顕ノ代ヨリ身ノ程ニ應シ忠勤ヲ勵ミ恩ヲ得タル者トモナリ。少シノ惡事アリトモ。此上ハ志ヲ改ムルニテソアラン。舊惡ハ當善ヲ免シ當惡ハ前忠ヲ以テ宥ムルコト。將ノ守ル處ナリトアリケレハ各尤ト同從ス。然ルニ田村月齋再訴シテ申ケルハ仰ノ趣キ理ノ當然ニ候ヘトモ彼惡黨ノ奴原ヤヽモスレハ野心ヲ挾ミ家中ヲ騒カシ内亂ノ本ニ罷成候前車ノ覆ルヲ見テ。後車ノ誡トスルノ理。後日ノ爲ヲ以テ御沙汰被下度ノ旨推テ願之。政宗默止難ク云所モ又謂レナキニ非ス。小火消安キヲ塞ノシテ。炎

盛ノ蔓ルニ至テ難防、後日ノ濫觴ヲ思フモ無餘儀。申ス通リ沙汰セラルヘキヨシナリ。四家老喜ヒ退出シタリ依之九月四日原田休雪・片倉小十郎兩人、三春ヘ差越サレ四家老ニ對談シ。田村領中浪人拂申シ渡シケリ。然ル處ニ田村梅雪・顯元・同右衛門顯綱父子共ニ兼日相馬ヘ通シタル上ナレハ、相馬浪人三十八人同道シテ大越紀伊カ在所小野ノ地ヘ引除ケル。兩人ノ者トモ今更相馬ヘ引除クヘキトハ思ヒ不寄。月舘刑部モ後悔シタリ依之諸人不審ヲナス折柄ナレハ米澤皈陣モ延ラレ。政宗ニモ三春ヘ移ラル然ルニ梅雪右衛門モ大越ト共ニ相馬ヘ立退クヘシト諸人思フ處ニ。サハナクシテ引替テ岩城常隆ヘ申シ寄ケリ。依之常隆ヨリ若松紀伊ヲ使者トシテ三春ヘ差越サレ。梅雪右衛門父子トモニ田村ヲ立退候義。常隆ニ於テモ口惜ク存候。シカシナカラ田村一門ノ義ニ候間。赦免ヲ加ヘラレ、本ノ如ク奉公無別義様。宥恕可給ノ旨ナリ然レトモ早速披露ハ如何ト。諸老臣慮テ、

先ツ若松紀伊ヲハ亘理美濃宿直ニ留置、梅雪父子逆心ノ浪人ヲ圍ヒ置、其方人トシテ田村ヲ立除候コト、別シテノ重罪ナレハ、タトヘ常隆ノ御斷リニテモ、早速赦免ナリ難キ道理ニ候條。マツ〳〵此度ハ延引有テ。永クノ御訴訟可然申取計ラヒ、岩城ノ使者ハ皈シケリ。政宗ニハ三春仕置アツテ、門澤栗手兩地ハ大越紀伊境ニ付。警固ノ爲メ田村ノ者共籠メ置レ。政宗米澤ヘ皈陣、トヤ角アツテ十月始ニ及ヒケリ。會津佐竹ノ和睦。岩城ノ肝入タルヲ以テ。御禮ノ使者トシテ。片倉小十郎ヲ岩城ヘ差越サル、景綱使者ヲ勤メテ岩城ヨリ皈ル時、成實大森ヘ出向ヒ、岩城ノ容子ヲ尋ケレハ、景綱カ曰。田村梅雪大越紀伊等伊達ヲ背キ、常隆ヲ頼ミシ以來ハ、岩城中上下トモニ田村ヲ掠ント。皆々心ヲ掛テ相見ヘタリ。來年ハ必ス岩城ハ敵トナラント思フヨシ語リケレハ。成實カ曰。此方油斷ノ内、岩城ヨリ手切レアラハ内々ニ心アル田村者トモ。皆々岩城ヘ附クヘシ然ラハ事大事タルヘシ。去年大内備

前陣ノ時、舎弟片平助右衛門モ同心タルヘキ處ニ、内欲隙有テ未タ其沙汰ニ不及、岩城ヨリ手出シナキ内、此方ヨリ手何レ可然ト、成實景綱密談シテ別レケリ。去ル月初メニ小十郎方ヨリ成實方ヘ書ヲ以テ、其間密談ノ義被遂度、御同意ニ候間。急キ片平助右衛門ヲ招キ、再三有ヘキノ由ナリ。仍テ此旨片平方ヘ申シ遣シ可然キセヒ大内備前米澤ニアレハ、備前方ヨリモ使ノ可遣ト云遣ル、成實ヨリ添簡セシムヘキノ旨返答ニ付、同月二十日大内備前方ヨリ使者ヲ遣ル對ニ本松ヘ直寄成實書簡トモニ受取、片平ヘ赴キ、添簡トモニ相渡ス、助右衛門承届シテ、則味方ニ属スヘキ旨御返答申シ遣ル、去ナカラ今深雪ノ刻ニ候間、年明ケ御出馬候ハヽ、手切レ可仕ト申遣リケリ。

政宗米澤越年ニ片平助右衛門属ニ味方事

去程ニ政宗ニハ仙道安積表對陣勝利アツテ、田村家ノ仕置ヲ沙汰セラレ、米澤ヘ皈城アレハ、御留守居屋代勘解由兵衛景頼・鈴木日向延重ヲ始トシテ。一門一家一族門葉ノ諸士、西山ノ城ヘ出仕シテ謁見シ、此度ノ軍利ヲ賀ス。既ニ玄冬素雪遠ニ日ヲ追フ、明レハ天正十七年朔日ノ空、新玉ノ春ニナリシウツリケレトモ、梅ハ雪ニ埋モレ、鶯ハ氷ニ閉ラレテ、未タ溪ノ戸ヲ出テス、斯ル雪國トイヘトモ、今朝出ル日ノ温カニ。霞モウスク引ケハ、一心侍チ得シ春ノ氣色、自カラナル野モ山モ改リヌル心地ナリ。家例ノ規式不相替、領中ノ諸士參向シ、元三ノ祝儀嚴カナリ。斯クテ正月廿七日、計進成實ヲ招カレ。片平助右衛門先達テ味方ノ約アリトイヘトモ、未タ會津ト手切レセス、急キ招キ寄テ仙道苦戰ノ城々ヘ發向アルヘシ、片平カ心底尋可承ノ旨命セラル。依之成實翌廿八日居城二本松ニ立皈リ、片平助右衛門親類方ヘ右ノ趣キ申シ遣ル。助右衛門無別心、則領掌シケレハ、則米澤ヘ進之トナリ。舊冬ノ雪今ニ殘雪深ク、近々ノ出馬難成ケレハ、會津ノ手キレノ義ハ、差圖可待旨ナリ。成實又此趣キ片平ヘ云ヒ渡シ、カヽリシカハ助右衛門ハ雲頂センコトヲ

憚リ。同二月廿日成實ニ參會セシメ度旨申シ來ルニ就キ、米澤ヘ伺ヲ立テ。同廿九日安積郡堀ノ内ト云處ニテ參會ス。助右衛門申シケルハ、兄大内備前伊達ヘ附屬仕ル段。會津義廣ノ耳ニ達シ。某ニ疑心アッテ證人ヲ取置キ　其忍ヒヲ付置レ候。依テ早速味方ニ參リ手切仕ント存スル處、殘雪故御出馬延引。殊ニ頃日御不例ノ由。依レ之手キレモ相延ヘ可レ申。旁々無二據所一次第ナリ。會津ノ朋輩。須賀川岩城ノ家臣トモ方ヨリ。折節書翰ノ往來モ有レ之トコロ。米澤ヘノ遠慮迷惑ニ存スルナリ。若シ浮說アッテアシク耳ニ達シ候ハ、。身ノ浮沈ト存スルユヘ。此旨談話セシメン爲メ。參會申ス處ナリト、成實聞テ一々遠慮ノ旨其理アリ。此上ハ少シモ氣遣アルヘカラス。只敵方ノ疑心ナキ樣ニ隨分計略ヲ回ラシ候ヘト。挨拶シテ兩人ハ別レケル政宗ニモ助右衛門遠慮其理アリ。智アル者ナリト宣ヒケル、斯テ米澤ノ調儀其沙汰アリケレハ　助右衛門同三月十七日手切レ仕タル由米澤ヘ注進シケリ。

岩城常隆田村出陣附大越紀伊事

天正十七年正月下旬政宗落馬アッテ。足ヲ折キ玉ヒシカハ、治療アッテ平愈ナレト。未タ行步常ナラス。依レ之片平表ノ義モ及二延引一何方ヘモ出馬ナカリシカ、追日全治アッテ今ハ早出馬ノ催シアリケレハ片平モ會津手切シテ注進シタリ　偖又岩城常隆ニハ　此コトヲ聞レ、去年於二久保田一對陣ノ砌リ、佐竹會津伊達自今以後平和入魂タルヘキ旨。我媒ヲ以テ石川昭光ヲシテ、和睦ノ扱ヒ事濟ム所ロ　政宗其誓約ヲ破リ。片平ヲ引付、再亂ヲ發スルコト、奇怪ノ沙汰ナリ。此ハ我モ田村ヘ手ヲ切ントテ。一千餘騎ヲ卒シ　三月廿四日田村領ノ内小野ノ地ヘ常隆出張アッテ。小野ト大越ノ間鹿股ノ城ヘ押寄ラル　城中小勢トイヘ共、少シモ不レ怠防戰シケルカ。三春ヘハ道遠ケレハ、加勢急ニ不二馳付一五六日ハ持怺ヘケレトモ　防クヘキ力盡キテ、常隆ヘ詫ヲ乞ヒ。則城ヲ明渡シ　城兵殘ラス三春ヘ引、ノキケル。則常隆小野ノ城ヘ入替テ在陣セラル　此

趣キ米澤ヘ注進ヲ馳ケレハ、則泉田安藝・大條尾張・桑
折治部・小梁川部・村田民部・瀬上淡路・牛坂右近ニ五
百餘兵ノ差ソヘ、三月廿九日三春ノ加勢ニ差向ラル。
サテ又大越紀伊ハ、伊達ノ威勢日々ニ盛ンナルニ恐
レ、斯テハ末々身ノ大事ナルヘシト思ヒ、常隆小野ニ
在陣ノ内、郎等本多孫市ヲ以テ、田村月齋同宮内父子
ニ頼ミ入リ、一旦ノ不義ヲ以テ。田村ヘ敵對致セシコ
ト今更後悔甚シ、只今迄ノ不義、赦免アッテ永ク當家
ヘ勤度旨願ニ候、此趣キ米澤ヘ披露執成頼入ノ由、様
々前非ヲ悔テ申シ送ル、依之止コトナク、月齋宮内白
石若狭方ヘ書札ヲ以テ、貴邊ト成實ト兩人ヘ對談ノ
義候間、中途マテ出足會談玉ハルヘシトナリ。依テ成
實若狭同道シテ、四月四日白石カ領地ニ於テ對面ス。
月齋カ曰、大越降參ノ品々申シ越ス通、如前々御宥
免ニ於テハ。岩城ヨリ大越ノ固メニ置レシ車籠子山
ノ二頭ヲ打果、本丸ヘ人數ヲ引入、本公可仕由申シ送
ル、去ナカラ某父子カ首ヲネラヒ、岩城ヘ手寄シ者ナ
レハ。納得ハ致サネトモ、米澤ノ御耳ニ立サルハ如何
カト存シ、カクハ對顔致スナリ、若狭聞之曰。早々米
澤ヘ注進可然ト、宮内重ネテ大越不義ノ品々ヒトヘ
ナラス候間、我々申シ直シ候義ハ迷惑ナリ、成實宗玄
カ曰、大越頻リニ先非ヲ悔、降參致ス上ハ味方ノ手ヲ
ヒロケ候コト殊ニ忠節ノ義ニ候ヘハ。各ノ注進可然
トスヽメラレケレハ。田村ノ爲メ政宗ノ御爲、宜シカ
ルヘキコトナラハ。意趣ヲ殘スヘキニ非ス。此上ハ米
澤ヘ注進可仕トテ、青木不休ヲ以テ具ニ米澤ヘ申達
ス。政宗ノ曰、大越事相馬ヘ手寄、田村ノ者トモヲ引
付、逆意ヲ企ルコト口惜キ者ナレトモ、月齋宮内取次
ト云ヒ、其上岩城ノ二頭打果スヘキ由、サアラハ宥免
アルヘシトテ、本領相違アルマシキノ墨付ヲ相渡サ
ル、不休立皈テ宮内父子ニ相渡セハ、則其趣キ云ヒ合
メ、本多孫市ニ渡之、孫市急キ門澤ヘ赴キケレトモ
岩城勢城ヲ固メ、孫市大越ニ出アフコト不能、常隆ヨ
リハ大越コト田村ヘ調義ノ由、其旨可正ヨシニテ、北

江刑部ヲ大將トシテ。軍勢大越カ陣ヘ入リ。相尋ラル旨アレハ。早々常隆ノ本陣ヘ參ルヘシトテ。引立テ小野ヘ赴ク。則紀明ノ上大越ハ岩城ヘ押コメラレケリ。抑此一義露顯トイフハ。田村宮內方ヨリノ書狀ヲ紀伊懷中シ。落シタルヲ大越カ妻コレヲ見付　我弟大越甲斐ニ見セケルヲ。則常隆ヘ告シヨリコト顯ハレケリ。甲斐ハ忠節ノ者ナリトテ。常隆ヨリ則大越ノ地ヲ封賞セラル。此甲斐ハ紀伊カ一門ニテシカモ小舅ナリ。故ニ大越モ常ニ心ヲユルシ。兼テヨリ大事モ明シ語リケルニ。己カ立身ヲ以テ一門ノ情ヲ忘レテ。忽チニ敵トナリ。大越ヲ亡シケルコソ人非人ナリ。サレハ清少納言枕草紙ニモ。近クテ遠キハ妹背ノ中ト書タリシモ。是ヤ紀伊カ落シタル文ヲ、妻ノ身トシテ他見セシメ。家ヲ亡シ夫ヲ失フコソ淺マシケレ。コレ偏ニ大越カ兼日不義ノ志ヨリ古主ヲ背キ。慾心ニ武士ノ道ヲ忘レタル。天罰トソ申シ合ヒケル。

高玉阿古島落城之事

片平助右衛門手切シテ。會津ヲ背クニ依テ、岩城ヨリモ再亂今ハ出馬ナクテハ叶フマシト。米澤ニモ陣觸有テ。天正十七年四月廿二日、政宗米澤ヲ出陣アル。未タ落馬ノ痛ミ不快故。本宮ヘハ行程十五里ニハ過サレトモ。其日ハ板屋ニ宿陣アッテ、翌日廿三日伊達ノ大森ヘ著陣ナリ。同廿七日伊達成實。片平助右衛門ヲ同道ニテ。大森ヘ參向シ於本陣謁見ス。則盃ヲ賜ハリ　仙道筋ノ容子ヲ尋ネラル　助右衛門夫々ニ演說シテ退出ス　五月三日本宮ヘ著城アッテ。軍ノ評議相極リ。同四日先ツ阿古島ノ城ヘ押寄ラル。先陣ハ片平助右衛門親綱、右陣ハ富塚近江。從フ輩ニハ高野壹岐・山岡志摩・大町參河・白石內記・牧野出雲・鈴木和泉・五十嵐信濃、左陣ハ濱田伊豆　隨將ハ飯田紀伊・武山出雲。本宮尾張・高倉近江・中島十郎。中軍ハ白石若狹。總大將ニ高森雪齋政景。軍奉行原田休雪長成、都合二千五百餘兵。其夜ノ三更ニ本宮ヲ立テ。明星ノ光リヲ便リトシテ。竊ニ押寄セ。阿古島ノ地ニ著陣シ。東雲ノ空ヲ

待ケルトコロニ、早右ノ手ノ軍兵旗ノ手ヲ卸シ。螺鐘ヲ鳴シ色メキテ見ヘケレハ、左ノ手ノ軍勢モ備ヲスヽムルヲ見テ、先陣片平助右衛門ヒタ〳〵ト取掛ル。闘フ事一町餘出輪ニテノ圍マテ責詰鐵砲ヲ打カケタリ。蒲田富實リ備モ城近ク押寄、同シク鐵砲ヲ放チケレトモ城兵敢テ不出合。防キ矢少々會釋シタルマテナリ。高玉雪下ニ知シテ容子アル體ナレハ、先ツ不攻シテ人數アゲヨト傳ヘケレハ、則諸手ノ軍兵ヲ打上ケリ。然ル處城主阿古島治部、成實ヲ以テ申シ入レケルハ、城兵助命アルニ於テハ、本丸ヲ開渡シ立除度ヨシ訴訟スルニヨリ。左アラハ望ニ可任トテ、成實家臣遠藤駿河ト云者ヲ城中ヘ人質ニ差越シ、寄手ノ惣勢ハ東ノ原ヘ打上。成實手勢バカリ退ク。備ヲ立横目十人餘リ指ソヘ亂妨ヲ禁シメ。城兵相違ナク引拂ヒ皆苗代ヘ引退キケリ。城ニ阿古島治部、高玉太郎右衛門・荒井杢允・石川彌平トテ、二本松譜代ノ武士ニテ、何レモ名ヲ得シ者トモナルカ。二本松落城以後何レモ會津ヘ爲附ス。其中ニ石川彌平ハ成實カ旗本ニ屬シケリ。然ルニ荒井杢允ハ高玉カ妹聟ニテ、阿古島加勢ニ籠城シタリケルヲ、吉岡喜ノコトナレハ、石川彌平杢允ヲ送リシ、荒井石川ニ向ツテ曰、我ハ身ハ一ツニテ命二ツ持チシナリ。一ツノ命ハ今日阿古島籠城ニテ治部ニ取セタリ。今一ツハ高玉城責ノ時、是ハ太郎右衛門ニ取ラセ候、手並ノ程ハ明日伊達永井ノ衆ニ見セ申サントテ、高言シテ別レケリ。誠ニ荒井大剛ノ申シ分ナリト。皆々褒美シタリ。翌五日高玉ノ城責觸渡サル。先ツ北口ノ寄手ハ伊達成實大將ニテ、隨將柴田兵庫・濱田右兵衛・小野寺若狹・小泉修理・湯目式部ヲ始メ、其外諸士都合五百餘兵。南口ハ原田左馬助大將ニテ、下郡山治部・宮内因幡・湯村右近・小山田主膳・大友八之助・中村右衛門・伊東將監等、其外五百餘東ノ口ハ大手ニテ片倉小十郎。隨士ノ輩ニハ大浪内匠・瀨江四郎・芳賀丹波・山本傳内。丹野左内・長島伊賀ヲ始メ五百餘兵。軍大將亘理美濃。奉行桑折點了不休

齋、都合三千四百餘兵、高山ノ西山ツヽキ一方開キ三方ヨリ可攻旨本陣ノ下知ニ因テ五日ノ黎明ニ高玉ノ城ヘ押寄セ城際マテ取詰タリ。助右衛門奉公始メニ昨日阿古島ハ手ニ入タリ。此城バカリ片平阿古島ノ間ニ有ヲ持抱。草々ニ攻落スヘシト有テ、成實ハ北方ニ備ヲ立テ、片倉ハ大手口其外ノ諸軍相圖ヲ定メ。喚キ叫ンテ攻カヽル。城ノ主將高玉太郎右衛門ハ先年成實カ手ノ志賀三之助ニ腰ヲ打拔レ、チンバナリシカ馬ニ乘テ城内ヲ走リ廻リテ下知ヲナシ。城中ノ防矢雨ノ如ク、打出シ射出シ、ケレトモ、寄手多勢ナレハコトヽモセス竹束築ヨセ築ヨセ。塀下迄取詰ラレ。城兵怺ヘ兼テ、五十騎バカリ打テ出散々ニ攻戰アリサレトモ多勢ニ無勢ナレハ。片倉カ手ニモミ立ラレ、木戶ノ内ヘ逃ゲ入ルヲ付入リニ城内ヘ十騎バカリ押入タリ。城兵門ヲ打ントスルヲ。打セズト挑ミ爭フ處ヲ。片倉急ニ下知シテ。百人バカリ群々ト押入タリ。コレヲ見テ成實原田カ手ノ軍兵モ、柵ヲ破リ塀ヲクヅシテ南北ヨリ攻メ入タリ。城主太郎左衛門叶ハシトヤ思ヒケン、走リ入リテ妻子ヲ刺シ殺シ。立戻テ十文字ノ槍ヲ提ケ二三度マテ込入ル敵ヲ突崩シ。斯テ數ケ所ノ手ニヨハリケレハ、終ニ庭上ニテ討死シタリ。コヽニ荒井杢允ハ成實カ攻口ヘ切テ出。コレコソ荒井杢允トテ名アル者ゾ、殊ニ昨日石川氏ヘ申セシ如ク。吾ト思ハン輩ハ、我首取テ高名ニセヨト、氷ノ如キ大身ノ槍ヲ提ケ。群ガル中ヘ突テ入、左右ヲ拂ツテ力戰ス。羽田右馬助コレヲ見テ。亂ルヽ中ヲ押分々々、彼モ槍ニテ渡リ合、互ニ聞ユル手練ナレハ。暫シ勝負ノ位ナシ荒井元來今日ヲ限リノコトナレハ、無二無三ニツク槍右馬助カ頰當ヲ突欠キ、耳ノ脇ヘ突通ス。サレトモ身ニハ當ラス、又右馬助カツク槍ハ、杢允カ左ノ脇ヲ突ケレドモ、如何シタリケン。槍ヲ中ヨリ突折ツタリ。故ニウラヲカヽス。兩方危キ働キナリシカ、寄手本丸ヘ入ルト聞キ、杢允ハ其儘城ヘ引返シテ終ニ城中ニテ討死ス。流石昨日ノ廣言程ハ有ケリト

與ス者ハナカリケリ。西口一方ハアケテ攻サリシカ。一人モ落人ナク。皆々討死シタリケル。コロシモ五月永キ日ニ、日出ヨリ戰テ未ノ下刻ニ落城ス。然ルニ太郎右衛門妻子ヲナシ殺セシ時。三歳ノ娘ヲ乳母ノ若歎キ費ヒシヲ。女ノコトナレバトテ預ケタリ。乳人懷テ城ヲ出シニ。少シ手負ケレハ、彼娘ヲ下ニシテ空死シテ。騷動靜ツテ後起上リ。彼子ヲ懷キ烏羽玉ノ夜モスカラ。闇ハ靈御ふ涙。袞ハ朱ニ染ナシテ。高倉近江ハマタ伯父ナレハ。頼ミ見ハヤト思ヒ。十五里程ノ道スカラ。漸々ニ尋ネ行。近江ヲ頼ミケレハ。哀トハ覺ユレトモ。政宗ハ聞ヘテハ。身ノ云分立難シ。如何アラントト片倉景綱ニリケト云ケレハ。女子ノコト、イヒ。夫程ノ御惡シミハヨモ有ラシ。殊ニ一度切レ助リシ者ナレハ、何カ苦シカルヘキ。自然穿鑿モアル時ハ。某申シ直スヘシト云ケレハ。近江モ喜ヒ乳母ニ添テ甲斐々々シク育テケル。成長ノ後ハ蒲生源左衛門家中ノ妻ニナリケルナリ。備又其夜政宗ニハ本宮ヘ移サレ。六日ニ大森ヘ飯城ナリ、然ルニ岩城常隆・相馬義胤兩將牒シ合セ。田村ノ内岩井澤ヘ出馬ノ由告來レハ。田村ノ固メトシテ大條尾張・瀨上中務・桑折攝津三將ヲ差越サル。サテ又義胤田村境出張、隙ヲ伺ヒ、相馬領ヘ押寄其不意ヲ可討トテ。刈田・伊具・名取ノ人數來ル十七日マテニ可馳集由。俄ニフレヲウナガサル　又田村ヘハ成實・景綱・白石若狹入替ツテ　桑折・瀨上・大條ノ三將ハ本陣ヘ加ハリケル　斯テ藤五郎成實・小十郎景綱・白石若狹宗安三將三春ノ城ニ加ハリ、堅固ニ守リケレハ。三春ニ異儀ハナカリケリ。

岩城相馬責常葉事

岩城左兵衛督常隆・相馬長門守義胤。先年熊川ノ大菅原ニテ。對談盟約アリシ故　此度田村ヲ攻ラルヘシトテ。岩城相馬ノ兩將一和シテ出陣ナリ　常隆ハ鹿股ニ在陣ナリ　義胤ニハ大越ノ地ニ入テ　同十七年五月十七日出陣有テ常葉ヲ攻ラル、岩城ハ先陣相馬ハ後陣ト定メラル。大越ハ地戰ナレハ。案内者トシテ　大越紀

伊カ父攝津守先手ニス、ム。岩城勢手ヌルク見ヘケレハ相馬勢差コシテ先ニ進ムトコロ。大越攝津守ハ跡ニ付テ、田中ノ道ヨリ追手ヘ攻カケタリ。相馬不斷ノ鐵砲ヲ打掛ル。此時好ク働キタル相馬ノ兵士、西内善右衛門・成田五兵衛・木幡八郎左衛門・立野忠助・門馬治右衛門・鈴木掃部左衛門・木幡作助・判先將監等、目ニ立フルマヒアリ。八郎左衛門ハ鐵砲ニ中リ手負タリ。歩卒ニハ岡和田金七郎・木幡喜六郎・早見源六郎。此三人ハ虎口前ヘ進ミ、敵味方互ニ弓ニテネラヒ合テ射合ケル。義胤町中迄乘コミ馬ヲ立ラル。松山ノ西ノ虎口ヨリ、木幡周防・熊川美作・水谷式部・中村助右衛門・大浦正右衛門・杉七右衛門。二本松右馬頭。小野田太郎兵衛等仕寄ヲ付テ粉骨ノ働キアリ此時中津川左近討死。水谷十左衛門手負タリ。義胤ニハ小山ノアル所ヘ引取。備ヲ立ラル。然ルニ岩城勢先陣手延ヒタルヲ口惜クヤ思ヒケン。舟引虎口前ヘ敵出張シタリケルヲ岩城ノ竹貫三河、六百バカリニテ押ヨセ。田村勢ヲ追入タリ、此時參河カ嫡子七郎討死シタリ、四五日經テ兩將芦澤ヘ發向アル。岩城方ハ與山某先陣ナリ、義胤ニハ彼所ニ備ヲ立テ。岩城勢ノ働キ見物アル處ニ、山野新三郎相馬ノ勘當ニテアリケルカ、岩城勢ノ先陣ニ打交リ。眞先ニ進ミ。虎口ニ付テ首ヲ取リ。義胤ノ陣ヘ走來ル、則チ勘氣ヲ許サレタリ。斯テ義胤ニハ大越ノ城ヘ引取テ在陣ナリ然ル處ニ政宗駒ケ嶺ノ城ヲ巻ツメラル由、盛胤ヨリ注進アリシカハ義胤未明ニ急キ大越ヲ發足皈陣セラル。標葉郡ノ内新山ノ川ヲ渡ル時。駒ケ嶺落城ノ注進アリ、岩城常隆ニハ暫ク在陣アツテ。田村方栗山葛澤二ケ所ノ柵ヲ攻取レケリ

新地駒ケ嶺落城附杉目參河婢女節義之事

斯テ政宗ニハ刈田柴田伊具名取宮城國分ノ軍勢、今十七日伊具ノ金山ヘ馳參ルヘキ旨追々ニ廻文ヲ走ラセ、天正十七年五月十六日、伊達ノ大森ヲ進發アツテ、其日金山ニ著陣。明ル十七日未明ヨリ、催促ノ諸勢

與力ス先陣ハ原田左馬助宗長、二陣富塚近江伸綱是ニ属スル兵士屋野和泉。宮崎玄蕃・湯本傳次・本郷出雲・高成田正作。矢吹宮内・小窪左衛門・若館肥前・石川長十郎・馬場右近・白井次郎助。太宰金七。須田平次郎。松本一角・早川淵内等都合四千八百餘、同十八日早旦ノリ駒ケ峯ノ城ヘ押寄二重三重ニ取巻如竹葦如ニ雲霞新地ノ押ヘニハ亘理美濃ヲ置レタリ駒ケ嶺城代ハ藤崎治部西舘ハ村松薩摩、水郭ヲハ大浦雅樂頭持タリ盛胤則仙道ヘモ飛脚ヲ走ラセ、義胤ヘ注進アリ自ラ出張アッテ十二所ノ山ニ備ヲ立テ諸城加番ノ外ハ諸士卒皆義胤ノ供シケレハ盛胤ノ馬マハリハ隠居ノ士等取アツメ六七十騎上下四五百人ニ不過折節朝霧富深ク両陣互ニ何所ニアリトモ不見此城ノ為躰モ見ハス只險々タルバカリナリ境ハ未タ落城セス持コタヘタル躰ナリ。城ノ東西北ハ此日伊達勢ニテ、旌旗雲間ニヒラメキ鐵砲矢叫轟シ南一方ハ未タ取巻カス往來ノ透間アリ盛胤城内小勢ナレハ何トソ加勢ヲ入レテ見次ント思ハレケレハ羽根田主膳ニ向ッテ、盛胤ノ曰敵今城ヲ巻ト見ヘタリ。如何ニモシテ加勢ヲ入レ味方ニ力ヲ付タシ義胤モ明日中ニハ馳付ヘシ夫マテ城ヲ持堪ヘサセタシトナリ主膳承リ候トテ石神金山ノ手ノ者二千餘人其外盛胤ノ近習中シ受テ加リメルハ、相澤清左衛門・半谷大炊助。柚本源一郎・高野監物、此外ニモ上下七八十人。トカクシテ南口ノ明タル方ヨリ城中ニ入ニケリ加勢城ヘ入ヤ否伊達勢引マハシテ結ヒ合フ、惣人數三四千東南西山ニ皆備タリ政宗ノ本陣ハ城東ノ大道坂中ニ備ヲ立ラル亘理元安父子ハ七八百ハカリニテ西ノ岨根ニ備タリ。其外所々一勢々々ニ備ヲ立テ尺地モ明タル所ナシ水曲輪ハ寄スルニ便宜カケレハ寄手是ヨリ攻入ヘリ此所ハ大浦[illegible]カ固メナリ伊達勢強ク攻掛備ヲ乗リコヘ／＼亂入ス羽根田主膳ヲ始メ、城代藤崎治部、各粉骨ノ防戰ス、小窪右衛門・宮崎玄蕃城ノ坂近ク攻寄セシヲ、城中

コリ三宅大膳手ノ者ヲ左右ニ隨ヒテ打テ出、夫ナルハ小齋右衛門ト見タリ。汝ハ武士ノ[illegible]ヲ忘レ譜代相傳ノ主ニ背キタル天罰何マテノガレンヤ大膳カ手ニ首ヲ渡セト言リ。小齋ヲ目掛馳向フ右衛門心得タリト馳合セ、槍ヲ以テ互ニ數合挑ミ合フ。三宅カ手ノ者五六人、小齋ヲ取卷討ントス。宮崎玄蕃之ヲ見テ一文字ニ馳來リ。右往左往ニ馳ケ散ス。小齋馬ヨリ飛ヒ下リ。膝ヲ折テ大膳カ馬ノ三途ヲ突通ス。馬ハシキリニ蹶上レハ。大膳タマラス逆サマニ落ルトコロヲ、小齋冑ノ錣ノハヅレヨリ耳ヲカケテ突貫ク。首ハ手ノ者ニ取セタリ。三宅カ手勢力ヲ失ヒ。城中へ逃入ルヲ宮崎玄蕃カ手ノ者トモ、追討シテ首三級ヲ得タリ。是ヲ修羅ノ初トシテ水曲輪ノ柵二重押破リ。木戸口へ攻付タリ。城中モコヽヲ大事ト力戰シテ。攻入敵ヲ追出ス。サレトモ此手便リコケレハ。此曲輪ヨリ寄手度々責入ケリ然ルニ西舘ヲ固メタル村松薩摩、始ヨリ此防戰ニ不出合。城中不審シテ主膳ヲ始メ打寄テ。

薩摩ニ向ヒ申シケルハ其方城内ニテノ老功。其上城代ニ加ハレハ。一入情ヲ出サルヘキニ。サハ無シテ味方ノ難義ヲ見物シ差控へ居ルコト難心得ト。衆口一同ニ咎メケレハ、薩摩カ曰。各左申サルヽ所尤ナリ。去ナカラ若キ人々ニ先立モ如何ト存シ。各ノ手柄見物致スナリ。左樣ニ疑ヒ思ハレハ、人質ヲ可出トナリ。サラハ人質ヲ出サレヨト云内ニ。早皆薩摩ヲ中ニ取コメタリ薩摩則妻子ヲ本丸へ移シ入レ。三軍ノ禍ハ必ス狐疑ヨリ起ル城中ノ運モ是迄ナリトテ。薩摩只一人城中ヨリ打テ出。寄手群ル其中へ一文字ニ乘込ミ戰ヒシニ。槍十挺ハカリノ中ニ突落サレ、終ニ打死シタリ。主膳ヲ始メ城代各後悔シケルトソ。寄手門ヲ掘崩サント雜兵ヲシテ掘ラセケルヲ。城内ヨリ掘ラセジト追ツ返シツ挑ミ爭フ、水曲輪ニ於テ主膳モ手ヲ負。薩摩ハ討死ス、城中小勢ナレハ役所々々モ手ニ不合。人氣弱リテ見ヘニケル。城代治部カ老母五十餘ノ女ナリシカ黑キ物ニテ髮ヲ包ミ。墨染ヲ著シ太

月ヲ帶シ、羽根田主膳カ手負居タル廣間ヘ來テ申シケルハ人々役所モ離レタルト見ヘ侍ル。只今城ハ落ベク見ヘ候、迚モ遁レヌコトナレハ役所ニ打死アルヘシト云。主膳聞テ吾ハ手負候故、斯テ在シナリト。老母怒レル色ヲ顯ハシ。只今切死ニ死ン者カ、手ヲ痛ハリ玉フカト赴シメラレ、主膳尤ナリトテ、廣間ノ緣ヨリ馬ニ乘リ。役所役所ヲ廻ツテ攻口ヲ下知シケリ。政宗ニハ歩卒六七十ニ打圍マレ、馬上一騎十文字持タル差物指タルヲ供ニテ、南ノ田中道ヲ通ラレ、西ノ館根ニ陣セシ亘理元宗カ備ヘ御越シ、暫ク有テ又本陣ヘ皈ラル。此時矢比ハ少シ遠ケレトモ、討タハ討ツヘカリシヲ、城中如何シケン、鐵砲玉藥盡タリナド、テ。只見送ツテ居タルトナリ。齋藤伊賀盛胤ヘ申シケルハ、伊達勢ヲ見ルニ四五千ニ及ヘリ、城ハ今ノ内ニ落申サン、大勢ニテ此備ヘ打テカヽラハ。味方ハ五十騎ニ不足、御合戰叶フヘカラス、御引除アラン處ヲ、敵又慕ヒ付カハ、中村ノ城下マテ亂入申スヘシ、中村モ殘兵ナシ、如何思召ヤト云ケレハ、盛胤頓立アツテ譬病者何ト云ソ、誰レカ百年ヲ保ツコトアラン、軍ハ勢ノ多少ニ不依、天運盡ナハ腹ヲ切ント、氣色替ツテ、伊達勢八百許リニテ城ノ南ニ控ヘタル所ヘ、盛胤上下三百ハカリ、脇目モセス眞シクラニ突テ入ル。伊達勢待受テ相掛リニ渡合セ、谷田中ニテ槍ヲ合ス、政宗ニハ城ノ東大道ノ坂中ニ備ヲ立テ見物ナリ。此間六七丁兩方力戰刻ヲ移シ、相馬方ハ首十二三。伊達方ヘモ首八ツ九ツ討取、相引ニ打上タリ、又政宗モ元宗ノ陣所ヨリ皈ラルトヒトシク、惣鐵砲ヲ打掛タリ、木々ノ葉ニ玉中リ。柵ノ木間ヨリ飛來ルコト雨ノ降ルカ如シ、此城ハ中高ナレハ、鐵砲防キ難ク見ユル處ニ、老士ノ云タカヽル時ハ馬屋ノ草藁ヲ積ンテ玉ヲ留ルモノナリト云ケレハ。サラハトテ皆々柵ノ木ノ間ニ。二三尺ノ高サニ草藁ヲ積ミ。古俵ヲ濡シテ掛置シカハ玉コレニ留リケリ、然ル處ニ亘理元宗ノ備ヨリ麾ヲ振ツテ、暫ク鐵砲ヲ止ヨト呼ハリ、馳廻テ之ヲ押ヘ。

元庵ヨリ兩使ヲ以テ、城門近ク乘リ來リ。中島伊勢樋渡一休、元庵ヨリノ使ニ來レリ。地黑ニ赤階子ノ差物サシタル仁ヘ、對面申シタシト呼ハル。則羽根田主膳出合タリ、兩使カ云。元庵城代ヘ申サル丶ハ政宗大勢ニテ攻ラル上ハ。如何ニ猛ク思ハル丶トモ叶フヘカラス、城ヲ開テ除カレヨトノ異見ニ候ト云々。主膳答テ云御斷リノ趣キ承候、去ナカラ城代ニ申ス迄モナシ、迚モ承諾申マシケレトモ。御使ナレハ申シ屆クヘシトテ。藤崎ニカクト云ニ。返答ニモ不及コトナリ。此城ニテ討死シテコソ本意ナリト。兩使返答ヲ得テ歸リシカハ。又總勢押寄テ鐵砲ヲ打カケタリ。斯テ元庵佐々木藤兵衛ト云者ヲ、盛胤ノ本陣ヘ使者トシテ、城ヲ開除候樣御差圖アルヘシトナリ。盛胤ノ返答、城代ノ覺悟次第タルヘシトナリ。元庵又鐵砲ヲ止サセテ、以前ノ兩使ヲ以テ。各若キ輩武道一圖ニシテ、明除キ不被申ハ至極セリ　尤盛胤ノ眼前ト云、旁以テ道理感心ノアマリナリ。依テ盛胤ヘ使者ヲ以テ達セシニ。トモ角モ計ヘトノ返答ナレハ。城ヲ明ケテ引除レ。命ヲ全フシテ期シテノ忠ヲ盡サレ可然ト僞テ云送ル。サレトモ承引ノ躰見ヘサレハ。兩使ハ則立皈ル。此扱ヲ聞テ城内ノ老士靑田越後・四栗越中抔、イツノ間ニ元庵ヘ内通シケン、人質ニ中島伊勢ヲ引受テ　城ヲ開除クヘキニ極リヌ、依之又右ノ兩使人質ニ來リ。兜ハ著シ頰當バカリ取テ廣間ニ入リ、慇懃ニ旨趣ヲ演テ一禮ス。兩使ノ供ハ皆門外ニ置タリ、城ヨリ出ル道筋ニハ。元庵ヨリ警固ノ士卒ヲ道ノ兩脇ニ皆拔身ヲ持セテソナヘ置キ、其中ヲ通シケリ。マヅ女童ヲ先ヘ出シ。其脇ニ兩人ノ人質ヲ出シ。後ロヨリ槍ヲ突掛テ除セタリ。其跡ヨリ城中ノ士卒不殘引退キ、駒ケ峯落居シタリ、依之盛胤急キ中村ヘ皈陣セラル、政宗ニハ是ヨリ新地ヘ移ラル。其比專ラ元庵ハ武勇才覺ノ將ナリト褒美シケリ、斯テ政宗駒ケ峯ヨリ即日新地ヘ移ラレ。十八日ノ夜ヨリ城ヲ圍ミ。忽チニ攻落サレン結構ナリ。盛胤ハ新地ノ城今夜可落、義胤ニハ明日馳

著ハキリ何卒シテ明日迄持コタヘコカシトテアルモアラヽ風情ナリ。新地ノ城代ハ泉田甲斐守。西館ハ杉目參河諸城ノ人數五十餘騎近習ノ加勢十餘騎士卒合四百餘人ナリ　晉盛胤羽根田主膳ニ向テ申サレケルハ新地甚タ危シ明日ハ義胤到著ナルヘシ此由ヲ城中ヘ案内セハヤト思フ誰ヲカ可遣ト主膳ヲ始メ有合フ輩登ルヘシト云者ナク、暫ク答ヘニ及ハサルニ小林甚助・相原十左衛門・荒太郎左衛門三人ヲ盛胤ノ側近ク呼寄フレ先ツ酒ヲ呑シメ數獻ノ上ニ盛胤ノ曰政宗新地ヲ攻ル急ナリ、明日ハ義胤モ到著アルヘシ、如何ニモシテ今夜バカリ持堪ヘヨト此旨告知セ度キカ誰カ可登トナリ。三人トカクノ返事ナカリシニ相原進ミ出可登ト云殘ル兩人モ同意ナリ盛胤悦喜アツテ小紙三書ヲ認メ守リノ如ク封シコレヲハ誰カ可持トアレハ、相原則申受テ刀ノ柄ヲ切ホゴシテ卷入レタリ相原元來大酒ナリケレハ。日比ノ瀧呑ヲ所望アツテ強イテ之ヲ呑セラル、斯テ三人

五月十八日ノ夜ニ入リ海道筋ハ敵ノ中ナレハ通リ難シトテ、横巷ヘ出テ伊手澤ヨリ眞弓ノ間田中ニテ五六丁モアラン折シモ皐月晴シテ、十八夜ノ月影虫ノ這フモ見ユルバカリニ登澄タリ　三人共ニ槍ヲ引スリ。匍匐シテ田中ヲ這フ。伊達勢城ヲ卷テウツ鐵砲ノヒカリハ。星ノ飛フニヒトシク。四方ニスヽミ嘶ク駒ハ耳ヲ突披テ冷マシ寄手城兵ノ名ヲ知リタルヲハ呼カケ々々身ヲ持替テ運ヲ開クヲ知ラサルカ侍ハ渡リ者義理ヲ立ツルモ時ニヨルゾ不叶籠城シテ明日ハ撫切ニセラレンヨリ、城代ヲ打テ出ヨ、褒美ニハ命ヲ助ケ手ヲ指スシテ落スヘシナト。軍中ノ習ヒサマ／＼ニ惡口スル聲、耳元迄喧シ。漸々ニ西北ノ坂下迄這付、夫ヨリ立上リ一走リニ搦手ヘ走リ付門ヲ明ケヨ盛胤ヨリノ御使ニ吾々三人來レリト云ヘハ。則門ヲ開ケテ入レタリ。盛胤ノ一書ヲ城代ヘ渡シケレトモ。只手ニ取ルマテニテ、茫然トシテトカクノ談合モナク寂ニハ五人三人彼所ニ四人七人、寄合テ

只ソゾメキ渡ル。サテハ籠城遂クヘカラスト思ヒケルニ、案ノ如ク十九日ノ曉未タ天明サルニ。如何シタリケン城内ノ小屋ヨリ出火シタリ。是ヲ見テ寄手短兵急ニ惣攻ニ攻カヽリシカハ。相原始メ三人トモニ顏ニ鍋墨ヲヌリテ。城ヲ出寄手ニ紛レテ漸々ニ逃退ケリ。西舘ノ杉目參河城代ニ向ツテ今更何國ヘ可落ソ討死スヘキ時節至レリト云ケレトモ。泉田聞キ入ス落支度ヨリ他事ナシ。參河ハ下々ノ者共ニ暇ヲトラセ。自然我子孫殘ラハ奉公セヨトテ。無理ニ云含メテ落シケリ。其内一人色々ト停シカトモ承引セス。立留リ主從二人小旗ヲシボリ。城ヲ出寄手ノ中ヘ乘リ來ル。降人カト見ル處ニ敵間近クシテ小旗ヲ差揚。西舘ノ城代杉目參河ト云者ナリ。討テ手柄ニセヨトテ。無二無三ニ乘リ込ミ。二人トモニ打合シカ。多勢ニツヽマレテ二人共ニ討レケリ。木崎右近モ甲斐ニ向ツテ是非討死トスヽメケレトモ承引セス落行ケレハ右近ハ止ツテ討死シケリ。甲斐女房ヲ跡馬ニ乘セテ落ケルカ。女房ハ鐵砲ニ中ツテ死ケリ。新地ノ地士ハトカクシテ大形ニ逃失ケリ。甲斐ハ直ニ浪人シテ。後年太閤秀吉公ノ枕博士ニナリケルトソ。杉目參河カ婢女、參河カ子ヲハ背ニ負ヒ。吾子ヲハ懷テ落タリシカ。寄手ノ雜兵コレヲ見テ主ノ子ナルヘシ。殺サント云ヲ。樣々泣詫ケレトモユルサス。女カ云背ニ負タルハ私ノ子ナリ。コレハ主人ノ子ナリ迚。抱タル吾子ヲ投出ス。雜兵則喉ヲ掻テコロシタリ。女ハ主ノ子ヲ負テ逃行。由緣ヲ求メテ養育ス。其後參河カ親族傳アツテ金子ヲ遣シ。女ト參河カ子ト買トリケル。此子後ニ杉目右衛門ト云ケルトナリ。和漢トモニ武士ニハ忠義ヲ立ルモアルナレト。女ニハ上臈ナトニサヘ節義アルハマレナリ。況ヤ下婢ノ身トシテ。カヽル節義古今未聞ナリトテ　其比聞ク人上下感涙セサルハナカリケリ　賤シキ女サヘ如斯ナルニ　城代ノ身トシテ甲斐カ不覺　女房マテ亡セシ淺マヽ敷身ノ果ト指笑セヌ者ナシ　伊達勢則城ヘ入テ勝鬨ヲ奏ス　此ヨリシ

テ新地駒ケ嶺、伊達ノ領地トナリニケリ。

猪苗代父子不和附盛國陰謀屬米澤事

葦名ノ一族猪苗代彈正盛國カ、米澤方ニ屬シタルコト、朝一夕ノ恨ミニ非ス、其故ハ去ヌル年盛國五十歳ニシテ嫡子盛胤ニ家督ヲユツリ、其身ハ本城ノ北鶴ケ峯ト云處ニ隱居シケルカ、兼々父子ノ中不和ニシテ盛國再ヒ領地ヲ知ント思フ心出來ル折柄、盛胤黑川ニ出仕シケル。留守ヲ幸ヒト盛國手ノ者トモヲ相具シ本城ニ打入。支ユル者ヲ切捨。盛國頓テ移リ替ル盛胤此事ヲ聞テ進退途ニ迷ヒ横澤ト云所ヘ落行。蟄居シタリシカ。天正十五年七月十四日。小舟四五艘ニ取乘テ、湖水ヲ押渡リ盛國カ家人大堀土佐・秋屋平左衛門ヲ入置タル金曲ノ城ヲ追落シ、其跡ニ入カハル、盛國怒テ翌十五日早朝ニ、家人矢内八郎左衛門。廣瀬藤内・遠藤太郎兵衛ニ足輕ヲ指ソヘテ金曲ニ向ハシム盛胤討手ノ向ヨシヲ聞、路ニ出張シテ散々ニ防戰ス、双方首數級ヲ失テ相引ニ仕タリケル。此騷動黑川ニ聞ヘケレハ義廣大ニ腹立ツレ、父子ノ中ニシテ諍ナキ爭ヲ仕出シ世上ノ聞章ニ及ヒタルコト、畢竟上ヲ蔑ノ如クニスル故ナリトテ、暫ク籠居セシメラル、因玆盛國其身ノ罪科ヲ不顧、還ツテ義廣ヲフカク恨ミ萬端先君盛氏盛隆ノ時ニ替リタル會釋。口惜ト憤リ思フ處ニ、伊達葦名ノ弓矢出來リ、五箇年以前政宗檜原ニ發向ノ時身方ニ賴マレシニ。盛胤不隨ノ所爲ニ因テ。約ヲ背キシカ、今高玉阿古島邊迄伊達ニ屬シケレハ、盛國再ヒ隱謀ノ萠シ起リケリ。斯テ政宗ニハ新地駒ケ峯ヲ忽チニ手ニ入ラレ。一先ツ大森ヘ皈陣アル、然ルニ先日於田村成實景綱ニ申ケルハ、猪苗代彈正コト已前當家ニ中寄ト雖トモ、父子不和ニシテ下中別々ニ成ケル故。其コト不調內。鹽松二本松ノ合戰ニ付、旁々延引ニ及フ處、片平助右衛門味方ニ屬シ。阿古ケ島高玉落城、彼地トモニ御手ニ入今ハ猪苗代ノ通路自由ヲ得タリ、宇田ヨリ御皈陣アラハ。先年ノ使三藏軒ヲ召連、大森ヘ參リ、此旨伺ハント

云ケレハ。景綱モ内々左樣ニ存ルト雖トモ。先ツ差シ當ルコトノミニ打紛レタリ。兎角早々伺ハンニハ如シト、兩人談合ニ及ヒ。田村ハ別シテ氣遣モナク見ヘケレハ。小十郎ハ大森ヘ皈リ。成實ハ二本松ヘ皈城シ。翌日三藏軒ヲ同道シテ成實大森ヘ參リ、具ニ右ノ趣キヲ申シケレハ。政宗同心有テ。急キ書札ヲ認メ。三藏軒ヲ可遣由ナリ。則成實景綱モ添翰ヲ遣シ。成實ハ二本松ヘ皈リケリ、斯テ三藏軒ハ猪苗代ニ赴キ。彈正ニ對面シテ書翰ヲ渡ス、彈正之ヲ披キ見テ。只默然トシテ詞ナク、心中定マラス見ヘケレハ、三藏軒カ曰、先年此コト大半成就シケルニ。子息不和ニヨッテ、忽チ事破レ。タトヘ盛胤同心ナクトモ、足下心ヲ決シ候ハヽ。一端父命ヲ背クトモ、終ニ同心アルヘシ。又始終和睦ナク心ヲ變スルコトナクトモ、父子兄弟引分レ合戰ニ及フコト、是皆武士ノ習ニシテ、古今例少カラス今足下ノ領地ヲ見ルニ、城ハ全カラス。隣鄉ノ助ハナシ。會津ヘハ程隔テ、急變アリトモ救ヒ難シ、然レハ是孤獨ノ地ナリ。政宗會津ニ恨ミ有テ死心ヲ報セント。臍ヲ嚙マルヽコトハ、定テ耳目ニ觸候ハン、今伊達ノ武威遠近ニヒヽキ、勢ヒ肩ヲ並フヘカラス。然ルニ因テ近鄉遠境ノ諸將、攻サルニ旗ヲ卷キ。戰ハサルニ弓ヲ伏ス、モシ攻ル時ハ必ス破リ。戰フ時ハ必ス勝ツ。陣ヲ出シテ爭フ毎ニ、進ンテ敵ヲ走ラシムルコトノミニシテ、終ニ一足モ伊達勢ノ退クコトヲ不聞、是伊達ノ諸將ノミ剛ニシテ。隣將ノ士卒皆柔弱ナルニ非ス、政宗若年ト雖トモ、人ヲ馴付ケテ慈愛深ク、軍旅ノ揀精シクシテ防戰守成ノ道ニ賢ク、法令他將ニ勝レタル故下風自ラ是ニナツンテ士卒ナべテ武義ヲ守ル。既ニ鹽松二本松手裏ニ入リ、今相馬領端々過半切崩サレ。モハヤ會津ニ手ヲ入レテ。若松ヘ馬ヲスヽメラレン營ミ旦夕ニアリ、然ルトキハ先ツ此城ヲ手始トシテ攻討レン、其上當城ハ政宗ノ領分ヘ近クシテ。然モ難所鮮ナシ、又會津若松ヘハ程遠クシテ。其間嶮難ヲ隔ツ。救ヒヲ求ムルニ使リナク、退ントスルニ道ヲ失

フ暫シヒトリ義ヲ守テ此淺間ナル城ニコモリ政宗ノ大軍不日ニ來テ取圍マハ。運ヲ開ンコトハ百ニ一モ不可有城兵勢ヒ竭テ降參ヲ乞ケ然ラスハ共ニ身ヲ亡シ永ク先祖ノ血脈ヲ斷ンコト瞬目ノ間ニアリ我コレヲス丶ムルコトシケシ足下ノ爲メニノミ謀ルナリ願クハ會津本公ノ志ヲ體ヘシ政宗ノ幕下ニ屬シテ子孫繁榮ノ業ヲナシ候ヘト言トコロ能々之ヲ察セラレヨト。言ヲ並ヘ理ヲ盡シテ云ケレハ。彈正決然トシテ心ヲ定メテ曰誠ニ貴僧ノ言ノ如シ兎ニモ角ニモ此城ヲ守テ伊達ノ鋒先ヲ防ンコト叶フヘカラス殊ニ當城ハ仙道ノ境目ナルニ會津ヨリ一將ノ加勢モナシ是軍士ヲ棄ツニスルノ將ナリ豈モニ望ンテ犬死センヨリハ貴僧ノ言ニ順フヘシトテ三藏軒ヲ深ク馳走シ返書ヲ認メテ返シケリ則大森ヘ立歸リ猪苗代合躰ノ趣キ景綱ヲ以テ之ヲ達ス政宗不斜喜ヒ三藏軒カ働キノ才覺ヲ褒美セラレケリ

政宗猪苗代表出馬之事

僧又岩城常隆ハ當三月ヨリ田村境小野ニ在陣アリケレトモ田村ハ伊達ヨリ加勢ヲモリ政宗ニハ大森ニ逗留アリシユヘフカク働クコト叶ハス佐竹會津ヘ度々加勢ヲ乞ハレケル依之佐竹義重・會津義廣須賀川表ヘ出陣有テ常隆ヘ調シ合ハセ田村ヘ押寄ラルヘキヨシ聞ヘケレハ。政宗ニハ伊達信夫刈田柴田ノ勢ヲ殘シ置キ直ニ田村ヘ差向ケ猪苗代加勢ニハ成實景綱ヲ指遣サルヘキ由相定リ六月朔日ニ小十郎二本松ヘ使ヲ遣シ猪苗代彈正當宗ヘ属スルニ付三藏軒ハ直々大森ヘ參リ候又大將ニハ佐竹會津出陣ト云猪苗代合躰彼是ノ爲メ二本松ヵ本宮ノ内在陣アルヘキ旨此儀成實ニ申通スヘキ由ニ付如斯トナリ小十郎人數ハ大森ヨリ直ニ猪苗代ヘ遣ス景綱使ハ朔日ノ七ツ時二本松ヘ來ル夫ヨリ成實人數ヲ揃ヘテ發足ス其夜荒井迄出馬人數未タ不追付翌日岡吉ヶ島ヘ來ル小十郎ハ朔日岡吉ヶ島二日ニ猪苗代ヘ來リ。成實ヲ待合セテ三日ニ彈正ヵ城ヘ參著ス

彈正會津へ手切レノコト。三日ノ夜須賀川へ告來ル。義廣大ニ怒リ玉ヒ。不義ノ盛國即刻ニ誅殺セントテ。則軍勢ヲ引マトヒテ。夜通シニ若松へ皈ヘラレ。四日ニハ猪苗代へ推寄。一揉ニ攻潰シテ彈正ヲ生捕ルへキ。憤リノ由聞ヘケレハ。成實小十郎ニ使ヲ遣シ。今日義廣寄セラルへキ由風聞ナレトモ。定テ今日ニハアルへカラス。去ナカラ地形ノ險阻不案内ニ候へハ。巡見ノ爲メ摺上ノ方へ可罷越ト云遣リケレハ、景綱モ跡ヨリ馳セ付タリ。然ルニ境ノ者共二三百人。摺上近所へ來リ。民家少々燒拂ヒケルカ。成實景綱カ手勢ヲ見テ、其者トモハ引上ケル。夫ヨリ新橋大寺道ノ地迄巡見シテ午ノ刻ニ猪苗代へ立皈ル。サテ又政宗ニハ。猪苗代手遠ニシテ容子モ不詳トテ。阿古ケ島へ本陣ヲ移サレケル。然ル處ニ義廣須賀川ヨリ急ニ若松へ皈ラル由告來ルニ付政宗ノ曰。義廣彈正カ叛心ヲ憤リ短兵急ニ誅セントノ心ナレハ。早刻ニ猪苗代へ押寄スへシ。然ラハ景綱成實バカリニテハ、猪苗代無心許。急キ彼ノ地へ發向アルへシトナリ。黠了泥蟠等其外何レモ申シケルハ。猪苗代へ出馬アラハ。義重常隆義胤ノ三將、指違ヒテ田村へ取詰合戰アルへシ。サアル時ハ大勢ノ防戰難叶。田村ノ者共、賴ミ少ナク存シ。降參不忠ノ族出來リ候ハ、三春危ク覺へ候。彈正ハ救ヒ玉フトモ田村敵地ニナリテハ、當家弓矢ノヒケタルへシ。其上仙道ノコトハ難ニ打捨。大敵ニ候へハ旁々以テ危難ノ至リナリ。前ヲ踏ントテ後へツマツキ候ハンコト。必定ニ候へハ。旗本ハ此所ニソナへラレ。猪苗代へハ別シテ加勢ノ軍將差向ラレ、時變ノ御見合可然ト。一同ニ申シケレハ。政宗重ネテ各ノ異見其謂レナキニ非ス。然レトモ義廣夕へ若松皈陣ハ。彈正回忠ヲ憤リ、無二無三ニ猪苗代へ押寄、手詰ノ軍センタメナレハ。是レ必死ノ勢ヒアリ、然ル時ハ旗本ノ勢ヲ合セテ戰フトモ。今度ノ軍ハ一大事ナリ。夫ニ成實景綱カ小勢。彼是彈正カ手勢ニ　タトへ重ネテ加勢添タリトモ。此軍十ニ九ツ猪苗代敗軍タルへシ、然

ル時ハ成實景綱ハ敵中ニ有テ攻殺サレンコト必定ナリ其上兩人ハ我左右ノ臂ナレハ争テカコレヲ見殺シニセンヤ佐竹岩城其外ノ諸將出陣シテタトヘ二春ヲ攻ルトモ、其タメノ加勢大勢ヲ置仙道口ノ城々皆堅固ナリ然ルニ諸將田村ヲ可攻哉ト徒ラニ未然ノ日ヲ費シ其内ニ猪苗代攻破レナハ夫コソ政宗カ智謀ノ不足所ナラン今事急ニシテ咽ニ迫ル救ハズンハ有ヘカラスト諸臣重ネテ然ラハマヅ／＼猪苗代ヘ使ヲ走セテ成實景綱ニ相聞セ其上發向可然トテ出陣有之トモ義廣出馬滞ルカ又義重等本宮ヨリ働キ候ハヽ前後手當相違アラント申スニ依テ布施備前ヲ使トシテ急キ猪苗代ヘ彼差越ス其趣キハ猪苗代手切ニ付義廣皈陣其地ヘ發向アルヘキ由相聞ヘタリ成實景綱無勢心許ナシ。義重常隆田村ハ出張ト雖トモ二春ニハ人數餘多指置ケハ、田村ノ地ハ心ヤスシ只猪苗代表氣遣ナレハ其地ヘ早速出馬アルベキヨシナリ、備前共ニ景綱ニ申シ聞セ、夫ヨリ同道シテ成實カ陣ヘ至リ書翰トモニ相渡ス兩人御返答ニハ此表出馬ナランコト必ス以テ無用タルヘシ阿古ケ島御在陣モ少シ手組リト存候若義重本宮ヘ急陣アランモ難計候ヘハ本宮ヘ本陣ヲ返サレ可然況ヤ此方御出馬必ス御無用ノ至リナリ。萬一大變モ候ハヽ阿古ケ島ヘハ行程五里ニ不足ハ、夜ノ内ニモ注進可仕ト委細備前ニ云含メテ返シケリ、扨又阿古ケ島ニハ政宗思惟有テ定メテ成實景綱出馬無用ト云越スヘシ此度ハ是非々々出馬アルヘシト、思案ヲ極メ玉ヒケレハ備前カ皈ル中途迄ヒソカニ人ヲ出サレ、成實景綱方ヨリハ早々猪苗代ヘ御陣相移サン可然ヨシ申シ越スト僞テ可申旨備前ニ内通セラレタリ、斯テ本陣ニハ古老ノ面々諸將士相違ツテ軍ノ評議アリ備前返リヲ相待ツトコロニ猪苗代ノ使皈リタリト報ス急ヤ召出サレ成實景綱ハ何ト返答申スヤト尋玉ヘハ。備前承リ早々猪苗代ヘ御陣移サレ御出馬可然ヨシ兩人トモニ申上候ト答ヘケ

レハ。内々サアルヘシト思フナリトテ。則出陣ニ定リケリ。御出馬無用ト申越シタル書狀ハ。封ノ儘ニテアリケル。守屋主伯申シクルハ。今日ハ歩兵散々草臥候ヘハ。明日未明ニ御移リ可レ然ト申シケレハ。政宗ノ曰。各早々具足ヲ著スヘシ。今夜一夜物喰コト堪忍可レ申トアリケレハ。誰々モ兎角ハ云ハス。席ヲ立テ各支度シタリ。政宗則出馬アレハ。諸將ハ一備一備人數揃次第段々ニ馳付ヘシトテ。既ニ本陣ハ引拂フ。此趣キ猪苗代ヘハ其夜五ツ時告來ル。出馬無用ト申シタル上ハ。定メテ僞リナルヘシト疑定セサル處。今夜出馬決定ニ候間。御迎ニ可レ出ト。諸將ヨリ追々ニ鳥使來著シケレハ。各驚テ取物モ採アヘス。急キ中途ヘ出迎フ。夜半過ニ政宗猪苗代ヘ著陣アル　彈正御迎ニ出テ謁ス。政宗御懇意ノ品々有テ。彈正子息十三ニナリケルヲ。過ル三日阿古ケ島ヘ人質ニ出シケルヲ。其夜召連ラレ皈サレケル。彈正申シケルハ。悪子兩人候ヘトモ。兄ハ某ニ背キ。義廣ヘ屬シ候ヘハ。外ニ兄弟トテモ無レ之。只一人指上候處。早速ニ返シ被レ下儀。面目ニアマリ。却テ迷惑ニ存ルナリ。ケ様ノ時節ハ幾人表裏モ有レ之モノナレハ。人ノ疑ヲ避ル爲ニ候ヘハ。此人質ハ暫ク景綱ヘ頼ミ置候間。大森ニ指置レ預リ玉ハルヘシトテ。證人ハ小十郎ニ頼ミケリ。

伊達秘鑑卷之二十三終

伊達秘鑑卷之二十四

東奧仙府　無々軒　編集

摺上合戰之事

上杉ニ芦名義廣、昔當代カ伊達ニ附屬セシヲ憤リ。忽チニ責略サント、富田美作ノ子同氏將監ヲ先陣トシ。六月四日ノ夜黒川ヲ打立テ摺上原ニ向ヒ、街道ヨリ南十餘町隔テ、菅雄村ノ東ナル高森山ニ陣ヲ据ヘ。諸手ノ備段々ニ各篝火ヲ焚連テ　臥間稀ナル夏ノ夜ノ明ルヲ遲シト待居タリ。程ナク黎明ニ成タレハ、見ヘ渡リタル西岸津湯川ノ邊ニ敵勢ヲ入立テハ、身方ノ障リトナルヘシトテ、本名木工允ニ手ノ足輕ヲ付テ差遣シテ、アタリノ在家ヲ燒セラル。富田將監ハ先陣ナレハ、宵ヨリ湯田澤ノ邊ニ打出テ、終夜軍評定シテ居タリケルカ、心靜カニ下知ヲ傳ヘ、段々ニ陣ヲ取ラセケル。猪苗代ニハ五日ノ早朝ヨリ諸將ヲアツメ、軍評議アルトコロニ、會津勢早寄來ル由、遠見ノ者注進ス。

昨日モ其聞アリケレトモ、虚說ニテアリケレハ、今日モ僞リナランヤト云處ニ　黒川先鋒ノ人數ハヤ見ヘ渡リ候ト告ケレハ、昔若ノ表塚先ノ山ヨリ見之ニ注進ノ如ク先手ノ備見ニルニ付　政宗ニハ櫓ニ上リ遠見アリ　則軍勢ノ手分ヲ定メラル　先手ノ一番ハ猪苗代彈正盛國　二番ニ片倉小十郎景綱　三番伊達藤五郎成實　四番白石若狹宗玄　此四備ハ摺上ノ原ニ押出ス。盛國景綱ヲ固メ　遠馳シタル敵ハ　待テ戰フニ利アリト、諸勢ヲ勇メ控ヘケレハ、成實宗玄ハ兩備ノ後ニ少シ隔テ　陰中陽ヲ討テ眞丸ニソナヘ待掛タリ　扨又會津勢ハ新橋北ノ山ニ段々ト備ヘ　原ノ方東ニハ村里ツヽキナレハ、湖ノ方ヘ働カント　民屋十軒ハカリ燒拂ヒ　猪苗代ヨリ備ヲ繰リ出シ　既ニ磐梯山ノ方ヘ人數ヲ引マハス　政宗旗本ノ左陣ハ濱田伊豆　右陣ハ大内備前　後陣片平助右衛門　其外勇士健卒數千、摺上山ノ麓松原ノ中ニ備ヲカクシ、旗ヲ伏セ靜リカヘツテ控ヘタリ、是ハ今日ノ合戰ニ、政宗出陣ト義廣努々(ユメユメ)知

リ玉ハス。惣勢ヲ掛テ合戰數度ニ及ヒ。軍兵ツカレ備亂ル、折ヲ見スマシ、旗本ノ伏兵ヲ以テ切崩シ。急ニ勝利ヲ得ンコト、掌中ナリト計リ玉フ。依之士卒ヲ勇メ今日戰ハ一擧ニ大利ヲ得ル所ナレハ。面々モ一際出精アルヘシト、使番ヲ廻サレケレハ。何レモ勇氣ヲ勵シケリ、去程ニ會津ノ軍兵十三角ニ備ヲ分チ、新橋ヲ渡テ後橋ヲ燒落シ、軍卒ヲ死地ニ陷シ。勢ヒ誠ニ敵シ難シ、斯クテ五ノ先陣將監カ軍勢ト、盛國カ士卒ト。吹渡ト云處ニテ馳合セ、鐵砲ヲ放チ、矢ヲ射違フル程コソアレ。兩陣相掛リニ掛ツテ入リ亂レ。死生ヲ忘レテ挑戰ス、盛國カ家人廣瀨藤内ト云者。一番ニ首取テ實檢ニ入ケレハ。政宗當座ノ勸賞トシテ。名ヲ豊後ト改メラル、コレヲ軍ノ始トシテ。追ツ返シツ入亂レテ揉合シカ、猪苗代カ備駈立ラレ、足並亂テ色立タリ。會津ノ先鋒富田將監生年廿一歲、血氣勇猛ノ生レナルニ盛國カ叛心ヲ惡ミ、一揉ツフシ生捕ニセヨト。自ラ先ニ進ンテ下知シケレハ。士卒勢ヒ掛ツテ力戰シ。終ニ盛國カ備ヲ押破リ。圍ヲ作テ散々ニ追立タリ。二陣ニス、ム片倉カ備一文字ニ馳合セ。鐵砲ヲ打掛矢ヲ放チ、兵士槍ヲ揃ヘテス、ミ戰フ。小十郎眞先ニ馬ヲス、メ、諸勢ヲ勵シ、モミ立々々攻戰フ、盛國カ備モ力ヲ得テ色ヲ直シ、フミコタヘテ挑戰ス。富田カ備戰ヒ勞レ。少シ白ケテ見ヘケレハ、景綱盛國下知ヲ勵シ。兩陣競打テモミ立ケレハ、會津方シドロニ成テ富田カ備崩レカ、リ、二陣ノ備モ押立ラル。伊達勢勝ニ乘テス、ム處ニ、會津方本名木工允・津川左近カ備、左右ヨリス、ミ來リ。富田カ勢ヲ追來ル。盛國景綱カ軍兵ヲ兩方ヨリオシ包メハ。將監カ手モ踏止リ。三角ニヒキツ、ンテ喚キ叫ンテ攻メ戰フ。兩陣ノ鯨波、打合スル鐵砲ノ響キ。搢上ノ山モ崩レ。湖水モ涌上ルカト疑ハル、會津方元來大軍ナレハ、新手ヲ入替モミ立レハ。彈正小十郎カ士卒戰ヒ勞レ。一町ハカリ引退ク。成實宗玄ハ合戰ニ構ハス、敵ノ左右ヲ後ヘ詰メ、勝誇ツタル會津勢ノ眞中ヘ。横合ニ喚テ突カ、ル。會津方横ヲ

打レ急ニ備ヲ分ントスルヲ、短兵急ニ取詰メ。白石宗玄カ物頭太郎丸掃部ト[illegible]鐵砲二百挺ヲ揃ヘ横合ニ打崩シ、手寄ニ攻立ケレハ、備ヲ引廻スコト不能、散々ニ破レテ敗走スルヲ、摺上ノ山下マテ追討ニ打テ、カルク人數ヲ引マトメ、成實宗玄麓ノ此方ニ備ケレハ。猪苗代片倉モ原中ニ陣ヲ直シケル。是ヲ見テ富田本名津川カ勢モ山ノ下ニ屯シタリ。

會津敗軍附金上佐瀨討死之事

大將義廣ニハ、普藤ノ高森山ヨリ備ヲ押シ下ロシ、摺上ノ麓ニ大軍ヲ備テ待カケラル。政宗ノ兵ヲ伏セラレタル摺上カ根ノ松原ト、其間坂東道六里ニ不レ過。義廣當軍ニ向ツテ手合セノ合戰、敵味方午角ト見ヘタリ。猪苗代伽勢ノ軍將ハ、成實。片倉。白石ノ三備ヨリ外ニ見ヘス。渠等ハ名アル者トモナレトモ。元來小勢其上今朝ヨリ戰ニ士卒皆勞レタリ。旗本ノ新手大軍ニテ引包ミ、先手ノ勢ト揉ミ合セテ攻立、一戰ニ切崩シ、盛國ヲ捕ヘ、猪苗代ノ軍門ニ曝サン時分ハコヽソ。軍ニハ早勝タルソト。諸勢ヲ勵シ下知セラレケレハ。元ヨリ死地ニ落タル覺期ノ軍兵、太鼓打テ備ヲ進メ。一應ノ會釋モナク、成實景綱カ備ヲ眞驀ニ突崩シ。彈正若狹カ備ヘ筋違ニ押掛タリ。是ヲ見テ富田本名等諸勢ヲ下知シテ旗本ニ落合。伊達勢ヲ押シ包ミ。火ヲ散シテ攻戰ス。會津ノ先鋒富田將監。彼カ親ハ伊達ヘ屬シケルカ、將監ハ義廣ヘ從ヒ先鋒ヲ免サレタリ。白石カ物頭群ニ抽テ見ヘケルヲ、ヨキ敵ソト駈合ス。太郎丸掃部ト名ノリ、双方槍ヲ以テ突合シカ、掃部運ヤ盡タリケン、左リノ耳ヲカラミ突抜レテ馬ヨリ落ツ。則首ヲ取テ提ケ、義廣ノ見參ニ入ケレハ。親ニモ背キ忠節ノ者ナリト、甚タ感賞アツテ備前長光ノ太刀ヲ將監ニ玉ハル、誠ニ敵味方入亂レ、カク闘カハシキ場所ニ於テ、即賞ヲ行レタルコト。流石久シキ家ノ驗シナリト、諸人感談シケリ、斯テ會津ノ大軍面モフラス。討死手負ヲ乘リコヘ飛ヒコヘ。息ヲモ突カス戰ヒケレハ。小十郎彈正カ陣モ破レ、成實宗玄カ兵モ力勞レ。

伊達勢散々ニ敗走ス。義廣彌々士卒ヲ勇メ。スハヤ敵ハ崩レタリ。此圖ヲ外サス駈ヨ々々ト。自身ニ下知シ玉ヘハ。惣軍ヲ一手ニ合セ。曳哉聲ヲ出シテ追討ニ攻付ル。然ル處ニ伊達繁昌ノ氣運。葦名滅亡ノ時節至リケルニヤ。今朝ヨリ吹競タル西風。俄ニ巽ニ替ツテ。山々高嶺ノ嵐イヤマシニ。鐵砲ノ烟馬蹄ノ塵。眞黒ニ吹カケ偏ニ霧ノ如クナレハ。東西モ見分タス。南北モ朧ニテ。只馬ノ足音。太刀ノ鍔音ノミ聞ヘテ。伊達勢旗色直リ蹈止ル。空ノ氣色。一村雲晴渡リケレハ。政宗時分ハヨシト。大音ヲ上テ勵マサレケレハ。諸軍勢アレヲ見ヨ。天氣必ス勝利ヲ告ト。兵家ノ天巻ニ見ヘタレハ。今日ノ戰ヒ身方大星ノ理ニ叶ヘリ。全クノ勝利疑ヒナシ。討テ懸レト八ケ森ノ腰松原ノ中ヨリ。日ノ丸ノ大旗紅白ノ小旗。其外家々ノ差物馬験。翩飜ト靡カシ顕ハレ廻リ。義廣ノ本陣右脇ノ山根ニ付テ。敵ノ後ヲサシハサム。然ルニ先年佐竹ヨリ義廣ヘ附來リシ大縄讃岐守。刎石駿河守ト。會津家老富田等ト互ニ權ヲ爭ヒ。方人モ思々ニ家中二ツニ分レタル折ナレハ。政宗ノ旗本伏兵ノ起ルヲ見テ。驚破楯裏ニ謀叛人出來ルニヤト狐疑ヲ生シ。周章騒クコト不ㇾ斜。マモ不ㇾ透政宗ノ旗本勢眞驀ニ押掛。鬨ヲ噇ト作ツテ鐵砲ヲツルベ放ツ。會津勢黒煙ノ晴間ヨリ。日ノ丸ノ大旗ヲ見付。コハ如何ニ味方ノ裏切カト思ヒシニ。イツノ間ニカ政宗ノ出陣アリケルヨト。諸軍イキホヒ折テ氣ヲ呑マレ。駈合セントスル術ヲ失フテ。只押合タルバカリナリ。彈正ヲ始メ。伊達ノ三將。旗本ノ起ルヲ見テ。急ニ備ヲ直シテ鬨ヲ作リ。風上ヨリ突テカヽル。折シモ打續ク炎天土烟蹴立吹飛セハ。向フ者ハ眼ニカスミ。砲煙宙ヲ覆フテ敵味方ノ境ヲ失ヒケレハ。會津勢備ヲ立テ戰フコト不ㇾ能。只一面ニ伊達勢ノ押來ルカト思ハレ。前後シトロニ亂騒ス。政宗イヨ／＼下知ヲ勵マシ。短兵急ニ攻付レハ。成實景綱盛國宗玄カ軍勢モ。攻鼓ヲ打テ攻立ル。元ヨリ大軍ノ亂立タルコトナレハ。押直シテ防キ戰フヘキ樣ナク。崩レカヽル程コ

ソヽレ立足サヽ押立ラレ吾先ニト敗走ス伊達勢イヨ〳〵氣ニ乘テ。亂調シテ喚キ叫ヒ。追討ニ討コト甚タ急ナリ。會津ノ本陣既ニ突崩サレントシタル處ニ義廣押直サセ踏止リ二千餘ノ軍兵ヲ一所ニマトメ押太鼓ヲ打セ足並ヲソロヘテ打テカヽル。政宗下知ヲソヽヘテ敵ハ思ヒ切タル軍セントト見ヘタリ味方早マリニ手痛キ軍スハカラス見合セテ會釋シ、暫引シテ長追セス左右ニ分レ前後ヨリ引包ミテ打取ルヘシト下知ヲツタヘ玉ヘハ。伊達長井ノ軍勢トモ勇ヲコルヒ氣ヲ励マシ會津勢ヲヒラキ受テ一支戰ツテ一町ハカリ引退ク義廣氣ニ乘テ攻ブ討トコロ濱田伊豆・田手肥前、旗本ノ手ヲヌケテ、左右ヨリサミ挾ミ義廣ノ備ヲ突クツス中ニモ濱尾備前・梅津藤兵衛・村田市郎手痛キ働キアリ會津勢タマリカネテ見ヘケル處成實片倉等ノ備、會津敗走シテ中ヲキツテ義廣旗本ノ後ヨリ打テカヽレハ政宗ノ旗本押シ返シテ突テカヽリ前後左右押包ンテ一息モ突セスモミ立ラレ若松勢勇氣タユミ崩レカヽルヲ透間モナク追討ニ討ケレハ、一萬餘ノ會津勢惣クツレニ成テ途ヲ失ヒ新橋ヲ指シテ敗軍ス伊達イコノ〳〵勝ニ乘リ今橋山ノ長坂ヲ短兵急ニ責上ル、坂中ニテハ大將義廣既ニ危ク見ヘシ所ニ道當家ノシルシニハ義士勇將取テ返シ討死シテ引退シム、中ニモ蘆川助左衛門義廣ノ命ニ代ラント踏留ツテ命ヲ不惜戰フトコロニ其名ハ不知武者一騎助左衛門ニ切テカヽル蘆川彼武者ノ内冑ヲシタヽカニウツ大事ノ痛手ナレハ眼クラミケン漸ク手綱ニスカリテ引退ク蘆川モ受流ス太刀ノアマリ。弓手ノ臂ノカヽリヲ切付ラレ共ニ引退キケルカ彼名字ヲ聞ケハ政宗郎等俵野大藏ト云者ナリ其外引組テ差違ヒ、押ヘテ首ヲ掻モアリ。或ハ遁ルヲ追テ討モアリ追ツ返シツ火ヲ散シテ切結フ伊達蘆名ノ存亡今日ヲ限リトソ見ヘタリケル伊達勢ノ内ニハ大町飛驒・馬場藏人眞先ニ進ミ働キ群ニ抽ンシテ見ヘタリ若松方モ名アル者

多カリケレハ。引返シタ々。戰フテハ引退キ。登リ坂ノ其間ヲ七八度迄返シ合セ。兩方討ル、者夥シ。トカクシテ磐梯山ノ坂道ヲ押上ケ。其下リ坂ニ至テハ。我先ニト崩レカヽリケレハ。押倒サレ蹈殺サル、者。芦ヲ亂セルカ如シ。會津出陣ノ時新橋ヲ燒落シケレハ。渡スコト不能。湖水ニ馬ヲ乘リ入テ溺レ。漂泊シテ死スルモアリ。或ハ大寺邊ノ在家ニ駈入。物ノ具脫捨。自殺スルモ多カリケリ。義廣若松出陣ノ時ハ。旗本バカリモ七千餘ト聞コヘシカ。大軍ノ引立タル瓣ナレハ。取テ返シテ助ケ合セント云味方ハ少ナク。只旗本ノ勢バカリニテ。度々ノ合戰ニ大勢討レ。或ハ敵ニ隔ラレ。今ハ僅ニ三十餘騎。馬ノ前後ヲ打圍ンテ引退キ玉フ。梨木平ノ邊ニテハ。敵頻リニ追來ルヲ追返シ。大寺街道ニカヽツテ引レケルカ新橋ハ落タリ。此川ハ戶ノ口ヨリ落ル湖ノ末ナレハ。水カサ夥シク。大石崩レ顯レ。出瀨枕高ク瀧鳴リシテ逆卷ク波。雪ヲ散シケレハ。上ミ下モ十四五里カ間ニハ。人馬ノ渡ル淺瀨ハナシ。

義廣逃ノ西ニ下テ。堂島ノ橋ヲ渡リ虎口ヲ遁レ。黑川ノ城ヘ入玉フ。義廣ニ後レタル者トモ。我先ニ〳〵トセリ合程ニ。親討ルレトモ其子知ラス。行先ハ難所ナリ。川ヘ落ルナト呼ハレトモ。後陣ハ是ヲ聞入レス。押合追合。逃ル程ニ。橋ハ引タリ。水ハ高シ。敵ハ追フ。進退遁レ難ケレハ。河水モ不恐。飛入々々。上カ上ヘト上重ナリ。君臣上下ノ分チモナク。死スル者擧テ數ヲ知ラス。又大寺邊ヘ打入リシ伊達ノ士將富塚近江。大條尾張。泉田安藝。此躰ヲ見テ取テ返シ。戶ノ口ノ橋ヲ切落シ。裏切セント心掛。靜ニ押來リケルカ。新橋川ハ死人ニ埋ミ。討洩サレタル若松勢ハ川ヘヒタリ。死人ヲ橋ニナシテ。難ナク川ヲ渉リ行クヲ。富塚大條泉田ハ待受タルコトナレハ。追カケ々々討取ケル。適々爰ヲ遁レシ若松勢。戶ノ口ヲ心指テ落行ケレトモ。戶ノ口ノ橋モ切落シケレハ。川ヘ飛ヒ入リ助カル者ハ稀ニ。溺レ死スル者若干ナリ。古ヘ源平ノ大亂ニ。平家ノ人々八島ノ浦ノ入水モ。斯ヤト思ヒ合サレテ。

田モ富ワレヌ有様ナリ。コヽニ會津四天ノ家老富田美作カ二男佐瀬平八郎手勢大勢討レ、引立タル味方ト共ニ引除ントスルトコロヲ、家ノ子渡部伯耆申シケルハ、舍兄將監殿ハ伊達ノ大勢ヲ靡ケ、太郎丸掃部ヲ討取、又弟下荒井三郎殿モ若年ノ身ニテサヘ高名アリト承ルニ。サマテ出仕シタルコトモナク。今コレヲオメ〳〵ト引退ソハヤヤト諫クシカハ。平八聞テ腹ヲ立、扱ハ吾ナマテノコトスマシヤ者ト思フニヤト、俄ニ氣色ヲ引カハ、馬ノ頭ヲ引返シ群ル中ヘ切テ入散々ニ相戰ヒ、箭手ヲ負テ人心地モナカリシヲ、中間一人已ヲ肩ニ引カケ、大勢ノ中ヲ切抜ケ、落合村ノ東ノ田ノ畔ニ腰ヲカケサセケレハ、腹十文字ニ搔切テ死タリケリ。渡部伯耆モ主トトモニヽ粉骨ノ働キシテ討死ヲ遂ケタリケリ。主従トモ忠義ヲ兼タル者トモ皆ト世人嘆美シタリケリ。コヽニ會津ノ長臣河原田治部少輔盛次ハ、檜原口ノ押ヘトシテ。大鹽ニ陣シケルカ、摺上原ノ味方打負タル由ヲ聞、殘兵ヲ引率シ

馳付ケルカ、伊達勢ノ内ヨリ撞鐘ノ紋付タル旗スヽメテ來ル敵アリ。盛次之ヲ見、アレコソ片倉小十郎ナリ。前々仙道表ノ合戰ニ、伊達長井ノ者共ニ手並ノ程ハ見セ置タリ。一當アテ追散サント。巴書タル旗ヲスヽメ驅合ス。河原田ヵ郎等伊南源助、笛ノ紋付タル差物サシ。向フ敵ト引組。押ヘテ首ヲ取タリ。コレヲ始トシ。互ニ入亂相戰ヒ、左右ハ離ト別レテ見レハ、治部カ手ヘ首七ツ討取。己カ勢ハ足輕二人歩卒一人討レケル。盛次義廣ノ行衛ヲ見届ント、大寺迄引ケルヲ、伊達勢頻リニ追驅ル。盛次カ一族河原田左馬允生年十七歲引返シテ防戰シ、亂軍ノ中ニ討レタリ。中ニモ會津ノ士大將金上遠江守盛備、味方散々ニ敗北シタルヲ見テ、今ハ世ノ中是迄ト思切、追來ル敵ヲサヽヘ散々ニ切テ廻リ、鎧ノ袖モ草摺モ朱ニ染テ見ヘシカ、暫ク馬ヲ控ヘテ腹帶ヲ堅メ、鎧ノ上帶ヲシメ直シ、家人ニ向ツテ云ケルハ、今日ノ軍ヲ見ルニ、猪苗代カ陣ヲハ富田將監カ一軍ニ追崩シ、後詰シタル太郎丸掃部ヲ討

取本陣ノ軍モ度々勝ニ乘トイヘトモ、畢竟富田平田等ヲ始メ宗徒ノ者トモ心々ニ成テ、身ニシマヌ軍スレハコソカク云甲斐ナク打負タリ。左アレハ身方ニ名ヲ知レタル者多クハ渠等カ類族ナレハ、一人モ討死スル者アルマシ明日ニ成テ伊達信夫ノ者共、誹謗シ惡口セラレンコト口惜シ。所詮我一人ナリトモ討死シテ武家ノ指ヲ折ラレハヤト、物語シテ居タル處ヘ佐瀨平八郎カ家人二騎、ツカレタル馬ニ鞭ヲ當テ落來ル盛備之ヲ見テ平八郎ハイカニト問フ、サレハ討死仕タル由承リ候ヘトモ、能々主從ノ緣薄ク、亂軍ニ隔ラン先途モ見屆ケス屍形ニハ引退玉ヒ、心ナラス、是迄落來リ候ト泪ト共ニ答ヘケレハ、盛備モ泪ヲ浮ヘ、扱ハ平八郎モ討死シケルヨナ、我モ思フ仔細有テ討死スルソ、御代モ目出度アリナハ、我最期ノ樣ヲ日比ノ朋輩トモニ語リ傳ヘヨト、名殘惜ケニ云ケレハ二人ノ者コレヲ聞、扱ハ討死ト思定メ玉フヤ、數ナラヌ某等モ武家ニ携ハル身ナレハ、討死シ玉ハンヲ

見ステ、遯通リ何某ノ討死バカリアリシト、誰ニ向ヒ何面目ニ語リ候ハンヤ。只一所ニ骸ヲ曝シ申ナント、思切タル躰ナリ。盛備二人カ志ヲ深ク感シ、イササラハ諸共ニ可レ死トテ、逐來ル敵ヲ近々ト引受、多勢ノ中ヘ駈入リ、一足モ不レ引力戰シ、敵二人迄切テ落ス處ニ、戶ノ口邊ニ至リケル伊達藤五郎手ノ者齋藤太郎左衛門、一文字ニ駈來リ、金上ト渡リ合戰數合ニ及ヒシカ、終ニ金上討レケリ。佐瀨カ二人ノ從兵モ盛備ト共ニ力戰シ、金上カ手ノ者始メ一人モ不レ殘討死シケリ既ニ天正十七年六月六日摺上ノ軍退散シケレハ。政宗芝居ニ陣ヲ固メ玉ヒ、討取處ノ首、且ツ身方討死ノ記錄一覽アルニ、會津宗徒ノ輩ニハ金上遠江守盛備・佐瀨平八郎・河原田左馬允ヲ始メトシテ河水ニ溺死又引籠テ自殺ノ者、大圖二千五百餘ナリ、味方ノ討死雜兵カケテ六百四十一人ナリ。政宗ニハ其夜猪苗代ヘ皈陣アル道筋馬上ニテ原田休雪ニ向ハレ、今日太郎丸掃部軍功ヲ勵セシニ、無運ノシルシ討死セシ

コト。不便ナリ。トアリケリ。サレハ諸軍皆感涙シ。誠ニ武士ノ可守ハ忠ノ道可勤ハ義ノ死ナリ。筋骨ハ摺上ノ廣原ニ朽ルトイヘトモ。名ハ遠近ノ唇ニ殘ルコト。死シテノ後ノ面目ナリト。各語リツタヘケリ。斯テ猪苗代ハ飯坂アッテ彈正ヲ召出サレ。今日ノ粉骨ヲ感賞セラレ。其外成實景綱宗玄。及ヒ大條富塚泉田等ノ諸將力戰ノ功ヲ感謝アッテ申サレケルハ。今日敵味方ノ死傷アルコト。西國方ハ不知奧州ニ於テハ往昔安部ノ一族。泰衡兄弟滅亡ノ以後ハ。其例ヲ不聞時代ノ模樣トハ云ナカラ。誠ニ不便ノコトナリトテ感涙ヲ催サル。一座ノ諸將大將ノ厚志感服セスト云人ナシ。其後小梁川泥蟠。桑折點了・原田休雪ヲ召テ天アケナハ金川表ヘ出張スヘシ。軍勢ニ觸渡シ。其用意アルヘシトナリ。各承テ退出ス。抑會津義廣ハ近國稀ナル闘將ニテ。軍士ノ指引人數ノ扱ヒ。古道ニ叶ヒ武勇人ニ勝レ。誠ニ賢キ大將ナレトモ。血氣ノ勇ニシテ強過タル働キヲ好ミ、無理ノ勝利ヲ望マレ。士ヲ侮リ諫メヲ容ラレス。家ノ子郎等モ古キヲ捨。新法ヲ立テ。四民ノ苦痛ヲ不辨故ニ。譜代歷々ノ親類猪苗代ヲ始メ。伊達ノ家風ヲ慕フ者多ク。此度ノ出張ヲ幸ヒニ、降參スル者多カリシ。義廣大將ノ機器ニアタラス。非道ノ軍ヲ好ミ。若干ノ兵卒ヲ亡シ。前代未聞ノ後レヲ取リ。累代名譽ノ家ヲ亡シ玉フコソ。薄情ケレ。會津重代ノ武具馬具太刀カ。悉ク此戰場ニテ失ヒケルトカヤ。片倉小十郎カ手ノ者。大ナル螺貝ヲ拾ヒ取リテ政宗へ獻ス、コレ會津先祖佐原十郎左衛門尉義連ヨリ傳來シテ會津ノ重寶ト聞ク。取落シタルハ能々周章タルヨト宣ヒケル、此度新橋川戸ノ口川ニ溺死ノ死骸軍終リテ悉ク捜シ。取集メケルニ三千五百餘人トソ聞ヘシ。則是ヲ塚ニ築キ。三千塚ト號ケ、新橋川ノホトリニ今ニアリ。

會津領城々沒落之事

天正十七年六月七日早天、猪苗代彈正盛國・片倉小十郎景綱、先陣トシテ猪苗代出馬。其日午ノ刻金川近所

大寺ニ著陣、諸軍勢ハ大寺ノ里原ニ陣ヲトル。カヽル處ニ原田左馬助宗長。大鹽ノ城ヲ攻メ落シ。其外ノ城々モ摺上ノ敗軍ヲ聞、或ハ降參。或ハ城ヲ捨テ落行。若松ノ城ヘコモルモアリ。明城トモ不レ殘破却シ。太刀ニ血モ不レ塗。本陣ヘ來リ軍ノ容子相達シ。三橋鹽川金川ノ三ケ所バカリ。堅固ニ持コタヘ候段。披露シタリ。政宗喜悦アツテ。早速ノ大功今ニ不レ初コトナカラ神妙ノ至リナリ。扨又汝カ家中ニ誰々ハ如何ニ。何某ハ何ト別條有無ヲ尋ラルニ何レモ無二別儀一。召連候ト答ヘケレハ。則右ノ者共召出サレ、面々ニ盃ヲ玉ハリケル。扨大鹽城ノ様子其外城々ノコトヲ尋ネラル、原田承リ右城々ノ外所々ノ給人地下人等モ。皆若松ヘ逃コモリ候、臆病風ノサメヌ者トモ。若松落城ハ手間入間鋪候ト申シ上ル。政宗ニモ摺上合戰ノ次第。談話アル內ニ夜ハ三更ニ成ニケル。去程ニ鹽川城主南山和泉。三橋城主三橋丹後。金川ノ城主金川出雲。各內談シケルハ、今日政宗大寺迄出馬トアレハ定テ我々カ居城ヲ攻ン爲ナルヘシ。吾々小勢ヲ以テ面々城ヲ守リ難シ。累年伊達會津ノ戰ニ。一度モ味方勝利ナシ。剩ヘ昨日新橋戸ノ口ノ敗北。武運ノ盡ルトコロナリ。是義廣武道ヲ知リ玉ハス。血氣ニハヤリ。臣下ノ諫ヲ入ラレス。國政我意ニ任セ玉フ故ナリ。此末日ヲ追テ武威衰ヘ。月ヲ重ネテ不勢ニナリ。會津滅亡遠キニ非ス。詮スルトコロ伊達ヘ降參センカ、又此城ヲ開キ、若松ヘ籠城センカト。三將談合刻ヲ移ス時ニ。南山和泉申ケルハ。各ノ評談有二一理一。雖レ然義廣正兵ヲ用ルコト疎ナレトモ、道ニ舊家ナレハ、賢臣功士ナキニ非ス、若松ノ城克ク守リ玉ハヽ、早速ニハ落城アルマシ。然ハ政宗武威盛ント雖トモ。他國ノ長陣如何ナリ。然ル時ハ此度ノ合戰、勝負ハ今ニ决スヘカラス。一先ツ各城ヲヒラキ。越路ノ方ヘ赴キ世ヲ見合センニハシカシト云ケレハ。各尤ト議シテ。其夜城々ヲ開キ、津川ヲ指テ落行ケル、大寺ノ本陣ヘ此旨注進アリケレハ。則金川ノ城ヘ小梁川泥蟠。大條尾張。高野壹岐。鹽川ノ城ヘ桑折

[illegible]・富塚近江・濱田中務、三橋ノ城ヘ原田休雪・白石若狹・桑折治部ヲ差遣サル。斯クテ八日ノ辰ノ刻政宗三橋ノ城ヘ本陣ヲ移サレケル。

政宗三橋逗留ニ岩城佐竹兩將攻田村ニ
自會津表被分田村加勢事

政宗三橋ノ城ニ入テ四五日逗留アリ。黒川ノ様躰其外會津四方ノ境々殘兵ノ奇正ヲ探リ伺ハシメ、若松ノ城攻評議アル。先ツ米澤ノ境口檜原ノ方ハ、去ヌル閏月ニ原田左馬助ヲ大森ヨリ長井ニ皈サレ。最上領ノ境ナレハ、下長井ノ勢ヲハ其儘置テ、上長井近邊ノ勢ヲ率シ檜原口ヨリ大鹽ニ向ヒ、猪苗代ノ軍ノ様ヲ見合セ。搦手ヘ廻ルヘシト。云含メラレケレハ。差圖ノ如ク不日ニ上長井ノ軍勢ヲ催促シ、檜原峠ヲ越テ大鹽ニ向ヒケレトモ、皆此邊ノ者トモ黒川ニ引退キ、手指ス者ナケレハ、開城ヲ改メ、過ル七日駒形山大寺ノ本陣ニ來ツテ、左馬助委細ニ達之ケレハ、先ツ以テ北方ノ境目氣遣ナシ。其外ノ城々皆沒落シ。今ハ本城黒川若松ノ一城バカリナリ。其會津ノ内ニハ、山ノ内ノ小城トモ。未タ落居セサリケレハ、暫ク休息ノ間ヲ以テ、左馬助發向セシメ、右ノ要城共進治スヘキ旨命セラル。原田畏テ用意ヲナス。サヽル處ニ田村三春ヨリ飛脚來リテ訴ヘケル。去ル五月二十七日、佐竹修理大夫義重。岩城左兵衛督常隆。田村領南方ヘ亂入シ、猪苗代表合戰ノ内ニ、田村大平ノ城ヲ攻落シ、同門澤ノ城モ攻取レ候。此城ニハ當家ヨリ加勢ニソヘラレシ、大町參河。宮内因幡。中島右衛門・茂庭利兵衛籠城セシムル處、岩城勢取詰責打。城中命ヲ輕ンシ、防キ戰フト雖、多勢ニ不勢故、搦手ノ持口破レケレハ、大町參河・宮内因幡一手ニナリ大勢ノ中ヘ駈入攻戰ヒ、終ニ寄手ヲ追出シケレトモ、搦手ヨリ大勢込入、城ハ岩城ノ手ヘ乘リ取レケレハ。兩手ノ士卒漸々ニ命助リ引退ク。中島右衛門・茂庭利兵衛ハ二ノ曲輪ヲ固メケルカ、敵大勢込入リケルヲ追出シ、火出ルバカリ戰ヒ、敵兵餘多切散シ。物頭ノ頭三級ヲ得テ一息突ケルトコロ

へ。大手ニテ大町等ニ追散サレタル岩城勢引返シ。大勢ニ成テ突掛レハ。中島茂庭一命ヲ不惜攻戰ヒ。敵數十人討取トイヘトモ。多勢ニ對シ難ク。味方悉ク討散サル。茂庭中島役所ヲ不離。枕ヲ並ヘ討死仕ル。常隆モ兩人カ首ヲ見玉ヒ。兼々聞及ヒシ剛兵。アハレ助ケ置度物カナト宣ヒケル由聞ヘ候ト。軍ノ次第悉ク之ヲ演達ス。政宗聞玉ヒ。斯アラントハ吾以前ヨリ之ヲ知レリ。小利ニカヽハリテ。大ノ利ヲ捨ンヤト。推テ當地ヘ發向セシムル者ナリ。岩城佐竹一旦ノ利ニ募ルトモ。會津ノ敗散ヲ聞テハ。中々以テ三春ヘ手ヲ伸ルコト思ヒモ不寄。シヒテ小野新町邊ニ出張シテ。端々ヲ犯ス迄ナリ。田村ノ者トモ少シモ氣遣スヘカラス。併シ中島茂庭カ討死。惜哉十騎ヲ失フニ對セリ。不便ナリトテ泪ヲ催サレケル。則田村後詰ノ加勢トシテ。富塚近江・遠藤式部軍將ニテ宗徒兵士相加ヘ。伊達信夫刈田柴田ノ軍勢一千六百人相付ラル。兩大將士卒ヲ引イテ。即日ニ會津大寺ヲ立テ田村ヘ發向シタリ。

サテ又三橋ノ軍勢相減スルニ付。名取ノ勢ヲ催促。猶又宮城黒川國分ノ軍兵モ　追々ニ馳參スヘキ旨觸渡サル。依之人數ノアツマルヲ待テ。三橋ニ暫ク滯留セラレケリ。

富田平田屬ニ米澤ニ事

既ニ三橋マテ政宗攻寄セラルノ由。若松ヘ聞ヘケレハ。摺上ノ敗軍ニ氣ヲ痛メタル上ナレハ。不斜騷動ス。コヽニ會津ノ宿老世ニ四天王ト呼レタル。富田美作・平田左京入道不輪齋・同周防・佐瀬式部・南刑部ヲ始メトシテ。門楯ノ士將二十餘人。潜ニ席ヲ設ケ。密談シケルハ。夫世ニ義將ト云フハ。正義ヲ以テ國ヲ治メ。正義ヲ以テ家ヲ齊フト聞クニ。主君義廣ニハ其正義ヲ知リ玉ハス。時ノ威ヲ專ラニシテ。運ノ厚薄ヲモ不論。邪ニ武勇ヲ發シ。賢臣義士ノ諫メヲ用ヒ玉ハス。數度ノ合戰ニ一度モ勝利ヲ得玉ハス。高田右馬助。後難ノ禍ヲ顧テ諫言ヲ加フレハ。金言却テ耳ニ逆ヒ。伊達ヘ志アリト疑心ヲ起シ。右馬助ヲ誅戮アル。案ノ如ク

撰ヒノ一戰ニ敗軍ノ後レヲ仕出サレ。當家末代ノ名折ノミナラス、武威衰亡ノ基トナル、一騎當千ト賴レタル南山和泉・三橋丹後・金川出雲等モ、國政ノ不レ正ヲ悲ミ、居城ヲ退テ流浪ス、葦名家ノ滅亡三年ヲ不レ可レ過。抑會津モ昔蘆江守盛光ヨリ、各我等カ先祖代々臣事タリト雖トモ。是ノ無道ヲ避テ漢ニ從ノ輩モアレハ、今ハ只、各方ナン、當家ヲ背テ伊達へ降參センハ如何アラント嘆キケレハ、何レモ義廣ノ無道ヲ恨ミ居ケレハ、セヒト一味同心シ、同九日若松ノ宿老並ニ門葉ノ侍二十餘人。連書ヲ以テ伊達藤五郎成實。片倉小十郎景綱カ方迄寄通ス。其望ミニ曰、是迄ノ領知無二相違一並ニ備付ノ歩騎ノ者トモ知行不二相替一賜ハルニ於テハ、身方ニ參リ、忠勤ヲ可レ勵ト願訴シタリ。則披露ヲ遂ケレハ、政宗聞玉ヒ何レモ過分ノ願ナレトモ、折節田村ノ亂モ再起スル時ナレハ、會津表早速ノ落居何ヨリナレハ、望ノ如ク願ニ任サルヘキノ間、急キ可レ計トナリ、成實景綱使者ヲ以テ若松へ言遣ス。二十餘人ノ者共大ニ喜ヒ、當城御働キノ節ハ城ニ火ヲ放テ身方ニ可レ參ト堅約ス、抑此等カ野心如何成故ソト尋ネ聞ニ、去ル年義廣ヲ會津ノ養君トシタリシ時、實見佐竹義重ヨリ大繩讃岐守・刎石駿河守二人ヲ、後見ニ付ラレ、富田平田等ト與ニ國政ニ預リケルカ、互ニウハベニハ何事モ水魚ノ交リヲナシケレトモ、富田平田カ腹心ニハ、葦名累代ノ成敗ハ、何レノ代ニモ皆我等四天王ノ者トモノ手ヨリ出タルモノヲト指含ミ、又大繩刎石カ心中ニハ、某等ハ兼テ伊達政宗ノ舍弟ヲ代繼ニセント僉議シタル由ナレハ、義廣ヲハ思ノ外ノ主君ト兼日サミスト聞及フ、何事モ時ニ從フ習アルニ何條我々ヲ猜ミ思フコソ奇怪ナレト、互ニ憤リヲ含故、折モアラハト双方内心ニハ非ヲ伺フ、邪曲ノ氣絶ヤラス、衣ニ針ヲ包ムニヒトシ、義廣又我實家ヨリノ隨臣ナレハ。萬事ニ付テ贔負ノ沙汰ニ及ヒ、葦名代々ノ古老ノ臣ハ、アレハアリ無レハナキニ等シ、於二于此一富田平田ヲ始メ、義廣ニ恨ミヲ生シ、又右ノ兩臣

ヲ惡ムコト。一朝一夕ノ謂ニ非ス。故ニ富田平田等サラハトテ今度ヲ幸ニ、米澤方ニ成テ身上ノ安否ヲ極メ。此程惡カリシ者トモノ。ナレノ果ヲモ見ルヘシト思ヒフクミ居タル上。斯ハ思立ケルトソ聞ヘシ。

蘆名義廣若松沒落之事

名取國分ノ軍勢催促トヒトシク、吾先ニト夜ヲ日ニ次テ黒川ノ城下ヘ群參ス。然ル上ハ出馬アルヘシト同十一日若松發向ト軍評定極リケル、去程ニ義廣ハ摺上ノ敗軍骨髓ニ徹シ、無念ニ思ハレケレハ、敗卒殘兵ヲアツメ、若松ニ楯籠リ。如何ニモシテ政宗ヲ追拂ハント樣々思慮ヲ廻サレケルニ。サシモ賴母シク思ハレタル富田平田ヲ始メ。名アル者トモ逆心ヲ企、寄手ヘ内通セシムルコト。其隱ナシトイヘトモ。一人二人ノ野心ニ非ス、大勢ノ逆心誅スヘキ術モナシ。義廣口惜クハ思ハレケレト、外ニハ政宗贔屓ニツノリ、内ニハ野心ノ賊黨リ、事急ニ迫リシカハ、怒リノ泪ヲ浮ヘ累代ノ舊恩ヲ忘レ、吾ヲ背ク上ハ、誰ヲ頼ミ誰ト共ニ敵ヲ引受テ戰ハンヤ。越ハ呉ノ爲ニ亡サレ。恥シメヲ蒙ムレトモ、二度兵ヲ起シ。會稽山ニ恥辱ヲスヽキシ例シアレハ、我一先ツ當城ヲ開キ。兄義重ヲ頼ミテ兵ヲ起シ、政宗ヲ討果シテ會稽山ニ恥辱ヲ雪キ。二度此城ニ立皈ラントテ、天正十七年六月十日ノ夜ニ入リ。主從三十餘人、黒川若松ノ城ヲヒライテ、芦原越ヨリ白河ノ關路ヲ指シテ落ラレケル、相伴フ近臣皆々住馴タル古巣ヲ放シ、呼子鳥ノタツキモ知ラヌ山路ヲタトリ、恩愛妹脊ノ別レサヘ惜ムヘキ間モナケレハ。只心ヲ空ニ暇ヲツナキ。世ノサマノ浮沈。是非モ泣ク々々供シタリ、宵ノ程ハ月影モサヤカニ、木ノ下陰ノ徑道モ迷ハサリシカ。小夜更テハ茂ミカ外ニ月落テ行道モサタカナラネト、續松サヘ世ヲ忍ヘハヒカリホノカニ燭シツヽ、後レ先タツ輩、互ニ聲ヲシルヘシテ催ヒ誘ハレテ落行ケル。爰ニ宮川ノ橋爪マテ著シニ、澁川助左衞門。富田將監カ郎等星野備中カ勢ニ下テ打ケルヲ呼テ、ハヤ此等ヲ引具シ、自然追來ル

トキ心ヤスク渡シ申サントテ二人暫ク立止リ橋板ヲハトテモケル其谷川ノ幅ハ南方十丈バカリモ有タル深川ノ額ニ掛置タル橋ナレハ。恰モ一條ノ白虹ノ半空ニタナヒケル如クナレハ。此橋ヲダニ引落サハ、玄員内膳道カナクナリトモ、輙ク此所ハ越ヘ難キ切所ナリ。時ニ山中ニ隠レ居タル盗者共、松明ノチラメキ人聲アルヲ聞付テ、スハヤ旅人ノ有ゾ、貨財雑具ヲ奪取ト言リ騒キ、四方ヨリ馳リ寄ル。富田將監ハ父カ養道ニヤミセス、義廣ノ供シタリシカ、家人星野備中ヲ呼シテ汝ハ急キ先ニ登リ、イカニモシテ此盗者トモノ。狼藉セサル様ニ計フヘシト云ケレハ。備中カ曰。急シテ此山中ノ者トモ常ヶ某ヲノヤ存候ヘハ、登リニ驚ク可申トテ、手槍提ヶ馬ヲ早クテ馳通リ、集リ居タル盗者トモニ向テ。イカニ汝等。今度屋形不慮ノ御合戦ニ及ヒ玉ヒシリ一先ツ常州ニ御ヒラキ有テ、佐竹殿御勢ヲ借セテ、近日又此所ヲ御通リ有ゾ、主人將監モ御供ナレハ、星野備中御先ヲ拂フナリ、其トモ狼

藉ニ及ヒナハ、一人モ安穏ニハナシマシキソ、道ヲ聞テ姉ヶ仕ルナト大音ニ言リ、散々ト打渡レハ、盗者トモコレヲ惜レテ一當ノ障リナク皆々引退ケレハ、翌十一日ノ晩景ニ白河ニ着レケルニ、關吉島何某ト云者ニ心アル氣色ナレハ、湊川助左衛門ニ命シテ討セラル。夫ヨリ常陸國龍崎城ニ住シ、後同國江戸崎ニ移ラレケル。其後義重モ仙道ヨリ仮陣セラレ、星野備中カ踏次ニテノ振舞ヲ聞レ、甚賞美アツテ折ニ付テ召出シ、盃ヲ差テ刀一腰ヲアタヘケルトソ。抑此若松ノ元祖ハ、桓武天皇ノ後胤三浦大助義明カ末子佐原十郎左衛門尉義連カ二男遠江守盛連カ五男葦名六郎兵衛時連。是若松ノ元祖ニシテ、連綿トシニ時連ヨリ十四代、盛氏・盛興・盛隆ト連續シテ、今義廣迄十八代。盛隆ニ子ナクシテ甲斐源氏新羅三郎義光ノ後胤、佐竹修理大夫義昭ノ二男右兵衛尉義廣ヲ養子トナシ、會津葦名ノ家相續アリシニ、今日イカナル日ソヤ、大國家忽チニ斷絶セシコソ痛マシケレ。十日夜子ノ刻バカリ

ニ。富田美作。平田不輸斎。同周防。佐瀬式部。南山和泉方ヨリ馬使ヲ走セテ。若松ノ城開陳。義廣没落ノ由三橋ヘ注進ス。明レハ十一日未明ニ先ツ片倉小十郎。守屋主伯。石母田左衛門。鈴木和泉。古内内匠。湯村右近右六人。若松ヘサシ越サレ。城内ヲ點検セシメ。口々ヲ固メテ城中ヲ掃除シケリ。

政宗入若松城附宥傳法印逐電事

河原田盛次遣使於政宗許事

同田村表軍立山内落居之事

同日辰ノ刻。政宗三橋ヲ出馬。七宮伯耆ハ會津案内者ナレハ。先陣ニ打セ。金川ノ橋ヨリ海道ヲ眞直ニ若松ノ城ニソ入ラレケル。政宗年來ノ本懐ヲ遂サレ、喜顔不斜。隨臣家士下卒勇ミニ勇ミテ見ヘタリ。同十二日。此度味方ニ馳シタル富田平田ヲ始メ二十餘人。各ニ面謁アツテ杯ヲ賜ハリ。其上兼約ノ通。各本領無相違ノ黒印ヲ賜リケレハ。面々之ヲ頂戴シ退出ス。此日ヨリ會津殘黨ノ諸士。若松ヘ馳セ參リ。面々手寄ヲ求メテ訴訟申ス者多カリケレハ。ソレ／＼ニ恩知ヲ施シ召仕ハル、依之若松ハ一統ノ無事ト治リケル、扨又田村表ノ一亂無靜謐トテ、六月廿二日。伊達成實。片倉景綱兩大將ニテ、一千餘兵三春表ヘ差向ラル。猶モ人數不足ナラント思ハレ、原田左馬助ニ會津新參ノ軍兵ヲ差ソヘテ、追々ニサシ越サレ。田村領城々ヘ加勢ヲ入レ。三春ノ城ノ固メハ。成實。景綱五百餘騎ニテ陣ヲ設ケ敵寄スルヤト待居タリ、然ルニ岩城常隆ニハ三春ヘハ寄セラレス、下枝ノ城ヘ押寄責戰フトコロニ。伊達勢後詰シテ攻掛ケレハ。城中モ木戸ヲ開キ切テ出、前後ニモミ立、火ヲ飛シテ戰ヒシニ、岩城勢戰ヒ右往左往ニ敗軍ス、城兵後詰勝ニ乘テ追討シ。成實景綱田村右衛門ヲ始メトシテ。諸大將ノ手ヘ首廿二三ツヽ討トリ、都合惣數二百七十三打取ケル。常陸ニハ無恙引取リ。佐竹義重ニモ大平ノ城攻取ラレシ後ハ。別所ヘノ働モナク。七月二十日。佐竹岩城ノ兩勢。田村ノ地ヲ引拂ヒ、兩將トモニ皈陣ナリ、此由成實景

朝方ヨリ鳥銃ヲ以テ若松ヘ注進ス。斯テ田村ノ亂障一不日ニミヘ靜リケリ。扨又其頃會津如來山八葉寺ノ侍者宥尊法印トイヘルハ、富田美作カ弟ナリケルカ、此人伊達代官ノ禮ヲ忘レ、伊達ニ身ヲ寄スルト聞テ以ノ外モ憤リノナシ、吾桑門ノ身トイヘトモ政宗黒川ニ打入ラルヽ時ハ。矢一筋射カケテ討死シ。先君ノ恩ヲ報スヘシト罵リテ、本庵良ノ方ニ俄ニ堀ヲ穿チ塀ノ高クシテ要害ヲ拵ヘ、一山ノ侍者同宿偏ニ弓箭ヲコトヽシ今ヤ〳〵ト待ケルカ、義廣沒落セラレ、政宗若松ニ打入ラルヽ由ヲ聞テ、宥傳以ノ外ニ力ヲ失ヒ始メノ義勢トハコトカハリ、何國トモ無ク逐電シケリ。又河原田治部少輔盛次ハ、去ル五日摺上ノ軍敗レケレハ、引立タル身方トトモニ金川邊迄引退キ受ニテ踏ニ鎮マル己カ手勢ヲ顧レハ、雑兵士七八騎足輕八十餘人ニ不過。斯テハ如何アルヘキト、暫ク旗ヲ立馬ヲ休メ、敗軍ノ勢ヲアツムル、追々ニ馳ツキ足輕只二人見ヘサリケル。此上ハ如何ナル先途ノ

合戰ナリトモ、此勢ニテハ兎モカクモト思ヒ、黒川ヨリ西ニ當テ中荒井ト云所迄引去テ陣ヲ取。五六日逗留シ居タル内、二十日ノ夜義廣黒川若松ノコトヲ落ラレケレハ、今ハカナシト盛次モ己カ領所伊南ニ引カヘサント思ヒ、高田迄引タリシカ、如何思ヒケン家人伊南源助ヲ政宗ノ方ヘ使ニ立、盛次不肖ニ候ヘトモ。某存命ノ内ハ當地ニ安々ト御住居ハ案ノ外ニ存候。カク申スヲ推參ト思召候ハヽ、只今此方ヘ御勢ヲ向ラレ候ヘ、最期ノ一軍仕テ生涯ノ念願ヲ遂可申ト不敵ニモ申シケレハ、政宗此由ヲ聞レ欣然トシテ曰。河原田カ吾ニ對シテ軍センハ石卵ノタトヘニ等シ。押寄首ヲ刎ンハ易ケレトモ大義ヲ思立身ノカヽル小敵ニ手間トランコト詮ナケレハ、宥メテ身方ニセハヤト宣ヒ、盛次カ方ヘノ返答ニハ、只今御邊ノ使者ノ旨趣、誠ニ言語同斷ナリ。大勢ヲ差向テ討果サンハ掌ノ中ニ候ヘトモ除リニ不敵ニ見ヘラルヽヲ感シ、其沙汰ニ不及候間、急キ在所ニ皈リ、軍勢ノ勞ヲモ休メラレ

候ヘ。政宗近日關東發向ノ志候ヘハ。御邊ヲ先陣ニ頼入候ヘシ、扨モ聞シニ勝ル勇士カナト。大樣ニ返答アリケル。盛次義勢ハ如是ナレトモ迚モ叶ハシトヤ思ヒケン。伊南ヲサシテ引退キケル。會津端々モ大形ニ落居シテ。只山ノ内ハカリ未タ何條ノ沙汰ナケレハ、サラハ山ノ内ノ城々退治アルヘシトテ。七月廿六日原田左馬助ニ。五百餘騎ヲ指添ラレ。山ノ内ヘ發向セシム。彼ノ山ノ内ニハ。伊奈伊保横田川口梁取トテ五ケ城アリ。伊達勢發向スル由ヲ聞テ 五城主打寄テ評談シ。會津ノ運斯迄ニ盡ル上ハ、我々カ小城迚モ持難シ。本意ニ背クトイヘ共大將サヘ沒落アル上ハ、何ヲ目當ニ討死遂ン。理ヲ曲テ降ランニハ如シト議定シテ、同二十八日。五ケ城ノ主將兵器ヲ略シ。各原田カ陣所ヘ來リ。身命ヲ助ケラルニ於テハ、城々明渡可申ト降參セシカハ、左馬助領掌シテ、五ケ城ヨリ證人ヲ取何レモ先ツ城ヘ皈シ。右ノ次第若松ヘ注進ス。則若松ヨリ山崎玄蕃ヲ軍使トシテ。五ケ城降參ニ付、證人受トル段神妙ナリ。早速城々受取、人質共ハ可返旨ナリ。依之同八月六日、人質ハ相返シ。城兵受取、則番手ノ者ヲ差置。同十一日。左馬助若松ヘ皈陣シテ委ク披露ヲ遂タレハ政宗感賞アツテ。五ケ城ノ惣代ニハ夏井藤右衛門ヲ差居ラレ 横田城ニ勤番シケリ

政宗被行忠賞附新國上總介降參之事

會津領中悉ク政宗ノ手ニ属シ 新參ノ諸將士日夜出勤シテ、馬ノ立所モナカリケリ 九月三日。遠藤式部基治ヲシテ、此度粉骨ノ軍忠アル族、輕重ヲ分チ記錄シテ可指出旨命セラル。依之諸將ヲアツメ。其手々々ノ諸軍勢ノ働キ、輕重ヲ微細ニ記シ指出ス、于爰猪苗代彈正盛國成實ヲ頼ミ申達シケルハ、先年御味方ノ約仕候節、御約束ノ通、會津北方半分下サレヘキ由願之大將ノ曰 彈正知行北方ニ何程有之ヤ。盛國承リ。某知領元來北方ニ無之故。半分下サレ度ト。最前望書指上申處ナリト、政宗ノ曰。其書付ニハ北方トバカリ有テ。半ノ字ナシ。仍テ北方ニ持來ノ領知アツテ。之ヲ

望ミタルヨト思ヒシ者ナリトアリケレハ。其品成實彈正ニ申シ聞セケレハ。彈正默然トシテ當惑ス。時ニ猪苗代ノ家臣[illegible]兵衛ト云者末座ニアリシカ。進ミ出テ其書付ハ某此筆仕候。證ニ北方半分ト書上候モシ半ノ字無之ハ。切腹可仕ト。血眼ニ成テ申ケル。成實其旨申上ケレハ。先年指上置タル書付ヲ出サル、ニ彈正是ヲ見レハ半ノ字ナシ。只北方分被下度トバカリ書タリ。盛國赤面シ。是譜代ノ主君ニ背ク天罰ニテ。加樣ノ相違申上不及是非。再ヒ可申上樣ナシトテ。暇ヲ願ヒ。猪苗代ヘ歸リケル。政宗ノ日。彈正返忠セシ故ニコソ早速ノ勝利ヲ得タリ。褒賞ハ不望トモ。北方半分可與事ナレ。主ニ背キ己カ繁昌ヲ思ヒ。莫大ノ所領ヲ望ム。不忠至極天何ソ咎メナランヤ。ケ樣ノ者ニ莫大ノ所領ヲ取スル事ハ。却テ吾誤リナラントテ有テ北方ノ内ニテ五百貫文賜ハリケル。扨又原田左馬助ニハ。會津手裏ニ入ルニ於テハ。津川ヲ可賜旨賞約アリケル處。津川城[illegible]ト云所。金川近江知行スル播上ニテ近江討死シタリ。津川ノ城代ニ殘セシ家人トモ近江討死ト聞ト等ク。隣境越後長尾景勝ノ手ヘ屬セシ故。他領トナレハ不及。其代トシテ。於鹽川百貫文賜之。白石若狹ニ二百貫文。桑折治部ニ二十貫文。濱尾備前ニ三十貫文。梅津藤兵衛ニ三十貫文。大町參河ニ二十貫文。古内内匠ニ二十貫文。福田玄番ニ二十貫文。上野善次郎ニ二十貫文。其外功ニ從ヒ。夫々ニ加恩ヲ施サル。且ツ先年猪苗代ヘ使セシ三藏軒ニモ十貫文知行ヲ賜ハリケル、折シモ長沼ノ城主新國上野介若松ヘ參向シテ降ヲ乞ヒ。身方ニ屬シケレハ。本領ノ儘相違ナシ。又富田美作・平田不嚮。平田周防。佐瀬式部。南山刑部ニハ。近習ノ奉公ヲ云渡サル。斯テ政道ヲ正シ。會津領中ノ地高ヲ記シ。郡頭村長ヲ召出シ年貢諸納ヲ尋ネ。前政ノ員數ヲ減セラレ。新法ノ諸役悉ク免除之。諸軍勢田畠ハ不及申。萬ツノ亂妨堅ク之ヲ停止セラレケレハ。國民大ニ喜ヒ。安堵シ。城下ハ云ニ不及。在々所々ノ市廛ヒ盛ンナルコト。前代ニ十倍

シテ治國ノ色顯ハレタリ。

私ニ云。凡ソ諸軍記ヲ編集スル。各其家々ノ宜シキハ擧之テ、不可ナルハ除之。諸書大略如是。コレ私ノ所爲ナリ。凡ソ褒貶ハ世ノ知ルトコロナリ。何ソ私ニ之ヲ僞作センヤ。然ルニ梓行ノ書ハ不及云。適藏秘スル處ノ書寫ノ卷册ニモ。伊達ノ兵略ハ皆無法ニシテ。夷賊ノ擧動アルコトニ記セル者多シ。是皆其家々ノ記ニ因テ。深ク諸家ノ勝敗ニワタラサルノ誤ナリ。相馬ハ相馬ノ强ミノミヲ記シ。會津ハ會津ノ勝利ノミ記シ。伊達ハ伊達ノ武威ノミ記ス。最上岩城南部佐竹上杉大崎二本松ノ諸家皆如此戰爭功慮勝敗ノミニ非ス、國政ノ邪正。四民ノ撫窮、忠不義奸曲正不正。閨中ノ惡事ニ至ル迄。國家ニ拘ル程ノモノ。皆有ノ儘ニ筆記スルニ非レハ。正鑒トスルニ不足。數百編ノ內。獨リ會河濱風土記ノミ正鑒トスヘシ。予效之此秘鑑ヲ企ル者也。予當家ノ仕失タルヲ以テ、其是ノミ拾フテ不舉。他家ノ惡ノミ擧テ善ヲ拾ハス。褒貶ニ私シテ妄談ヲ加ルモノニ非ス。其家々ノ是非善惡。閉蓋スルトコロナク。皆有ノ儘ナリ。此旨誓神明者也。前ニ摺上ノ戰。政宗ノ謀略ニ反シテ義廣ハ只血氣ノミニシテ思慮薄ク。大内片平カ叛心、高玉阿古島ノ落城。猪苗代カ叛逆。彼是憤リニ憤リヲ重ネ、忿怒止コトナク。彈正ニ於テハ只一擧ニ攻潰サント　須賀川ヲ夜半ニ發シテ、會津ヘ皈陣セラレ。急ニ兵ヲ進メ、無二無三ニ新橋ヲ燒落シ。磐梯山ヲ超テ背水死地ノ勢。誠ニアタルヘカラサルノ兵勢ナリ。然ルニ政宗ニハヨク兵機ヲ探リ。義廣須賀川皈陣ハ必ス猪苗代ニテ合戰ト推量アツテ。諸將ノ抑留ヲ不用。中途ニ人ヲ出シテ出馬アルヘシトノ。盛實等カ返答ニ僞ラセ。不意ニス、ンテ破之。策ノ如ク義廣不察之。大軍ヲ用ルノ法ニ背キ。險ニヨリ難ニ渉フテ、悉ク重地ニ入リ。伏兵ノ術ニ落ス。此勝利アルコト未戰ニ政宗ノ軍慮。鏡ニ物ノウツルカ如シ。其兵ヲ用ルコ

ト危クシテ不完、良氣ニ似テ不ㇾ有良氣、實ハ義經道誉ノ出兵ニ等シ、其ノ勝ノ可ㇾ及トコロニ非ス。

又云、政宗ノ兵ヲ用ルコト、能ク時ヲ察シテ之ヲ轉シ、勢ヲ見テコレヲ遣ク、相馬上杉ノ如キ、强盛ノ兵氣ハ避テシイテ不ㇾ戰、故ニ味方ヲ不ㇾ損亡、時勢ヲ悟テ順ㇾ之背ㇾ之、始メ隨ㇾ太閤、後東照君ニ順フ是ナリ、能謀リ能用テ、四民ノ愛情ヲ不ㇾ失、實ニ覇業ノ意ニカナヘリ、ユヘニ終ニ武名ヲ永ク保テ、後葉ヲ子孫ニ全フス、コレ一朝一夕ノ志ノ爲ス所ニ非ス、後件心ヲ付テ其時勢ニ任スルノ慮リ深キコトヲ味フヘシ。

伊達秘鑑巻之二十四終

伊達秘鑑巻之二十五

東奥仙府　靑々軒　編集

須賀川落城之事

其後伊達政宗ニハ、會津仙道ヲ打從ヘラレシカハ、今殘リタル城トテハ、岩瀨ノ二階堂盛行ノ後室支配セラル、須賀川ノ城バカリナリ、政宗老臣功士ヲアツメラレ、會津蘆屋ト須賀川盛行ハ、同胞一躰ノ深キ縁近度々吾ニ敵セリ、然ルニ盛行去ヌルコロ病死スト雖、存生ニ相替ラス、城々堅固ニ持コタユ、其儀指置キテハ往々伊達ノ障リト成ヘシ、彼地ヲモ攻ント思フナリ、如何有ントアリケレハ、各可ㇾ然ト同シケレハ。近々須賀川ノ城攻ラルベキニ極リケル、抑盛行ノ後室ハ、尋常ノ女性トハ、抜群ニコトカハッテ、勇氣丈夫ニモ越ヘタリ、去ヌル天正十四年二月廿二日、盛行死去ノ後今年迄四ケ年ニ及ヘトモ、亡夫ノ跡ヲ相續シ、郡村ノ端々一ヶ所ニテモ、他將ノ爲ニ犯サレス、安泰

ニシテ居ラレケルニ。今度政宗仙道ニ會津四郡ノ勢ヲ合セテ向ハル、由風聞アレハ。岩瀨譜代ノ郎等共。降參有テ可レ然ト樣々ニ異見シケレトモ。後室曾テ承引ナク。一筋ニ籠城ノ用意ヲセラレケル。其後後室家人等ヲ召アツメ。頃日風聞ノ如クナラハ。不日ニ政宗寄セ來ルヘシ、サアラン時ハ多勢ニ無勢。對場シ難ケレハ。終ニハ云甲斐ナク攻落サレ。闇々ト討ルヘシ。其期ニ及ンテ落忍フ共、草ヲ分テ捜シ出サレ、妻子等ニ憂目ヲ見センモ不便ナリ、迚モ運ヲ開クヘキ軍ナラネハ、敵ノ寄セ來ラヌサキニ政宗ニ降參セヨ、恨ト更ニ思フヘカラス 自ラニ於テハ思フ仔細アルニ因テ、一人ナリトモ城ニ有テ、寄手ヲ待受テ自害スヘシ。カヽル上ニモ義ヲ守リ。節ニ死セント思フ輩ハ。同シ道ニ伴フヘシト、涙トトモニカキ口說レケレハ、一席ニ並居タル面々モ。袂ヲ顏ニ押當、暫シ詞ナカリケルカ。良有テ各申シケルハ。左程マテニ思召定メサセ玉フ上ハ。誰カ是迄ノ御恩ヲ忘レ、敵ニ從ヒ候ヘキ。御心易

ク思召ヘシト申シ切テ、一場必死ト極メタル輩。東方ニテハ鹽田右近太夫一族。小倉ノ遠藤內藏頭一黨。佐久間主殿介同彌右衛門、小山田ノ內山右馬允。大原內匠介。飯村六郎左衛門。青木次郎兵衛。須田內藏允。大槻與二郎。桐生玄蕃。同若狹。黑月與右衛門。青木源四郎。服部伊豆。吉成監物。同玄蕃。月照（一書作ニ日照田）大學。田中兵庫。須田左近。江藤万力。前田信濃守。須田ノ城主須田美濃守。須尾ノ城主矢部主膳。遠藤左馬介。圓谷與三左衛門。同左馬允。鹿島彥八郎。須田大藏。江村近江守。須田源藏。高久田四郎。矢部紀伊守。須田織部。同彥三郎。飯土井半次郎。鏡沼大膳。濱尾藤一郎。矢部源。小原田內膳。滑川十郎。山寺淡路守。鈴木帶刀。小川和泉。須賀川旗本ニハ濱尾參河守。其子內藏介。同氏筑後守。其子內匠。同氏志摩守。其子內記。同彌兵衛。遠藤雅樂頭。同壹岐守。矢部伊豫守。同掃部。其子織部。朝日伊勢。其子萬七郎。大波石見守。其子新八郎。薄井源右衛門。其子源十郎。內田肥前守。荒木田淸右衛門。大寺宮內大

途ニキハメケル、志コソ頼モシケレ。爰ニ矢田野伊豆守ト云者、大里ノ城ニ居タリケルカ。守山カ隠謀ヲ企タル由ヲ仄ニ聞キ、頓テ郎等五十餘人引具シ。須賀川ニ馳來リ、同志ノ者ノ許ニ立ヨリ、守山カ隠謀ノ企。僞リナラネハ遂ニ彼ヲ誅シ、其後寄來ル米澤勢ニ駈向ヒ潔ク軍セント思ヒ定メ、某カ家人ニ守山ヲ討セント申シ含メテ來レリ。各同心アルヘシト云ケレハ。須賀川ノ運極ヽニヤ、何某等ウケカハスシテ。守山程ノ者カ累代ノ恩ヲ忘レ　左樣ノ振囘ハヨモアルヘキコトニ非ス　殊ニ虚實モサタカナラス。一騎當千ト頼タル者ヲ。俺忽ニ害スルコトヤアラン。一定セヌニ人ヲ疑フ程ナラハ、左云フ伊豆守ノ心底モ難計ナト疑テ。シカ／＼返答モセサリケレハ。伊豆守大ニ怒テ。座席ヲ起テ、扨ハ當家滅亡ノ時既ニ至リシヨナ。迚モ行季慕々シキコトハヨモアラシ。不日ニ逆賊カ爲ニ落城シ其時思ヒ合セテ後悔セント云捨テ。大里ノ城ニソ皈リケル。

政宗於片平軍議附須賀川合戰之事

政宗ニハ須賀川發向ト定リケレハ。若松ノ留守居ニハ　小梁川泥蟠。田手助三郎。小田部薩摩。石川右衛門。五十嵐信濃。[illegible]野[illegible]。牧野　安藝。七宮　伯耆。大和田出雲ヲ始ト　一千餘騎ヲ被ニ籠置、仙道表ノ従軍ニハ、亘理美濃重宗。伊達藤五郎成實。原田　左馬助。白石　若狹。大條尾張。泉田安藝。富塚近江。濱田伊豆。瀬上中務。中島遠江。山岸源六郎。宮内因幡。下何坂　主計。西大條　右兵衛。鈴木和泉。今村出雲。平田周防。佐瀬式部。大宮　隼人。大内備前。猪苗代彈正。貝田長次郎。高野　壹岐。遠藤出羽ヲ始メ。二千五百餘騎ナリ。又猪苗代ノ城ニハ、高森雪齋政景ヲ置レタリ　斯テ天正十七年十月四日、若松ヲ出馬アッテ、其日仙道片平ノ城ヘ著陣アル。片平助右衛門親綱御迎ニ出案内ス、同五日本宮尾張。高倉近江。福原淡路。郡山太郎左衛門。片平ヘ參向シ。會津掌握ノ[illegible]ヲ申シ達ス　先達テ内通降參セシ岩瀬ノ家臣保土原江南齋、保土原[illegible]行村。濱尾善齋　矢邊下

野守等五日夜ニ入テ片倉ヘ馳參シ伊達成實ヲ以テ降參ノ旨達レ之政宗則對面有テ盃ヲ賜ル各拜謝シテ退出ス同六日伊達ノ輩ノ始メ軍將達ニ須賀川責等ノ輩ヲ召出シ尋ネ玉フハ岩瀨ノ旗下矢田野伊豆・横田治部カ居城ヲ攻ラルヘキカ又何レヨリ手當シテ可レ然ヤト各ノ異見ヲ問ハレケルニ保土原江南齋申シケルハ仰ノ通リ可レ然候ヘトモ横田矢田野カ両城ハ先ツ被二指置一須賀川表御進發アツテ可レ然候須賀川サヘ落城ニ於テハ小城共ハ御馬向ラルニ不レ及悉ク落城可レ仕ト申シケレハ政宗實ニモト同心セラル政宗重テ須賀川籠城ノ軍兵何程カアラン江南善齋承リ盛行卒去ニ候ヘトモ佐竹義重ヨリ侍大將里見淡路・小笠原式部・河井甲斐守ニ五百餘兵被二指添一加勢トシテサシ越サル又岩城常隆ヨリモ竹貫中務大輔・植田但馬守ヲ大將トシテ三百餘兵指越サレ候須賀川武士須田美作・矢吹内匠・遠藤内藏・佐久間主殿等一族老臣都合一千二三百ニハ不レ可レ過各盟約ヲ固メ必死ニ籠城仕候政宗ノ曰須賀川ノ攻口ハ何方ヨリ可レ然ヤ其時田村月齋頭庵申シケルハ須賀川ノ攻口南ノ方地形宜シク候ヘトモ城中高ク此方ハ地下リナレハ敵ノ分量見ヘ難シ東ハ猶不レ可レ然西ノ方ニハ廣原十四五町續キ城西ニ押詰テハ手袋川トテ僅川ノ水上有レ之候ヘトモ。其外ハ野續キニテ一面ニ地形須賀川ヨリハ高ク八幡崎ノ虎口ヲハ只一目ニ見渡シ、總テ平地ニ候ヘハ馬蹄ノ往來障ル所ナク候。西口ヨリ攻ラレ可レ然カト申シケレハ、一座ノ面々天晴功者ノ評議尤可レ然ト皆一同シケレハ。攻口ハ西ニ定リケル政宗其夜ハ高倉ニ一宿アリ翌レハ二十六日拂曉ニ須賀川ニ向ハレケルカ傍ヘノ屋舍ニ白鷄ノ一番上リ居ケルカ来ク弱音ノ紛レ定カニ見ヘワカヌヲ。政宗アレハ鷄ナルニヤトアリケレハ。餅ノ下ヨリ近臣某リアヘス今日城攻ノ御首途ニ シロトリヲ御覽アリシハ日出度吉兆ニ候ト申シケレハ イシクモ祝シタリト打笑ミ玉ヒ程ナク須賀川ニ著陣有

テ両ノ方ニツヽキタル廣野ニ勢ヲ打入レ、人馬ノ息ヲ休メラル。其後政宗近習ノ功士十騎バカリヲ召具シテ陣場ニ出ラレ。雨呼口ト八幡崎ト両口ノ地形寄スヘキ階次ノ便宜ヲ見澄シ、本陣ヘ立皈ラレ。將士ヲアツメテ議セラレケルハ、身方勢ヲ二手ニ分ケテ押寄ハ、貴モ川ヲ超テ打出ヘシ。左アラン時手痛ク當テ追入レ、推破ントテ勢ヲ二手ニ分ラル。先ツ八幡崎ノ口ハ 新國上總介盛重ニ 須賀川新參兵士相交リ。五百餘兵、二番會津新參ノ兵士ニ、伊達信夫ノ軍勢相加リ 白石若狹宗玄五百餘兵 三番四保但馬五百餘兵。又後詰トシテ富塚近江。瀨上中務。保土原 江南。濱尾善吾・大條尾張差添ラル。 雨呼口ヘハ、一番大内備前定綱・片平助右衞門親綱 二番伊達藤五郎成實、三番片倉小十郎景綱五百餘騎 相ツヽク。殿ニハ桑折治部、富田美作・平田周防・泉田安藝。原田左馬助。濱田 右兵衞・飯坂右近・五百餘騎。段々ニ備ヲ 立テ相圖ヲ待ツ。政宗昨夜命ヲ下シ 明日ノ合戰ニハ步兵等迄、白地ニ左リ巴ヲ黑ク書、肩ニ可付トノ命ナリ。依之諸軍勢ニ觸渡シケレハ、何ノ用トハ知ネトモ。大將ノ下知ナレハ、俄ニ此笠印ヲ拵ヘ、左ノ肩ニ付タリ。其夜三更ニ及ヒ。又命ヲ出サレケルハ、晝ノ袖印ヲ右ノ袖ニ可付トナリ。依之終夜彼巴ノ紋ヲ右ノ袖ニ付替ケル。既ニ其夜明テ今朝廿六日曉天ニ、本陣ニハ濱田伊豆。黑木肥前・石母田左衞門。新田式部・遠藤文七郎。中島伊勢・茂庭石見・鈴木和泉・湯村右近・古内内匠等召具シ。八幡崎雨呼口ノ左右所々見分アル所ニ、左リノ肩先ニ巴ノ紋印付タル武者七八十人、步立ニテ味方ニ雜リ見ヘケル。政宗見玉ヒ。アレナル肩ニ巴ノ印付タル者トモ。一人モ不殘可搦捕ト下知セラル。元ヨリ味方ノ中ニ雜リ居タルコトナレハ 籠中ノ鳥ノ如ク、安々ト生捕ケル、何方ヨリ紛レ入タルヤト糺明シケレハ、皆城中ノ兵士ナリ、戰半ニ裏切セン爲。紛レ入タルニテソ有ケル。大將ノ思慮深キコト、各舌ヲ卷タリ。政宗ニハ山下ノ觀音堂ニ陣ヲ居ヘテ控ヘラル、城中ニモ敵兩方ヨ

ト言ニアルト見ヘ、各手ヲ分チカケル。先ツ荻場ノ高キ所ニ白旗ヲ立シテ、濱尾三河守。同氏筑後守。同志摩守。矢部伊豆守。遠藤因幡守。曾目伊勢守。大波越後守以下ノ兵、八木ニ控ヘタリ。一手ハ遠藤壹岐守。濱尾内藏介。同氏近内。長沼彦左衛門。大波石見守。其子新四郎。朝日方主水。岩崎彦十郎。熊澤四郎右衛門。同氏助左衛門。忍藤兵衛。荒木田清右衛門。薄井源左衛門。内田肥前守。高林右衛門。須田主膳。同右近。矢部紀伊守。同氏掃部介。其子織部。同氏右馬允。同源五郎。濱尾藤市郎。須田掃部介。同氏刑部。大寺宮内大夫。伊士藤内。大賀大學。矢内助左衛門。白藁因幡守。濱尾内記。同蒲兵衛。同内匠介。小河内藏允。其子蒲三郎。伊士井玉兵衛。鈴木太郎左衛門。其子孫七郎。同彦八郎。石井大學。今泉和泉守。中原彦右衛門。西坂甚四郎。片寄新藏人。宮崎内記。中村助七郎。小野寺外記。矢田雅樂介。同與次右衛門。根木左馬允。佐藤主水。大田與三左衛門。同氏監物。塚原次郎右衛門。味戸助兵衛。富原太郎左衛門。橋本藤右衛門。佐久間十兵衛。志賀木工介。石井彦右衛門。須木助左衛門。吉田彦十郎。田邊與右衛門。同氏與十郎。瀬田次郎左衛門。三瀬太郎右衛門。小林蒲八郎。安久津與八郎。本田新次郎。同氏又右衛門。大橋掃部。五市隼人。佐藤助七郎。同氏雅樂允。箭宮源七郎。沙茂孫十郎。花川莊左衛門。須山與惣左。同長三郎。同又市郎。沙門德善院。光明院以下固メタリ。一手ハ須田美濃守。四日結ノ旗ヲ差揚ゲ、安藤服部。小板橋兌山寺。長瀬制鑛。矢田部片岡等ノ兵ヲ左右ニ從ヒ備ヘタリ、北ノ方ニハ岩城尊竹貫中務大輔。植田但馬守。以下三百餘騎南ノ方ハ佐竹勢河井甲斐守。里見淡路。小笠原式部等二百餘騎各備ヲ並ヘテ待カケタリ、斯テ須賀川方雨口ノ兵卒二百餘騎。川端マテ押出シ、鐵砲ヲツルベ放ツ。米澤方五百餘騎。手代川ヲ渡シテ責掛ル。須賀川勢ハ兼テヨリ敵ヲ思フ圖ニ引受、難所ニ追入テ討ント謀リケレハ、暫ク會釋シテ引退ク。米澤方勝ニ乗リ北ルヲ追コト一町餘リ。其時鈴木太郎右衛門。同六郎右衛門。泉

田將監。同左近。須田源兵衛以下。鐵砲ノ上手トモ數十人。忍右衛門以下射手數十人。大黑石ノ邊ニ支テ玉箭玉ノ如クニ放チ掛ケヽレハ、寄手手負死人數ヲ不レ知。之ヲ見テ須田美濃守・遠藤壹岐守。同雅樂守・大沼石見守・濱尾內藏助・同氏近內・矢部伊豫守・高橋右衛門・吉田七郞左衛門。長沼彥左衛門。矢田雅樂助・同與次右衛門。熊澤四郞右衛門。中村助七郞。矢部木工助。佐藤主水等、轡ヲ並ヘテ進ミタリ。美濃守前後ノ勢ニ下知シテ、互ニ今日ヲ最期ノ軍ナレハ。首取高名シタリトモ、何ノ世ノ恩賞ニカ預ラン、討タリトモ首トルナ。射落シタリトモ目ナカケソ。只矢種ヲ不レ惜。射盡シ精力ノ及程ハ死狂ニ戰ヘト呼ツテ。一度ニ咄ト馳ケ合ハセ。火ヲ散シテ戰ヒケル。南ノ方ヨリハ佐竹勢河井甲斐守・小笠原式部・里見淡路二百餘騎鐵砲ヲ放チカクレハ、北ノ手ヨリハ岩城勢竹貫中務大輔・植田但馬守三百餘兵射手ヲ一面ニスヽマセ散々ニ射サセタリ。中ニモ水野勘解由ト云者、隱レナキ精兵ニテサシツメ

引ツメ射落ス。サシモ勇メル米澤勢。三方ヨリ攻ラレ。先陣討ルヽ者百餘人ニ及ヘリ、此戰ノ半ニ新國上總介。透間ヲ窺ヒ。手ノ者トトモニ步立ニナリ、大黑石ノ邊ヨリ岩ノハサマヲ田ヲ傳ヘ。會下町小路ノ南ノ方ニ亂入リ、在家ニ火ヲ掛ントスルヲ見テ。二陣ニ控ヘタル矢部主膳。簡谷與三左衛門。佐久間主殿介。飯村六郞左衛門。內山左馬允・靑木次郞兵衛。木原內匠介。黑月與右衛門。大槻與次郞。桐生玄蕃。同氏若狹。須田內藏允。同氏左近。日照大學。大寺雅樂頭。服部伊豆守。吉成玄蕃允、同氏監物。江藤万力ヲ先トシテ、眞驀ニ長沼勢ヲ中ニ取コメ。モミ立〱戰ヘハ。新國カ手勢若干討レ引退ク。大內備前。片平助右衛門。手勢ヲスヽメテ入替リ。火ヲ飛シテ力戰ス。サレトモ須賀川勢勝ニ乘テ切崩セハ、大內。片平カ手モ揉立ラレ。北ヲサシテ敗走ス、二陣ニ備ヘシ成實、斯ノ味方度々駈立ラルヽヲ見テ大ニ怒リ。勇ミ進ンタル須賀川勢ニ破ツテ入。四五町ハカリ追崩シ。アタリノ在家ニ火ヲ放チ、勝鬨ツ

兼テコリ栖裏ノ謀叛人ナレハ。大追物ノ馬場口。番石ト云處ニ上テ。己カ差物ヲヌキ。横ニフリケルニ。内々合圖ニテ有ケン。家人織部金平ト云兄弟ノ者。城ヨリ西ニ當リタル。會下町小路長祿寺ト云禪院ノ匿所ニ火ヲツケタルニ折シモ西風烈シク吹テ[illegible]リ天ヲ焦シケレハ。餘煙城中ノ役所ニ移リ。ソレヨリ赤炎四方ニ飛ケレハ。櫓ヲ連ネタル屋形屋形。片時ノ間ニ燃上リ。黒煙一城ヲオシ包ム。後室此形勢ヲ見ラレ。扨ハ頃日ノ風聞ノ如ク。守山カ叛逆治定ナリケリト推量アリ。守山カ妻ヲ呼寄セ。汝カ夫ノ守山。譜代重恩ノ身ヲ忘レ。カヽル振回ハ餘リニ情ナシトテ。サメ／＼ト歎カレケレハ。守山カ妻承リ。誠ニ御恨ノ程。恐ナル心ニモ御理リト覺ヘ候。此上ハ自ラ兎ニモカクニモ御計ラヒ有テ。御恨ヲ晴サセ玉ヘト。泪トトモニ云ケレハ。後室深ク怨ノ餘リ腹ニ居ヘカネ。彼ノ女房ヲ取テ引寄。守刀ヲ抜テ既ニ刺殺サントセラレシヲ。側近キ女房トモ。後室ノ袂ニスカリ。先ツシハラクト止メレハ。後室力及ハス。拔タル刀ニテ自害セントセラレケルヲ。周章騷キテ押止メ。守刀ヲ奪ヒトル。然ル處ニ兼テ守山カ附置タル郎等。七八人走リ來テ。並居タル女房ヲ突倒シ守山カ妻ヲ肩ニカケ[illegible]門ノ方ニソ[illegible]タリケル。斯テ火煙城中ニ充ケレハ、[illegible]ト心ニ[illegible]メ一致シタル勇士等モ。煙リニ咽ンテ働キ得ス。米澤勢ハ此氣ニ乘リ。四方ヨリ攻入ケレハ。城兵前後ヲ辨ヘス。只動亂シタルバカリナリ。

籠城諸士討死之事

頓テ落城ニ及ヒケレハ。濱尾十郎。高橋菊阿彌父子ハ。落行勢ノ中ヨリ踏止リ。散々ニ戰ヒ。向フ敵三四人討テ捨。一足モ不退討死ス。遠藤雅樂頭。同氏彦一郎。大賀大學。玉名子次右衛門。宮崎外記。大波越後守ハ。大手口ニテ手痛ク防キ戰ヒ。各枕ヲ双ヘテ討死シタリ。岩城ノ加勢竹貫中務ハ手ノ者皆打セケレハ。力ナク栗尾澤迄落ケルヲ。敵大勢追カケケレハ。取テ返シ向フ者三人切フセ。四人ニ手負セ。勇氣撓ミ勢ヒ盡。其身

モ終ニ打レケル首ハ片倉カ手ノ者之ヲ得タリ。須田美濃守ヵ一子源一郎ハ城ニ火カヽリタルヲ見テ急キ馳入テ彼方此方ヲ見廻ルニサシモ造リ營ミシ家屋悉ク灰燼ト成テ父カ行衛モ知レサレハ今ハコレ迄ト思ヒ切大勢ニ駈入。散々ニ戰ヒシカ馬ヲ射ラレテ歩立ニナツテ戰シカ終ニ擒トナリケリ。後室ヲハ敵二十人ハカリ入來テ。米澤方ニ生捕ケルソ淺マシキ、斯トハ不知須田美濃守城中ニ駈入テ見テアレハ門モ築地モ燒落テ後室ノ行衛モ知サルユヘ、此上ハ一先ツ和田ノ城ニ楯コモリ敵ヲ引受一軍シテ尋常ニ腹切ント獨言シテ泣々和田ニ歸リケルカ此處ニテ敗軍ノ勢ヲアツメ見ルニ纔ミ切ツタル兵士ノ内安藤小橋服部ヨリ外ハ不見。殊ニ一子源一郎カ行衛モ如何ナリケン。問フヘキ便リトテモナシ其上殘兵モ僅ナレハ此無勢ニテハ籠城モ成難シトテ城ニ火ヲ耀テ落行ケルカヽリシカハ小荒田隱岐守・横田治部・矢田野伊豆守モ勢ツキテ降參シケレトモ政宗

許容ナクシテ所領ヲ沒收セラレケル。矢部上野守ハ狸森ノ城ニコモリシカ。叶ハシトヤ思ヒケン。同ク降人ニ出ニケル　鹽田右近大輔ハ石河町ニ隱レ居タリシヲ石川昭光サカシ出シテ首ヲ切ル矢田野安房守・同善九郎。泉田將監。山内刑部・河原田治部等。所々ノ要害ニ引籠リ防キ戰ヒシカトモ。其甲斐ナク其後太閤東征ノ砌リ各下城シタリ。斯テ須賀川落居シケレハ。政宗ニハ緩々ト諸軍ヲ休勞セシメ、須賀川ニ四十餘日滯留セラル其後守山筑後守ヲ召出サレ。先年久保田對陣ノ節忠心今ニ不忘此度當所落居偏ニ其方ノ功故ナリトテ盃ヲ賜ル。筑後低頭シテ退出ス　斯テ須賀川ノ城ヲハ、親族タル石川ノ領主石川昭光ニ附賜セラレ白河ノ城主結城七郎義親。同ク親族タルニ因テ白河ヲ安堵セシメ下野ノ境ヲ守ラシム、

盛行後室所々沈落附遠藤雅樂頭妻投身事

去程ニ盛行ノ後室ハ須賀川落城以後シハラク米澤方ニトラハレトナリ玉ヒシカ。女性ノコトナレハ兎

是。其後村井田ニ住セラル。是ハ年來ノ郎等遠藤但馬等ト云者此城ニ住居シナカラ、政宗ヘ降參シケレトモ。サル仔細アツテ恨モナカリシ故トソ聞ヘシ。其後杉目ニ移リ。又岩城ニ行テ住セラレシカ、常陸卒去ノ後。佐竹ニ行テ嬉シカラヌ月日ヲ送リ迎ヘ。八九年逗留シ。再ヒ須賀川ニ歸リ。長祿寺ニテ空シクナラレシトカヤ。斯テ須賀川籠城ノ諸士ノ妻子等、所々ニサマヨヒテ。便リモナキアリサマナリ。中ニモ殊ニ哀ナリシハ。遠藤雅樂頭カ妻ナリ、彼モ落城ノ折カラ。或者ノ方ニ捕ハレテ居タリシカ。ツラ〳〵思メクラスニ。雅樂頭殿存命ナラハ、今迄ヨモ尋ネ玉ハヌコトハアラシ。音信タモナキハ合戰ニ身ヲ果シテ失玉ヒタルニヤト悲ミ歎キケルカ、追々ノ取沙汰ニ雅樂頭モ討死ト聞シヨリ。猶彌增ノ歎キニ飮食ヲ絕テ打臥シケレハ。今ハ命トテモ賴ミ少ニ見ヘニケル。亂妨ニ捕ヘ具シタル男、此アリサマヲ見テ。何シニサマテ悲歎ニ沈ミ玉フヤ。カヘラヌ道ノ歎キニ可惜身ヲ捨ラレンヨリ。我等カ妻トモ成テ。今ノウサヲ忘レ。過去リシ人ヲ思ヒ出シ、折々ハ一遍ノ念佛ヲモ回向アランコソ、亡キ人ノ爲トモナラメ。此度所々ニ亂妨シタル者多ケレトモ。我等カ如クハヨモ勞ハル者ハアルヘカラス。斯モ心ヲ盡ス吾ニ。サマテ强面シ玉ハハ。知ヌ他ノ國ニ賣渡シ。金銀ニカヘテ樂シマン。寶ニセテ勞リ置クモ、吾妻トセンタメナリ。詞ニ從ヒ玉ハスハ。今云如ク計ハン。サ有ン時我ハシウラミ玉フナト。一度ハ面ヲ和ケテ諫メ口說。一度ハ聲ヲハケマシテ怖シケレハ。女房ハコレヲ聞クニ　肝消心絕テツラサニツラサ增リ、何ト答ヘン詞モナク只打臥テ泣クバカリナリ、其後彼男ノ留守ヲ窺ヒ。女房密ニ其家ヲ忍ヒ出。近キアタリノ寺ニ行。住寺ノ僧ニ逢テ申シケルハ。自ラハ須賀川落城ノ折カラ、當所ノ者ニ囚ハレ來リ侍リヌ。然ルニ主シノ男自ラヲ妻ニセントロ說侍レト。假令夫存命ヘテ自ラ棄ラレタリトテモ。ナトカ兩夫ニマミユヘキ。況ヤアカヌ別レノ中ナレハ。爭カ彼ニ從ヒ可

川ナキ道ニモ人ノ面影ノミ目ニ遮リ、心ニ忘ル隙ナケレハ、彼ト云是ト云。身ヲ棄ハヤト思定メ候。若自ラ失セヤト聞召ハ。一遍ノ回向ヲモナシテ給リ候へ。何カト形見ノ物ニモ進ラセ度ハ候ヘトモ、落城騒動ノコトナレハ、身ニツケタルモノトテモナケレハ、進ラスヘキ物モナシ、セメテノシルシニトテ、懐中ヨリ蒔繪ノ筥ニ入タル鏡ヲ取出シ、コレハ重代ノ相傳ナレハ、此度モ持來リ侍リシ。コレヲ奉ルトテ、彼僧ニ渡シ置キ、泣々宿所ニ歸リケルカ、斯テ霜月二十六日ノ事カトヨ。彼女房逢隈川ニ尋ネ行、淵ノホトリニ立寄、高聲ニ念佛唱へ、碧潭ノ底ニ飛入テ、流ノ末ノ泡トコソ消失ケル。折シモ其邊ヲ通リシ者之ヲ見テ、只今美シキ女房身ヲ投タルソ、此里人ニヤト呼リケレハ、所ノ者トモ聞之驚キ周章、集リテ熊手ニ掛テ引上ケレトモ、時移リタルコトナレハ、呼吸絶目閉リ。紅顏忽チニ變シケレハ、更ニ其甲斐ナシ。此事ヲ聞ク人見ル人ナシナヘテ「昔ヨリ今ニ至ルマテ。夫ニ後ルヽ者多シトイヘトモ誰カ如此命ヲ棄テタル例ヤアル。誠ニ貞節トヤ云ハントテ、各感涙ヲ催シケル。彼寺ノ法師ハ一入哀レナルコトニ思ヒケレハ、其處ニテ火葬シ、一基ノ卒都婆ヲ立置ケル。其後彼鏡筥ヲヒラキ見ルニ、鏡ノ下ニ辭世ト覺ヘテ短册ニ和歌二首ヲ書タリ。「亡人ノ爰ニクルマノ無シトテモ廻ハリ、ソ逢ン一ツ蓮ニ」「後ノ世モ逢隈川ニ身ヲ投テ沈ムハ深キ縁ナリケリ」法師モ哀レナルコトニ思ヒケレハ、昨日マテ見シ其人ハ無レトモ、殘ル物ニハ優言ノ葉ト書ソヘテ。亡跡念頃ニソ弔ヒケル、世ニイフ鄙ノ東マナレト、和歌ニ哀ヲ書殘シテ永ヤ語リ草トナルコソヤサシケレ

仙道諸將降參附伊達岩城再和睦并政宗
若松越年酒宴之事

サシモ鐵城石郭ト聞ヘシ須賀川城、一塊ノ灰塵ト落城シ、殘黨悉ク落居シケレハ。燒土ヲ拂ツテ假屋ヲ營ミ、十月廿九日。政宗假ニ陣ヲ移サル。同十一月二日子田原城主子田原讃岐須賀川へ參著シ。原田左馬助

ヲ以テ降參ノ旨達之則對面有テ本領ニ相違ナシ。同ク四日白河彈正少弼義治須賀川ヘ來リ。自今幕下ニ屬シ可申由降參ス。此義治ハ最上出羽守義光ノ舍弟ニテ政宗ノ御母方ノ叔父ナリ。則對面アッテ契約ノ儀相調フ。石川大和守昭光モ。先立テ入來。伊達ノ幕下ニタコリ。則須賀川ヲ預リケル。是モ政宗ノ伯父ナリ。其外白河結城義親ヲ始メ。幕下ニ屬シケレハ。一館ノ地士鄕侍等ハ　皆先ニト參向シテ悉ク軍門ニ降ル者。日夜指ヲ伏スルニイトマナシ。岩城常隆ニモ此度迄モ當城ヘ加勢セラレ確執ヲ含マレケルカ。伊達ノ兵勢石卵ノ威ヲフルヒ。會津四郡仙道七郡モ手裏ニ入リ東方ハ深谷黑川ヲ限リ。北ハ羽州長井ヲ境トシ。西ハ越後ヲ隣リ。南ハ常陸下野ヲ關トシ。先祖探題ノ時ノ知領ニ倍々シテ。覇業既ニ成就シケレハ。常隆片濱ノ小知ニシテ。伊達ヘ敵スルコト　永久ノ謀ニ非スト思案アッテ。石川大和守昭光ヲ賴マレ。再ヒ和睦ノ義ヲ取結ハル。昭光此由達サレケレハ。政宗元來大氣ナレハ。無異儀旨返答アルニ依テ。十一月七日和順ノ義相調ヒ。向後無異心。双方入魂アルヘキ旨　兩家使者ヲ契約アル。今年政宗二十三歲。若大將ト雖トモ。無比類威光ノ程。東國ニ輝キケル。斯テ須賀川西方ノ居住ノ侍トモ皆不殘。石川昭光ノ與力ニ附ラル。同十八日ニハ近鄕所々巡見アッテ。白河郡ノ內那須境ニ關奈子ト云所ノ地形堅固ナルヲ見立ラレ。繩張アッテ城地ノ普請ヲ下知セラレ。伊達成實。白石宗玄隔番ニ城代タルヘキ旨命セラル。白石ハ直ニ新城ヲ相守リ。成實ハ暇ヲ得テ二本松ヘ歸陣シケル。政宗仙道表平均シケレハ。則若松ヘ歸城有テ。來年ハ常州ニ打出。佐竹義重ト雌雄ヲ決セント議セラル。義重モ又政宗ヲ攻テ。敗戰ノ讎ヲ復センコトヲ思ハレケル。暫時ハ兵革ノ音絕テ。雪ハ諸陣ノ跡ヲ埋ミ。其年モ既ニ暮テ。明レハ天正十八年正月元日。政宗會津仙道押領セラレ。始メテノ年頭ナレハ。祝儀例ヨリモ殊ニ日出度春ナリ。城外門前ニ駕馬ヲ連ネ。席上ニハ金屏ヲ圍ヒ。

一族老臣外家他ノ新参マテ、上下萬歳ノ壽ヲ演タリ。同十一日ハ年中ノ物始トテ。城西ノ河原表ニ足輕ヲ出シ。數百挺ノ鐵砲ヲ一度ニツルベ放タセラル。同十四日ノ夕ヘニハ、何レモ亂舞遊宴ノ嘉例ナリ。此五六年ノ間打續キ、山野ニ日ヲ暮シ。寒暑ニ身ヲ曝シ。弓箭甲冑ノ辛苦ノミナリシカ。皆越方ノ夢ト變シヌレハ。是ヨリ後ハ猶萬代ノタノシミヲ極ムヘケレト。上下イト浮ヤカニ。サヽレ石ノ苔ムス。相生ノ松ノ千年迄ト聲々ニ謠ヒカナテ、酒宴興闌ナルニ、長沼ノ城主新國上總介盛重、沈醉ノアマリ、六十有餘ノ鬚男、黑皺ノ面ニ白粉ヲヌリ、鼓ヲ抱ヘ謠ノ拍子ヲ取リ、心モ空ニ狂ヒケル。コレヲ見ル一座ノ人々、一入ノ興ナリト笑ヒ罵ル族モアリ。又ハ世ニ從フ習トハ云ナカラ、累名家ノ高恩ヲ受テ、昨日マテモ會津ノ羽翼ト沙汰セラレシ身ノ今日敵ニ属シナカラ、諂ニモ似ヽ振回シナト誹ル族モ多カリケル、

伊達秘鑑巻之二十五終

伊達秘鑑巻之二十六

東奥仙府　燕々軒　編集

津輕右京亮逆心以南部領端々掠ニ信直ニ事

津輕三部ハ、南部二十三代安信ノ時。手ニ入タル所ナリ。依之安信弟左衛門尉高信ヲ津輕ノ軍代ニ居置同所石川郡ニ居住シ、晴政ノ代津輕三郡ヲ下知セラル高信死去ノ後モ、相續テ郡代ナリ、信直代ニ至テ舎弟彦二郎政信ヲ郡代ニ立ラレ。波岡ノ城ニ置レ。後見トシテ、大與寺左衛門大夫・同氏右京亮兩士ヲ相添ラル、此時左衛門大夫ハ、上浦ニ居住。右京亮ハ西根大浦ニ居住シケル。然ルニ兩雄必ス爭フ習。兩人ノ中惡ク互ニ瞋恚ノ及ヲ磨キ、欝憤ヲサシハサム。右京亮政信ノ前ニ於テ、大與寺ヲ樣々ニ表裏讒訴數度ニ及フ。初メハ實ト思ハレサリシカ。度重ナリテ終ニ右京亮カ讒言許容有テ、大與寺ヲ深ク惡マル、依之左衛門大夫己カ居城ニ引コモリ、右京亮ト有無ノ勝負ヲ決セ

ント恨ヲ含ミ。合戰ノ用意專ラナリ。右京亮政信ノ前ニ出。大興寺逆心ヲオコシ。御舘ヘ押寄ント其用意專ラナリ。急キ馬ヲ向ラレ。退治可然ト申シケレハ。政信尤ト同シ。急キ勢ヲ催シ。大興寺カ居舘上浦ヘ押寄。四方ヨリ取圍ミ。一揉ニト責ケレトモ。大興寺モ流石ノ弓取ナレハ。四方ニ兵ヲ配ツテ。コヽヲ先途ト防戰シケレハ 政信多勢トイヘトモ。必死ノ城兵輙ク難破。頓テ三戸ヘ烏使ヲ以テ。此旨注進シケレハ。信直大ニ驚キ。出馬アルヘキニ決定シケレハ。大興寺此風聞ヲ聞。籠城持難シト思ヒケン。潜ニ城中ヲ忍ヒ出。無行方逐電ス。其後遙時過テ比内郡ニ隱居テ。信直ヘ時々佞言シ 其上謀ヲ以テ比内郡ヲ不殘。信直ノ手ニ入ケレハ 此功ヲ以テ勘氣ヲ赦サレケリ。然ルニ天正十六年三月始。波岡彥二郎政信俄ニ心地不例。政信内室ハ北左衛門佐信愛娘ナリ。此時三戸ニ居ラレシニ。津輕ヨリ早打ヲ以テ。 政信氣色大切ノ趣キ信直ヘ披露ス。依之政信ノ内室モ。此注進ヲ聞キ大ニ周章シテ。

急ニ津輕ヘ打越。既ニ波岡ヘ到著アリケレトモ。急病ノコトナレハ。早言舌モ不叶。ヒトヘニ蟬脫ニ逢ニ似タリ。内室ハ政信ノ手ヲ取リ玉フ迄ニテ。早事キレ果ケレハ。内室ハナゲキ言モ更ナリ。斯テ政信卒去ノ後。楢山靭負・南右兵衛ヲ遣ハシ。爲郡代 差置レタリ。其コロ三戸ニテ大興寺赦免有テ。本領安堵シケレハ。右京亮ハ旁々身ノ上ヲ顧ミ。 滅亡ノ期始ト目前ニ顯ルコトヲ察シ。兎ニ角大守ノ咎メ遁ルヽ所ナケレハ。此上ハ逆心ヲ起シ。運ヲ天ニ任セント思惟シ。羽州秋田城之助實秀ヲ語ラヒ。加勢ヲ受ンコトヲ乞フ。秋田モ比内取合ノコロヨリ。南部ヘハ兼テ睦シカラス。欝憤ヲ含ム折カラナレハ。早クモ催促ヲ領掌シ。二百餘ノ加勢ヲ忍ヒニ大浦ヘ遣ハシケリ。 右京亮兼テ期シタルコトナレハ。日頃津輕三郡ノ諸百姓ニ至ル迄。夫々ニ操テ仁愛ヲ施シ。恩澤ヲ施セシカハ。地下百姓ニ至ルマテ。此節爭デカ日來ノ好ミヲ忘レントテ。思ヒ々々ニ附從ヒケレハ。三郡ノ勢ハ不殘。右京亮ニ思ヒ付

テ天正十八年二月下旬南部代ノ拵タル波岡ノ城ニ
取掛攻戰フ。勝負。右兵衞南人思ヒモ寄ラヌコトナレ
ハ。周章フタメキ取ル物モ取リアヘス。サレトモ門貫
サシ堅メ。櫓々ノ狹間ヲ開キ。有アフ者トモ走リテ鐵
砲ノ筒サキ矢ノ根ハシ近寄敵ノ急所ヲ揃ヒ透間ナク防キ
ケレハ。急ニ可落躰ニ非ス。カラ攻ニハ人數モ損フコ
トナレハ。向陣ヲ取テ責攻ニマツリシタリケル。カク
テ右京亮カ軍勢此所彼所ヨリ馳集リ。次第々々ニ勢
重ナリ。今ハ大勢ニ成ケレハ。敵モ勢盛ンニ見ヘタリ。
城中ハ小勢ニシテシカモ兵粮乏シケレハ。久シク持
得ヘシトモ不見。南部代評議シテ。急キ早馬ヲ以テ三
戸ヘ右ノ次第ヲ告注進頻リニ加勢ヲ乞ケレハ。信直
出馬アルヘシト相觸リ。津輕出陣ト觸ラレタリ。依之
諸軍勢日々野邊地迄相詰。此度ノ先手ハ九戸左近將
監政實ニ申シ付ラル。政實領掌ハセラレナカラ。何ト
ナク用意モセサリケレハ。信直不易思ハレ。使者ヲ以
テ度々催促アリケレハ。政實ノ返事ニ。私此程風氣ニ
痛ハリ候ヘハ。津輕陣ノ供叶ヒ難キ由申シ切ケレハ。
信直大ニ怒リ思ハレケレトモ。大事ノ前ノ小事。不
及力無止シケリ。抑政實何故ニカク下知ヲ背カレケ
ルト。其由緒ヲ考ルニ。先年信直家督相續ノ刻ミ。諸人
政實ノ舍弟彦九郎實親ヲ。南部ノ家督ニ立ントス。左
有ンニ於テハ南部十萬石ノ領内。我心ノマヽニ執行
フヘシト。政實微笑ヲ含ム處ニ。思ノ外北左衞門カ計
ヒニテ。田子九郎信直家督ニ備ハリ。其上左衞門信愛
加州ヘ赴キ。加賀利家ヲ頼ミ。關白殿下ヨリ朱印拜領
ノ後。信直後楯強ク。政實日來ノ大望大ニ相違シテ。萬
ツ不快ノコト共多カリキ。斯ル處ニ此度津輕陣觸來
リケレハ。既ニ其用意ニ及ントセラル、折節。何者ノ
表ニニク有ケン。政實ニ言通シケルハ。此度ノ先手、
大事ニ候。信直兼テ謀リ給フコトアリト聞ユ。能々思
慮ヲ回ラサレ然ルヘシト告シトカヤ。依之政實日頃
誤リハ身ニ覺ヘアリ。サレヲ實ト思ヒ。居城九戸ヘ引
籠リ。信直ノ下知ニ背カレケル。此故ニ信直津輕表ノ

出馬遅滞シケレハ。於津輕賊徒次第ニ蜂起シケレハ、兩郡代波岡ノ城ニ怺ヘカネ、城ヲ明ケテ三戸ヘ立皈ル。此時比内郡モ亂レテ、終ニ秋田領ト一並シニ成ニケル。信直之ヲ征セントセラルレトモ。僅ニ十萬石ノ小身内ニハ九戸下知ニ叛キ野心ヲ挾ム、外ニハ津輕蜂ノ如クニ起テ、是ヲシツムルニ輙スカラス、如何アルヘシト評定一決セサル折柄。金澤利家ヨリ。使者トシテ内堀四郎兵衛ト云者三戸ヘ下著シ。關白秀吉公相州ノ北條征伐ノ爲。三月朔日京都ヲ進發有テ。關東御下向ニ候間。信直ニモ急キ小田原ヘ參陣アッテ可然ヨシ申シ越サル。依之信直諸方ノ敵ヲ打捨。小田原ヘ登ラルヘキ用意ノ外ハ他事ナシ。扨又津輕ニハ、右京亮心ノ儘ニ三郡ヲ打従ヒ。秀吉ヘ急キ參禮トケ。知領ノ朱印申シ請ン。トカク南部ニ先セラレテハ首尾アシヽ。一刻モ早ク上ラント。其用意ニ及ヒシカ此所ヲヒラキテハ如何ナル變ヤ有ナン。先々使者ヲ以テ一禮ヲ申サント。急キ使節ヲ小田原ヘ走ラカシ。禮詞厚ク述之。其後如何ナル武運ニヤ至リケン。終ニ津輕ノ領主ト成テ、其翌年九戸爲退治。淺野長政。蒲生氏郷等ノ諸大將下向ノ時。殿下ノ御下知ニ因テ。津輕右京亮爲信モ三戸ヘ相詰ケル。殿下ノ被官ニナリシ上ハ、信直敢テ手向フ不能、於陣中モ信直ニモ對樣ニ交リ。北左衛門佐信愛以下ノ陪臣ハ。皆手ヲ束ネ崇敬スルコソ無念ナレ。

深谷月鑑切腹附氏家彈正病死之事

深谷郡矢本ノ城主永井播摩守勝景、剃髪シテ深谷月鑑ト號シ代々伊達ノ幕下ニシテ、相馬長門守義胤ニハ小舅ナリ、然ルニ去ヌル大崎一亂ニハ。氏家彈正カ加勢ノ爲。伊達上野介政景入道雪齋カ手ニ屬シ。米澤催促加勢ノ一手ナリ。月鑑モ志田郡松山ヘ馳加ハリ。大崎合戰ニ及ヒシ處、伊達勢利ナクシテ新沼ノ城ヘ引入リ爲惣軍ニ泉田安藝ト月鑑ト人質ニ出テ。伊達勢ヲ引取ラシメ、兩人ハ最上義光ノ手ヘ渡リシニ。如何ナル故ニヤ有ケン。泉田一人質ニ殘シ。月鑑ハ無

ハケレハ大實與太郎ヲ頭トシテ岡田ノ者共ヲ差添ハ伊師ヘ指遣ス　コレハ逆意ノ者アリトノ風聞ニ依テ境代兵庫ニ加力ノ爲ナリ。與太郎飯樋ノ山ニ小屋掛シテ地士ハ不及云百姓ニ至ルマテ一人モ殘サス一村ノ者ヲ引上テ小屋ヲ守ラセ木戸ニハ深野ノ者ヲ五人附置タリ此時伊達郡川俣ニハ櫻田卯兵衛同苗玄蕃ヲ政宗ヨリ境代ニ差置ル然ルニ四條但馬カ二人ノ子四條織部同内記兩人ハ、コノ小屋ノ内ニアリケルカ、織部門番ニ云ケルハ、我々今夜盗ニ行カント思フナリ頓テ戻リテ酒代ヲ與ヘン間木戸ヲ開ケテ可出ト云番ノ者共弟内記ニハ兼テ心易カリシカハ異義ニ不及木戸ヲ開キ早ク勝負シテ皈ラレヨトテ出シケリ兄弟兼テ云合セ置ケルニヤ川股ノ者共ヲ毛虫ト云所ヘ引入置し其夜飯樋ノ小屋ヘ誘引來ル織部木戸ヘ近付勝負シテ皈リタリ木戸ヲ明ケヨト云ケレハ。存ノ外早ク皈ラレタリトテ門ヲ開ク織部木戸ヲ入ルト等シク刀ヲ拔テ門番二人切倒セハ殘ル二人ノ門番ハ逃散タリ大實與太郎ヲ始メ小屋ノ内周章騒キ出向ヒシカトモ不叶シテ與太郎ハ搦手ヨリ逃失ケリ元來當佃ノ者共ハ。川股ヘ與シタル者ナレハ彼是騒シ合セテ即時ニ草野ノ城ヘ押寄鐵砲ヲ討掛タリ。此時節相馬方人數不足ナレハ岡田兵衛大夫モ草野ヘ打越。兵庫ニ加勢シテコモレリ。依テ中村ニハ黒木中村ノ兵士バカリニテ、警亂無勢ナレハ飯樋ハノ手當ナク、日數二十日餘リ打捨置レタリ其内ニ一揆小屋ヲ營作シテ櫻田卯兵衛同玄蕃其外川股ノ諸卒ヲ引入レ織部兄弟籠コモル依之義胤並ニ御舍弟兵部大輔隆胤軍卒ヲ率テ押寄ラル。飯樋ニハ大木ヲ切倒シ。ツマリ〳〵ニ逆茂木ヲ引渡シ。其上ヲ丈夫ニシテ待掛タリ。相馬勢搦手ノ方ヲハ明置キ東追手ノ方ヨリ、バカリ取掛タリ柵内ヨリ防之ニ手負煩ト名付テ檜ノ木ノ八九回ルヲ先ヲ突テ火ニ浸シ、油ヲ塗リタルヲ矢ヲツク樣ニ突出シケレハ。中ルル程ノ者皆手ヲ不負ト云者ナシ。此日相馬方ニテ

討死シタルハ。藤田七郎・佐藤喜八郎・馬場右馬助・都柊之助・山岸與左衛門。隆胤ノ腹臣坂本勘解由手負テ後ニ死ス。島源太郎等ナリ。下浦修理ハ木戸口ヘ付テ内ヘ入ント、脇指ニテ切破ルトコロヲ。鐵砲ニテ打レ手負タリ。此外手負數々アリ。半杭又左衛門ハ粉骨ノ働キアリ。偖日モ既ニ暮レケレハ。義胤矢立ト云所ヘ諸勢ヲ引トリ、明日攻メラルヘシト評議アル處ニ、其夜川股ヨリ加勢少々入來ル。櫻田卯兵衛小屋ノ者共ニ向テ、心易ク思フヘシ。何ト攻ルモ容易ク破ラルヘカラスト、競ヒ居タリシカ。俄ノコトナレハ。井ノ數ヲホラス、只一ツアリケルカ。飯ヲ炊ントスルニ。井ヘ血流レ入リ。馬糞抔入リシカハ。炊クヘキ水ナシ。山下ヨリ汲ントスレハ。敵ノ陣前ナレハ不叶、斯有テハ所詮此小屋保チ難シト評議シテ。其夜小屋ヲ明ケテ川股ヘ引退ケリ、然レトモ若シ山中ヘ忍ンテ。不意ニ出ル僞計モヤト寄手暫クアヤフミシカ、皆テ其風情ニモ見ヘサレハ義胤モ小屋ヘ入テ見分アルニ、實ニ引退キタル容子ナレハ。則小高ヘ皈陣ナリケリ。

自岩城常隆加勢義胤攻亘理事

天正十七年七月上旬。岩城ヨリ加勢トシテ、神部谷大須賀富岡此三人。馬上七十餘騎。歩卒二百餘。都合四百六十餘人。相馬ヘ參著ス。依之兩將並隆胤中村ヲ夜中ニ出陣。岩城ノ手ハ駒ケ峯ノ押ニ置キ、東濱邊釣師濱ヨリ亘理ノ東荒濱マテ海道ヲ直ク亘理ヘ出陣ナリ、村里續キ濱汀所々ニ放火シテ亂妨ス。諸財ハ舟ニ積ミ、原釜ヘハコヒ取タリ。兩將ハ海道ヲ直ニ押シ、諸手ハ濱邊ヨリ廻ル。其時ノ海道ハ蔵山ト云テ海ノ方ナリ。元篤父子ハ亘理ニアツテ。件ノ注進放火ノ容子見ルトヒトシク出張シ。亘理ノ下モ東方ノ入海鳥ノ海ト云所ニテ。兩陣掛合セ手痛キ合戰アリ。兩陣互ニ討ツ討レツ。喚キ叫ンテ攻戰フ。相馬方岡田小五郎ハ勘氣ニテアリケルカ。鈴木助右衛門ト若道ノ知音ナリシカハ。小五郎助右衛門ニ向テ、今日ノ合戰高名シテ。勘氣ノ訴訟申スヘシ、助右衛門尤ナリ迚。兩人乘ツレ

テ出ケルカ。コキ敵ヲ見ツケテ川ヘ乘込ミ首ヲ取リ二人則引退テ本陣ヘ急キシカ。コ端砂ノ凝ルトコロヘ。小五郎馬ノ足ヲ踏コマセ馬倒レ落馬シタリ助右衛門飛下リテ馬ヲ引立テ小五郎ヲ乘ス。又少シ行テ馬蹟キテ落馬シタリ。然ルヲ手負トヤ思ヒケン。亘理勢十人バカリ追駈來ル。兩人ノガレヌ場所ナレハ。返シ合セテ戰シカ二人共ニ討レタリ佐藤彌兵衛ハ久シク惡病ヲ受テ傍輩ノ交リモナカリシカ此出陣幸ナリト喜ンテ人ヨリ先ニ敵中ヘ乘リ込ミ戰テ討死シタリ是ハ佐藤伊勢カ子ナリ又相馬ノ小人ニ佐藤六トテコレモ勘氣ノ者ナリシカ此合戰ニ首取テ直キニ訴訟セント思ヒ見ヘカクレニ來リシカ流浪ノ身ナレハ武具モナシ帷子一衣著セル儘ナリ早合戰始マラント思ヒ立上ラントスレ共今朝夜中ヨリ十里バカリノ道ニ勞レ。且ツ飢疲レテ首取ン力ラモナシ。サテモ無念ノ身ノ果ヤト。齒ヲカンテ邊リヲ見レハ。眞砂ノ白ク細カニシテ美シキアリ。コレモ力ラニ可成リトテ拾ヒテ口中ニ打込ミ水ヲ呑ミ其儘陣中ニ走リ入コキ敵ヲ討テ首ヲ取ル一息吐テ又白砂ヲ口ヘ打込ミ。水ヲ呑ミ。敵中ヘ駈入。又首ヲ一ツ得タリ扨一ツノ首ヲハ懷ヘ入レ一ツヲハ手ニ引提。義胤ノ馬前ニ捧ク。義胤見玉ヒ佐藤六高名シタルカ。勘氣免スソトテ則首帳ニ記サレタリ。帷子ノ血ニソミタレハ手ハ負スヤトアリケレハ。手ハ負不申。若首一ツニテ御赦免ナキコトモヤト存シテ。コヽニモ今一ツ所持仕ルナリトテ懷ヨリ取出シケレハ。義胤悅喜不斜初メノ首ハ訴訟ノ爲後ノ首ハ忠義ノ爲ナレハ褒美取スヘシトテ翌日布二端トラセシトナリ。亘理ノ騎將ニ鷲足掃部ト云者諸軍ヲ下知シ乘廻ルヲ荒縫殿介打テカヽリ冑ヲ切割馬ヨリ落シ。首ヲ取ントスルトコロニ亘理勢折重リシカハ。首ヲハ取得ス引除ケル此合戰相馬方勝軍ナリケレハ。諸卒競テ城下マテモ押付ント兩將モ思ハレケルニ如何シケン軍ヲマトメテ中村迄皈陣セラル。コレハ亘理美

濃重宗ノ妻ハ。盛胤ノ娘ナレハ。聊ノ訴訟アルニ依テ。カクハ軍ヲ班サレシ也ト。取々沙汰アリケリ。岩城勢ハ駒ケ嶺ノ西ヨリ。鐵砲ヲ打カケタルマテニテ引取ケリ。岩城方何ツモ元庵トハ手合セ一篇ノ會釋バカリニテ。深キ働キハナカリケリ。其頃相馬ニテ評談セシハ。終ニハ元庵ノ狐ニ化サレテ。家ヲ亡シ玉フヘシ。前度青田山城カ云シ詞。今コソ何レモ思ヒ當レリ。新地駒ケ峯。政宗ノ手ニ入タルモ。元庵ノ智謀ヨリ出タルナリ。岩城平和ト雖トモ。元庵トノ掛合ハカ／＼シカラス。内心賴ミ難シ。兩將是ヲ辨ヘ玉ハサルヤト樣々評シ。或ハ義胤ヘモ心付シト也。

坂本垾ケ鼻合戰之事

同年同月坂本ノ城ヲ責ントテ。相馬ノ兩將中村ヲ夜中ニ出馬ナリ。先陣ハ黑木勢門馬上總備頭ニテ六十騎餘。中村勢ハ兵部大夫隆胤ヲ士將トシテ。八十騎餘。泉藤右衛門胤正ヲ備頭ニテ。中鄕ノ士卒百三十騎餘。兩將ノ旗本ハ。小高北鄕百五十騎。後陣ハ岡田兵衛大夫直胤備頭ニテ。集勢ヲ加ヘテ百三十騎餘。標葉勢ハ泉田右近大夫胤清ヲ備頭ニテ百騎餘ナリ。此時ニ至テハ。丸森金山小齋新地駒ケ峯ノ五ケ城。皆伊達ノ手ニ入タルハ。加番城代ノ手分ナケレハ。相馬ノ士卒都合騎兵六百騎餘ニ及ヘリ。先手ハ黑木中村。二陣ハ中鄕。三陣ハ兩將ノ旗本。後陣ハ岡田ナリ。泉田ハ駒ケ嶺ノ押ナリ。先ツ東濱ニ付テ鹽屋共ノアルヲ放火スヘシトテ。室原文六郎。中村助右衛門ニ足輕五六十添テ差越サル中濱笠野鳥ノ海ト段々ニ燒立タリ。此煙ヲ見テ。元庵父子則出張。坂本ノ岨根ノ先ニソナヘタリ。盛胤義胤ハ礒山陰ニソナヘ。黑木中村勢ハ元庵ニ向テ中濱ノ方ノ濱手ニソナヘタリ。兩方互ニ睨ミ合テ。鐵砲モ不討備居タリ。義胤門馬上總方ヘ使ヲ立。足輕ニテ敵ヲ尾引見ルヘシトナリ。上總則足輕四十人ニ末永右京ヲ差添テ。槍ノ穗先ヲソロヘテ靜ニ元庵ノ備ヲ日ニ掛押向フ。元庵又敵ノ寄スルニ隨テ徐々ト引去ル。相馬ノ馬上モ此跡ニ付テ寄スルニ。亘理

方ヒメ引ニ引ケンハ、急テ此細根ヲ越テ謀アルヘシヤト呼カケ〳〵追慕フ。亘理勢澤道ノセバキ所ニテ離ヒ行テ細根ノ間曲リマル細道ナルニ、末永右京返シ合セケレハ、相馬方色アシクシトロニ成テ追ヒ馬ヲ乗リ入レケルニ、黒木勢ノ内士将數人黒木ノ野亂サル、跡ヨリツヽケ相馬勢又立直シテ亘理勢ヲ追伏間ニテシリ末永ト日頃不和ナレハ、末永ニ与ラシ亂シ、ヒタ追ニ追テ坂本ノ城下迄押詰タリ。元膳父子ト前後ヲ爭ヒ乗並ヘタリ。藤藏人丞ハ二人カ跡ニ乗ハ指物ヲシボリ、山室ト云所ヲ差テ引ケルカ。西口金シテ道細ナレハ先ヘハスヽマレス。細根ノ上ノ方ヘ津ノ方ヨリ。坂本ノ城中ヘ引入タリ。相馬方敵ヲ城中乗リ上テ。先ヘ行カント乗下ス處ヲ。亘理勢細根ノ下ニ追込、義胤ハ城下ノ圍士手築タル惣門ノ内マテ乗ニ待テ、鐵炮ニテ打落ス。相馬方細根ヲ越行ケトモ、込ミタリ。城兵槍ノ穂先ヲソロヘ、広六十人待ウケタ付ノ目細セサケ。敗ヒタ引ニヒケハ。上總介足輕ノ跡リ、半杭土佐義胤ノ前ヘ乗塞リ、大將ノ御樣ニ深入アニ付。ソロ〳〵ト詰寄スル。亘理勢細根ノ下ヲ下ル處ルコト不覺千萬ナリ。此馬返セト呵リケレハ、馬取則ニテ、鹽松大藏遠藤采女道脇ヨリ乗來ル。右京モ續テ理不盡ニ引返ス。城兵槍ヲソロヘテ突カヽル、土佐跡乗リカケタリ。行先ニ橋ノアルニ。采女カ馬アヤフミニ止リテ戰ヒシカ、多勢ニウタレテ主從二人討死ス。テ道端ヘトレテ飛ケル故落馬シタリ。其間ニ右京乗此ヒマニ義胤ハ除レタリ。土佐カ忠義武勇ノ程ニ感セリ廻ス處ヲ。亘理方松本大學槍ヲ楯ニ取テ、右京ト太スハナカリケリ。坂本ノ城代紅ノ小旗ヲ押立、城中ヨ刀ヲ合セタリ。大學ハ右ノ手ヲキラレ。右京ハ半月ノリ打テ出、相馬勢ノ引立テ除ク處ヲ、喰留ント追ヒ慕立物ヲ切落サル。元膳父子諸勢ヲ眞丸ニナシテ乗廻フ。相馬方人數ヲ亂スナ、引マトヒテ敵近寄ハ輕ク返シ〳〵引取ヲ。相馬勢樣々ニ元膳父子ヲ生捕ニセヨシテ追掃ヘト、下知スレトモ引立タル足並ナレハ混

亂シテ耳ニモ不レ入。亘理坂本ノ士卒六百バカリ尾ケ鼻マテ追付タリ。此所ニテ相馬勢押亂サレ、討ツ討レツ火出ル程揉合タリ。尾ケ鼻ハ坂本ヨリ四五町此方東ノ山崎ナリ。山ノ下ハ谷地葦原ニテ高良橋ノ北ナリ黒木ノ人數戰疲レケレハ。泉胤正人ヲ走ラセテ中村勢入替リ候ヘト云遣ハス。急キ中村勢入カハレハ、黒木勢ハ戰ヲ渡シテ引取ケリ。此時泉藤右衛門胤正ハ十八歳ナリ、金澤備中カ云、其元ハ若輩ナレハ不レ可レ知箇樣ニ後レ亂レタル戰ノ受取渡シハ、時節ニモヨルモノナリ、某抔ニモ聞セスシテト云內ニ。早中鄉勢押亂ナル胤正義胤ヘ向テ。箇樣ノ時ハ何ト可レ仕ト云ケレハ。義胤取アヘス、只死ネハヨキゾト返答アル。心得タリトテ馬ヲ立返シテ控ヘタリ。兩陣多ク手負討死アリ此時義胤ノ側ニハ杉久右衛門一騎。外小人バカリテリ。逃行身方ヲ呼返シ。小人ヲ下知シテ轡ヲ取テ引返ス。金備中モ義胤ノ馬前ヲ乘通リケルカ乘返シハ仕ラス馬ニ引レ候トテ、敵ノ方ヘ引返シ泉胤正只一騎敵間ニ控ヘタルニ、乘並ヘテゾ居タリケル。亘理坂本ノ軍兵。義胤ノ馬前近ク押來ル。小人坂本小藤治槍ヲ以テ立向ヒ。力ヲ盡シテ突拂ヒケレトモ、多勢ナレハ無二其甲斐一小藤治モ打レケリ。城兵ノ中ヨリ物見ト見ヘテ。武者一騎乘テ義胤カ控ヘラレシ近クノ山ヘ乘上テ、相馬勢ノ跡ヲ見切テ。相圖ニヤ有ケン。指物ヲフル處ヲ前田源兵衛左リ弓ニテ。中リノ手タレナル故。左源兵衛トハ呼レケルカ。則彼武者ヲ射落シタリコレヲ見テ城兵色アシク見ヘケルヲ。義胤敗卒ヲ勵シメ先ニスヽンテ返サレケレハ亘理勢曈ト亂レテ引立タリ。坂本方糠田內膳乘カヘシテ駈向フノ一本松右馬頭互ニ槍ヲ合ケルカ。內膳ヲ突落シテ首ヲ取ル相馬方ニモ木幡萬六。同弟與一郎。磯山口ニテ二人共ニ討死ス草野金八郎。伏見監物。佐藤七郎兵衛モ討死シタリ、此合戰五分々々ナカラ。相馬方負軍ツノリテ見ヘタリ。サレトモ互ニ勝負ナカリシヤ。勝鬨ハ揚サリケリ。日既ニ暮カヽレハ、義胤モ惣軍ヲ拂

テ引レケル

大澤伏兵附新地城攻之事

宇田郡大澤ハ、金山ト菅居ノ間ノ山間ナリ。其頃伊達領新地ノ城代ハ、棟田隠岐、駒ケ嶺ハ黒木中務、小齋ハ佐藤宮内(小齋右衛門トし)ナリ　兵部大輔隆胤ハ中務カ宮内カヲ討取ントノ謀慮アツテ。先ツ相馬ノ黒脛巾(忍者ノ指テ云)ヲ以テ伊達ノ黒ハヽキヲ語ラハスルハ　小齋駒ケ嶺ノ城代。互ニ行通フコトアラハ。其往來アルコトヲ告知セヨ。褒美トシテ料足十貫文取セントナリ　固ク互ニ云合セ、先ツ五貫文取セ。殘ル處ハ事ノ首尾畢テ後取セント約諾シテ相マツ處ニ。佐藤宮内今夜駒ケ嶺ヘ來レリ　明朝ハ早天ニ皈ル由承ルトテ。黒脛巾方ヘ告知スル由。中村ヘコレヲ達ス。隆胤悦ヒ天正十八年三月十八日。伏兵百六十人。伏將ニハ幕内丹波・大浦雅樂頭・草野助右衛門・今村五郎右衛門・桑折帶刀ナリ。隆胤ハ草ノタハネニ出馬ナリ(草トハ伏兵ノコト)警固ニハ北郷五十人。黒木ノ加番ニ來レルヲ置カレタリ　大澤ニ至テ・歩卒ヲ伏スルトコロニ。獺二人來テ。山ノ上ヨリ望ミ見ケルカ、一人立皈ルト等シク、馬上一騎歩卒四十人バカリニテ草捜シニ走セ來ル。伏兵未タ不調故見顯ハサス。幕内丹波敵ニ乘向テ見レハ。常々親シクアリシ草野助四郎ト云者ナリ。丹波心ニ思フハ伏兵モ不調義ナリ　隆胤モ未タ出馬ナシ。今日ノ戰ハ先ツ延スヘシト思ヒ。此方ヨリ呼掛　夫ヘ出ラレタルハ草野助四郎カト存ルナリ。仔細アツテ來リシカ、其方ニハ遺恨モナシ　互ニ無事ニセラレヨカシト云ケレハ、助四郎モソロ〳〵乘寄ナカラ　某モ幕内ト見タリ　尤無事ニテ皈ランサテ何ノ爲ニ來ラレシソ。丹波カ云　佐藤宮内小齋ヨリ駒ケ峯ヘ來テ。今朝皈ルト聞ニ依テナリ　助四郎カ云。夫ハ僞リノ沙汰ナリ　疾引除テヨク聞屆ケテ重ネテ出ラレヨト。濃々ト語ル處ヲ。八幡大學ト云歩卒。四拾間バカリ遠クアリシカ。ネラヒスマシテ助四郎ヲ鐵砲ニテ討テ落トス　依之向方ヨリモ鐵砲ヲ放チ掛ル。又跡ヨリモ士卒段々ニ折續ケハ、伏兵

ノ者共押亂サレ、幕内モ鐵砲ニ中リテ死ス。向方ハ新地駒ケ峰小齋丸森金山坂本ノ者トモ、兼テ約ヲ固メ置キ、何方ニコトアリテモ如此集リ來ル。相馬方ハ伏兵ノ人數バカリナリ。隆胤ハ菅屋原マテ出馬ナリ。北鄉ノ者共ハ椎ノ木邊迄來ルニ、早ヤ事出來シカハ。味方ハ無勢ナリ。立足モナク追亂サル、大浦雅樂助ハ常々素肌ニテ出陣シケルカ、敵合ヘ乘入レ、伏卒ニ向テ各ノカレ難キソ、皆討死セヨ、左ナクハ歩卒一人モ殘スマシト云ナカラ、二三遍乘回リシカ、槍ニテツキ落サレテ討レケリ、草野助右衛門。桑折帶刀。今村五郎右衛門モ討死シタリ、此間ニ伏卒共漸々ニ引除キケルカ、ヽル處ヘ門馬上總歩卒二十人バカリ引連馳付、敵合ヘ一サンニ乘リ込ミ。槍ヲ以突縮メケレハ。敵少シ猶豫シテスヽマス、依之大勢ハ討レサリケリ、後ニ聞ケハ伊達ノ黑腰巾相馬ノ黑腰巾ヲ僞リテ、中村勢ヲ引入レ討セント約シテ、伊達ヨリ五貫文。相馬ヨリモ五貫文。取之ケルトナリ。ユヘニ丸森小齋ヲ始メ。新地駒ケ峯ノ人數牒シ合セ、伊達方多勢集リケルトナリ、畢竟隆胤剛强ノ意地ノミ立ラレ、前後思量ニ乏シク。輕々シク敵ヲ侮ル將ナレハ、斯ル不調ノコトヲ仕出シ。武勇積功ノ者トモヲ、其詮モナク亡サレケルコソアサマシケレ、同四月廿三日相馬ノ兩將、新地ノ城ヲ攻メラレントテ出陣ナリ、城代ハ糠田隱岐ナリ。加勢ハ黑木中務。佐藤宮内馳加リ、兩虎口ヲ持固メタリ。坂本ノ城代後藤參河モ馳セ加ハル、盛胤義胤ハ西南ニアタリタル山ニ備ヲ立ラレ、暫ク城體ヲ遠見アルニ、追手ノ坂下ニ柵ヲカマヘ、鐵砲ヲナラヘ居タリ、寄手成田五兵衛徐々ト乘出シ、城近ク成テ坂下ノ柵際迄一散ニ乘込ンタリ、柵內ニ待掛タル鐵砲一度ニ放チカクルニ、其煙ニテ五兵衛モ差物モ見ヘス、定メテ討レツラント、兩將始メ諸軍トモニアヤフム處、五兵衛靜ニ乘皈ル、室原文六郎モ行馬際マテ乘込ミケルカ、此時ハ鐵砲モ不打、柵際ノ者共モ立除ケリ。寄手段々ニ虎口際迄押寄スレハ。城兵モ爰ヲ先途ト

防戰ス。此時寄手大井彦十郎・西郡藤太郎。般若又次郎・同弟彦十郎・中野左馬助・礒部勘解由。大井善十郎歩兵ニハ玉木文内。岩城文右衛門各討死シタリ。佐藤四郎右衛門手負テ後死ス。又日立働キシタルハ成田五兵衛・岡田兵庫・大内治兵衛・室原文六郎。原勘兵衛等ナリ。大和田新右衛門ハ鐵砲ニテ股ヲ討レ。西内善右衛門ハ向歯ヲ討ヌカレ。玉後ニ抜ケレトモ皈リケリ。西山清八郎・齋藤善十郎ハ。日來不快ナリシカ。清八郎虎口ニテ首ヲ取リ。善十郎ニ向テ。只今ノ高名見タルヤトイヘハ。善十郎イデ首取テ見セン迚。柵ノ内ヘ二三間押込シカ。則首取テ出タリ。般若豐後ハ西虎口ニアリケルカ。敵ト相タメシテ打タルニ。豐後ハ領ヲ討レ。敵ハ眉間ヲ打レ。相討ニ死タリ。室原文六郎坂ノ上ノ門際マテ乘リ上シカ。人ナケレハ徐々ト乘皈ルニ。下浦修理十三歳乘來ル。召連タル者下浦是マテ參リタリト。室原カ云。上ニ人ハナキソ。乘上ヨト云ケレハ。修理門際マテ乘上テ皈ルヲ。門前ノ後殿若年ナレトモ下浦カ仕タリトテ。敵味方褒美シケリ。木幡二郎右衛門。柚木新十郎モ西虎口ヘ攻寄。虎口ヲ一攻セメテ引除ケルカ。兩人共ニ取テ返シ。虎口近ク乘寄セタリ。城内ヨリ何者ソ名乘レト云、木幡治郎右衛門ナリト云。今一人ハ誰ソト問フ。柚木新十郎ト名乘リケレハ。サテ〳〵健氣ナル者共哉。迚モ今少シ寄レト云テ。鐵砲モ不ㇾ打。矢モ射サリケリ。新十郎カ云、コレ迄寄タルサヘ大儀ニ思フナリ。然モ城内ニハ義ヲ不ㇾ知者共コモリ居タリ。欺カレテハ詮ナキコトゾトテ、馬引返シ除タリ。コレハ黒木中務・佐藤宮内抔此虎口ヲ固メタレハ斯クハ云ケルナリ。相馬勢一人モ不ㇾ殘。虎口際ヲ引除タリ。寄手カク討死等多カリケレトモ。城兵五六人討死手負少々アルマテニテ。堅固ニ城ヲ守リケリ。

相馬兵部大輔隆胤討死之事

其比中村ノ城ニハ。盛胤ノ二男相馬兵部大輔隆胤在住ナリ。隆胤生得氣性荒ク剛強ニシテ。輕々シク敵ヲ

侮リ、逸リ過タル大將ナリ。又黑木ノ城代門馬上總。コレモ强ミヲ專ラトシテ人ヲ欺ク者ナリ。然ルニ駒ケ嶺ノ城代黑木中務以前相馬ニ在シ時ヨリ隆胤トウハヘハ親シム體ナレトモ。底意ハ互ニ不快ナルカ。況ヤ今伊達ヘ屬シテ駒ケ峯ノ城ヲ守レハ。イヨ〳〵遺恨ツノリ互ニ野伏迫合止ム時ナシ。盛胤ニハ中村ノ城今ノ妙見曲輪ニ隱居ナレハ。隆胤ヲ諫メ玉フコト度々ナレト承引ナク。兎モスレハ乘出シテ。迫合ノ度毎ニ駒ケ峯ノ城下迄追討セラルヽコト度々ナリ。或時敵ヲ追込ンテ。隆胤町ノ内迄乘込テ取詰ラル。盛胤ニハ此方ノ十二所ト云所ノ邊ニ控ヘラル。日モ漸クニ暮カヽリ相馬方引取ントスルニ。駒ケ峯ヨリ追カケ出テ喰留タリ。追返セハ城ヘ入。如斯スルコト再三ニ及ヒケレハ。日モトクト暮タリ。盛胤思惟アツテ敵ハ加勢ヲ待ト見ヘタリ。今ノ内引除ズハ難義タルヘシト思ハレケレハ。其邊ノ藪ヨリ細竹ヲ長サ四五尺程ニ百本バカリキラセ。又火繩ヲ一二三寸ニ切テ。件ノ竹ニハサミ。歩卒一人ニ十本バカリ宛持セ。下知セラルハ敵喰付カハ此度ハ門際マテ追詰。跡ヲ不見シテ輕々ト引來ルヘシト。如案城兵又追來ル。引トル道ニ件ノ火繩ニ火ヲ付テミチノ兩脇ニ立ナラヘタリ。夜闇ケレハ。鐵砲ヲ立並ヘタルコト螢火ノ盛リニ等シク見ヘケレハ。城兵コレヲ怪シミ。不追シテ引入ケリ。如是ノ迫合度々ニテ止ム時ナシ。然ルニ天正十八年五月十四日。未ノ刻バカリニ。駒ケ峯ト小豆畑ノ間ニ。伊達方ヨリ伏兵ヲ置タリト。中村ノ城ヘ告來ル。其時分ハ境目ノホトリ野邊ニシテ。家屋ノ地ナク。海道モ善光寺ト云所ニテ。今ノ道ヨリハ東ニ下リテ在シナリ。盛胤此注進ヲ聞カレ。スハヤ隆胤ノ逸リ出ラレント思ハレケレハ。急キ使ヲ以テ能々仔細ヲ聞屆ケテ出ラルヘシ　敵ノ謀ニ落テ不覺アラハ後ノ笑草ナリ。今伏兵ヲ置時ニ非ス。思慮アルヘシト云越サル。然ルニ隆胤注進ヲ聞ト等シク。手勢ヲ引テ早速ニ馳向ハル。盛胤驚キサテコソ敵ノ巧ミニ落テ身ヲ亡シ。土

幸ヲ失ノ事ノトテ取ル者モ取リアヘズ有合タル十文字上總討レシ縄手ニテ討死シタリ黒木勢引除シ
卒バカリヲ引具シ。早々ニ出張アル。諸卒モ聞付タルカハ中村勢バカリ踏止リ田中ニテ相戰ヲ城方ハ小
ハ。五人三人宛後ヨリ追々ニ馳付タリ。隆胤ニハ六七一青金山新地坂本豆理ノ加勢半日暇シ合セテ今日ノ
勢ニテ十二所ノ山ノ上ニ乘リ上テ　海道ノ東根ニ控合戰ヲ起シケレハ加勢ヲハ隱シ置中務ハ馬廻リ歩
ニテアル　其時木幡因幡ハ黒木ノ城加番ニ引替ハラン卒百人バカリ引具シ町口ヨリ乘出シ黒木采幣ヲ以
トシテ未タ町屋ニ居タルニ城代門馬上總因幡カ方テ馬ノ半首ヲ打ナカラ靜カニスヽミテ打出ル又馬
ハ見舞ソテ酒ヲ飲ンテアリケルカ城中ニテ貝ヲ吹上ノ騎紅ノ差物ニテ　海道ヨリ一二三町西ノ原ヲ早道
タリ上總驚キ其儘馬ヲ馳セ石神ノ山ニ乘上テ見レ乘來リ亂根ハ乘上ルト等シク相圖ニヤ有ケン中務
ハ早黒木ノ兵士井脩円後。馬場四郎兵衛抔駒ケ峯ノ采幣ヲフルコト急ナリ城兵速カニ押來テ相馬方亂
山口ニテ。敵ト仕合タリト見ユ。盛胤ニハ蛇山ニ備ヲントセシカ踏止ツテ暫クサヽヘ戰フ。隆胤モ十二所
立ラレタリ。時ハ未ノ刻バカリナリ。門馬上總山上ヨリ乘下ロシ。戰ントスヽマレケルニ伊達勢駒ケ峯
リ乘下ロシ敵合ヘ乘込ミ下知スル處ヲ城兵矢田但ノ下ヨリ廻リテ、長老内ノ東ノ浦端ヨリ人數群々ト
馬鐵砲ニテ近々ト寄テ討シカハ上總カ眉間ニ中リ相馬勢ノ跡ハ圍ラント押出ス、之ヲ見テ相馬勢色ア
テ打落サル。クヒヲ取ントスルトコロヲ。水谷孫右衛シケ騒キ立テ我先ニト堀川野原ノ差別ナク惣崩レ
門數ヲ鐵砲ニテ突拂ヒ上總カ首ヲ取テ鞍壺ニ打掛除キニ見ヘケレハ。城兵並ニ加勢ノ士卒一同ニ打加ツテ。
ケル故首ハ渡サヽリケリ黒木勢ハ十騎ヲ討レケレ追討ニセシ程ニ手負討死數ヲ不知相馬方門馬上總
ハ殘ラズ死骸ニ付テ引除ク、黒木方牛東龍峯同弟ヲ討ルヽ氣折タル上ニ戰ニ疲レ日ハ暮リ、

ル敵ハ烈シク競ヒ來ル。適マ返ス者アリテモ之ヲ見續者ナク只遁レ除ントノミ思ヒケレハ。猶々追討ニ討レケリ　散卒ハ石神川ノ渡戸ヘカヽリ道ニ回リテ逃走ル　隆胤モ道ニ回リ味方ノ跡ニ除カレナハ、過チモアルマシキニ。敗卒ハ込合タリ。敵ハ烈シク追付、脇ヘ乗除ケテ引取ント。小溝ノアリケルヲ乗リ越ントテアヤマツテ落馬セラル。馬ハ溝ニ蹈込ンタリ。隆胤出城ノ時、佐藤左近カ馬ニ取替乗ラレケルカ。打トモ敲ケトモ馬上ラス、敵ハ手痛ク追來ル。コヽニ兵士一人隆胤ノ脇ヲ乗通ス、隆胤名ヲ呼カケテ、馬ヲ借レトモ聞付サルヤ。又聞ケトモ聞カヌフリニヤ有ケン。乗通シ逃ニケル。然ルニ小人彌七ト云者、負ヒ申サントテ背ヲ向ケタル處ヲ　敵來テ項ヲ帶際マテ竪割ニ切伏セタリ　又小人文平ト云者負ハントスルニ、早隆胤ヘ太刀ヲ付ケタリケレハ。打捨テ逃失タリ。隆胤モ太刀ヲヌキ二三度ハ切拂ハレケルカ　槍數挺押取リ卷キ終ニ突倒シテ討レ玉フ、此所ハ十牧打トテ深田ナリ。隆胤二十八歳也、佐藤萬七十六歳ハ隆胤ノ愛深キ者ナリシカ、前廉右ノ掌ヲ鐵砲ニテ討レ。太刀ヲトルコト不能ハ、此出馬ニモ供セサリシカ。今日ノ難義ヲ聞テ則走リ來リシカ、隆胤ノ死骸ニ打カヽリテ。諸トモニ打レケリ。小人勘六モ前方手ヲ負、此供ニ後レシカ。コレモ萬七ト同シク此所ヘ來テ討レタリ。其外泉藤六・原法師・島右衛門・荒藤八郎・佐藤文六郎・加藤平内左衛門討死ス　佐藤孫兵衛ハ萬七カ父ナリ。遙ニ引退キケルカ、隆胤モ我子モ討死ト聞キ　道ヨリ取テカヘシテ討死シタリ　水谷尾張ハ此時中村ノ宿老ナリ、自身モ手ヲ負、馬モ矢ニ中リケレハ、下人ノ肩ニ打掛テ退キケルカ　隆胤打死ト聞テ、アトヘ馬ヲ返シテ、討死サセヨト云ケレトモ、不聞シテ引立來リシカ。終其手ニテ相果ケリ。此時伊達方ニテ好ク下知シテ働キタルハ、黒木中務。木幡四郎右衛門・中村主馬・後藤參河是等ナリ、又誰ヤラン半月ノ指物サシタル騎兵、目立タル働キナリ。又盛胤ニハ馬回リ騎兵十騎バカリ。小

人五三人其外馬取ノ外從卒ナシ日ハ暮カヽル追人ハ烈シ盛胤ノ曰味方アシク引カハ。皆追打三人モノコルヘカラス。人數ハナシ分別ニ不レ及。各如何存スルヤト木幡因幡。門馬甚右衛門、同ニ申スハ競ヒカヽツタル敵ハ面モ多勢ナレハ合戰ハ成ヘカラス、御運次第引退キ玉ノ外不レ可レ有ト盛胤尤ナリ連ノ馬ヲハヤメテ引除レケリ、家臧ハ右南人ナリ、盛胤ヘハ飯淵三郎右衛門、騎外仲間三人ニテ海道ヲ引取リ石神ノ濱戸タハ難ナク越ヘラレシカ上橋ノアル所ニテ、馬足ヲ蹈込ンテ。打トモ引ケトモ立上ラス。葛西栗毛トテ秘藏ノ馬ナレトモ日來ノ用ニモ似サリケリ三郎右衛門一人ニテ如何セント思ヒ居タル處ニ木幡作助。羽根田主膳。同弟源兵衛。西山新兵衛。弟新藏人。桐澤淸左衛門抔追々ニ馳著タリ各カ云盛胤ヲハナロシ申シノ馬ヲ引立ヨト木幡作助カ云敵程近シナロシ申サテ馬ヲ抱上ヨトテ各寄テ抱上タリ盛胤跡ヲ床敷思ハレケレハ、隆胤ハ除タルカ々々トバカリ宣ヒ馬ヲシツヽテス、マレス。敵ハ近ク追來ル連ヨリ馬ヲ打テトモ〳〵盛胤引シヽ〳〵乘ラレケレハ、各アセリテ隆胤ニハ先ヘ除セ玉フラン、跡ニハ味方一人モ見ヘ申サストテ、打立々々引除ケリ木幡因幡。門馬甚右衛門。同次右衛門。桑折小左衛門。木幡與惣兵衛。半杭又右衛門。大平雅樂允ナト敵近付ケハ返シ合セント押縮メ々々後殿シタリ此時甚右衛門ハ足ノ甲ヲ射ラレタリ。扨隆胤ヲハ亘理重宗ノ士カ討タリ。重宗ノ妻ハ盛胤ノ女ニテ隆胤ハ此室ノ弟ナレハ憤リヤフカヽリケン。一家斷絕セシメントアリケルヲ。老臣止メテ戰場君命ニ親疎ナシ、何ソ渠カ私ナラントテ。曾テ其儀ニ及ハサリシトナリ。十枚打ノ田ノ西ニ今ニ於テ墓所アルハ隆胤ノ故跡ナリスヘテ相馬ノ軍立ハ強ヲ頼ミ勇ミホコルト雖トモ盛胤義胤兩將ハ時ノ指引モアリケレハ、戰モ利アリケルカ、隆胤ニ於テハ猛氣一偏ニシテ、顧ルトコロナカリケレハ血氣ノ勇ニ誇リテ終ニ果敢ナキ討死ヲセラレケリ。

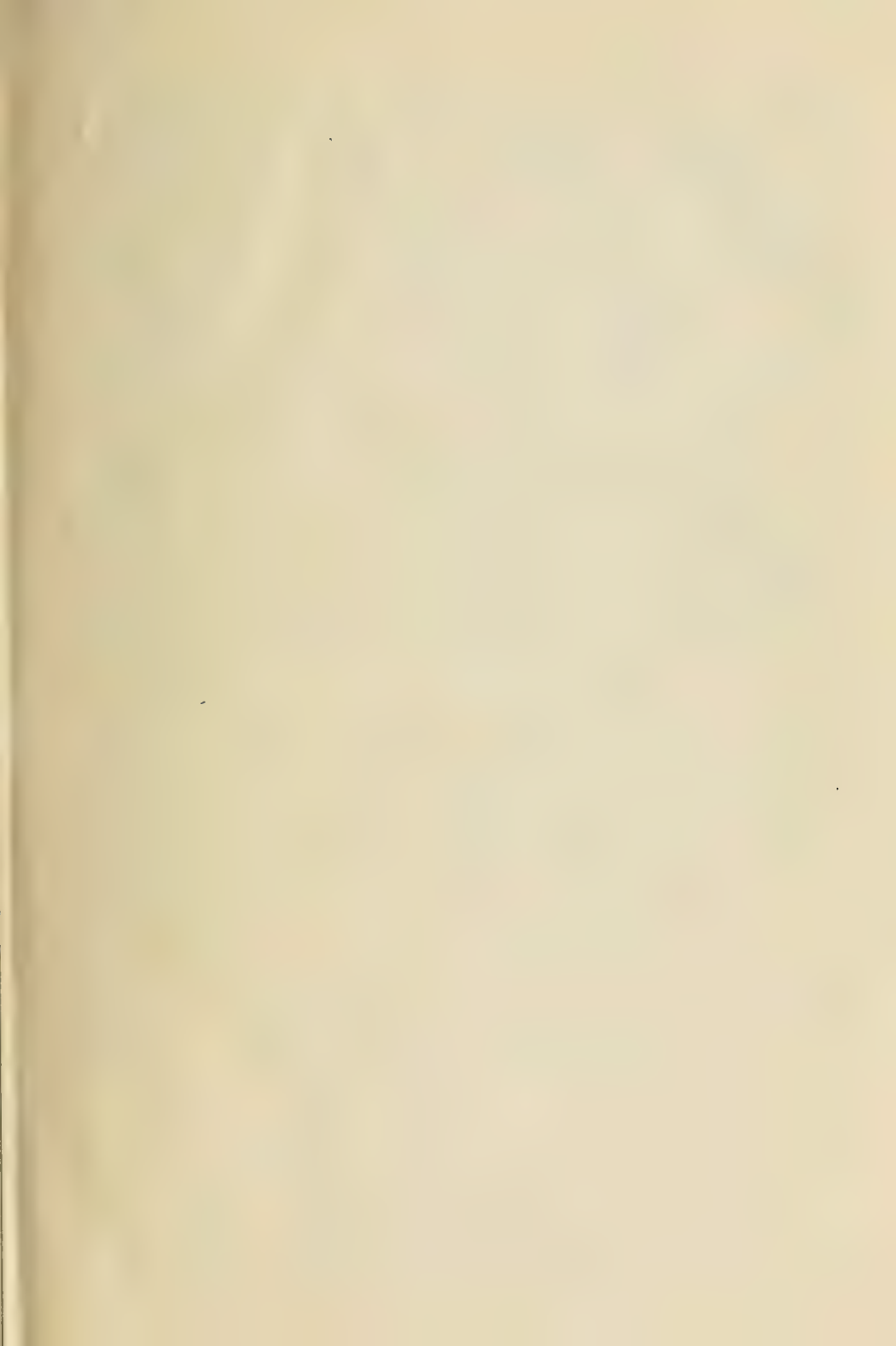
門馬上總討レシ後ハ、黒木ノ城ハ番持ナリ、土橋藏人・佐藤伊與・菊地右馬允・目黒出雲・渡邊下總等ナリ。

相馬諸士飮神水事

兵部大輔隆胤討死セラレシ後ハ、一族家臣諸卒迄、黒木中務ニ遺恨フカク、是非々々駒ケ峯ノ城ヲ攻潰シ、隆胤ノ弔軍ニ中務ヲ討取ルヘシト、一同ニス丶メケル。兩將ノ憤リモ專ラ此ニアリト雖トモ、盛胤思惟アツテ各勇戰ヲ勵マサハ、中務ハ可討カ、身方多ク損亡スヘシ。然ル時ハ往々相馬ノ爲メ危シ。其故ハ政宗三春二本松ヲ手ニ入レ、又去年會津ヲ取リ、須賀川ヲ攻取リ、石川白河ヲ旗下ニ靡カシ、水ノ溢レ來ルカ如ク、武威盛ンナレハ、此上ハ相馬ヘ取掛ンコト目前ナリ。今小敵ヲ憤リ、駒ケ峯ヲ攻、士卒ヲ多ク失フテハ、後日ニ政宗ハ所詮敵對カタシ。今事ヲ起サントナラハ、中務ヲ討ニ不及、所詮政宗ト有無ノ合戰ヲ遂ケ、一擧ニシテ家ノ安否ヲ定メンハ各別、駒ケ峯バカリヲ攻ンコトハ、味方ヲ枯ラス基ナルヘシトアツテ。此儀一決セスシテ延引ナリ。然ルニ保原伊勢トテ、伊達ノ屬臣ナリシカ。其子故アツテ相馬ヘ來リ。暫ク盛胤扶持セラレテ後、暇申スニ依テ又伊達ヘ返サレシカ。其厚恩ノ報謝ニヤ、伊勢眞實ノ心ヲ以テ、盛胤ヘ隱密ノ使ヲ遣シ、誓紙ヲ以テ申シケルハ、政宗相馬ヲ攻取ルヘシトテ、内々其用意專ラニシテ、近々攻メカ丶ル躰ニテ候。相馬ニテ何ト思召共、一旦コソ防戰ノ利モ有ヘケレ、伊達ハ年々月々大身ニ成テ武威大ニ震フ。相馬ハ小身小勢ナレハ、往々ハ御合戰利ナク、武威弱リ玉フヘシ。其時ハ數代ノ舊家ヲ滅シ玉フヨリ外ナシ。先ツ一應政宗ト和順アツテ、御家ヲ立置ル丶コト御本意タルヘシ。政宗モ離レヌ御中ナレハ、賴母敷思ハレンニ於テハ、疎略ノコトアルヘカラス。御納得ニ於テハ此方一族諸老臣ニ相達シ、御爲メヨキ樣ニ取扱ヒ申スヘシ。先ツ盛胤ノ御内意ヲ伺ヒ候ト、イト丁寧ニ申シ送ル。盛胤返事ニハ、從是申送ルヘシト有テ使ヲハ返サレ、則小高ヘ入來アツテ、於殿中義胤並ニ一族

老臣諸士ヲ集メ右ノ仔細ヲ演說アツテ盛胤ノ曰我モ此條同心ニ思フナリ其故ハ人生ハ一代物、家ハ末代ナリ先祖ヨリ傳ハル舊家ヲ失ヒ。一代一生ノ事ヲナサンハ却テ不覺ナルヘシ家ノ爲ゝ時ヲ須テアランニハ又時節至リ。天運開クコトモ有ヘシ。當家今迄伊達ニ對シテ。後レヲ取タルコトモナケレハ。武威ニ恐レタルニ非ス唯時ノ不幸ニヨル所ナレハ政宗ニ從フトモ耻シカラスト思フナリ、但義胤ハ如何思ハル、ヤ。又各ハ何ト存スルソトアリケンハ。義胤貴命ノ趣キ道理至極ナリ一座ハ何ト存スルヤコレハ主從身命ノ窮リナリ何レモ思意ヲ不憚、存ジヨル處心々ニ申スヘシトナリ、一族老臣始ゝ諸士列座ノ面々大事ノ評議ナレハ各閉口シテ暫ク發言スル者ナシ、其時義胤申サレケルハ某カ存心ハ左ニ非ス昔ハ不知今晴宗輝宗政宗此三代ト數度ノ合戰ニ武威ヲ爭ヒシカトモ。卒ニ後ロヲ見セタルコトナシ。今故ナキニ伊達ヘ順ハヽ是偏ニ相馬ノ名字ヲ穢サントスル所ナリ其上政宗ハ我ヨリモ若年ノ人ナリ、タトヘ武威ニツノリ大身ニ至リ。相馬ハ不運ニナレハ迚今更政宗ニ順テ名字ヲノコシテ何ノ甲斐カアルヘキ斯クテハ伊達ニ隨ハンコト存モヨラス時ノ不祥ニ依テ家ニ盛衰アルコトハ。古今一人ノ事ニ非ス。此義ニ於テハ御受難成候盛胤ニハ御老躰ニマシマセハ家ノ爲メヲ思召サレ、一旦政宗ニ從ヒ玉フヘシ、某ノ存亡ハ運ニ任セ申スヘシ、我ニ同意ノ者ハ五十ニテモ百ニテモ政宗ノ大勢ヲ引受一合戰シ此城ニテ自害致スカ、討死仕ルニテ候ヘシト勇氣一圖ノ返答ニ何候ノ一族諸士ヲ始メ外樣ノ面々迄モ尤モ左樣ニコソアルヘシト。皆一同落涙シテ申シケレハ。盛胤ニモ何レモノ心底至極セリ義胤ノ分別左ニ極メラルレハ異儀アルヘカラス充分ニ合戰シテ討死セラレヨ我ハ中村ノ城ニ於テ鈹腹ヲ切ルヘシコレ武將ノ本懷ナリト有テ即日ニ中村ヘ皈ラレケリ其跡ニテ小高ノ諸士卒ヲ城中ヘ召アツメ、義胤自ラ其事ヲ演說

セラレ。政宗攻來ルニ於テハ城ヲ持固メント籠城防戰スヘカラス。庶幾ハ政宗ノ旗本ヘ取カケ只一戰ニ討死スヘシ。譜代ノ親ミヲ忘レス。我ト生死ヲ同フセン者ハ。今日潔齋シテ。明朝妙見ノ神前ニ於テ神水ヲ呑ムヘシ。モシ異儀ヲ存スル者ハ無用ナリ。我少シモ恨ミト思フヘカラストアリケレハ。一座ハ勿論コレヲ聞程ノ者。上下感涙ヲ流シテ實ニ哀レナル體ナリシトソ。斯テ翌朝早天ニ各妙見ヘ參集シ。大ナル鉢ニ水ヲ湛ヘ。手玉ヲ燒テ揉ミ入レ。各次第ニ順テ呑之。神水ノ上百五十四人。下々四百三十四人ト注シケリ。此事ヲツタヘ聞。標葉中郷北郷宇田郡ノ諸士ハ不及云。町家百姓ニ至ルマテ。面々ニ誓約シテ。此軍用ヲ勤ント一致シケル。流石ニ舊家ノ掟。小地トハ云ナカラ。其恩澤ノ及フ所。頼母敷カリシコトトモナリ。シカルニ豐臣秀吉公天下ヲ掌握アツテ後。天正十八年。諸國ニ於テ私ノ戰諍アルヘカラスト。堅ク制禁ノ條々觸促スノ間。伊達相馬ノ調略。互ニ思ヒ止リ。兩家ノ爭ヒハ無リケリ。

伊達秘鑑卷之二十六終

昭和四年二月二十五日印刷
昭和四年二月二十八日發行

伊達秘鑑 上卷

（非賣品）

編輯兼發行者　宮城縣名取郡岩沼町南館下三番地
鈴木省三

印刷者　宮城縣仙臺市敎樂院丁六番地
山本晃

印刷所　宮城縣仙臺市敎樂院丁六番地
東北印刷株式會社
電話二八七・八六〇

發行所　宮城縣仙臺市勾當臺通二十八番地
仙臺叢書刊行會